て使用された文字に二種ある。(一)ブラーフミー文字 (Brāhmī lipi : Lalitavistara ed. by Lefmann p. 125 l. 19,「梵書」普曜經現書品・大正藏三・四九八、「梵寐書」方廣大莊嚴經示書品・同上五五九、「梵天所說書」佛本行集經十一・同上七〇三)。最古形は西曆前四世紀の後半に屬するイラン貨幣に殘る六文字で、左書きの迹を示してゐる。併し最も重要な研究資料は西曆前三世紀の中葉に屬する阿育王勅諭碑文の右行文字である。碑文の文字が地方的區別を有するまでに發達してゐる點から考へて、印度に於ける文字の使用は西曆前三世紀より遙か以前に始まつた事を知る。ウェーベル (ZDMG. X. 1856 p. 389 ff.) 及びビューレルの研究に從へば、この字體の系統は北方セム系文字の最古形（即ちフェニキア文字）から發し、古代フェニキア碑文及び所謂メーシャ王碑文（西紀前八九〇年頃）の文字に最も近く、恐らくメソポタミアを經てその地方の影響を蒙り、通商者の手に依つて西紀前八〇〇年頃印度へ齎されたものらしい。この北セム系の文字は、印度に於て次第に字體の改變を受け、梵語を正確に表はし得るやうに改良されて、俗間日常商務の使用の外、更に高尙な用途に適應されたのである。(二)カローシュティー文字 (Kharoṣṭhī lipi : Lalitavistara loc. cit.,「佉留書」普曜經、「佉盧虱底書」大莊嚴經、「佉盧虱吒書（驢唇書）」佛本行集經)。この字體は本項で說く梵字の定義外のものであるが、古代印度文字としては重要である。佉路瑟吒文字、略して佉盧（佉書・驢脣）書は、印度西北部に於て西曆前四世紀から西曆後三世紀まで使用された左行文字で、字體は西曆前五〇〇年乃至四〇〇年頃の北セム系アラメア文字に最も近い。即ちアラメア文字がペルシャ領西北印度に輸入されて、梵語を表はすために改良されたものである。また前記のブラーフミー文字の影響も明かに認められる。佉留書で書かれた阿育王碑文も殘存してゐるが、印度に於ては餘り廣く用ひられずして終つた。併し中央亞細亞に於て大發達を遂げた事は最近の中亞發掘研究の教へる所である。名稱に關しては古來傳說的にカローシュタ即ち驢唇仙人の所造と云はれてゐるが、語義については定說がない。

【ブラーフミー文字の變遷】ブラーフミー文字はその後種々な變遷を經て諸種の字體を派生したが、西曆四世紀の中葉からこれ等を大別して北方系と南方系とに分つ事ができる。北方系に屬するグプタ(Gupta)文字から六世紀に發達した一種に、ビューレルの所謂銳角型文字(der spitzwinklige Typus)がある。即ち線頭は楔形を呈し、線尾は尖角を呈すのを特徴としてゐる。僧耶の碑文（六世紀末）、ラッカマングルの頌讚文、法隆寺貝葉（六世紀前半）等がその古形を代表する。これ即ち悉曇文字である。同じく北方系に屬するナーガリー文字(Nāgarī)は端を七世紀に發し、上部橫線の發達を特徴とする。八世紀の半にはナーガリー文字の碑文があり、十世紀以後には益々廣く行はれて、遂に印度の大部分を風靡するに至つた。前記の銳角型文字も、八世紀以後は次第にナーガリー文字の影響を受け、これに接近した。現今梵語を書くに用ひる文字は、ナーガリー型の轉化したもので、普通デーヴァナーガリー(Devanāgarī)と稱し、南印度に行はれるナンディナーガリー(Nandināgarī)と區別する。

【參考】G. Bühler : *Indische Palaeographie* Strassburg 1896. ‖ G. Bühler : *On the origin of the Indian Brāhma alphabet* 2nd ed. Strassburg 1898. ‖ H. Jensen : *Geschichte der Schrift* Hannover 1925 p. 144 ff. （織田）

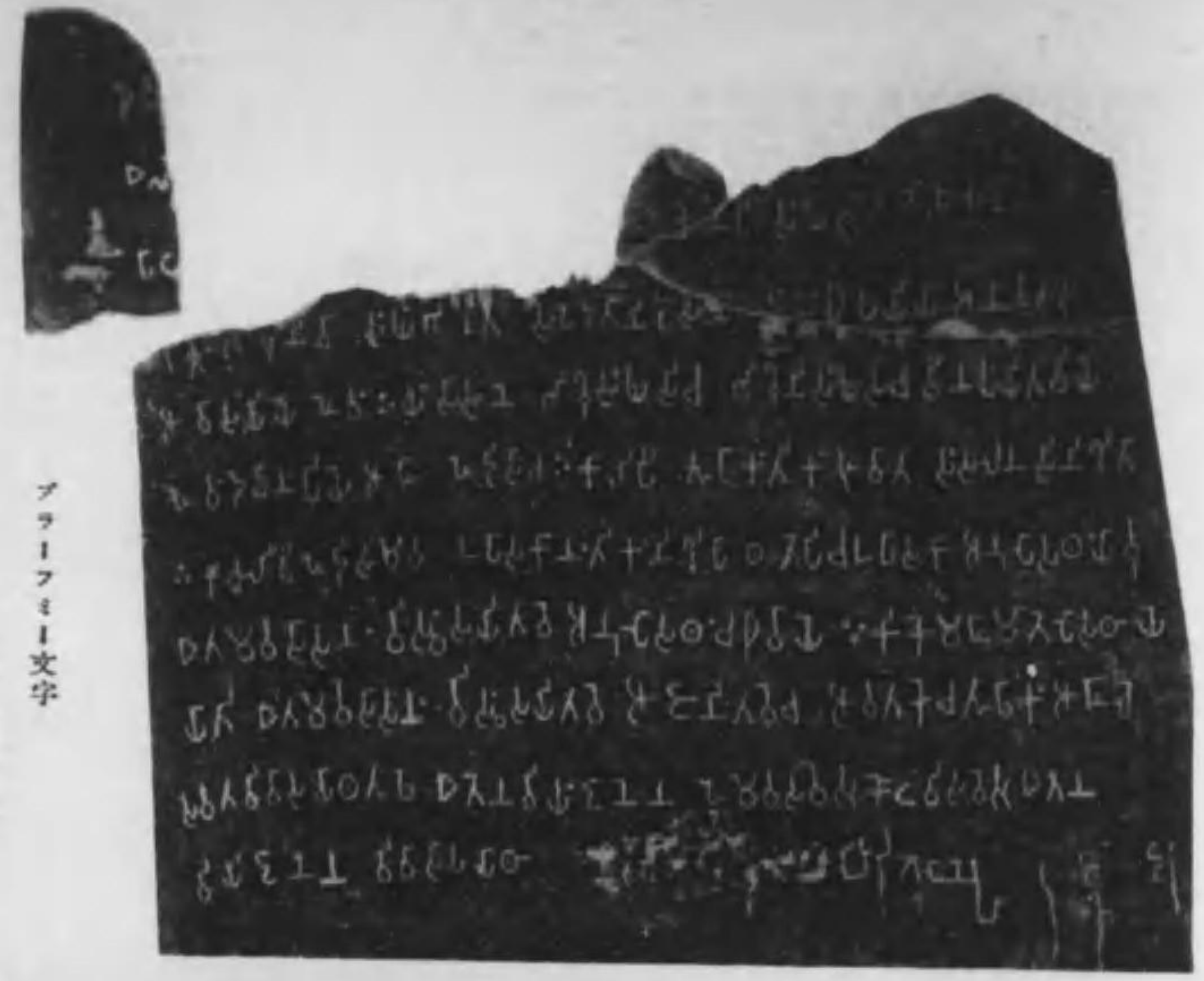
本式 ほんしき 連歌・俳諧

【名義】本式とは本式目の略。式は法式、目は條目の義で、連歌の作法に關する法則を記した條目をいふ。本式といふは新式（別項）に對する稱である。

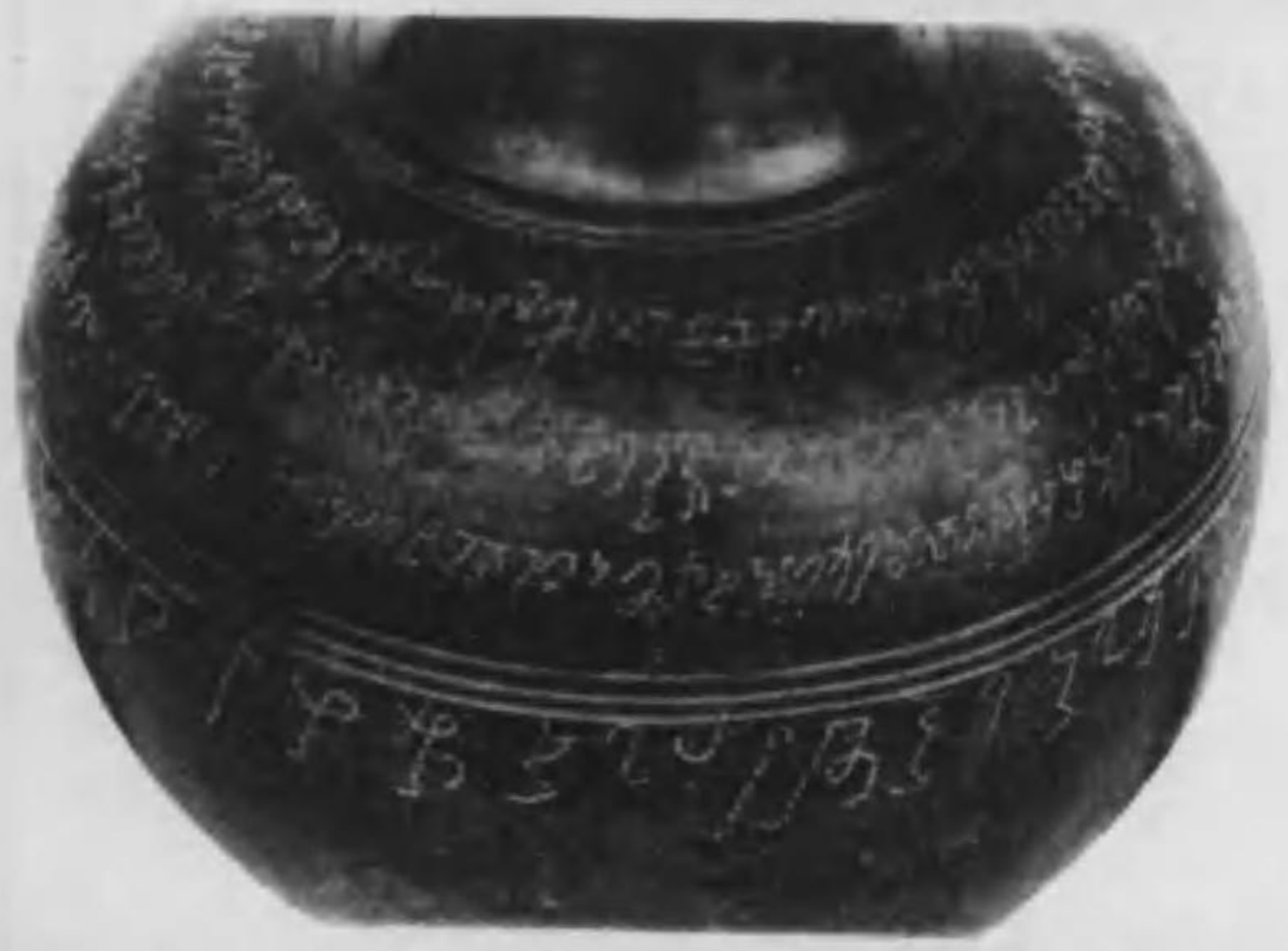
【解說】長連歌は、その種類が種々あるけれども百韻を以て基準とする。而してこれを懷紙に記すには四枚を用ひる。里村昌休の聞書の「連歌新式聞書」に、「本式目東山淸水寺に殘在之云々」とあるが、明應年間に斯界の泰斗飯尾宗祇がこの式目によつて本式何人百韻や、なほ一卷の本式百韻を賦してゐるが、共に四枚懷紙である。本式百韻は、一の懷紙の表十句、同裏十四句、二・三懷紙の表裏及び四の懷紙の表十四句、名殘の裏六句となし、一の表は懷紙を三つ折となし、その初めの部に年月日を一行に、次に本式連歌の四字を一行に、次に賦何連歌といふ文字を一行に、次に發句を二行に記し、中の部に四句半、末の部に四句半書く。この記載法と共に、賦物（別項）の取りやう・季の物・景物（別項）・降物・聳物等の去嫌（別項）の制があつて、一々作家はこれに準據して句を吐くべき慣習となつてゐた。なほその精しい點は、明應元年猪苗代兼載の奧書ある「連歌本式」（群書類從雜部）によつて知られる。

【沿革】本式の成立はいつの頃か明かでない。「筑波問答」には「文和（文永の誤であらう）・弘安の比より、本式・新式などいふもの出で來侍り。鎌倉には爲相卿藤がやつの式目とて、北林と號して出されたり。當時用ひたる新式は爲世卿作られ侍るにや云々」とある。これによると、京師で用ひられた二條家制定のものは新式であるが、鎌倉で冷泉家の制定した藤が谷の式目は本式か新式か明かでない。「連歌辨義」の追考には、「新式は爲家卿の御時よりありけるを、阿佛尼公の書添へ給ひしを、爲相卿鎌倉へ下り給ひて後、かの式を出し給ふ時、北林といふ名は阿佛尼公の御事なれば、やがて式目の號とはなし給ふなり云々」とあつて、これによると藤が谷の式目も新式である事になる。然るに圖書寮本「連歌初學抄」に賓阿の定めた式目は三枚懷紙であつて、一の表が十句、一の裏が二十句、中の折が四十句、名殘の折が三十句と見えてゐる。毛利公爵家襲藏の毛利元就自筆の明應四年賦白何百韻は三枚懷紙であつて、その句數の配り方は賓阿式目といふものに合致してゐる。されば表十句とする式目のあつた事も確かである。然るに最近宇野兼介氏によつて研究された定家卿獨吟百韻は、新式の表八句、名殘の裏八句とするに合致する四枚懷紙のものであり、勝峰晉風氏及び潁原退藏氏によつて紹介された金澤文庫藏の元弘・正慶の三卷の百韻も同樣の四枚懷紙のものである。これによると、連歌の式目の定型成立當時の式は新式の如きものであつたと考へられる事になり、從つて本式といふものは、本式といふに拘らず、その後の制定のものと考へられねばならぬ事になり、賓阿式と稱する三枚懷紙の式も或る時期に一部に於て試みられたものであるやうに思はれて來る。兎に角明應に兼載の記した「連歌本式」は、當時の本式の制によつて定めたものである筈で、これが本式の基本となり來つてゐるものである。俳諧時代に入つても兼載の本式

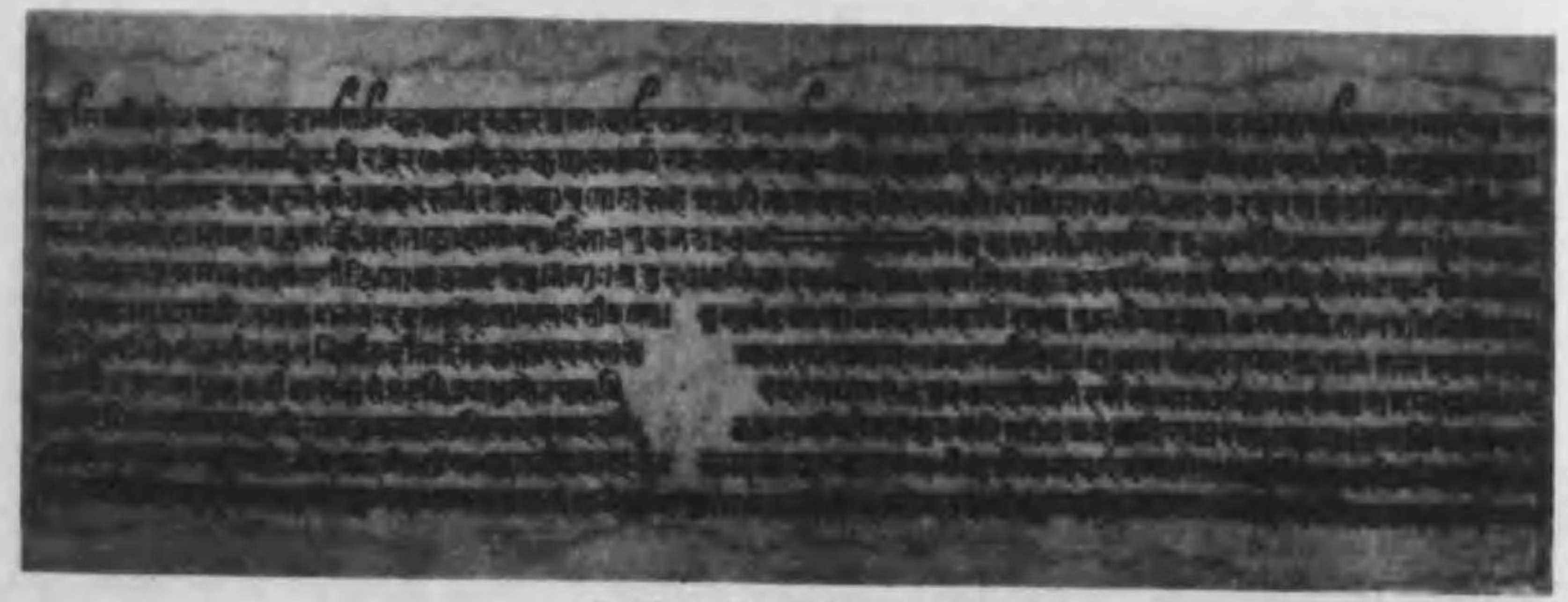
梵字 一



ブラーフミー文字 阿育王鹿野苑碑文



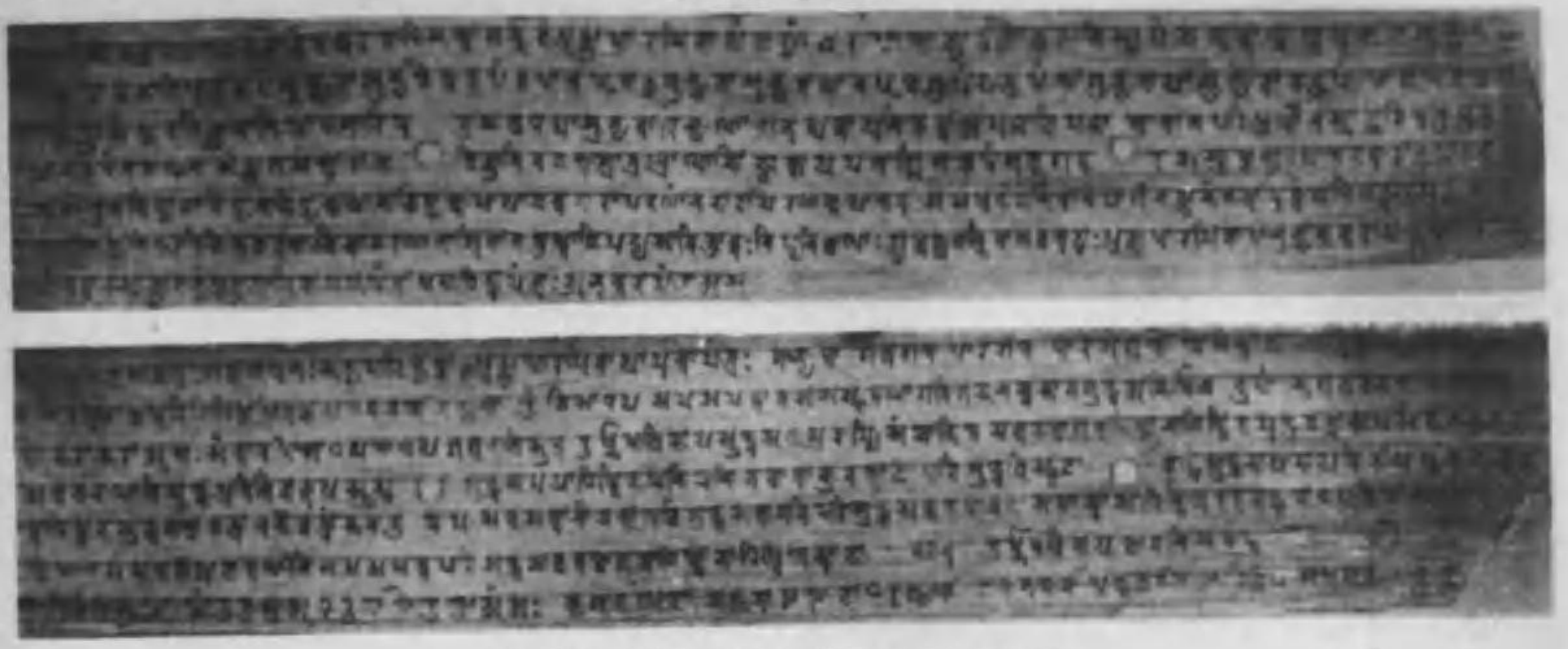
驢脣文字 Wardak, 51 A. D



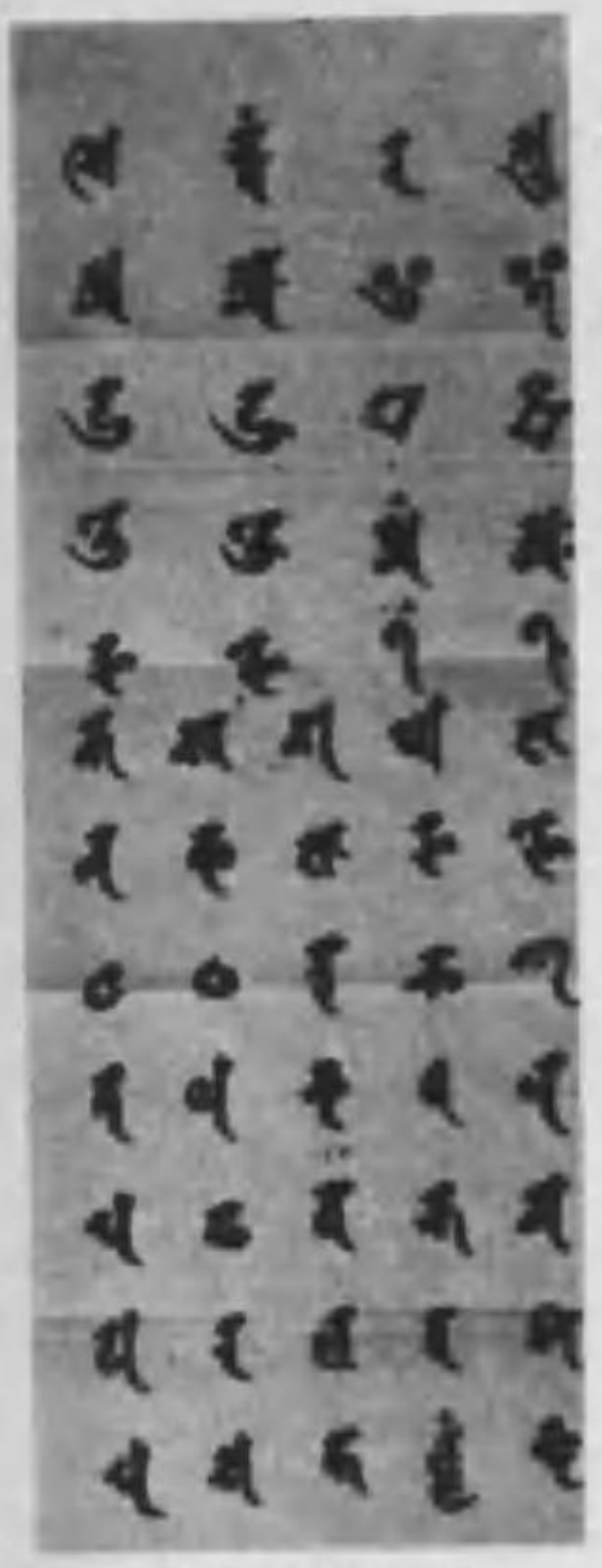
デーヴァナーガリー文字 十五世紀

梵字 二

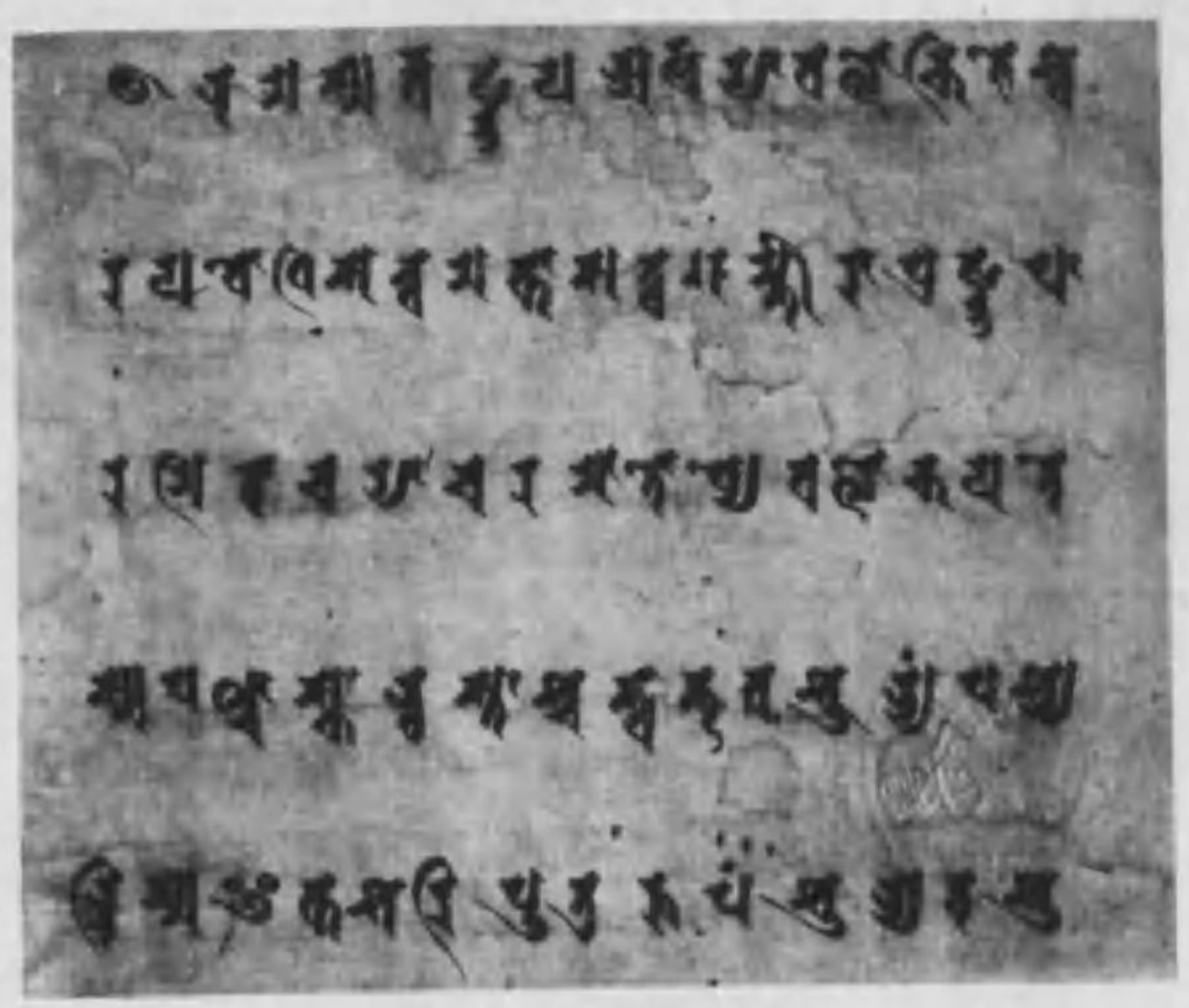
悉曇文字



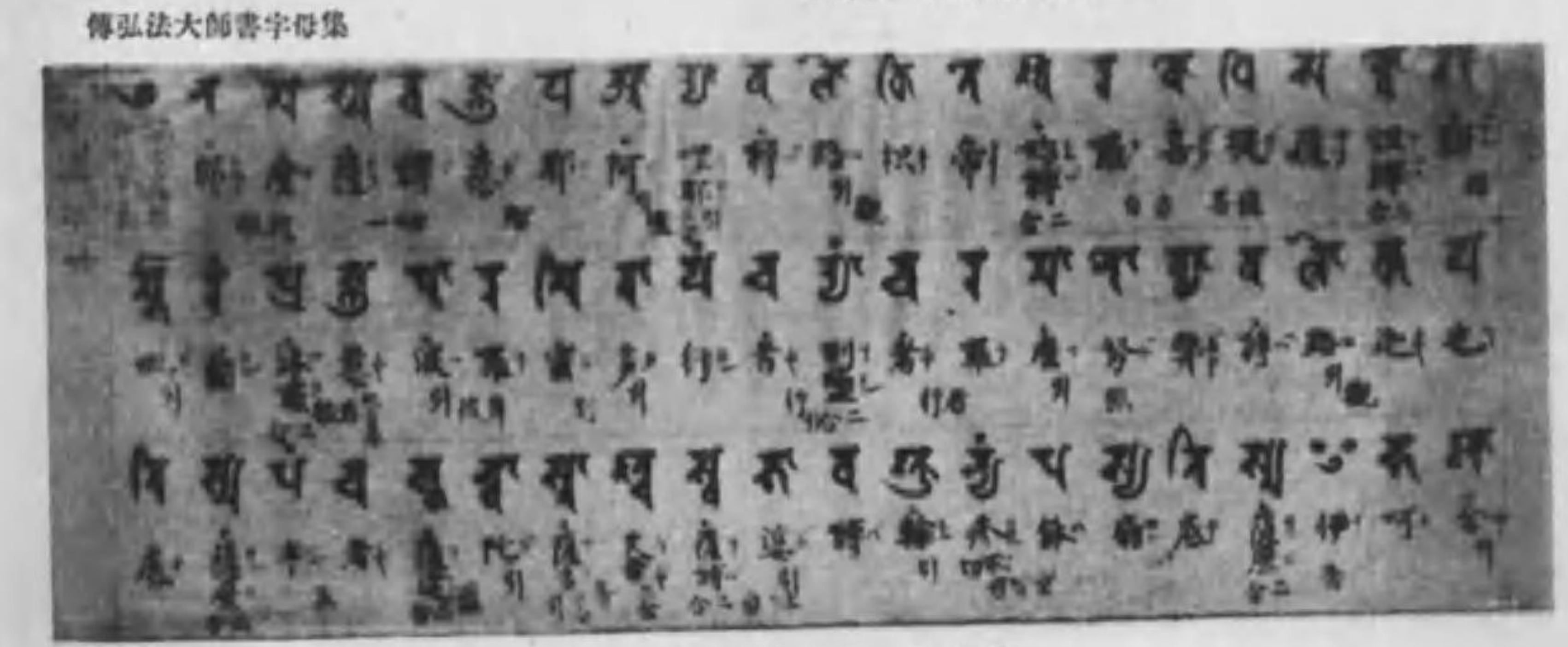
法隆寺貝葉般若心經及尊勝陀羅尼



傳弘法大師書字母集



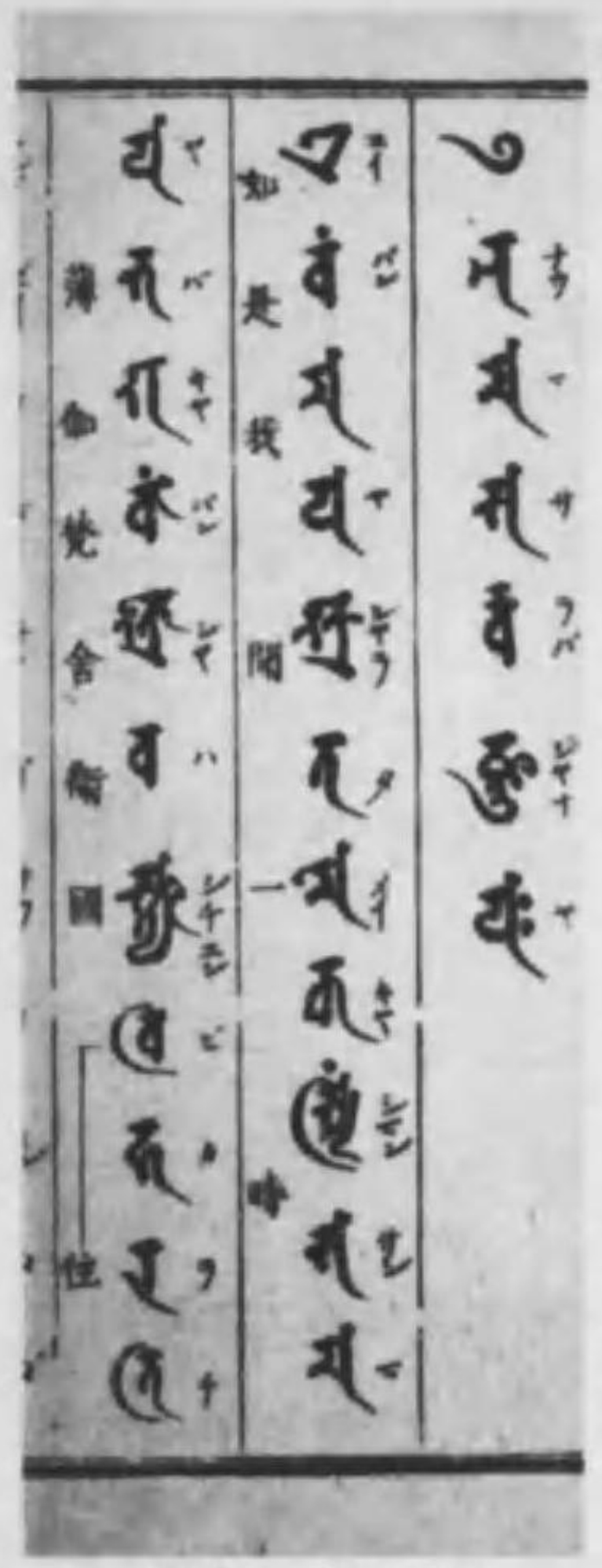
天慶五年書寫梵文心經



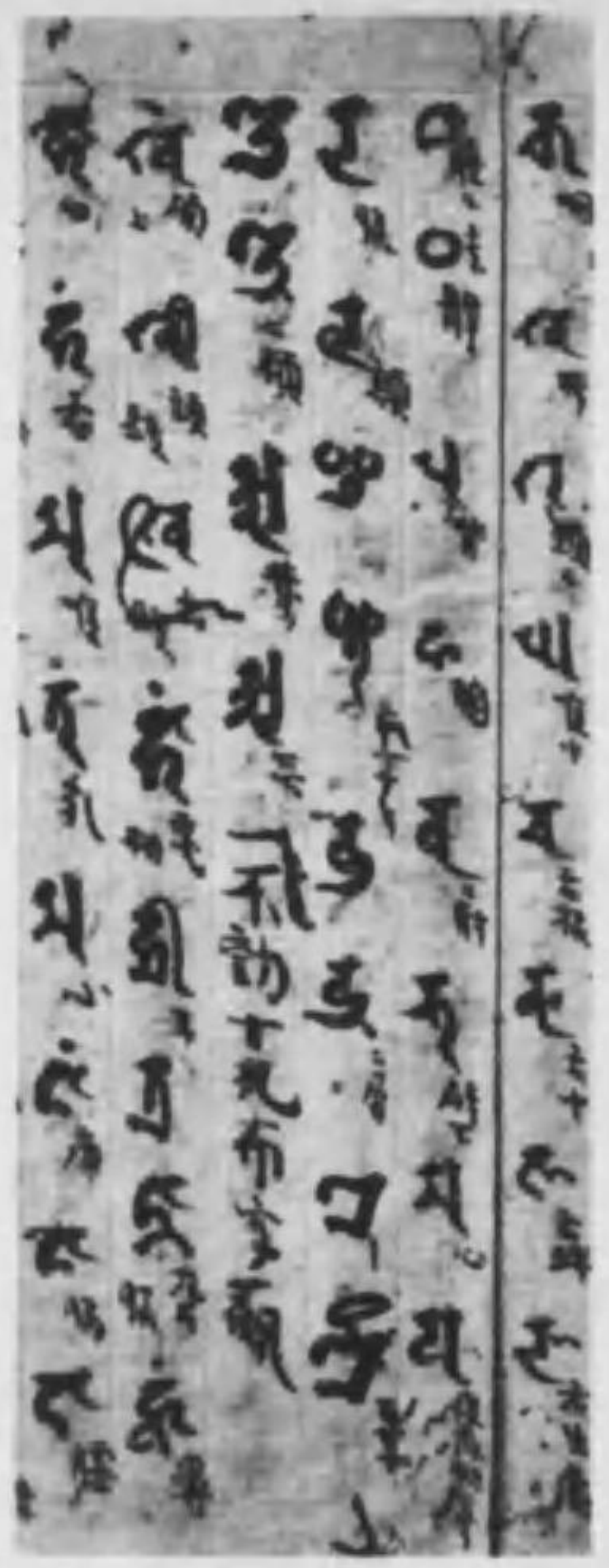
淨嚴手寫法隆寺貝葉

梵字 三

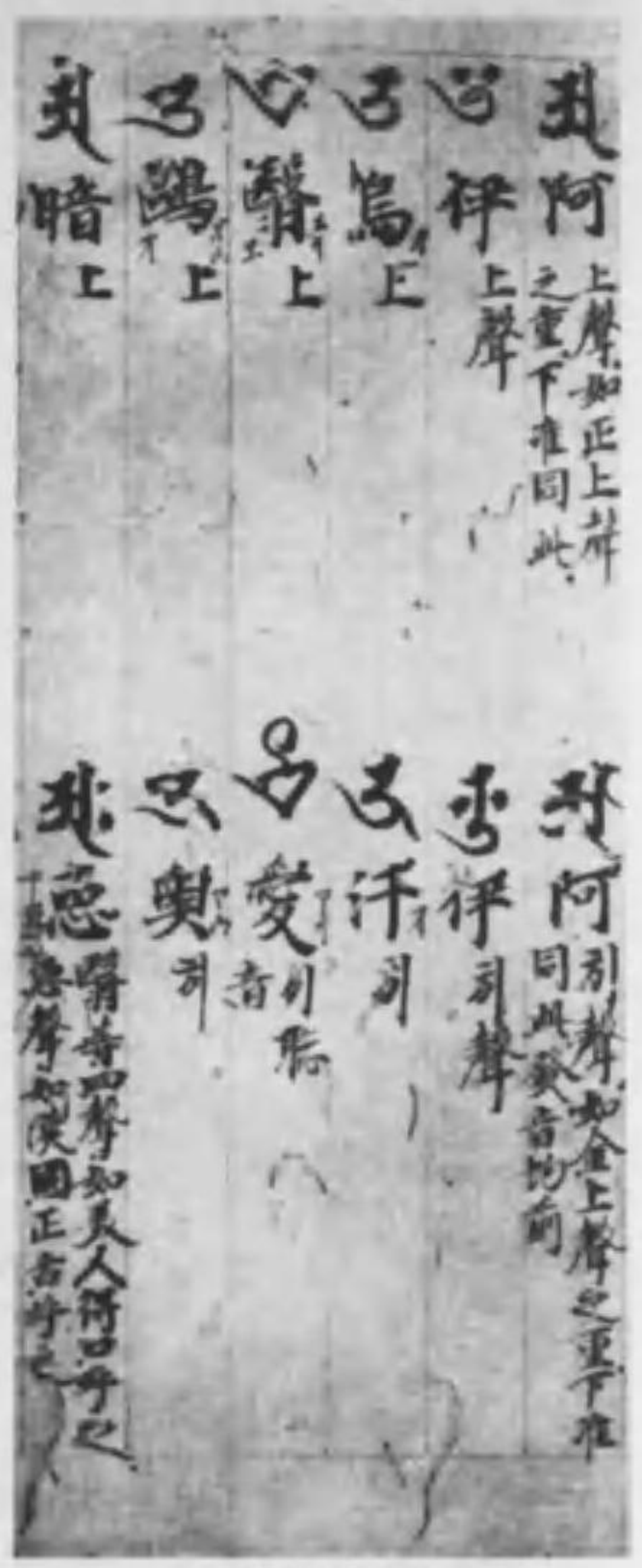
悉曇文字



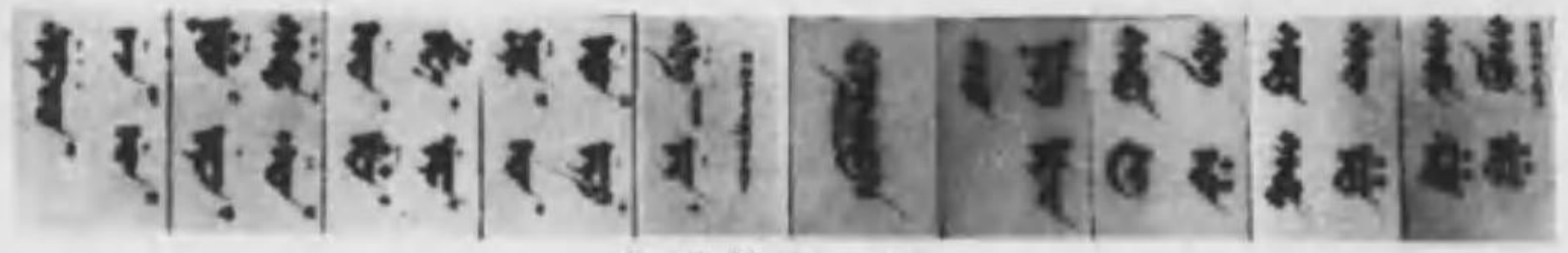
管明書梵漢阿彌陀經



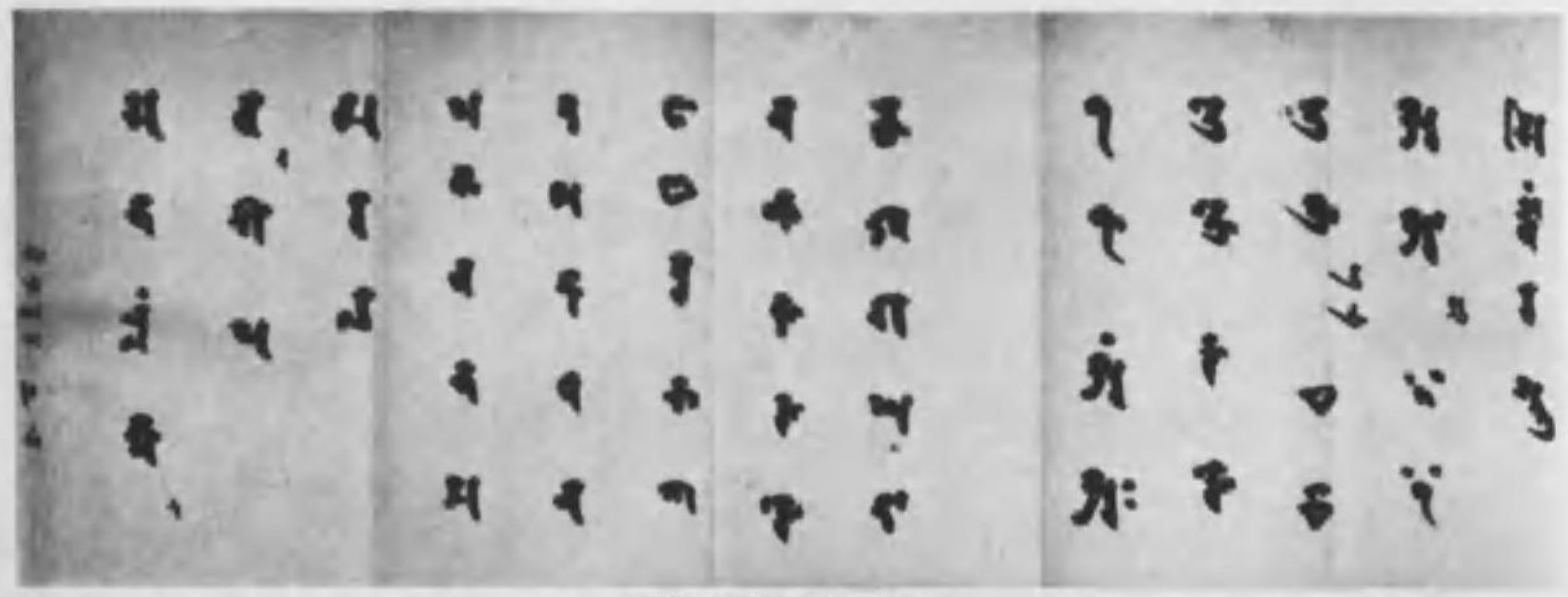
弘治三年書寫悉曇問答



建久二年書寫四家不同



澄禪書秘字集



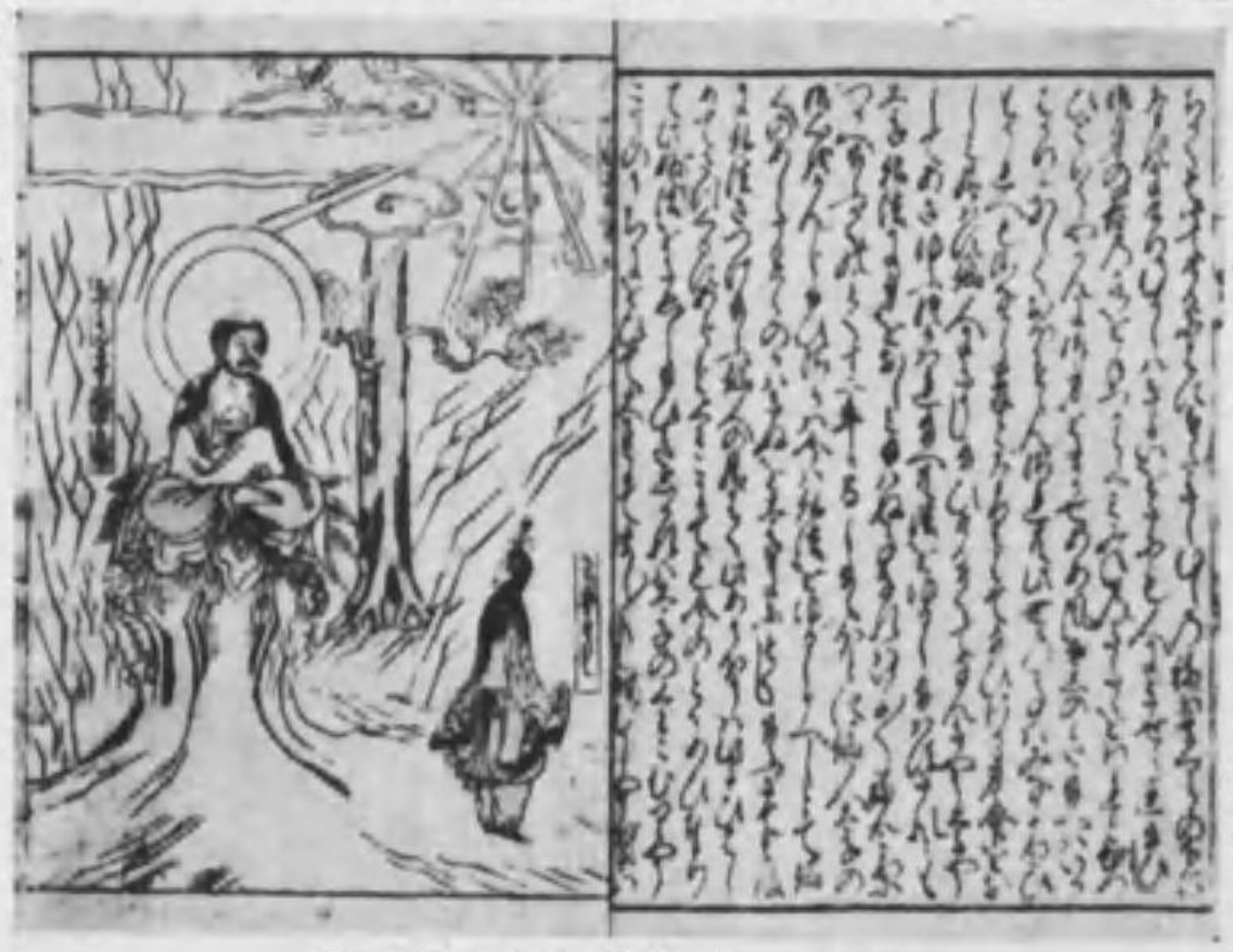
慈雲手寫字母集

が大體に於て守られて來てゐるのであるが、併し多少の變遷がないではない。慶長十八年の「宗川入道筆記」に連歌の本式として述べてゐるものに、「面毎ニ花一宛、八本也」とある如きがそれで、當時は新式の連歌・俳諧の方に於ても、花と月とが景物のうち最も重んぜられて來てゐた關係で、本式の方に於てもかく定められたものと見える。貞門俳諧ではこの花八本となつた式を繼承してゐる。然るに談林に入つて、延寶九年に宗鑑の本式を見合せて多少の改定を行つた。それが西鶴の「精進膾」に「俳諧本式目」と題して揭げられてゐる。花八本とすることは變らないが、去嫌等を多少緩めてゐる。蕉風では芭蕉が高山麋塒に認めた手紙に「本式俳諧之次第」を記してゐて、これは大體談林の定めのものに據つてゐるが、又多少異なるところもあつて、「七句去のものは十句去なり」としてゐるのは、舊へ復したものであり、花を八本と定めず、「面に一つゞつしても苦しからず」とし、「月は五句去にいくらもあるべし」としてゐるなどは、他の本式の式には見ないものである。併し土芳の「白冊子」では、「月七句去、花裏表に一本宛」とあつて、談林に定める所と一致するものになつて居り、貞享二年に芭蕉が鈴木清風に俳諧本式を傳授したといふ芭蕉捌きの本式百韻（芭蕉翁古式之百韻或は根本式といふ）では、花八本で月は名殘の裏以外の七面に一つ宛のものになつてゐるから、麋塒宛の手紙に記したものは芭蕉の一時的の考へであつたかと思はれる。又貞門でも、元祿十三年の芳山の「鳴山集」に於ける誹諧本式の用捨では、大體談林の式に據つてゐるが、表十句の第三まで發句の賦物に合はす事とし、花八本とは定めてゐるが「初折の表の花はなくてもあるべきか」と云つてゐる點が異なつてゐる。然るに又、正德元年の沾德の「枝葉集」に記す本式では、やはり談林の式に據つたものでありながら、「賦物心にまかすべし」と云ひ、「花は櫻、四面に花、裏に櫻と花とする也」と云つてゐる點が異なつてゐる。以上でも知られるやうに、俳諧本式の式は、時により人によつて多少動いてゐるのである。本式連歌は、淸水連歌（別項）として江戶時代に於ても恆例として興行されたが、普通に行はれるものではなかつた。連歌及び俳諧に於て本式の用ひられるのは、主として追善の場合であつた。

【參考】阿佛尼時代の古連歌　藤峰貫夏（藝文昭和六ノ一二）○現存最古の長連歌　潁原退藏（俳諧史の研究）○連歌史上の二つの新資料——定家朝獨吟百韻　宇野量介（國語と國文學昭和八ノ一二）〔福井・志田〕

本地物（ほんぢもの）　小說・物語【名義】本地垂迹思想の影響に依つて成つた小說・語物の類。普通室町期から江戶期にかけて作られた御伽草子系統の小說類を指して云ふのであるが、說經・淨瑠璃の正本・黑本・青本・黃表紙等、江戶期の語物・讀物を通じて神佛の本緣、寺社の緣由を物語の內容とするものがある。形式は何であれ、佛神寺社の本緣を明かす內容のものを本地物と稱すべきであらう。但し同じく緣由を述べるものでも、單なる緣起說明に過ぎぬものもあるし、本地垂迹の意を十分現はしてゐるものもある。この兩者を強ひて區別すれば、前者を緣起物、後者を本地物とすべきであらうが、兩者はしかく判然と分ち難い。

【解說】本地とは、法身の佛菩薩の自己實身を云ひ、垂迹とは、實身より變化の身を分ち現じて衆生を化益する點より見て云つたもので、能現の本を本地、所現の末を垂迹と云ふ。この思想は元來が佛陀論として起つたのであつたが、日本に入つて天台眞言の本迹思想となり、これが神道に接して、天台に於ては一實神道に發展し、眞言に於ては兩部神道の佛敎神道となるに至つた。本地垂迹の語は主としてこの神佛調和を說くに用ひられてゐる。兩者のうち眞言の本地垂迹思想が最も民間に流布したものであつた。佛敎と神道の調和思想は早く奈良朝にその萌芽を見るのであるが、確實に本迹說として現はれて來たのは藤原時代で、進んで鎌倉期にはこの說を敎理的に整理しようとするに至つてゐて、南北朝・室町期・戰國時代がその大成期である。この本地垂迹思想は、元來、神の本地を佛に求める佛本神迹思想が主流をなしてゐるのであるが、中世本覺法門の發展に伴つて、神を本地、佛を垂迹とする思想、神本佛迹說にまで發展するに至つてゐる。本地物は如上の思想の具體化であつて、これに全く佛敎的な內容をもつ本地物と、神佛習合の意を含める神明の本地說明を內容とするものとがあつて、後者が最も本地物の純粹なものであるやうに思へるが、一般に神佛は前生に於て人間であつたことが本地物の條件である。名づくれば垂迹本地とも稱すべく、思想的には本覺思想に伴ふ本地說の現はれであるとも考へられる。併し物語文學に於ては、人間は先天的な要素でもあるのであるから、本地物のかゝる構成は當然なこととも云へよう。かうした行き方は、佛の前生譚として印度の本生經文學の形式に類してゐる。



釋迦の本地（小田久太郎氏藏）

【性質】本地物は一方では寺社佛神の緣起、高僧の行狀傳記等、緣起文學・傳記文學の系統を享け、他方說話傳說文學・物語文學の系統を引いてゐる。緣起・傳記文學の系統に立つものは

一貫した筋を缺くものが多く、個々說話の集成の如き感あるもので、具體的な例としては、「弘法大師の本地」「住吉の本地」「賀茂の本地」「八幡の本地」「富士の本地」等の如きはそれである。物語系統の文學に立つものは、「毘沙門の本地」「貴船の本地」「熊野の本地」「嚴島の本地」「月日の本地」「辨財天の本地」等の如きに就いて見るを得べく、而してこの系統のものには本地物として共通の主要素が一二舉げ得られる。その一は異國の物語として、主要人物はやがて日本に飛來し神と現はれる點、その二は戀愛譚と迫害譚、その三は主人公の苦難試煉である。併し作品によつて申子譚・繼子譚・併續譚・求行譚等が主要素になり、或はそれ等要素が混入交錯して成つてゐるものがある。而してこれ等本地物が信仰勸化の意を含んでゐるものであることは、本地物の結末の多くが勸化教誡の語で結ばれてゐるのを以てしてもわかるが、この點からすると宗教文學として見ることも出來る。

【種類】本地物は、もと繪卷緣起の形で現はれたものであらう。まゝ見受ける古本册子にさう推測させるものがある。江戶期に刊行された草紙の本地物はその類、「寬文書籍目錄」の「舞並草紙」の部に十八種、「元祿書籍目錄」の「舞本並草紙類」の部に十九種を掲げてゐる。が、普通本地と呼ばぬものでも、本地物の內容をなしてゐるものが多數あり、例へば「物草太郞」（別項）は一名「多賀本地」又は「をたぎの本地」の名で呼ばれてゐる。「梵天國」（別項）は又明かに成相觀音、久世戶の文殊の本地であり、「さよひめ」（別項）は竹生島の本地とも稱すべく、その他「岩屋草紙」「美人くらべ」「ふせや」（各別項）等の一類は神佛の利生を說くのみであるが、これ等は或る種の本地物に淵源し得べき內容をもつたものであつて、この他今日推定し得べくもないものでも、もと本地物から出發してゐるものが相當あるかと思へる。例へば「鏡男繪」又は「鏡破老翁物語」（別項）と呼ばれるものが鏡宮の本緣であつたり、「青葉の笛物語」（別項）が諏訪社の本緣になつてゐること、さすれば草紙類の中にも甚だ多くの本地物を舉げることが出來ようと思へる。が、今草紙の本地物で明かに本地と呼ばれてゐるもののみを舉げるに止める（冊數は刊本に依る）。

愛宕の本地三册（古淨瑠璃に同種のものがあるが內容は異なる）○あみだ本地三册（說經「法藏比丘」、古淨瑠璃「阿彌陀の本地」「四十八願記」等がある）○いつくしまの本地三册（明曆二年）○賀茂の本地三册（寬曆版カ）○貴船の本地三册（丹緣の版本がある）○祇園の本地三册○庚申本地二册○弘法大師の御本地三册（古淨瑠璃「弘法大師の御本地」その他、黑本・青本に同種のものがある）（寬曆三年）○熊野の本地三册（說經「五すゐでん」、古淨瑠璃「熊野之本地」、青木に「五衰殿熊野之本地」がある）（寬永整版・寬曆三年版・寶永三年版その他）○淸水本地二册（古淨瑠璃に同種のものがある）○釋迦の本地三册（說經「しやかの本地」がある）（寬永二十年版その他）○善光寺本地三册（古淨瑠璃「善光寺本地」「月界長者」「善光寺」がある）（享保三年）○多賀本地（物臭太郞）二册○七夕の本地二册（「あめわかひこ物語」「あめわかみこ」「たなばた」と題するものがあり、又「七夕の由來」「七夕の本地」と稱するものもある。前者は別系統のもので「七夕の本地」は何れを指すか不明。古淨瑠璃「七夕之本地」と題するものがあり、出羽掾正本である）○中將姬の本地二册（古淨瑠璃に同種のものがある）（寬文五年・慶安四年）○月日の本地（つきみつのそうし）二册（寬永活字本・寬文七年）○天神の本地二册（慶安元年）○八幡の本地三册（古淨瑠璃に同種のものがある）（寬曆二年）○毘沙門本地三册（古淨瑠璃に同種のものが存してゐるさいよ）（寬曆三年）○富士山の本地二册（延寶頃カ）○辨財天の本地（おもかげ物語）二册（寬治三年）○住吉本地三册（寬永）等。

本地物は又說經淨瑠璃（別項）の語物として、その大部分を占めてゐる。本地物が唱導的性質を帶びてゐることは、草子の信仰勸化の意を含んだ結末の語からしても判るのであるが、說經節の多くが本地物であることと共に、唱導・說經と本地物とは、密接な關係があつたやうに思へる。說經の語物のうち、「五衰殿」は熊野の本地であり、「法藏比丘」は阿彌陀の本地、「愛護若」（別項）は日吉山王の本地と見るべく、「小栗判官」（別項）は常陸の正八幡の本地、「かるかや」（別項）は信州善光寺親子地藏の本地、「さんせう太夫」（別項）は丹後の金燒地藏の本地（地方傳說としては岩木山の本地）、「梵天國」（別項）も亦本地物とすべく、「まつら長者」は竹生島辨天の本地、その他「念佛大道人崇山上人の由來」「發覺記」「善光寺開帳」「阿彌陀胸割」（別項）等も本地物と見做すべきものであらう。これ等以外、明かに本地と名乘つてゐるものでは、「弘法大師の御本地」「釋迦の本地」「都誓願寺之本地」等がある。說經の正本は、その冒頭の文によつて新古を分け得べく、古本には明かに本地物なる事をその文で示してゐる。例へば、「たゞいまときたてひろめ申候ほんちは國を申さはしなのゝくにせんくはうしによらいたうのゆんてのわきにおやこちそうほさつといわゝれておはします御ほんちをあらく〜ときたてひろめ申にゆらいをくわしくたつね申に」（寬永八年版、せつきやうかるかや）「たゞいまかたり申御物かたりくにを申さばたんごの國かなやきぢぞうの御ほんぢをあらく〜ときたてひろめ申にこれも一たびはにんげんにておはします」（說經與七郞正本。さんせう太夫、明曆頃下之卷）の如く明かに本地を語るものなることを示してゐる。新しき正本はかゝる冒頭文を缺くのが常であるが、それでも中には、「扨てもそのゝち中比の事かとよひたちの國とつはた村といふ所に正八まんむすぶの神といわゝれおはします由來をくわしく尋るに」（享保三年、佐渡七太夫正本。をぐりの判官）の如く由來を示すものなる事を斷つてゐるのもある。草子類・說經節の、本地物の影響に依つて成つた古淨瑠璃の本地類も多數あつて、中には說經から轉用したものがある。

愛宕の御本地（丹波少掾正信正本）○すはの本地兼家（若狹守吉次正本）（正保三年）○甲賀三郞（井上播磨掾正本）○甲賀三郞（竹本筑後掾正本）○京今宮本地（丹波少掾正信正本）○善光寺本地（伊勢出羽掾正本）○月界長者（山本土佐掾正本）○善光寺（山本角太夫正本）（延寶四年）○玉津島御本地（井上播磨掾正本）○だるまの御本地（長門掾正本）○淸水御本地（江戶七郞左衞門正本）（慶安四年）○あみだのほんぢ（若狹守吉次正本）（寬永二十一年・正保元年・正保四年）○阿彌陀本地（出羽少掾信勝正本）（寬文七年）○法藏比丘阿彌陀本地（山本土佐掾正本）○あみだの御本地（四十八願記）（山本土佐掾正本）○中將姬本地（出羽少掾信勝正本）（寬文九年）○太子御本地（寬文頃？）○弘法大師の御本地○熱田大明神御本地（筑後代次虎之助正本）○八幡の本地（出羽少掾信勝正本）（寬文五年）○七夕の本地（出羽掾正本）（貞享五年）。

【黑本】黑本の中にも、本地物・緣起物が一部分ある。「富士淺間物語」五册（延享五年）、「玉津島由來」三册（寶曆二年）、「丹後國鐵燒地藏」二册（寶曆四年）、「吾妻權現由來」三册（文阿、寶曆十二年）、「甲賀三郞三本刀」二册（富川房信畫。明和六年）、或は草紙・語物以來の本地物の影響あるものであらう。なほ本地と明かに呼んでゐるものに、「弘法大師御本地」三册（鳥居淸滿畫。刊年未詳）がある。【靑本】靑本の中には「甲賀三郞」二册（寶曆十一年）、「甲賀三郞三本刀」二册（富川房信畫。明和六年）等があり、なほ「諏訪出生記」三册（刊年未詳）の如きも、やはり本地物とすべきものかも知れぬ。【黃表紙】黃表紙には、次の如きものがある。「富士淺間物語」五册（安永四年）、「神力霹靂鏡通之本地」三册（鳥居淸經畫、安永八年）、「七夕祭由來」二册（天明三年）、「弘法大師御本地」三册（寬政七年。黑本の再版）等がある。【讀本】讀本には、「繪本甲賀三郞窟物語」五册（手塚兎月、文化五年）、「勢田橋龍女本地」三册（柳亭種彥、文化十年）等があるが、前者は本地物と稱するよりもその影響によつてなつたもの、後者も本地物圈內より外れてゐるものと見るべきであらう。自づと本地物としての特徵は全く見えなくなつて來てゐる。

【參考】本地物の研究 島田退藏（國文學講座第一輯）○唱導と本地文學と 筑土鈴寬（國語と國文學七六・七七）　（筑土）

梵鐘 ぼんしよう 「鐘」を見よ。

盆石皿山記 ぼんせきさらやまき　讀本　中本　四册【作者】曲亭馬琴【畫工】一柳齋豐廣【名稱】さゝやかなる草紙に千古の事蹟を述べる恰も一時の人目を喜ばす盆景盆石に似たといふ意。【刊行】文化二年（前編）・同三年（後編）。【諸本】曲亭馬琴翁叢書（野村銀次郞編）所收。【題材】番町皿屋敷傳說・鉢被傳說・刈萱桑門傳說を交へ作つたものである。

【梗概】鶴谷師高の臣木村源七は、主君戰死の際甥三重之介を伴うて遁れたが、途中見失つて美作に乳母の夫長助を賴り、その娘晚稻を妻としたが、錦織郡司の寵愛する鹿を擊ち、ために郡司は病死してその後を繼ぎ、強て戀する妾落穗を我が物とした。偶々落穗・晚稻は、時を同じくして紅皿缺皿の二女を生み、妻妾の烈しい嫉視から、落穗は源七の留守中晚稻を殺して缺皿を虐待し、圖らずも國主赤松義則に宮仕をすることになつた缺皿の代りに、紅皿を城中に遣るが、事露はれて討手を向けられ、源七は鹿と化して遁れ、落穗は斬られてその傷口から鹿が生れた。なほ赤松家では家來廣岡兵衞が、嘗て狼に襲はれたのを救ひ來つた缺皿が、誤つて寶物の皿を割り、僕勇藏實は源七の甥三重之介が後難を除かんと、殘り九枚の皿を打碎いたので、二人を庭前の空井戶の側に縛し置きたるに姿が見えずなつた事や、義則珍藏の數珠が失はれて、前に兵衞が山中で射た尾のない鹿の首に懸つてゐた事や、この鹿の皮で作つた筒に包まれて、若君佐用丸が行方不明になつたといふ異變があつた。これより先、紅皿は追放されて大和に赴き、途に遇うて錦織郡司の甥卯三二に救はれ、その後妻となつたが、こゝに寄食してゐた久米鐵牛と密通し、鐵牛は卯三二と誤つて若君を尋ねてゐた兵衞を殺したので、卯三二は播州に到り、兵衞の妻小絹を伴ひ、若君の探索と兵衞の仇討に旅立つた。然るに鐵牛は窮道の末、高野道者の米を盜んで鍋を冠らされた紅皿を捨て去らうとし、後を追つて來たので、野中の古井戶に埋めたが、拔道から遁れ出で、鍋を取らんとて高野山に詣でた紅皿と再會した。又高野山に詣でた卯三二の一行に追はれたので、これを晴討にして丹波に赴き、若尾山光明寺の大德寂譽和尙を訪れた。和尙は紅皿に懺悔を勸め數珠を以てこれを打つと、既にかの古井戶に死んでゐた五體は消え失せた。茲に源七を尋ね、兵衞の仇を探してゐた勇藏・缺皿は、夢に告げられて來り、和尙に導かれて鐵牛を討ち、寂譽の弟子となつてゐた源七に逢つた。そこで和尙は源七の所持する鹿の角を敎化し、鹿の靈は成佛してその奪ひ去つた佐用丸を託したので、勇藏・缺皿は若君を伴うて歸參した。やがて義則は二人を結婚させて重用し、寂譽には一寺を建てて寄進した。

【構想】因果應報を根柢として人生を取扱ひ、その武士道の精神、佛敎の思想を表現してゐる。全篇の事件が源七一家の鹿の祟りに因るといふ因果說を最も具體化したところ、實に作者の小說觀の敎訓と娛樂とを標榜した所以がある。

【參考】馬琴研究 藤村作（日本文學講座）　（笹野）

譽田宗廟緣起 ほんだそうびようえんぎ 「神功皇后緣起繪卷」を見よ。

本地垂迹 ほんじすいじやく　宗敎【名義】佛敎に於いて佛菩薩を本地とし、日本の神祇を垂迹とするのである。【由來】佛敎の傳來するや、朝廷にては厚くこれを信仰せられたのであるが、一般民衆は、我が古來の神祇を崇敬して、容易にこれを信仰しなかつた。そこで佛敎徒は神佛習合を企て、日本の神祇は佛菩薩と相反するものでないことを說いたのである。これを說いた最も著しいのは僧行基である。行基は聖武天皇の歸依を得て、天皇の國分寺建設、東大寺の大佛建立に與つて力あつたのである。かくて奈良朝時代から平安朝初期に亙つて、盛んに神佛習合が行はれ、漸次本地垂迹に進行したのである。從つて本地垂迹說は、何人により何時代に唱へられたかは明確でないが、天台の最澄、眞言の空海等は既にこれを唱へたかとも思はるゝが、少くともこの二人の法子法孫ぐらゐの時代には行はれて居つたものと認められる。【本地】日本の神祇の如何なる神祇が、如何なる佛の垂迹であるかは、元來、作り事であるので、定說のあるべき筈がない。今「扶桑明月集」「神祇寶典」「諸社根元」「洛陽寺社緣起」「日吉山王新記」等により、天台の日吉山王の上七社の本地と垂迹とを舉げて參考に供する。

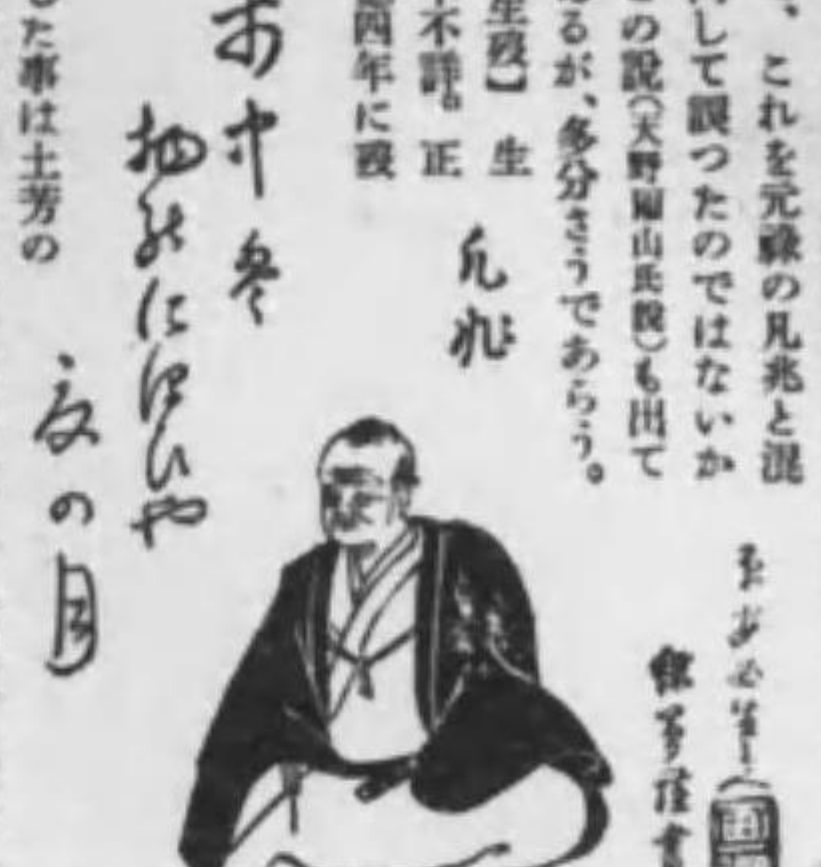
（順序）	（社名）	（本地佛）	（垂迹神）
第一	大宮	釋迦如來	大己貴命
第二	二宮	藥師如來	國常立尊
第三	聖眞子	阿彌陀如來	八幡菩薩
第四	八王子	千手觀音	國狹槌尊
第五	客人	十一面觀音	伊弉諾尊
第六	十禪師	如意輪	瓊々杵尊
第七	三宮	普賢	惶根尊

【影響】中古時代には、この本地垂迹の說は全く成功し、天下の神社は殆ど悉く僧徒の管理に歸したのである。されど當時既に本地垂迹の反對に、神本佛迹の思想を見たのであるが、德川時代となり、神道家の學者頻りに出で、排佛論の聲漸く起り、平田篤胤に至つて極點に達した。かくて維新の際に神佛分離の實行を見て、本地垂迹の思想は全く消滅したのである。（本地物參照）　（田中（義））

凡兆 ぼんてう　俳人【姓】宮城氏・野澤氏・越野氏・宮部氏等の說あれど何れも確かでない。【通稱】幼名、又通稱を長次郞とする說があるが、これも根據不明である。【號】初め加生と

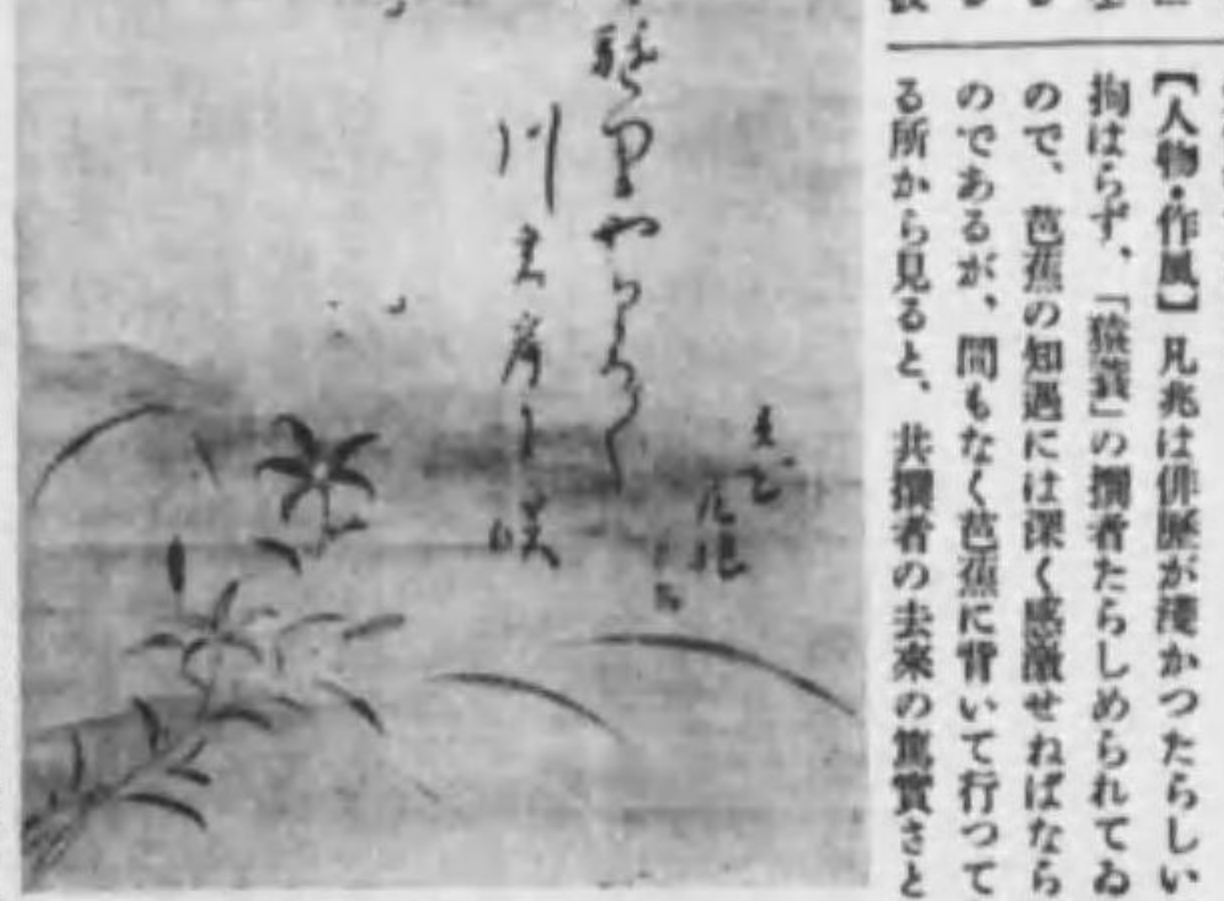
號した。晩年には阿圭とも號した（野坡吟師）。別號を春華園（又春花園）とするものがあるが、これは日人の言葉より古い處には見えぬやうであり、最近酒井凡兆（寛政文化頃の出羽庄内藩主酒井忠徳）の別號に春花園といふのがあるやうで、これを元祿の凡兆と混同して誤つたのではないかとの説（大野洒山氏說）も出てゐるが、多分さうであらう。

【生歿】生年不詳。正德四年に歿した事は土芳の「蓑虫庵集」によつて知られ、それが三月であつたことは野坡の「凡兆圭子を悼　行春や知らば斷べき琴の糸」の句や、許六の「凡兆追善　西東どのかげらふに法の糸」（風俗文選大註解）の句によつて知られる。享年不詳。但し芭蕉が凡兆の妻とめ（羽紅）へ送つた手紙で元祿三年と推定されてゐるものに「加生老」とあるから、相當の年齡であつたことが知られる。


宮城凡兆

【師傳】芭蕉門【閲歴】「風俗文選」作者列傳には「凡兆者加州之産也。業ㇾ醫居ニ于洛ニ」とのみあるが、凡兆の自畫讚に「加城凡兆」とあるものがあるさうだから、金澤の産とする傳へが、信ずべきものであらう。又風律の「小ばなし」にある野坡の談にも、「凡兆は京の醫者にて」とあるから、醫を業とした事も事實であらう。元祿四年の「京羽二重」に、凡兆の住所を「小川さはらぎ町上ル」としてゐるから當時の住所を知り得る。いつから俳諧に入つたかは明かでないが、其角が元祿元年に上洛した冬に、去來・加生と嵯峨吟行を共にしたり、加生と大津の何白を訪うたりした時の加生の作が「いつを昔」に載つてゐるのが最も早いものであらう。かくて翌二年の「曠野」に京加生として二句見え、又この冬であらう、越中から飛騨へ入つて、「鷲の巣の樟の枯枝に日は入りぬ」の吟があつたから、この時故郷金澤にも立ち寄つたのであらう。芭蕉との直接の交渉及び對顔の知られるのは翌三年で、芭蕉が幻住庵に入つた頃から互に往復して居り（嵯峨日記）、その頃から去來との「猿蓑」撰集が始まつたらしい。芭蕉はなほこの年幾度か加生やその妻とめへ手紙を送つたり、或は手紙中加生の事に云ひ觸れたりしてゐる。かくて翌四年には愈々「猿蓑」が出版され、凡兆は最多數の四十一句、外に四卷の連句全部に加はつてゐる。なほこれまでは號が加生とあり、「猿蓑」所收の「市中は」の卷の未定稿に於てもまだ加生で、四年出版の集には加生と凡兆とが相半ばしてゐるが、前年三年の上御靈社景桃丸の年忘れの會の歌仙には凡兆とあるから、この頃凡兆と改號した事が知られる。然るに凡兆は、「猿蓑」出版直後から名古屋の越人・野水と同じて芭蕉に離れる傾きを取つたらしい。それは壺中撰の「弓」や壺中・荷兮撰の「木がらし」や、支考の「削かけの返事」や「誹諧問答」中の去來の言葉などの比較によつて知られる。そしてそれは「削かけの返事」に云ふ如き、越人・野水と共に路通を芭蕉に惡しざまに云つた事のみに起因するものではないらしいが、確たる事は解らない。然るに凡兆は、この後、事に坐して下獄したのであるが、それは元祿七年前後の頃らしい。「風俗文選」作者列傳には「一罪ㇾ事不ㇾ知ニ其終處ニ」といひ、「小ばなし」に「越度の事有、京追放のよし」とあるなどがそれであるが、「追放のよし」といふのは赦免追放を意味するらしい。「誹諧世說」や「蕉門諸生全傳」にはやゝ精しく述べてゐるが、どこまでが事實かは解らない。併し草士撰の「ねなし草」に凡兆の句として、「囚にありしとき　かゝる身を虱のせむる五月かな」とあるものは信ずべきものであらう。又元祿九年成の許六の「韻塞」に、「猿蓑」にある凡兆の「門前の小家も遊ぶ冬至かな」の句を「不知作者」として載せてゐるのは、勅撰歌集の例を襲うての凡兆に對する取扱かとも思はれ、元祿十四年に至る迄、彼の作が更に集に見えない所から考へると、この頃はなほ出獄しなかつたものかも知れない。同十四年から十六年迄は連續して見え、俳壇への復活を期したらしくもあるが、自ら憚る所があつたか、或は他の理由によるか、再び作が殆ど見られなくなつてゐる。元祿十四年の舎羅の「荒小田」には珍しくも四十句といふ多數が採られてゐて、千日寺に詣でた句や須磨で詠んだ句が見えるなど、この頃大阪邊にあつて舎羅に深い關係を持つてゐたらしく推せられ、翌十五年の白雪の「三河小町」には、羽紅が「なには羽紅」として見えるから、羽紅が夫凡兆と同棲したことも推せられる。然るに同年の知方の「初便」には、「江戸凡兆」として二句採られてゐるが、知方は筑前の人でもあるから、江戸とする事は恐らく信ずべきではあるまい。要するに、赦免された後、妻羽紅と共に大阪邊に最後まで世を忍んだものであらう。かくて正德三年に羽紅と土芳との間に文通のあつた事が「蓑虫庵集」によつて知られ、その翌年凡兆が歿してゐるのであるが、羽紅と土芳との文通は享保七年にも見られる。【著作】猿蓑（別項）去來共撰○凡兆句集附羽紅句集（柴田宵曲編）。なほ黒田源次氏編「芭蕉翁傳」所收「凡兆日記」は、既に説のある如く多分僞書であらう。

【人物・作風】凡兆は俳歴が淺かつたらしいに拘はらず、「猿蓑」の撰者たらしめられてゐるので、芭蕉の知遇には深く感激せねばならぬのであるが、間もなく芭蕉に背いて行つてゐる所から見ると、共撰者の去來の篤實さとは正反對の性格の人であつたらしい。「弓」にある凡兆の「こりもせで今年も萌る芭蕉哉」の句は、芭蕉に當てつけた作らしくも思はれ、「荒小田」にある「千日寺にまうでゝ」の「金佛より欠たふとき霜夜哉」の句には、拗ね氣味の性格が窺はれるやうである。たとへ假に他人の罪に坐したのであるにしても、かうした珍事のあつたのには初めから道德觀念に缺陷があつたからではないかと考へられる。俳諧に於ては、殆ど又類例の稀な例を作つてゐる。「猿蓑」を中心として躍進的な進境と躍進的な退歩とを示してゐる。蕉風の樞軸をなす「猿蓑」の價値は、客觀的作風に於て儕輩を抜く凡兆が重要な部分を占めるとさへ思はれるのに、その翌年の句空の「柞原」に見える十句は、既に甚しく理智に墮して、殆ど別人なるかの觀を呈してゐる。されば獄後の凡兆の俳境の頽廢は入獄の精神的打撃によるものとのみは考へにくい。芭蕉は凡兆に對して、「發句はただ十七字の内になし來れば、一字もあだに置べからず」、又「誹諧といへども風雅の一筋なれば、姿かたち麤數作りなすべからず」（旅寢論）と云つたと云ふが、或る程凡兆の作には品位の高くない所があり、又作り捨ての傾きもあつたものかと思はれるが、芭蕉に背きかけた頃からの頽廢ぶりは全く不思議な位である。「荒小田」の四十句は、「猿蓑」の四十一句に對して甚だしい見劣りざまである。その一時的な詩才煥發の奇蹟的事實から考へても、凡兆には精神的に異常のものがあつたかに考へられ、心理學的攻究に値する作者らしい。


凡兆自畫賛（井上源九郎氏藏）

【參考】京羽二重（浦江林鳩）○花實集（河井去來）○旅寢論（同上）○誹諧問答（森川許六）○風俗文選（同上）○削かけの返事（各務支考）○誹諧世說（高桑闌更）○芭蕉門古人眞蹟（僧守）○蕉門諸生全傳（遠藤日人）○續俳家奇人談（竹内玄々一）○俳林小傳（中村允久）○凡兆研究（大河寥々（石楠九ノ一―八））○評釋凡兆俳句全集（高木蒼梧）○凡兆について（大河寥々（月鉾五・六））○去來丈草凡兆（潁原退藏（俳句講座俳史篇））○春花園は凡兆の別號か天野雨山（俳風昭和九ノ一二）　〔志田〕

本朝惡狐傳（ほんてうあくこでん）

讀本　十冊【作者】岳亭丘山【畫工】英齋國景【名稱】九尾の狐の傳說を我が國の事に作り替へたるに據る。【刊行】文政十二年。

【梗概】正中嘉暦の頃、鎌倉に近い座間の郷に星の井加藏といふ者があつた。非常に孝行者で人呼んで孝藏といつたが、貧しいのを憂へて土地の觀音に祈り、四つ星の斑のある犬を授かつて家に飼つたところ、やがて孝藏の父が山中で狼に殺された時、この犬は直に狼を殺して仇を報じた。時の執權北條高時はこの事を聞いてその犬を召し、鬪犬を試みたが鎌倉一だつたので、宗縁太郎の名を與へて館に留め、孝藏には數多の金銀を賜はつた。まもなく高時は新田義貞に滅され、この亂に屢々靈驗を現はした太郎は、又孝藏の許に歸つたが、孝藏は偶々土地の豪農深見作太夫の娘小濃を娶らんとして、豫て小濃に執心の郷士鶴間矢九郎に妨げられたが、太郎の働きで矢九郎を陷れて無事に婚禮した。併しそのため三崎街道で矢九郎に捕はれ、古井戸に入れられたが、太郎はまたこれを護つて武藏駒侍町の商人油屋馬士兵衞父娘に孝藏を救はせ、自分は馬士兵衞方に伴はれてゆく途中、大蛇を殺して父娘を救つた。○下野の國那須野の殺生石は、天地創造の時の惡氣が一匹の狐となり、殷の紂王、天竺の班足王、我が國の鳥羽帝等に祟つて、退治られた後も、毒氣を以て人々を惱ましてゐたものであるが、こゝに近き蘆田の里に奧州安達原から棲み替へて來た黑塚といふ鬼婆は、或る時傷ついた小狐を救うて養ふうち、この狐は近くの原右衞門といふ信心家を化したのを初めとして惡事を重ね、遂に土地の郷士稻村田之進の娘玉芝に乗り移つて、彼女に慕ひ寄る守宮高四郎・相田正之助・春山東作・小畑桑五郎等に祟り、田之進はこれを殺さんとして殺生石の毒氣に當つて死んだが、玉芝もこれがため追はれて黑塚と共に武藏足立郷に移り住み、旅人を誘うて石を以てこれを殺し、財寶を掠めてゐた。足立郷の領主宗高公は彼等を討たんと圖つたが、却つて玉芝の術に陷つて彼女を近づけ、その色に溺れて或は侍女を集めては殺し、或は姙婦の腹を裂くなど亂行至らざるなき有樣となつた。これを患へた忠臣越谷小太夫の弟駒之助や石濱五十之進・五十松父子等は、必死となつて玉芝母娘を討たんと圖るうち、五十松の子を懷姙した油屋馬士兵衞の娘小蘭が召されるに及んで、かの靈犬宗縁太郎の力を藉り、遂に玉芝黑塚を殺して宗高の家を鎭めた。

【解說】「文選」「山海經」以後、諸書に見えた九尾の狐の傳說は、多くの讀本の材料となつたが、これもその一つとして、「神社考」「三國惡狐傳」等の作者に倣ひ、その後日談を描き綺幼の娛樂と勸懲に供へんとした怪異談である。前編には專ら觀音の利生による靈犬の活躍を描き、後編には惡狐を出して殺生石と安達原の悲說を交へ、それを潤色したものであるが、既に全篇の構想が取り合せにすぎず、描寫もまた卑俗であつて取るべき所なく、後編玉芝の惡行の邊は、徒らに慘虐の筆を用ひて不快を覺えしめる。　〔笹野〕

本朝一人一首（ほんてういちにんいつしゆ）

漢詩集　十卷五冊【編者】林恕（春齋また鵞峰と號す）。【刊行】寬文五年【解說】天智天皇の御宇より、元龜・天正頃に至るまでの漢詩を一人につき一首づつ選んで編輯し、各詩の本事、批評等を記したもの。萬治三年庚子の自序、林靖（羅山の第四子、春德）の後序、林春信（春齋の長子、梅洞と號す）の跋がある。　〔佐久〕

本朝櫻陰比事（ほんてうあういんひじ）

浮世草子　五卷【著者】無署名。但し井原西鶴か。【畫工】吉田半兵衞【名稱】本朝は漢土に對し日本の意、「櫻陰比事」は宋の桂萬榮の「棠陰比事」（棠陰比事物語參照）に擬したもの。【刊行】元祿二年正月、江戸日本橋靑物町萬屋清兵衞。大阪高麗橋筋高橋筋南入ル雁金屋庄左衞門板行。大阪再版と思はれるものに後者を削つて大阪心齋橋筋順慶町柏屋清左衞門と入木したものがある。【諸本】日本名著全集西鶴全集下（昭和版帝國文庫）・日本古典全集西鶴全集等所收。【內容】第一卷八章、第二卷以下各九章合計四十四章より成る。裁獄物語を何等の系統なく羅列したもので、「棠陰比事」が二つの事件を對比して辭を鳴し、七十二題百四十四件を取扱つたのに對して、これは一章に一事件を取扱つて敍述したものである。ただ第一卷の第一章の冒頭に、「むかし都に」との書き出しで「夫大唐の花は甘棠の陰に召伯遊んで詩をうたへり。此和朝の花は櫻の木かげゆたかに歌を吟じ。四つの海原不斷の小細浪靜に。王城の水きよく流のすゑの久しきひとりの翁あつて。百餘歳になるまで家に杖突事もなく。善惡ふたつの耳かしこく聞傳へたる物語り。今の世の慰さみ草ともなりて心の風に亂れたる萩も薄も。まつすぐに分れる道の道筋の廣き事。筆の林にも中々書つきずして殘しぬ」と、序文めいたものが附せられてゐる。これは「大鏡」（別項）の流れをひく長壽者の見聞集とした趣向である。事件は必ずしも昔に限らず、また都とも限られてゐな

い。却つて當時の世相を語るものが多い。都とした所以は、有名な所司代板倉父子に假託せんがためで、裁判官の名は表はさず、ただ御前といふ言葉で語つてゐる。事件の內容も「棠陰比事」の探偵趣味が横溢し、筋も獵奇的なものの多いのに比ぶれば平凡に近い。それだけ又、一面に當時の世相を如實に語つたものとも思はれる。なほ板倉父子の判決例を記したものに「板倉政要」があるが、筆者は「棠陰比事物語」（別項）等に剌戟され、自家の見聞や言ひ傳へを題材として巧みに日本化し、當代化し、都化してゐる。「棠陰比事」からはその名を換したるに止まり、材料は案外借用せず、ただ一卷第二章の「曇りは晴る影法師」だけにその證跡を摑むことが出來るに過ぎない。裁判の取扱方は飽くまで溫情主義で、美俗良風の維持を念とし、輕罰主義で罪人と雖もその理のあるところは十分參酌して、萬人その裁きを謳歌せざるを得ない底のものである。人情の機微を捕へ心理の微妙な動きにも注意し、博識で世情に通じた模範的な裁判官を描き出すに成功してゐる。【批評】本書が西鶴作と確定しない所以は、西鶴の他の諸作に比し、文章が平板に流れて生彩に乏しいためである。併しこれは多くの說話を羅列するに急なため、勢ひ、平叙に終つたからとも思はれるし、元祿二年には同じ正月に「一目玉鉾」（別項）を出版したに過ぎず、元祿五年「世間胸算用」（別項）を出すまで三・四の兩年は筆を執つてゐない。これ等の點からしてこの頃西鶴の一身上何等か故障があつたものか、或は創作熱の減退を來したものではないかと思はれる。前年十一月刊の「新可笑記」（別項）も傑作ではなく、本書と同時出版の「一目玉鉾」（別項）も、杜撰なほど推敲を缺いてゐる。但し板下の文字は西鶴自筆と推定されてゐるので、大體西鶴作としても大過なかるべく、「新可笑記」ではまだ翻案を幾分自分自身氣にしたやうな口吻を漏らしてゐるに比し、本書はその痕跡をとゞめぬ程、よく消化してゐる。且つ機智の働き、心理の隱微な穿ち等は自から西鶴作と肯かしむるものがあり、後世の裁判物の一系統を形造り、而も模倣者の追隨を許さぬ天才的な閃きも、諸所に散見する。本書の題簽の卷數を表はすに、「ちゑ小判一兩」「ふんべつ小判貳兩」「しあん小判三兩」「しひ小判四兩」「かんにん小判五兩」と變つた趣向に出てゐるのも面白い。【影響】本書出でて世の喝采を博したものと見え、「本朝藤陰比事」（別項）、「鎌倉比事」（別項）等何々比事と稱する裁判物の一系統を形造ると共に、讀本に演劇に更に大川仁政錄（別項）となつて實錄物化され、終には大岡政談等の講談物にまで展開してゐる。〔城戸〕

本朝櫻陰比事表紙（東大圖書館藏）

本朝虞初新誌（ほんてうぐしよしんし） 漢文 三卷 【著者】菊池三溪 【解說】漢文で書いた小說的遊戲文ではあるが、文章が面白いので一時盛行した。清の張潮（字は山來）の「虞初新誌」に倣つたものである。〔佐久〕

本朝軍器考（ほんてうぐんきかう） 故實 十二卷六冊 【著者】新井君美 【成立】未詳。但し寶永六年朝倉景衡の序があり、「新安手簡」に、享保七年安積澹泊との往復文書を載せた中に、先年この書を撰述したとあり、澹泊と意見を交換して改削したこと、澹泊が跋を書くに至つたことが見えてゐるから、寶永六年頃に既に脫稿し、十四年を經て享保七年に訂正したもので、門人新川元成の序にも、君美の論著は率ね脫稿したもののない中に、本編のみは再び更定された趣を傳へてゐる。【刊行・由來】著者致仕後數年、幕府から嗣子明卿にその著書を求められた時、この書を上つたところが嘉賞せられたので、これを板に刻するに至つた趣が、元文元年六月の新川元成の序に明記されてある。【諸本】新井白石全集第六・故實叢書第一所收。【內容】我が國武器の沿革を、上代より近世に至る文獻の徵すべきもののみを採つて記したもの。先づ引用書二百部の目錄を揭げ、卷一旗幟類十三條、卷二金鼓類四條、卷三節鉞類四條、卷四弓矢類四十九條、卷五弩砲類二條、卷六火器類三條、卷七矛槍類三條、卷八劍刀類十九條、卷九甲胄類二十七條、卷十函楯類一條、卷十一雜器類五條、卷十二鞍轡類二十一條、凡て十二卷百五十一條を記し、寶永六年二月の朝倉景衡の序、享保七年六月朔の門人新川元成の序、元文元年の安積覺の跋がある。又この書の附圖に就いては、凡例に、別に圖を作つて書の終に附ける旨を記し、文中にも別に圖に記すと書いた所があり、白石の文集中にも正德五年集古圖序を載せてはあるが、これはその志のみあつて實行されなかつたものと見える。それでこの書の流布するにつれて、好事家の僞造の圖が行はれたので、享保十九年朝倉景衡が「集古圖說」二卷を作り、圖を岡田信之に畫かせたのを、景衡の子景命が更に畫工蜂谷廣成に畫かせて元文五年に刊行した。この「集古圖說」は一名「本朝軍器考圖式」とも稱せられ、神社・佛閣に珍藏されてゐる武器・甲胄七十五品を精細に圖し、製作・寸法を明記したものである。【價値】君美の著作が何れの方面に於ても劃期的のものである如くに、この書も亦從來の所謂兵法家の間に故實として不完全な說明をなし來つたのを排して、國史・記錄を根據として歷史的記述をなした點に於て、その特徵を認むべきもので、軍器の考說に一段の進步を與へたものである。彼の武家故實の大家たる伊勢貞丈の如きも、その著「本考標疑」の序に於て、「本朝軍器考出而本朝軍器之說備矣、故謂二軍器故實一之徒、拘二其說一不レ附二其驥尾一也」とさへ言つてゐる。又伊勢貞丈は、「本考補註」「安齋隨筆」（別項）「愚得隨筆附考」（別項）等に於て、本書が朝倉景衡の「愚得隨筆」を本にし、君美の意を加へて增損潤色して書いたもので、「愚得隨筆」に引書の名を書き違へたものは「軍器考」にも書き違へてあるといつて、例まで擧げてあるが、この事は反對のことが言へるかと思ふ。君美の死後に書いた景衡の「集古圖說」の凡例には、「景衡久侍二先生一、所二覩聞見一頗爲レ不レ少」とさへある。又「新安手簡」に、安積澹泊が、この書の誤字・脫字を指摘したのを謝した書簡の中に、國史の善本が得られない事が見えてゐることから考へて、引書の間違つたことも強ち「愚得隨筆」の過誤を繼承したものとのみ考へるにも及ばないと思はれる。寧ろ「愚得隨筆」の方が本書の過誤を踏襲したものと考ふる方が自然であらう。又「集古圖說」に就いて、榊原長俊の「本邦刀劍考」には、義家朝臣胄・小笠原法雲鍔面具・新田後閑家藏義家朝臣旗等を擧げて、眞の圖と異る圖が多いと言つて少しくその價値を疑つてゐる。【註釋書】本朝軍器考餘二卷 宇治田忠郷（元文元年自序あり）〇本朝軍器考補正四卷 土肥經平（明和六年二月自跋あり）〇本朝軍器考標疑三卷 伊勢貞丈（安永三年二月成）〇本朝軍器考餘評一卷 同上（安永三年四月成、安齋雜考下）〇本朝軍器考補註一卷 同上（安齋雜考上）〇本朝軍器考補正評二卷 同上（安永九年成）〇本朝軍器考玉篠三卷 松岡社鹿輔（刊）〇本朝軍器考圖後篇玉篠四卷 松岡社鹿輔（享和二年刊）〔石村〕

本朝皇胤紹運錄（ほんてうくわういんせううんろく） 有職 一卷 【著者】內大臣藤原滿季 【成立・由來】應永年中後小松天皇の勅命を奉じて編纂したもの。【諸本】內閣文庫の飛鳥井雅康の自筆本その他の寫本の外、後土御門天皇長享二年十二月に足利將軍義尚の求に應じて中御門宣胤が增補清書し、翌三年三月に將軍に進獻したものを後に板行したものがある。それは後陽成天皇までの皇統及び寬永年中までの皇胤を載せたものである。その長享二年以降の記事は後人の次々に書き加へたものである。群書類從本は上・中・下三卷に分ち、下卷には更に後陽成院以降後桃園天皇までの御系圖を補つてあるが、經濟雜誌社刊行の群書類從には、更に後桃園天皇以降明治天皇に至るまでの御系圖を補つてある。【內容】天神國常立尊から始まつて皇室の御系統を記し、皇胤の方々の小傳を書き込んだものである。【參考】皇胤紹運錄本名由來考 伴信友（比古婆衣卷十六）〔石村〕

本朝三國志（ほんてうさんごくし） 淨瑠璃 五段 時代物 【作者】近松門左衞門 【興行】享保四年二月十四日より竹本座（曾根崎「外題年鑑」）。【諸本】七行八十二丁本、山本九兵衞板。十一行二十八丁本、同上。十二行二十六丁本、同上。續近松淨瑠璃集（續帝國文庫）、諸種の近松全集所收。【題材】太閤記種の淨瑠璃の先驅をなすもの。【梗概】〔初段〕（大序、近江の城）內大臣春長が、安藝・周防の沖なる蒙古勢誅伐の大將軍を眞柴久吉に命じたところ惟任光秀が久吉を猜んで不服を申立てた爲め、春長は怒つて久吉の小姓加藤正清をして光秀を打擲せしめる。（中、城外廣小路）光秀は退出の途次、嫡子光成・郎等闇田彥六・四王天又九郎・進士八郎等と春長並に嫡子春忠を討ち取る密議をする。（切、愛宕山）春忠が寵姫小野お通と花見の宴を催してゐるところを光成・又九郎・八郎等が襲ふ。折から正清が馳せつけ、光秀の謀叛による春長の最期を告げ、左右の敵を斬り伏せるが、春忠は深傷を負つて遂に自害をする。〔二段〕（口、近江の城）春忠の胤を宿せるお通が、城門で御臺所に御目もじを請ふが、お通は光秀の養女なる故、敵方の首を討ち來られば嫁姑の名乘りは出來ぬといはれ、悄然として去る。間もなく光秀の軍が押寄せる。御臺所は孔明の故智を學んで、城門の櫓の上で琴を彈じ、敵軍がこれに魂を奪はれてゐる間に、中國より久吉の軍が馳せ戻つて散々に破る。（切、小栗栖の里）辛うじて逃れ來つた光秀はこゝで春長父子の亡靈に惱まされた後、百姓等の竹槍に斃れる。〔三段〕（口、伏見城）お通の實父松平嘉平次が訪れ來り、久吉を春長の天下を盜む大盜人と罵る。久吉はお通が遠州濱松なる嘉平次の浪宅に忍んでゐると聞き、その胎內にある主君を迎へんとして、草履取の昔の姿となつて嘉平次の供をする。（切、嘉平次浪宅）嘉平次は光秀の謀叛に連判した自分を恥ぢ、御臺所の勘氣を赦されよとお通に鐵砲を渡すが、お通は却つてそれで己が胸を貫く。物音に奧から久吉が立ち現はれ、父の罪に代つたお通を憫み、お通が生んだ若君を後見して、後々は日本の大將と仰がんと約す。〔四段〕（口、大將住吉詣）久吉はこの度の三韓征伐について神の擁護を祈らんため、住吉詣を志して道行。（中、住吉海岸）久吉は堺の住人小西如淸（じよせい）から乳守（ちもり）の傾城小磯といふ者が三韓の繪圖を所持すると聞き、その繪圖を手に入れる役を正清に命ずる。（切、乳守の色里）高島屋の二階に呼ばれた小磯は情人小西彌十郎を久吉に推擧するといふ約束で繪圖を正清に與へる。彌十郎は如淸の子であるが、無賴のため勘當されてゐる。小磯からこの話を聞くや、立身するのに正清の手は賴まぬと二階に踏ん込み、大力を以て正清と揉み合ふが、とゞ小磯が中を隔てて意見すると、飜然として互に力を協せ、加藤・小西と異國に名を揚げようと誓ふ。〔五段〕（口、洛東大佛御堂）三韓より凱旋の後久吉は春長父子の菩提のため盧遮那佛を建立し、その供養の日にこの度の三韓征伐を淨瑠璃に綴らせて演ぜしめる。（大切）劇中劇の操人形「男神功皇后」三段續。【解說】「譜編年代紀大成」の享保四年の條に、「今年朝鮮人來朝九月四日大阪に着」とあるが本作はその噂を當て込んだものと思はれる。同年五月十五日より豐竹座で、紀海音作「神功皇后三韓責」を上演したのも、同樣の興行政策であらう。全體としては纏まつてゐないが、見せ場の多い賑やかな作である。明和四年十二月十四日より竹本座上場の「三日太平記」、安永五年四月三日より北堀江座興行の「三國無雙奴請狀」は共に本作の翻案。【參考】近松全集第十一卷解題 藤井乙男〇大近松全集第十五卷解說 木谷蓬吟〔高野（正）〕

本調子（ほんてうし） 「三味線」「調子」を見よ。

本朝書籍目錄（ほんてうしよじやくもくろく） 書目 一卷 【名稱】「日本書籍總目錄」と題したものもある。又「仁和寺書籍目錄」「御室書籍目錄」とも呼ばれた。【著者・成立】左の諸說がある。（一）冷泉大納言爲實說（新井白石「同文通考」）。一

本の奥書に「右以㆓冷泉大納言爲富卿本㆒寫㆑之以㆓准后本㆒令㆓一校㆒者也　康安二年正月七日刑部侍郎光之」とあるのに據る。（二）淸原業忠說（藤貞幹「好古小錄」）。「標源鈔」所引の一本の奥書に、「永享十一多淸大外記業忠依㆑仰注㆓進之㆒」とあるのに據る。井上頼圀博士もこの說を支持した。（三）大外記中原氏說（中山信名「前後風土記撰補」）。第二說を誤つたもの。（四）建治三年以後永仁二年以前成立說（山本信哉博士）。一本の奥書に、「此抄入道大納言實冬卿密々所㆓借賜㆒之本也　永仁二年八月四日寫㆑之　師名在判」（寬文十一年版本及び群書類從本は「永仁」を「永正」に誤る）とあり、且つ本書に書名の見える「和漢兼作集」には、「右衞門督實冬」と記され、實冬が右衞門督となつたのは建治三年であると云ふ點から推定したもの。前三說は何れも成立年代を足利時代としたのであるが、山本博士の說の如く、鎌倉時代に成立したものと見るべきである。

【諸本】永仁二年の奥書を備へたものと、康安二年の奥書を備へたものとの二系統に分つ事が出來るやうである。後者は後世の增補の痕が多く見られ、「日本書籍總目錄」と題せられるものは、この種類に屬するものに限るらしい。前者に屬する刊本としては、寬文十一年長尾平兵衞刊行の本及び群書類從本があり、後者に屬するものとしては、新成簣堂叢書本（昭和七年刊、新井白石書寫本の複製）がある。【解說】「日本國見在書目錄」（別項）が我が國に渡來した漢籍の目錄であるのに對して、本書は書名の示す通り、我が國で著作された國書の目錄である。分類體にして書名を擧げ、著者名・卷冊數等を記してゐるのであるが、その分類は次の通りである（本によつて多少の相違がある）。神事・帝紀・公事・政要・氏族・地理・類聚・字類・詩家・雜抄・和歌・和漢・管絃・醫書・陰陽・人々傳・官位・雜々・雜抄・假名である。但し和歌の部は、「勅撰以下別有目錄云々」として全く書名を擧げてゐない。本書は我が國で著作された國書の目錄としては、その成立年代も古く、且つ廣範圍に亙つてよく集めて居つて尊重すべきものである。

【附記】諸本の中、卷末に「諸家名記」と題して七十餘部の記錄の書名を擧げたものがある。又「八雲御抄」一に「學書」として擧げられたものを、その儘附載してゐる本もあり、寬文十一年版本は、これに多少の增補を加へたものを「本朝書籍目錄外錄」として本文の後に附してゐる。藤貞幹の「國朝書目」（別項）は本書及びこの外錄を中心として編纂したものである。又「增補本朝書籍記」（敬順居士、寬保三年成）と云ふものが寫本で傳へられてゐる。

【參考】本朝書籍目錄の著作年代に就て　山本信哉（史學雜誌二八ノ五）〇日本書籍總目錄解說　鷲峰學人（新成簣堂叢書第五冊）　〔岩橋〕

本朝神社考

ほんてうじんじやかう　神道書　六卷

【著者】林羅山【解說】本書は、羅山が「記」「紀」・「舊事紀」・「延喜式」・「古語拾遺」その他種々の古書・舊記・諸社緣起等に基き、神社の研究を行つたもので、極めて有益の書である。羅山は朱子學の大家であるが、その思想は神儒一致說である。蓋し佛敎は傳來當時烈しく排斥せられたが、神佛習合・本地垂迹（別項）の企てで、遂に隆盛を極むるに至つたのである。儒敎は江戸時代前には、官吏又は僧侶の副業的に研究せられ、儒者として專門に儒敎の發展に寄與せるものは、乏しかつたのである。然るに家康によつて羅山が登用せられ、以後儒者の勃興を見たが、その勢力は佛者に及ぶべくもない。そこで神佛習合と同樣に神儒一致を高調したのではないかと思はれる。本書もその趣意で出來てゐる。何れにしても神道研究の上に價値ある書である。　〔田中（義）〕

【參考】神道叢書　林羅山〇羅山文集

本朝水滸傳

ほんてうすゐこでん　讀本

【作者】建部綾足【名稱】支那小說の「忠義水滸傳」の飜案の義で、「本朝水滸傳」といひ、また「忠義水滸傳」に於ける闘手大尉洪信が、石碣を開いて百八の魔君を走らす條を吉野柘枝の傳說に擬合したので、一名を「芳野物語」ともいふ。【成立・刊行】明和十年正月、藤原加繩興の序がある。夙に二十五卷五十條を下稿したのであるが、その年始めて十卷二十條を出版し、安永二年發賣した。奧附に安永二年出の朱印がある。又後編近刻とある。改題本「芳野物語」の目錄に、後編卷之十一第二十一條より卷之二十五第五十條までの目次を揭げてゐるが、刊行されず纔に寫本で傳へられてゐる。又後編の末に三編の總目錄を附してゐるが、稿成らずして歿したといはれる。【諸本】明和十年刊行の繪入大本九册本と後刷の繪入大本三册本とがある。三册本は「芳野物語」と改題した。珍本全集（帝國文庫）所收。なほ曲亭馬琴が小津桂窓の藏本を以て寫させた後編十五卷が靜嘉堂文庫に藏されてゐる。【題材】「忠義水滸傳」を飜案するに、「懷風藻」・「萬葉集」に見える柘枝傳說を結合し、味稻翁が柘枝仙女と契つて設けた百人の子が四方に散じて英雄となる。即ち宋江を象つて惠美押勝とし、高俅に擬するに道鏡を以てしてゐる。而して終に道祖王・淸麿・豐成・泰澄等の豪傑が梁山伯に擬せる江州伊吹山に集まるといふ趣向である。

【梗槪】〔前編〕天武帝の御代に味稻の翁といふ者があつた。吉野川で拾つた桑の枝から生れた女と契り、女が翁にかの枝を百段に折れば、やがて百人の貴人・官人・庶人と生れ、終にはこの山に來る。それは我等が子だといふので、翁は枝を折つて川に流してやつた。その後高野天皇の御病が篤く百官思ひ患ふ時、太宰府の阿曾丸は、弓削道鏡の祈禱の驗あるを奏し、道鏡は迎へられてお側近くに奉仕し、太上天皇が崩御されるや、法皇の位を許され、政務を問はせられた。時に橘諸兄父子は北國に走り、藤原惠美押勝は近江三尾崎の城に籠り、太子道祖王・鹽燒王、それ〲押勝を頼みて近江に下られる。そこで、藤原倉繼・石村村主等は奏請して軍を近江に遣はしたが、道祖王は釣船に逸して押勝に心なきを見せ、追手の兵を引揚げさせ、三尾崎の城に入られる。押勝は盜み取つた太政官の印を以て東の軍兵を集め、道鏡を討つ計を運らす折柄、倉繼・村主の大軍に押し寄せられ、戰ひ敗れて道祖王と共に逃れたが、內舍人は豐丸・角丸二王の御身替りとして死んだ。然るに倉繼等は宮の押勝を討たざるを憤り、城を燒き二王の御骸らしい燒死體を殘して落ち、また何人かの首を燒いて押勝とし、恩賞を受けた。併し押勝は豫て城の後の沼に用意して置いた浮橋から道祖王を奉じて伊吹山の白猪老翁を尋ねて行つた。それは幼時別れた兄の豐成で、その美しい娘が王の御側に仕へた。やがて豐成は押勝を大將として道鏡を討たうと考へ、押勝は先づ同志糾合のために、七人の兵に印を與へて諸國に廻らせ、自らは東國に下つた。然るにまた阿曾丸は宇佐八幡の御告げといつて御位を道鏡に讓られるやうにと奏したので、天皇は和氣淸麻呂を遣して神の敎を伺はれた。淸麻呂は神勅を受け、歸途、巨勢金麻呂を訪れて妻子の上を頼み決心する所があつた。その晝した神の御告げを聞いた道鏡は激怒し、彼を流罪に處し、途で殺さうと計つたが、金麻呂の子金石に救はれ、なほも追手に圍まれたので、金麻呂が輪を以て死んだと欺き、紀伊の溫泉に隱れた。折しもその家の隣に軍書を講じて渡世としてゐる者があつた。頻りに道鏡を討つ手だてを話し、淸麻呂の名をいふので、不審を抱き樣子を窺つてゐた。彼は鼻彥といふらしかつた。さて追手の守部等は、責ける首を持ち歸つたので、重き刑に行はれようとしたが、金麻呂が術中に陷つたことが知れ、罪を許されて金麻呂を捕へ來れと命ぜられる。又淸麻呂の妻子は追放され、明日香の知邊を辿り迎ひに出てゐた金石等に導かれて紀伊に赴いた。金石等は熊野坂で山賊に君達を奪はれ、偶々金石は明日香大太刀に助けられて淸麻呂の隱家に到つた。大太刀は嘗て淸麻呂に罪を救はれた恩がある。卽ち君達の行方を探ねて行き、又淸麻呂等は都の追手が迫つたとて、折から入り來る鼻彥實は押勝の家人道主口走の案內で伊吹山に行く。山賊は跡部武雄、同じく武雄とて嘗て淸麻呂が妻の家に仕へた者で、圖らずも押勝の家人忌部宿禰海道が君達に邂逅しての物語に驚いてその罪を詑びたのである。時に守部等が淸麻呂を捕へて都に上るといふ騷ぎ、跡部兄弟は輿を奪つてみると現はれたのは巨勢金石であつた。そこで互に仔細を語り、力を得て伊吹山に急いだ。こゝに越の國白山の麓に海邊鱗といふ劍道の達人があつた。實は押勝の家人和宗部眞太刀で弟子を養ふこと五百人許り、恰も奈良麻呂卿が道鏡を斥けんと白山に隱れてゐるのに會し、互に心を明かして白山に登つた。白山の窟は千人に餘る軍勢となつた。折しも法師が國の守大伴家持に兵糧の事を謀らうと出て行く。法師は嘗に聞えた泰澄であつた。彼は天下の氣を考へて白山の窟を開き籠つてゐたのであつた。時に家持は、狩に出でて手馴れた鷹を失ひ、泰澄にその在所を敎へられる。鷹は橘諸兄の手にあつた。諸兄は泰澄の告げで白山の窟に糧食を送つたならば返さうといひ、家持は諾して鷹を受取つた。數日を經て眞太刀は守の館に禮に來て、世の騷がしい事を話してゐるうちに、眞太刀も志を同じうするを知り、密に語るところがあつた。さて紀伊の溫泉を發つた淸麻呂等は志摩の國手節の崎に着いた。一兩日の泊りに淸麻呂は神辭を夢みて妻子と邂逅し、遂に金麻呂・大太刀・武雄等と共に伊吹山に登り道祖王に謁した。こゝに武藏の神田部に富み榮えてゐた弓屋の倭雄といふものがあつた。韓白の犬神といふ男に妾の世話を頼み、犬神は禮金を取り、人質の眞鮪に分ち與へて都から來た花子を世話した。倭雄は花子を圍ひ、最初の夜金三百枚を與へ、次の夜千張の弓を贈ることを約した。その樣がどうも不審で、犬神もただの人ではないらしい。倭雄は眞鮪と共に遂に訴へ出た。花子は不破內親王であつた。その夜鹽燒王も忍んでゐられた。併し役所に仕へてゐた押勝の家人高橋手力の知らせで、葛飾の方へ逃げ去つた。〔後編〕手力は又味方の巨勢長谷が盜賊として引かれて來たのに會した。そこで表面を巧みに僞はり、高橋足柄と名乘らせて官を與へ、互に計畫して碓氷峠に落ちのび、足柄は諸國に味方を募るために旅立ち、手力は交石の倭卿を尋ねて行つた。倭卿は道祖王の馬飼の子で、今は遠江に勢力を振ひ、駿河附近の賊徒と與みして道祖王に仕へる事になつてゐた。然るに道鏡はかうした賊徒のことは一向氣にも留めず、ただ白山の賊が武器を用意し、淸麻呂等を匿つてゐるらしいのを怖れ、大伴書持をして征伐させることになつた。併しその惡政に民草の上を憂慮され、仁慈をかけさせられてゐた太上天皇は、白山の籠人が天下のための軍なるを聞召され、密に書持を諭されたので、書持は眞情を定め、敗戰すると共に自ら刄に伏した。これを知つた兄の家持はいたく無情を觀じて館を去り、立山の麓なる杏掛の翁の伜鼠丸の許に隱棲したが、或る夜書持の靈に奧州外ケ濱の惠美押勝を援助すべきを告げられて下山した。こゝに奧州には金華山の邊りに鞍馬高神といひ、又人呼んで奇丸といふ奇術師がゐた。その術によつて押勝の味方をつくらうと努めてゐた。そこには、鹽燒王・不破內親王等が潛んでをられた。又外ケ濱に押勝は足丸といつて酒屋を營み、蝦夷に酒を送り手馴づけようとしてゐた。そこへ家持が來援したのである。丁度その頃蝦夷の司ポンデレトビカラは所領の千島が不毛で酒代に困り、なほ千島を救ふために外ケ濱に押寄せて掠奪を行つた。そこで足丸の軍兵は出でてこれと戰つたが、足丸は千島の半分を取り、トビカラを養子として都の女と結婚させる條件で和睦した。併しその結婚に窮し、不破內親王と侍女玉衣を迎へた。トビカラは內親王の威に打たれてしまひ、家持は事情を告げた。するとトビカラも眞意を打明けた。彼は高麗安多部の次子白主といふ者で、親は黃金を掘り出した功で上司になつたが、彼は僅かの咎で追放されて千島へ渡り、蝦夷の聟となり敎化に努め、一人生き殘つて外ケ濱一帶を征服してゐたのであつた。そこで玉衣が配される事になつたが、それは意外にもトビカラの妻であつた。彼は蝦夷を率ゐて押勝の味方となつた。又天智帝が葛城王と仰せられた頃、奧州に下られて元采女であつた女と契られ、男子を設けられたが、今、淺香王と稱して勢を揮つてゐた。その媛山井姬が奇丸の奇術を喜び、何時か鹽燒王を慕はれたので、淺香王を味方にもと鹽燒王は姬と契られたが、誤られて不慮の死を遂げられ、姬も自殺した。これによつて淺香王は道祖王の味方となつた。さて豐前菊の高濱の海人男狹磯は宇佐八幡に詣で、一夜諸國の天狗が天下の形勢を論ずるのを聞いた。それは持山祇の力によるといふのであるが、奧州に於ける官軍の動靜が知られた。その頃太宰府の阿曾丸は、蓁城の驛の奸惡な驛主の娘を妾として色々の惡事をなし、家臣秦金明の諫めも聽かず、卻つてその妻子を虐殺するといふ暴狀であつた。かゝる處へ遣唐使藤原淸河は安倍仲麿と別れ、偶々楊貴妃の叔父に助けられ、安祿山の亂を逃れた貴妃を伴つて九州に歸つたが、道鏡を憎んで名を能里曾と變へて松浦の里に住み、阿曾丸と近づきになつた。或る日こゝで迎へた妾の里へ案內されて行き、圖らずも小治田達珠名と邂逅した。珠名は熱田神宮の祝子であつたが、道鏡・阿曾丸に追はれて來たのである。そこで共に阿曾丸を討たうと謀り、また男狹磯實は押勝の家人忌部宿禰海道とも語らふことになつた。然るに阿曾丸は箱崎の濱に俳優屋を作り能里曾を座本として芝居をさせ、楊貴妃の舞を命じた。その夜、貴妃の舞に珠名・能里曾の

妻は阿曾丸を狙って共に殺され、熊黑曾も男狹礒も志を果さず、殊名は鍵に貴妃を伴つて逃れ、判官今は阿曾丸の討たれぬことを知り、貴妃の望むまゝに熱田に伴つてその住家を定め、再び筑紫に來て淸河等と力を合せ、志を遂げようと決心して熱田へ去つた。

【構想】支那の「水滸傳」を翻案して、我が國の有名な歷史的事件に擬し、惠美押勝・和氣淸麻呂等が道鏡を討つて君側の奸を除き民を安んぜんとするといふのが大體の筋で、その同志が伊吹山に來り集るために、多くの葛藤を現はし、事件の複雜を見せてゐるが、複雜な趣向の變化の上には深い考慮が拂はれず、技巧的な小細工が多く見えて、雄大な結構を損するまでには至つてゐない。【史的地位】この書や「西山物語」（別項）が京都の書肆で出版されてゐるにも拘らず、曲亭馬琴が「江戶作者部類」に彼を讀本作者部の卷頭に錄したのは、畢竟「本朝水滸傳」が馬琴の「高尾船字文」（別項）、山東京傳の「忠臣水滸傳」（別項）等の先蹤をなし、殊に馬琴の大作「南總里見八犬傳」（別項）がこれに暗示を得てゐるからである。そして「水滸傳」を換骨してその古轍を踏まず、別に一趣向を建てたのは當時の作者の及ばない所で、今の讀本の嚆矢だとも稱してゐる。實に讀本史上注意すべき作品である。これに啓發された馬琴は、天保四年「本朝水滸傳を讀む幷批評」の一卷を書いて、趣向の奇、構想の妙を稱してゐる。またそれに嚴しく論評してゐるやうに、雅文體を採り、古語を用ひたのはそもそも無理である。

【參考】本朝水滸傳を讀む幷批評　曲亭馬琴（曲亭遺稿）○珍本全集解說　（笹野）

本朝醉菩提全傳

ほんてうすゐぼだいぜんでん　讀本　八卷　上帙六册・下帙四册

【作者】山東京傳【名稱】內題に（稻妻表紙後編）と冠してゐる。支那小說の「醉菩提傳」の翻案の義である。【刊行】文化六年【諸本】京傳傑作集（帝國文庫）・有朋堂文庫・讀本集（名著全集）・山東京傳集（近代日本文學大系）所收。【題材】假名草子「一休咄」（別項）「續一休咄」等の一休の俗傳を藉り、「醉菩提傳」に據つて作つたものである。上帙起筆の「如是我聞佛門廣大なり」から「是亦所謂戲作三昧なりとかや」までは、「醉菩提傳」の飜譯で、その「官救秀玉雙憐花」「濟顚裸治處女郷」の二章を翻案してゐる。これが京傳の飜案とされ、自ら京傳譯とも署してゐる所以であるが、下帙は一休を中心に、「昔話稻妻表紙」（別項）の後を承け、假名草子の因果物等に據つて作つてゐる。

【梗槪】寛政の頃、但國の修行者飾磨の曾根松は山城愛宕郡六道の野に宿り、佐々木家の惡人蜘手の方、不破道犬一味の亡靈が此處に集つて、各々桂之助主從及び梅津嘉門等を滅さんと凝議するに會した。こゝに信讀の守護職望月賴康の臣陀麻彥惣は侍女香晒と通じて主家を追はれ、香晒の實父山蝦洞九郎を賴つて大和二上嶽の麓に身を寄せたが、藥師洞九郎は惡心强く屢々春日山の鹿を擊つて奈良法師に捕へられたので、彥惣は所持の名器更科肩衝を賣つてその罪を購はんと、折柄病中に香晒を攝州に使せしめた。然るに香晒は歸途その金を賊駒毛の黑平に奪はれたので身を賣らうとし、黑平の妻岩芝に欺かれて墮胎しようとしたが、門說經に立つた一休和尙に金を惠まれて漸く父を救つた。間もなく香晒は男子を生んだが洞九郎は僞つてこれを攝州合邦が辻に捨て、偶々大金を拾つた。この金は京の鄕士鴨川忠知の僕穗波垣右衞門が主命に依つて更科肩衝を求めに行く途中落したもので、これがため主家を追はれた。洞九郎は歸途二上嶽の山中で駒毛の黑平を殪して嘗て娘が奪はれた金を手に入れたが、熊に襲はれて岩穴に落ち遂に此處に餓死した。彥惣夫婦はその後堺に出で扇屋となつて一女小田井を擧げた。話變つて管領由利之助勝某の軍師となつた梅津嘉門は、その後妻此花を娶つて彥九・玉虫・乙星の一男二女を擧げた。當時一休和尙は山城岩倉山の麓に庵を結んで嘉門や忠知とは親交の間柄であつた。然るに勝某と濟名入道との確執が嵩じて應仁の亂となるや、嘉門は奇策縱横大に濟名勢を惱ましたが、天運を觀じ遺孤を一休に託して遂に岩倉山に戰死した。此花は子供を連れて近江に逃れんとしたが、兄弟の賊有漏路・無漏路のために殺され、玉虫は奪はれ、乙星は谷に落ち、彥九は一休に救はれてその門に入つた。三年の後玉虫は安計呂山中の首魔山姥といふ人買の女の許に賣られてゐたが、病後虐待されて此處に死んだ。乙星はその後獵人に救はれて養はれたが、養父に賣られ、死なんとする姉に會したが、後、旅人に買はれて行つた。山姥はかの岩芝で、遂に捕手に圍まれて逃れ、有漏路・無漏路も遂電した。一休の門に入つた彥九は長ずるに及び腕立を好んで破門されたが、浪花に出でて野晒悟助と名乘り、半月は出家の行をし、後半月は惡人を挫く俠客となつた。或る日堺の扇屋彥惣の妻と娘の難を救うて、惡漢鬼平次・蜂藏を懲した事から、その親分提婆仁三郎と爭ひ、遂に鬼平次・蜂藏を殺して自害しようとしたが、一休が現はれて彼等は悟助の仇有漏路・無漏路であることを告げられ、且つ悟助の志を感じて破門を許された。當時攝州住吉に住した一休は、父堺の傾城地獄の名聲を聞き、訪ね行つて數々の大德を現はし、遂にこれを大悟させたが、彼女は卽ち乙星の後身であつたので、後、彼女が病死する時悟助を伴うて兄妹を再會せしめた。さて穗波垣右衞門に養はれた彥惣の子は長じて詫助と稱し、堺に近い湊村に住んで貧しい中に父母に孝養を盡してゐたが、彥惣の娘小田井は彼に戀して結婚することになつた。これを知つた一休は彥惣方を訪ね、洞九郎に慘殺された犬の怨靈を小田井から祓つて、畜生道に墮ちんとした彼等を救ひ、且つ事情を明かにし、豫て取寄せた洞九郎の拐帶した金を垣右衞門と彥惣に分ち與へたので、垣右衞門はこれに依つて詫助と共に主家に歸つた。彥惣夫婦は出家し、小田井は別に聟を取つて榮えた。話變つて大和の佐々木家ではその後貞國・桂之助等相次いで病歿し、月若丸家を繼いで多聞之助と稱し、妻折琴姬を迎へて旣に三十餘歲となり、執權名古屋山三郎その子小山三等に輔佐されてゐたが、伊勢の豪族雉子川國貫は豫てこれを攻めんと志し、偶々一子國景が折琴姬に戀慕し、姬を吉野に奪はんとして却つて守護の前司太郎に討たれたのを機會に兵を起し、上巳の宴の夜急に佐々木の館を攻めた。多聞之助・山三郎は、この難に死し、折琴姬は腹藏の子同助に伴はれて落ち、前司太郎も僅に逃れた。小山三は父の遺命に依つて百蟹の圖を携へ、母八重垣を伴うて河內に逃れ、川止めに遭うて森屋村に滯在した。折柄界隈に出沒する狒々に襲はれて母子別々に山中に逃れ、八重垣は不破伴左衞門の異母弟番作に殺され、小山三は母の臨終に來合せ、又狒々に襲はれたが、百蟹の國の靈驗によつてこれを擊つた。その後彼は近くに住む酒買赤六といふ乳母の子に遭うてその家に留まり、難症の頭痛を病んだ。赤六は專心看病に盡し、妙藥と聞いて一人の老婆から人の生首を買つてこれを祀つた。然るに赤六は三年前竹齋といふ醫師を誤つて殺し、その後故あつてその娘を妻としてゐたが、大晦日の夜偶々その罪を感じて自殺しようとした。すると祀られてゐた生首は聲を出して止め、又首を賣つた老婆は入つて來て自殺した。生首は嘗て竹齋に養はれ、惡業の果て自殺した提婆仁三郎、老婆は實は岩芝で提婆の母であつた。當時生駒山の麓に留まつてゐた一休は偶々此處に來り、岩芝・提婆に引導を渡し、忽ち髑髏となつた提婆の首を杖に懸けて折柄の元日の朝を飄然と去つた。小山三の病はこれに依つて癒え、赤六等は幸福に暮した。

【構想】「稻妻表紙」の後編として書いたものであるが、筋の統一を缺いてゐる。それは餘りに趣向に凝つて、淨瑠璃・歌舞伎の技巧を用ひることが多いためであつた。從つて場面の變化、部分的の興味はあるが、全體としての筋・結構が甚だ散漫であつた。勸懲を旨とし、興味を狙ふ讀本に於て、最も京傳がその特色とした趣向に凝つて、その弊に陷つたものである。その凝り方は又文章を七五調に練り、挿畫や體裁等の考案にも現はれてゐるが、却つてそれが爲めに出づべき後編を繼がしめなかつた。「江戶作者部類」には、思ふほどの世評もなく、畫工や作者に對する費用が多くて板元が損失したと言つてゐる。構想の技倆に乏しく、ただ趣味で纏め上げたといふ點で、京傳の手法がよく窺はれる作品である。【影響】河竹默阿彌によつて歌舞伎「醉菩提悟道野晒」に脚色されてゐる。

【參考】近世物之本江戶作者部類○近代小說史　藤岡作太郎○讀本集解說　（笹野）

本朝世紀

ほんてうせいき　歷史書

【編者】藤原通憲【別名】寫本に「史官記」又は「外記日記」と題せられるものがある。【諸本】伴信友が四種の殘缺本を以て校合した本が最も善本であり、國史大系にこれを收めてゐる。【解說】本書は「玉葉和歌集」「桃花蘂葉」（各別項）等によれば、寬平一代の國史といはれてゐるが、「通憲入道藏書目錄」によれば、承平・天慶・天曆・久安等の部分もあつた由が見える。蓋し編者通憲は、六國史（別項）に次ぐ國史を編せんとし、新國史を材料とし、その他の舊記を加へて先づ寬平一代を完成し、醍醐天皇以下はそれぞれの材料を集めたが、未だ修撰を終らぬ中に世を去つたものと解すべきであらう。現在は寬平の部分は一二の佚文を除くの外は亡佚し、未定稿の部分が朱雀天皇の承平五年五月より近衞天皇の仁平三年閏十二月に至る間斷續しながら殘つてゐる。材料は「外記日記」を主とし、傍ら朝臣の日記・系圖等を參取してゐる。平安朝後期の史料として、殊に朝政の委曲を示すものとして甚だ重要である。

【參考】本朝世紀考　伴信友○本朝世紀考　星野恒（史學雜誌一ノ四）　（秋本）

本朝世事談綺

ほんてうせじだんき　隨筆　五卷

【著者】菊岡沾涼【別名】近代世事談【刊行】享保十九年【解說】主として江戶時代民間常用の品物の起原を列擧したもので、門類を立てて一々品名を示し略說を施してある。卷一に衣服門（天寶紋・金襴・木綿以下三十七目）、飮食門（茶・茶の湯・有樂流以下四十一目）、卷二に生植門（西瓜・南瓜・蜀黍以下二十八目）、器用門（琴・三線・尺八以下五十七目）、卷三に能藝門（香道・蹴鞠・加茂香以下五十一目）、卷四に歲時門（門松・萬歲・鳥追以下二十七目）、文房門（詩賦・聯句・和歌以下五十七目）、卷五に人事門（先生・鼓響・人參功能以下二十四目）雜事門（鹿島立・辻占・假山以下二十九目）を載す。享保十八年松木梁德の序、その次に凡例、條尾に著者の跋がある。本文中に插圖數面を加へてゐる。　（和田）

本朝續文粹

ほんてうぞくもんずゐ　漢文集　十三卷

【撰者】未詳。（一）「本朝書籍目錄」には「本朝文粹」と並べて「續文粹十四卷藤原季綱撰」とある。普通にはこの說が用ひられてゐる。市河寬齋の「日本詩紀」もこの說を襲用。（二）林羅山の「日本書籍考」及び林春齋の「本朝一人一首」卷六の季綱の項には、續文粹編纂の事に全く言及してゐない。岡田正之博士の「日本漢文學史」にも亦季綱撰を疑つてある。やはり撰者未詳とすべきであらう。【名稱】「本朝文粹」の續編の意。一般には「續本朝文粹」と稱せられてゐる。【成立】少くとも崇德帝の保延六年以後である。明言は出來ないが近衞帝頃のものであらうか。而も未定稿であるかも知れない。作者の姓名の記しやうも一定されてゐない。例へば大江匡房を卷首には江大府卿、次には學生江匡房、從二位下權中納言兼都督大江朝臣、江都督など連續して出てゐるが如きはそれである。また誤字も少くない。【諸本】（一）菅家本十四卷（七册）。明治二十九年五月、菅原德長刊。木活字を以て五十部刊行したものである。菅家原本とし、聖華房梓となつてゐる。（二）國書刊行會本。「本朝文粹」と合册で一册となつて大正十二年に刊行せられた。底本は金澤文庫本で文永九年相州御本を以て、越後守北條實時が校了したものとある。相州御本とは何人のものか明かでないけれども、或は時宗か若しくはその近緣の人の藏本らしい。その後に大內記廣範の本にも校合したと實時は記してゐる。なほ寫本では、前記文永九年書寫の北條實時藏本十三軸が內閣文庫に藏されてをり、また同文庫には、外に寫本六部がある。その他神宮文庫・彰考館に各々二部、圖書寮に四部存してゐる。

【內容】內容に就いて全十四卷とする橋見林の說があるが信じ難い。その內容は、

卷一、賦・雜詩	卷二、詔勅・位記・勘文
卷三、策	卷四、表上
卷五、表下・狀	卷六、奏狀上
卷七、書狀・施入狀	卷八、序上
卷九、詩序中	卷十、詩序下・和歌序
卷十一、詞・讚論・銘・記・牒・都狀・定文	
卷十二、祭文・呪願・表白・願文上	
卷十三、願文下・諷誦文	

卷六に奏狀上とあつて奏狀下の見えないのは今本に誤脫の存するためであらう。以上文章二百二十九篇と詩四首より成り、時代は後一條帝の代から崇德帝に亙る約百二十年間の作品となる。又作者を見れば、卷首に三十八人の略傳を揭げてゐるが、その他合して四十餘人に及ぶ。その中、藤原敦光の四十八篇、大江匡房の四十篇、藤原明衡の三十篇、藤原敦基の十三篇、藤原實範の九篇、惟宗孝言の七篇等は多い部である。他は各々一二篇に止まつてゐる。これ等の文の種類を見れば、詩序の五十一篇、和歌序の十八篇を最とする。これに續いては辭表の類が二十八篇、辭狀の類は

十五篇、策問や對策は十二篇ある。その他道善・表白・願文の如きものは、二十七篇に及んで當時の信仰界の事情を反映してゐる。文章としては文飾に專念して內容の見るべきものは少い。即ち質にも量にも「本朝文粹」に遙かに劣るものである。【價値】「本朝文粹」に比して、質量共に遙かに劣つてゐるけれども、當時の文がこの書によつて後世に保存せられた點は最も感謝すべき點であり、本書の價値も亦、主としてこゝに存在する。その他當時の思想界、就中宗教界や信仰の傾向を知る點にも參考すべき點が少くない。これ等の研究は將來に期待すべきで、今日では何等見るべき研究はない。

【附記】撰者に擬せられてゐる季綱は、大學頭文章博士藤原實範の子で、傳は詳かでないが、三河・備前・越前等の守を經て、大學頭・右衞門權佐等に任ぜられた。

本朝智惠鑑（ほんてうちゑかゞみ）　浮世草子　五卷【作者】北條團水とされてゐるが疑はしい。【刊行】正德三年、京都江戸出雲寺。【解說】卷一に五話、卷二に六話、卷三に六話、卷四に八話、卷五に七話を收めてゐるが、內容は所謂浮世草子風のものでなく、阿部仲麿・吉備大臣・小野篁・聖德太子・菅丞相・弘法大師・傳敎大師・賴朝・信長・秀吉等々の逸事、その他諸種の奇譚を集めたもので、漢土故事の引用も尠くなく、あまり興味深いものとは言へない。寶永六年の「洛陽齊梓堂のぬし團梓和南」の序文があり、その次に「團粹子存命の時此の書を綴つて篋底に藏し、未だ梓工を許さず。今之を得て刊行せしむる者也」（原漢文）とあるが、これを直ちに信ずるは如何かと思はれる。藤井紫影博士も「本朝智惠鑑・武道張合大鑑の二書、共に團水の序文あれども、文體正月揃に酷似し、儒佛の引事いたづらに多きに徵すれば、是も東山僧白眼居士の作にあらずやと疑はる」（江戸文學研究所收「元祿時代の京阪小說家」）と言はれてゐる。（增田）

本朝長恨歌（ほんてうちやうこんか）「淺間嶽面影草紙」を見よ。

本朝通鑑（ほんてうつがん）　歷史書　正編四十卷・續編二百三十卷・前編三卷【著者】正編は林道春（羅山）の撰、續編・前編は林春齋（鵞峯）の撰に係る。【名義】朱子の「通鑑綱目」（別項）に倣つたから、かく名づけたのである。【解說】神代から後陽成天皇の慶長十五年に至るまで漢文で書いた史籍。寬文十年庚戌林春齋の序に「正保年中・先大君大猷公、萬機の暇、儒臣侍讀民部卿林道春に命じて、日本紀以來の國史を參考して、繁を刪り要を取り闕を補ひ、且つ宇多一朝を加へ、纂集して四十卷となし、本朝編年錄と號し、久世大和守源廣之に就きてこれを獻呈す。而して將に醍醐以來を輯せんとす。然れども正史の據り證すべきなく、遺書私に求め難きを以ての故に、姑く筆を閣して鈞命の再び降るを待つ。不幸にして國喪に遭ふ。加旃（しかのみならず）獻ずる所の四十卷、丁酉の災に罹る。既にして其の身も亦歿しぬ。寬文甲辰の秋に逮び、今君殿下、僕に命じて續編を修めしむ。而して先人の編する所を併せ、名を本朝通鑑と賜ふ。僕菲才に堪へず、即ち草本を取り、校勘數過魯魚を訂正し、新に訓點を加へ、續編と共に謹で之を獻上す云云」とある。文辭の巧拙、採錄の精粗は議すべきところが多い。併し「大日本史」の如く、事實を論定せず、疑はしきもの及び編者の考案に係るものは、註文としたり、一字低書したりして、妄に臆斷を加へず、且つ當時蒐集の書冊・文書の後世散逸したものが、まゝこの書に依つて存することを得たのは偉とするに足る。世に幕府が、この書を刊行しようとした時、德川光圀がこれを見、「日本始祖吳泰伯之胤也」とあるを責めて改訂を促したので、幕府はその梓行を停めたと傳へられてゐるが、幕府遺獻の本にはこの記事見えず、且つ光圀の話の根據も明かでない。恐らくは誤傳であらう。【參考】本朝通鑑考（史學雜誌）　（佐久）

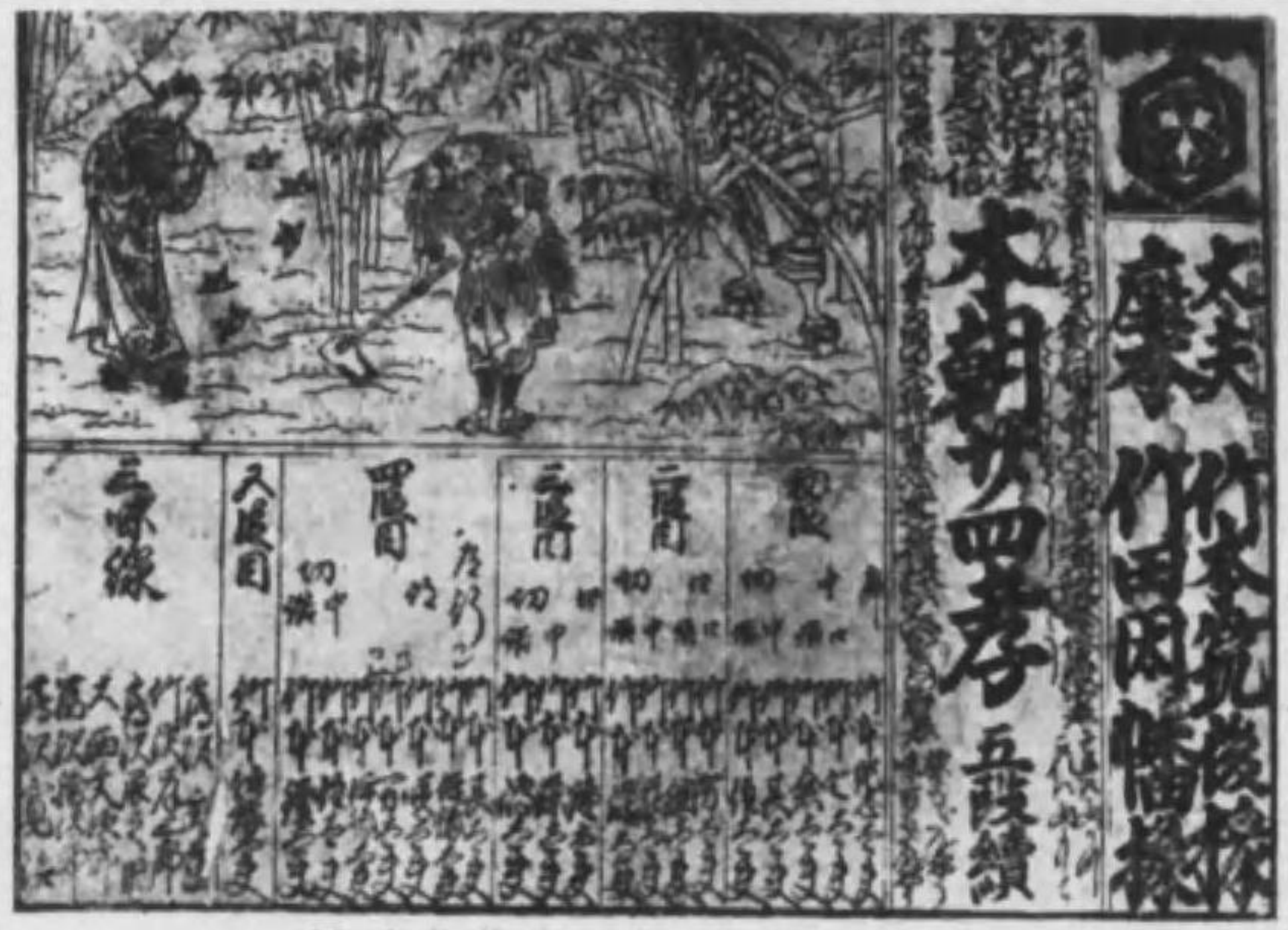
本朝藤陰比事（ほんてうとういんひじ）　浮世草子　七冊【作者】未詳【刊行】未詳【諸本】近世文藝叢書第五所收。【解說】「日本桃陰比事」と同本かといふ（日本桃陰比事未見）。西鶴の「本朝櫻陰比事」（別項）に倣つたものである。卷一第一話の首に、「倭國の樣に事を比べしより、それに似たる卷々を閲すれば、駒勝れたる事の漏たるを本意なく思ひ、古き翁の物語、松が枝の常盤にかゝる藤なみの宮、こき陰の品々を聞度ごとに、忘れもやせんとあやしき筆に書とめぬ」とあるのは眞であらう。「櫻陰比事」と同じく訴訟の上に現はれた人生の樣々を書いたものであるが、その訴訟の裁斷は、現代の法律裁判と違つて、道德上の常識批判といふべきものであるから、そこに文學の題材としては却つて興味を覺えるものがある。中には眞面目な裁判と思ひ難いものもある。例へば、井戶屋の寡婦の訴に、夫が某家の井戶に入つて仕事中、井戶に埋れて死んだのに、某家では給料も拂はないから、それに對して葬式料を出すやうに命ぜられたいといふのであるが、それを裁いて、仕事の完了しないのであるから給料は請求し難い。就いては某家は法華宗、汝は淨土宗といふから、これから每日某家の井戶に行つて念佛を申せといつた。寡婦はこの指圖に從ひ、緣類と共に每日某家に行つて念佛するので、某家では迷惑がつて八貫文出してやめさせたといふが如きこれである。又中には先行の書と材の重複したものもある。卷一「不審を肩に知る木割の木工平」は都の錦が「御前御伽婢子」（別項）卷二の第二話と、卷二の「身の上知らぬ五助が呼聲」は、同書卷二の第一話と、卷三の「隱家を知る道角が耳」は、西鶴が「本朝櫻陰比事」卷四の「大事を聞出す琵琶の音」と同材であるなど、これである。各章、首めに訴狀を揭げ、次にその裁判を記してある。この形式皆一樣である。（藤村）

本朝遯史（ほんてうとんし）　傳說　二卷二冊【著者】林靖【成立】萬治三年（自序）【刊行】寬文四年【解說】我が國上古より當時に至る迄の隱遁者の小傳を集めたもので、民黑人・藤原麻呂・猿丸・惟良春道以下、小倉居士・不食叟・宵柏・溪住まで、總て五十一人を收めてゐる。すべて漢文で記し、各々末に贊を附してゐる。「扶桑隱逸傳」（別項）、「續扶桑隱逸傳」等と同種類の書である。所收人名を擧げておく。

【卷上】民黑人・藤原麻呂・猿丸・惟良春道・大中臣淵魚・藤原關雄・藤原秀律・惟喬親王・白雲翁・嵯峨隱君子・義孝・大仲臣主・島翁翁・南山白頭翁・南山亡名隱士・清原深養父・蟬丸・藤原高光・野人若愚・藤原爲時・橘正通。【卷下】源顯基・大納言宗・藤原周光・佐藤西行・瑜璧・津田權大・武野老翁・葛城山男子・齋藤時頼・平康頼・鴨長明・佐々木高綱・下河邊行秀・北條時村・丹後國士・藤原藤房・吉田兼好・弁翁・紀俊長・紀行文・笑櫻樹者・洛市隱人・福可羌人・宵雲・瀨坂宗德・小倉居士・不食叟・宵柏・溪住。（增田）

本朝廿四孝（ほんてうにじふしかう）　淨瑠璃　五段時代物【作者】近松半二を主として、三好松洛・竹田因幡・竹田小出・竹田平七・竹本三郎兵衞の連名。【角書】武田信玄 長尾謙信【興行】明和三年正月十四日初日、竹本座【諸本】七行本・十行本。淨瑠璃名作集（帝國文庫）・淨瑠璃名作集上卷（有朋堂文庫）・淨瑠璃名作集下卷（日本名著全集）・名作淨瑠璃集下卷（近代日本文學大系）等所收。【題材】武田上杉兩家の爭ひを緯とし、上杉の息女八重垣姬と武田の一子勝賴との情事、兩家の忠臣直江山城守・山本勘助の活躍等を經として、背後に終始覆面の曲者齋藤道三を躍らせたもの。近松の「信州川中島合戰」（別項）や櫻井頼母等の「三軍桔梗原」や淺田一鳥等の「甲斐源氏櫻軍配」等の作意をも奪つてゐる。題名の廿四孝は、本曲第三段の切に王祥・孟宗・郭巨の故事を換骨奪胎してゐる故である。

【梗概】〔一段〕（室町御所）武田家の寶諏訪法性の兜を上杉家が借りて返却せぬので、兩家は不和となつてゐるが、足利將軍義晴、北の方手弱女御前のとりなしで、兩家和解のため上杉の息女八重垣姬と武田勝賴との緣組が定められる。（誓願寺）將軍義晴の愛妾賤の方が安產を祈りのために參詣、直江山城と腰元八橋との不義が村上義清に見顯されるが賤の方の情で事なきを得る。（室町御所奧殿）賤の方に戀着せる北條氏時は女を奪ひ且つ甲越兩國を離間せしめんと村上義清と共に密に策を練つてゐる。賤の方は正室手弱女御前への義理立てから偽つて直江に言ひ寄り、不義者となつて斬られようと計るが手弱女に見破られる。浪人井上新左衞門と名乗る者饅頭を獻上に來て將軍義晴を弑する。騷ぎに紛れて曲者が賤の方を奪ひ去る。將軍暗殺の嫌疑を解くため、信玄・謙信は曲者詮議に三ケ年の暇を乞ひ、失敗に終れば各々その一子勝賴・景勝の首を討たうと誓ひ、謙信は鐵砲を預つて歸る。直江山城と腰元八橋とは勘當される。〔二段〕（下諏訪明神社頭）車遣ひの蓑作が、言ひ傳へのある社前の力石に腰かけるので仲間のために仕置されようとするのを、武田の息家老板垣兵部に助けられて連れ歸られる。腰元濡衣がお百度詣りに來る。無頼漢橫藏は長尾の家來を殺すが、景勝は思ふ仔細あつてこれを宥す。橫藏の持ち上げた力石の下から異形の老人が現はれて寶を與へ、「七重八重花は咲けども」の道灌の歌を誦し、再會を約して別れる。（信玄館）三年を經ても、なほ將軍暗殺の犯人が不明なので、村上義清は勝賴の首受取に乘込む。信玄の室常磐井御前は盲目の勝賴とその愛人濡衣とを逃がさうとして村上に見破られ勝賴は自刃する。家老兵部は勝賴に生寫しの蓑作を身代りに連れて歸るが事既に遲いのを知り、憤つて蓑作を斬らうとし、却つて信玄に刺される。兵部は逆心があり、己が子と勝賴とを取替へ、眞の勝賴を蓑作として信濃に遣はしてゐたのを信玄は知つてゐたのである。勝賴の蓑作は、その儘身分を僞り、濡衣と共に法性の兜の詮議に旅立つ。〔三段〕（桔梗ケ原）武田・長尾の境目爭ひから、高坂彈正の妻唐織と越名彈正の妻入江が論爭する。筑摩の里の慈悲藏は老母への孝養のためにその子を捨てるが、通り合せに高坂と越名とは山本勘助と認めた捨兒の下げ札を見て共にこれを拾はうと爭ふ。結局兩人の妻が乳をふくませ吸うた方が拾はうと定めて高坂夫妻がこれを手に入れる（境目爭ひの段）。（勘助住家）山本勘助の二人の遺兒兄橫藏は橫道者であるが弟の慈悲藏は孝心が厚い。弟夫妻は一子を捨てて兄の子次郎吉を愛育してゐるが、次郎吉實は賤の方の腹に宿つた將軍の遺兒松壽君で、室町御所から賤の方を奪つた曲者は橫藏であり、夙に武田信玄に仕へる身であつた。慈悲藏も亦長尾家の臣直江山城で、主君景勝の身代りに橫藏を立てようとするが、橫藏は自ら片眼を刺し、容貌を變じてこれを拒み、兄弟は互に敵味方に分れる（景勝下駄の段・勘助住家の段）。〔四段〕（道行似合の女夫丸）濡衣と蓑作とは、秦賀に寄して信濃へ道行。（和田山別墅）北條氏時の別墅で下部どもが百物語をしてゐる所へ、村上義清が狐狩から歸つて來て、高坂・越名の兩彈正を殺し、橫戀慕してゐた八橋を手に入れるが、これは狐に化されて見た幻影であつた。（謙信館）謙信は、足利の後室手弱女御前と幼君とを館に招じ守護してゐるが、一子景勝の首を討たねばならぬ時となるので、花守の關兵衞に預りの鐵砲を渡して犯人を詮議せしめる（鐵砲渡し）。息女八重垣姬は十種香を焚き亡き許婚勝賴の繪像に回向し、花守關兵衞の娘で新に腰元に入つた濡衣も亦亡き夫蓑作の菩提を弔うてゐる。蓑作りとなつて入り込み、侍に取立てられた蓑作實は眞の勝賴の姿を見て、八重垣姬は濡衣に取り持ちを賴むので、諏訪法性の兜を盜み出すのを條件に濡衣はこれを承諾し、蓑作實は勝賴なる事を明かす。總てを見拔いた謙信は、蓑作を鹽尻へ使者に立て跡から討手を向ける。姬は勝賴の危急を救はんと法性の兜に祈ると、狐火が燃え靈狐の力が姬に乘り移る（十種香の段・狐火の段）。關兵衞は手弱女御前を射殺する



本朝廿四孝（初演繪番附）

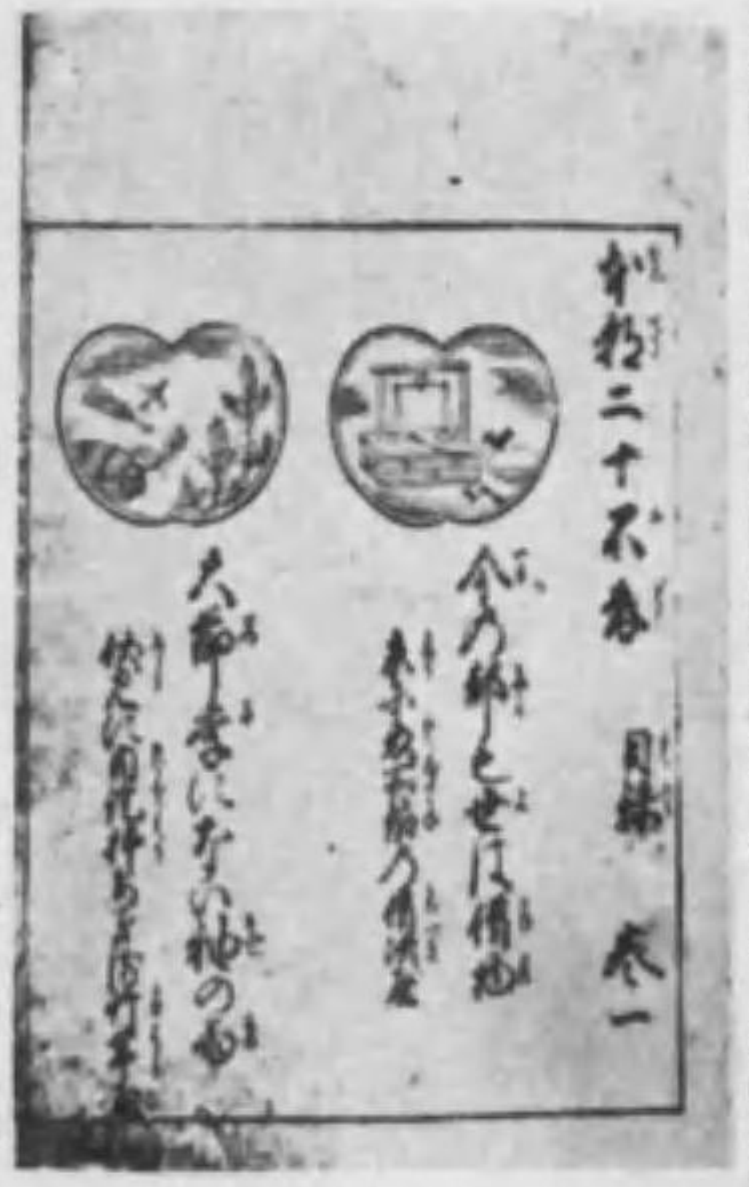
が、濡衣が身代りに立ち、景勝、勝頼・勘助に見破られ太田道灌の後裔美濃の齋藤道三と本名を明かす。將軍を弑したのも勘助に蓑を與へたのも彼であつた。遂に謙信のために白羽の矢を射られ北條の小田原城を陷いれる術策を教へて死ぬ。法性の兜は甲斐に戻り、勝頼と八重垣姫とは、結婚する事となる。〔五段〕（戰場）信玄と謙信の一騎討。兩家の確執は、北條・村上を亡ぼすための謀であると知つた勘助は兩將の闘ひを止め、生捕つた氏時・義清を引出し、景勝・勝頼・兩彈正等と共にこれを斬る。

【解説】脚色上、前述の如き先行諸作から多くを得てをり、就中近松の「信州川中島合戰」に據る所が多く、例へば武田・上杉兩家の嗣子息女の戀愛關係や、山本勘助と直江山城守との兄弟の關係など、構成上の骨格となるべき人的關係、或は勘助の母の性格・行爲などがそれである。と共に又この時期の淨瑠璃の特性たる裏に裏を設ける煩雜な脚色偏重の弊を示してをり、三ノ切・勘助住家の段はその甚だしいものである。【影響】本曲は直ちに歌舞伎にも移され、大阪では明和三年五月中座（三五郎の勝頼、鶴助の八重垣姫、大五郎の横藏、吉右衞門の慈悲藏、小六の勘助母）、江戸では安永五年六月中村座（國藏の慈悲藏、仲藏の高坂と横藏、象作の女房、三五郎の勝頼、菊之丞の八重垣姫）が各々初演であつた。今日なほ「勘助住家」と「十種香」「狐火」の段とが屢々上演され、前者では延若の横藏、後者では歌右衞門の八重垣姫がそれぞれ代表的なものである。なほ八重垣姫は「祇園祭禮信仰記」の雪姫、「鎌倉三代記」の時姫と共に三姫と呼ばれて重視されてゐる。

【參考】名著全集本解說（高木助藏）○歌舞伎細見（飯塚友一郎）○舞臺觀察手引草「横藏印象記」（杉贋阿彌）○淨瑠璃通解第三編攝州山本九馬亭○演劇往來「八重垣姫に就いて」三宅周太郎○竹の屋劇評集（明治二十七年二月歌舞伎座評）○つきぐさ觀劇偶評（明治二十五年八月吾妻座評）○歌舞伎（二一・三七・七二・一一六號。劇の記錄）○魁玉夜話（演藝叢輯・昭和八ノ一〇）○日本戲曲全集「義太夫狂言時代物集」（歌舞伎劇本）　（近藤）

本朝二十不孝　ほんてうにじふふかう　浮世草子

五册【作者】井原西鶴【名義】支那の二十四孝に對した命名である。「新因果物語」の別名ある改版本もあるといふ。【刊行】貞享三年【解説】不孝者を題材とした二十章の説話より成る。支那の「二十四孝」、淺井了意の「大倭二十四孝」（別項）の孝行説話の裏を取つて、不孝説話を集め綴らうと期したものである。若し果して「新因果物語」の別名があるならば、それは鈴木正三の「因果物語」（別項）に對して命じたものであらう。説話の關する階級は、武士・町人の二つに亙つて、特に町人が多い。又その地域をいへば、京（山城）・伏見（山城）・加賀・大阪（攝津）・近江・熊野（紀伊）・伊勢・駿河・吉野（大和）・堺（和泉）・宇都宮（下野）・鎌倉（相模）・廣島（安藝）・土佐・越前・松前・筑前・長崎（肥前）・讚岐・奈良（大和）に亙つてゐる。而してその不孝の實義は、單に親を虐待、打擲するの類に止まらず、廣く不德なる行爲をなすことをも含んでゐる。親を毒殺せんとした息子や、親を勸めて盜みをなさせた娘などの不孝はいふまでもなく、町人の業を棄てて唄の點取りなどに耽つたものも、山から淵に流れたまつた漆を人知れず取つて富を成し、また後人の取らぬやうに、龍の形を作らせて淵に沈めて置いた男も不孝者として擧げてある。すべて人の道に違ひ、親の名を汚し、家の衰癈を來すべき行爲一切を不孝としたのであるから、二十四孝の如く、説話が單調に流れないで、興味が饒かである。二十説話中、十九話をかゝる不孝の話にして、最後の一話のみを孝行の話としてあるのは、最後をめでたくして終らしめようとしたものである。　（藤村）



本朝二十不孝（目次）

本朝文鑑　ほんてうぶんかん　俳文集

九卷五册【編者】各務支考【刊行】享保三年六月上浣【成立】同二年孟秋日【由來】支考が門人蓮二房及び渡部ノ狂の名に隱れて書いた序によると、森川許六の「風俗文選」（別項）が大凡そ蕉門の作者を集めたものなるに對し、古今の文章の體を選んで百世に傳へようと企て、寶永八年（正德元年）これを蓮二・白狂（渡部ノ狂）に勸めて文を撰ぶ規格まで授けたが、未だ成らずして同年八月十六日遂に歿した。因つて遺弟蓮二・白狂の兩者が遺志を繼ぎ、蓮二が撰し白狂が註し、享保二年に萬牛の功を遂げたとある。併し編者は事實この後も生存してをり、蓮二・白狂などいふ遺弟は假空の人物で、本書の編輯評註等總て支考自身が事を運んで刊行したものである。蓮二房及び渡部狂の序、淺澁吾仲の後序を附してある。【諸本】類書本朝文鑑（俳諧叢書）・俳諧文集（俳諧文庫）所收。【解説】古來の各種の詩文中、編者の目して俳家の範とすべきものを集めたものである。その中心をなすものは蕉門並に編者の門下の俳文小品であるが、必ずしも所謂俳文と限らず、廣く我が國の文章を網めた所に、本書の他の俳文集に異なる所がある。作者約八十人、諾册二神・下照姫を初めとして、柿本人麿・山部赤人の如きから、曾呂利新左衞門・烏丸光廣の如きに至るまでの各時代に亙り、外に法然・親鸞・蓮如・一休・盤珪の如き緇衣の人もある。併しその中心をなす者は、守武・立圃・季吟・宗因・貞室・素堂等の諸俳家以下蕉門及び編者の門下で、蕉門作者は芭蕉以下其角・嵐雪・去來・丈艸、その他の人及び編者等であり、又編者の門下は、各務一門の六之・野航・右範・東羽・馬岐、その他闌如・杏仲・巴静・寂平等である。殊に編者自身は東華坊・西華坊・桃花仙・蓮二房・渡部狂・廬乙子・獅表人・樗佐渡入道・是佛坊・坊主仁平・野盤子等の變名を用ひて活動してゐるので、量に於て編者自身の作品が最も多い。全篇を歌・詩・賦・行・吟・曲・奏表・敕令・書狀・論・辨・傳・記・引・誄・辭・讃・序跋・對問・辯・說・頌・贊・銘・日記・碑文・弔文の二十七類に分つて百三十六篇を類集し、各篇毎に渡部狂の名に於て評註を加へてゐる。文には輕快洒脱のものもあるが、俳文家とは稱し難い人や俳文家としては一流

に數へ難い作者も多く、從つて文脈措辭必ずしも整調でなく、俳文集としても文集としても雜駁の批難を免れ難い。なほ卷首に、文法・句格の説明、題註・提綱を掲げてゐる。　（各務）

本朝無題詩　ほんてうむだいし　漢詩集

【編者】詳かでない。併し內容を檢討するに藤原忠通だけは法性寺入道殿下と記し他は姓名のみを掲げてゐる。これ等に據つて案ずるに藤原忠通時代の人々が或は忠通の命に應じて編輯したものとも考へられる。即ち「本朝一人一首」の記載たる「左右の者をしてこれを編輯せしむるか」の記事も首肯することが出來る。【名義】單に無題詩とも稱する。無題の詩を集めたるが故に起る。無題とは、即事・言志その他凡そ六字又は七字の題を稱する術語である。五字を題とするもの、即ち五言詩の一句（又は七言詩の一句の時もある）等を題にしたものを句題と稱し、三字若しくは四字の題を非句題と稱する（文鳳問答抄・王澤抄・作文大體參照）。林春齋の「本朝一人一首」卷六藤原忠通の條に、「此の集未だ誰人の編する所なるかを知らざるなり。蓋し其の編輯既に成りて未だ其の名を題せず。且つ撰者の名を著はさず。故にしばらく無題詩を以て之を呼ぶか」とあるが、從ひ難い。また彼の「國史館日錄」の寛文七年二月二十二日の條にも右の如き記載があり、更に附蓂詞葉と命名してゐる。この字面に關して岡田正之博士は、唐の張彥昭の「人日清暉閣宴群臣遇雪詩」の中に、「庭樹千花發、階蓂七葉新」の句がある。それによつて故意に命じたものである。階蓂は祥瑞を表はす草と稱せられてゐる。無題を支那には亡題と記したものもある。唐人は謾吟で一定の題を附し難いもの等を稱したこともあり、又は閨情や宮事の詩をこの門に入れることもある。【成立】「法性寺入道殿下」の稱呼を用ひてゐる點から推すに、その編輯は二條帝の應保二年以後である。蓋し忠通は、この年六月八日出家入道して法名を圓觀と號した。而して同帝の長寬二年（一一六四）二月十九日に歿してゐる。これ等によつて思ふに、この集は恐らく應保二年六月以降、長寬二年二月以前の約三ケ年間頃の成立と考へられる。【諸本】群書類從一二八所收本は上・中・下三册で最も流布してゐる。家藏の古寫本は無題詩と題し上・中・下三册にて、卷序は類從本と異なつてゐる。但し內容は殆ど同じである。この外、內閣文庫本・神宮文庫本・尾州德川家本等もあるが、類從本の系統に屬する。【內容】類從本に從へば、左の如く十卷・三十七門に分れてゐる（岡田博士の日本漢文學史三十六門は山調を脫してゐる）。

卷一、行幸　宴賞（附貢物殿新成）　尙齒會
卷二、天象　時節　地儀　植物
　　動物　人倫　雜物　詠風（附畫障）
卷三、花下　月前　七夕（附後朝）
卷四、春（附閏三月）　夏
卷五、秋　冬（附歲暮）　雜
卷六、水閣　池亭（附池亭雪中）　泉亭　林亭
　　亭　別業（附別莊別邸）
卷七、山家　田家　野店　舊宅
　　山村（類從本に山林とあるは山村の誤である。古寫本は山村とある）
　　野外　河邊　旅館（附旅次）
卷八、山寺上
卷九、山寺中
卷十、山寺下　雜寺　禪房　山調

作者は三十餘人中、藤原周光及び藤原忠通の作最も多く九十首以上に達し、その他藤原敦光・釋蓮禪・藤原茂明・中原廣俊・藤原明衡等の作は何れも四十首以上に及んでゐる。それ等の詩は何れも七言である。五律は僅に一首あるに過ぎない。【價値】殆ど七言の詩のみである事は時代の趨勢を示すものと見える。格調は整備してゐるが、意は餘りあつて而も氣魄に乏しい。林春齋は「本朝一人一首」卷六、藤原忠通の條に、「意到つて句到らず其れ既に衰へたり。無題詩より以後は官家に文字無し云々」と稱した。即ち公卿社會の詩として最後の花とも稱すべく、平安末期の詩集として、その時代の詩界を知るの好資料である。

【參考】本朝一人一首卷六○文筆問答抄○日本漢文學史　岡田正之　（山岸）

本朝文粹　ほんてうもんずゐ　漢文集　十四卷

【編者】藤原明衡と稱される（本朝書籍目錄）。【書名】宋の姚鉉の編輯にかゝる「唐文粹」一百卷に倣つて命名したもの。【成立】卷十一に、戶部尙書齊信の「後一條院御時女一宮御著袴製日宴和歌序」に、「三年之冬十一月廿一日云々」とある。故に長元三年（明衡四十二歲）以後の編輯にかゝる。恐らく後朱雀帝の長曆・長久・寬德頃の數年間に成立したものであらう。【諸本】從來は專ら寫本として傳來したが、江戶時代に入つて刊行せられた。（一）寬永本。寬永六年冬、野々村知求が木活字を以て刊行したもので、林道春の序と那波道圓の跋とがある。國書刊行會本には林道春の序の前に堀杏庵の序を掲げてある。而して奧に、「按ずるに一古本に附する所の訓點及び奧書は堀杏庵の自筆歟……」と記してゐる。（二）正保本。正保五年春に松永昌易が寬永本の文字の誤脫や訓點の誤謬等を諸家の本によつて校讐して重刊したものである。（三）田中本。明治十九年に田中參が校訂し、弘長本（卷一・二）・乾元本（卷十）・文和本（卷十四）・永享本（卷十二・十三）・應仁本（卷六）及び金澤文庫本（全部）・寬永本等を對校して異同を欄外に註し、且つ小杉榲邨の說を附註したものである。（四）國書刊行會本。田中本を底本としてゐる。「本朝續文粹」と合册して大正十二年に刊行せられた。（五）日本文學大系本。これも田中本を底本とし、多少の頭註を附してゐる。

【內容】嵯峨帝の弘仁年中から後一條帝の長元年中に至る十七代二百餘年間に於ける文辭を、「文選」の體裁に倣つて輯集したものである。而して四百二十七篇を左の如く、三十九類に分けてゐる。

（一）賦一五、（二）雜詩二八、（三）詔六、（四）勅書一、（五）勅答七、（六）位記二、（七）勅符三、（八）官符三、（九）意見封事三、（一〇）策問一三、（一一）對策一三、（一二）論奏二、（一三）表四三、（一四）奏狀三七、（一五）書狀一六、（一六）序一五六、（一七）詞一、（一八）行一、（一九）文一、（二〇）讃五、（二一）論一、（二二）銘九、（二三）記五、（二四）傳二、（二五）牒五、（二六）祝一、（二七）起請一、（二八）奉行文一、（二九）禁制文一、（三〇）怠狀一、（三一）落書二、（三二）祭文三、（三三）呪願二、（三四）表白一、（三五）發願文一、（三六）知識一、（三七）廻文一、（三八）願文二七、（三九）諷誦文六。

これ等は更に又綱目に分たれて「文選」の目錄と對比するに甚しく類似し、兩書の關係の密接な事を示してゐる。併し大寶令以來、學制が定まり、文章生は詩賦の考試に應じ、文章得業生は策問に對する必要があつた。又文人は常に詩賦や序を書き、願文・表狀等をも起草しなければならなかつた。されば「文選」に比して奏狀や表や序は頗る多く、願文の如きは「文選」に全くない例である。かくして「文選」や「文苑英華」や「唐文粹」以外にかくの如き本

朝の文辭を編輯したものは時代と社會の要求から必然的に生じたものである。作者としては村上帝を初め、兼明親王・具平親王・菅原道眞・都良香・三善清行・紀長谷雄等及びやゝ下つて菅原文時・大江朝綱・源順・大江以言・同匡衡等がある。即ち、宇多・醍醐帝の朝の文人と村上・冷泉乃至は、一條帝の朝の文人とをそれぞれ中心としてゐるやうに見える。その中、文辭の最も多く採錄せられたものは、大江朝綱・同匡衡の四十餘篇、菅原文時・紀長谷雄・菅原道眞・源順等の各三十餘篇、大江以言・慶滋保胤等の各二十餘篇、兼明親王・都良香・紀齊名等の各十餘篇等である。これを家に就いて見れば菅・江二氏の人々が最も多く、紀氏はこれに續ぐ。即ち菅家の人々は七人八十餘篇、江家は六人百二十篇、紀家も六人五十餘篇となる。蓋し菅・江二家は、當時文筆を司つた家である事にも關係する。これ等の作品に關しては今これを一々述べる事は困難であるが、要するに、字句の雕琢に腐心した爲めに、形式に囚はれて概ね氣魄に乏しく、文辭の風韻に乏しい憾みはある。即ち六朝の四六駢儷の文の缺陷は、又我が「本朝文粹」の文にも缺陷たるを免れない。【價値】我が中古に於ける文辭の粹たるのみならず實に本朝に於ける文辭の典範と稱するも溢美ではない。即ち各種の文體を集錄し、辭章に關しても後世文人の模範となつてゐる。殊に秀句は朗詠として當時に朗吟せられ、「和漢朗詠集」「新撰朗詠集」（各別項）にも收載せられて、後の文學に影響した事は擧げて數へられない。加ふるに當時の社會生活を知り、文學史の缺を補ひ、同時に平安時代の文章の支那との交渉より、延いて當時の讀書界の事情等を知るには缺くべからざるものである。これ等を十分に研究しなければ、國文學や和歌の世界に關しても、十分な徹底した研究は不可能と稱するも過言ではない。

【註釋書】本朝文粹註釋二冊（柿村重松著）。底本としては從來の諸本に加ふるに名古屋の眞福寺に在る弘安三年の卷子本（卷十四）、奥書なき卷十二の一軸、建保五年の册子本（卷十四）及び松井簡治博士藏の文永本等を參酌し、傍ら他の詩集・記錄・文書等に出入して宣讀を訂し異同を考へ、故事成語の意義と出典を考究して註釋を施したものである。卷末には主なる作家の傳記資料が掲げられてゐる。實に字句・故事・成語の註解としては、これに過ぎたものはない。又後世かくの如き類の書は再び現はれ難いと思ふ。實に「本朝文粹」研究の燈明となるものである。なほ小柳司氣太博士が本書の註釋を思ひ立ち、啓明會の後援により四ケ年の星霜を經て脫稿したのであるが、偶々その頃柿村氏の註釋が世に出たので刊行しなかつたが、彼此對照すれば學者を益することと少くないであらう。（山岸）

本朝文選 ほんてうもんぜん 「風俗文選」を見よ。

本朝用文章

ほんてうようぶんしやう　淨瑠璃　五段　時代物

【作者】正本に竹本義太夫・近松門左衞門連名の奥付があるが、俄に近松作とは定め難い。【興行】不明【諸本】八行五十丁本、山本九兵衞板。諸種の近松全集所收。

【梗概】（初段）（京、北畠、玄惠坊）日野資朝の家來石見守中原は相模入道と內應し、資朝の子阿新丸を玄惠法印に依賴して剃髮せしめようとする所へ、資朝の執權左衞門尉藤原が馳せつけ、資朝に鎌倉追討の勅旨あり、阿新も一方の大將たるべき身なる旨を告げたので、阿新の出家は中止となる。（市原野、石見山莊）石見は山莊に直甲二百餘騎を伏せ、茶の湯興行と作り、資朝を茶室に招き暗殺しようとするところへ、左衞門來つて陰謀を看破し、敵を追ひ散らす。【二段】（賀茂の川瀨）資朝が叡山さして落ち行く途中、黒木賣の女達に道を尋ねると、その中の二八ばかりの美しい女が道の案內をする。道行。（八瀨の里、菊の姬隱家）入相の鐘の告ぐる頃、資朝は、とある由ありげな屋敷の中に導かれ、その夜女から昔て資朝と一夜の契を交した花園の大臣の遺兒菊の姬なる事を打明けられる。折から石見が六波羅勢を引具して寄せ來り、姬達の奮戰もかひなく、資朝は捕へられる。【三段】（菊の姬道行）阿新は父が佐渡へ流罪の由を聞き、菊の姬と共に佐渡へと出で立つ。（佐渡、本間入道館）阿新・菊の姬は、郡司本間山城入道に會つて、資朝に對面させてくれと賴む。入道は姬を一目見るより横戀慕し、拒まれるや怒つて兩人を庭の石燈籠に搦めさせ、資朝を引出して首打たしめる。人が寢靜まつてから阿新は燈籠の灯で縛目を燒き切り、姬を助けて寢間に忍び入り、入道を討ち果し、吳竹に縋つて大濠を越し、折柄通りかゝつた驗者妙法坊に救を請ふ。【四段】（磯、妙法坊館）妙法坊は二人を己が館に連れ歸り、笈の內に隱し匿くを妻が怪しんで嫉妬する。そこへ本間の家の子達が阿新等の行方を占つて貰ひに來り、とゞ妻の嫉妬が禍して事が露顯し、大勢打つてかゝるが、妙法坊に追ひ散らされる。（海上）妙法坊は二人を勞はり、鳥を逃れんと小舟に乘つて沖へ漕ぎ出す。間もなく追手の大船が背後に迫るが、妙法坊の功力により現はれた惡魚惡龍のために覆へされる。【五段】（越路への道筋）左衞門が佐渡へ向ふ途中、阿新等一行と逢ひ、喜んで共に玄惠を訪れる事になる。（京、北畠、玄惠坊）玄惠は石見が近く奈良薪の能を興すと告げたので一同好機到れりと、阿新を猿樂に窶さしめ、打連れて奈良に向ふ。（東大寺南門芝居）阿新は、石見を相手に放下僧を演じ、隙を見て左衞門・妙法坊と共に一度に斬つてかゝり石見等を亡す。

【解說】「太平記」に據つて、阿新丸の事蹟を脚色したもの。趣向や文章に山本角太夫の正本「擁慶京土産」と同樣の點が多く、且つ結末は謠曲「放下僧」の飜案である。古淨瑠璃式な幼稚な敍述である。恐らく近松の作ではあるまいと思はれる。（高野〈正〉）

【參考】近松全集第三卷解題（藤井乙男）

本朝麗藻

ほんてうれいさう　漢詩集　二卷

【撰者】高階積善（江談抄卷五・本朝書籍目錄）。積善は彈正少弼・左少辨等を經て、從四位下行民部大輔となつた。生來、詩を能くし、白居易や元稹に私淑した事は本集中の文によつて知られる。【名稱】「日本國見在書目錄」の總集家中に「文林麗藻集」百卷や「文苑麗藻」十卷等の名稱が見える。即ち平安時代にかくの如き集が舶載せられてゐた。それ等に倣つて本朝の麗藻と題したものであらう。【成立】集中、一條帝の製作を御製として居る故に、帝の御在位中即ち寛弘八年六月以前の撰にかゝる。又集中に源賴定を源相公と記してゐる。相公は宰相公の略で、我が國では參議の事を稱する。然るに賴定の參議となつたのは寛弘六年三月以後である。又左金吾は賴通、右金吾は懷平である故に、これも同六年三月以後となる。なほ高積善の七言、九月盡日の文中に「今の吏部輔正」とあるが、輔正は同六年十二月歿した。故にこの文は輔正の在世時代のもので、遲くも

同六年十二月頃の作にかゝる。それ等を綜合して考へるに、本集の成立は寛弘六・七年の頃と見られる。恐らく同七年頃かと思ふ。

【諸本】類從本（群書類從一二〇）・神宮文庫本（二部）・內閣文庫本・山岸德平藏本（九條公爵家舊藏本）等は何れも下卷のみを傳へた寫本である。日本古典全集（新寫本による）所收。【內容】一條帝の正曆・寛弘頃の公卿の詩を集めたもの。前後の關係から推して春部・夏部・秋部である。冬部以下は缺けてゐる。現存する詩數は凡そ五十一首ある。下卷は山水・佛事・神祇・山莊・帝德・法令・書籍・賢人・讚德・詩・酒・贈答・餞送・懷舊・述懷の十五部に分け、凡そ百首である。上下共に詩序のみで詩の缺けたものもあるが、それ等は數へなかつた。それ等の詩の作者には一條帝を初め、中書王具平親王・儀同三司藤原伊周・同道長・同爲時・大江以言・同匡衡・源爲憲・同道濟・同俊賢及び撰者自らの詩を加へてゐる。全體としては七律が多く、詩序の長いものゝついたのもある。詩の格調は彫琢に腐心した跡は明かであるが、氣力に乏しい憾がある。今、藤爲時の「門閑无謁客」を左に掲げて見る。

家貧門閑只長籠　時无謁客事皆空
曾会去謝除長息　寶兵安賓雪不通
草含閾生秋露白　苔封扉帶夕陽紅
久忘個園途卯襲　別作路中夢遇露

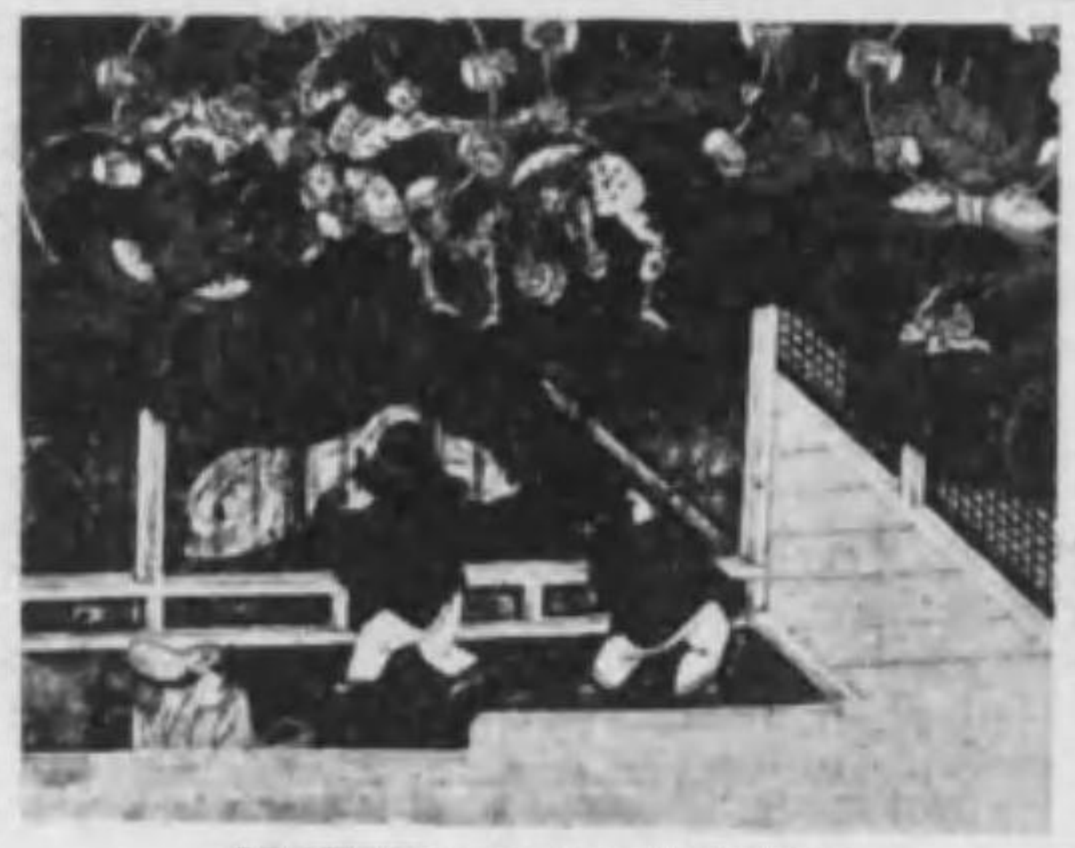
「草は閾を含み秋露を生じて白し、苔は扉を封じ夕陽を帶びて紅なり」の如き措辭は、平安初期には絕えてなかつたもので、次第に和臭を帶びた事が知られる。なほ公卿には官を記して姓名を記さない事や、支那風に倣つて江以言や藤爲時の如き三字の姓名を用ひてゐる點は「文華秀麗集」（別項）に等しい。【價値】從來は單に下卷のみで、首尾を缺いた上卷の傳來も稀であつたらしい。即ち林春齋の「本朝一人一首」卷五の高階積善の條に、「惜しい哉、其の上卷をして在らしめば云々」とも見える。本集を平安初期のものに比較すれば、詩として氣魄に乏しい感はあるが、詩史上よりするも、亦一條帝の正曆寛弘時代に於ける公卿の詩を傳へた唯一のものである點よりするも、共に重要な價値を認めなければならぬ。（山岸）

梵天國

ぼんてんこく　御伽草子（二十三篇の一）　三卷

【成立】室町季世かと柳亭種彥は「還魂紙料」に言つてゐる。【諸本】古板本は、御伽草子本。御伽草子後編（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷・御伽草子（名著文庫）等所收【題材・構想】童話、本地物、說經節。音樂特に笛の力を說くのが、「狹衣物語」（別項）を受け、又「御曹子島わたり」（別項）に連り、羅剎國の漂着は「宇津保物語」（別項）の俊蔭の影響もあるのであらう。「御曹子島わたり」とは特に似た點があり、毘沙門の本地にも似通ふ分子がある。難題說話の形式は蟻通傳說（枕の草子「社は」の條。姨捨傳說の異型で、印度の棄老國の傳說を本據としてゐる）などとほゞ同類である。

【梗概】淳和天皇の御代、五條右大臣たかふぢ、清水に申子の祈願を籠め七日に滿する晚、高僧が大臣の袖に玉を移すと夢みて、程なく一子が生れたので玉若と名づけた。二歲にして童殿上し、四位の侍從に任じて異例を開いた。七つの時から笛の天才であつたが、早く母を喪ひ、その後又父に死別したので、手向に笛を吹き澄ますと、その響遠く梵天國にまで響き、孝心に感動した王は、自ら七日目に紫雲に乘つて來て、侍從に娘を與へようと告げ、約した十八日の夜の月に、十四五許りの美しい姬が天から降つて侍從の妻となつた。帝はこれを羨んで、今は中將となつた侍從に、迦陵頻と孔雀の鳥を七日の間內裏で舞はせるか、汝の妻を七日內裏へ參らせるかとの難題を出されたのを、姬は梵天國から即時に鳥を呼び寄せて夫の困惑を救つた。鬼の娘の十郎姬を召寄せよとの再度の難問も事なく叶へられた。雷神を參らせよとの三度の難題も、姬に喚ばれた八大龍王の力で解決した。中將は中納言になつた。帝は愈々妬ましく、又々「梵天王の直の御判が見度い」と宣旨が下された。今度は容易ならぬ難事と姬も心を痛め、中納言自身で梵天國へ出向かせた。姬の教へに從つて七日精進し、愛宕山に登り乾の御道の大木の下にゐる三疋の馬のうち、痩せた蘆毛に三石三斗の豆を秣に飼つた後、これに乘つて眼を塞ぐと馬は虛空へ飛び上つた。戒められてあるのでずつと眼を塞いでゐたが、馬が身ぶるひして止まつたので、兩眼を開くと陸地に着いてゐた。其處から馬と別れて梵天王の內裏へ辿り着いたけれども、供へられた酒飯を鎖に繫がれてゐる羅剎國のはくもん王と云ふ妖魔と知らずに、乞はれる儘に一口與へた情が仇となつて、妖魔は風術を起して逃げ去り、梵天王の判を貰つて天覽に供する事が出來た代りに最愛の妻は梵天王の憂慮したやうにはくもん王に奪はれてしまつてゐた。中納言は清水に嘆き訴へ、夢想を受けて筑紫の博多へ下り唐船に便乘すると、十三日目に難破して羅剎國へ漂着した。修行者姿の中納言は吹き鳴らした例の笛のために、はくもん王の內裏に召され、今は一の后となつてゐる彼の姬は、いち早くその音を聞き知つて喜び、折柄隣國の招きに應じて出て行つた王の留守を幸ひ、二千里走る車に中將と同乘して逃げ出した。感付いた侍女の夜叉女が打鳴らす合圖の太鼓に、五百里彼方のけいしん國から三千里を翔ける車を飛ばしてはくもん王は歸つて來、怒つて後を追ひ巳に危難が迫つた瞬間、彼の迦陵頻と孔雀との二つの靈鳥が忽然と現はれて、兩車の間を離隔て、王の車を奈落の底へ蹴落した。日本五條へ着いた夫婦は、帝初め人々に驚き迎へられた中に、我が家も荒れ果ててゐるし、物憂い都に住みたくないと言つて丹後に下り、姬は成相の觀音、中納言は久世戶の文殊と現はれ、今に衆生を濟度せられるのだとの事である。



奈良繪本「ぼんてんわうし」（笹野堅氏藏）

【影響】六段本「梵天國」。說經節にも語られ、歌舞伎にも「梵天國」（「西鶴俗つれ〴〵」に見ゆ）・「梵天國寶船」（元祿十四年森田座、宮崎傳吉作）等

の作がある。

【備考】萬治頃から延寶頃に亙つて、「梵天國」といふ諺が行はれたが、それは貞享・元祿頃まで淨瑠璃の祝言には必ず「梵天國」を語る習慣であつた所から、物事の終りと云ふ意味に、いつしか「梵天國を語る」、或は單に「梵天國」といふやうになつたのであると、「認魂紙料」に見えてゐる。　（島津）

【參考】認魂紙料上卷 柳亭種彦

梵灯庵（ぼんとうあん）　連歌師【姓】朝山氏【閱歷】足利義滿に仕へ、その同朋を勤めてゐたが、齡四十の頃故あつて仕途を絕ち、江湖に放浪し、筑紫の果、吾妻の奧、又熊野那智の邊に跡を晦ましてゐたこと二十餘年、終に奧の松島に茅の庵を營み、侘なげな生活を營んでゐたが、將軍も流石に懷舊の情に堪へかねて召還した。時は應永二十四年六十九歲の時のことであつた。晚年には多少心の泉も涸れ、詞の花も色あせたとも言はれたが、兎にも角にも斯壇の重鎭であつたと「耕雲抄」に見え、三賢（良基・救濟・周阿）の跡を庵主一人殘し留めて天下の鑑と殿下啓阿が許してゐる。「身はいつの煙のために殘るらむ」の名句により、北野の末社に煙の宮として祀られてゐる。應永年中より名の聞えた連歌師として今川了俊・成阿・波多野肥後守・道助・中宮庵主等がゐたが、梵灯庵主は鷄群の一鶴であつた。【編著】梵灯庵主返答書○梵灯庵袖下集（各別項）○初心求詠集○連歌合十五番○懷詞何木百韻。　（福井）

梵灯庵主返答書（ぼんとうあんしゆへんたふしよ）　連歌書　二卷【著者】梵灯庵【成立】應永二十四年【諸本】神宮文庫本は一卷で應永三十一年の奧書がある。類從本は二卷で續群書類從連歌部に收めてゐる。【解說】著者六十九歲の時の作で、連歌の起原・沿革・付合・詞の素意・良基・救濟・周阿卽ち三賢當時の斯界の狀況及び批評、連歌の諸體、その他連歌並に和歌に關することを舉げ、自家の境遇をも述べたもので、自跋がある。　（福井）

梵灯庵袖下集（ぼんとうあんそでしたしふ）　連歌書　一卷【著者】梵灯庵【名義】初心の者が連歌するに當り、語の季及び附様などの約束なき時、備忘のために袖下に備へ置いたといふ事から附けた稱である。宗祇にも「袖下集」（別項）の著があるので、後人が梵灯庵の三字を加へたものである。【諸本】溫古堂本が續群書類從連歌部に所收。【解說】連歌を學ぶ人のために異名その他由緒ある語を順序立てずに舉げ、語義を說き、季・雜等の所屬並に他の語との結び様などを註したものである。末にある光源氏の十二文名、十二月衣名、木草の異名、鳥の異名以下は後人の附加であらう。　（福井）

本能主義（ほんのうしゆぎ）【解說】本能主義といふのは、本能が後天的な種々の繫縛を受けてゐるのに反對し、すべての本能を本來の儘に活動せしめてこそ、眞の人間の生活が出來るものであるとして個人の解放を說く一の思潮である。ルソーが唱へた「自然に還れ」といふのも、また一種の本能主義に屬するが、これを明瞭に主張したのはニイチェである。ニイチェは個人の解放を叫んで個人主義の立場を鮮明にしたのであるが、この個人を解放するといふ思想は、卽ち本能を解放するといふことになるのであつて、ニイチェは、かゝる立場から、宗敎的殊にキリスト敎的禁慾主義等が、個人の本然の生活を制約してゐることを虛僞であるとして盛んに攻擊し、性慾の解放によつて自我を滿足せしむべしといふ思想を鼓吹し、人間の獸性を重んじたのである。【日本に於ける本能主義】日本に於ける本能主義の代表者は高山樗牛であつて、明治三十四年一月雜誌「太陽」に、「文明批評家としての文學者」なる一文を揭げてから、浪漫主義の文學を高潮し、ニイチェの哲學を說き、ニイチェを紹介して、行き詰つた十九世紀文明の一大反抗者たる所以を述べ、それ以前に主唱してゐた國家主義から、一轉して個人主義者となり、遂に本能主義者となつたのである。當時日本に於ては、性慾に對して僞善的な解釋を下してゐたのであつたが、樗牛はかゝる解釋を大膽に打ち破つて本能主義に徹した生活を美的生活と稱し、言葉を極めてそれを嘆美した。「文明批評家としての文學者」を發表したのと同じ年の八月、同じ雜誌に於て發表した「美的生活を論ず」の一文は、この本能主義を說いたものである。彼の論は今日より見れば幼稚な議論と考へられるが、當時の僞善的形式に反抗して本能主義を唱へたことは、浪漫主義者としての彼の立場を光輝あらしむるものである。又自然主義作家の多くも本能主義を主張した。田山花袋・岩野泡鳴等はその代表者である。　（宮島）

本町絲屋娘（ほんまちいとやむすめ）　「心謎解色絲」を見よ。

本間久雄（ほんまひさを）　評論家【閱歷】明治十九年十月、山形縣米澤市に生れ、家は代々能樂を以て藩主上杉家に仕へたので、幼少の折には、祖父から能樂の薰陶を受け、三四度舞臺に立つたこともある。米澤中學校に在學中、坪內逍遙の「文學その折々」を讀んで、文學研究を志した。四十二年早稻田大學文學部を卒業。「早稻田文學」に幾多の研究論文を發表し、殊にオスカア・ワイルドに關するものに依りて、批評家として世の認めるところとなつた。大正二年相馬御風の推擧で、早稻田文學社に入社し、「早稻田文學」を編輯した。同七年、同誌主幹となり、兼ねて早稻田大學文學部講師となつた。その頃から、特に婦人問題に興味を持ち、エレン・ケイの說を祖述して戀愛道德を高調し、またウヰリアム・モリスに共鳴して生活美化を主張した。昭和三年早稻田大學海外研究生として英國に渡り、翌四年歸朝した。昭和六年、同大學文學部敎授となり、近代英文學・明治文學史・文學概論等を講じて今日に至つてゐる。以上の外、大正十五年から三年間、國民新聞社客員として評論を書き、昭和六年には、文部省から精神科學研究補助費を受けたこともある。その研究題目は、「本居宣長文學論研究」であつた。【著書】主なるものには、「文學概論」「文學論攷」「近代文學の研究」「現代の思潮及び文學」「婦人問題十講」「生活の藝術化」等があるが、特に「文學概論」は東西文學論の集大成として好評を博し、弘く行はれてゐる。外に翻譯としてはワイルドの「獄中記」「柘榴の家」、モリスの「吾等如何に生くべきか」及びエレン・ケイのものなど。【批評】文藝批評家としてはウォールタア・ペイタアの快樂主義の學說、本居宣長の「もののあはれ」說に私淑して鑑賞の價値を力說し、文藝をして文藝そのものたらしめようと云ふ唯美主義的藝術派の立場に立つてゐる。抱月以後の早稻田派（別項）としては片上伸・相馬御風などよりも正統早稻田派ともいふべき、傳統に忠實な所がある。　（稻田（泉））

翻譯文學（ほんやくぶんがく）【解說】外國文學の翻案若しくは題材の攝取の如き程度のものは日本文學の草創期より既に存在するが、嚴密な意味に於ける翻譯文學が、日本に於て論議せらるゝに至つたのは明治以降である。佛敎書や儒書の翻譯・解說等は、鎌倉期以降盛んに行はれたが、それは翻譯文學として取扱ふべき性質のものでない。江戶期に至つて漸く支那の小說戲曲等が翻譯若しくは翻案されて、讀本（別項）の世界を初め、各種文學に光彩を放つに至つた（支那文學の影響參照）。又この期歐洲文學の舶載につれて、所謂吉利支丹文學（別項）の一類が生れ、「伊蘇普物語」（別項）等の翻譯が行はれた。併し本項に於ては、主として明治以降の翻譯文學に就いて述べる。

【明治以降の翻譯文學】大體六期に分類され得る。明治五年から、同二十一年までを第一期。同三十三四年頃までを第二期。同四十年頃までを第三期。同四十年頃から大正二年頃までを第四期。昭和二年までを第五期。同九年の現在までを第六期とする。【第一期】いはば邦譯文學の胎生時代。殊に明治五年から同十一年までは、文學として見るべき翻譯は現はれない。文久元年六月、神田孝平の譯述した「和蘭美政錄」（「楊牙兒奇談」と「靑騎兵營に右家族長時味一件」を含む）は、譯出は最も古いが、發表は明治十年九月の「花月雜誌」である。故に明治初期の翻譯文學は、「魯敏遜全傳」（齋藤了庵、明治五年）「伊蘇普物語」（別項）（渡邊溫）、「訓蒙話草」（福澤英之助、以上同六年）、「後世夢物語」（上條信次）、「西洋孝子流別奇話」（小林謙吉、以上同七年）、「暴夜物語」（別項）（永峰秀樹、同八年）、「天路歷程」（別項）（村上俊吉、同九年）、「胸肉の奇談」（譯者不明）、「回生美談」（山田鐵正、以上同十年）の順序であり、この原著者で有名なのは、サウジイ、イソップ、バンヤン、シェークスピヤなどである。明治十一年に、織田純一郎の「花柳春話」（別項）が現はれた。文學的には價値も乏しいが、森田思軒が、「我國の小說の趨向一變せんとするや、織田氏譯するところの花柳春話その嚆矢をなせり」といつたやうに、その後の翻譯界・讀書界に、一つの方向を與へた功績はある。それから明治二十一年頃になると、他の歐米文化の輸入と共に、知識階級で、歐米文學に親しむ人々も極めて多くなり、讀書界もまた全然過去の日本文學に求められなかつた新文學の色彩に驚異して、爭つて翻譯文學を歡迎するに至つた。そのために評判になつた翻譯小說だけでも、四五十部に達した。譯文は英語を主とし、それに少數の佛獨語の原文譯があつただけで、當然原著の多數は英國物であり、大陸物ではドイツの次ぎがフランスであつた。ただこの時代の翻譯者は、いづれも專門の文學者でなく、大抵語學通の政客・實業家・新聞記者・學徒などであつたので、原作者や作物の選擇も文學本位でなく、政治物と古典物と文學物と、通俗物の雜然たる混淆であつたことは已むを得ない。【第二期】明治二十一年七月に入つて、二葉亭四迷の「あひびき」（別項）が「國民之友」に揭載され、やがて「都の花」に揭載された「めぐりあひ」（同年十月）と共に、讀者をして「初めて崇高なる文學の意義を了解し、堅實なる新らしい文學の基礎を固め、若しくは感謝して新文藝の開拓を表はすに至らしめた」「實に翻譯界の新生面を開いたばかりでなく、新らしい文藝の路を輝す光輝ともなつた」「時代の先驅者としての二葉亭の名譽は、今から三十餘年前に、ツルゲーネフを翻譯した功績だけでも、十分承認せねばなるまい」（內田魯庵）。それほどに、この翻譯の價値は劃期的のものであつた。これより先き、森田思軒は、明治二十年頃に、ジュール・ベルヌの「鐵世界」、同二十一年一月には、同じ著者の「大東號航海日記」（國民之友）等を譯出してゐる。これと共に、明治二十二年三月、小金井喜美子の「星一つ」（大和錦）から、森鷗外・三木竹二共譯の名で出たホフマンの「玉を懷いて罪あり」（讀賣新聞）あたりになつて、明治十八年、坪內逍遙の「慨世士傳」（別項）・「ハムレット」（中央學術雜誌）等と合せて、專門文壇人の翻譯期に入つたものと見るべく、また反對に、好事的な啓蒙翻譯期は幕を下した。一方、歐米詩歌の翻譯は、明治十五年四月、外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎等の「新體詩抄」（別項）等に始まり、ロングフェロー・グレー等を七五調で譯出した。「七五調を用ゐたのは、一時の便宜で、全く一個の新體の調を作爲するにある」と宣言したのから、新體詩の名が出た。しかし譯詩が正格に文壇の對象になつたのは、鷗外が明治二十二年八月、「國民之友」に、「於母影」（別項）を揭載し、レナウ、バイロン、ゲーテ、ハイネ等を典雅な色調に移植した時に始まる。その後、上田敏の「海潮音」（別項）が西詩の妙味を傳へた。【第三期】明治三十五年には、フランスのゾラが死んだ。この前後から日本に自然主義が紹介された一方、高山樗牛のニイチェの本能主義や美的生活等の提唱があり、個人主義・社會主義が交錯する時代に入つて、大陸文學の新潮が文壇批判の中心となつた。この頃は大陸もまた思想の混亂期であつた。上田敏の「かたおもひ」（モウパッサン）、蒲原有明の「哀詞」（アァルコン）、厨川白村の「寂滅」（ポー）、吉田萩州の「走馬燈」（ドーデー）、靑木鶴川の「影法師」（シャミッソー）等、何れも明治三十五・六年で、いかに歐米の作物が、廣汎に輸入されたかの一斑を見るべきである。外にゴルキー、メーテルリンク、トルストイ、ゾラ、チエホフ、ガルシンの外、歐洲自然主義・現實主義の溫床であつた佛露文學、殊にモウパッサンと、ツルゲーネフ、チエホフ等の譯出量は前後にない偉觀で、それは日本の文壇における自然主義の消長を反映する。【第四期】この初期にあつては、自然主義がまだ攻勢を保つてゐたが、一方、鷗外の精力的な努力になるイプセン、ストリンドベリー、シュニッツレル、ウォド等の紹介により、頹廢派や個人主義やの近代歐洲戲曲の譯出が、漸くその頃の文壇の關心となつて來た。明治四十三年の邦譯だけでも、ショルツ、イプセン、アンドレエーフ、ヴェンツラ、イエツ、メーテルリンク、ショウ、チエホフ、キルイツキ、スャッケン、シェークスピヤ、ゴリキー、ヴェデキント、シュニッツラー等の作家があり、譯者は鷗外・抱月・齋・薔々・靑南・春雨・哲郎・拘香・逍遙・魯庵・正雄・利彥等を網羅してゐる。そしてこの第四期頃は、世界文學の我が國への流入が、最も旺盛になつて來た時代であるが、原書は、獨・英の多數と少數の佛國語であり、歐洲文學は、まだ英語を通して重譯されてゐる傾向を免かれなかつた。【第五期】大正三年は、世界大戰の第一年である。佛・露作家の愛好と戲曲熱は、その儘に引き繼がれてゐた。否、ロシヤ文學は、一九〇五年革命以後の新時代作家群、ソログープ、カーメンスキー、ガルシン、アルチーバシェフ、ブーニンその他が一層愛好されてゐたにしても、他方、大戰に影響された我が國の文學思潮は、ロオラン、フランス、ドストエフスキー、タゴール、ショウ、トルストイ等、人道主義・自由主義の

世界的作家の譯出を貪り讀ましめた。第二に松村みね子によつて飜譯された愛蘭文學の紹介も記錄すべきであるが、最もこの期の飜譯文學界を目立たせてゐるものは、ロシヤの原語譯によるロシヤ近代文學の氾濫と、革命以後のソヴェート文學の紹介である。〔第六期〕は出版界の革命ともいふべき、昭和二年の圓本時代に始まる。新古世界文學の中で、少しでも目ぼしい作物は、目のとどく限り全面的にそこに集錄された。この無數の世界文學的圓本の企ては、その機構の中に、飜譯界の新人・舊人の大部分を總動員したと共に、古今の世界文學は、劇・詩・小說に亙つて殆ど大集成された。そしてこの期に於て、初めて飜譯的良心としての原語譯が原則となつたことは、邦譯文學の劃期的記錄といふべきである。次に大戰後の世界政治社會相の變革につれて、歐米の社會主義的文學が當然に我が讀書界にも、旺盛な迫力をもつて飜譯されたこと、また各國の文學を、その國の國語で味得し得る語學者、文壇人が多くなつた結果、その國の最新の文學新潮が、素晴らしいスピードで移植紹介される。ドイツの表現派、新即物派、勞農ロシヤ藝術、ファシズム文學、「ユリシイズ」飜譯運動の如きが、その一例である。また飜譯が單に戲曲・詩・小說に止まらず、價値のある文學理論・批評・感想等が、片つ端から飜譯されることも、明治の第二期に、森鷗外の「審美綱領」（別項）あたりが、唯一の寶典として取扱はれた過去に對照して、隔世の感そのものである。【飜譯者と飜譯された文學】明治邦譯文學の胎生期にあつて、織田純一郎・井上勤・川島忠之助・宮崎夢柳・藤田茂吉・牛山鶴堂等の譯者があるが、いづれも文學者でないし、譯文の出來映えも、啓蒙的なところを何ほども出てゐない。「明治三十年前後までの飜譯壇」は、坪内逍遙が「美文を飜譯して、泰西原著の現はれ來れるかと思はしむる譯者」は、「美文如來を森田思軒氏とし、獨文如來を森鷗外氏とし、魯文如來を長谷川四迷氏とす。輓近、内田不知庵・原抱一庵の諸氏、また大いに飜譯に力を盡くせり」といつたやうに、鷗外・四迷・思軒・逍遙（各別項）の四人を舉ぐべきであらう。次に明治・大正・昭和にわたつて飜譯界の重立つた人々と業績を略記するならば、「罪と罰」の内田魯庵（別項）、「小公子」の若松賤子（別項）、「聖人歟盜賊歟」の原抱一庵（別項）、「名曲クレーツロア」の小西增太郎、「椿姫」の長田秋濤（別項）、「イプセン社會劇」の高安月郊（別項）、「みをつくし」の上田柳村（別項）、「沙翁全集」の戸澤姑射（別項）、「巖窟王」その他の黑岩涙香（別項）、バイロン及びプラトーンの木村鷹太郎（別項）、ゾラの飯田旗郎・永井荷風（別項）、ゴオゴリその他の德富蘆花（別項）、英國詩歌の大和田建樹（別項）、モリエールの草野柴二、イプセンの千葉掬香から、「いたづら小僧日記」の佐佐木邦、「ルッソー懺悔錄」の石川戯庵等を異色地帶とし、平田禿木・戸川秋骨・馬場孤蝶・吉江喬松・前田晁・生田長江・中澤臨川・島村抱月・登張竹風・昇曙夢・豐島與志雄・米川正夫・笠井鎭夫・有島生馬・中島清・正宗白鳥・楠山正雄・森田草平・小林愛雄・瀬沼夏葉・竹友藻風・中村白葉・小宮豐隆・後藤末雄・市川又彥・山本有三・鈴木善太郎・有島武郎・北村喜八・成瀬無極・秦豐吉・新關良三・富田碎花・木村毅・岸田國士・岩崎純孝・松居松葉・内藤濯・高垣松雄その外。現時にあつては、すぐれた無名の飜譯家が少くない。森田草平等の「ユリシイズ」の譯出の如きは、最近の成功した良心的譯述だと云はれる。支那文からの飜譯家では、柴田天馬の「聊齋志異」、佐藤春夫の「平妖傳」、幸田露伴・平岡龍城・久保天隨等の「水滸傳」等がある。併し明治以來の飜譯界の功績者は、シェークスピヤの坪内逍遙を初め、森鷗外・二葉亭四迷・小山内薰等に重きを置くべきであらう。なほ海外の一作家だけを、一邦譯家が專門に譯出する新例も開かれたが、その點、坪内逍遙のシェークスピヤの全譯こそ、その冠冕たる名譽を荷ふべき事業である。昭和八年は、ジイト、コクトオ等を中心にしたフランス文學の邦譯全盛期である。【譯文と譯語】明治十二年の「共存雜誌」に、大内青巒の「譯字の說」がある。「近來我が國に流行する歐米讀書の飜譯は、何の規定もない事をよい事として、甚しきは此方吾道の學にも通ぜず、僅かに彼邦の一書を讀めば、從つてこれを飜譯し云々」、かゝる杜撰な譯書を世に流布せしめるのは、中々に容易ならぬ國の禍であるとか、譯字に關しては、十の八九まで意義の同じ熟字があつても、少しでも穩かでない個所があつたら、その字を用ひず、新熟字を作つて當るがよいとか、その頃の飜譯ぶりの痛いところを摘出し、當時の譯書の亂暴極まつた狀態を語つてゐる。邦譯の最初たる明治五年の「伊蘇普物語」は、「譯言と易解とを主旨として、原文の意に隨ひつつ、俗言俚語に書取たり」とある通り、會話が口語體、地の文が文語體なのは、當時の譯文として珍らしいものであつたが、その他の邦譯は、大抵假名交り漢文調の文語であつた。譯者の多くが、漢文の素養に深いためであつたらう。それだけ、自由な歐文脈が稀薄で、肩の張る文體であつた。ただ坪内逍遙の「該撒奇談自由太刀餘波鋭鋒」（別項）と、それを眞似た河島敬藏譯「春情浮世之夢」（別項）（明治十九年）だけは、原著がシェークスピヤの戲曲であつたからでもあるが、院本體によつた。なほ明治二十年頃までの邦譯に、四字の對語から成る角書を題名の上に加へることが流行した。例へば「（開卷驚奇）龍動奇談」とか、「一讀千歎」「一讀三嘆」、或は「（歐洲奇事）花柳春話」「（泰西情話）春窓綺話」（各別項）とかいふので、これは德川期の讀本（別項）を眞似たものであらう。二葉亭四迷の「あひびき」その他になつて、初めて逐語譯で、巧みな口語體を驅使した邦譯の典型が現はるゝに至つた。四迷は「余が飜譯の標準」でその苦心を語り、「原文の音調に重きを置いた忠實な逐語譯と根本の詩想を攫んで原文個々の特性を現はす意味譯と、何れを採るべきか。四迷はヂュコーフスキー流の後者をよいとするが、失敗を恐れて無事な逐語譯を採つてゐた」といひ、それを實飜譯法だと名づけてゐる。また森鷗外は、「即興詩人」（別項）の頃には、しちくどいまでに澁つた文章であつたが、それを今は平易な現代の言葉に替へて來たと、現代語を以て譯文の標準とする自然性を說き、また飜譯は、局部々々にも辭句の上の正しい道を踏まなければならないとて實例から解說してゐる。思軒の文體に關しては、鷗外は「思軒文の卷端に書す」で、「居士善く英書を讀む。存する所の文、飜譯多し、その採擇する所、概ねロオマンチック派の文、若くは所謂科學小說の類なりき、奇異幻怪の事を行ふに、簡煉剛勁、漢語を驅使する文をもつてす」と云つてゐる。それほど嚴正な漢文調であつた。原抱一庵も、この思軒の譯文體を襲用したが、泉鏡花の初期の作物には、思軒の文體に影響された形がある。そんな風にこの文體は、存外廣く摸倣された。いはば鷗外は雅文體、思軒は漢文體、逍遙は院本體、四迷は何れにも屬しない新口語體である。外に大衆文學としての、探偵怪奇小說の譯者黑岩涙香が、原書を一讀してから、原書と離れ、勝手に原文を取捨して、一種の自由譯を試みたのは、亂暴ではあるが一つの見解とはいへる。次に邦譯する場合の外國語の記し方に關しては、鷗外・鈴木醇庵・帝國文學記者等の間に闘はれた西班牙文學問題や山本有三の、ストリンドベリーの發音論爭があり、誤譯の指摘・暴露となると、これは過去から今日までを通じて周期的の年中行事である。嘗て「明星」の「罵錄」の無名氏（馬場孤蝶と傳ふ）が著名邦譯家の誤譯を指摘したなどは有名であるが、明治三十六年頃、山縣五十雄と原抱一庵との間に交へられたマーク・トーエン論は、抱一庵の誤譯指摘の最も深刻な論戰で、抱一庵は、これがために飜譯家としての聲價を全然葬り去られたと云はれる。〔千葉〕

本屋宗七（ほんやそうしち） 脚本作家 【本名】未詳 【閲歷】龜井戸天神の社家の子で、放蕩の結果、増山金八の門に入つて作者となり、初めは武井藤吉、後には豐島大作と云つた。大作は大作者になるといふ抱負を表はしたもので、自ら日本一を口癖にした爲めに、日本と諢名をつけられた。文化十二年中村座の顔見世に立作者となつたが、二三年後には番附から名が消えてゐる。【作品】四天王御江戸鏑（文化十二年十一月中村座。二代源氏の顔見世狂言）○年市賑安寶（同十二年十一月中村座。紙ごま治兵衞・遠山甚四郎）○比翼蝶春曾我菊（別項）（同十三年正月中村座。清元の端八・二人長兵衞）○梅柳松雙紙（同十三年三月中村座。菅諒の曾原）○時鳥貞婦噂（同十三年五月中村座。朝顏日記・御堂前の敵討）○櫻東曙菊月（別項）（同十三年九月中村座。白木屋お駒さおきん茂兵衞）。〔渥美〕【參考】傳奇作書初編

本讀（ほんよみ） 演劇 【解說】歌舞伎の狂言作者が脚本を脫稿して、始めて一座の總役者に發表するための朗讀を云ふ。昔時の芝居道には脚本の發表までに種々の傳統的格式があつて殊に顔見世狂言には先づ狂言の大綱を定むべき世界定めの式、次いで主なる役者に腳色の大要を發表する寄初或は噺初の式がある。一般に本讀の前には内讀とて、興行主・座頭その他の主なる役者に内々で脚本を讀み聞かせて、その註文によつて添削を加へる。本讀は劇場樂屋の大部屋で、座頭以下の總役者は勿論、衣裳方・大道具方・小道具方・囃子方まで立會ひ、狂言作者は筆役を從へて各々分擔の幕の正本を一種獨特の本讀と稱する朗讀法で讀む。一日の狂言を通して讀むこともあり、幾日にも及ぶこともある。脚本は役者の名で書かれてあるので、同時に役割の發表を兼ねてゐる。一幕毎に讀み了ると祝儀の手打をして筆役の狂言方は銘々に書拔を渡す。書拔の表紙に立者は俳名を記し、その外は實名（藝名）を記す。近頃の歌舞伎の本讀は、全く儀式的意義を脫却して新狂言の顔寄せと發表と書拔を渡すための集會となり、新派劇や新劇の劇團でも大概この慣例を踏襲してゐる。歐米の劇壇に於ても、稽古に入る前に、指揮者或は作者が、一座に脚本を朗讀して聞かせる集會を設けるのが通例であるが、近時、脚本が簡易に印刷されるやうになつてからは、直ちに脚本を一座に配布して、本讀を省略する場合が往々ある。〔飯塚〕

ま

舞（まひ） 「踊」を見よ。

舞（まひ） 能樂「能の型」を見よ。

毎月抄（まいげつせう） 歌論書 一册 【著者】藤原定家 【名稱】「毎月抄」といふのは後人の名づけた名稱。「定家卿消息」「和歌庭訓」ともいふ。【成立】定家が承久元年七月に衣笠内府（藤原家良）に送つた書である。【諸本】寫本としては高野辰之博士藏本は室町時代の寫本であり、奥に承久元年七月二日に或る人に返報した旨の奥書があり、藤原朝臣爲家判とある。刊本には、群書類從本と古語深祕抄本とがあるが、群書類從本には高野本にある爲家判の奥書があるが、古語深祕抄本は書名も「和歌庭訓」とあり、爲家判の奥書はなく、群書類從本にもある桑門澄然の奥書、源通秀、桑門宗堤の奥書がある。かくて高野博士本は群書類從本の原本らしいが、併し以上の三本共に本文の異同は殆どない。【内容】本書は毎月衣笠内府が、定家に歌の添削を請うたのに答へて歌を論じたもので、定家の著書の中で信ずべきものの中では最も詳密なる歌論書である。幽玄樣・事可然樣・麗樣・有心體・長高樣・見樣・面白樣・有一節樣・濃樣・鬼拉體の十體を舉げて比較的精細に說き、殊に有心體を最も尊重してゐる如き、注意すべき見解である。さうして有心體に就いては、一面には和歌の普遍的な理想として、形式・内容すべてに調和したものは有心體であるとすると共に、一方に和歌の特殊性として妖艷美を有心體の性質としたのである。この十體論と共に、詞と心との關係を述べ、心と詞とをかねたのをよき歌としてゐる。しかし定家に於ては心を通して、もしくは詞のつづけがらを通して心が現はれるのを理想とした爲めに、素樸な傾向と異なつて、技巧的な傾向となつてゐるのである。【價値】定家の歌論は日本の歌論の中で劃期的なものであるが、定家の歌論を精細に知り得る資料は「毎月抄」である意味に於て、本書の價値は高いのである。【參考】日本歌學史（佐佐木信綱）○大日本歌學史（福井久藏）〔久松〕

迷子札敍斷柱礎 「迷子札敍斷柱礎」を見よ。

舞鶴心中（まひづるしんぢゆう） 小說 【作者】近松秋江 【發表】大正四年一月、「中央公論」。【刊行】大正四年三月、「情話新集」第一編（新潮社）として刊。現代日本文學全集所收。【梗概】學生生活を終へて、大きく旅館を經營してゐる京都の家へ歸つて來た欽之助は、いつか女中のお京とよい仲になつた。併し周圍の事情から一旦お京に暇を出したが、矢張り思ひきれないので、彼女に家を持たせたが、お京は間もなく姙娠した。と、或る日、父の妾である女から匿名の密告書を見せられた。それにはお京が欽之助の目を忍んで役者と關係し、腹の子はその役者のだと書いてあつた。彼はお京にその手紙を見せた。お京はカッとなつて、ただ死ぬと言つた。彼は一方、親類の娘と結婚することになつてゐたが、その娘

はまだ初で苦勞がなく、欽之助にはそれが物足りないので、お京と手を切ることは出來なかつた。一旦深い關係になつた女と他人になつてしまはねばならぬことは、彼には何としても出來なかつた。肉體さへ滅してしまへば、戀する心と心とは永久に一緒になつてゐられるのだと彼は思つてゐたところへ、今までは妾を通していろ〳〵意見をいつてゐた父が、直接彼に向つて頭ごなしに阿呆呼ばはりをした。欽之助は辱しめられたやうに感じてムッとなつた。そしてこんな父親の側にゐるよりも一層亡くなつた母親の側に行きたいと考へて死を決心した。數日後の早曉、舞鶴の漁夫の地曳網にまだ生きてゐるとしか思へない綺麗な男女の抱き合つたまゝの死骸が引つかゝつた。

【批評】この作は、同じ作者の「住吉心中」（大正四年四月）や長田幹彦氏の「祇園夜話」（別項）などと共に、その當時の文藝界に、情話文學の流行を作る機緣となつたものである。全體の情趣は、勿論、近松などとは同日に語るべきものではなく、何處となく戀愛遊戲の感があるが、さすがに現代的空氣は漂つてゐる。「別れた妻」（別項）、その他の自叙傳的な作品よりも見劣りするものではあるが、謂ゆる情話文學の流行の魁となつたといふ點で、その名は記憶されてゐる。（宮島）

舞の草子 まひのさうし 「幸若舞」を見よ。

舞の手 まひのて 「能の型」を見よ。

舞の本 まひのほん 「幸若舞」を見よ。

舞姫 まひひめ 小說【作者】森鷗外【發表】明治二十三年一月、「國民之友」。【刊行】明治二十五年七月、「水沫集」に收め、春陽堂より刊行。鷗外全集第五卷・森鷗外集（現代日本文學全集）等所收。

【梗概】太田豐太郎は、ベルリンで二十五歲の年を迎へたが、その頃から自分の性向が政治家にも、法律家にも適しないことを悟つて來た。若い大學生の秀才として某省から留學を命ぜられて以來、官事の取調べに從ふかたはら、大學で政治學まで修めて來たのだが、ただ人の望むが儘に動く機械的人物たらんとばかり努めて、本當に自分を生かすべき勇氣を缺いてゐたことが次第に省みられた。それからは大學へ行つても法科の講義をよそにして歷史文學に心を寄せるやうになつた。或る日夕暮の散步の途上、太田は薄暗い小路の古寺の前で聲を呑みつつ泣く十六七の少女を見た。憐れな姿に思はず近づいて樣子を聞くと、父を喪つて而も葬る金さへ持つてゐなかつたので、太田は少しばかりの持合せを惠んだ。やがて下宿に禮を言ひに來たが、それ以來、ヰクトリヤ座の踊子のこのエリスと呼ぶ少女と、太田との交はだん〳〵繁くなつて行つた。それが人目にもとまり、官邊にも聞えて、太田は遂に免官になつた。丁度その頃、エリスとの仲が離れ難いものになつたので、太田はベルリンに留まつて、國許の親友で天方伯の秘書官をしてゐる相澤の世話で、某新聞の通信員の職を得ることが出來た。それからはエリスの家に寄寓し、憂きが中にもまた樂しい生活を送るうち、エリスは惡阻で舞臺を休む日が續くやうになつた。そこへ思ひがけなくも相澤からの手紙が、天方大臣に隨行してベルリンに來着したことを報じて來た。取敢へず旅館を訪れると、相澤は今こそ名譽恢復の好機だから、大に才能を示して大臣の信用を求め、且つエリスとの情緣を斷てとすゝめてやまなかつた。この親友の取りなしで、太田は大臣から用務を託され、ロシヤ行きの隨行さへ命ぜられた。しかもそこで通譯官としての役目を見事に果した爲めに十分大臣の信任を贏ち得て、上首尾でベルリンに歸つた。悅び迎へたエリスは、やがて產れる子のために着物の用意さへしてゐるところだつた。四五日經つて大臣に招かれて行くと、一緒に歸朝して日本で世に立つてはどうかといふ好意の勸告だつた。若しこの手に縋らなければ、日本に歸る途もなく、身は廣漠たる歐洲大都の人の海に葬られるばかりだと思ふと、太田はその言葉に從ふより外なかつた。併しエリスにどう言はうかと、それを思ひ惱み、我が身の無情を責めつつ太田は雪の中を彷徨した。家に辿りついてエリスの顏を見ると氣を失つてしまつた。太田が高熱で譫語を言つてゐる時、見舞に來た相澤は、凡ての事情をエリスに語り、太田が歸國の事を告げると、エリスは「我豐太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」と叫んで卒倒した。覺めてももう精神は常態でなかつた。病の癒えた太田は、エリスの生ける屍を抱いて千行の淚を濺いだが、遂に狂女を殘して大臣に從つて歸東の途に上らねばならなかつた。

【批評】歸航に搭した太田が、自ら手記した體の物語となつてゐるが、世に出ると共に稱讃の聲盛んに起り、作者はこの一篇に依つて忽ち盛名を擅にすることが出來た。これは、西洋先進國の小說作法に則つて作られた短篇小說の鼻祖であつて、當時の文壇がこの新傾向の新聲に驚異と讚歎とを强ひられた事は想像に餘りある。單に結構のみの物語ではなく、リアルな生きた人生の姿を捉へ、漢文の諧調と國文の美しさとを巧みに調和させた文體を以て描いてゐるが、殊に主人公太田の優柔な性格描寫のすぐれた成功と清新なロマンティシズムとに依つて、今日に至つてもなほその價値と生命を失つてゐない。偉大なる作家の愛すべき處女作といふ點だけでなく、明治文壇の貴重な道標といふ意味でも、永く記憶せらるべき作品である。（水木）

舞姫 まひひめ 歌集【作者】與謝野晶子【刊行】明治三十九年一月一日、如山堂書店。【解說】表紙は、紋羽二重とクロオスとのはぎ合せ、それに舞姫すがたが金の箔押になつてゐる。新派和歌集最初の洋綴本である。歌は四號活字、總振假名、一頁二首組、この活字の大きさも歌集には珍しいものであつた。中澤弘光の裝幀で、木版數度刷の挿畫「京の清水」がある。凡て三百二首の短歌を收めてゐる。本書は次に來る「春泥集」（別項）と共に、晶子の才華をその絕頂にまで達せしめた歌集である。豐麗にして自在、所謂天馬空を行くの概があつた。その作品價値に於ても、「亂れ髮」（別項）の奔逸を超えること遙かに高く、まことに朗らかに、あてやかに、ほこらしげに見えた。而してこの歌風は時代を打つこと多大で、晶子の時代といふものが、はつきり築き上げられたのは、この歌集にあると云つてもいゝ。この華かさは、みづから「萬葉集」の影響をうけたといふ「佐保姬」の時代までつづいたのである。（北原）

舞々 まひまひ 歌舞【名稱】舞を舞ふと云ふ意。【解說】元來は、曲舞々の略稱である。曲舞々を曲舞とも舞々ともいふ。曲舞々は白拍子（別項）と同源の舞で、鼓で拍子を取る事も兩者同じである。又曲舞々の徒は幸若舞をも舞

つたので、幸若舞（別項）とも同一視せられるに至つた。特に大頭流の舞を曲舞とも稱してゐる。曲舞（別項）は謠曲の中に同化せられてしまつたが、古い曲舞々は民間の大衆藝として職業者の手によつて永く存續せられ、今日でも地方の門附に舞々と稱するものが存する。そしてこの舞々は、今日も幸若舞と聯關のある曲を歌つてゐる。加賀の舞々は、幸若太夫の門流が門附となつて生業を立てたものらしく、舞々三太夫と稱して金澤の町にも舞々太夫が三人ゐたが、天明・寛政頃には既に退轉した。その後を繼いで、石川郡藤江村の舞々太夫が二人、年頭・節句等に金澤に出て曆を配つたり、舞を舞つたりして錢を乞うたが、維新後は絕えた。この類は、埼玉縣・福岡縣等の各地に明治時代までも殘存し、所によつては舞々などとも云つてゐる。【歌詞】古い曲舞々の歌は、「七十一番職人盡歌合」に、「月にはつらき小倉山その名は隱れざりけり」と云ふ歌を揭げてゐる。近代の門附の舞々に關しては、加賀の舞々の曲目は百六十番あると云ひ、大なすり・小なすり・般若・日暮し・林の舞・鷺の舞・安宅・楠正成・猩殿等の曲目を存する。安宅の如く、幸若に類似したものもあるが、何れも歌詞は甚だ滑稽野卑となつてゐる。明治十八年に埼玉縣で刊行せられた「幸若集初編」（此の書名は、舞々と幸若と同一種のものである事を示してゐる）と題する書も、この類を集めたもので、田螺・鎌倉・一の谷・安宅・楠正成（景山公の作）・猩殿（西瓜讀人の作）・景清・橋町の八曲を收めた。福岡縣の舞々は鼓を叩いて物貰ひに來たもので、これも田螺の歌などを歌ひ、歌詞に小異があるが、各地何れも共通の歌を歌つたものである。

田螺どの〳〵、翌日は春田へ參らぬか、いやで候〳〵、去年の春田に懲轢して、鷺や烏や鴉や、あつちらかい觜はかいてはかい小突き、こつちらかい觜はかいてはこん小突き、其淚が〳〵、四節土用や八專ぞ、雨さよ降ればつらく（ラブくの誤か）〳〵、その嘆樂は何ぞ〳〵、山のこそねの蛤ぞ、海の土底のかちれ礫、夏降る雪の黒燒ぞ、石の甌脇の角、是が藥なり（「幸若集」に據る、「俚謠集」福岡縣參照）。

【參考】石川郡誌○金澤市史（風俗篇）○幸若集○林文兵衛稿○俚謠集（小寺・藤田）

前句附 まへくづけ 「川柳」を見よ。

前田河廣一郎 まへだかうひろいちらう 小說家 【閱歷】明治二十一年十一月十三日、仙臺市に生れた。父は今川常吉といひ木工、母は前田河さと、儉樸な仙臺藩士の末女。生れて三日目の晩に、醉つた父のために廣瀨川に投げ込まれようとした所を、母方の祖母に救はれ、主として祖母の庇護の下に成長し、後、伯父前田河要之助（醫師）の家に引き取られた。宮城縣立第一中學校に入學したが、五年を半途で退學して十七歲の時上京、苦學生活に入つたが、十九歲の春、德冨蘆花に拾はれて渡米、皿洗ひ・菓子屋の職人・百姓・水夫、その他各種の勞働に從事しながら、半ば放浪的な生活を續けた。その間始終圖書館に入つて勉强する傍ら、紐育の文藝雜誌及び邦字新聞に短篇小說或は雜文を投じたり、日米通報の編輯に從事したりした。三十三歲の春、十三年中の米國生活を切り上げて歸朝。雜誌「中外」の編輯に從事した頃から、日本の社會狀態に不滿を感じ、批判する氣持から漸次に左翼的に傾いた。大正九年社會主義同盟の結成に加はり、同十一年十月第二次「種蒔く人」（別項）同人となつた。後、同十三年六月、日本プロレタリア文學聯盟が結成され、「種蒔く人」の後身機關誌「文藝戰線」（別項）が創刊されるや、彼は同人として活動した。その後、大正十四年十二月、日本プロレタリア文藝聯盟に加はり、同聯盟が日本プロレタリア藝術聯盟と改稱された後、昭和二年六月、指導理論の相違から脫退して勞農藝術家聯盟を結成し、同七年六月「文藝戰線」が解消するまで、同誌に立て籠つて活躍した。文壇的處女作は、「中外」誌上に發表した「三等船客」であり、次いで「解放」に「赤い馬車」を發表した頃から、漸く頭角を現はし始めたのであつたが、それ以前は、多く評論家として時代の人道主義・自由主義・享樂主義的風潮と闘つてゐた。劇作家としては、前衞座に關係して、その作の脚光を浴びたものも少くない。

【著作】（選集）現代日本文學全集新興文學集（改造社）○新興文學全集日本篇第四卷（平凡社）○日本戲曲全集第四十九卷（春陽堂）○新選名作選集○新選前田河廣一郎集○同續篇（改造社）等。（創作集）三等船客○赤い馬車○麵麭○最後に笑ふ者○快樂師の群○脅威○獸魂○セムガ等。（長篇小說）大暴風雨時代○支那等。（飜譯）ジャングル（アプトン・シンクレア原作）○ジミー・ヒギンス（同上）○オイル○ボストン（同上）○ソヴェートロシヤ風土記（ウォリアムス）等。他に戲曲及び評論・感想集がある。

【作風】特徵は何よりも精力的な點にある。それだけ局面の大きな、がつしりした組み立ての作品が多いので、屢々大陸的といふ評語を與へられる。豐かな作品構成能力もあり、描寫力も强いが、器用さは全然なく、その上古い作品技巧を克服しきれないところがある。「三等船客」以來の自然發生的なプロレタリア小說の時代から「獸魂」などの目的意識主義の時代、「太陽の黑點」などの新しいリアリズムの時代と、その後の作風と、少くとも四度位の作品基調の變遷發展を示してゐる。（片岡）

前田香雪 まへだかうせつ 小說家【本名】夏繁。後、健次郎【別號】愛閑・小梅浮舍主人・金衣山人。【生歿】天保十二年一月、江戶御徒町に生れ、大正五年十二月歿す。享年七十六。【閱歷】國學者前田夏蔭の子で、平山省齋・海保漁村等に從學し、皇朝學に通じ、古筆の鑑定にも通じた。明治八年繪入新聞に入社、翌年十一月「金之助の話」と題する小說を揭げた。これが我が國の新聞に小說を揭げた最初である。明治十六年朝野新聞の記者となり、更に自ら繪入朝野新聞を起して經營に當つたが、同紙にローマ字雜記を揭げ、官員服を用ひなどして人目を惹いた。二十二年一月「新小說」に「水と石」を揭げて以來、二三の雜誌にも寄稿したが、二十四年「新作十二番」に「梅その」の揭げられた頃から文筆生活をやめ、二十五年東京美術學校の敎授、高等工業學校等の講師となり、鑑定家としてまた書道に於ても令名があつた。世を終るまで美術界のために盡した。（高須）

前田曙山 まへだしよざん 小說家【本名】次郞【閱歷】明治四年十一月、東京日本橋馬喰町に生る。青年時代、日本英學館及び陸軍豫備校に學んだ。明治二十五年八月、「江戶櫻」を「千紫萬紅」に發表してから小說家として文壇に起ち、春陽堂編輯部員となつたことがある。內田魯庵が社會小說を書いた頃、彼も亦この方面に着眼し、「濁り水」「千枚張」「腕くらべ」等の暗黑面を暴露した作を公にしたが、藝術味に乏しいため、全く顧みられなかつた。

後、一時文壇より遠ざかりて園藝趣味に沒頭し、この方面の著述二三を出した。大正十四年頃、大衆文學の呼び聲が漸く起るや、再び筆を小說に染め、「燃ゆる渦卷」「落花の舞」等續々作品を公にし、大衆文壇の人氣ある作家の一人に數へられるに至つた。彼は幕臣の子であるため、小說には好んで幕末の材料を擇び、當時の公卿が王政復古に努力した苦心談を構想とするのが特に注目される。（高須）

前田夕暮（まへだゆふぐれ）　歌人【本名】洋三

【閲歷】明治十六年七月二十六日、神奈川縣中郡大根村南矢名に生れた。病弱と放浪の少年時代を送つて三十七年に上京、尾上柴舟の門に入つた。その主知的・無技巧的な歌風は、若山牧水（別項）の抒情的傾向と對立並稱された。同三十九年白日社を創設して、雜誌「向日葵」を發刊し、四十二年第一歌集「收穫」（別項）を公にした。四十四年雜誌「詩歌」を發刊し、一時中絶したが、雜誌「日光」（別項）の廢刊後再興して今や全紙を擧げてその唱道する新興短歌（自由律）の壇場となしてゐる。「陰影」「生くる日に」「深林」「虹」「原生林」等の歌集を經て、近く歌集「水源地帶」を出し、新興短歌の礎石を示した。また散文詩的な小品集「綠草心理」「耕れる田園」「雪と野菜」等がある。歌風は感覺的で、現代語的發想の奔放的な格調は、遂に今日の自由律に進化するに至つた。（土岐）

前田林外（まへだりんぐわい）　詩人【本名】儀作

【閲歷】元治元年三月三日、姫路市外青山に生れた。紙屋の主人たる傍ら、東京專門學校・外國語學校に學んだ。初め「明星」（別項）の同人であつたが、後、明治三十六年十一月、岩野泡鳴・相馬御風（各別項）等と純文社を興して雜誌「白百合」を創刊し、四十年四月、四十二號を以て廢刊した。その後次第に詩作に遠ざかつて、民謠の蒐集に從事した。【作品】「夏花少女」（三十八年、純文社）と「花妻」（三十九年、鹹山堂）とを擧げたい。「夏花少女」には「なつばなをとめ」十二篇、曾て「明星」紙上に異色ありと認められた「アメリカ彦造の墓」、義經を題材とした物語歌等を收め、「花妻」には、「若き尼に」の外二十篇を收めてある。

【作風】「アメリカ彦造の墓」は、定型を踏襲せず、全く自由な形式を用ひてゐるが、「なつばなをとめ」十二篇の如く、好んで八七調に力を入れた跡がある。また彼は好んで詩語に色彩の濃厚なるものを用ひたが、その用語と詩材を的確に按排することを怠かせにした爲め、表現に必然性を缺いて、完成の域に到り得なかつた。ただ彼が「白百合」の末期に近づいて民謠の研究に志し、その蒐集を始めたのは民謠興隆の先驅者として稱すべきものがある。

（白百合條參照）　（河井）

偐鍍金蓮華組上（にせめつきれんげのくみあげ）　脚本　五幕十一場【作者】竹柴其水【通稱】蓮華往生。單に蓮華往生といふ場合は、多く「法華丈助」を主役とした蓮華往生（竟世實錄全書所載）を指すが、これは特殊な蓮華往生である。

【興行】明治三十七年十一月、東京明治座。

【役割】魚賣駿洲の多吉・法華寺住職妙心實は浪人內藤新八郎（市川高升）、大久保若徒直助實は多吉の兄直助・寺男直助實は直助・松前屋二代目五郎兵衞・大藤院大僧都（市川小團次）、多吉の伯父親魚屋の正兵衞・金貸婆おくら（市川荒次郎）、浪人石垣堅藏・役僧怪典實は堅藏・寺社掛內山宗右衞門（市川九團次）、魚賣年洲の十太（市川左團次）、奧女中綾重實は松前屋の娘おかよ・多吉の妹おなを（市川女寅）、松前屋女房お園（市川升若）、仲間權平・番僧伴藏實は權平（市川小半次）、浪人片山吾六・役僧得全實は吾六（市川左升）、松前屋錢瓶おせい（市川しやち丸）。

【題材】默阿彌作「芽出柳綠翠松前」（明治十六年一月新富座上演）の內に物語られてゐる事件、卽ち旗本內藤彥左衞門のために、無實の罪に泣く松前屋五郎兵衞を、彥左衞門と一心太助が救助するといふ講釋種の脚本の後日物語で、それに堀の內妙法寺に安置されてある日蓮上人の尊像の由來と、法華丈助で知られてゐる蓮華往生を添加してゐる。

【梗概】（序幕）（鎧屋町魚屋新道）華かな魚屋口。魚屋正兵衞が惡浪人の內藤新八郎・石垣堅藏・片山吾六等に、理不盡を言ひ掛けられるので、大事な得意の御用に遲れないやうに哀願する。新八郎は親の代より遺恨ある大久保・松前屋の兩家へ出入りの魚屋、殊に一心太助の弟とあつては容赦出來ぬと打擲し、左足を負傷せしめて立ち去る。正兵衞の惣領大久保家の若黨直助と魚屋生洲の十太（多吉の兄弟分）が駈け付けて介抱し、一方浪人共を追跡する時、二男の魚屋鮫律の多吉が、復讐は後日として今日は親父の看護が肝要と留め、座頭成田屋の好意で、釣臺で醫者へ運ぶ。直助・多吉兄弟は、實父太助に死別した後、伯父の正兵衞に養育されたのだつた。頭取斉妻市兵衞が浪人は新堀端の小旗本內藤左衞門の二男で新八郎といふので漸く遺恨と復讐の原因が判然となる。奧女中の綾重（松前屋の娘おかよ）が不慮の災難の見舞を述べる。兄弟は新八郎を探索する事となる。（二幕）（鯨洲魚棚町正兵衞內）妹おなをが正兵衞を看病してゐる。直助が見舞に來、主人用で至急相模の方へ旅立つため、暇乞に來たと言ふ。そして多吉が歸宅したら手紙を渡してくれと涙を隱して立ち去る。歸宅した多吉は、兄が內藤の一味が謀叛を企て、江戸より脫出して密事を計畫してゐるので、その探索に出發した事を知り、己も時期に遲れぬやう、おなをへは三人分の孝行を、十太へは後見を頼み、別れの盃をする。（三幕）（丸子玉川の松前屋別莊）二代目松前屋夫妻は、宿下りした娘おかよの綾重と朋輩の竹川への馳走に、次女おせいの舞踊をみせる。多吉が尋ねて來て、新八郎が松前屋を殺さうと目論んでゐる事を語る。五郎兵衞は父太助に勝る仁俠を賞美する。多吉の去つた後、石垣と權平が忍び込む。五郎兵衞が當身にて悶絶せしめ、刀の鍔をはづして了ふ。そして花島村の喜太郎宅に宿泊の多吉へ、後日の證據に送り屆ける。（同手合橋庚申堂前）十二日の月。石垣・權平の兩人は浪人姿を、辻堂に隱してあつた僧形に着替へて、首領新八郎方へ逃げ歸つて報告する。新八郎は妙心といふ法華寺の住職と變身してゐるが、金貸婆おくめを川中へ蹴込んでしまふ。寺男として入り込んでゐる直助が、妙心を迎ひに來る。（四幕）（武藏花島蓮華寺門前）おくめの早桶來るが、信者が雜沓してゐるので、一時湯灌場へ置く事とする。綾重が進物の釣臺を持參して遠く江戸から加持を懇請に來る。又僞病人と變裝した十太も、役僧得全の片山吾六の前身、內藤家の用人時代を知つてゐて、巧みに病氣平癒の祈禱に事寄せ寺內に入り込む。（寺內上段の間）綾重は住職妙心へ酒井雅樂頭の忍びの使として、主人の御老母高齡にして現世に執着なく、蓮華往生致したき願望を述べる。妙心は淨財ある者のみに許可される往生、信仰厚き老人には不必要と拒絕する。綾重は小判を以て役僧怪典（石垣堅藏）と得全を籠絡し、蓮華往生の方法の說明を頼む。又綾重は自分の息災延命の祈禱を願ふので、これまで數多の婦人に夜分加持をしたが、場所は中庭の離座敷で修行するとて役僧が案內する。妙心は新八郎の正體を現はし、酒井家は遺恨ある大久保家の緣續、內藤家を松前屋事件で閉門せしめた當時の大老であるから、言葉巧みに大金を卷き上げる惡企。そして加持に事寄せ綾重を誘惑しようとする。又寺の警固で手不足のため、直助を威嚇して一味に加擔させて了ふ。直助は心中に喜ぶ。（多吉の蓮華往生）庄屋が多吉を伴ひ來り、破牢した上州無宿の赤城の祖次と披露し、蓮華往生を頼む。讀經の聲、燒香の煙、鐃太鼓の響きのうちに蓮華往生は終了し、僧顯哲が槍を持つて地下室より現はれ、下方より突上げても手答へなしと言ふので、蓮華の花瓣を開いて調査する。と多吉は、槍の穗先を先に五郎兵衞が奪ひ取つた鍔で受止めて現はれ、この陰謀を摘發するために身を以て忍び入つたと、大立廻りとなる。（元の上段の間）色情を手段に居間へ入り込んだ綾重は、遂に寺社奉行配下の捕手の亂入の騷ぎの間に、妙心を見失つてしまふが、怪典や得全は捕縛を掛けられる。（湯灌場）拔道より脫出する妙心と捕手の激しい立廻り。早桶倒れて亡者おくめが蘇生し、可笑味ある立廻り。捕手が亡者へ縄をかけ、妙心は逃亡する。（大詰）（東叡山御饗屋前）雨の中を脊負うた御厨子を頭で隱した妙心が御本坊へ志す途中、巡行の寺社掛りの內山宗右衞門と出會ひ、だんまり挑撥。（御本坊對面所）別當大慈院大僧都へ面會した妙心は、法華寺の日蓮の像、卽ち高祖大士四十二厄除の尊像で日朗上人の作と稱せらるゝもの、この度の事件で寺社掛りの封印を受けることを殘念と存じ、竊かに持參したと詐へる。そして後晴れて刑罰を受ける覺悟を示す。御門主の命を承けた大僧都は、不受不施の一派を弘め、蓮華往生を行ふ等の惡業は、その改心により消滅して助命する旨申渡す。尊像は堀の內妙法寺へ遷移する事となる。

【解說】其水得意の後日物語で、幾分趣向に墮した傾向もあるが、興行價値ある一般向きの一心太助を拵出したり、去年逝去した市川左團次が緣附の役として好評を博してゐた一心太助の伜多吉を息子の莚升に演出させたり、或は獵奇的な興味のある蓮華往生を點綴したり、その奇智機轉は座附作者の妥當な態度として注目すべき點である。無人芝居ながら莚升は、當時熱中してゐた近松研究より離れて、目先き興味本位に演出し、殊に亡父寫しの大立廻りは好評であつたといふ。

【附記】日露開戰當時のこととて、國民的意識は歌舞伎劇の臺本にまで波及し、「俺は日本人さ」といふ臺詞があるが、其處に當時の芝居道の新人竹柴其水の面影を見出す。（尾澤）

【參考】芽出柳綠翠松前（歌舞伎新報）○近世實錄全書（明治の實錄）○明治座物語　木村錦花

籬の花（まがきのはな）　洒落本　一冊【作者】桑山人（曹雅山人）【畫工】無署名【名稱】題簽には「半懷鄕の花」、內題には「娼妓籬の花」とある。妓樓の美人の義。【刊行】文化十四年【題材】戲曲「冥途の飛脚」（寶永八年）に筋を採つたのであり、後編「廓字久爲寄」の結末に至つて、これ抒梅川が三輪の寮での夢であると云ふ趣向は、作者の師たる京傳作「娼妓絹篩」（別項）の構想を襲用したのである。

【梗概】遊女梅川の部屋には、中の島屋の客八右衞門が來て居り、節句の金は萬事承知はしてゐるが、忠兵衞と云ふ色客のあるを知つて無駄な金を出すのも愚な事などと言ひ出す。梅川は金を取りたい一心でよく勸める。男藝者萬里が來て八右衞門の相手をする。その際に梅川は新造梅里の部屋へ行き、忠兵衞と逢ふ。彼は梅里の初會の客とばけて上つたのである。さて梅川は八右衞門に起請文を書いて渡す。八右衞門も安心して節句を總仕舞にすると約し、明日十五兩を持つて來てやらうと云ふ。梅川の策略が成功したのである。梅川は仲の町の引手茶屋へは行かぬと忠兵衞と約束してゐたが、八右衞門が島屋に來てゐるといつて迎へに來たので、これも忠兵衞への勤めと出かける。忠兵衞へ融通の十五兩を取る積りである。忠兵衞途中でこれを見、怒つて梅川を打擲した。八右衞門は茶屋からこれを見、忠兵衞がかゝる無法をするのも深い仲故と譏り出す。梅川思ひ切つて鬢を切つて渡した。八右衞門もこれに心解け、約束の金を出す。忠兵衞は金の工面もし、茶屋の勘定もし、公然と梅川の許へ上つた。そして梅川の鬢を切つたのは外の客のためで自分のせゐではない。梅川の色客などと言はれては迷惑だと言ひ放ち、止めるのも聞かず飛び出した。

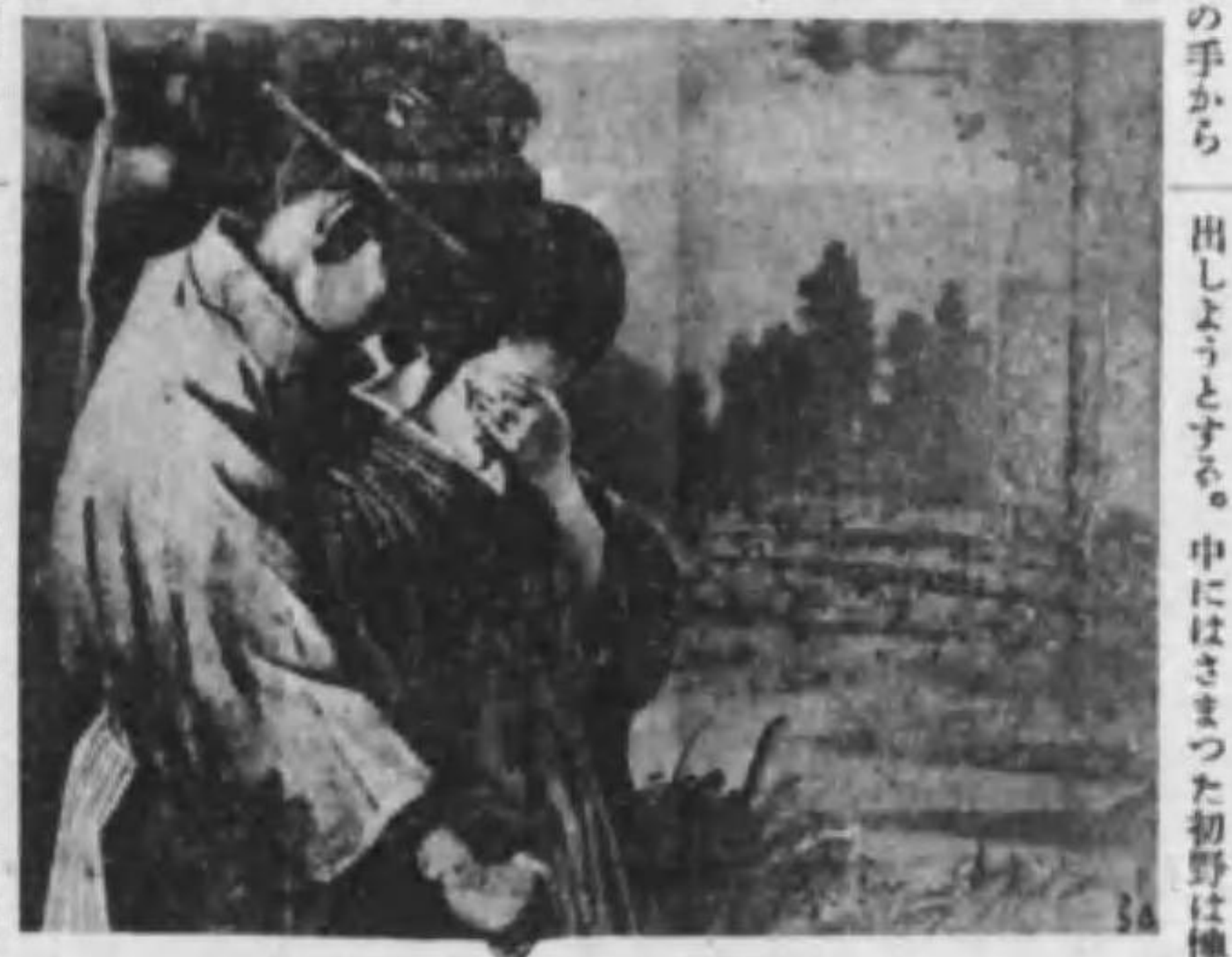
【解說】本書が桑山人の洒落本の處女作で、爾來彼の作品が續出し、人情本へ推移する橋渡しの役を勤めてゐる。この書は洒落本の型を襲用しただけで斬新な箇所もない。作者もこの點に心づいて諸所に辯解をなし、別に穿ちらしいものを書いて新味を出さんと努めた。例へば、見世を張る時彈く淸搔に種類がある事等である。本書の後編を「廓字久爲寄」（文政元年）と云ふ。それは、忠兵衞が怒りに任せて舞鶴屋舞鶴と契り、戀の三角關係が生ずる筋である。（山崎）

籬節（まがきぶし）　流行歌【名義】籬は、遊里の格子のことで、格子先で歌ふ遊里の流行歌を意味するかとも思はれるが、古くより明曆年中に、大阪新町のまがきと云ふ遊女が歌ひ始めたものと云はれてゐる。【解說】明曆に始まり、一時は島原の投節、吉原の繼節と共に三名物と稱せられたが、早く廢れて元祿寶永頃まで辛うじてその節を傳へ、正德年中に至つて絕えた。曲節は投節（別項）と半太夫節（別項）との間のものと云ふが、歌詞は一首も殘つてゐない（新町細見澪標・廓中一覽）。「好色二代男」に「かはりまがきのつれ歌」とあつて、替り歌（變替歌）も存してゐたと見える。「秋田風俗問狀答」に、三月四日傾城しらべとて、能代の遊女が住吉社境內に集り、三味線を彈いて歌ふことを記し、「まかき、とつか、きやらぶしとて三曲あり」とて、「離はすれども姿は見えぬ籠の鳥のやううらめしや」等の三首の歌をあげ、伴奏樂器に關して「まかきは小鼓三絃也」と記してゐるのは、この古い流行歌が殘存したものであらうか。（藤田）

魔風戀風（まかぜこひかぜ）　小說【作者】小杉天外【發表】明治三十六年二月より讀賣新聞へ連載、九月完結。【刊行】同三十七年、春陽堂（全三册）。明治大正文學全集所收。

【梗概】帝國女子學院の模範生といはれる萩原初野が、自轉車から落ちて片腕を痛め、大學醫院へ入つた。夏本子爵の愛嬢で、平生初野を姉の如く慕ふ芳江が絕えず見舞に來る。初野は異腹の兄が東京遊學に反對するのを押して上京した身分なので、學資も不足がち、

自然治療費にも困つたが、深切で、無邪氣で、正直な芳江が、それと察して何彼につけて心配する。初野は曾川の都合で早く退院し、下宿で療養してゐると、初野に心を寄せてゐた青年美術家殿井恭一が、物質上の補助をしようと言ひ出す。初野が聽き入れぬので初野の下宿してゐる家の主婦を說いて、その手から殿井の金を借りさせる。初野は同情には感謝したが、にやけた放蕩兒らしい樣子には好感を持たない。當時初野の心は、芳江の聟となるべき夏本東吾の男らしい姿に吸ひよせられてゐた。東吾はもう一年經つと法學士になる帝大法科の學生で、彼も許嫁の芳江を好もしくは思ひながら、一方初野の優れた才貌にも心を惹かれ、二人は人知れずロマンチックな夢に醉つてゐる。が、芳江は初野を信じ切つて、初野をも東吾をも疑はない。ただ初野・東吾の關係をほぼ知つた夏本子爵夫妻だけが、どうかして、芳江を初野から離さうとするが、芳江が聽かない。そのうち、初野のもとへ矢張り義兄と合はずに故郷から妹のお浪が逃げ出して來たので、二人で暮さねばならぬ初野の生活は、なほ苦しくなる。資產家の息子である殿井に賴めば、快く金を貸してはくれるだらうが、一度その野心を知つた初野は借りようとはせぬ。と言つて夏本子爵夫妻とは氣まづい間柄になつてゐるので、芳江にも賴めぬ。結局ある植木屋の離座敷を借りて、妹とつつましい自炊生活を送ることにした。これより先き東吾は、殿井に味方する下宿屋の主婦に邪魔されて一時初野から遠ざかつたが、初野の窮情を知つて一段と同情を深め、少からぬ金を彼女に與へる。それが動機となつて東吾と初野はいつか將來を契り合ふ仲となつた。その樣子が薄々夏本家に分つたので、養子の東吾は離緣されようとし、芳江は苦悶して家出しようとする。中にはさまつた初野は懊惱の餘り、重い脚氣になやみながらも、靈岸島から房州へ出かけようとする芳江に追ひついた刹那、心臟麻痺で死んで了ふ。駈け付けた東吾と芳江の手を握りながら。



【魔風戀風】口繪（中澤弘光畫）

【批評】當時の若い人々の興味を惹いた女學生の生活を始めて捉へた題材がまづ珍しく、それに本鄕學生街の雰圍氣を華やかに描いたので、新聞小說の劃期的な評判を集め、これがために新聞の再版なる稀有な事件さへ起つた。いかに男女學生間にもてはやされたかが想像されるであらう。作物としては興味中心に偏して、主人公初野・東吾の人物が機械的に操られ、却つてお浪及び下宿屋の主婦などの副人物の方が、如實に描かれるといふやうな結果を生じた。芳江も純化せられ過ぎて、不自然な感じがするし、東吾の心理描寫も不十分だが、部分々々と曲折した事件のいきさつでは、この人でなければ出來ない老巧さが到る處にある。なほ單行本の中澤弘光の挿繪は洋畫では最初のものであつた。〔高須〕

【附記】竹柴晉吉の脚色で、明治三十八年三月市川高麗藏・市川猿之助・片岡市藏・坂東秀調・中村芝翫等によつて東京座に上演された。

眞假名（まがな）「萬葉假名」を見よ。

末賀能比連（まがのひれ）國學書【著者】市川匡麻呂【名稱】文中には末賀能比禮とも書いてゐる。【成立・由來】宣長の「道」についての主著「直毘靈」（別項）に對する駁論書。末賀は禍であり、比連は領布で、禍心が世に萌し廣まるのを、聖人の道を領布として祓ひ清めようといふ意味である。安永年間の作。刊年不明。【內容】まづ宣長が古語に精通し、歌道に重きをなしてゐる事實を認めて公平ぶりを示し、さりながらその老莊の自然說によつて聖人の說を譏つたのは非であると序言し、「直毘靈」の所說を逐條的に反駁したもので、第一には宣長が古事尊重の基礎とした言傳への價値を否定し、文字傳への確實なのに比して言傳へには譌傳・虛妄の類が多いとし、これによつて我が上代が萬國に勝れてゐるとする國學思想の根據を覆へさうとしてゐる。かくて我が上代の古事は、「後代の天皇の御謚に令成つる僞事」であるとなし、天照大御神は要するに謎であつて、單なる言傳へのまゝに我が國のみを日の神の國とする如きは、日月星辰の普き存在たる理に背き且つ我が國を天地の外に置かんとする謬見であるとした。第二は眞淵・宣長が歷史的事實を擧げて儒道の無力を主張したのに對する反駁で、歷史的に見ても、聖人の道の行はれない世は、人獸の別のない「洪荒の世」で、我が上代もその例に洩れるものではないが、ただ小國故に甚しい缺陷を生じなかつたに過ぎない。かゝる「洪荒の世」を仰ぎ重んずるは以ての外で、漢學渡來によつて聖人の道が行はれたればこそ治績も擧り、君子國たる域にも達し得たのである。かくすることが天皇の御心であり、又幕府の治世方針でもあるとしてある。第三には儒道が人智作爲の空理であるといふ所說を駁し、聖人の道とは「人倫の教・禮樂・法制」の總稱で、つまりは「人を育て教へるの料」であり、國學者はこれを空名であるとするけれども、實際は學ぶ者の曉り易からんための設けである。又これを作爲であるとするのは老莊に誤られた謬見であるとし、日本文化史上に於ける儒教の功績を擧げ、歌道は人心を和げる德はあるが、又偏り易く頑になり易いもので、治世の料にはならないとしてゐる。【價值】聖人の道を治世上最も勝れたものとし、我が文化史上に於ける功績を數へてゐるが、その「聖人の道」の本質を十分に考察しようとはしてゐない。一體に歌學者や歌道を對象としての立論であり、また國學を老莊思想と同一視してゐるのは、眞淵の「國意考」（別項）から宣長の「直毘靈」（別項）への國學思想の發展を理解してゐない所論といはねばならぬ。

【參考】直毘靈本居宣長○松花貝上○秋長戶風　沼田賴輔　〔西尾〕

卷絹（まきぎぬ）「藝能物の謠曲」を見よ。

摩詰庵入日記（まきつあんいりにつき）俳諧紀行二冊【著者】雲鈴（吉井雲鈴とは別である）【名義】冒頭に「摩詰庵が入日記は、ことしの秋草庵を集作りて、たはぶれに申し侍る名なり」とあるから、摩詰庵に入る日記の謂であらう。略して「入日記」ともいふ。【成立・由來】著者の結庵並に北國旅行の記念としたもので、許六の跋によると、元祿十六年夏上洛した時の編に係る。芭蕉の「銀河序」の文を掲げ、これを寫し得た由來を附記して序に代へてゐる。【刊行】元祿十六年【諸本】俳諧紀行全集（俳諧文庫）所收。【解說】著者が元祿十三年佐渡に渡つた時の「北國紀行」（上卷）と、元祿十六年佐渡から歸洛した折の旅行記及び往復の旅行中、並に佐渡の草庵在住中に得た著者及び知友の發句・連句・文章等（下卷）とから成つてゐる。北國紀行は、元祿十三年正月末頃明石を立ち、姬路を經て海路但馬に上陸し、丹後・若狹・越前・加賀・越中・越後の各地に立寄り、新潟から佐渡に渡り、六月に至る紀行である。歸洛の旅行は、卯月の末佐渡を立つて出雲崎に上陸し、それから越中・加賀・越前・近江の各地に立寄り、六月京に入つたのである。この旅行中、大聖寺で支考と邂逅してゐる。贈つた文は、下卷冒頭にある著者の「示＝汎鶴＝詞」及び同卷中にある晉仲の「持＝子規＝辨」の二篇のみで、その他は發句の前書文・說明文の如きものに過ぎないが、その中にも生彩の掬すべきものがあり、又著者の作の外各地の蕉門俳人の作の見られるのが本書の價值である。【著者小傳】雲鈴は奧州南部の藩士（本庄家の俳臣といふ）、初め雲嶺、別號摩詰庵・婆且人・茶九蓮寺などと號した。致仕して其角に俳諧を問ひ、次いで支考に學び、後、許六に師事した。各地を遍歷したが、元祿の末佐渡に往來し、後、越後出雲崎に草庵を結び、享保二年二月二日こゝに殁した。

【參考】俳人雲鈴の研究　鈴木重雅（國文教育五ノ五・六）〔各務〕

莫目（まくも）樂器【解說】莫牟とも書く。古代の百濟樂及び高麗樂に於て用ひられた所の樂器で、今日は全く滅び、今はその形さへ全く不明となつてしまつた。平城天皇大同四年の太政官符には、高麗樂師及び百濟樂師の中に莫目師の名があるから、その頃迄は行はれてゐたものらしい。然るにこの名稱は我が國にのみあつて、朝鮮に於ても支那に於ても全く古書の中に見當らない。從つてこの樂器の性質を知ることが出來ない。ただ「歌舞品目」には「按ズルニ是レ管籥ノ類ナルニヤ。其形狀未詳」とあり、又「和名抄」には、これを管籥類に入れてある。これに由つて見ると縱に吹く笛であつたらしい。古樂には蠻樣などと共に縱笛を用ひてゐる實もあるから、これが莫目かも知れない。又朝鮮の古樂器の中には小管子とて小なる縱笛があり、或は又鄕觱篥とて八孔の小觱篥があるが、後者は古代の三韓の時に生じたもので、その頃には桃皮を卷いたものらしい。「まくも」といふ名は當時我が國でこれを呼んだものかも知れない。のみならず、この鄕觱篥は支那の觱篥に比して不完全なところから、平安朝になつて樂制改革後に支那觱篥を以てこれに代用することになつたので、嵯峨天皇頃から莫目の名稱が消えてしまつたのであらう。併しこの說は推測に過ぎない。〔田邊〕

枕詞（まくらことば）和歌【名稱】枕詞は歌の修辭の上で、普通五音から成る修飾的な語をそへるのをいふ。枕となる詞の意である。枕詞は發語（日本紀私記）・諷詞ともいふ。近世になり、春滿・眞淵等は冠辭といひ、士清は頭辭ともいふ。【起原】枕詞の最初は意味のある形容詞的な語であつたらしい。「常陸風土記」に風俗諺・俗・風俗說等あるが、これ等を見ると「白遠新治之國」「握飯筑波之國」など、枕詞として解されるものが多い。これは枕詞の最初が「諺」といふやうな性質を有してゐたのであらう。それが次第に直接の意味を失ひ、單純な修飾語となつたものであらう。【種類】枕詞の總數は極めて多い。「枕詞の研究と釋義」によると、その總數を約千二百語とし、「古事記」「日本紀」の時代の枕詞が凡そ百三十、「萬葉集」には約五百、「三代集」には約三百、鎌倉・室町時代に創始されたものは殆どなく、江戶時代には二百六十ほどあるとしてある。この枕詞を音數の上から見ると大部分は五音で、外に「あさひの」「あめなる」「あまだむ」の如き四音、「かぜのおとの」「きみをおきて」「このくれやみ」の如き六音、「あやめのくさの」「いつしばはらの」の如き七音の枕詞が少數ある。また性質の上から分けると、（一）音の連續による「あさぢはらつばらつばらに」「ありぎぬのありてのちにも」「さゆりばなゆりもあはむと」の如きもの。（二）觀念の上の聯想による「あしがちるなには」「かもじもの水に浮きゐて」の如きもの。（三）感情の聯想をひきおこす「あさぎりのおもひまどひて」の如きものとに分れる。

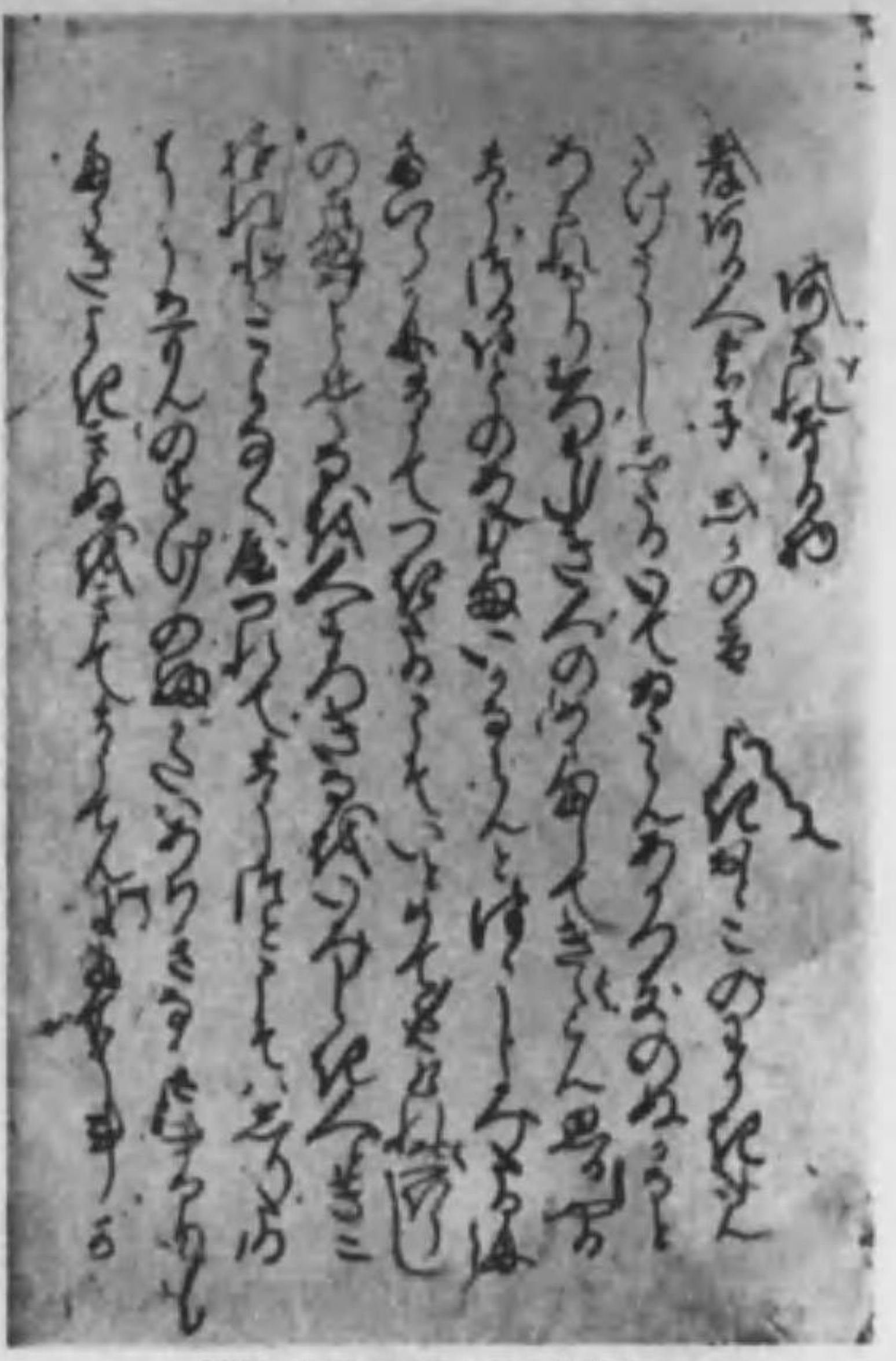
【參考】枕詞燭明抄　下河邊長流　○萬葉代匠記（枕詞部）契沖　○冠辭解　賀茂眞淵　○冠辭考　賀茂眞淵　○枕詞解　[illegible]　○枕詞の研究と釋義　福井久藏　○枕詞發生の第一頁　柴田勝二（國語國文の研究）○枕詞及序の研究　市村平（國語と國文學昭和五ノ六・七）〔久松〕

枕獅子（まくらじし）「石橋」を見よ。

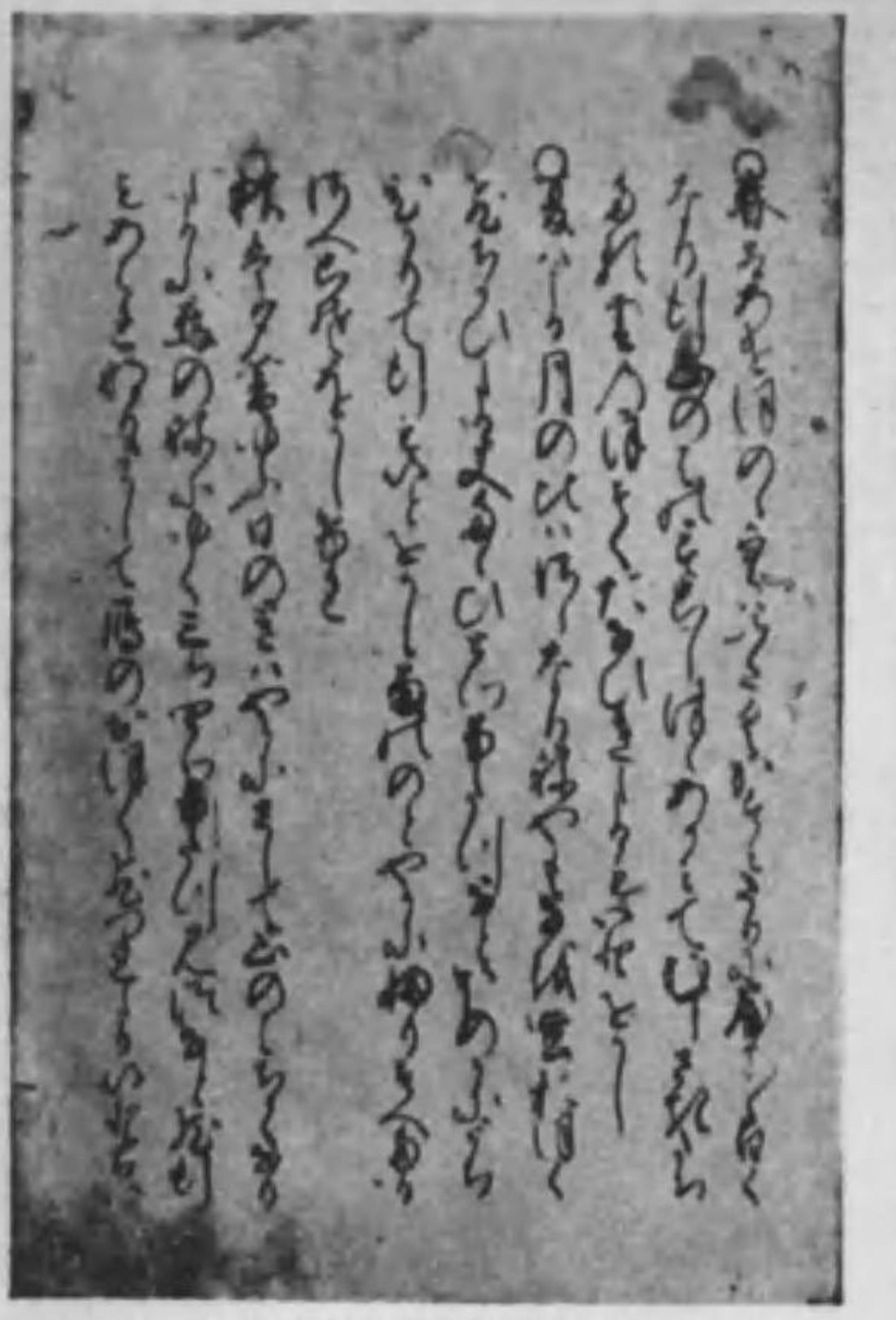
枕慈童（まくらじどう）「仙人物の謠曲」を見よ。

枕草子（まくらのさうし）隨筆【作者】清少納言【名稱】「清少納言が（の）記」ともよばれ（無名抄・八雲抄）、略して「清少納言」ともよばれた（明月記その他）。「清少納言枕草子」とあるのは、「清少納言が枕草子」、或は「清少納言の枕草子」とよむべきであらう。「枕草子」とのみよばれるのは古い慣例ではあるまい。「枕草子」は「の」の字を附してよむのが普通である。草子は草紙とも、双紙とも書かれるが、これには諸說があつて明確に斷定し難い。册子の轉化であらうとも、綴び紙の意であらうとも、草稿の意であらうとも云はれる。內容的に云へば、草稿風なもの、表向きでないものを集めたものであるが、言葉の成立から見れば册子の轉化であると見る說が一般に有力である。別に「枕雙紙」と稱する本があるが、これは跋文に「臺盤ニ座右ニ夜殿ニ枕上ニ」とあつて、惠心僧都の作である。次に所謂「清少納言枕草子」に、なぜ「枕草子」といふ名がつけられたのであるか、つけた人は誰であるか、全く不明である。古來諸說が多く傳はつてゐるが、北村季吟は「春曙抄」に於て二說をあげてゐる。その一は、この草子に先づ枕詞卽ち頭詞を書き、その下に本文を書き連ねてゐるからであるとし、その二は、この草子の跋文にある記事を引用して、枕にこそは侍らめとて申うけたる物にかゝれた草子であるからであるとしてゐる。

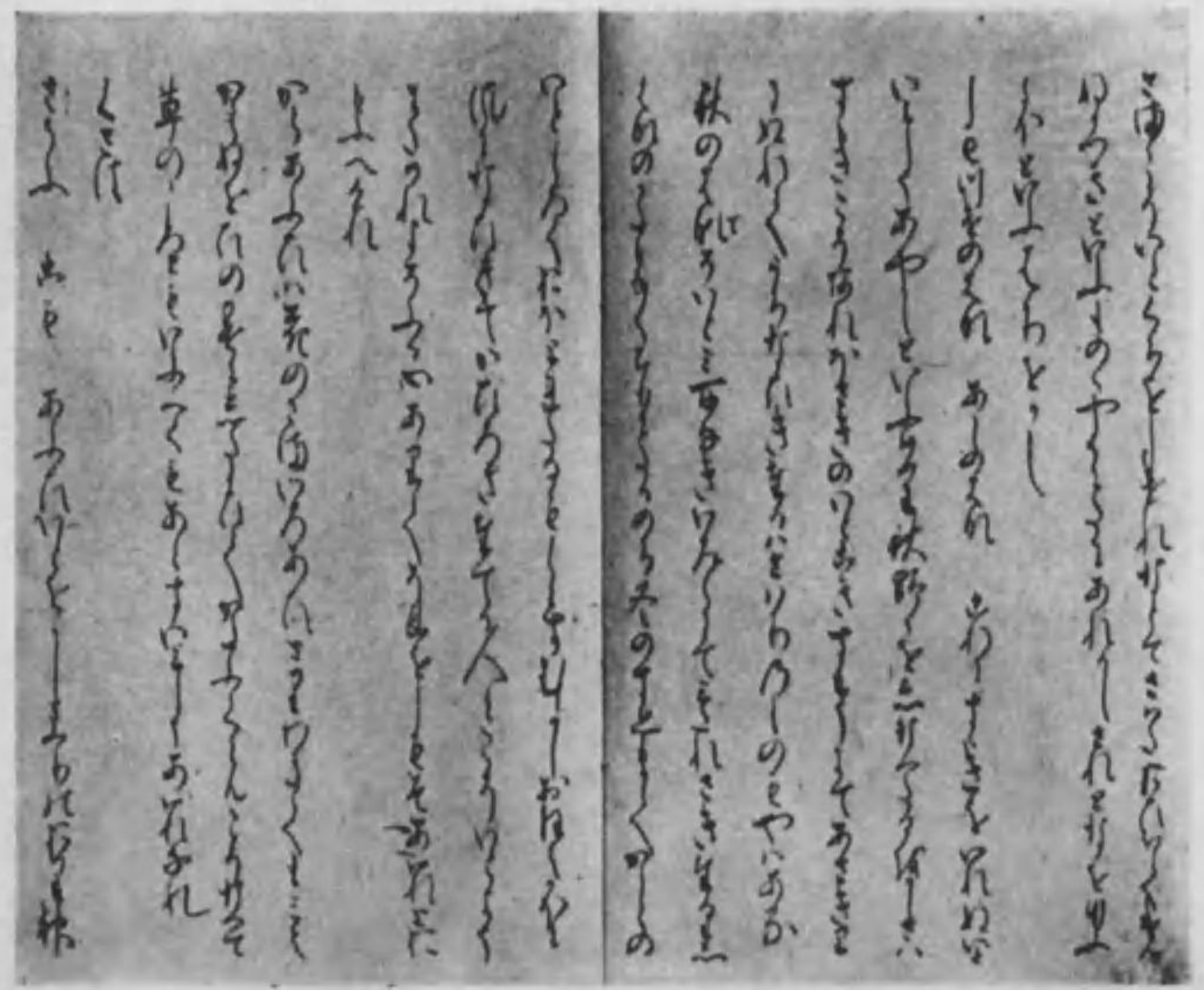
枕草子古寫本



五卷本枕草子（高野辰之氏藏）



堺本枕草子（高野辰之氏藏）



前田家本枕草子（前田侯爵家藏）

契沖も「河社」巻二に於て、「枕草子となつくるよしは、彼草子の奥にみづからかけるがごとし」と云つて、跋文に據るといふ説を肯定してゐる。しかし跋文そのものが、果して清少納言自ら記するところであるか否かは確證がないのであるから、かりに「枕草子」といふ名稱が跋文から出たものであるにしても、清少納言自ら題した名稱であるとは斷定し難い。「枕草子」といふ意味は、枕にするばかり身に近くもてあそぶといふ心であらうと契沖の説があるが、從ふべきであらう。

【成立】確證はないが、草子中に寛和二年六月と思はれる記事が見えるのが最初で、それから十五年後の長保二年八月と思はれる記事の見えるのが最後であるから、少くとも長保二年以後に完成したものと見るべきであらう。清少納言が中宮定子に仕へたのは、正暦年中であつたらしい。草子の中の記事もこの頃から多くなつて、長德・長保、わけて元年・二年の記事が多い。「三巻本枕草子」の終りに、「左中將まだ伊勢の守と聞えし時云々」とて、「枕草子」の草稿本が左中將の手で世に出された由の記事が見える。この跋は後人の追記で、遽かに信用し難いが、もし何等かの根據があつて書かれたものであるとすれば、左中將卽ち源經房が伊勢權守たりし時、卽ち長德元年同二年の頃、已に「枕草子」の一部が脫稿してゐた事になる。一體「枕草子」は、如何なる事情で執筆されたか。短日月の間に執筆されたか、或は相當長い年月の間に執筆されたか、清少納言自筆の本は現在傳はつてゐる流布本と同樣の形のものであつたか否か、さういふ問題が不明である。跋文によれば、執筆の事情がほぼ明かであるが、これも前記の如く果して少納言の記したものであるか否か不明である。吉野吉水社藏の奥書によれば、この草子は「源氏物語」（別項）に對抗して執筆されたものとなるが、この説も恐らく後人のさかしらであらう。「枕草子」の成立の年代又は事情は、精密な異本研究と詳細な作者の傳記考證とを基礎として、明かにされなければならない。そして今の所では、この兩方の研究が、大成されるまでになつてゐないのであるから、成立に關する問題については、何とも斷定を下す譯に行かない。

【諸本】異本が甚だ多い。岡西惟中の「枕草紙旁註」に、當時三種の異本が行はれてゐた事をのべてゐる。三種の異本中、第一種は三巻本、第二種は五巻本、第三種は七巻本である。三巻本は三巻（三巻或は四巻に分つ。もと二冊の本ありしにや）から成つてゐて、他の諸本よりも比較的正しい本文を傳へてゐるやうに見えるが、後世あまり行はれなかつたらしく、現在ではわづか數部（宮內省圖書寮・伊達伯爵家・故富岡謙藏氏・前田侯爵家・內閣文庫・松井簡治博士・久原文庫・京都帝國大學・岩崎文庫・鈴鹿三七氏等）の古寫本が傳へられてゐるに過ぎない。淺野侯爵家にはこの本の本文によつた繪卷が傳へられてゐる。まだ何人も實物を精査してゐる譯ではないが、勸修寺伯爵家に、致秀自筆と思はれる古傳本が藏せられてゐることは確かである。この系統の本の奥書には、「本云往事所持之荒本紛失年久、更借出一兩本、令書寫之、依無證本不散不審、但管見之所及勘合舊記等、注付時代年月等、是亦謬案歟、安貞二年三月　耄及愚翁在判」とあり、更に「文明乙未之仲夏　檜橋亞槐實相院准后本下之本末兩冊見示曰　余家藏所希也帳合亞驗禿毫復舊本不及切句此新寫讎而依守易故比校之次加朱點畢　正二位行權大納言　藤原朝臣敦秀」とあつて、奥書を有する傳本中最も古いものの一つである。この三巻本は、惟中が「少而見者赤少」といひ、季吟が「尾州より一本を得たり。上下二冊、其本紙ふるく手跡中古の筆體なりき云々」と云つてゐる。この系統の本は、當時かなり珍重され、ひそかに諸家の間に書寫された。第二の五巻本は、もと能因が所持してゐた系統の本であるらしく、三條西家の實隆か誰かに傳へられて二冊に寫され（との間の事情は明かでないが、現に三條西家に古寫本二冊を藏す）、更にそのまま細川幽齋によつて寫し傳へられた（細川侯爵家藏幽齋自筆本の奥書）。そしてこの本は、幽齋から因州藩士宮木卒庵に傳へられ、更に惟中に傳はつたものである（枕草紙旁註）。尤も幽齋自筆の本は二冊になつてゐるから、惟中がどうして五巻の本と云つたか。幽齋は三條西家の本を寫した本以外に、別に五冊の本を所持してゐて、それを卒庵に傳へたのであらうか。幽齋自筆本は、旁註本よりも、むしろ慶安の木版刊本に類似するのはどうしたことであらうか。この點は不明であるが、今は假りに、旁註本は幽齋自筆本の系統に屬すべきものと見て、當時流行の他の異本を以て校合した爲めに、かく可なりの本文の異同が生じたと考へておきたい。なほ幽齋自筆本の系統としては、十行、十二行、十三行の古活字本がある。右の中、十行本は、最も古い活字本で、傳本も少くただ內閣文庫に五冊あるのみである。次に十二行古活字本は、十行本によつて更に飜刻したもので、年代はずつと新しいものである。岩崎文庫・近衞公爵家・京都帝國大學・神宮文庫等に藏せられてゐる。十三行本は、寛永頃のものと思はれ、岩崎文庫（二部）・久原文庫・內閣文庫（二部）・京都帝國大學・帝國圖書館・廣島高等師範學校・靜嘉堂文庫等に藏せられてゐる。以上の古活字本は、五巻本の系統に屬するが、幽齋自筆本と比校して見ると多少の相違がある。幽齋本は必ずしも古活字本の親本になつたとは云へない。むしろ二つは姉妹の關係に立つと考へた方が正しいかも知れない。活字本は又旁註本に比校して見ても相互に異同が少くない。北村季吟の「春曙抄」、加藤磐齋の「枕草紙抄」等にも五巻本の影響はたしかにある。これ等の本文の亂れたのは、諸本による校合の結果であらう。次に第三の七巻本とは、「清少納言」の題簽を有する木版本のことである。この本は明かに巻數を示さないため、後世或は七冊、或は五冊、或は四冊に分けてあるが、普通七冊になつてゐる。奥に「慶安二暦初夏上旬、二條通澤田庄左衞門刊板」とある本で、惟中が「七巻之本書林風月堂開板多行于世」と云つた本である。この本は細川幽齋自筆本卽ち五巻本に最も類似した內容を有し、これと同じ系統に立つ本であるが、或る時代に傳寫の、誤謬を生じたまま傳へられて今日に及んだものと思ふ。從つて五巻本と七巻本とは、形式的な差異に重きを置いた名稱であつて、內容的には著しく異なつたものではない。以上は大同小異の異本であるが、これ等の本に對して、全然異なつた系統の本と思はれるものに、「異本枕草子」がある。この本は別に「堺本」ともよばれ、その奥に「這本以　後光嚴院宸翰不違一字令書寫功了、右清少納言枕册子原爲一册、標題無之、半面十一行書之、今分上下加題目、且文章中、雖有可疑者、以　後光嚴院宸翰、不違一字令書寫、不敢改之、如假名遣

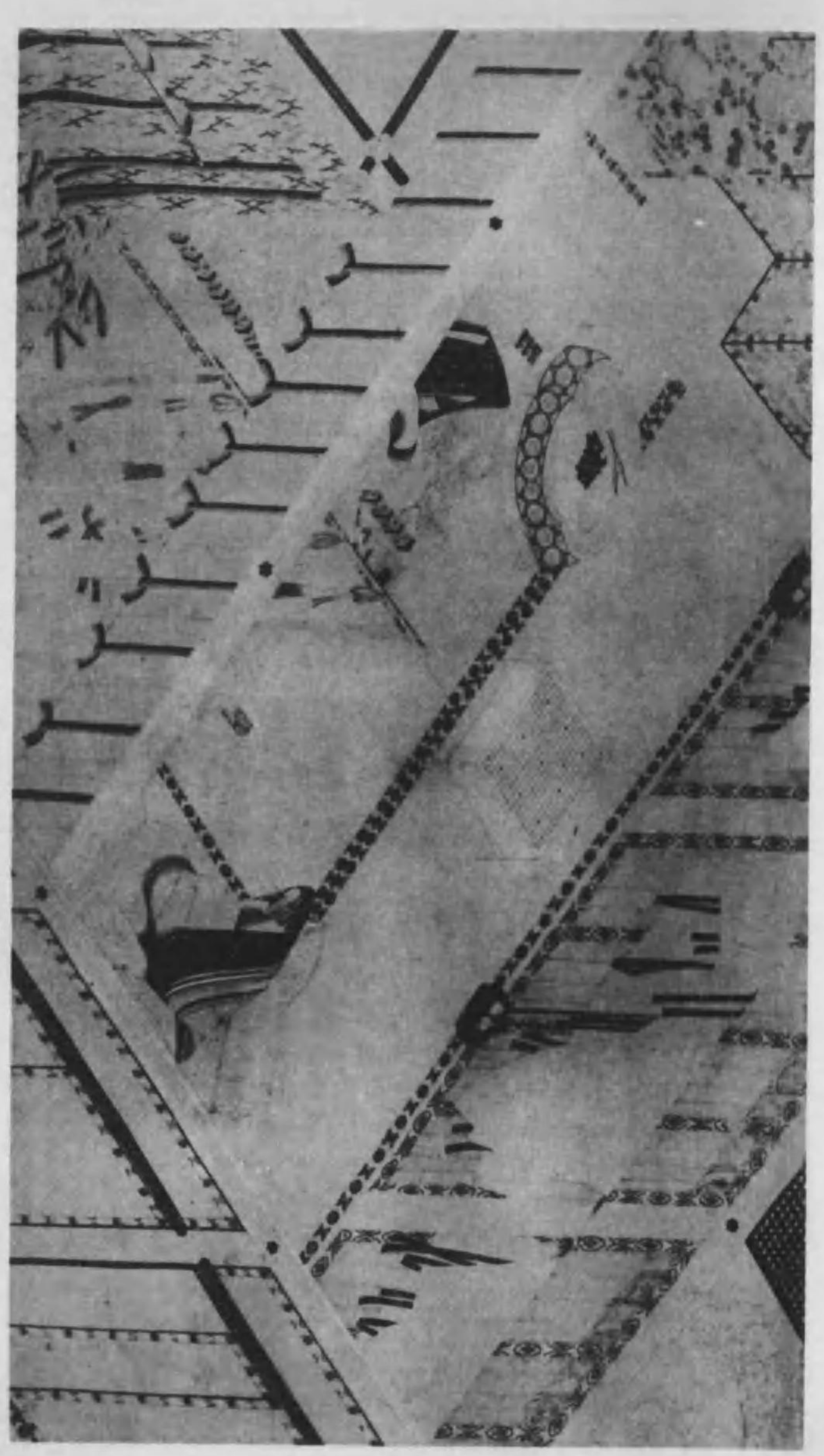
亦偏任太畢」とあつて、群書類從にをさめられてゐるが、この系統の本は、前述の諸本とは全く異なつた別の本で、字句はもとより章段の數及び順序も著しく異なつてゐる。三卷本・五卷本・七卷本の系統の諸本は、何の順序も組織もなく、雜然と章段が記述されてゐるが、この宸翰本には一つの組織がある。卽ち記事の分類が三部に分れてゐて、第一類は天地自然の現象又は事物に關するもので、第二類は人間の精神生活に關するもので、第三類は四季の情趣に關するものである。宸翰本以外の諸本にはこの組織がなく、雜然と蒐輯してある。宸翰本の系統の本で今一本珍らしい本は堺本である。堺本とは「春曙抄」及び「群書一覽」に「又一本（上下二巻）堺本とて宮內卿淸原氏の奧書あり。發端より一紙がほどはよのつねの本に大かた似て、其次、枕詞の次第など大に異なり云々」と見えてゐる本である。この本には奧書に「（前略）梟のさかゐに世をそむきたるわさしていとまあるを幸として好事の住士道巴といふ翁の心の月をすましで身のさとり明かなるか持なれたる本をしはし借もちひて書寫せしむる處也云々」とあるから、名づけられたのであらう。古く幽齋もこの本を見たし、季吟も盤齋も見てゐるけれど、古來極めて稀な本で、今でも傳本は甚だ少い。無窮會文庫・靜嘉堂文庫・高野辰之博士等の所藏本の外に、前田侯爵家に「四季物語歟之申ノ書」と題する殘缺本がある。堺本は宸翰本の系統のものであるが、宸翰本と異る所は、その章段が多いといふことである。卽ち宸翰本は、「きよけなるわらはへの云々」の段で終つてゐるが、堺本は更に「七月つごもりかたに云々」の段につづき、四季の情趣を主にして敍し、人事上のあはれなる事どもに對する感想を記し、最後に衞門佐のふかた（一本にのふたかさあり）が御緣に詣でた事について述べて卷を終つてゐる。

上述の諸本の外に、全然異つた本は、前田侯爵家藏の本である。この本は四冊から成つてゐて、育德財團から複製された。古筆家は、藤原爲氏の筆とも、民部卿局の筆とも云つてゐるが、少くとも鎌倉中葉以前の書寫である。この本は、大體堺本系統の本であるが、まゝ三卷本の要素も、古活字本の要素も、公平に含んでゐる。第一冊は自然の現象又は事物についてのべ、第二冊は人間の情意生活について記し、第三冊は折にふれて四季の情趣、人事上の興趣についてのべ、第四冊は當時淸少納言の見聞した事どもについて記してゐる。第五冊は、もと必ず有してゐたと考へられるが、今はない。これ等の分類の仕方は、たしかに原本に近いもののやうに思はれる。尤も前田家本は原本の散佚後、何人かの手によつて整理し直されたものであることは勿論である。前田家本が諸本の要素を公平に含んでゐるといふ點から推して、もしこの本が諸本を綜合整理した集成校合本であるとすれば、かかる大事業が已に鎌倉中期以前に於て成されたといふ興味ある事實が明かにされる譯であるが、それは何とも斷言する譯に行かない。

【內容】異本によつて、多少內容に增減があるが、しかし編纂の仕方又は順序に大異のあるほど內容に異同はない。（一）自然の現象に關するもの、例へば、春は、夏は、日は、雲は、ふるものは等。（二）地理・地文に關するもの、例へば、山は、森は、池は、島は等。（三）土木・家屋に關するもの、例へば、關は、橋は、みささぎは、社は、寺は等。（四）動植物に關するもの、例へば、木は、とりは、むまは、ねこは等。（五）神佛に關するもの、例へば、佛は、神は、だらには、修法は等。（六）人に關するもの、例へば、法師は、をんなは、大夫は等。（七）趣味・娛樂に關するもの、例へば、ひくものは、歌は、ものがたりは、あそびは等。（八）裝束に關するもの、例へば、そくたいは、狩衣は、夏のうはぎは等。（九）日用品又は調度に關するもの、例へば、ひあふぎは、おりものは、すゞりのはこは、たゝみは等。以上は第一類に屬するもので、主として天然自然の現象又は客觀的に見られた事物に關するものである。次に（一〇）めでたきもの、あはれなるもの等は、主觀的な精神內容に關するもので、第二類に屬す。次に（一一）正月一日は、五六月のゆふつかた等は、四季の情趣に關するもので第三類に屬す。次に（一二）男はおやなくなりて云々。若くてよき男の云々等の記事は、自然又は人生の面白味についてのべた感想又は隨筆であつて第四類に屬す。最後に（一三）小白河といふ所は云々、しげいしや東宮にまゐりたまふ云々等の記事は、著者が、當時自ら見聞した事どもに對する日記・紀行・感想であつて第五類に屬す。枕草子の內容は、上述の如くこれを五類に分けることが出來る。前田侯爵家本は、この分類のまゝに冊を立ててあつて、これが最も原本の面影を忠實に傳へたものではないかと思はれる。

【史的地位】假名文で表現せられた物語としては、「竹取物語」「伊勢物語」「宇津保物語」「大和物語」「落窪物語」（各別項）等があり、日記としては「土佐日記」「蜻蛉日記」（各別項）等がある。「枕草子」は、それ等の諸書とは全然異つた方面を開拓して生れた作品であつて、他に類書はない。特殊な氣品と風格とを具へた點において、王朝時代の文壇に光輝を放つ。この草子は、後世日本文學の諸作品に著しい影響を與へた。この草子は、古くから李義山の雜纂に摸倣して作られたものとされる。しかしその說が當を得てゐないことは、古くから石原正明の「年々隨筆」をはじめ、近世諸家の等しく論じた所である。武藤元信が云つたやうに、淸少納言は和歌をものするやうな氣持、換言すれば熱心なる創作慾に驅られて筆を執つたのである。そこには感受性の淸新銳敏、聯想の自由奔放なるものが認められるから、作者にあらでは見られない自然、感じられない人間の一面が、しつかりと把握されてゐる。さういふ意味に於て、この草子は個性に徹した作品である。この草子の成立した時代は、王朝時代の宮廷女流文壇が、最高潮に達しようとしてゐた時代である。卽ち日本文學に於けるロマンチシズムの傾向が、爛熟の頂點に達しつつあつた時代である。從つて當時の作品は、いづれも多かれ少かれ、幻想的・感傷的傾向を持たないものはない。和泉式部でも、紫式部でも、皆同樣である。然るに「枕草子」は、浪漫的精神を多分に盛りながら、しかも著しく感傷的傾向を見せず、冷靜なる知性と實寫的傾向とを示すところに、作者淸少納言の性格の反映が見られる。そして、そこに「枕草子」の價値は存する。

【研究史】「源氏物語」と並び稱せらるゝ國文學上の大作であるにかゝはらず、近世に至るまで、「枕草子」は研究の埒外に置かれてきた。「本朝書籍目錄」に「淸少納言枕草子二卷、同注十卷、季綱朝注」とある本は今傳はらないが、「花園院御記」にも引かれて、たしかにあつた



枕草子繪卷（淺野侯爵家藏）

にはあつたらしい。季經といふ人の傳記は明かでないが、顯輔の子宮內卿季經ではないかと思はれる。六條家の學統に立つ彼が、「古今六帖」の影響を非常に受けたらしい「枕草子」の註を書くことはありさうな事である。鎌倉初期には、源及僧寄と名乘る人が、この草子の本文を校定し、勘物を加へた。降つて足利中葉に至り、姉小路濟繼は、「枕草子」を書寫して研究したが、その本は、能因所持の舊本の系統のものであつた。この系統の本は、三條西家に傳はり、更に細川幽齋に傳はつた。幽齋は、三卷本、堺本等の異本によつて研究し、これを宮木孝庸に授け、更にその說は岡西惟中に傳はつた。惟中は傳來の本卽ち五卷本に諸本を校合し、自說を祖述して「枕草紙傍註」十一卷（別項）を著はした。幽齋の「枕草子」研究は、他の方面にも感化を及ぼし、松永貞德の門に出た加藤盤齋と北村季吟の研究を導いた。前者は「清少納言枕草紙抄」十五卷であり、後者は「枕草紙春曙抄」十二卷（各別項）である。「枕草子」の研究は、この三書によつて大成されたと云つてもよろしい。就中、「春曙抄」は他の二書を壓して、「枕草子」の定本の如く考へられて今日に及んだ。「春曙抄」以後、この草子の研究は引きつゞきなされたが、そのうち最も代表的なのは、伊勢貞丈の作と稱せられる「枕草子抄」一卷である。これは、「枕草子」中から、有職故實・家具調度等に關する事項を抄出してこれに考を加へ、中に作者清少納言の傳記、草子の名義・成立等に關する考證を附したものである。一々信をおけない無稽な說も多いが、注目すべきものである。次いで橘千蔭父子は、諸本を以て校合し、根本的な問題について研究し、契沖・正明等は、この草子の錯簡の問題について考證し、清水濱臣・山崎美成等は、本文の解釋にすぐれた業績をのこした。藤井高尙は「枕冊子新釋」をものし、藤井高雅は「枕草子參考」を書いたといふことである。その他、前田夏蔭・黑川春村・齋藤彥麿等も解釋上に新說を出した。殿村常久の「千草の根ざし」は、「枕草子」中にあらはれた草木について參考すべく、壺井義知の「裝束抄」は、服飾故實に關して指針となる。その他、伴直方の「枕册子考」、岡本保孝の「枕草子存疑」等は、この草子の重要なる疑點を明かにしようと努力したものである。明治以後の研究としては、先づ鈴木弘恭の「訂正增補枕草紙春曙抄」があり、「春曙抄」の誤りを正し、足らざるを補つた。また松平靜の「枕草紙評釋」は黑川眞賴の講義を基として諸說を集成した。その他に、佐々木弘綱・萩野由之氏等の研究もあるが、武藤元信の「枕草紙通釋」（別項）と、東洋學藝雜誌の上に發表した「枕草子」の研究論文とは、研究史上の一時期を劃した程、學界に貢獻するところがあつた。又金子元臣・永井一孝・栗原武一郎氏等の解釋學的研究も注目すべきである。

【參考】清少納言枕草紙抄（加藤盤齋）○枕草紙春曙抄（北村季吟）○枕草紙傍註（岡西惟中）○枕草子抄（伊勢貞丈）○橘千蔭書入本（關根正直氏藏）○清水濱臣手澤本（靜嘉堂文庫藏）○枕草紙裝束抄（壺井義知）○千草の根ざし（殿村常久）○枕草子口傳書（京都帝國大學藏）○枕双紙集說（同上）○枕草子目錄（宮內省圖書寮藏）○枕草子註[illegible]（[illegible]久松潜一氏藏）○枕册子考（伴直方）（南葵文庫藏）○枕草子木草考（[illegible]）（帝室博物館藏）○訂正增補枕草紙春曙抄（鈴木弘恭）○枕草紙評釋（松平靜）○標註枕草紙讀本（佐々木弘綱）○標註枕草紙（萩野由之）○枕草紙通釋（武藤元信）○枕草紙評釋（金子元臣）○前田家本枕草子解說（育德財團）　（福田）

枕草紙繪卷（まくらのさうしゑまき）　繪卷

【解說】淺野侯爵所藏一卷。詞繪とも各七段、卽ち二月十日頃淑景舍が一條院中宮を訪ねて對面する段、五月清少納言が「此の君」の故事で才を示す段、九月十日職の御曹司で酒宴の際頭中將齊信が菅公の詩を吟ずる段、一條院が琵琶「無名」を彈いて中宮と問答する段、師走十日雪遊びの段、元旦中宮が齋院から來た卯杖を見る段、八幡より還幸の段の七段である。繪はすべて描寫の纖細なもので、人物の髮や眉や調度等に焦墨を塗り、唇に朱を點ずる位で殆ど全く色彩抜きの白描畫である。純大和繪に於ける白描趣味は、鎌倉時代に於ける斯派の新傾向で、歌仙繪などにもこの例を見るが、この繪卷は描寫最も纖巧で、この種遺品中の代表作と云はれる。詞は後光嚴院宸筆、繪は女筆と傳へられてゐるが、「看聞御記」によると、永享十年後崇光院が足利將軍家から借り受けた時は二卷であつて、詞は伏見院宸筆といはれてゐたが明かならず、繪は或は伏見院の皇女進子內親王の筆かとも記してゐる。字數から見てもまづ南北朝頃の作と思はれ、その纖細な描寫の趣が女性の筆と鑑せられた所以であらう。　（田中一松）

枕草紙春曙抄（まくらのさうししゆんしよせう）　註釋書

十二卷十二冊【著者】北村季吟【成立】卷十二の終りに、「延寶二年甲寅七月十七日、北村季吟書」とあるから、この時に成つたものであらう。「寛政六甲寅七月開版。江戶淺草茅町二丁目、須原屋伊八」とある本もあるが、初版のものではない。初版の刊行年月は未詳。【諸本】刊行年月を記さぬ印本と、寛政六年刊本とがある。但し同一の版式。次に明治二十六年、青山堂の發行にかゝる鈴木弘恭の「訂正增補枕草子春曙抄」十二卷三冊（又は一冊）は、「春曙抄」の足らざると、誤れるとを增補訂正したもので、その緒言に、註釋書あまたある中に、「春曙抄」をもつてよろしとする由を云ひ、「されど、その抄中なほ校考のいまだしきところ、假字の誤りたるものどものあるは、いとあかぬ心ちせられて、こたび「盤齋抄」、活字本・清水濱臣校合本・黑川春村校合本・天文五年古鈔本、その他一二の異本をもて訂正を加へ、ならびに假字の誤をも書きあらため、さて舊註に漏れたるところ、或はあやまれるふしのあるは、加藤盤齋・淸水濱臣の考、幷に契沖阿闍梨・石原正明・橘千蔭・黑川春村等先達の說をもてこれを增補す。しかのみならず、わが師黑川眞賴翁の考、および鄙考をもよりよりにかつけたり」と云つてゐる。【內容】卷一の開卷第一に、「枕草子」に關する概說を試み、その第一に、清少納言の傳記を考證し、「榮華物語」（別項）に、少納言が三條院女御淑景舍（定子妹）に宮仕せし由見ゆとて、その年代につきて考をのべ（この點季吟誤る。「榮華」にかゝる記事なし）、赤染衞門との交友につきて記し、老後四國に渡りしこと、誓願寺にて出家せしこと、その寺に墓あること等につきて考證し、次にこの草子の題號を「枕」といへるは、「枕にこそはし侍らめ」とて申し受けたるに基くと云ひ、草紙又は双紙の意義をのべ、次にこの草子古今稱美の事に及び、更に異本について「此草紙異本さまざまあり。或は二冊、或三冊、或五冊、一決しがたし（中略）。承應二年の春、尾州より一本を得たり。（上下二

冊」其本紙ふるく、手跡中古の筆體なりき」とて、三卷本（枕草子參照）の奥書二種を示し、更に「又一本上下二冊堺本とて宮內卿淸閑氏の奥書あり。發端より一紙がほどは、よのつねの本に大かた似て、其次枕詞の次第など大きに異也」とて堺本（枕草子參照）の解說を試み、三卷本の方が後世に引用せられたりとて、「禁祕抄」「八雲御抄」「悅目抄」「徒然草」等を引いてゐる。次にこの草子の註釋書として「季吟抄」あり由なれど未だ見ずと云ひ、この書に引用參考せし古書の大略をのべてゐる。さて本文は、「湖月抄」（別項）の如く、草子の本文を文段に分けてかかげ、傍註を施し、校合を加へ、更に頭に標註をかかげ、詳細なる考證を試みてゐる。

【史的地位】 この書は、延寶二年七月に成つたのであるが、出版はこれより後れしことゝ思はれる。然るに、加藤盤齋の著と思はれる「淸少納言枕草紙抄」は、延寶二年五月刊行されたことが確かであるから、「春曙抄」は、前者の影響を受けてゐると推定される。季吟は、盤齋とほぼ同樣の異本を見てゐるが、校合に對する態度は兩者とも正しい態度ではない。盤齋は文段を立つる際や、語句を註釋する際に、可なりひどい附會の說を立てた。季吟は、盤齋に比して概ね穩健の說である。盤齋の抄は、後世ほとんど行はれなかつたが、季吟の「春曙抄」は、一般に廣く流布し、「枕草子」を硏究せんとする者の必ず見なければならない書となつた。

【參考】國文學硏究史野村八良〇淸少納言枕草子硏究（國語と國文學昭和三ノ一）　（池田）

枕草紙通釋（まくらのさうしつうしやく）　註釋書　二卷

【著者】武藤元信【成立・刊行】上卷の卷頭に明治四十三年十二月著者の緒言があり、同四十四年四月のはじめ文學博士本居豐穎の序がある。同年九月二十八日、有朋堂。

【內容】緒言に於て、「枕草子」が國文學上優秀の作品なる所以を說き、これを隨筆と云ふものあれど、かの全く結構なき隨筆の類にあらず、四季のをりをりの景物、山川草木鳥蟲風月の題目、又はにくきもの、あはれなるもの、うつくしきもの、きたなげなるものなどの題目をかかげ、類似の事物を捉へてこれを敷衍し、世態人情の機微を摘發してその間に點綴し、見聞せし事實自己の經歷談などに關聯して今昔の感を寓し、おのづから一種獨特の結構をなせりとて、「枕草子」成立の動機に言及し、作者は歌よむ心ばへにて書き出でたる事疑ひなしとて、「草子」中の詩趣を論じ、作者が和歌に於て同輩にぬきんづる能はざりし餘憤を、散文に於て發表せしものと觀じ、李義山の雜纂に倣へりとなす說の當らざるを論じ、少納言の境遇順調ならざりしがために、文章氣骨に富み、柔和を缺くは已むを得ざることとなし、更に「源氏物語」が古來一般に愛讀せられ硏究せられたるに拘はらず、「枕草子」については見るべきものなし、さればこの草紙の硏究は今より起さざるべからず、先づ定本を作り、然る後に解釋おのづから正鵠を失はざるべしとて十七年前より校合を思ひ立ち、遂に十九本の異本に對校し、考異一卷をあみてより、五年後、やうやく本書を成すに至つた次第を細敍してゐる。次いで凡例に於て、本書編纂の用意についてのべ、「淸少納言枕草紙異本大槪」に於て著者の見た諸本の解說がしてある。諸本とは活字本（十行・十二行・十三行）三本。慶安刊本・淸少納言枕草紙抄・同春曙抄・同旁註・古本（三卷本）七本・宸翰本・堺本・別本（前田家本）・略本（著者所藏拔書本）の十種二十本である。次に淸少納言の小傳を古書を渉獵して述べてゐる。本文は「春はあけぼの」といふより、「みぐるしきもの」まで三百十九段とし、終りに、「物くろうなりて」の段と、「左中將のいまだ伊勢のかみときこえし時」の段とをあはせてゐる。本文の語句は、大體「春曙抄」をもととし、諸本を見比べて、よろしと思はれるものに從つた。それ故に、全く別の本文が成立した。解釋は諸抄を參考し、新說を加へ、詳細といふよりも、的確といふことを期したやうである。近世諸家の說は、大抵これを集めて、そのよろしきを取つた。また濱臣・美胤・保孝等の說も參考され、廣く和漢の書が引用されてゐる。終りに「淸少納言枕草紙考異」の全文が「索引」と共に附してある。

【價値】「春曙抄」以後、「枕草子」の學術的硏究としては注目すべき著作である。殊に異本硏究に於ては、一時期を劃した苦心の勞作である。硏究の方法や態度も概ね穩健であつて、牽强附會に陷らず、しかも要を得て簡潔にのべられてゐる。註としても詳密ではないが、しかし的確である。不要な說明や、詮索すぎる引用はない。奇說のない代りに信用すべき說である。ただ校勘にあたつて、みだりに異本の本文を取捨して、語句を改めたのは、この書の缺點である。「枕草子」の本文は、この書によつて、一層讀み易くなり、整頓されたかも知れないが、本文は諸本の要素を加へ、全く別個の「通釋」本が成立してしまつた。かかる校定本は、一著者の意見によつて改められたものであるから、たとひ文章が通じ易くとも、學問的價値高きものと云ふことが出來ない。しかし、幸にその改竄の箇所に黑點を附し、明瞭にあとを示したのは、さすがに著者の見識の高さと用意の周到を思はせる。近代「枕草子」の學術的硏究に於て、最高位に在るべき著述である。

【著者小傳】元信は裕軒と號し、その家を何故樓といふ。加賀藩士武藤謙之助の子。東洋學藝雜誌上に論文を發表し、學界に貢獻する所があつた。重野安繹・中村正直・本居豐穎・井上頼圀・物集高見・三島毅等と親交があつた。第四高等學校敎授囑託となつた事もあつた。大正七年十二月歿す。「枕草紙考異」一卷、「枕草紙通釋」二卷の著がある。「考異」は元信が十九種の異本を得て彼是見合せて校合し、そのよろしきを取つた箇所を表示したものである。歿後遺命によつて、遺著「淸少納言枕草紙別記並遺文」なる小冊子が公刊せられた。「通釋」後の元信の學說をまとめたものである。なほ枕草子に關して、東洋學藝雜誌上に掲載せられた論文に、淸少納言枕草紙考異（明治三十九年、二九七・二九八・二九九）・淸少納言傳（同三〇二・淸少納言枕草紙緒簡考（明治四十一年、三一八）・淸少納言枕草紙異本考（明治四十二年、三四四）等がある。　（池田）

枕草紙傍註（まくらのさうしばうちゆう）　「淸少納言傍註」を見よ。

枕物狂（まくらものぐるひ）　能狂言【格式】重習（大藏流）。

【梗概】百歳に餘る祖父が戀に惱むと聞いて、孫共が訪ねると、枕物狂の有樣に、叶へてあげるから眞實を打明けて下されと言ふ。祖父は否みながらも志賀寺の上人の話に事寄せて戀の物語をする。孫共は問はぬに落ちたから

有様に仰せられてくれと頼み、祖父も終に先の月の地藏講に刑部三郎の娘を見染めたと告白するので、逢れ來つて思ひを叶へさせる。【解說】能樂の物狂能を狂言に仕立てたものであらう。大分能がかつたもので、曲中に「松風」の謡も取込まれてゐる。この曲や「柿山伏」や「西倉」には、鐵砲といふ言葉が出て來るので、鐵砲傳來以後の作であらうとの說もあるが、古本にはそれ等の文字は全く見えず、江戶期以後の竄入である事が明かである。なほ枕に狂ふ謡の中に、「閑吟集」（別項）にも見える小歌「逢ふ夜は君が手枕、來ぬ夜は己が袖枕、枕餘りに床廣し、寄れ枕、こち寄れ枕、枕さへ疎むか」が取られてゐる事は注目すべきであらう。（藤田）

磨光韻鏡（まくわういんきやう）　語學書　二卷二册　【著者】文雄　【刊行】延享四年八月刊。天明七年五月再刻。太宰純の序、延享元年六月。法慧元聰の跋、延享四年八月。【內容】韻鏡（別項）の研究で、圖を校定し、漢呉音と反切を加へ、且つ韻鏡を著者の新見解を以て解說したものである。上卷は凡て圖說で、初めに四十三轉經緯字母定局の圖、次に內轉第一合から內轉四十三合までの圖を出してゐる。下卷は「韻鏡索隱」と「翻切法門」、卽ち韻鏡の使用法を說いてゐる。【價値】本書は韻鏡研究史上第一に擧げるべき名著である。韻鏡は後奈良天皇の享祿年間に開版せられて以來漸次研究せられて來たのであるが、當時に於ては韻鏡を專ら反切のために用ひてゐた。文雄はその誤りである事を論じ、韻鏡は音譜であつて、反切のために作つたものでない事を明かにした。次に文雄以前の學者で字母の解釋を試みた人もあるが、何れも日本音に依つた爲めに頗る不完全であつた。文雄は唐音を研究して字母を解釋した。卽ち唇音・舌音・齒音の輕重の別を明かにし、曉母・匣母の別を明かにした。かくの如きは從來の學者の企及し得なかつた所である。又開口音・合口音の區別を說明した事は、若干の誤りはあるが、文雄が初めて說いた事で一大創見である。なほ漢音・呉音・唐音を假名で示し、廣韻に依つて字子に反切を添へた事も、音韻研究史上の大きな進步である。【備考】「磨光韻鏡」には後編及び餘論がある。韻鏡をあらゆる方面から論じ、解說したもので、必ず併せ見ねばならぬものである。共に著者の歿後遺稿を刊行したものである。後編は「指要錄」一册（丹山文礎の序は明和九年、安永二年刊。內容は韻鏡大意、非反切圖、撰者時世、內轉外轉、一十六攝、五音七音、清濁次音、脣音輕重、三十六母、二百六韻、韻鏡用法等の二十九項について記してゐる）。「本圖」一册（安永九年刊。內容は正字韻圖。卷末に文雄の無相上人略傳を添ふ）。「字庫」二册（漢洋侯の跋は安永三年。安永九年刊）。「翻切伐柯篇」一册（安永二年二月刊。內容は反切總論、反切要訣、三折一律、反切字義、七音圖說、字母反切、切字類聲、韻學正音の八項に分けて說いてゐる）。「餘論」上中下三卷三册（香月院深勵の序は享和三年。川原の序。文化四年刊）は「磨光韻鏡」の講義で、初めに韻鏡の歷史を說き、次に「磨光韻鏡」について（一）序、（二）跋、（三）緒言、（四）本圖、（五）索隱、（六）門法の六章に分けて說いてゐる。なほ文雄の音韻に關する研究は、「三音正譌」「和字大觀抄」（別項）「經史莊嶽音」「字彙莊嶽音」等に見えてゐる。併せ見るべきである。【參考】韻鏡研究史上に於ける文雄の位置（藤田新造（國學院雜誌二八ノ一二））〇文雄の韻鏡南方音說を評す同上（同二九ノ四）（龜田）

馬子歌（まごうた）　民謠　【名稱】馬方歌・馬追歌・馬喰節・馬喰歌なども云ふ。【解說】海の交通運輸機關たる船に對し、陸の交通運輸機關としての馬は、重要な位置にあつたから、その馬を取扱ふ馬子が歌ふ馬子歌は、船歌と並んで、民謠のうち、重要な地位を占める。催馬樂（別項）が馬子歌より出たとする說がある。雜藝（別項）の一、滿固（一に滿國）も、これと關係があるかも知れぬ。しかし船歌ほどの記錄は認められない。江戶時代に至つて、その內容はやゝ明かとなつた。馬子歌の一般に流傳したものが、小諸節（小室節）や追分節の如き名高い民謠、流行歌を形作つてゐる。「松の葉」卷三の「馬方」、「落葉集」卷四の「馬士節」等も、これより出た元祿時代の流行歌で、その中には、馬子歌が取り入れられてゐる。「鄙雜俎」には、

信州小諸より謳ひ出たりとて、旅行馬子の多く歌ふ、評歌は樣々有るべし、今に鄙に謳ふ馬子もあり、加賀ぶし、小諸ぶしも時代は同じ切に始りなん、歌に、

〇花はみよし野紅葉は龍田月はむさし野名が高い

〇雲にかけはし霞に千鳥我は浅間に夜船こぐ

〇關の御地藏はおらよりましぢや人も（又親でも）定めぬ妻をもつ

と見え、幕末の「御笑草諸國の歌」に馬士歌として記す所は、

やれやれな引　お前でおらはよ引　水もない火もない
國の果までも引

と云ふ歌である。雲助歌（長持歌・駕かき歌）も馬子歌と異名同稱のもので、名高い「箱根八里は馬でも越すが」の歌は、この兩樣に用ひられる。「坂は照る〳〵鈴鹿は曇る」も、馬子歌として名高い。關東小六の小六節や丹波與作の與作節なども、馬子歌と關係があらう。馬子歌は既に江戶時代に頽勢を見せてゐるが、明治以後、交通の變化發達は、一層馬子歌を忘れさせる事となつた。併し少數はなほ民謠の中に殘存してゐる。それ等は「俚謠集」や、「俚謠集拾遺」にも錄された。節については「歌謠字數考」に、「馬子の歌ふものを、馬子唄といひて、其の中には、雲助と同じものもあれど、馬子の方は、追分節の少し變化したるものにて、雲助唄の節とは、大いに異なり」とある。併し大體似た趣味の節であるが、雲助歌には、馬子歌に似た息を長く引くものと、可なり急調の節とがあり、馬子歌は、追分節と同樣の長く引張る歌ひ方である。（藤田）

信（まこと）　雅樂家　【姓】源。一條の北邊に居があつたので、俗に北邊大臣と稱す。【生歿】弘仁元年生れ、貞觀十年（一五二八）閏十二月二十八日歿す。享年五十九。【閲歷】嵯峨天皇の皇子で、源姓を賜はつた最初の人である。「三代實錄」清和天皇貞觀十年閏十二月二十八日の條に、左大臣正二位源朝臣信の薨去を記してゐる。御傅は廣井宿禰である。その傳ふるところによれば、この大臣は率性閑雅、風尙不恒、書傳を讀むことを好み、兼ねて草書・隸書をよくし、又圖畫に巧みで、馬を描くとその形が眞を寫してゐた。嵯峨天皇が、親ら笛を吹き琴箏を鼓し、琵琶を彈ずることを敎へ給うた。かく多藝であつたが、鷹・馬・射獵に至つては最も留意された。後、鷹狩に出て落馬したのがもとで歿したといふ。

【業績】樂舞の各技に精通した中に、殊に箏をよくしたことは「秦箏相承血脈」に、箏の相傳を、大唐海州沭陽縣孫賓より我が朝の源信に傳へ、信を以て我が國の箏の祖となし、信から仁明天皇及び清和天皇に傳へ奉つたやうに記してあるのを見ても分る。又「今昔物語」にはその箏に感じて天人が舞つたといふ傳說が記してある。又「敎訓抄」「體源抄」に、「五常樂急」の箏の手に、この信の夢の說と稱する祕曲の手のあることを述べてゐる。また信が舞を善くしたことに就いても、「敎訓抄」（卷二）をはじめ諸書に記載がある。信の子に叶・平・恭・有・好・保・任・昌・時等があるが、その中で叶はまた音樂を善くし、貞觀中雅樂頭となつた。作品は「永隆樂」の作曲の外、仁明天皇御作の「長生樂」に舞を附した。

【參考】三代實錄〇今昔物語〇大日本史（卷九・一〇）〇敎訓抄〇體源抄〇秦箏相承血脈〇日本音樂史考（東儀季治）〇日本音樂史（田邊尙雄）（田邊）（日本風俗史講座二三）

まこと　文學論　【語義】「まこと」は誠であり、誠實であり眞實である。これを語の構成から見ると眞言であり、眞事である。言と事とは言靈信仰の上からも同一の意味を有して、言は事として實現されるのである。近世の富士谷御杖は「眞言辨」の中に眞を「私」「公」に對して、正しくして情のある境地であると說き、「眞言」は情のまゝに言つて而も正しい言であり、眞事は自然のまゝに行つて而も正しい行爲であると論じてゐる。「まこと」は一面に於て自然のまゝに行ふことであるが、同時に正しい理想を有して居り、道德的である事はこの點から理解される。【文學論としての「まこと」】「まこと」は人生のあらゆる方面にも見られるが、文學に於てもこの「まこと」を文學の中心とし、文學觀の根柢とする見解は多いのである。文學に於ての「まこと」は文學の根本にある不易的普遍的な精神である。この「まこと」は自然のまゝを重んずる所に寫實的性質もあるが、同時に理想的でもあるのである。日本文學に於ては、一貫してこの「まこと」を根柢に有するが、特に大和時代の文學は「まこと」がその全體の特質となつてゐるのである。「古事記」にも「萬葉集」にも「まこと」が根柢となり、それが建國の事實の上にたつ國體と融合し統一されて具體的な形象となつてゐるのである。平安文學以後にしてもこの「まこと」を根柢としてその上に時代の特殊性を加へて、「もののあはれ」（別項）ともなり、「幽玄」（別項）ともなつてゐるのである。さうして文學の展開の上に於て固定化因襲化が生ずる時、この根柢としての「まこと」に復らうとする機運が生ずるのである。さうして、この「まこと」に復ることによつて、文學の出發點に歸り、その上にたつて新しい展開を始めるのである。この場合に自覺的に「まこと」を文學の上に求めようとする精神が起る時、文學論としての「まこと」論が生ずるのである。近世に於て鬼貫が俳諧は「まこと」であると說いたのもこの立場であり、眞淵が「萬葉集」の精神としての眞情をとき、それを歌の理想としたのもこの「まこと」論である。香川景樹の歌論に於て誠實を調とともに說いたのも、この「まこと」を根柢としてゐたのである。これは、芭蕉の「さび」にしても「風雅の誠」を說いてゐるのは「まこと」を根柢として、その上に風雅を求めたと思はれる。要するに、文學に於ける「まこと」は、文學に於て時代を貫いて存する不易的なるものであり、文學の出發點であるとともに、窮極點でもあるのである。さうして「まこと」は知行合一の境地であり、現實的なるものと理想的なるものとが一元となつて居り、寫實と理想との一如となつてゐる點に、虛實と同じく日本民族の特異性の上にたつてゐる點が多いのである。（久松）

【參考】ひとりごと（鬼貫）〇眞言辨（富士谷御杖）〇上代日本文學の研究（久松潛一）〇國文學體系（垣內松三編）

眞言辨（まことべん）　歌論書　二卷　【著者】富士谷御杖　【成立】成元の署名により文化八年以前なる事が知られる。【諸本】傳本としては竹柏園本、帝國圖書館本がある。日本文學類從（隨筆文學集）所收。【內容】神道的立場より歌を論じたもの。上卷には、歌道の旨趣・戀歌・賢愚の別・神道の旨趣、下卷は、時の辨・言靈の辨・言語詠歌の別・敎誨の論・五典・眞の辨・五數の辨・表裏境の辨・感の辨等の諸篇から成つてゐる。先づ心を分けて偏心・一向心・眞心の三となし、その理想たる時宜を全うせんためには、神道によつて、偏心を制し、歌道によつて一向心を和げ、それを眞言に詠み出づることによつて眞心を得るにある。卽ち神道と歌道とは、眞心を得、時宜を全うせんがために互に助け合はねばならぬ。而して歌道とは一に眞心を得るためのものである故に、所欲を達せんがために、歌を詠むが如きは最も宜しからず、反之、それが眞言であるならば戀歌も道に反かぬ。かの古今序に歌を以て賢愚の則とし給ふとあるも、結局言によつて爲（わざ）を制する點を指したのである。かく時宜を全うせんがために歌詠む時には、歌は形あるもの故、その歌に必ず靈が宿り、以て神人を感動せしむることが出來る。又眞言に歌ひ出づることによつても、なほ眞心を得られぬ時には、不得已眞爲に出だすべきで、眞は公の道理の外にあるので、一身の問題のみならず、國家を治むる上にも眞を以てせねばならぬ。大約上述の如き主旨を論理的に精細に論じたもの。【價値】その說、全く神道的立場により、歌を以て事を受けんがための手段としてゐる點、異論もあらうが、而もその說、深遠精細異彩を放ち、歌學史上特異なる地位を占むべきものである。（相原）

正明（まさあきら）　國學者　【姓名】石原將曉。後正明。通稱喜左衞門【號】蓬堂【生歿】寶曆十年尾張國海部郡神守驛に生れ、文政四年（二四八一）正月七日名古屋に歿した。享年六十二。【墓所】神守村三昧【閲歷】寬政四年本居宣長の名古屋に到つた時、その門に入り、後江戶に出て塙保己一に從ひ、群書類從の編纂に携はつた。【著書】冠位通考一册（刊）〇尾張廼家苞九册（別項）〇江戶職人歌合二册（刊）〇年々隨筆三册（別項）（文化二年成）〇蓬堂集〇百人一首抄〇律解〇制度通考〇宰相通考〇百僚補正〇臣連二造考等。

【學風・歌風】學は考證を主とし、有職故實に精通した。その著書中屢々師の宣長の說を駁して一家の見を樹て、尾張に於ける宣長門下の中に異彩を放つてゐる。歌に於ては、「新古今」を愛して、その歌風もつとめてこれに似せてゐたといふ。有名な「尾張廼家苞」（別項）はこの立場から書かれた「新古今」の註釋書である。歌はその好む所でもあり、得意でもあつて達吟を以て聞えてゐた。その傑れたものは「新古今」に出入すると評されてゐるが、「新古今」ほど技巧が凝つてもゐないし、又その幽玄さをも持つてゐない。蓋し力が足りなかつたのである。大體に於て、宣長の後世風をやゝ醇化したところに、その歌風はあるやうであ

る。知的・構成的である點、懸詞・縁語の多い點、三句切の多い點、又鑑賞の細く行き亘つてゐる點など、その特徴と言へよう。

青柳の花だの糸にぬく玉を露なりけりと春風ぞ吹く

色ふかき錦の紅葉散りてけり夜半のあらしや月に吹くらむ

（窪田・森）

【參考】古學小傳（岡宮秀賢）○名古屋市史學藝篇

正章千句　俳諧　一册【作者】安原貞室【成立】正保四年十一月【刊行】慶安元年九月【諸本】芭蕉以前俳諧集上卷（俳諧文庫）所收。【內容】貞室の獨吟千句並に追加百韻を、師の貞德に批點批評を乞うて上木したものである。長點が第一發の卷十四點、第二花の卷十六點、第三蝶の卷十五點、第四郭公の卷十七點、第五五月雨の卷十五點、第六七夕の卷十三點、第七秋傘の卷十五點、第八八月十五夜小野月といふことをの卷二十點、第九初冬落葉の卷十五點、第十雪の卷十點、追加の卷十七點で、都合長點百七十二である。正保四年十一月下旬の一囊子（貞室）跋。【解說】貞室の三十七歲の時の作で、貞室草期の作調が知られ、又貞德の評言は、貞德の俳諧觀や式目上の意見等を知るに頗る參考になる。然るに貞室が比較的後輩でありながら、貞德の寵を得たやうな關係から、貞德歿後の寬文三年に至つて、貞室よりは故參の門人椋梨一雪が「茶杓竹」を著はして攻擊し、これに對して貞室門の乾貞恕が、翌寬文四年に「蝿打」を著はして返答した。（荻原）

正岡子規　「子規」を見よ。

將門　所作事　淨瑠璃物【別名】瀧夜叉【本名題】「一つ家に遊女も寢たり男宜月　忍夜戀曲者」【別名題】忍夜孝事寄【初演】天保七年七月十五日初日、江戸市村座「世善知鳥相馬舊殿」第一番目大詰（作詞）寶田壽助（曲節）常磐津節（太夫）三代常磐津小文字太夫（後の四代文字太夫）（作曲）五代岸澤式佐（振附）二代藤間勘十郎・四代西川扇藏【傳來】曲・振ともに傳存【題材】平將門、又は相馬の古御所。將門の遺子瀧夜叉姬、將軍太郎良門等を材料にしたものでは、古淨瑠璃山本土佐掾の「平親王將門」が古く、歌舞伎にも元祿年代これを移して演じたが、後世に最も影響を及ぼしたのは、近松門左衞門作の操淨瑠璃「關八州繫馬」（別項）である。又歌舞伎では「垂衣女將門」（作者宮永傳兵衞、元文四年河原崎座）や「男哉將門」（作者壕木五瓶、享和元年市村座）等の「女將門」の趣向も作られた。本作は、これ等とは直接の關係はなく、その藍本となつたものは山東京傳の讀本「善知鳥安方忠義傳」（別項）で、即ちこれによつて脚色したものである。【諸本】常磐津節正本。日本歌謠集成卷十・歌謠音曲集（日本名著全集）所收。【內容】將門山の古御所へ妖怪が現はれるとの噂に、大宅太郎光國（十二代市村羽左衞門）が、源賴信の命をうけて、その樣子を見極めに忍び込むと、將門の娘瀧夜叉姬（三代市川九藏後の六代團藏）が島原の傾城如月と身をやつして出で、味方に引き入れんと色めかしい口說き模樣で言ひよる。光國はわざと心を許して、將門が島廣山の最期の樣を物語る。それを聞いて無念がる如月の樣子から疑はれ、更に懷中より相馬錦の旗を取り落すので、遂にその本性を見顯はされる。如月は、早やこれまでと本名を名乘り、蝦蟇の妖術で光國と挑み合ふ。そしてこの間に鷲沼六郎（市川團三郎）が瀧夜叉姬へ注進する件が入つてゐる。【參考】花江都歌舞妓年代記（石塚豐芥子）（新群書類從四）（秋葉）

將門記　「將門記」を見よ。

雅兼　歌人【姓】源【通稱】薄雲中納言【生歿】永曆三年に生れ、康治二年（一八〇三）薨ず。享年六十五。【閱歷】大治五年參議に任じ、天永元年從三位權中納言に進み、保延元年病を以て職を辭して出家した。退職後、正二位に陞つた。學識があり詩歌をよくし、白河法皇は深くその才幹を稱し給ひ、通俊・匡房（各別項）にも劣らないと仰せられた。

村上天皇―具平親王―師房┬俊房―師賴
　　　　　　　　　　　　└顯房―雅兼

【作品】家集に「中納言雅兼卿集」（群書類從二三八所載本は短歌八十首を收め四季・戀・雜の順に排列されてゐる。勅撰集に見える九首は凡て集中に見えるが、歌合その他のもの二三は集中に見えない）があり、勅撰集に入る歌は「金葉」五首、「千載」三首、「新續古今」二首、私撰集に入るものは「後葉」二首、「續詞花」三首、「堀河院艷書合」「天永元年歌合」等の作者。【批評】彼は、歌を作るに美的陶醉を彫琢するよりは、そのまゝに表現してゐるやうであるが、自然に彫琢の巧を得てゐる。藤岡作太郎氏は、「その詠多からざれども、風吹けば波の綾おる池水に緣ひきそ・ふる岸の青柳の如く、巧緻綺麗の格に長じたるが如し」とこれを許してゐる。【參考】大日本史（卷一四二）○國文學全史平安朝篇○公卿補任○尊卑分脈○今鏡○古事談（西下）

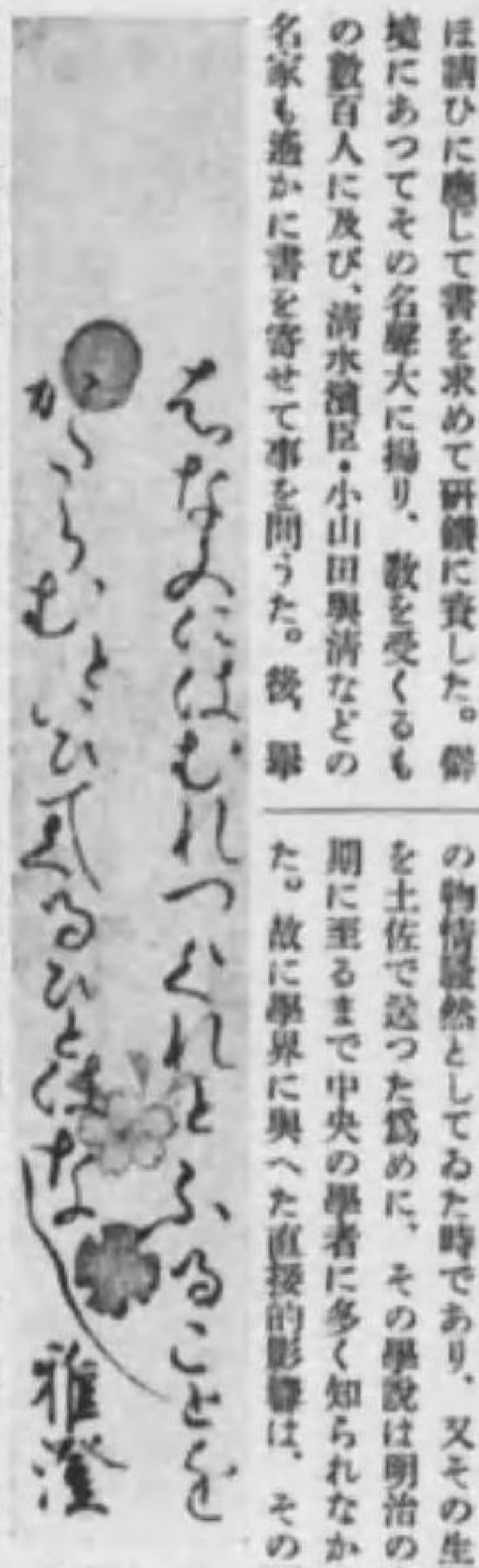
眞幸　國學者【姓名】長瀨氏。通稱七郎平【號】田鶴【生歿】明和二年に生れ、天保六年（二四九五）五月二十八日歿す。享年七十一。【緣所】熊本市新鍛冶町美濃院【閱歷】眞幸は角右衞門正常の子、家は肥後藩士、秩祿百五十石を食んだ。眞幸は寬政五年東遊し、宣長の門に入り、江戸に村田春海・加藤千蔭等と往來し、得る所が多かつた。享保二年家督を嗣ぎ、諸役を歷任して御鐵砲頭に至つた。熊本に國學の興つたのは眞幸の力によるといふ。又彼は、眞淵の「萬葉考」の一・二兩卷とその別記のみが刊行せられて、卷三より卷六までとその別記並に人麻呂歌集の寫本のまゝに傳へられてゐたのを、書肆中村某に謀つて上梓せしめた。その功また沒すべからざるものがある。「萬葉集佳調」の著がある。【參考】肥後先哲書蹟（武藤嚴男）（森）

正清本城の段　「八陣守護城」を見よ。

雅亮　有職家【姓】源【閱歷】父雅職（醍醐天皇八世の孫）、兄清職は、共に藏人の五位で、左大臣藤原賴長に仕へて事ある時はその前驅となり、又陪膳の役を勤めたりしたが、雅亮も賴長に仕へ前驅を勤めた。賴長の日記「台記」久安二年の條には六位、同六年の條には大舍人奏、仁平三年七月の條には院判官代右近將監とあり、同八月二十八日の條には皇后宮少進に任じ、從五位下に敍せられたことが見え、又雅亮は賴長の乳母肥前の養子で、その翌日二十九日に賴長の家の職事となり、夫人の家司に補せられたことが見える。なほ「山槐記」治承三年二月二十二日の條には前伊賀守とある。「尊卑分脈」に據ると、雅亮の父雅職のことを裝束師と記してあるが、「台記」裏書には、五節の童女下仕の裝束に雅職・雅亮の兄弟が奉仕したことが見えてゐるから、裝束のことは、一家の世職としてゐたものであると見える。「雅亮裝束抄」三卷（別項）の著がある。（石村）

雅亮裝束抄　有職　三卷一册【著者】源雅亮【別名】假名裝束抄【諸本】「滿佐須計裝束抄」として群書類從一一二に收められてゐる。【解說】平安末期に於ける室內裝飾及び男女裝束に就いて假名で記したもので、一卷は母屋廂の調度立つる事、大饗の事、臨時客の事、祭の使の出立ち、大將あるじの事、五せち所の事、姬君の裝束、童裝束の寸法、下仕の裝束の寸法、打出をすること、車の衣を出す事、文を裹む事、大臣辭退の表納るゝ函を裹む事、名香を裹む事、平包みにて物をつゝむ事、童の裝束を裹むべき樣、僧の裝束を裹む事、二卷は束帶の裝束の事、闕腋の事、布袴の事、衣冠・直衣に衣を出す事、舞人の裝束の事、陪從の裝束、小忌の事、童殿上の事、みづらを結ぶ事、鈍服を着る事、中少將の甲冑る樣、上帶をひく事、平緖をかへすべき樣、をとこになる間の事、御髮をとる事、三卷は狩衣の色々樣々、指貫、女房の裝束の色節が記されてある。その本文の間々に、裏に押紙したもの、頭書、又片假名の文などが本文より一段低く書いてある。これは假名書の奧書に依ると、本文は雅亮の自筆、押紙は「すけゆき」、頭書は「こ殿」、片假名は「わらは」の書いたものであるとしてある。これに就いて、「古事類苑」服飾部裝束書の條には、「すけゆき」は藤原資盛の子資行、「こ殿」は賴長の妻の兄なる藤原公能、「わらは」は公能の女で近衞天皇の皇后であつた多子の自稱であらうと推定してゐる。又康永二年十二月十一日大炊御門冬信の奧書には、この本の目錄は朽損してないのを、前少納言顯藤が書寫した本に據つて書き加へたもので、本來は假名の目錄であつたのであらうが、顯藤がそれを漢字に書き直したものであらうと見える。この書は現存「裝束抄」中、最も古いので有名である。（石村）

雅澄　國學者【姓名】鹿持氏。通稱藤太【號】古義軒、また山齋【生歿】寬政三年四月二十日、土佐國土佐郡福井村に生れ、安政五年（二五一八）九月五日同所で歿す。享年六十八。【閱歷】雅澄は土佐藩の徒士鹿持惟則の長子。皇學を宮地仲枝に受け、後、獨學を以て古典を研究した。家もと貧、藩老福岡氏その篤志に感じ、藏書を借覽せしめ、なほ請ひに應じて書を求めて研鑽に資した。僻境にあつてその名聲大に揚り、敎を受くるもの數百人に及び、淸水濱臣・小山田與淸などの名家も遙かに書を寄せて事を問うた。後、擧げられて藩儒敎授館の師範となり、弘化三年特に士格に列した。雅澄、大義名分を說き、藩の子弟を敎化した功は勘くなかつた。土佐勤王黨の領袖武市半平太は、雅澄の義姪であり、常にその薫陶を受けた。吉村寅太郎等も雅澄の門人だつた。【著作】萬葉集古義百五十二卷（別項）○南京遺響（續日本紀・日本後紀の歌の註釋。日本歌謠集成に收む）○日本外史評一册（刊）○山齋集一册　○山齋長歌集（續日本歌學全書第九編近世長歌今撰家集の內）○千首のくり言（稿本叢書第一卷に收む）○裴諧稿。その他後に記述する多くの國語に關する著書がある。（以上森）



鹿持雅澄筆蹟

【業績】雅澄の最も大きな業績は、彼以前の萬葉集研究を大成して、「萬葉集古義」（別項）を完成した點であるが、更に「萬葉集」を中心とする上代國語の研究から、幾多の國語學書を著はしてゐる。いづれも豐富な學殖と獨創的な識見とから生れたもので、その學術的價値は甚だ大なるものがある。即ち動詞古形の研究の如きは、實に前人未發の見であり、延約・手爾乎波・國語音韻等の研究は、宣長・春庭等の研究の上に更に一步を進めたもので、頗る傾聽に値するものであり、「萬葉集品物解」「同枕詞解」の如きは、一種の萬葉集辭典として、今日もなほ最高の權威を保持してゐるものである。ただ惜しむらくは、雅澄の時代が、幕末の物情騷然としてゐた時であり、又その生涯を土佐で送つた爲めに、その學說は明治の中期に至るまで中央の學者に多く知られなかつた。故に學界に與へた直接の影響は、その研究の深さに比例しなかつた。

〔活用に關する研究〕「用言變格例」一册（別項）動詞の活用は四段活用が根本で、他は四段活用から轉生したものであると說いたもの。〔手爾波の呼應に關するもの〕「鍼嚢」（一名「歌詞三格例」）二卷二册（別項）。「結詞例」一卷一册。「萬葉集」及び「古事記」「日本書紀」等の結辭を蒐集し類別し、奈良朝と平安朝以後との相違を研究したもの（明治二十七年刊）。〔延約に關する研究〕「雅言成法」二卷二册（別項）、「舒言三轉例」一卷一册（別項）。〔國語の音韻に關する研究〕「言靈德用」一卷一册、上代國語の音韻を研究したもので、一音の語は凡て淸音、二音以上の語は初めの音は淸音、中の音は濁音になる事がある。下の音は濁音或は半舌音に成る事があるが、それ等は何れも正音である。而して語の初めの音が濁音又は撥音に成つてゐるのは不正音であると云つてゐる（明治廿六年刊）。〔辭書類〕「古言譯通」本文四卷・目錄一卷（天保八年成、明治廿六年刊）、「萬葉集」「祝詞」「宣命」等の語を五十音順にして口語譯を附した辭書。「萬葉集枕詞解」五卷（文政五年成る。明治廿七年刊。讀書叢書刊行）。「萬葉集」の枕詞を解釋したものであるが、「古事記」「日本書紀」等に見える枕詞も併せ解いてゐる。「萬葉集品物解」四卷、目次一卷（別項）。「萬葉集品物圖繪」三册（別項）その他、「玉蜻考」一卷（文政六年成。明治廿七年刊）は、「玉蜻」「珠蜻」等を「たまかぎる」と讀むべきで、「かぎろひの」とは讀むべきでない事を考證したものである。（以上藤田）

【參考】鹿持雅澄翁傳（井野邊茂雄）（國書刊行會本萬葉集古義首卷）○土佐に於ける萬葉學の源流（佐佐木信綱）（史學雜誌二八ノ七）

摩擦音　「子音」を見よ。

正朝　「八十翁疇昔話」を見よ。

齊名　儒者【姓名】本姓は田口。後、紀と改めた（東儀卷二十二）。齊名はタダナとも訓む。【生歿】康保三年に生れ、長保元年（一六五九）十一月歿す。享年三十四。【學統】「江談抄」卷五詩事に「齊名は橘正通の弟子なり。正通は源順の弟なり」等の記載がある。【閱歷】やゝ長じて方略の試に應じて及第。長德二年（三十一歲）三月二十八日、東三條院詮子の不豫によつて天下に大赦す。詔は大內記の齊名が作つたものである。同年十二月二十六日、大

宋國の天台宗源淸を下して、日本の天台法文七卷并に牒狀二通、座主暹賀の解文を送り來つたに對して、齊名は匡衡の命によつてその反牒を作つた。翌三年八月十五日、文章博士大江朝臣匡衡の恩申した學生、同時棟の省試に獻じた詩の病累瑕瑾を歸申するの狀を記した。時に從五位下、大内記越中權守である。同四年三月十二日、左大臣藤原道長の上表（辭表）に對する勅答を書かしめられた。長保元年（三十四歳）病に臥した時、具平親王來つて問はせ給うたといふ。【著作】扶桑集十六卷（別項）。散佚して今存するものは殘篇二卷（群書類從一二六所收）○齊名集一部一帖（一條院入道藏書目錄」には見えてゐるが今傳はらない）。

【批評】詩文に篤志な詩人である。自己の作品の毀譽褒貶に對しては寧ろ神經質とも思はれる程敏感であつた事は、當時の藝術家がその作品に魂を打ち込む熱心さを示してゐる。又文章家としては大江匡房が「齊名は、偏に古集を心腹に取つて敢て新意なし。文々句々皆古詞を採取す。故に風騷の體あれども、若しその意を得されば、新意なくして目を驚かすなし」と評してゐる。若しその體を備へ、意を得れば、常人の及ばないところもあらう。ただ新意の乏しいのは獨創的天賦の詩人ではなかつたのかも知れない。

【參考】類聚句題抄○朝野群載卷十三（藝文章座詩勘進）○本朝文粹（卷一賦、卷二勅答、卷三對册、卷六奏狀、卷七奏狀、卷八序、卷十序、卷十一序）○江談抄（卷四・五・六）○和漢朗詠集（紅梅・秋夜・風・田家・佛事・閏三月・首夏・花橘・蘭・七夕・柳・初冬・王昭君・雪・山）○十訓抄○古今著聞集（卷四）○今鏡上　（山岸）

雅信（まさのぶ）　郢曲家【姓】源氏。俗に一條雅信と稱す。【家名】鷹司【法號】寂實【生歿】延喜二十年に生れ、正曆四年（一六五三）七月二十九日歿す。享年七十四【閱歷】宇多天皇の第八皇子式部卿敦實親王の三男、母は左大臣藤原時平の女。承平三年十二月昇殿（十四歳）、同六年正月七日從四位下、天慶元年十二月十四日侍從（十九歳）、後諸官を經て天祿三年正月二十四日大納言（五十三歳）、貞元二年正月從二位、四月右大臣、六月上表して辭退するも許されず、十二月兼皇太子傅（五十八歳）、天元元年十月左大臣（五十九歳）、同二年三月正二位、寬和二年正月、輦車に乘じて侍賢門より出入する事を聽さる（六十七歳）、同三年從一位、永祚元年七月、牛車を聽さる（七十歳）。正曆四年五月、病によつて辭職するも許されず、七月二十八日（一說に二十六日）出家し、同月二十九日薨ず。贈正一位。

【業績】郢曲家としての雅信は、父親王より學んで出藍の譽あり、一代の名手であつた。郢曲（別項）の家の中、源家と藤家の二流が主なる流派で、各々その歌ひ方を若干異にしてゐるが、雅信は實に源家の元祖であり、郢曲の名家綾小路家は雅信を祖とする。現今傳はる催馬樂（別項）の譜は、雅信の所作であると云ふ。神樂と和琴（各別項）とは、父君敦實親王より世に傳へられ、雅信がこれを受け繼いだものである。就中、朗詠（別項）に至つては雅信の興す所であつて、元來朗詠の根本は僅か七首より世に行はれなかつた。この根本七首の中には、雅信が貞元二年右大臣に任ぜられた時、上表した辭退の上表文の一節が入つてゐる。これは菅原文時の作にかゝるものであるが、その表の中「傳氏巖ノ嵐」の句と「春過ギ夏闌ケヌ」の句が、根本七首の中の二首を占めてゐる。これによつても、朗詠は雅信より始まると云つても差支ないことが分る。よつて源家では「傳氏巖ノ嵐」の句を特に祕曲としてゐると云ふ。その他雅信の音樂勸能の事は「大鏡」にも見えてゐる。藤家は右大臣賴宗を流祖として遂に十四代の權中納言宗宣に至り、その郢曲は斷絶して藤家の傳は亡んだが、源家は綾小路家として永く郢曲の道を傳へ、郢曲に關する種々な著作を世に殘して、斯道のために盡し、今日もなほその家を傳へてゐる。（藤田）

正秀（まさひで）　俳人【姓名】水田正秀。通稱利右衞門。【號】竹青堂・節青堂【生歿】萬治元年生れ、享保八年（二三八三）八月三日歿。享年六十七。【墓所】近江國栗津龍ヶ岡（辭世）行く時は月にならひて水の友【俳系】芭蕉門【閱歷】近江の人、膳所藩中物頭、膳所侯本多家に仕へた。「俳人小傳」には「膳所藩中物頭、曲翠が伯父なり」とあるが、確かなことはわからぬ。併し「家族繁宮兩姓名爲州里見重」（水の友）といふから、相當重い地位であつたらしい。若い頃から竹内正三位殿にたよつて和歌を學び、後俳句に轉じ、芭蕉に就いたが、それは元祿初年頃であるらしい。かくて元祿四年に芭蕉のために義仲寺の無名庵を修理し、同年仲秋芭蕉等と湖上の月を賞したりした。芭蕉の難波病臥の際は早速驅けつけ、その歿後も年回每に力を盡した。元祿十年の頃致仕したが、暫く伏見に隱棲し、後、京都に居住したが、再び膳所に歸り、元祿十五年、洒堂と「白馬集」を撰した。この後は近江蕉門の故老として重きをなし、蕉門俳士の需に應じて序跋を記すこと、凡て三十六集に及んだと云はれ、又俳諧の理窟に落ちざらんことを說いて後進を導いた。門人濱田松哉は、一周忌追善集「俳諧水の友」を撰し、中に、正秀の行狀記「雅行記」を記してゐる。【著作】白馬集（濱田洒堂共撰、元祿十五年刊、蕉門珍書百種）○粟津（長崎古道共撰、寶永元年刊）○蕉門名家句集（正秀の部）（安井小酒編、昭和四年刊）　（志田）

【參考】誹諧同名彙（桑川君六）○誹諧水の友（濱田松哉、蕉門珍書百種）○蕉門諸生全傳（遠藤日人）○俳林小傳（中村先久）○俳諧人物便覧（三浦若海）

正英（まさひで）　神道家【姓】玉木氏。本姓橘。【號】葦齋・五十鰭翁【生歿】元文元年（二三九六）七月八日歿す。享年未詳【閱歷】詳かでないが、ただ彼が正親町公通（別項）の門人で山崎闇齋の道の孫たるは事實である。垂加派の神道家であると同時に橘家神道を唱道したと云はれる。學說として一家の見がないではないが、その主とするところは垂加神道の紹述であつた。彼が垂加神道の一人物として當時に重きをなし、學界にその名を馳せたのは、「日本書紀通證」及び「和訓栞」の著者として世に知られた谷川士淸の如きが、その門に出でたるによつても知られる。試みに正英が士淸に與へたる神道免許狀なるものを見るに、「天兒屋根命之嫡傳、垂加靈社直授相承之神道云云、諸傳悉面授口訣畢云云。汝宜守誓約之義、以愼尙莫忘者也。享保十七年壬子九月廿七日玉木正英」とある。彼はこれより後、五年にして歿した。　（田中（義））

【著書】神代卷藻鹽草○神武紀藻鹽草○神道日蔭草○中臣祓風水草管窺○玉籤集等

匡衡（まさひら）　漢學者・歌人【姓】大江氏。匡衡はただひらとも調む。【生歿】天曆六年に生れ、長和元年（一六七二）七月十六日に歿した。享年六十一。【家系】平城帝の後で、維時（從三位中納言）の孫。【學統】大江家の學風を

平城帝―音人―千古―維時┬重光―匡衡―擧周
　　　　　　　　　　　　└齊光―定基

紹承したのは勿論であるが、特に祖父維時の敎を多く受けた。【閱歷】「江吏部集」によると、七歳で讀書を始め、九歳の時には詩を作つた。十三の時元服し、祖父維時の訓誡を受け、「汝は帝王の師たるの風體がある」と勵まされて深く感悟する所があつた。長ずるに從ひ、博覽強記を以て嶄然頭角を現はし、及ぶ者がなかつた。天元三年（二十四歳）十月二十八日、文章生となり、秀才に補せられ、翌年正月越前の權大掾に任ぜられた。天元五年（三十一歳）正月、右衞門の權尉となり、翌二月八日、檢非違使の宣旨を蒙つた。未だ秀才で檢非違使の宣旨を蒙つた例は、全く特例として當時一般の人々を驚歎させた（小右記）。永觀二年（三十三歳）には從五位となり、甲斐の權守・彈正少弼等に任ぜられた（中古歌仙三十六人傳）。永祚元年（三十八歳）正月、從五位上となり、十一月文章博士となつた。また一條帝の侍讀として「詩經」「書經」「文選」「禮記」「老子」等の侍講をなした（江吏部集卷中）。正曆二年（四十歳）正月に侍從となり、翌年正月尾張の權守を兼ね、長德元年に正五位下に進み、式部權少輔を兼ねた。長德三年（四十六歳）に越前權守を兼ね、又東宮學士でもあつた。翌年、從四位下となり、式部權大輔に轉じ、十一月二十三日に初めて昇殿を許された。「古調百韻」には沈淪した由を述べてゐる。長保三年（五十歳）正月、尾張權守を兼ね、十一月正四位下に敍せられた。ついで寬弘三年（五十五歳）式部權大夫を辭し、翌年九月には東宮學士をも辭した。寬弘五年正月、又式部權大輔となり、同七年に式部大輔に轉じ、丹波守を兼ね、或は侍從となつたが翌年遂に歿した。【著作】江吏部集（別項）○大江匡衡朝臣集（群書類從卷二三九所收。歌調は、まだ拾遺集頃のもので、特に言ふべき特色はないが、儒者で歌人である點は、菅原道眞・源順・源爲憲・大江匡房その他、所謂和漢兼作者中の一異彩と稱すべきものである）。詩は「本朝文粹」「本朝麗藻」「朝野群載」「三十五文集」等に見え、歌は「後拾遺」「詞花」「新古今」「續古今」「新續古今」「後六々撰」等に見えてゐる。　（山岸）

【參考】江吏部集○中古歌仙三十六人傳○小右記（寬弘九年七月十七日）○本朝續文粹卷六

匡房（まさふさ）　漢學者・歌人【姓】大江【生歿】長久二年に生れ、天永二年（一七七一）十一月五日薨した。享年七十一。【家系】平城帝の後、匡衡（別項）の曾孫。【閱歷】匡房の「江

匡衡―擧周―成衡―匡房┬隆兼
　　　　　　　　　　　└維順―維光―廣元

納言暮年詩記」（朝野群載卷三）に據れば、四歳の時から書物を讀み、八歳に至つて、「史記」「漢書」に通じ、神童とまで賞讃せられた。當時源師房が、雪裏看松貞の題で詩を賦させたが、倚待なく出來たので驚嘆した事もある。それを後冷泉帝に獻じたので、帝も感嘆され、學問料を給せられた。天喜四年、十六歳で文章得業生に補せられ、翌々康平元年十二月對策に及第し、同三年（二十歳）三月、式部少丞に遷り、間もなく從五位下に敍せられた。治曆三年（二十七歳）二月東宮學士に任ぜられ、翌年七月中務大輔となり、正五位下に敍せられた。かく二階を一時に越えたのは、その年、後三條帝の卽位により、先きの東宮學士の時の功績によるのである。又帝の卽位と共に藏人に補せられた。延久元年（二十九歳）正月、左衞門權佐に遷り、同四月再び東宮學士となつた。藏人であり、左衞門權佐と右少辨を兼ぬるを三事兼帶と稱し、非凡の者のみ望み得るものであつた。一世の名譽である。左衞門權佐となつた時、京師に令して夜行を嚴禁した。そのために後三條帝の代には、盜賊や追剝の心配はなかつたといふ。延久四年（三十二歳）四月には備中介を兼ねて、防鴨河使となつたが、十二月俄に御讓位があり、ついで白河帝の御卽位があつた。けれども、新帝の藏人に補せられ、又東宮學士をも兼ねた。延久五年に後三條法皇は崩じ給うた。翌承保元年正月、美作守、從四位下に敍せられ、防鴨河使備中介、東京學士は從前の如くであつた。東宮學士を三度勤務する事は匡房を以て濫觴とする。翌年正四位下に敍せられた。承曆四年（四十歳）八月權左中辨に遷り、美作守を罷めた。その頃、高麗王が病んで日本の名醫を召すとの牒狀が太宰府に來た。やがて奏聞に達したが、牒狀の文中に聖旨の二字が舊例に相違してゐた爲めに、禮を失するものとしてその請を拒絕した。匡房はその文を作つてゐる。その後式部權大輔・備前權守・左大辨等を歷任し、應德二年（四十五歳）二月、勘解由長官を兼ね、翌年從三位に進んだ。寬治元年（四十七歳）正月、式部大輔に轉じ、翌年は正三位、周防權守を兼ね、又參議となつた。寬治六年（五十二歳）正月、越前權守を兼ね、同八年六月に正三位權中納言に進んだ。秀才出身者でかくの如き昇進は異例である。その年八月八日の釋奠の上卿を勤めた。名聲いよ〳〵揚り、白河帝は「朕は文王なり……朕匡房を抽賞するは文道を尊ぶにあらずや。文道を尊ぶを文王とはいふべきなり」とさへ仰せられたといふ。次いで嘉保二年（五十五歳）正月、從二位に進み、翌々永長二年（承德元年）三月、太宰權帥を兼ね、翌承德二年九月、筑前に下向した。施政宜しきを得、百姓の仰慕するところとなつた。又菅公のために、康和三年夢想によつて安樂寺の祭を始め、八月二十一日菅公の車を駐めた淨妙寺の神輿を遶らし、二十四日に太宰府に歸[illegible]歸來、太宰府の南の頓宮に、神輿を留めて祭をなし、翌日は竟宴の詩會を行つた。題は「神德契遐年」であり、匡房は詩序を書いた（古今著聞集卷四）。翌年正月、正二位に進み、五年の任を果して上洛の時、安樂寺の曲水宴に參列した。その時も、詩の序を書いた（古今著聞集卷四）。長治三年（六十歳）三月再び太宰權帥となつたが、足を病んで赴任する事が出來ず、在京して事務を決裁し、裁判沙汰等頻繁で世人はこれを非難した事もある。天永二年七月、七十一歳で大藏卿に任ぜられたが、間もなく九月中旬より病み、十一月五日に薨じた。【著作】狐媚記（類從一三五、本朝續文粹卷十一所收。康和三年、洛陽に狐媚の妖のあつた事を記した短文）○暮年記（類從一三五、本朝續文[illegible]朝野群載卷三。正しくは、暮年詩記とある。少年時代から詩に勝れてゐた事を記し、暮年詩の由緒を記したもの）○遊女記（別項）○傀儡子記（別項）○對馬貢銀記（類從五〇〇、朝野群載卷三所收。對馬から貢する銀の採掘や精製を記したものである）○洛陽田樂記（類從[illegible]朝野群載卷三所收。永長元年の夏、田樂の流行した狀況を記してゐる）○筥崎宮記（朝野群載卷[illegible]筥崎の宮の事蹟）○歌合祭文（朝野群載卷[illegible]二十二人右方の方人が梅宮の大神に祈つた文）○高麗國牒（本朝續文粹卷一一所收）○白頭歌（本朝續文粹卷一一所收）。（以上はみな短文）○續本朝往生傳（往生傳參照）○石淸水不斷念佛

縁起（續從四二七所收。建久二年十月記。寛喜三年十月、石清水八幡の寶前に不斷念佛を初めて脩した縁起を記したもの）○皇慶阿闍梨傳（續類從二一四所收。「谷阿闍梨傳」ともいふ。延曆寺の皇慶の傳を天仁二年四月に記したもの）○中御室御灌頂記（續類從七四七所收。寛治三年三月、仁和寺に中御室卽ち覺行の御灌頂の記である）○本朝神仙傳（續類從一九三所收。役行者・弘法大師・慈覺大師等八名の傳の傳である）○天仁大嘗會記（續々類從所收）○江談抄（別項）○江家次第（別項）○江帥集（寫本一卷）（圖書寮に在り、萬葉集の研究にも關係したので、その歌には萬葉集の語調を有するものがある）。

【業績】歌人としては、從來特に稱せられなかつたが、「江帥集」一卷の存在は、更に彼をして「萬葉集」の研究家の和歌たるの特色を發揮せしめてゐる。詩人としては、十歳の時、源師房の邸で、抄物や切韻の書を持たずに雪裏看松貞を賦し、十五歳の時には秋日閑居賦を作つた。大學頭藤原明衡は、これを見て「其の鋒、森然、定めて敵する者少からん」と賞讃した。翌年、又居葉埋泉石の詩を見て、明衡は更に驚嘆し、「既に佳境に到る」と言つた。或は源師房は、匡房の詩に對して「馬は吳坂の風に嘶き、雁は盧江の波に游ぐ勢あり」と言つた。その他彼の詩文の勝れたものは對として人口に膾炙せられ、又短文として多く流布してゐるものによつても、全豹を窺ひ知る事が出來る。又佛學の點に關しては、藤原賴通が平等院を建設しようとした時、匡房は十一歳で、源師房と同道して行つた。この地は地勢の關係で大門を北にしなければならなかつたが、左樣の寺の例を師房は知らなかつた。匡房は尋ねられる儘に、天竺の那蘭陀寺、支那の西明寺、本朝の六波羅蜜寺、共に大門は北に在ると答へた。これを聞いて、賴通は「稽古の力、有職の才、此の者に超えたるはあるべからず。後必ず大位に至るべし」と賞せられた。その他、正直であり、同時に内剛の點もあつたらしい。後三條帝が伊勢へ勅使を立てるために宸筆の宣命を匡房に示し給うた。その中に「卽位以來政道を私せず」との意が記されてゐた。匡房がその處を讀んで中止してゐると、帝は「僻事やある」と仰せられた。時に匡房は、「先きに藤原實政を左中辨とし給ひしは、登降方を措きしにあらざらんや。叡慮を垂れ給はずば殆ど神明を欺き給ふに近からんか」と。帝は恥ぢて内に入り給うた。かくの如き直諫も數度あつた事は、彼が單に學才のみの人ではなかつた故であらう。而も帝も亦、その直諫を納れ給うたのは君聖智、臣實明の致すところと言はうか。なほ匡房は藏書家としても著名であつた。六條坊門の北、西洞院の東の千草殿の文庫に藏めて置いた。千草殿は具平親王の家であつたが、匡房はこれを購求したのである。其處に校倉作りの書庫を營んだのであるが、仁平三年四月十五日の火災に燒失してしまつた。

【參考】本朝續文粹○本朝無題詩○朝野群載○江談抄○新撰朗詠集○本朝小序集（由稜）

政方（まさみち）　漢學者・國語學者　【姓名】初め關藤氏、後、關と改む。通稱立介、字は士常。政方は政三千・政御路・萬沙御路・增沙害などとも書く。【號】鳥翁・葭汀・嘉平田舍【生歿】天明六年十二月生れ、萬延二年（二五二一）正月二十二日歿す。享年七十六。【墓所】備中國小田郡笠岡町古城山（舊名「禽松岡」）【閲歷】備中小田郡吉濱の人、父は關藤左京政信と云ひ、同地の神官である。政方は若年の頃京都へ出でて村山伊豆守に從つて雅學及び漢學を修めた。後鄕里へ歸り、そこで一生を終つた。又本居宣長・同春庭（各別項）等の書に依つて國學を修めたが、國學は獨學であつたやうである。天保十三年の秋から東條義門（別項）と交り、頗る親しかつたが、間もなく義門は歿した。【著作】傭字例一卷一册（天保十三年刊。シ・ムの別を研究し、漢語から轉訛したと思はれる國語について論じたもの。蟬・文・紫菀・支那・姑義・讚等十五語について論考し、せみ・ふみは蟬・文の字音から出來た語でないとしてゐる。なほ附錄として「漢呉音圖」（別項）に依つて西瓜・栄・繪縛等十二語について說いてゐる）○傭字例評辨一册（これに二部ある。一は東條義門が「傭字例」を批評したのに答へたもの、一は江戶の某氏の批評に答へたもので、共に「傭字例」の補遺とも見るべきものである。兩書共天保十三年の參考稿。なほ本書の成に或る人の問に答へて四高・調等・守官・賀篇について記してゐる）○傭調篇二卷（別項）（天保十一年成）○男信質疑一卷（「參調篇」の附錄として附いてゐる事もある。「男信」（別項）について疑はしい所、誤りと思ふ所を記したもの）。

【業績】政方の著述は大體以上の如く、漢字の音韻に造詣深く、その方面から國語の研究をなしてゐる。就中、「傭字例」は義門の「男信」（別項）と內容に於て相通ずるものであるが（兩者は別々に研究したものである）、男信の缺を補ふ點もあり、國語學上に貢獻するところ少くないものである。（龜田）

【參考】關鳥翁の傳（井上通泰（國文一））○義門上人と政方大人（國語國文の研究六）

正宗白鳥（まさむね はくてう）　小說家　【本名】忠夫【閲歷】明治十二年三月、岡山縣邑久郡穗浪村の舊家に生る。明治二十五年、高等小學校を終へ、近隣の池田光政時代からの黌校である閑谷黌（しづたにくわう）に入つて漢籍を學ぶ傍ら、近松物や「水滸傳」などを讀み、現代物では民友社の出版物に最も親しんだ。二十七年に胃を病み、岡山市に寄宿して病院に通ふ傍ら、米國宣教師經營で、安部磯雄校長の薇陽學院で英語を學んだ。二十九年上京、東京專門學校（早稻田大學前身）英語專修科に入學、三十四年文學科卒業。在學中、既に島村抱月指導の下に、讀賣新聞月曜附錄に批評文を寄稿した。卒業後は早大出版部に入り、文學科講義錄の編輯に携はつた。思想的に多少動搖するところあり、曾て植村正久から洗禮を受け、市ケ谷の日本基督教會の會員となり、又內村鑑三の著書や講演に依つて感化されたことが尠くなかつたが、後、その基督教を捨てるに至つた。三十六年讀賣新聞社に入り、美術・文藝・教育に關した記事を擔當し、傍ら劇評の筆を執つた。三十七年、處女作「寂寞」を發表した。三十九年、自然主義運動漸く盛んになり、文壇の風潮が將に變化しようとしてゐたのに乘じ、「早稻田文學」に小品「二階の窓」、「新小說」に短篇「藉友」を寄せた。四十年、「趣味」所載の「塵埃」（別項）の世評よく、新進作家として注目されるに至つた。四十一年には、「何處へ」（別項）「玉突屋」「五月幟」「世間並」等の短篇、長篇「二家族」（別項）を次々に發表して自然主義作家の峰を以て稱せられた。四十三年、讀賣新聞社を退く。同年「徒勞」「微光」（別項）を出し、益々聲價を高め、文壇に確乎たる地位を築くやうになつた。

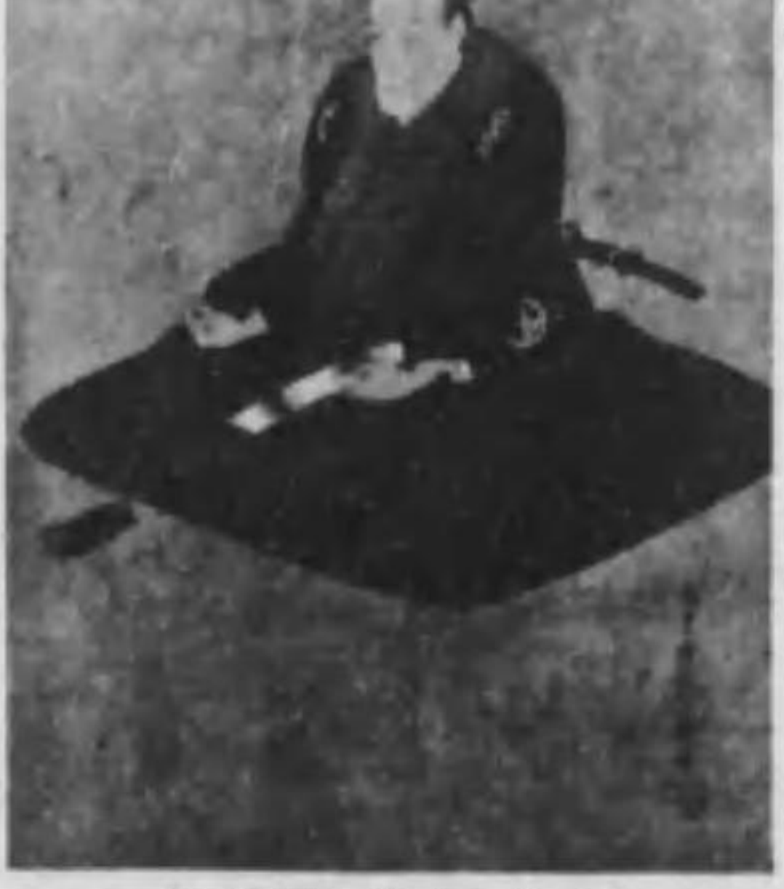
正宗白鳥

爾來作家生活に入り、數篇の長篇小說、數十篇の短篇小說、脚本數種、その他多くの隨筆を公けにして今日に至つた。昭和三年十一月、夫婦相伴うて世界漫遊の途につき、四年秋歸朝した。【作品】彼の短篇小說は、百篇を越えてゐる。前に擧げたものの外、世評の高かつた作品を列擧すると、「泥人形」（別項）（明治四十四年）、「初旅」（大正三年）、「入江のほとり」（同四年）、「牛部屋の臭ひ」（別項）（同五年）「死者生者」（同年）、「毒婦のやうな女」「尾花の蔭」（同九年）、「人さまざま」（同十年）、「生れざりしならば」（同十二年）等。長篇小說には「二家族」（別項）（明治四十一年）、「落日」（同年）、「毒」（同四十四年）、「生靈」（大正元年）、「波の上」（同五年）、「稻妻」（同十一年）、「人を殺したが…」（同十五年）等がある。

【批評】彼は人生の最も平凡な姿を最も深く鋭く感受し、平凡生活に如何に戰慄すべき要素があるかを世に示した作家である。彼の特色の凡てはそこから出發してゐる。彼は決して光明ある人生を描いたことがない。常に生きるに甲斐なく、求めるに頼りのない人生になほも喘ぎながら生きて行かねばならぬ生活の姿を克明に寫し出す。大體から見て、彼の作には人生に何等の光明もなく、信仰もなく、無自覺に生きて行く中產階級者及び下層民の生活と、初めには光明もあり、理想もあり、青春も戀もあるが、次第に幻滅を感じて、投げやりになり、頽廢的となるやうなインテリゲンチャの生活が展開されてゐる。それ等の生活のあらゆる場合、あらゆる樣相を表はしたのが、彼の作品の大部分である。尠くとも大正十一二年頃、主として戲曲を書き出すまではさうであつたと見てよい。創作慾を專ら戲曲に移すやうになつた彼は、內容的にも小說では盛り得ず、たとひ盛り得ても效果がより少くなるやうな主題へ轉向した。卽ち人生の平凡・無益・虛無・幻滅から、終には生ぜずにはゐない鬼氣・妖氣が、その發言を求めるのであつた。尤もこの傾向は、小說に於ては、古くは既に「微光」などにも仄かに見え、小說として比較的近作に屬する「毒婦のやうな女」「生れざりしならば」等に現はれてゐるが、その後の戲曲「人生の幸福」（別項）「影法師」の如きに至つて愈々尖銳の度を加へて來た。彼はニヒリストだといふ定評を得てゐる。幸福さうに公園を散步してゐる若い男女があれば、彼等から早速その幸福を奪ひ去つてしまふ。さういふ意味で、彼はニヒリストだ。彼くらゐロマンチシズムを否定し拒否する作家は日本に珍らしい。その點では、彼はロシヤのチェーホフである。ただ彼とチェーホフとが異なる點は、彼が完全に突き放した第三者的、寧ろ冷笑的態度で以上の如き生活を描いてゐるに對し、チェーホフは飽くまでも淚を以て抱くやうな氣持で、虛無・自滅・頽廢の生活を描いてゐる點である。技巧家として彼は淡々として投げやり、所謂無技巧的に見えて、最も細心に表現的努力を積んでゐるやうに思はれる。所謂無技巧の技巧の極致に達してゐる。彼の表現樣式は決して新しくはない。どうかすると西鶴や草雙紙を思はせる場合もある。併しながら、それにも拘らず、新しく讀ませるところに、彼の老熟さがある。（宮島）

雅望（まさもち）　國學者・狂歌師　【姓名】石川氏。字は子相。通稱糠屋七兵衞、後、中村屋五郎兵衞【號】宿屋飯盛・六樹園・蛾術齋・五老翁【生歿】寶曆三年十二月十四日江戶に生れ、天保元年（二四九〇）閏三月二十四日歿す。享年七十八。【法名】六樹院臺譽五老居士【墓所】淺草黑船町正覺寺（廢寺）地中哲相院【家系】祖先は詳かでないが、代々糠屋七兵衞を通稱とし、彼の四代前から旅籠屋を業とした。父豐春は石川家から糠屋へ養子に來たもので、その妻は家付の娘であるが、この石川家は元北條氏の臣で、三代孫三郎は天正の亂に小田原で戰死した。豐春は石川豐信と名乘り、又秀葩と號した浮世繪の大家で、彼も弱年の頃父に就いて畫を學んだ事があり、蛾術齋の號はこれに基いたものである。又彼もこの時より石川姓を名乘る事となつたが、糠屋の本姓は加藤であつたとの說がある。雅望は五男であるが四兄は皆夭折し、その妻りきは相川久左衞門の女で、その子の淸三郎は鹿外樓淸澄（別項）と號して、父と共に狂歌を詠じ、五側の判者として名高く、その子に梅太郎・松三郎・竹四郎といふ三人の兄弟があつて長子梅太郎は梅多樓菅編と號し、靈岸島本湊町に筆耕を業とし、店では紙類を鬻いでゐたが、天保の末、四谷傳馬町に移轉し、明治三年に歿す。

【閲歷】初め津村宗庵（正恭）に就いて國書を學んだといふのみで、その後は獨學自修、和漢の書を涉獵し、博覽强記、狂歌師中での學者と稱せられた。一說には漢學を古屋昔陽に、書道を澤田東江に學んだといふ。初めは小傳馬町（舊名六本木卽ち六樹園の號ある所以）で宿屋を營んでゐたが、寬政三年公事宿の嫌疑を蒙つて江戶構へに處せられ、妻子と共に府中在鳴子村に退隱し、更に內藤新宿に移つた。その顚末は「不問物語」に精しい。晚年は靈岸島の孫梅太郎方に同居し、同家で病歿した。狂歌は初め頭光に從ひ、後、四方赤良（別項）に師事し、終に一家を成してその社中を五側と稱し、頭光・鹿都部眞顏・銭屋金埒（各別項）と共に、狂歌四天王と呼ばるゝに至つた。文化の初年眞顏が俳諧歌を唱道したのに反對し、狂歌は落書より出たものだと論じてこれと爭ひ、一時絕交に及んだが、文化十四年獨山人の仲裁に由つて和解した後、眞顏と共に宗匠號を授かり、その披露會を催した事もあるが、この宗匠號授與の事は全く或る人の詐欺に出たもので、眞顏に宗匠號を授かつたのは、碑文に「京師樹神之家、嘗覺君之著書、感歎不措、授以宗匠之號、叙之法眼、歿之後宣文始到于東都」とある通り、飯盛が歿した後の事である。文化・文政年間は實に雅望の全盛期で、眞顏の四方側に對峙して、全國に亙つて門人三千人を有し、その中より數十人の判者を出してゐるが、就中、楓嬌屋・神歌堂・棣樹園・六朶園・六史園・江都園・六梯園・條樹園全亮等は勝れた門弟であつた。【人物】所謂學者肌の性格で、自信が強く、寬裕溫柔の風に乏しく、ために人と爭う



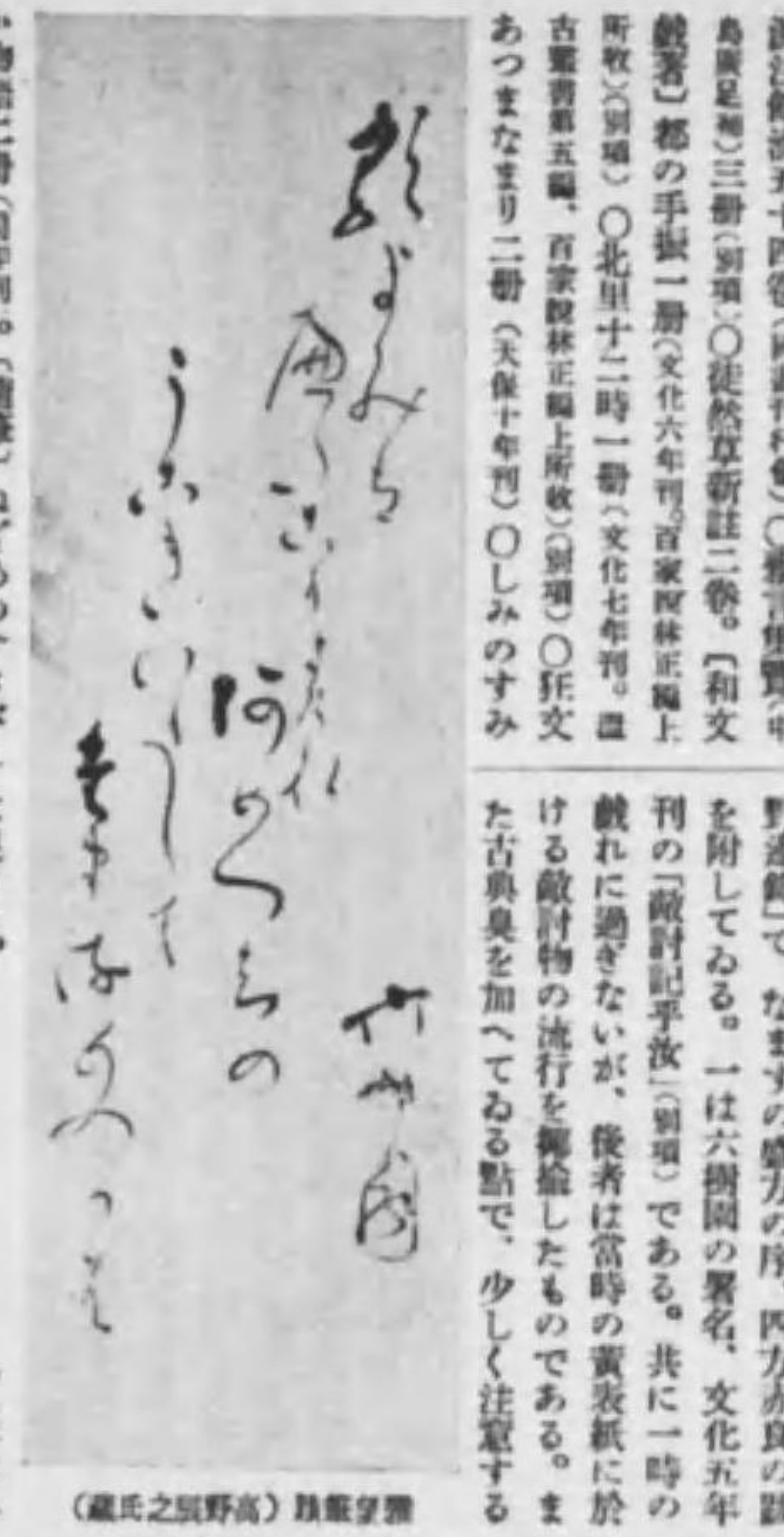
石川雅望（國貞畫）

て敵を作る事もあつて、「嬉遊笑覽」の著者の如きは「飯盛は大言して人を誹る本性なり」と評してゐるが、一方また知己に對しては友情に厚く、門人を薫陶するにも嚴格のうちに懇切なところがあつたと云ふ。

【著書】石川雅望集（有朋堂文庫）○六樹園家集野崎左文編（新群書類從第十所收）。【國文關係】源注餘滴五十四卷（國書刊行會）○雅言集覽（中島廣足補）三冊（別項）○徒然草新註二卷。【和文戲著】都の手振一冊（文化六年刊。百家說林正編上所收）（別項）○北里十二時一冊（文化七年刊。畫古叢書第五編、百家說林正編上所收）（別項）○狂文あつまなまり二冊（天保十年刊）○しみのすみか物語二冊（同年刊）。【隨筆】ねざめのすさび三卷（百家說林續編上所收）（各別項）。【自傳】不問物語一冊。【狂歌狂文に關するもの】五十人一首狂歌文庫一冊（天明六年刊）○百人一首狂歌袋一冊（同七年刊）○吾嬬那萬俚一冊（文化十年刊）○文化新撰狂歌百人一首（東殿畫）一冊（文化六年刊）○自讃狂歌集一冊（同八年刊）○狂歌五十人一首一冊（同十年刊）○狂歌堀川太郎百首二冊（同年刊）○狂歌堀川次郎百首二冊（同年刊）○狂歌百人一首（北齋畫）一冊（同年間刊）○萬代狂歌集四冊（同年間刊）等が整つたもので、又歌合體の職人盡狂歌合二冊（文化二年刊）○狂歌評判記（一名雅果報）一冊（同五年刊）○飲食狂歌合一冊（同十一年刊）○武者盡狂歌合一冊（同年間刊）○雪月花狂歌合一冊（同年間刊）○今様職人盡狂歌合（廣都三會評）二冊（文政八年刊）等。なほ狂歌狂文に關するものは天保初年に至る迄その數凡そ六十餘部に及んでゐる。（以上野崎）

【黄表紙作者として】二種の黄表紙の作がある。一は宿屋飯盛の署名、天明三年刊の「榛草野逢錦」で、なますの盛方の序、四方赤良の跋を附してゐる。一は六樹園の署名、文化五年刊の「敵討記乎汝」（別項）である。共に一時の戲れに過ぎないが、後者は當時の黄表紙に於ける敵討物の流行を揶揄したものである。また古典臭を加へてゐる點で、少しく注意するに足りる。（以上山口）

【讀本作者として】「近江縣物語」「天羽衣」「飛驒匠物語」「しみのすみか物語」（各別項）等の作を以て、讀本に特殊な位置を占めてゐる。もと文化文政頃、讀本の盛時にあつて、國學者としての素養になるもので、平明典雅な文章になり、雅文小說ともいふべきであるが、又支那文學を巧みに脫化し、傳奇風の浪漫小說をなして、讀本の特性を備へてゐる。殊に「近江縣物語」「飛驒匠物語」の二作は、讀本に獨自な立場を認めさせるものであらう。（以上笹野）



雅望筆蹟（高野辰之氏藏）

【國語學上の業績】雅望は中古文學の造詣深かつたが、直接國語學上の業績としては、「雅言集覽」（別項）を擧げねばならぬ。本書はその名の示す如く、所謂雅言のみを集めたものである。辭書としては語釋が不十分であるが、語彙は頗る豐富で、且つ出據を記してゐる事は大に多とすべきである。江戸時代には中古文學の研究が盛んであり、又一方擬古文が流行した爲めに、學者は中古文學の辭典を必要とし、その編纂に着手した人は實に枚擧に遑ない程である。而も多くは小規模で、自分の歌文を草する時の手控へに過ぎなかつた。本書は所收語の範圍は狹いが、語彙の豐富な點では江戸時代に於て本書の右に出づるものがない。辭書としては缺陷があるが、而も「和訓栞」「俚言集覽」（各別項）と共に江戸時代に於ける辭書を代表するものである。（以上龜田）

【參考】小說家としての石川雅望（武島羽衣）○六樹園漫考（萩上良一）（國語と國文學昭和五年）

雅之（まさゆき）　歌學者【姓名】鈴木氏。通稱一平【生歿】天保八年、下總國香取郡鏑木村に生れ、明治四年四月二十一日歿。享年三十五。【閲歷】雅之は、下總國埴生郡飯岡の田園歌人、神山魚貫の門に入つて作歌を學んだ。後、同國香取郡の歌人、伊能穎則の教をうけた。穎則は中頃東京に住み、大學大講義の位地にあり、後、故鄕に歸つて香取神宮少宮司となり、更に權少教正を兼補した人で、歌學・史學・神道に關する業蹟がある。雅之は、和漢の學に精しく、殊に古道では、夙くから一家を成してゐた。古道の立場は、獨自のものであつたとはいへ、大體において平田派を學んでゐたもののやうである。歌學については、「歌學正言」「歌學新語」の二書がある。「歌學正言」は、慶應三年、雅之が三十一歲の時に成つた書で、「歌學新語」は「歌學正言」の前後に著はされたものである。情を第一とし、言葉と調とは、それに次ぐべきものとすること、俗言を退け、雅言を取ること、調の價値は昔も今も變ることはないから、古きに從ふべきこと、二書は大略、かう說いてゐるのである。景樹の歌學に、一矢をむくいてゐることが解るのである。雅之は、この方面では宣長を思慕してゐた。明治の初め、大學少助教となり、後、宣教中講義生に任ぜられた。早く世を去つてはゐるが、しかし多くの業績を殘してゐる。

【著書】古事記譯解○日本書紀名物正訓○宮賣神考○天津祝詞考○天津祝詞說略○撿賢木○鎭魂說略○理學新論○史論○民政要治○治安策○活語全圖○詞の花從○類題八代選○類題清風集○類題清風集二編○百艸百首○花實百首○歌學正言○歌學新語○春秋贊義○大學辨○論語辨○中庸辨○孟子辨○花のしべ○客居偶錄○客居雜錄○四大恩旨

【參考】農村の生んだ國學者鈴木雅之（村岡典嗣）（思想昭和五ノ八）（窪田）

雅嘉（まさよし）　國學者【姓名】尾崎氏。通稱俊藏（春藏ともいふ）。字は有魚【號】蘿月庵・華陽・春の屋・博古知今堂【生歿】寶曆五年大阪に生れ、文政十年（二四八七）十月三日歿す。享年七十三【法名】清譽院石叟蘿月居士【墓所】大阪市朽楓坂春陽軒【閲歷】初め醫を業としたが、少時より讀書に耽り、學問の進んだところから、後、醫業を廢し、學者として立ち、多くの書を著はした。歌をもよくし、中世の體を好んで詠み、老いていよ〳〵その調が高かつた。國學に、漢學に、歌道に、就いて學ぶ者が多かつた。その人物の善良であつたことは、門人淨邊寛之の書いた小傳に、「たときに諂ふ事なく、初學びの者等をねもごろに

きとし云々」と記されてゐる。餘技としては、香道に達してゐたといふ。子がなく、蜂谷川子喬の子某がその跡を嗣いだ。雅嘉の家は、「書を講ずを以て業とするが故に云々」と「三十六家集略傳」に記されてゐるところから、雅嘉自身もその業を營んでゐたやうに思はれて來たが、住所その他から、幸田成友博士はこれを否定してゐる。前記の寛之の小傳にも、雅嘉の文稿・歌稿の類にもその由は見えない。

【著作】群書一覽六冊（享和二年刊）○蘿月庵國書漫抄七卷（國書刊行會編百家隨筆第一册に收む）○古今集鄙言二十冊（寛政八年刊）○古今集兩序鄙言二冊（寛政八年刊）○百人一首一夕話九冊（天保四年刊）○百人一首ひな言四冊（刊）○掌中題林抄一冊（寛政九年）○和歌呉竹集（校）十冊（寛政七年刊）○和歌枕詞補註二冊（寛政十年）○增補和歌明題部類二冊（寛政六年）○續和歌明題部類二冊（寛政六年）○增補松葉名所和歌集八冊（刊）○新松葉名所和歌集二冊（刊）等。

【參考】尾崎雅嘉（幸田成友）（讀史餘滴の內）○尾崎雅嘉傳補遺（同上）（上方六）（森）

眞潮（ましほ）　國學者【姓名】谷、また大神氏。初名擧準、字は丹內、通稱虎藏【號】北溪【生歿】享保十二年正月三日に生れ、寛政九年（二四五七）十月十七日歿す。享年七十一。【墓所】秦泉寺山【閲歷】土佐國香美郡山田村に神道家谷垣守を父として生れた。祖父の重遠は山崎闇齋に師事した垂加神道家であり、父垣守も京都に於て神道家玉木葦齋に學び、又眞淵の門に入つて國學を研鑽した。眞潮は幼少から俊傑の質で、世俗の頽廢を歎き、上書して政治の得失を論じた事があつたといふ。初め藩の教授役となり、轉じて浦奉行となり、祿百五十石を食んだ。善政あり、在職數年にして辭したが、更に天明七年山內豐雍の藩政改革に際し、郡奉行兼普請奉行に擢でられ、物頭格に進んで官祿五十石を加給され、ついで大目付役となり、前に給する所の官祿を以て世祿に併せ、別に五十石を支給された。彼は固辭したけれども、藩主許さず、努めて事を執らせた。然るに藩制上儒者としてかくの如き位置に立つた先例がなく、非難が續出したけれども、彼はこれに屈せず、あくまで中興の事業を助け、藩主の歿後は辭して再び教授役となつた。三子皆夭折し、弟好井（萬六）を養つて嗣子とした。【著作】神道本論（帝國圖書館藏、土佐國群書類從第一五〇册中「北溪集」にある。同集にはこの外、武良三鑒論・令無厭・論佛及び詩經春秋の評論・人物傳等所收）○流澤遺事（同類從第二二冊）○北溪先生獻芹○北溪獨集一卷（同類從第三一冊）○論孝○祇事記僞撰考○御國の學び○家內獨見書辨○北溪雜筆○孫子秘解○東武旅日記○歸郷日記○北溪遺稿三卷○軍役考○古事拾遺等。

【人物・學風】父垣守が江戸に在つて在滿や眞淵に教を乞うた時、共に國學に志した。眞淵にうけひ文を出したのは、寶曆十三年（三十七歲）である。土佐に歸住してから神道・儒學と共に國學の奬勵に力を入れ、特に「萬葉集」の研究に白文を用ふべきを主張せる如きは注意すべき點である。門人今村樂・横田美水の著はした無點活字本「古萬葉集」（享和三年刊）はその成果であるが、更に門下中に中山厳水・宮地仲枝等が「萬葉集」研究者を出し、仲枝門下には鹿持雅澄（別項）が出てゐる。神道に於ては父祖と傾向を異にし、別に一家の見を樹てた。儒學は程朱學を本とし、雜ぶるに諸家の說を以てし、また兵學を好み、最も孫子を宗とした。雅量があつて直言を好んだが友誼に厚く、和歌を嗜み、研究には甚だ勤勉であつた。

【參考】北溪先生行狀（土佐國群書類從卷八一）○土佐人物傳（土佐國群書類從卷六）○土佐に於ける萬葉學の源流（佐佐木信綱）（史學雜誌二八ノ六）○萬葉集古義の特質と系統（久松潜一）（校本萬葉集首卷下）○國學者傳記集成○日本教育史資料第五册（西尾）

間島冬道（まじまふゆみち）　歌人【通稱】萬次郎【生歿】文政十年十月八日名古屋に生れ、明治二十三年九月三十日東京に歿す。享年六十四。【閲歷】維新の際勤王を唱へ、權辨事に任じ、次いで涌谷縣知事となつたが、後辭して十五銀行支配人、日本鐵道會社檢査役等になつた。明治十九年十一月、御歌所寄人に列し、歿前正五位に叙せられた。【著書】歌集には、「拜月和歌集」「冬道翁詠集」「間島冬道翁全集」等があり、また歌話がある。

【歌論】「古今集」を尊重してゐるが、歌の起原說として性戀を說いてゐるのは注目される。歌の技巧に就いても說いてゐるが、歌のひきつける力は、「まこと」であるとする見解には、注意すべき點が多い。彼の古今的な歌風と共に併せてその歌論を見るべきである。（相原）

交丸（まじまる）　樂器【名稱】交臍とも書く。【解說】笙の名器。和漢の竹を相交へて作つたもの。「續世繼」には「此の大臣（源雅定）は、笙の笛など優れ給へりける。（中略）交丸といふ笙をも傳へ給へり。交丸とは唐の竹日本の竹の中に、優れたる音なるを擇び作りたるとなん。交丸といふ笙の笛は二つぞ侍るなる。時元（豐原）が兄にて時忠といひしも作り傳へ侍るなり云々」とある。「續教訓抄」十一にも、やゝ詳しい記載がある。この交丸に就いては時忠がこれを得たる時の物語と、後にこれを源義光に傳へて、義光後三年の役に出征の時、再びこれを手に入れたことの物語と二つの傳說がある（續世繼）。（田邊）

增鏡（ますかがみ）　歷史物語【著者】（一）一條冬良（兼良の子）。古くから傳へられた說であるが、冬良の生れた寛正五年より八十九年前永和二年の奧書ある永和本、六十三年前應永九年寫の應永本が發見されたので、誤りである事が明かとなつた。（二）二條良基。（三）一條經嗣等の說もあるが、何れも確證がない。（四）南朝に心を寄せた人である事は、筆致から察して知られるが名は分らない。【名義】眞澄鏡の略。增は借字。序に話者老尼の歌「愚なる心や見えむます鏡古き姿に立ちは及ばで」、筆記者の歌「今もまた昔を書けばます鏡ふりぬる代々のあとにかさねむ」と二つの歌をあげて、著者自ら書名の意を示してゐる。「大鏡」「今鏡」（各別項）等のあとをつぐ意及びそれ等に對して著者が謙遜の態度である事が分る。

【參考書】「群書一覽」「國史學の栞」（小中村清矩著）には十卷と記してあるが、永正本奧書には三冊とあり、現存の諸本は三冊・五冊・六冊・十冊等、種々あつて一定しない。蓋し全編二十章より成るを以て、便宜綴ぢ合せたるによるものであらう。【成立】後醍醐天皇の元弘三年即ち北朝光嚴院の正慶二年（記事最終の年）以後、後龜山天皇の天授二年即ち北朝後圓融院の永和二年まで（永和二年の奧書本あり）の四十三年間。恐らく建武中興後間もなくであらう（伴信友「比古婆衣」）。【諸本】（一）永和本。永和二年の奧書がある。女子の手に成れる最古の寫本なること、應永本の奧書によつて知られるが所在不明。恐らく佚亡したであらう。

（二）應永本。應永九年の奧書がある。永和本を寫したもので、その奧書に曰く、「永和二年卯月十五日。この本女房のうつしがきにて侍を、其まゝうつし侍る程に如法ふしんなることども侍り。いとど僻書も多く侍らん。よき本をたづねてしづかになをし侍べし。應永九年六月三日うつしおはりぬ」。この奧書ある寫本は、尾張德川家本（奧書にその應寫本あり）・北野本・賀茂本・柳原家本・京都田中敎忠氏藏本等である。（三）永正片假名本。永正十八年の奧書がある。谷森善臣藏。（四）烏丸光廣寫本。松井簡治氏藏。（五）近衞家本。（六）前田家本。（七）神宮文庫本。（八）淺野長祚（號梅堂）舊藏古寫本。靜嘉堂文庫藏。（九）古活字本。狩谷棭齋舊藏。靜嘉堂文庫藏。（十）屋代弘賢校本。古活字本・永和本・塙本・前田本・横田本・絹葉本・米山本、外數本を以て校合す。「史籍集覽」に收めてある。（十一）大澤清臣校本。應永本・永正本・屋代校本・米山本等、十數本を以て校合す。大澤小源太氏藏。（十二）校定增鏡。萩野・松井・關根三氏合編』校定四鏡のうち、主として烏丸本によつて校定した。（十三）增鏡詳解本（別項）。和田英松・佐藤球合著。なほ叢書に收められたものは、史籍集覽・日本文學全書・國史大系・國文大觀・國民文庫・有朋堂文庫・校註國文叢書・新釋日本文學叢書・校註日本文學大系等である。

【錯簡】古寫本・古版本共に誤脫・重複・錯簡があつて、前後連絡しない個所がある。後出內容の項に揭げた順序は、「增鏡詳解」（別項）及び國史大系本に於て、史實を考證して年代順に列べかへたものである。本文の錯誤に關する從來の研究の結果を總合すると、その主なるものは次の三點である。

（甲）原本第六　おりゐる雲　第七、烟の末々　第八、北野の雪　第九、山のもみぢはを、新たに第六、烟の末々　第七、おりゐる雲　第八、山のもみぢは　第九、北野の雪の順におきかへた事。

（乙）原本第五、內野の雪の餘りを、新第六、烟の末々の餘りに移した事。

（丙）北野の雪の初に重複する山のもみぢはの餘りを削つた事。

然るに烟の末々・北野の雪の二篇は、永正本・近衞本・前田家一本・尾張家本にない點から考へると、これは贅篇で、本書の作者（又は別の人）が委しい材料によつて別に書き直したものであらう。贅篇とすれば重複もなく、年代錯誤もなく、隨つて本文を變更する必要はない事になる。

【組織・內容】三鏡或は四鏡中、最後に出た本書は、壽永二年八月二十日後鳥羽天皇踐祚から、元弘三年六月五日後醍醐天皇が隱岐より二條富小路里內裡還幸まで、十五代百五十一年間（治承四年後鳥羽天皇御生誕より踐祚まで、略敍せる故、これを加へると百五十四年。うち第三藤衣の次の仁治元年、第五內野の雪の次の寶治元年、第十四つゆの小櫛の次の德治元年の記事はない）の事實を記した編年體の歷史物語である。著者は朝廷に滿腔の情を寄せ、武家の跋扈を憤つた人で、賴朝が總追捕使となつたのを「日本國の衰ふるはじめ」（新島守）と考へ、鎌倉幕府開創以來の公武爭鬪史を明かにしようとの理想から執筆したのであるから、蒙古襲來の如き大事件も簡略に叙し去り、朝廷の勢力を弱めようとの武家の策から出た兩統迭立關係、公武の葛藤に根ざして生れた變態的の攝家將軍、親王將軍、武家に接近した爲めに榮えた公家の西園寺家などについては委しく記し、特に公武爭鬪の焦點である承久・元弘の二大亂には最も力をそゝいだので、これが本書の二大中心をなして居り、後鳥羽院に關する第一おどろの下、第二新島守、後醍醐天皇に關する第十八村時雨、第十九久米の皿山、第二十月草の花の各章は全卷中出色の文字である。結構は「大鏡」「今鏡」「水鏡」（各別項）にならひ、物語體にし、「榮華物語」（別項）を摸して卷中の雅語・歌語による優雅の題目を附してゐる。序文に於て、場所は嵯峨清涼寺、時は鎌倉時代、或る年の二月十五日釋迦入滅の日、人物は老尼（百歲以上）と尼の具した年若き女房と、筆者その他を點出して「大鏡」に倣つてゐる。本文（群書本・國史大系本による）は、

第一、おどろの下（後鳥羽・土御門・順德）
第二、新島守（順德・仲恭）
第三、藤衣（後堀河・四條）
第四、三神山（四條・後嵯峨）
第五、內野の雪（後嵯峨・後深草）
第六、烟の末々　第七、おりゐる雲（以上後深草）
第八、山のもみぢは　第九、北野の雪　第十、飛鳥川（以上龜山）
第十一、草枕　第十二、老の波（以上後宇多）
第十三、今日の日かげ（伏見）
第十四、つゆの小櫛（伏見・後伏見・後二條）
第十五、浦千鳥（後二條・花園）
第十六、秋のみ山　第十七、春の別　第十八、村時雨　第十九、久米の皿山　第二十、月草の花（以上後醍醐）

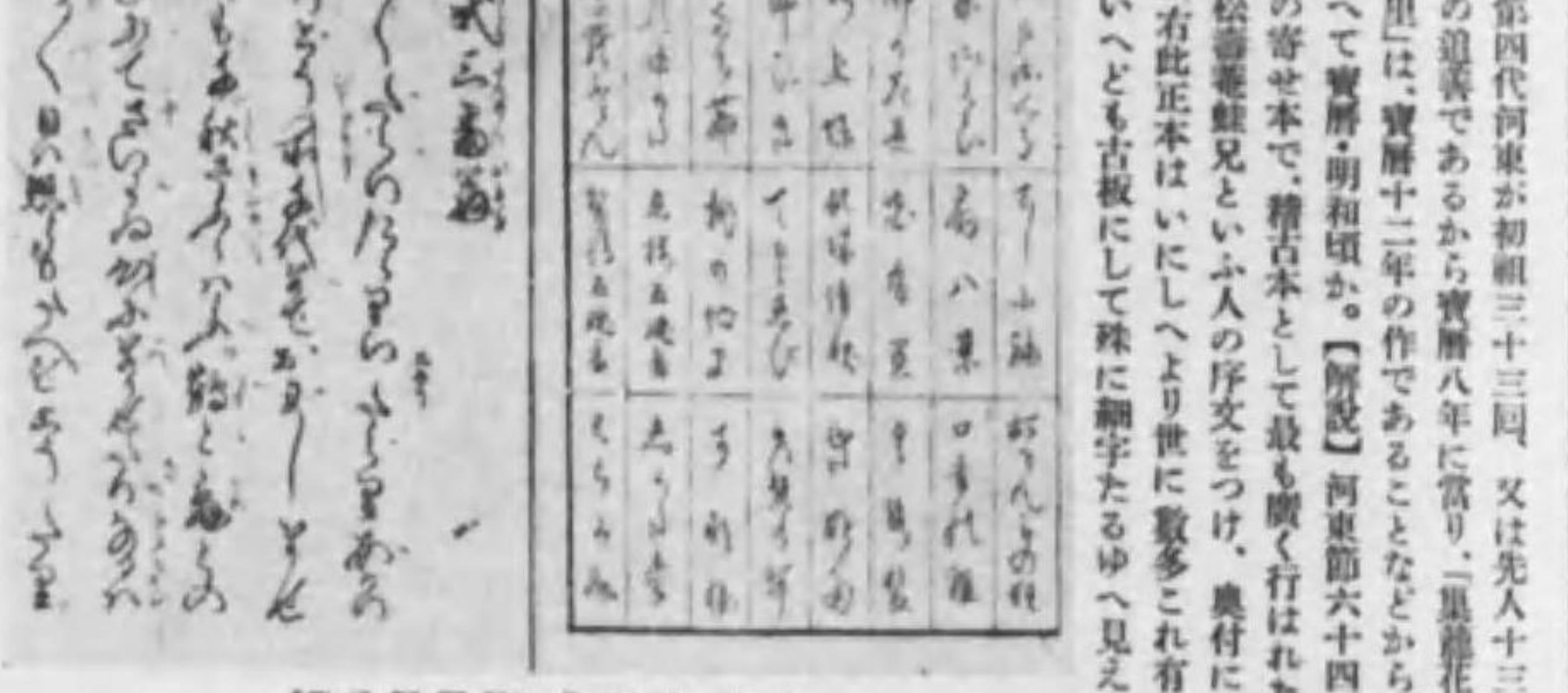
【價値】「大鏡」は、道長の榮華を描くを目的とした故紀傳體（別項）が適當であるが、本書は長期間にわたる公武の爭鬪史であるから、編年體（別項）によつた事は適當なる述作の態度であり、材料も公家の日記によつたと思はれ、史實もほぼ正確であり、且つ他書に見られぬ獨特の記事があつて、史書として大なる價値がある。文學としては著者の學殖が多くの國書、有職故實は固より、內典・外典にも弘い造詣を持つてゐたので、語彙豐富、引用自在、特に「源氏物語」「榮華物語」の愛讀者らしく、その影響を著しく受け、優雅艶麗の筆致で情趣を寫した部分が優れて居り、本書の理想とは緣遠い情事說話の多い點は、假作物語に類した面白味もある。元弘・建武の頃は、既に文體は平安朝に比し著しく變つて、和漢混淆の強い新文體が行はれてゐたのに、擬古の雅文體で記したのは、著者に尙古的公家氣風の強かつたことが察せられ、隨つて氣魄乏しく迫力を缺き、袴着・元服・花紅葉の遊宴等、儀式・行事・服裝に關する同種同樣の記事が重出する點は、「榮華物語」（別項）とひとしく、頗冗漫單調の感がある。公武の葛藤を描くを目的とはしたが、朝威を振興せしめようとの強烈なる熱意が乏しかつた爲めに、「神皇正統記」（別項）に見えるやうな勁健な筆致は見られないし、「大鏡」の結構を摸したが、歷史の眞相を明かにし、これに批判を加へた「大鏡」の痛快味はない。老尼の物語體に擬した最初の結構は面白いが、「大鏡」の如く全卷を通じて對話者が活躍してゐない。「今見ゆべき事なれども、物の心もとなきは覺ゆるわざぞかしと、例の口すげみてほゝゑむ」（三神山）など、時にその風丰を敍してはゐるが、終の部分になると全く老尼の物語である事を忘れ、對話ではなく單なる敍述に陷つてゐるのは、作者の大なる不注意で、首尾不統一の譏を免れない。要するに「源氏」「榮華」「大鏡」等を只管摸倣し、獨創の妙味に乏しいのが本書の最大缺陷であるが、四鏡中「大鏡」につぎ第二位を占めるべきものである事は確かである。

【參考】增鏡問答 伊勢貞丈〇增鏡系圖目錄 土肥經平〇增鏡詳解 和田英松・佐藤球 〇口譯增鏡 內海弘藏〇校定增鏡新釋 永井一孝・竹野長次〇新譯增鏡 高木武〇增鏡通解 和田英松・石川佐久太郎 〇參考增鏡新釋 小林好日 〇比古婆衣卷六 伴信友〇增鏡攷 岡本保孝（靜嘉堂文庫藏）〇三鏡考 高田與清 〇增鏡の著者につきて 松本愛重（史學雜誌二ノ一二）〇增鏡解題（史學界一ノ二、六ノ六・七）〇古文學書解題及評論 小中村義象（國學院雜誌一ノ一二）〇歷史物語の本質 沼澤龍雄（國語と國文學三ノ六）〇歷史物語 芳賀矢一　（岩淵）

增鏡詳解 ますかがみしやうかい 註釋書 和裝四冊合本洋裝一冊【著者】和田英松・佐藤球（小中村淸矩校閱）【刊行】明治三十一年、明治書院。【解說】一冊本は卷頭に頗る精細な索引・系圖・年表と主要地圖とを附してある（四冊本の附錄）。本文は印本を基とし、大澤清臣校本・某家舊藏古寫本・史籍集覽本によつて校定し、諸本の異同を頭註として揭記してあるのみならず、大なる錯簡を改めて年代の錯誤を除き、前後の混雜を防いだ點は一大特色である（增鏡參照）。語句の解釋は要を得、出典は委しく、史實の參考資料も提示し、且つ各卷とも槪要目次を卷頭に揭げて、全卷の大要を一瞥する便に供し、緖言に著者・異本・錯簡についての考說をあげたなど、凡て詳解の名に負かない。從來見るに足る註釋書のなかつた時に出でて大に學界を稗益した良著である。（岩淵）

十寸見河東 ますみかとう 「河東節」を見よ。

十寸見要集 ますみえうしふ 河東節寄本 半紙本一冊【刊行】未詳。但し「ますみざら」は、第四代河東が初祖三十三回、又は先人十三回の追善であるから寶曆八年に當り、「濡燕花有里」は、寶曆十二年の作であることなどから考へて寶曆・明和頃か。【解說】河東節六十四種の寄せ本で、稽古本として最も廣く行はれた。松壽菴蛙兄といふ人の序文をつけ、奧付には「右此正本は いにしへより世に數多これ有といへども古板にして殊に細字たるゆへ見えわからず依て此度太夫河東自ら筆を採て文句の誤りを正し當世見やすからむが爲六行りに致し赤板元を今あらためて淺草里以勢屋吉十良に相定めあまねく一世に弘むる者也　十寸見河東印　武江淺草御地內　伊勢屋吉十郎板」とある。總目錄を揭げる。


十寸見要集（菅野堅氏藏）

式三番叟　三番叟
まつのうち　かぶろ高藏　竹婦人送
京わらんべ　四季のはうらひ
貝づくし　[illegible]八景
浦見八景　水上龍の羽音
帶曳男結び　灸すへ[illegible]の[illegible]
酒中花　紋づくし
紋づくし寶の竹隅田川　竹馬の鞭
きぬた　式三獻神樂獅子 上の卷
神樂獅子忍びの段下の卷　江のしま
きやら女新所帶　會作出曙齋の出づかひ
放下僧の道行　三段目 [illegible]八郞館の段
放下僧 同かつこのだん　[illegible]泉館
狂女のたん　隅田川舟の內 上の卷
すみだ川 下の卷　[illegible]すき曾我
ゆんぶく五郞　袖ごめそが雙紙の段
さらがふみ　[illegible]物語
小袖物狂の段　小傾城名鶴のまき
錦がたみ　ひぐせ川
そで錦　水調子
風流しかた松　みつの丑
江口の道行　[illegible]島忍びのたん
二星鵲のかけ橋　[illegible]のやま
丹前里神樂　[illegible]
ぬれあふぎ　いの字[illegible]
亂髮夜編笠　よるのにしき
千とせのえだ　ときはのまつ
はつかの月　くぞつの[illegible]
[illegible]男の黑髮　[illegible]反魂香
弁六殿の家[illegible]　富士甘月里
ますみずくし　鏡の[illegible]
ゆかりの江戶櫻
三番叟[illegible]　[illegible]花有里

二冊本は序も跋も同樣であるが、上卷に三十九、下卷に四十二、合計八十四種を收め、大部分は兩者共通であるが「とらがふみ」「そで錦」の二を省き、「鹿家」「おせん物ぐるひ」「やわらぎ曾我」「助六後日道行」「きよら道行」「伊達ひめ道行」「しのだづま」「やりおどり」「傾城うけ狀」「柱ごよみ」「ひとふ寺」「うかれ鞘」「ぬれゆかた地主の櫻」「さくらの鞨」「[illegible]反魂香」「助六廓花道」「四季の角乘」「常陸帶花捌」の十八種を加へてゐる。この增補のうち、最後の「常陸帶花捌」は寶曆三年に六代目河東の節付なれば、同年以後の發行たることは明かである。なほ序文の裏の太夫三味線の連名にも左の異同がある。

（一冊本）
十寸見沙洲　山彥河良
十寸見蘭洲　山彥源四郎
十寸見[illegible]　山彥[illegible]
江戶太夫河東
十寸見[illegible]　山彥二郞
十寸見[illegible]　山彥新九郞

（二冊本）
十寸見沙洲　山彥河良
十寸見[illegible]　山彥[illegible]
十寸見東佐　山彥百次
江戶太夫河東　山彥孫四郞
十寸見東洲　山彥二郞
十寸見[illegible]　山彥[illegible]
十寸見東市　山彥長藏
十寸見文示　山彥半次

增山金八 ますやまきんぱち【別號】吳山【閱歷】未詳。劇作家【本名】未詳。立作者になつたのは安永三年十一月の森田座が最初らしく、寬政中期までその名が見えるが、立作者として出勤したのは、そのうち幾年もないやうで

ある。【作品】○宮土産顔見世（安永三年十一月森田座。義經記の顔見世狂言）○信田楼蓬萊曾我（安永四年正月森田座。曾我に信田小太郎・梅の由兵衛）○けいせい月の都（安永四年八月森田座。不破名古屋と御堂前敵討）○幼兒硯青柳曾我（安永六年正月中村座。曾我に曾我の若）○闇狩梅愷樂（安永七年十一月市村座。在柄平太と荒岡源太）○蝶千鳥若榮曾我（安永八年二月市村座。曾我に曾我の若）○時花英雄太平記（安永八年十一月中村座。太平記の顔見世狂言）○初紋日艶郷曾我（安永九年正月中村座。曾我に富士狩開）○姿視越路の文月（安永九年七月中村座。川中島合戰）○御影講御法鉢木（寛政三年十一月河原崎座。佐野の日蓮記）○けいせい金秤目（寛政四年正月河原崎座。伊達騒動に女鳴神）○神明祭禮女團七（寛政四年八月河原崎座。女團七とお島鐵兵衛）〔渥美〕

マソヒズム〔英〕Masochism【名義】變態性慾の一種で、被虐待淫亂症、又は受働的疾痛淫亂症といふ譯語がそれに當る。獨逸のザヘル・マゾホ（Sacher Masoch）の小說に現はれた變態性慾に對して、フォン・クラフトエビングが命名した語である。【解說】自分が相手の者に虐待されて、それに堪へることによつて性慾の滿足を補つたり、又は滿足を得たりするところの特殊な性慾的心理狀態をさすのである。この反對の變態性慾はザディズム（別項）である。日本では谷崎潤一郎（別項）がこの方面に題材を得て、數種の小說を書いてゐる。〔宮島〕

再春菴種蒔　「三香堂」を見よ。〔宮島〕

眞龍　國學者【姓名】內山氏。幼名市六、後に彌兵衞【生歿】元文五年一月一日遠江國豐田郡大尾村に生れ、文政四年（二四八一）八月二十二日歿す。享年八十二。【閱歷】父は內山傳右衞門美眞と言つた。眞龍は眞淵と同じく渡邊蒙庵に師事し、蒙庵の子友益の女たる布佐を後妻に迎へた。後眞淵に古學を承け、眞淵歿後は宣長の弟子分となつた。小國重年はその高弟である。【著作】古事記謠歌註二卷（別項）○日本紀類聚解十五卷（文化九年五月十日成）（別項）○出雲風土記解三卷（天明七年二月十四日成）○遠江風土記傳十三卷（刊）○國圖五卷（享和三年一月成）○國號考（寛政八年の自序）○地名記十二卷○神號解。【學風】學問上の業績としては、記・紀・風土記の研究が主なるものである。その特徵とする所は學究的態度の確立してゐる點であつて、本文批評を精密にし、その校訂の理由を擧げ、先人の說を參考し、又比較研究を行つてゐる。記・紀・萬葉を修辭法上から歌調形と標してその結構を考究してゐる點、又「書紀」の記載法に於て訓假名は用ひられてゐないとしてゐる說等には注意すべきものがある。風土記の研究には本文校訂の嚴正を期したのは言ふまでもないが、更に實地踏査をなし、又地圖を附する等の努力を加へてゐる。先人の說としては主として契沖・眞淵に從ひ、宣長の說を駁する所が多かつた。自說を主張する點は主に風土記の研究に多く見られる。地方に於ける眞淵門下として著名な一人である。【參考】古學小傳卷一（清宮秀堅）○國學者傳記集成（大川茂雄・南茂樹）○國文學研究史（野村八良）○國學全史下卷（同上）〔西尾〕

松居松翁　劇作家【本名】眞玄【初號】松葉【生歿】明治三年二月十八日生れ、昭和八年七月十四日歿す。享年六十四。【閱歷】仙臺城下鹽釜町に生れた。祖父眞明は伊達家の財用方となつたが祿を食まず、父眞房に至つて士分に列した。十一歲、宮城中學校に入學したが、同十五年父を亡ひ廢學した。一時商業に就いたが、志を立てて上京し、國民英學會を卒業した。坪內逍遙の第一次「早稻田文學」（別項）創刊に際してその編輯に從事した。明治二十七年、處女脚本「昇旭朝鮮太平記」を讀賣新聞に發表した。同二十八年、中央新聞記者となり、後、報知・萬朝にも筆を執つた。この頃市川團十郎と知り、「市川團十郎昔話」を報知に連載した。又その頃から專心劇作に志し、三十二年先代市川左團次のために「悪源太」を執筆し、彼の死に至るまで數篇を提供した。その歿後は現左團次を扶けて、その相談役となつた。三十九年、歐米演劇視察の途に上つたが、途中から左團次と同行し、翌年歸朝した。かくて左團次歸朝第一回興行に當り、茶屋・出方を廢して今日の如き興行法を行つた爲め、一部の反感を買ひ、失敗を招いた。彼はその責任を負うて明治座を去つた。この頃より極度の神經衰弱にかゝり、一家を擧げて靜岡縣原町在に隱棲した。翌年秋、日比翁助・坪內逍遙等の懇請により上京した。駿河町人・大久保二八の別號を用ひたのはこの頃である。同四十四年帝國劇場に入り、翌々大正二年、河合・小織等と公衆劇團を組織した。同七年松竹の文藝部顧問となり、翌年再び戰後の歐米劇團視察のため外遊した。劇界に關係すること實に三十餘年、創作・飜譯・飜案の脚本は百篇を超え、その上演回數百五十回に近い。大正十三年從來の松葉を改めて松翁と號した。脚本の著作の外に、演劇に關する著述並に演劇時評の執筆も多く、晩年は松竹合名會社の顧問であつた。【業績】演劇界に於けるその業績は、まづ第一に劇場外部の作家の脚本を上演せしむる機運を作つたことを擧げなければならぬ。古い傳統を因守して座付作者以外の脚本には一顧をも與へなかつた當時の陋習を打破して、劇場を外部の作者に解放したといふことは、明治・大正の演劇の興隆に關しては絕大な關係を有してゐたのである。のみならず彼は演劇の實際家として泰西名戲曲の飜譯又は飜案を提供する外、或は舞臺監督乃至は有力な演劇界の一指導者としても、重きをなしてゐた。その脚本の種類の如きも、新歌舞伎劇乃至は史劇及び現代劇・社會劇・喜劇等の極めて廣い範圍に亙つてゐる。我が演劇界に於ける彼の業績は、日本演劇史の或る頁を飾るに十分なものがある。〔武藤〕

松居松翁

【參考】松翁年譜（松居桃多郎編（劇藝四ノ九））

松井須磨子　女優【本名】小林正子【生歿】明治十九年二月、長野縣埴科郡松代在清野村に生れ、大正八年一月五日東京牛込の藝術倶樂部にて歿す。享年三十四【法名】貞祥院實應須磨大姉【墓地】東京青山墓地【閱歷】家は代々眞田家の家臣で、父藤太は維新の際に佐幕黨として活躍した。正子はその末子である。六歲の時、上田の親戚長谷川家の養女となつたが、十六歲で養父を亡ひ、實家に引取られ、續いて父を亡つた。父の遺言により、翌明治三十五年四月姉夫婦を頼つて上京、戶板裁縫女學校に入學した。この年の暮、一度結婚したが離緣となつた。その後

自ら志願して某劇團の女優となり、同時に劇團の關係者前澤某と再婚した（二十二歲）。同四十二年（二十四歲）、文藝協會（別項）の女優募集に應じて、その第一期生となつた。この頃よりいよ〳〵藝を勵み、猛烈な稽古振に人々を驚かした。四十二年前澤と別れ、四十四年文藝協會研究所を卒業した。その年五月、帝劇に於ける第一回公演「ハムレット」に出演、オフェリヤに扮して好評を博した。嘖々囂々の世評を惹起した島村抱月（別項）との戀愛はこの頃から胚胎してゐた。この問題は彼等を非難の渦中に投じ、ために抱月は公職を辭し、文藝協會の幹部をも辭し、惹いては協會の解散といふ結果をすら招來した。しかし須磨子の熱情は、この苦境にある抱月を扶けて遂に藝術座（別項）の結成に成功した。その後の須磨子は、その死に至るまで藝術座のために奮鬪を續けた。而して女優としての彼女の眞價が發揮されたのは實にこの以後である。一方元來自我の強い須磨子は、藝術座の女王となるに及んでその我が儘は益々助長され、座員の反感を買ふこと屢々であつた。然るにも拘はらず六年の長期に亙つて一座の中心たり得たといふことは、やはりその天分を認めざるを得ない。その當り役は「人形の家」のノラ、「アンナ・カレニナ」のアンナ、「復活」のカチュウシャの如きである。かくてその得意の絕頂にあつた須磨子は、大正七年十一月五日抱月の急逝に遭ひ、悲嘆甚しく、遂に翌年一月五日その跡を慕つて縊死した。最後の舞臺は、有樂座の「カルメン」であつた。なほ須磨子には、「牡丹刷毛」の著がある。（藝術座參照）

松井須磨子（「故鄕」のマグダ）

【批評】彼女は、我が國の演劇界に純粹の新劇女優として大成した最初の女性である。役柄は浪漫的な傾向の劇的性格よりも、現實的な傾向の性格に成功した。その藝風は寛悧りな若干野性を帶びた精力的な裡に一脈の感傷味を湛へてゐた。この點が一般の觀客を捉へたのであつたらう。何れにしても彼女が藝術座の存在を、はじめて社會に知らしめたといふ點だけでも、その功績は十分記憶さるべきである。殊に演劇に對する熱意とその才能とは、よく藝術座を支へて、新劇界としては實に劃期的な事業を成就せしめたのであつた。〔水木〕

【參考】松井須磨子の一生（仲木貞一・澤田撫松）

松井柏軒　評論家【本名】廣吉【閱歷】慶應元年越後村松町に生る。十八歲の時、長岡市で發行した越佐每日新聞社に入り論說記者となつた。居ること四年、明治二十年、大橋佐平が博文館を起して出版業を始むるや、彼は編輯一切に關與し、博文館の發展に盡すところ多く、當時の著述になる「日本帝國史」は、訴訟事件を起したが、清新な記述として、その後、北村桑山との共同執筆になる「日本百傑傳」と共に當時最も多く讀まれた著述の一つである。二十三年秋、大岡育造の中央新聞を創刊するに際し、彼は廣津柳浪の推薦によつて入社し、論說記者となつた。江見水蔭・田山花袋・武內桂舟の諸氏同社にあり、この新聞が文學的光彩を放つてゐた時代であつた。三十五年聘せられて「萬朝報」に入り、四十年春、更にやまと新聞に入つた。大正三年、桂太郎の同志會成立に援助し、山本內閣の倒閣運動に力を入れた記者團中の有力な一人であつた。大正九年春、大連新聞の創刊に參畫し、翌年聘せられて松江の松陽新報主筆となり、今日に至つてゐる。中央新聞時代に「中央公論」の卷頭の論文を執筆して、論壇から注目された。平明な文體の中に、情理をつくし、感情に偏らない觀察が、その論文の特色である。【著書】日本內閣論○日本帝國史○日本百傑傳○伊太利獨立戰史等。〔高須・千葉〕

松尾　「神事物の謠曲」を見よ。

松岡國男　「柳田國男」を見よ。

松陰中納言物語　物語　五卷五冊【作者】未詳【名義】主人公が庭に多くの松を植ゑて、世人から松陰中納言と呼ばれたに由る。【諸本】古來翻刻された事なく、僅かな寫本によつて殘つてゐる。佐佐木信綱氏・前田侯爵家・名古屋圖書館・山口圖書館・水戶彰考館（二本）・東北帝大等に各々藏されてゐるが、著しい異同はない。ただ東北帝大本及び彰考館の一本には、「建德二年辛亥六月南陽伯（花押）」の奧書がある點は注目すべきである。【成立】「國朝書目」に「松蔭中納言」とあるのは、この物語を指すらしいが、それ以後殆ど紹介されずに最近に至つた。「風葉集」「無名草子」等にもこの名は見えないから、建德二年の奧書を信ずるとすれば、鎌倉末葉から南北朝時代にかけての成立と見なければならない。【梗概】〔山の井〕山の井の中納言と云ふ東宮職兼任の方があつた。笛が巧みで、常に御前に召されて、藤の內侍の琴の對手を仰せつけられる內に、何時か內侍を思ひ染め、乳母の侍從を語らつて文を贈るが手に取らうともしない。年も明ける頃、どうにか返事は來るやうになつた。如月十五日、帝が弘徽殿の花を御覽になる時忍んで行くが、折から上のお召しがあつて、內侍は御前に參上し、機會を取逃がして了ふ。〔藤の宴〕彌生、松陰中納言の家に藤見の御幸があつた。美しい松陰殿の樣子に御滿足のあまり、中納言は權大納言にされ、剩へ藤の內侍を下さるのであつた。翌日又春宮の行啓があり、宮は大納言の姬君に目をとめられ行末を契られる。大納言の故北の方は內親王であつたが、その間に十五になる少將、十三の妹君、次に田鶴君といふ童君があつた。今一人の幼い姬君は內侍にあづけて育てさせられる。折から東國に亂があり、大納言の弟右衞門督に武藏守を兼任させて、鎭定にさし向はされる。〔ぬれ衣〕山の井中納言は、この噂を聞いて心惱み、引籠つてゐると、長月初めの頃、左宰相中將、行川の少將、前右馬頭等が訪ねて來て大納言を盛んに嫉む。宰相は大納言に書を習つた親しい間柄であるが、內侍を戀ひしたことが知れて疎遠になつたのである。又行川の少將は大納言の姬君に文をやるが、春宮の事があるので大納言に妨げられてゐる。ところがこゝに麗景殿の女御は、大納言の故北の方と姉妹であるのに、何故か大納言と仲違ひされてゐる。又山の井中

納言の文を取次いだ侍從も疎遠され、大納言を怨んでゐる。相談は成つて、宰相は大納言に似せた文をかき、侍從の計ひで女御に宛てた戀文が屆く。一方、右馬頭は、大納言の弟右衞門督が、東夷を從へて都に攻め上らうとしてゐると讒言する。かくて大納言は捕へられて、隱岐の島へ流されて了ふ。〔あづまの月〕東夷を平定した右衞門督は、下野國に赴く。下野守の妻は、故大納言北の方の乳母の妹で、前右馬頭の美しい娘を育ててゐる。雙鷁の舟遊びの折、不思議な海女が現はれて、百濟帝が聖德太子に獻じたのを、守屋が奪つて難波の浦に捨てたと云ふ玉を捧げる。督は前右馬頭の娘と契り、共に都へ上らうとすると、何故か、下總國に止まれと命令が下つて來た。〔あしの屋〕中將（舊少將）の君は、父の島流しを嘆き、上にお願ひして須磨に籠る。山の井中納言の子少將も、別れの寂しさに耐へかね、暇を戴いて須磨を尋ねる。二人で寂しさを語るにつけても島の大納言は、どんなにか都が戀しからうと互に哀れがるのであつた。山の井中納言には、本妻の子以外に二人の子がある。一人はこの少將、今一人は美しい妹君、松陰中將はこの君に思ひをかけてゐた。山の井北の方が嫉妬深いので、姫は蘆屋に遁れて住むが、なほ物足りないのか、播磨國の祇承の官人に姫をやると言つた。この男は喜んで連れ出し、須磨の汀で船を探してゐた。折から船あそびしてゐた少將がこれを助け出し、姫の代りに車の中に蟹を入れる。男はあわてて、北の方にはかられたと思ひ、姫を返しに行く。北の方も一目見て、變化の物だと恐れ騷ぐ。少將はこの機會に姫を中將にわたして自らは京へ歸る。〔軍たがへ〕大納言が島流しされてから寂しい內侍の許に、侍從は中納言を、少納言は宰相中將をそれ〴〵勸める。上からも以前のやうに宮仕へしてはとの仰せがある。うるさい取りなしに萬一を慮り、內侍は頭中將家に隱して貰はうと車を請ふ。これを知つた侍從は、中納言から車を出させて西の對に、少納言も宰相の車を東の對に出して待つてゐる。內侍のお出ましを二人が爭つて綱引き合ふ時、頭中將が見える。中將は密かに二人の車の位置を反對にし、それ〴〵の女に暮に參上させると云はれる。二人は喜んで歸るが、車が違へてあるので、侍從は宰相中將の、少納言は中納言の所へ着いて、驚くところを押込められて了ふ。內侍は無事頭中將家に着かれるが、山陰の邸は庭も荒れて益々寂しい住ひとなつて行く。〔むもれ木〕春宮は、山の井家及び松陰家に行啓、例の僞手紙を御覽になり、又田鶴君の案內で、松陰の姫君と契られ、琴調伴れてお歸りになる。〔文あはせ〕春宮は頭中將をお召しになり、例の文を御覽になる。頭中將は行川の中將が白狀した事、宰相中將が大納言の妹に通つてゐるのも、後の事を思へばこそであらうと申上げる。春宮は仔細を奏上され、終に中納言は按察使、宰相は大貳、少將は少貳、右馬頭は對馬守に遷される。〔おきの島〕島の阿闍梨を話相手に大納言は佗しい生活をしてゐる。夢のお告げも、この法師のみにお告げになるほどの親しさである。或る日津浪があつて、都から下向中の宰相の船がこの島に打上げられる。船には、息もたえ〴〵に妹君が居られる。侍從から聽てを聞かれて恨めしく思ひ、妹君を留めて他は送りかへす。九月愈々都の御迎へが來て、途中明石に上陸、中將と面會される。中將は船中の姫を蟹少女と稱して京へつれて行く。〔九重〕大納言の御船は鳥羽に着き、やがて參內、直ちに右大將になされ、中將は三位になる。さて上は御讓位になり、姫君は女御として弘徽殿に入御、大將は內大臣を兼ねる。右衞門督は中納言に、下總守は修理大夫に、それぞれ任命される。三位の中將には若君が生れ、內大臣は蟹の子だと相手にされぬが、事情を聞いて蘆屋から行方不明になつた姫と知り、色々引出物をなさる。〔子の日〕年改まつて松陰家の賑かさは去年に似るべくもない。〔うゐかぶり〕冷泉院は、物靜かに仙洞の春をお迎へになる。三の宮の御元服と同時に田鶴君をも初冠させ、將來、五の宮に配はさうとなさる。田鶴君はやがて少將になる。その頃弘徽殿の女御が御產のため下られる途中、怪しい風のため惱み心地となられる。島の阿闍梨の御修法で侍從の生靈は退散し、男宮が生れる。阿闍梨は權僧都になされ、大臣は喜んで加茂川の御堂を修築する。その折不思議な石の箱が出るが、大臣と僧都は島で見た夢を思ひ合せ、翌年の御八講を計畫する。〔をと羽〕女御、五の宮、前齋院、三位中將の上內侍君等が集まつて仲秋の月を愛でる。また大臣も淸水へ詣られるが、そこでおちぶれた侍從に會つて連れ歸られる。〔みなみの海〕侍從は「例の少貳は、大風のため小島に吹き寄せられ、松の木につかまる。夜明けて見ると、大松の梢につかまつてゐて生きた心もない。觀世音を念じてゐると、下枝に大きな鶴がゐた。首に取りつくと鶴は硫黃島に運んで與れる。不思議な翁の助けで、白い鳥に文を傳へて貰ひ、太宰府の大貳に迎へられる。その時、翁は光を放つて失せた。それで私も、觀世音に祈つて罪を許して頂かうと思つて淸水へ來ました」と懺悔する。〔やまぶき〕九月の末頃、四位少將は三位中將に陞り、なほ內大臣から大將を讓られる。この頃、女院の許に御幸があり、御伴に從つた中將は、山吹の花をゆかりに、名を明かさない女と契つた。〔花のうてな〕例の侍從は、終に尼になる。松陰大臣の造られた御堂は莊嚴に完成し、六月、御八講の時が來た。弟の中納言は例の東國の海で得た不思議な玉を捧げる。玉には觀世音の御姿が現はれるので、先きに掘り出した石の上に安置する。中納言は東宮大夫を兼ね、大貳も按察使も筑紫から歸つて來る。さて山の井北の方は、右大將北の方と對面し、蟹の子と思つたのが、蘆屋の姫君であることを知り、大に恥ぢる。〔はつ瀨〕彌生の頃、大臣は初瀨に詣らうとし、途中女院の造られた家に宿る。この時、中將は山吹の女に再會する。初瀨からの歸途、入道した右馬頭に會ひ、その後また奈良の興福寺に行ひすましてゐる少貳にも會つた。〔宇治川〕山吹の女は、女院に仕へる阿波の局と帥の中納言との間に生れた娘である。女院は大貳に配はさうとされ、大貳は迎へに行く。これを聞いた中將はあわてて舟で漕ぎ寄せる。一方、姫は中將を思ひ、母上との別れを悲しみ、水に身を投げる。驚いた母上も同じく投身してはかなくなるが、姫君は偶然にも中將の舟に助けられる。大貳はこゝに罪を歎いて出家する。さて內大臣は、やがて太政大臣となり、按察使に內大臣を讓り、思ひ殘す事もないからと、山の井殿を寺に造つて入道するのであつた。

【構想】甚だ複雜であり、且つ大きい。場面は絕えず變轉して、事件は快く進捗し、少しの

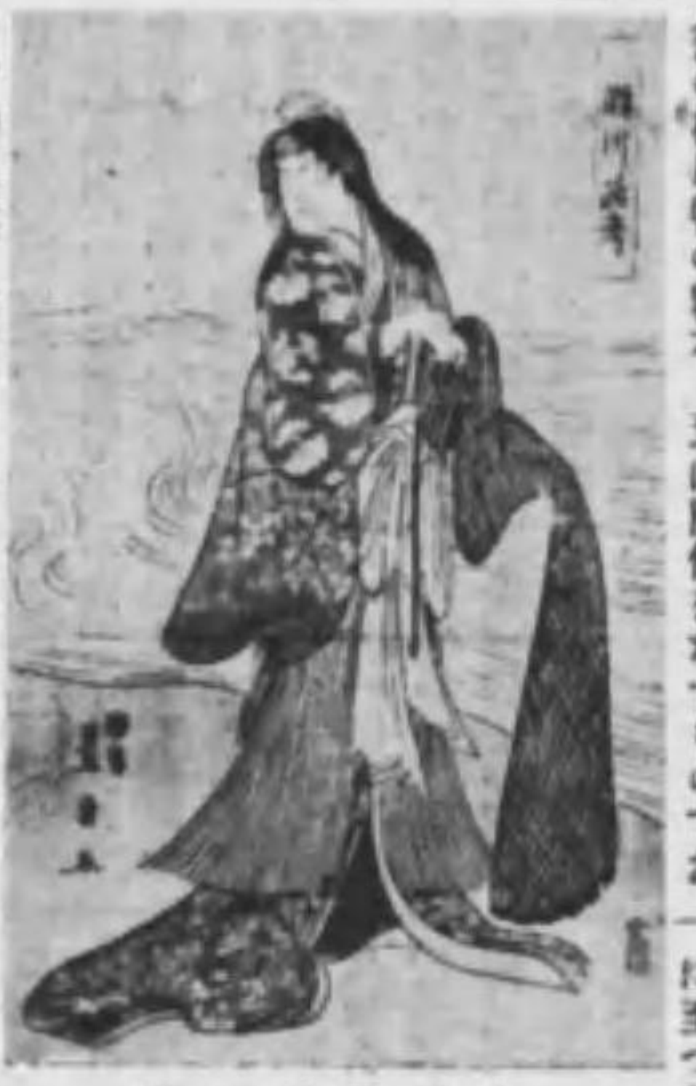
淀みも澁みもない。所々に海女の身代りや車違への可笑味等があつて、作者の態度には如何にも餘裕が見える。如何なる點景・人物も、むだには出してなく、一度出た人物は、後で必ず何かの役割を果してゐる等、少しの隙もない。複雜な事件に多數の人物を動かして、かく破綻なく完結せしめたのは、餘程すぐれた技能を豫想しなければならない。全篇を貫く淡い因果應報思想の中に、戀愛・別離・讒言・遠島・繼子いぢめ・神仙・生靈・神鳥等様々な事件を盛つてゐる。隱岐や須磨の生活叙述は、源氏の須磨・明石を髣髴せしめ、山吹・宇治川の巻々には宇治十帖の影響が見える。主人公の流謫や山吹の君の入水等、また各巻別にそれぞれの巻名を付けたのも源氏を倣つたものと思はれるが、文章は流麗で具象的である。なほ蘆屋の姫君で、繼子いぢめを描いてゐるが、後に姫が三位中將の北の方になつてからも、落窪のやうに手痛い報復はなく、至極おほどかである。暴風で大貳の船が隱岐へ吹き寄せられる事や、少貳が觀世音に助けられ、鳥の翼に文を託すなど、傳奇的な物語を挿入しても、無理に怪奇化してゐないのは、平安朝期の傳記的な物語と區別さるべきである。一體この物語は、事件と人物との推移・とり合せ・調和に於て甚だ秀れてゐるが、各々の人物の性格は、必ずしも深く描かれてゐない。性格を內面的に洞察するよりも、その身に驅り及ぶ事件によつて描かうとしてゐる。こゝにこの物語の弱點があると思ふが、併しかゝる個性の掘り下げの稀薄さこそ、この物語が前述の成立期に入るものであることを示すものと考へる。ともあれ、當期の擬古物語中では、特に注目さるべき作品であると思はれる。

（永井）

【參考】國文學概說　藤田德太郎

松風（謠曲）「擬古物の謠曲」を見よ。

松風（まつかぜ）　所作事　【解說】松風村雨の傳說に基づく。これを劇化したものでは謠曲に「松風」があり、その歌詞の一部や汐汲の演伎等が取入れられた。操淨瑠璃にこれ等を攝取したものは種々あるが、就中、歌舞伎に最も影響を及ぼしたのは、元祿七年三月大阪竹本座上場の近松門左衞門作「松風村雨束帶鑑」（別項）と、元文三年正月同座上場の文耕堂と三好松洛等の合作「行平磯馴松」（別項）との二種である。殊に後者の第四段目「形見戀夫摺」は、後の松風物の粉本、又は原作をなすものである。【沿革】歌舞伎では寬文頃とおぼしき歌舞伎舞踊圖に、旣に「汐汲」の所作が畫かれてゐるので、古くから行はれてゐたと見られるが、記錄では、元祿十三年京都萬太夫座の「松風」や、同十六年四月江戶森田座の「成田山分身不動」（別項）等の中に演じられた「汐汲」の所作が古い。また元祿十七年刊の「落葉集」にも「松風」が見えてをり、元祿期の三絃の名手と言はれた岸野次郎三郎の作曲中にも「松風」が見えてゐる。長唄では寬延二年十一月市村座の「松風」が古く、常磐津節では寶曆七年十一月同座の「松君[illegible]」第二番目「松似候男姿」（通稱松風。作者壕越二三治）が古い。後者は松風（中村富十郎）・行平（市村龜藏）・此兵衞（二代澤村宗十郎）等で演じたもので、「松風」としての形式を備へ、その後の常磐津・富本等に出來た各種の松風物に影響した點に於て、注目すべき曲である。富本節では天明七年五月森田座の「行平磯馴松」が古く、變化舞踊では寬政四年四月河原崎座の「杜若七重の染衣」（四代岩井半四郎七變化）の中の「汐汲の松風」が古い。かくて後に淸元節にも出來、長唄と[illegible]三流に各種各樣の松風物が生れて、一系統をなすに至つた。左に傳存の主な曲を擧げる。


舊松風（小ふじ）

【[illegible]】富本　〔通稱〕松風　〔初演〕寬政八年十一月一日初日、江戶桐座「銀積松行平」第二番目大切　〔作詞〕松井由輔　〔太夫〕二代富本豐前太夫　〔作曲〕名見崎喜惣治　〔振附〕山口七十郎　〔傳來〕曲のみ傳存。また淸元節にも移調されて現存。上の卷「戀すてふ蹤手枕」は、後に下の卷の名題に一括された。〔內容〕在原行平（三代澤村宗十郎）が勅勘を蒙つて須磨の浦邊に謫居の中に、蜑の松風（三代瀨川菊之丞）と馴染を重ねたが、勅勘が許りて別れる時、「立ち別れ云々」の遺物の一首を與へ、共に名殘りを惜しむ振あつて歸洛する。松風は形見を抱いて別離を嘆き、遂に狂ひ亂れる。これに漁師磯馴の松兵衞（三代坂東彥三郎）と須磨の此兵衞（嵐龍藏）とが擱み、萬歲の振事あつて立廻りになる。上の卷は松風の汐汲、下の卷は松風の狂亂を眼目とする。淸元の「今樣須磨」（後出）は本曲に負ふ所が多い。

【濱松風戀歌】長唄　〔通稱〕濱松風　〔初演〕文化五年八月十日初日、江戶中村座「行平磯馴松」大切　〔作詞〕二代瀨川如皐　〔立唄〕富士田千藏　〔作曲〕九代杵屋六左衞門　〔振附〕市山七十郎。曲・振とも傳存。〔內容〕田井の畑の太夫の下女小藤（四代瀨川路考）は、亡き濱松風が形見の烏帽子狩衣を着ると、松風の執念で狂氣し、汐汲桶を携へて來る。漁師此兵衞（三代中村歌右衞門）は、これを持ちうけ口說いたが、松風が乘り移つてゐるので取合はず、行平の名を呼んで狂ひ廻る。此兵衞は焦つて斬りかけるを防ぎながら手踊模樣の所作タテになる。手踊の件の曲の妙、振の巧みさはこの種の所作事中の白眉と稱へられてゐる。元來が義太夫狂言の一部を所作化したものなので、現今でも正式には義太夫（形見戀夫摺）との掛合にする事になつてゐる。

【七枚續花の姿繪】長唄と常磐津との掛合。變化物　〔通稱〕汐汲　〔初演〕文化八年三月六日初日、江戶市村座「盤話水滸傳」第二番目大切　〔作詞〕二代櫻田治助　〔立唄〕芳村伊十郎　〔作曲〕二代杵屋正次郎　〔振附〕藤間勘十郎　〔傳來〕振は傳存。曲は長唄のみ傳存。但し曲・振とも文政六年森田座所演「法花姿色合」（五變化）の中「松風浦月草」（長唄のみ）で再演された時のものと思はれる。〔內容〕須磨の蜑松風（三代坂東三津五郎）は汐汲桶を荷ひて海邊へ來り、汐汲む振あつて惚の狩衣を手に口說模樣、最後に花傘を使つて賑やかな踊になる。現流行曲。女三の宮・梶原源太・猿廻し・願人坊主・老女・關羽と組合せた七變化の一。

【勢男諷松風】長唄　〔通稱〕「諷松風」「勇次郎の汐汲」　〔初演〕文化九年六月十八日初日、江戶森田座「行平磯馴松」第一番目大詰

〔作詞〕木村松陰〔立唄〕岡安喜三郎〔作曲〕四代杵屋六三郎〔振附〕松本幸柳、曲・振とも傳存。〔內容〕前田の「濱松風」と大同小異であるが、歌詞は大に異にしてゐる。松風娘小藤（後尾明次郎、後の實川額十郎）・此兵衞（中山豐五郎）。名作の一で、鄙びた中に松風物の特徴があつて面白い。

【今様須磨の写絵】　清元〔通稱〕「今様須磨」「村雨松風」〔初演〕文化十二年五月十五日初日、江戸市村座「[illegible]代討」第二番目大切〔作詞〕二代櫻田治助〔太夫〕清元延壽太夫〔作曲〕清澤萬吉〔振附〕藤間勘十郎、曲・振とも傳存。〔內容〕上下二段の形式で、上段は松風（二代市川團之助）、村雨（二代岩井粂三郎）の汐汲から行平（二代嵐三五郎）との情事。姉妹の嫉妬の爭ひ、行平が松の木に烏帽子狩衣に一首の歌を添へ形見に殘しての歸洛。下段は姉妹が行平との別離の悲嘆、次いで村雨は行平の跡を慕うて船場へ走る。松風に平素心をかける漁師此兵衞（早替り、二役嵐三五郎）が口說きから松風の狂亂。後に松風と漁師との立廻りになる。松風物としては集大成された觀があり、現行（舞踊）では最も上演度數が多い。

【諸本】日本歌謠集成（卷九・一〇）・歌謠音曲集（日本名曲全集）・日本音曲全集（第一・三・九卷）所收。

【參考】劇代集（二代櫻田左交）○近世邦樂年表○近世江戸舞踊史　九重左近　（秋葉）

松風村雨　まつかぜむらさめ

御伽草子　三卷【作者】不詳【別名】行平物語【成立】室町末期か。【諸本】古板本は萬治二年板（野田彌兵衞板行）。「行平物語」と題する鱗形屋板もある。【內容】在原行平と、須磨の蜑姉妹松風・村雨との情話。謡曲「松風」より出づ。行平配流の原因を官女青柳の前との情交の露顯とし、兩姉妹の本名を藻鹽・菊女と記し、召還後行平の死を聞いて松風は海に投じ、村雨は尼となる事を作る。挿話として行平の語る七草の由來は、大略「七草の草子」（別項）に同じ。【影響】近世の戯曲その他音曲物でこれを題材とするは、主として謡曲からの影響であらう。　（島津）

【參考】廣益俗說辨正編卷九

松風村雨束帶鑑　まつかぜむらさめそくたいかがみ

淨瑠璃　五段　時代物【作者】近松門左衞門【興行】明和板「外題年鑑」に、元祿七年三月三日より竹本座の興行としてあるが、三段目の「熊野風流」の條に頼母・若太と記してあつて、竹本頼母と豐竹若太夫が掛合で語つた事が示されてある。若太夫は最初竹本采女と稱へ、元祿十六年に若太夫と改名したのであるから本作はそれ以後の興行であらう。【諸本】八行六十二丁本、山本九兵衞板。近松傑作全集第二・近松時代淨瑠璃（帝國文庫）・近松淨瑠璃集上（有朋堂文庫）。諸種の近松全集所收【題材】謡曲「松風」から着想し、浦島傳說や狂言「靱猿」の趣向を取入れたもの。謡曲「松風」系統のものは、假名草子に萬治二年板の「松風村雨」、歌舞伎狂言に、元祿十年（推定）荒木與次兵衞座興行の「日本女護島」、同十三年都萬太夫座上場の「松風」、淨瑠璃に土佐少掾正勝の正本「現在松風」があるが、何れも本作との特殊關係は認められない。

【梗概】〔第一〕（坂本山王權現）日嗣の皇子降誕の御祈願に傅在原行平・北の方司の前・僧正遍昭等がお伴をして山王權現に產神詣に赴くと、突然皇子が急驚風で薨ぜられる。先帝の皇子恒寂僧都が竊に皇位を窺つてゐるのを知る行平は思案に暮れ、皇子に代るべき御子を索める折柄、浦島太郎が龍宮より歸り、乙姫との間に出來た嬰兒を抱いて茫然として彳んでゐるのに會ひ、請うてその子と皇子の亡骸とを取換へる。〔和歌の浦〕司の前の兄花室の三位律丸は恒寂・伴健宗・千鰹[illegible]等と謀り、皇子を初め行平一家を河豚で毒殺しようと釣針を垂れたところ、俄に一疋の大魚が現はれ、釣針を呑んで綸をくひ切る。〔行平館〕曾て行平と契つた須磨の蜑松風が、行平に會はんため若宮の乳母として奉公に出ると、乙姫の魂が松風に乘り移り、若宮を抱いて種々とかき口說く。これを物蔭から聞いてゐた司の前は、さては浦島の子と言つてゐたのは行平と松風との間に出來た子であつたかと感違ひをし、嫉妬の餘り守刀をとつて討たうとすると、數千の小蛇が現はれて二人を護る（行平が數多の乳母を呼び寄せて若宮の乳母を選定する所に、節事「今様うはぞろへ」がある）。〔廣澤の池畔〕司の前が兄律丸にかくと告げたので、行平の館は恒寂等の押寄せる所となり、大夫鱗形右衞門尉は若宮を抱き松風と共に逃れる途中、僧正遍昭に逢ひ、共に力を協せて追手と戰ひ、既に危く見えたが、廣澤の池より乙姫が大蛇となつて姿を現はし、敵を追ひ散らして、我が子並に行平が天子より預る日の御座の寶劍を抱いて池中に消える。〔第二〕（浦島塚）浦島は故郷水の江に歸り、所緣を尋ねるが里人達は笑つて相手にせず、ただ浦島塚を指すのみである。途方に暮れた浦島は、せめて皇子の骨なりと葬らうと塚を穿つ所を田夫共に發見され、古墳を發く咎人の嫌疑を受けて難儀してゐるのを、通りかゝつた龜彦の庄司に助けられる。（龜彦の庄司館）山路の右中辨が、勅使として來り、行平の類屬を見つけ次第討てとの勅諚がある。所が勅使が去ると間もなく歸宅した子の由良太が途中で松風を助けて伴ひ歸つたので、庄司はこれを討たうと決心し、今は和田松と名乘つて下人奉公してゐる浦島に相談するのを、由良太の女房が立ち聞きされる。和田松は話の中に庄司が己が六世の孫なるを知るが、恩義ある行平のため庄司を討つて松風を救はうと決心する。その夜由良太の女房は夫の意を酌んで松風を落さうと一間に忍び入るのを、庄司が松風と過つて刺し通し、庄司も亦時を同じうして忍び寄つた和田松のために刺される。かくて家中の騒ぎとなり、由良太は父の敵と和田松に詰め寄る。そこへ勅使山路の右中辨が入り來るが、忽ち松風のために律丸なる事を見顯はされ、こゝに和田松・律丸の一騎討となる。この騒ぎの中に律丸の郎黨が玉手箱を開いた爲め和田松は一瞬にして白髪の老翁となり、こゝに始めて浦島太郎と名乘り、龍神の神力によつて律丸等を亡す。〔第三〕（柴屋）行平の弟業平は日の御座の寶劍の行方搜索のため、健宗は行平の行方詮議のため、それぞれ勅命を蒙つて須磨へ下り、業平は鹽屋に、健宗はその隣の柴屋に宿をとる。所へ行平が須磨の昔懷しくさまよひ來る。折柄柴屋で下女の松風が妹の村雨に手傳はれて米搗をしてゐたが、行平の姿を見るや走り寄つて縋りつくを健宗の郎黨に發見される。物音に走り出でた業平は、この有様に吃驚するが、辨慶の故智に倣ひ、松風と共に行平を打擲し、一方村雨が自分の夫であると主張するので健宗は始めて疑ひを晴らす。〔行平隱家〕行平・村雨は健宗の目を掠めるため假に夫婦の契を結ぶ事となつたが、松風はこれを嫉妬し、その怨魂が焔となつて行平夫婦の閨のあたりを飛

び廻れば、村雨の懐からも瞋恚の焔が顯はれ出でて打合ふ。これを見て行平はそのあさましさを呪ひ、姉妹のうち龍宮に分け入つて日の御座の寶劍を奪ひ返した者こそ二世迄の夫婦であるが、それ迄は二人とも夫婦の緣を絕つと言ひ放つ。〔龍神風流〕松風・村雨が夢の中に龍宮に至つて寶劍を取戻すといふ景事。〔第四〕（司の前道行）司の前は夫を慕ひ、僧正遍昭を伴つて須磨へと志し、やがて西の宮に着く。〔行平本陣〕行平は寶劍が再び手に入つたので松風・村雨を伴ひ歸洛を急ぐ途中、西の宮に宿を求め司の前と不思議の邂逅をする。行平は松風・村雨の貞節を語り聞かせて司の前を責めると、司の前は深く己が罪を悔いる。そこへ鱗形右衞門尉と由良太が駈け來り、健宗を討取つた事を告げる（司の前が行平とも知らずに本陣に立ち寄つて宿を求め、出女達に嫉妬を通して見せる節事「宮女御嫉妬し」がある）。〔第五〕（廣澤の池畔）行平は都に歸り、日出度く敕勘が赦されて歸任したので、僧正遍昭が導師となつて龍神を供養し、芝居を構へ狂言師を集め、行平も立ち交つて狂言を催す。次が劇中劇の狂言「靱猿」、舞ひ納めると見えた時、突然猿の役人が面を取つて棄てると恒寂が現はれ出で、我は元伯方海の龍神なりと名乘つて行平を取つて伏せるが、折から馳せ來つた浦島に亡される。

【構想】景事・節事等見せ場の多い作であるがそれだけ目先本位で全體としての組立は散漫であり、殊に浦島傳說を取入れたなどは荒唐無稽に過ぎる感がある。その錯綜した筋は、豫め正本を讀んで行つた見物以外には理解が困難であつたらう。二段目で浦島が庄司を殺す動機に至つては甚だしい無理があるが、これは徒らに趣向の奇をのみ狙つた結果といふべく、兎に角近松としては愚作の方である。

【影響】元文三年正月二十五日より竹本座興行の「行平磯馴松」は本作の系統に屬するものである。

【參考】近松傑作全集卷之二解題（木谷不倫）○大近松全集第六卷解說（木谷蓬吟）○近松全集第四卷解題（藤井乙男）○日本歌謠集成卷七○日本演劇史（伊原敏郎）　（高野（正））

松崎天神緣起　まつざきてんじんえんぎ

「天神緣起」を見よ。

松園梅彥　まつぞのうめひこ

「四方梅彥」を見よ。

松田和吉　まつだわきち

「文耕堂」を見よ。

松波資之　まつなみすけゆき

歌人【號】遊山【生歿】天保元年廣島在に生れ、明治三十九年九月十三日横濱に歿す。享年七十七。【閲歷】鄉士の家に生れ、後京都に上つて德大寺家に仕へ、歌を香川景樹に學んだが、景樹の長子景恒歿して後は、自ら東塢塾を主宰した。後北面の武士松波家を繼ぎ、大學大允と稱したが、維新の後は皇太后宮の內舍人となり、次いで雜掌に轉じ、太后崩後は横濱に閑居した。歌集には「花仙堂家集」「同拾遺」「かるかや集」等がある。

【歌風】景樹の直系の門人は資之を以て終りとすると云はれてゐる。淡々として水の如き作風は、景樹の癖を漉し去つて、その自在平明な部分を傳へたといふべきである。その書も歌に似て自然である。　（淵澤・金子）

松の落葉　まつのおちば

歌謠　「落葉集」を見よ。

松の落葉　まつのおちば

隨筆　四卷・目錄一卷【著者】藤井高尙【名稱】著者の號を松の舍といつたので、松の落葉と名づけたのである。【刊行】文政の末か。【諸本】百家說林續編上卷所收。【解說】神道・國史・國語・國文等、すべて國學に關する考古的記事を雜纂したものであつて、家屋・調度・服飾・文房・樂器・有職故實・一般風俗等の事物にも及んでゐる。卷一に大吉備津彥命と申す御名以下五十一條、卷二に神の人にかゝり給ふ事以下三十二條、卷三に賀茂の御社以下五十三條、卷四に神の宮人の於々といふ聲を高くたつる事以下八十五條を收めてあり、また文政十二年中村寬の序がある。　（和田）

松の綠　まつのみどり

歌謠書　五冊【編者】哥澤芝金（初代—四代）【名稱】「小曲松のみどり」と角書がある。初編の初めに掲げた「松の綠」（哥澤芝金詞、假名垣魯文作）をもつて書名とした。【刊行】初編慶應三年（但し、明治元年の序文がある）、二編明治十五年、三編同二十二年、四編同四十二年、五編大正十一年。刊行所廣岡屋幸助（菊壽堂）。【解說】哥澤芝派の歌詞を集めたもの。芝派の正譜の本であり、同時に哥澤の歌謠集としては歌數最も多く、標準の書となつてゐる。初編には明治元年の細木香以の序があり、五十九章を收む。二編には十五年の假名垣魯文の序があり、五十二章を收む。三編には二十二年の魯文の序があり、七十章を收む。四編には四十二年の理學博士田中正平の序があり、六十章を收む。五編には序に聲曲拾譲を附し、三十一章を收む。かくて逐年新曲を增加した。各編とも目次及び太夫の連名があり、歌詞には、何れも頭に調子付が符號で記してある。

【備考】「歌澤紫紅之友」は大正三年刊、柴田芝章著。小本二冊。「松のみどり」の四篇までを一部とし、また新曲十六章を增加して、これに略註を加へたもの。大正五年版には、又新曲十五章を增補した。「松のみどり」五篇は、この新曲の部分を正本として刊行したものである。後、芝金と芝勢以とが分離するに至り、芝勢以派では、昭和五年に「小曲紫紅の友」五冊を菊壽堂から刊行したが、內容は殆ど「松のみどり」と同じで、順序が多少異つてゐる。なほ芝派の「松のみどり」に對して、寅派の正本には「小曲松葉巴」三冊（明治三十九年刊）がある。この外、創始時代の歌澤の歌詞を集めた書は數が多い。（歌澤參照）　（藤田）

松屋叢考　まつのやそうかう

隨筆　三卷【著者】高田與清【刊行】文政九年【解說】三樹考・三絃考・歌詞考の三篇を併せたもの。三樹考は賢木・桂・梅の三樹のことを四十八則を立てて仔細に考證し、柏の名義、かじみ葉・木岸・多夫の木・ナンジ・モンジャの木等に言及してゐる。末に、文政九年三月門人田吹重明・中野義梭同校とある。三絃考は神樂の濫觴、樂府の歌等十八則を立て郢曲・平家曲・淨瑠璃曲・鼓弓・馬尾胡琴等に言及してゐる。卷末に文政九年六月門人間宮升芳・林義臣同校とある。歌詞考はみたまのふゆ、かち緒たえ、あめつちの袋、あさ木の柱、ものぐさ、長殿のひたちの御藏、いぬゑのこ、はしたかのこもつちごゑの八條を立て、各條下に細目を擧げて考證を施してゐる。卷末に、文政九年七月門人香取延篤・阿部正名同校とある。三篇いづれも卷首に引用書目を擧げ、卷中に圖畫を加へてゐる。序跋はない。　（和田）

松屋叢話　まつのやそうわ

隨筆　二卷【著者】高田與清【刊行】文化十一年【解說】美濃の人、樂卯の所校。江戸時代の歌人・詩家等の逸傳及び作歌に係る事どもが多い。まゝ古事・古物に關する考說を交へてゐる。卷一に蒲生氏鄕千宗易贈答歌の話以下五十五條、卷二に石

致當の考以下三十七條を收める。文化十一年大田元貞の序、無年紀村田たせ子及び藤原正臣の題辭がある。校者梁卿は、詩人梁川孟緯（星巖）の初名で、本書卷末に同人の小傳が出てゐる。星巖が與淸に師事した趣はこれによつて知られる。（和田）

松屋棟梁集（まつのやとうりやうしふ）　隨筆　一卷【著者】高田與淸【刊行】文化十三年【解説】隅田河埋木文豪記の項下に、隅田河の名義以下十一條、答ニ赤松知則ニ書の項下に、關東・關西以下十條、東都稱呼辨の項下に、あづまの都以下四條、復ニ小谷三思ニ書の項下に、富士山の名義以下十五條、三社託宣論の項下に、甲陽軍鑑の沙汰以下三條、寄ニ猿渡盛章ニ書の項下に、六所分配宮以下十五條を收めてある。すべて考證的論篇で、高島千春・谷文晁筆の圖畫がある。所刊は卷一のみであるが、次第に刊出の豫定であつたらしい。文化十三年岸本由豆流、同年村田たせ子の兩序及び同年片岡寛光の跋がある。（和田）

松屋筆記（まつのやひつき）　隨筆　零本八十四卷【編者】高田與淸【諸本】自筆稿本は、もと東京帝大圖書館に藏せられてゐたが、當時既に缺本であつた。それは大正十二年の大震火災で燒失した。轉寫本は少いが國書刊行會本がある。【解説】編者が、文化末年頃より歿前二年の弘化二年頃までの凡そ二十年間に、羣書を閲讀の際、會心の章節を拔抄し、考説を加へ評論を施しなどしたものが、積り積つて百二十卷の大部を成したものである。全部百二十卷のうち卷十七より三十六、卷四十一より四十八、卷百一・百二・百八・百十・百十一・百十三・百十四・百十六の三十六卷は散逸して傳はらぬ。系統的に編纂されたものではないけれど、該博な編者が和漢古今の史書から一ふしあるところを拔いて子孫等の覽に遺したものであるから、一般國學者をも裨益すべきものがある。（和田）

松帆の浦物語（まつほのうらものがたり）　物語　一卷【作者】未詳【名義】主人公が、松帆の浦に追放された人を尋ねて行くによる。【成立】類從本等の奥に「筆載在判」の識語があり、「古物語類字鈔」も、室町中期の作らしい「嵯峨物語」の序に、「松帆の草子云々」と記してゐるから筆載より今少し古いと考勘されてゐる。猶荀代筆載は筆寫者であつて作者ではない。從つて文明を下らぬ室町中期の作と見るべきである。【諸本】群書類從卷三一一。畠山健氏の「古物語」・「兒物語部類（續史籍集覽所收）」・國文大觀物語部・日本文學大系等に收められ、内閣文庫には一寫本を藏してゐる。

【梗概】京都四條の邊に、中納言で右衞門督を兼ねた人があり、中將殿と云ふ一人子があつたが、久しく間を置いて、又美しい男子が生れたので甚だ寵愛された。そのうち父君は亡くなられ、中將殿は父の代りをする。弟は十歳の頃、叔父なる横河の闍師の勸めで、山にのぼつて修學する。容貌才藝秀れた童とて、一山の人に愛され、叔父は出家を勸めるが、寂しい母上は許さず、遂に都に召し返し、元服の後、藤侍從と呼んだ。十四の春、昔なじみの横河の僧達と北山へ櫻狩に行く。上品な三十許りの僧が侍從に目を留めて文をよせる。この僧は、岩倉に住む宰相と申す人であつた。その後宰相は、夜每門に佇み、又文をよこすので、侍從も情に負けて、後には岩倉の坊に伴はれるやうになつた。かくて三年は過ぎる。時に太政大臣の御子左大將殿、この事を聞いて心を動かし、頻りにお召しになる。宰相は、侍從は病だと稱して會はせようとしない。或る日ひそかに宰相と侍從が岩倉に行つたのを見付けられた。侍從は兄に伴はれ、左大將邸に參つてそのまゝ寵愛され、宰相は淡路の國へ追放される。これを聞くより侍從は病となつたので、母上は自邸へ連れ歸る。侍從は宰相のゆかりの伊與と云ふ法師を呼び、淡路へつれて行けと願ふ。九月、中將の不在を窺つて投身すると書き置きして出奔する。途中須磨に宿かる一夜、痩せ衰へた宰相を夢みる。京では母上は歎きの餘り立つ事も出來ない。さて二人は宰相の住むと聞いた松ほの浦邊を尋ねるが、日も暮れ果てゝ、とある小庵に立ち寄つた。この庵の老僧から宰相は既に亡くなり、今宵はその七日にあたるとて形見の品々や文を見せられる。須磨で見た夢も思ひ合せられて二人は泣きくづれる。翌朝老僧の案内で、宰相の墓を尋ね、侍從は悲しさの餘り、身を投げようとさへするが、遂に十六の美しい姿を剃髮し、出家したのであつた。その後、伊與法師がお供をして高野山にでも上つたのか、行方は知れなかつた。

【構想】戀愛物語の對象を稚兒にした室町時代の一般的な作品である。ただ同種類の「秋の夜の長物語」「鳥部山物語」（各別項）等と異なる所は、後二者は稚兒を愛したがために、僧が成道するのだが、この物語では結局稚兒が入道することになつてゐる。後二者は佛教的要素に富んでゐるが、この物語は寧ろ普通の悲劇的な戀愛譚と見做される。ただ鎌倉時代の物語に比して、題材に於ても文章に於ても擬古臭味が薄らぎ、次期の文學形態を孕んでゐることを注意すべきであらう。（永積）

【參考】古物語類字鈔（黒川春村）○近古小說解題（平出鏗二郎）○室町時代文學史（藤岡作太郎）

松蟲（謠）「雜能物の謠曲」を見よ。

松蟲鈴蟲（まつむしすずむし）　詩集【著者】三木天遊・繁野天來【刊行】明治三十年五月東華堂。翌年岡崎屋書店より新體詩叢書第三編として再版。【解説】天遊・天來各二十篇づつの詩を收む。共に主として當時の「早稻田文學」に掲げたもの。天遊は「新著月刊」（明治三十年）に「雨聲鳥語集」と題し、短唱を纏めて發表した。局限されたる世相の一面を單純なる情感の動くまゝに表現したのであつて、格別淸新なる印象は與へなかつたが、天來の「瓜盜人」は好評であつた。「霜夜の月」もやゝ長篇の力作だが、共に實社會の世相に觸れた點が當時の詩としては珍らしく感じられた。なほ天來は自然を對象とする場合、表現に一種の樣式を工夫し、天遊の如く七五調本位でなかつた。短い詩の末尾を五七五の俳句型で止めてあるのは天來獨特の技法であつた。

【著者小傳】天遊は兵庫縣の人、東京專門學校に學んだが、半ばにして詩作を廢し、行く所を知らない。天來は阿波の人、明治七年に生れ、昭和八年二月歿した。同じく專門學校出身、英文學の造詣深く、早稻田大學教授であつた。（河井）

松村英一（まつむらえいいち）　歌人【閲歷】明治二十二年十二月三十日、東京市芝區愛宕下に生れた。窪田空穗の門下で、歌集「春かへる日に」「やますげ」、論集「短歌論鈔」等がある。主として雜誌「國民文學」編輯に當つてゐる。【歌風】「白粥の煮えをよろしとわが妻に病みてやさしきものいひにけり」の如く、日常生活

の中に取材して、素純な情味のあるものを歌ふのを特色とする。（金子）

松村春風（まつむらしゆんぷう）　雜撰者【本名】操【別號】雅堂・弘道・北隣。別に戲號垂柳亭春風居士【生歿】明治十七年四月六日歿。享年四十二三か。【法名】榮譽松月智道居士【閲歷】越後柏崎の人。郷里の原修齋に學び、同門の駿足を以て稱せられた。學友二三子と社を結び、經史を會講した。明治四年柏崎學校敎師となり、翌年東京に出でて中村敬宇（別項）に西學を學び、傍ら阪谷朗廬に文を問うた。同八年歸郷して六番小學校敎頭となつた。同十年再び上京、下谷に住した。同十五六年頃、東京兎屋書林（思誠堂主幹）の番頭兼編輯員となり「實事譚」數十篇を出して大に出版界を賑はした。彼の著作物は大部分は古書の編纂物であつて、創作は至つて尠かつた。因みに彼は姓名の似通へるところから、從來戲作を多く出してゐる松村春輔と混同されてゐたが、全く別人なることが最近に至つて判明した。【編著】朝野新聞（明治十年七・十二月）○日本小學の論二篇○劇場新報（十一年二月より）○娛多々々珍聞（十二年一月創刊）○文典小解○山陽象山言行錄○東京穴探○原本譯解隣善提全傳○明治外史○日本水滸傳○東洋立志篇○數字先生詩文偶抄○近世先哲叢談（別項）○開卷驚奇演義日本外史○曲亭遺稿南風學行狀記○原本譯解金瓶梅○開化千字文○京濱間汽車乘合話。

【參考】東京新誌（一ノ五）（石川（巖））

松村春輔（まつむらはるすけ）　戲作者【號】楳雨・紅雪・柳東・其蜩【生歿】未詳。從來明治十七年四月六日歿などといはれてゐたが、これは松村春風を同一人と誤つての說である。【閲歷】從來は松村春風（別項）の閲歷と混同されてゐた。春輔自らの語によると、山口縣（長州藩）の生れで、平民と名乘つてゐるが、恐らく輕格の士族であつたらう。その著「實事新話」の自序に、「余等文久年間より明治改元の際に至りし迄國事の爲に關係して京攝東武の間を周旋せし鋒鏑あり、或時は戰場に生死を爭ひ、或時は四國九州の島根まで時勢を探知せんが爲め往復せしは屢々なりし」とあり、又「復古夢物語」（五編）の叙で、假名垣魯文は、「松村其蜩先生は、維新の始め勤王の役に揮ひし鐵鎗の兇器を捨て、目下開明の治世と共に、翰林毫池の陶硯に行ひ澄し、鶯舌玉轉の歌曲に馴れ、故里の懐舊を奏すの餘り、梅の春輔の名に背かず、赤間の硯に浪を湛へ、筆草生ふる水莖の蹟を尋ねて暴雄と蹁城を隔絶せり」といつてゐる。何故に劍を棄てて小說の筆に衣食するに至つたかは分らない。だが、壯時から文學が好きであり、又詩歌文章なども一通り出來たので、戲作者系の門戸を借りなくとも、自力で一人前の作者になり得た。明治六年の「復古夢物語」（八編まで）をその作家としての第一聲とし、八・九年「（春雪奇談）近世横田紀聞」（三編完）、九―十五年「（開明小說）春雨文庫」（八編まで、三編以下和田定節著）を出すに及んで文名が揚り、一流の作家とされた。同時に、服部撫松の「東京新誌」を援け（九年）、又「小說一夕話」（十一年）といふ小說雜誌を編輯したりしたが、性に合はなかつたか間もなく止め、著述の筆を續けて十四・十五年「（落花演譜）春風日記」（六編完）、十四年「（新作戲聞）三府膝栗毛」（三編完）、「閨多風流西洋床」（二編）、「朧月夜花の廓」（二編）、「轉猫座敷の晴」「（高操節婦）娛水滸傳」（刊否未詳）、「（開化小說）東の秋雨」（刊否未詳）、「（高操節義）明治烈婦傳」（二編）、十五年「東京娛風俗」（第一編）、十六年「（人情奇談）蜀魂寃井一聲」「浮世之人情」「二十年間實事新話」（初編）等を著はした。この最後の作は十六年十月であるが、これ以後、春輔作の小說は絶無といつていゝ位であるから、十六年から十七年へかけて彼は死去したか、或は戲作生活の足を洗つたか、何れかでなくてはなるまいと思ふが、何等聞えるところがない。

【業績】春輔は明治初期の異色ある小說家の一人である。戲作家系の門戸によらずに一流の地歩を得、假名垣・柳亭・爲永系以外に獨立してゐた點は注目されていゝ。前身が前身だけに、その作の大半は幕末維新の歷史小說風のものであり、而も勤王黨側から見たものだけに、明治十年頃までは大に歡迎された。十年以後士族階級の沒落と共にこの種の正史和解式の實錄物は幾分人氣を失つて來たので、春輔も勸懲主義の人情物に轉じ、爲永張りの筆意で大に努めたが、文情ともに多少の新機軸を示してゐる。だが何をいつても當時は新聞雜誌の時代になりつつあつたので、それと緣の薄かつた春輔は、時代の讀者と步調を合せる術を知らず、遂に失意の裡に文壇を去つた。併し彼の小說は、幕末維新の大事局に就いての認識を大衆的なものにした點で、又歷史小說・實話文學（各別項）の先驅的現はれとして、明治文學史上多少の頁を割かれてもよいものである。（柳田（泉））

松村みね子（まつむらみねこ）「片山廣子」を見よ。

松本幸四郎（まつもとかうしらう）　俳優【初代】【本姓】傳松本氏【初名】松本小四郎【俳名】小見川、後（一說に調寶鶴）男女川【家號】傳大和屋【生歿】延寶二年、下總國小見川に生れ、享保十五年（一三九〇）三月二十五日江戸に歿す。享年五十七。【法名】自譽單然直道大德【墓所】駒込寺町千年山榮松院【閲歷】元祿の初め江戸へ出で、俳優久松多四郎に入門して小四郎と稱し、のち本姓を名乘つて松本小四郎といつたといふ。初め若衆方で、元祿七年新發見の評判記には「ほノ上中」の位附に置かれたが、やがて上上文字の位に進められた。同十二年夏若立役に轉じ、荒事、死靈の狂氣等に好評を得たが、更に敵役に扮してから、正德三年立役の上上吉に昇せられた。爾後「今の世の萬能丸」などと持て囃され、享保元年幸四郎と改名し、二代市川團十郎と相拮抗し、當時に於ける名優の一人に數へられた。小兵だが、騎大場で、荒事と實事とを得意として愁嘆事にすぐれ、且つ武道をも能くした。

【二代】四代市川團十郎（市川團十郎の條參照）。

【三代】五代市川團十郎（同上）。

【四代】【初名】瀨川金吾・瀨川錦治・市川武十郎・市川染五郎・市川高麗藏。後、男女川京十郎【俳名】錦考・錦江【家號】高麗屋【生歿】享和二年六月二十七日江戸に於て歿す。享年六十六。【法名】旋譽錦江轉山【墓所】本所押上大雲寺【閲歷】初め初代瀨川菊之丞の門下で、延享元年冬江戸中村座へ色子として出で、後、若衆方となり、同七年四代市川團十郎の門に轉じ、和事と所作事で次第に名を揚げ、天明末より立役の雄鎭として重きをおかれ、寛政六年極上上吉に昇せられ、享和元年冬幸四郎の名をその子高麗藏に讓り、自ら男女川京十郎といつた。容姿と品位と口跡とにすぐれ、且つ愛嬌に富み、時代と世話を兼ね、和事と實事とを本領としたが、男達・相撲等にも適し、また所作事にも巧みだつた。壯時は色立役を最も得意としたが、晩年には實惡にも成功した。

【五代】〔初名〕市川純藏・市川高麗藏〔俳名〕金升・錦升〔家號〕高麗屋〔生歿〕天保九年（二四九八）五月十日に歿す。享年七十五。〔法名〕猛譽勇山實閻〔墓所〕四代に同じ。〔閲歴〕四代の實子、明和七年正月中村座で「春實東人形」（長唄）に傀儡師人形を勤めたのが初舞臺。安永元年冬同座で高麗藏を嗣ぎ、同七年冬（この時五代團十郎の養子分となる）、子役から若衆方となり、天明三年冬立役に轉じ、瀨川升追して享和元年五代を襲名、名實共に一代を壓し、文政十年眞極上上吉となり、天保五年古今無類の位に置かれ、「三ヶ津随一」と稱せられた。鼻高く、眼つきの鋭くして凄みあるを特色としたので、俗に「鼻高の幸四郎」と呼ぶ。初め父と同じく和事を本領としたが、後に實惡を得意とした。時代物と世話とを兼ね、殊に世話物にも妙を得、寫實の新演出法を創始して劇壇に寄與した。

【六代】〔初名〕市川高麗藏〔俳名〕錦子・錦升〔家號〕高麗屋〔生歿〕嘉永二年（二五〇九）十一月三日歿す。享年三十九（一說三十七）。〔法名〕寶譽芳山哲雄〔墓所〕四代と同じ。〔閲歴〕五代の子。文化十一年十一月市村座の「世界花菅原傳授」に、傀儡師でくろく六藏に扮したのが初舞臺。天保三年河原崎座「忠臣藏」の石堂と定九郎とが出世役となり、同十四年中村座で對面の五郎・仁木彈正等を勤めて「親に劣らぬ大達者」といはれ、弘化元年三月同座で六代を相續。同三年十一月河原崎座で、俳名松本錦升を藝名に改め、嘉永元年白大上上吉に昇つた。口跡に優れ、父を祖述した。父よりも上手の質だつたが、ただ德なき故に、その名を高うするに至らなかつたと云ふ。

【七代】〔本名〕藤間和右衛門（初め勘吉、また金太郎）〔初名〕市川金太郎・市川染五郎・市川高麗藏〔別名〕藤間勘齋（舞踊藤間流家元）〔俳名〕錦升・琴松〔家號〕高麗屋〔生年・閲歴〕明治三年五月十二日伊勢に生る。幼時藤間勘翁（二代勘右衛門）の養子となり、後、九代市川團十郎の門に入り、明治十四年十月東京春木座の「近江源氏先陣館」に高綱の一子小四郎を勤めたのが初舞臺。同三十六年五月高麗藏を嗣ぎ、同四十四年十一月帝國劇場で七代を襲名、「碁盤忠信」を勤む。扮裝に巧みで風格・容貌、當代市川流荒事の随一と稱せられ、實事・實惡・所作事をも能くす。當り役に、「勸進帳」の辨慶・大森彦七・矢の根・出世景清・寛休・助六・幡随長兵衛・暫・高時・毛剃九右衛門・名和長年・二人袴・素襖落・關の扉（關兵衛）・戻駕（次郎作）・紅葉狩等がある。

【參考】劇代集（二代櫻田左交）○歌舞伎叢書（佐々醒雪）○松本幸四郎の代々（秋葉芳美）（しがらみ二ノ一二）○近世日本演劇史（伊原敏郎）○俳優系譜（根只誠）（歌舞伎研究二十三輯）〔秋葉〕

松本治太夫（まつもとじだゆう）「山本角太夫」を見よ。

松山鏡（まつやまかがみ）昔話【解說】現在我が國の昔話の中では、これ一つだけが頗る特異なる經路を取つて、變化して來たやうに思はれる。越後の松の山家といふ僻村に生れた女が、鏡が影を映すものだといふことに全然無知であつて、その中の姿を亡き母と信じて慕ひかしづいたといふ話などは、他に類型を求めると、笑話以外には一つもなく、これも亦曾てはさういふ中に於て珍重せられてゐたものが、何かの機會に於てもう一度、眞面目な話の方へ引戻されたものらしい。中世の說話業者等は、自身も旅人でありながら、あぶない冒險をした。即ち交通の最も少なさうに思はれる奧在所を笑ひ草にして幾つかのおろか村話といふものを假作したのであつた。信州の秋山話や遠山話の如く、諸國には大抵一二箇所づつの、無知を以て著名なる村が設けられてゐて、そこに全日本共通の「ちやうづをまはせ」だの、「のうせんかつらの皮」だのといふ滑稽談を持つて來て押付けたのは彼等の所爲であつた。似た例としては蠟燭を煮て食つたとか、かずのこを食ふのに藪を借りに來たとか、さては屏風をおさへてゐたとか、蚊帳を逆さに吊つて飛び込んだといふやうな、如何にも有りふれた事物を全く知らなかつたといふことを以て、凡人大衆を哄笑させてゐた名殘が、今だに落語家どもの間には幾分かは傳はつてゐる。勿論その土地の人々が聞き知つたならば、苦情を言ふべき失禮な噂ばかりで、それをただ彼等の居合はせないのをよい事にして、いつ迄も話し合つてゐたのであつた。ところが松の山家は山中とは言ひながら、隣國への通路でもあり、又溫泉があつて諸方の人の入り集ふ土地でもあつた。かういふ笑話の舞臺としては、似つかはしくなかつた。それがこの鏡を知らなかつたといふ一話だけ、夙に變形しなければならなかつた事情かと思ふ。だからこれと同系の話には、今でも噺家のよく使ふ比丘尼の仲裁、「もう髪を剃つてゐるから宥して遣れ」と言つたといふ類の形が、依然として行はれてゐるのである。多くの說話は、元はただ一部分の輕い可笑味を含んでゐたのが、聽衆の興味に引かれて次第にその點を誇張し、後には[illegible]の失敗や、愚者の眞似そこなひだけを分離させて、現在ある笑話は成長して來たのである。笑話や大話は變化の終局で、それが再び末めでたしの本格的說話に復する事はないものとしてある。ところが、松山鏡ばかりは孝女の立身譚であり、後更に幾多の潤飾を加へられて、今ではこれを御伽話の一つに算へることすらも無理なやうになつてしまひ、どうしてその主人公に鏡を知らなかつたといふが如き愚かな逸話を携へさせたかの動機が不明になつた。さうして土地の人々は、却つて事實そのやうな事が昔はあつたかの如く考へるに至つた。これは可なり奇異なる昔話の傳說化の例であり、又記錄文藝が後代の口承文藝の上に及ぼした一つの反射作用の好い見本である。これとやゝ似寄つたもの、世界的なシンドレラ說話が、日本に入つて來てから物哀れなる繼子話、又はお銀小銀のやうな姉妹の愛情譚を展開したことなどであらうが、双方共に座頭や歌比丘尼などの、旅の說話業者の介在に基づくものと私などは考へてゐる。〔柳田（國）〕

松山鏡（まつやまかがみ）「繼子物の謠曲」を見よ。

松山天狗（まつやまてんぐ）「西行物の謠曲」を見よ。

松浦小夜姫（まつらさよひめ）「人柱」を見よ。

松浦佐用嫁石魂錄（まつらさよひめせきこんろく）讀本　十卷十五册【作者】曲亭馬琴【畫工】一柳齋豐廣（前集）・柳川重信（後集）【名稱】石に化した松浦佐用比賣の傳說を題材にしてゐるので、かく名づけたのであるが、又別に作中の義男節婦を、霜に痛められてもなほ屈せぬ菊の操に譬へて「唐錦大和菅菊」ともいふ。作者は初めこれを本名としてゐたが、出版に際して題材より得た名を取つた。【刊行】文化五年（前集）・文政十一年（後集）。【諸本】前集は江戸雙鶴堂の刊行に係るが、千翁軒後集を出すに當り、雙鶴（の）版をも求版して共に板行した。明治十六年東京金玉出版社これを複刊し、又曲亭馬琴叢書（袋井堂）・名著文庫（冨山房）・繪本稗史小說（博文館）に收められてゐる。【題材】松浦佐用比賣の名は、早く「萬葉集」卷五山上憶良の歌に出で、「和歌童蒙抄」所引の「肥前國風土記」、謠曲「松浦鏡」にも見えてゐるが、この佐用比賣傳說が本篇の根本の構成要素である。この傳說に「十訓抄」卷中第六、「古今著聞集」卷五和歌第六の條に見える領巾振山傳說、及び「幽明錄」、「古今著聞集」卷五、「曾我物語」卷四等にある望夫石の說話が伴つてゐる。馬琴も序に「領巾麾山考」と題してこの傳說に關する考證をしてゐるが、これ等の傳說を大體の骨子として潤色し、次の傳說をも參酌したらしい。即ち文祿年間、豐臣秀吉征韓の砌、肥前名護屋の行營に同國の士瀨川采女といふ者があつた。その妻菊は孤閨に悶え焦れて、遂に夫戀しの情を具さに書いて小函に封じ、便船に託したが、偶々逆風のために轉船して博多に漂着し、行營に送られて秀吉に知らるゝに至つた。秀吉その情を憐んで龍造寺政家に命じて采女を歸國せしめたといふ。なほ「謠曲松浦物狂」に、松浦の佳人某が讒者のために寃罪を蒙り、都に上つた後音信のないのに悲しみ焦れる妻子二人が、松浦の濱邊で人買ひにたばかられて便船するといふ話なども、本篇構成の上に與つて力があつたであらう。又その人物の上に、支那明代の小說「平山冷燕」の影響が極めて著しいものがある。【梗概】（前編）肥前松浦郡の浪士瀨川健三道孝は、子なきを憂へて鏡神宮に祈り、領巾麾山に美女玉島を得てこれを妾とし、松太郎・浦二郎の雙子を生んだ。やがて執權北條時宗の召に應じて、玉島と浦二郎を殘し、妻及び松太郎を連れて鎌倉に上つた。松太郎は時宗の近習となつて名を瀨川采女吉次と改め、同家中の博多彌四郎の女秋布と婚したが、吉次・秋布の文才を妬んだ鼠川嘉二郎・長城野兵太等は、これを讒したが、却つてその奸計を看破られて追放された。折しも太宰府の守護平經高謀叛の報至り、吉次は秋田實政に從つて出征した。秋布は夫の身を案じて日々衰へるので、彌四郎は僕蓑七に秋布の書信を持たせて西下させたが、嘉二郎等に妨げられ、書信は吉次に渡らずに紛失する。偶々時宗は江の島辨財天に詣で、七里ヶ濱に漂着せる秋布の書簡を得、その情の切なるを憐んで吉次を召還すことゝなつた。一方吉次は經高の軍師牛淵清縄を追跡して、圖らずも玉島・浦二郎に會つた。玉島は清縄の實姉で、清縄を匿まつてゐたが、義理にからまつて自害し、清縄も運命を知つて吉次に討たれた。〔後編〕吉次は鎌倉からの命により單身歸國の途次、鞆の磯に於て嘉二郎・兵太に襲はれ、重傷を負うて浪に沒はれた。偶々博多彌四郎は嘉二郎等の奸計に落ちて時宗に斬られたので、秋布は意を決して僕僕平を連れて仇討の途に上つた。浪華にて圖らず蓑七に廻り合ひ、嘉二郎が伊萬里に在る事を聞き、急ぎ赴きて誤つて根塚若二郎なる者に斬り込むが、偶々蓑七が吉次と共に虛無僧に扮して入り來り、嘗て鞆の磯で浪に沒はれたのは、吉次の身代りとなつて危難を救つた弟浦二郎であることが分る。こゝに一同力を合せて敵を探すこととなつたが、浦二郎と許嫁の間柄であつた若二郎の一女糸萩は、今吉次を見て浦二郎と思ひ違へ、怨んで秋布を殺さうとするので、吉次等はこれを避けて此處を立ち退かうとし、清縄の弟子歌二郎を首領とする海賊船に囚へられた。船中には敗軍の將經高、仇嘉二郎が乘り込んでゐた。嘉二郎は兵庫で得た名刀を奪らうとし、吉次等の身に試さうとするが、却つて秋布に討たれ、經高も亦吉次に斬られた。なほ彼等の後を追うて來た糸萩は、船中に囚へられてゐた浦二郎にめでたく廻り合つた。歌二郎とは即ち吉次等を護る龍神の化身であつた。【解說】前集と後集とが二十一年を隔てて出版されてゐる。即ち前集は多く短篇を作つてゐた時代のもの、後集は多く長篇を作つてゐた時代のもので、作者が初め、これを短篇長篇いづれにするつもりであつたかは推測されないが、長篇に馴れた手法を以て、短篇的な構成の結末に當つたことは、全體の内容にも覗られ、その創作過程にも察せられるものがある。大體に美人漂泊型の說話を骨子とし、種々の事件を介在させて單調を避け、興味を狙つてゐるのであるが、やゝ錯雜した内容にその勸懲主義を以て解釋づけて行くところは說明に過ぎ、因果關係の不自然さを來たし、作爲の跡を分明ならしめてゐる。それは後編に至つて甚だしく、前半の割合に平易に筋を運んでゐるのに對して、後半はやゝ後始末にのみ追はれて、多くの不自然さを加へた憾みがある。〔笹野〕

松浦宮物語（まつらのみやものがたり）物語　三卷三册【作者】未詳【名稱】主人公辨少將が渡唐する時、その母「松浦の山に宮を造りて歸り給はん迄はそなたの空を見む」と云つたのによる。【成立】一般に、貞觀三年四月十八日成立の奧書があるが、早く高田與清は、文中「隱れ蓑のためし」の語があるから、「隱れ蓑物語」以後の成立であり、貞觀年中の作とは云へないとし、黒川春村は「風葉集」の歌（十八首）は全部本書にあふけれど、「色葉集」には見えない。文體詞遣等から云つても鎌倉初期であらうと云つてゐる。又藤岡博士は、用語や故實の貞觀まで溯り得ない實例を擧げられた。「無名草子」に「むげに此頃出で來るもの數多見えしこそなか〳〵古きものよりは詞づかひ有樣などいみじげなるも侍るめれど僞ねざめ、狹衣、濱松ばかりなるこそえ見侍らめ」と云ひ、次いで鎌倉時代の物語を批評し始め、「松浦宮」に及んでゐる。これに依つても「寢覺」「濱松」より後、「無名草子」の少し前に成立したものと考へられる。なほ文永・弘安の交成立した「[illegible]」にも、この物語の名が見えてゐる。住吉明神を軍神とし、「和國はつは物の國」といひ、文中著しく漢語使用の目立つことや、現實性を喪失した構想が、「濱松中納言」と一聯の物語であることを思はせる等、少くとも現存本が鎌倉初期の作品たるを頷かせる材料は多い。ただ「近古小說解題」のみは、「宇津保物語」（別項）に類似した構想から、一部分は平安朝のものであり、「隱れ蓑」の如き加筆かも知れないと疑つてゐる。【諸本】異本と稱すべき程のものなく、書寫年代も近世のもののみである。内閣文庫及び無窮會の藏本は和學講談所本の寫本で、後花園院親翰本を寫したもの、伴直方もこの種のものを所持したらしい（物語書目備考）。なほ宮内省圖書寮・前田侯爵家・靜嘉堂文庫・松井簡治氏・三手文庫・京大國文研究室等に各一本を藏し、活版本には續群書類從・國文大觀・日本文學大系本等がある。【梗概】昔、藤原の宮の御時、正三位大納言兼中衞大將橘冬明と申す方があつた。その方と明日香の女王との間に生れた一人の男君、みめ美しく心秀れ、十六の時、既に式部少輔右

少輔中務少將を兼任し、從五位上であつた。若者らしい浮いた噂もなく、眞面目に學問してゐるやうに見える。が、少將の心の內には、ただ一つ人やりならぬ思ひがあつた。幼などちのかんなびの女王、后腹の美しい姫君に向けられた戀心がこれである。或る九月菊の宴の後、機會はめぐつて二人は相寄り契を結び得たが、思ひは愈々增すばかりである。再會を思ふ內に女王は入內される事になり、剩へ少將は明年の遣唐副使に任命される。遣唐大使は安倍のをきまろである。いよ〳〵出發の時、女王は名殘惜しさの文を送り、母君は松浦の山に宮を造り、少將の歸るまで唐の空を眺め暮らさうと云はれる。父大將もそれではと太宰府まで送られる。航海は案外平穩で、七日目には無事唐に着いた。萬事に秀れた少將は、忽ち帝の寵を得て目をかけられる事、お側の者の諫めるばかりである。が、國に殘した人々を思ふ少將の心は寂しかつた。或る夜秋草の中をさまよふと、高樓に妙なる琴の音がする。八十許の翁が氣高く彈きすましてゐるのを、曉まで立ちつくして聞いた少將は、翁と問答の末、「日本の君が唐へ來たのは外でもない。此の琴を習ふ爲である。華陽公主といふ方が、八九月の頃、しやう山で琴をひくから、それに習ひ給へ」と敎へられ、翁から琴を授かる。翁の敎へのまゝに行くと、玉の如き女が琴を彈いてゐた。亂れ勝ちの心を念じて遂に祕曲を授かるが、切々たる思ひは止まず、十月三日を約して別れる。折しも帝は病に惱まれ、紳を呼んで「自分の死後必ず國は亂れる。汝は恐れず太子に從へ」と約する。さて約束の期日、心ときめきながら、五鳳樓の下に到り、にほやかな姫と契を結んだ。姫は形見に水晶の玉を與へ、國へ歸つても忘れないならば、日本の初瀨寺に玉を擲へて三七日の法を行ひ給へ。再會出來ようと云ふ。姫は琴を天外に飛び去らせ、自らも露の如く失せる。人々の悲しみの內に帝も崩御され、豫言の如く國は亂れ、弟の燕王は太子の幼弱に乘じて攻め寄せる。太子・母后・少將等遁れ遁れて蜀山に向ふが、道は遠く追擊は急である。少將は死を覺悟して逆襲し、敵の猛將宇文會以下を神の加護に依つて一刀の下に斬り捨てた。折しも忠臣憲德の率ゐる三千の援兵と合し、再び神將の援護で都に燕王を破る。さて天下は再び太平となり、少將は頻りに歸國を思ふが、急には思ひ立てない。年改り月の美しい或る夜、母后と目近に會ひ、お互の心は次第に相寄るのである。次の日の夕暮、あくがれ出ると、箏を調べる女がゐる。なつかしげに打解く女と不思議な契を結び、その後も度々この女に會ふが誰ともわからない。秋いよ〳〵歸國の日は迫る。母后は或る夜、紳を呼んで祕密を明かし、「宇文會は阿修羅、私は第二の天の天衆、そなたは天童であつて、二人は阿修羅を懲すため、天から下されたのである。人の世に生れたばかりに亂り心も起つた」と、不思議な女が母后であつた事をも知らせ、形見に鏡を與へる。紳は無事に歸朝し、みかどは大に喜ばれるが、もどかしく初瀨に參つて三七日の法を行ふと、果して山の峰に琴の音が聞える。再會の喜びに、はゞかる所なく、華陽公主と琴を合せる。幼なじみのかんなびのみこは、これをねたましく思はれる程である。又母后から貰つた鏡を見ると、今迄の生活があり〳〵と見える。さて、かんなびのみこにあふが、その姿は唐で思ひそめた人にどことなく似てゐる。思ひかへして引寄せるが、何となく打とけない樣子、あゝ自分は何といふ悲しい運命を與へられた身であらうかと、再び思ひは亂れるのであつた。（以下「このおく本くちうせてはなれおちにけり。」とあり、未完殘缺である）。

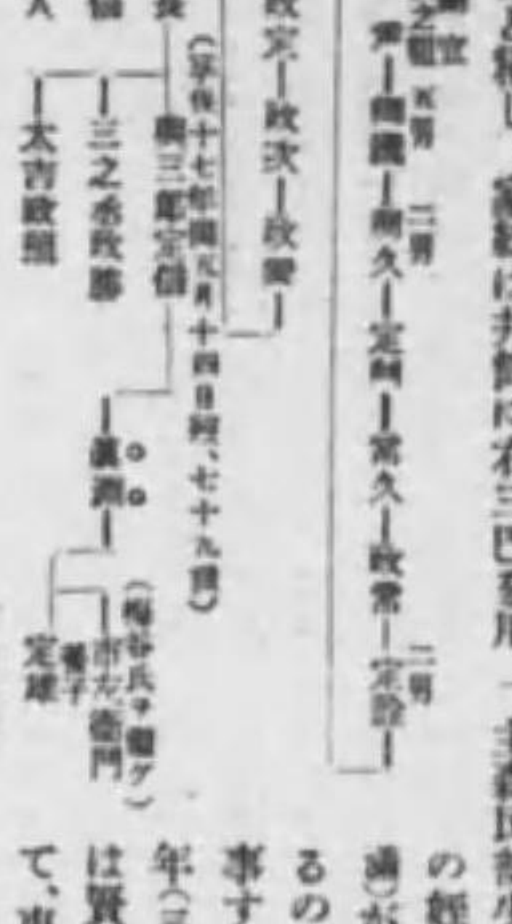
【構想】文體も、構想も「宇津保物語」（別項）を摸してゐる。その神仙的・傳奇的な點では又「濱松中納言」（別項）に類するものがある。歌も、形式的にのみ萬葉ぶりであるのによつて、物語の後世のものなるを暗示する。併し一體この物語は殘缺であり、成立も明瞭とは云へないが、焦點のはつきりしない所がある。前半、少將の父母の心境にかなり立ち入つてゐるのに、後半では全く忘れてしまひ、遣唐大使の歸朝にも殆ど觸れてゐない。書名の松浦の宮が本書の要件とあはないし、「風葉集」に辨少將の名を氏忠としてゐるが、本書には名が見えない。その他現存本には、前後撞着の破綻があり、從つて構想上失敗の作といはねばならない。神仙的な部分に著しく力を用ひてゐるが、その描寫は如何にも單純である。初瀨觀音・住吉明神を取入れても、殊更に利生を說かず、主人公も他の人物も、鎌倉期一般のものの如く、じめ〳〵した所が少い。而もかゝる著しい破綻があり、殘缺本でもある事から、或は現存本は鎌倉初期の成立であるが、それは既存原本の殘缺に、後人が手を加へたものではないかとも考へられる。すると、「近古小說解題」の加筆說も、一應反省の要を生ずるのであるが、その加筆は單なる增補に止まらず、原本の文章に對しても、相當の書き改めを行つたものと考へなければならない。

【參考】松浦宮物語考（高田與淸（德島縣光慶圖書館藏））○古物語類字鈔（黑川春村）○近古小說解題（平出鏗二郎）○鎌倉室町時代文學史（藤岡作太郎）○鎌倉時代の小說（野村八良（岩波講座日本文學））○日本文學書目解說（山岸德平（同上））　〔水野〕

窓村武（まどのむらたけ）　狂歌師【本名】多田敏包。通稱千次郎【別號】青峨堂。後、二世芬陀利華庵【生歿】寬保三年生れ、文政七年（二四八四）十一月二十二日歿す。享年八十二【墓所】青山北町智學院【閱歷】江戶青山久保町に住んで八百屋を業としてゐたが、性狂歌を好み、朱樂菅江・節松嫁々（各別項）の門に入つて勉强し、菅江の歿後その別號の芬陀利華庵を襲いで菅江側の判者となつた。青山に住む某侯村武の狂歌に堪能なるを聞き傳へ、扶持を給して狂歌の指南役に召し抱へたので、昨日まで天秤棒を肩にした八百屋が、急に大小を橫たへてその邸に出仕したといふ一奇談もある。「狂歌三十六歌仙」「狂歌花のしをり」等がある。〔野崎〕

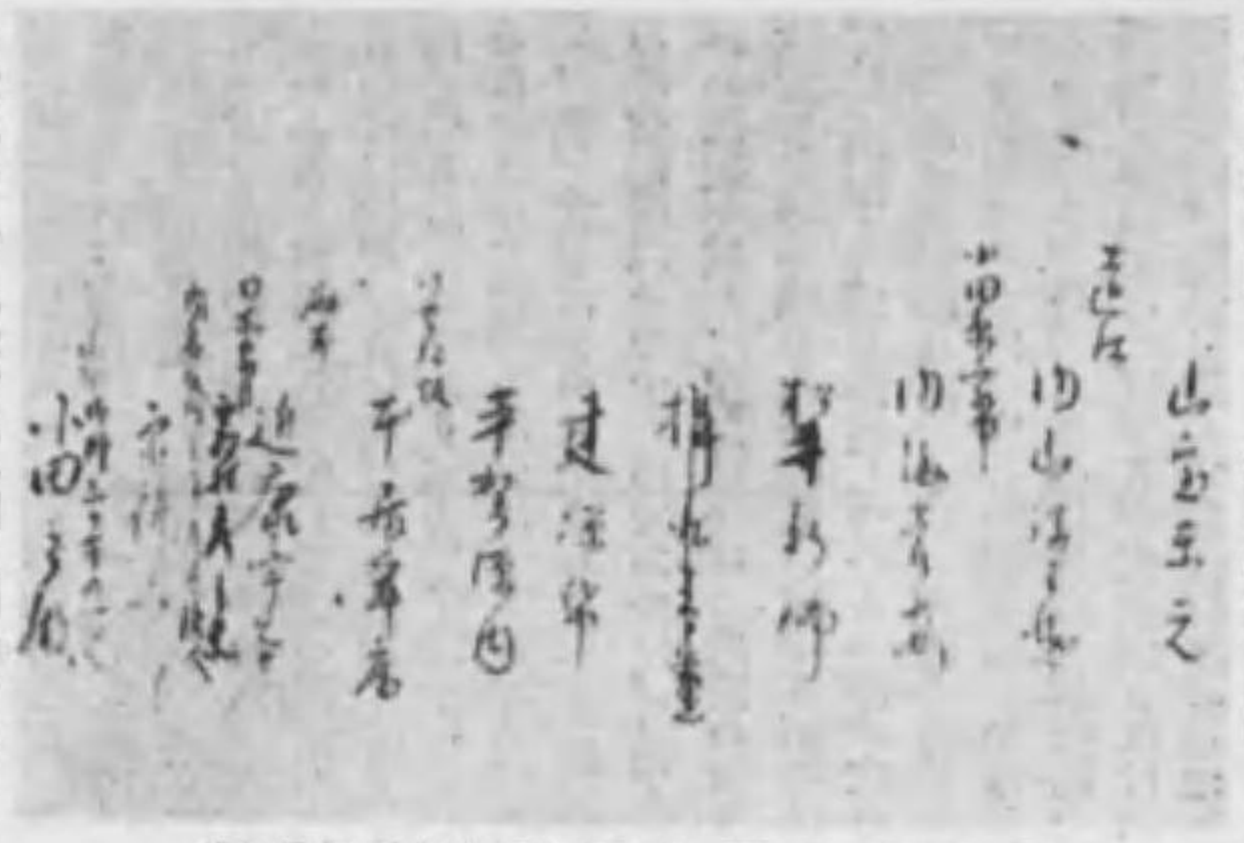
眞名（まな）　「假字」を見よ。

眞淵（まぶち）　國學者・歌人【姓名】岡部氏。本姓賀茂。名は春栖、又政躬、後政藤。更に眞淵。通稱莊助、又は參四、後衞士。【號】縣居【生歿】元祿十年三月四日生れ、明和六年（二四二九）十月三十日歿す。享年七十三。【法名】玄珠院賢譽義龍居士【墓所】東京市品川區品川東海寺【家系】賀茂氏は八咫烏となつて神武天皇を導き奉つたといふ鴨武津身命から出てゐる。遠祖賀茂神主成助は歌人で、「勅撰作者部類」によれば、その歌は「後拾遺」「金葉」「詞花」「千載」「新古今」「玉葉」「新拾遺」に收められてゐる。始祖師重の女筑前局は女官で、遠江國敷智郡濱松庄岡部鄕に封戶五百戶を賜はつたので、そこに私かに賀茂の新宮を祀り、亡き後は神領として永く一族のものに領せしめられんことを請ひ、弟道久が岡部の代官たることを許された。文永十一年に道久はこれを弟師範（改名師範）に讓つた。孫定朝は京から岡部鄕に移り、後、歸國して卒したが、その子常久は岡部に生れ、そこに土着して氏を岡部と稱し、家紋は井筒に右三巴を用ひた。常久三世の孫政久は政定を智養子とした。政定は元藤原氏、駿河國原の一黨として家康に屬し、元龜三年十二月二十二日三方原合戰に軍功があつて恩賞に預つた。政定から政次・政家・定長を經て眞淵の父定信に至つてゐる（岡部家譜考證に據る。玉事には異傳がある）。



（岡部家譜）

【閱歷】父は定信、母は岡部天王村竹山孫左衞門茂家の女で、兩親共に學才があつた。眞淵の生涯は、その在住地によつて第一期濱松時代（三十七歲まで）、第二期京都時代（三十七歲から四十一歲まで）、第三期江戶時代（四十二歲から七十三歲まで）に分つて考へることが出來る。〔第一期〕在鄕して專ら一般的な素養を積んだ時期であつて、この間、彼の一身上には波瀾が多かつた。最初彼は姉聟政盛の養子となつたが、やがて政盛に實子政友が生れたので養家を退き、後親戚政長の聟養子となつたが、享保九年（二十八歲）、妻の死にあつて再び養家を去り、享保十年、更に濱松本陣梅谷甚三郎の聟養子となり、一子（後に市左衞門）を擧げた。この間に彼は太宰春臺の門下で「國語解」を著はした渡邊蒙庵に就いて漢學を修めた。蒙庵は古文辭學派の學者で、老莊にも親しんでゐた。又知友には東麿門下なる諏訪大祝杉浦信濃守國頭及び五社神主森民部少輔暉昌があつた。殊に國頭は東麿の姪眞崎を娶つてゐた關係上、東麿（春滿）が江戶往返の途次、その家に宿泊するので、眞淵が東麿を知り、これに師事する機緣となつた。かくて享保十八年（三十七歲）、年來の志望により、且つは賢妻梅谷氏の激勵によつて京に出て、東麿の門に入ることになつた。〔第二期〕京都に遊學して春滿（別項）に師事した時期で、彼が一生の學の基礎はこの間に築かれた。當時すでに國學精神を確立してゐた春滿に從ひ學ぶこと四年、古典・古語の硏究は固より、佛・儒を排して古道を復興せんとするその上代主義を體得し、元文元年師の歿後も、なほその弟信滿（信名）に就いて硏鑽に努めたが、元文二年（四十一歲）、一旦歸鄕し、翌三年江戶に出た。〔第三期〕彼が江戶に於て國學者として一家を成した時期で、この間彼は村田春道宅に假寓し、次いで加藤枝直の近隣（北八丁堀）に招かれて住んだ。春道・枝直の外に、小野古道・楫取魚彥等の入門する者多く、服部南郭と親しく交つたのもこの頃のことであつた。江戶に出た後は梅谷の稱を止めて舊姓に復したけれども、元文五年（四十四歲）七月には歸鄕して妻子にも會ひ、九月江戶に歸つてゐる。「岡部日記」がある。寬保二年（四十六歲）には、「古今和歌集左註論」「萬葉集遠江歌考」が成り、延享二年（四十九歲）正月には實母の死に逢つて歸鄕し、「後岡部日記」がある。翌延享三年（五十歲）には八丁堀の寓居が火災に罹り、その秋には荷田在滿（別項）の推薦によつて田安宗武（別項）に仕へて國學の師となつた。在滿が致仕するに至つたのは、宗武との歌學上の意見の相違のためであつたから、宗武は殊に眞淵との見解の一致を欣び、これを優遇した。以後十五年間、國學の指南として宗武に古學を講じ、詠歌を指導した外、夫人及び家中にも敎授し、また命を受けて「祝詞解」「古器考」等を撰進してゐる。彼の盛名を聞いて入門するもの漸く多く、古書を講じ、これを刊行するものが相次いだ。寶曆七年（六十一歲）には「冠辭考」、翌八年には「萬葉考」「大和物語直解」等、順次に不朽の大著を成し、確乎たる足跡を國學史上に印した。また寶曆四年（五十八歲）十一月には、宗武四十の賀筵に列り、衣を賜はりなどして信任が厚かつたが、寶曆十年（六十四歲）、病を以て致仕し、養女（田安家臣[illegible]兵衞政舍の女）の聟養子定雄（武藏國中根[illegible]の三男）を以て代らしめ、自らは隱居料五人扶持を與へられた。なほこの年、春滿二十五年祭を營んでゐる。同十三年（六十七歲）、宗武の內命を受けて村田春鄕・春海を伴つて大和巡遊の旅に上り、歸途、伊勢松坂中町なる新上屋に泊して、はからずも本居宣長（別項）の來訪にあひ、「古事記」の註釋を慫慂して、こゝに宣長の「古事記傳」大成の緖を成してゐる。明和元年（六十八歲）の秋、居を濱町山伏井戶に移し、庭に野や畑の趣を作つて縣居と稱へ、古典の講義をなす傍ら、屢々門人を集めて歌會を催し、又明和二年（六十九歲）には「國意考」、同五年には「祝詞考」、同六年には「語意考」を著はし、詠歌に學究に倦むことを知らなかつたが、同年十月、七十三歲を以て歿した。門人等の遺稿を編み、傳記を著はす者相次ぎ、文化三年九月、墓前に千蔭撰文の碑を建てられた。鄕里濱松では天保十年三月、縣居靈社を賀茂新宮境內に營み、明治十七年、縣居神社と改稱した。又明治十六年二月、朝廷には眞淵の功を追賞せられて正四位を賜はり、同三十八年十一月、更に從三位に陞叙せられた。門人は江戶を中心として諸國に及び、國學の大成者本居宣長をはじめ、古典硏究に於ける荒木田久老・內山眞龍、文人・歌人として盛名のあつた村田春海・加藤千蔭、語學者・故實硏究者としての山岡俊明・塙保己一、その他神道家小說家として著名なものも少からず、眞淵によつて復古國學の普及進展



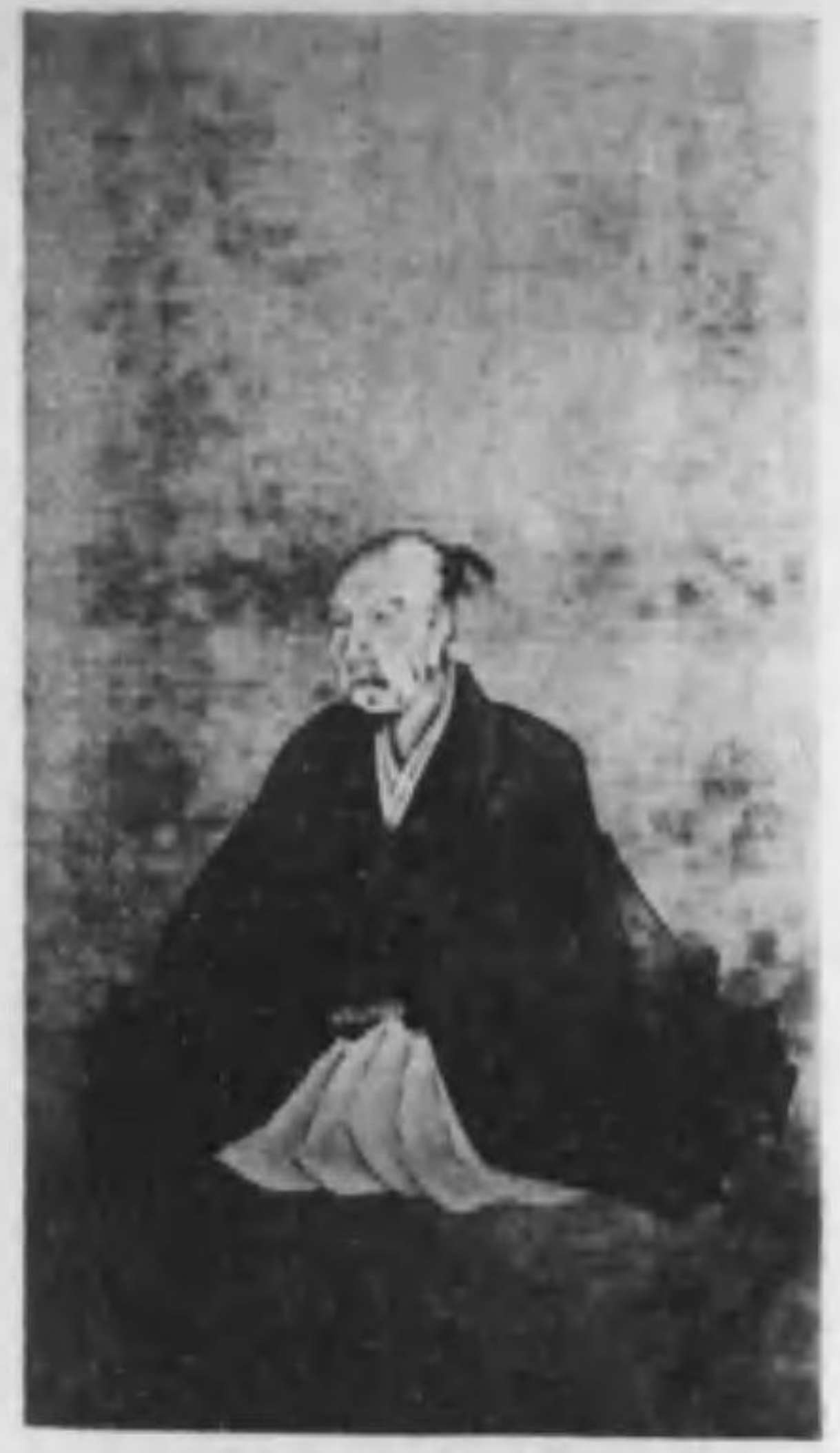
賀茂眞淵門人簿（佐佐木信綱氏藏）

したことは著しいものであつた。

【著作】 賀茂眞淵全集十二卷（內一卷目錄、國學院編輯部編）がある。〔註釋〕古事記私記一卷○古事記頭書三卷（寶曆七年八月成。內閣文庫）○古事記詞考一卷○日本紀詞考二卷（明和六年一月成。全集第四）○古事記和歌略註一卷（全集第二、新版第五）○日本紀和歌略註三卷（明和二年十二月註。全集第二、新版第五）○延喜式祝詞解五卷（延享三年成。全集第二、新版第五）○祝詞考三卷（別項）○萬葉集遠江歌考（寛保二年成。全集新版第四）○萬葉解通釋幷釋例一卷（全集新版第四）○萬葉考二十卷別記三卷（別項）○柿本朝臣人麿集之歌一卷（天保六年刊。全集新版第三）○萬葉集竹取翁歌解一卷（明和三年二月成。全集新版第四）○萬葉新採百首三卷（嘉永四年刊。全集同上）○萬葉問目・萬葉再問・萬葉集疑條（全集新版第四）○神樂歌考一卷（別項）○催馬樂考一卷（別項）○神樂歌考一卷（別項）○風俗歌考一卷（別項）○續萬葉論二十卷（古今和歌集打聽參照）○續萬葉集疑說一卷（全集新版第一・新版第六）○古今和歌集打聽二十卷（別項）○宇比麻奈備三卷（別項）○伊勢物語古意六卷（寛政五年刊。全集同上）○大和物語直解三卷（別項）○源氏物語新釋五十四卷（別項）○三部假名鈔言釋二卷（全集第四・新版第十一）。〔論考〕古今集序表考一卷（明和二年成。全集第一・新版第七）○古今集序表考別記一卷（同上。全集第一・新版第七）○古今和歌集左註論一卷（寛保二年九月成）○三代集總說一卷（寶曆十二年成。全集第一・新版第七）○國意考一卷（別項）○歌意考一卷（別項）○文意考一卷（寛政三年成。寛政十二年刊。全集第三・新版第五）○書意考一卷（全集第三・新版第五）。〔語學〕語意考一卷（別項）○冠辭考十卷（別項）○久邇門致考一卷（明和二年十月成。全集第四・新版第十）。〔故實及び雜〕古冠考附直冠考一卷（寶曆十年六月成。全集第四・新版第十二）○古器考一卷（寛延二年一月成。全集同上）○かさねのいろあひ一卷（全集同上）○縣居雜錄一卷（全集同上）○縣居問答書一卷（寛延三年十月成。全集同上）○上古男女衣辨一卷（全集同上）○雜問答考一卷（寶曆九年八月成。全集同上）○龍のきみへ（問ひ答へ）（寶曆十年四月成。全集同上）○賀茂翁詩稿集一卷（全集新版第十二）○かぶくろ一卷（全集同上）。〔歌論・歌集・紀行〕にひまなび（別項）○歌體約言一卷（延享三年九月成。全集第二）○國歌論臆說一卷（別項）○國歌八論餘言拾遺一卷（寛保二年成）○再奉答金吾君一卷（別項）○古風小言一卷（寛延年中成。全集新版第十二）○賀茂翁家集五卷（別項）○安賀當居歌集一卷（別項）○和歌小詞一卷（全集新版第十二）。

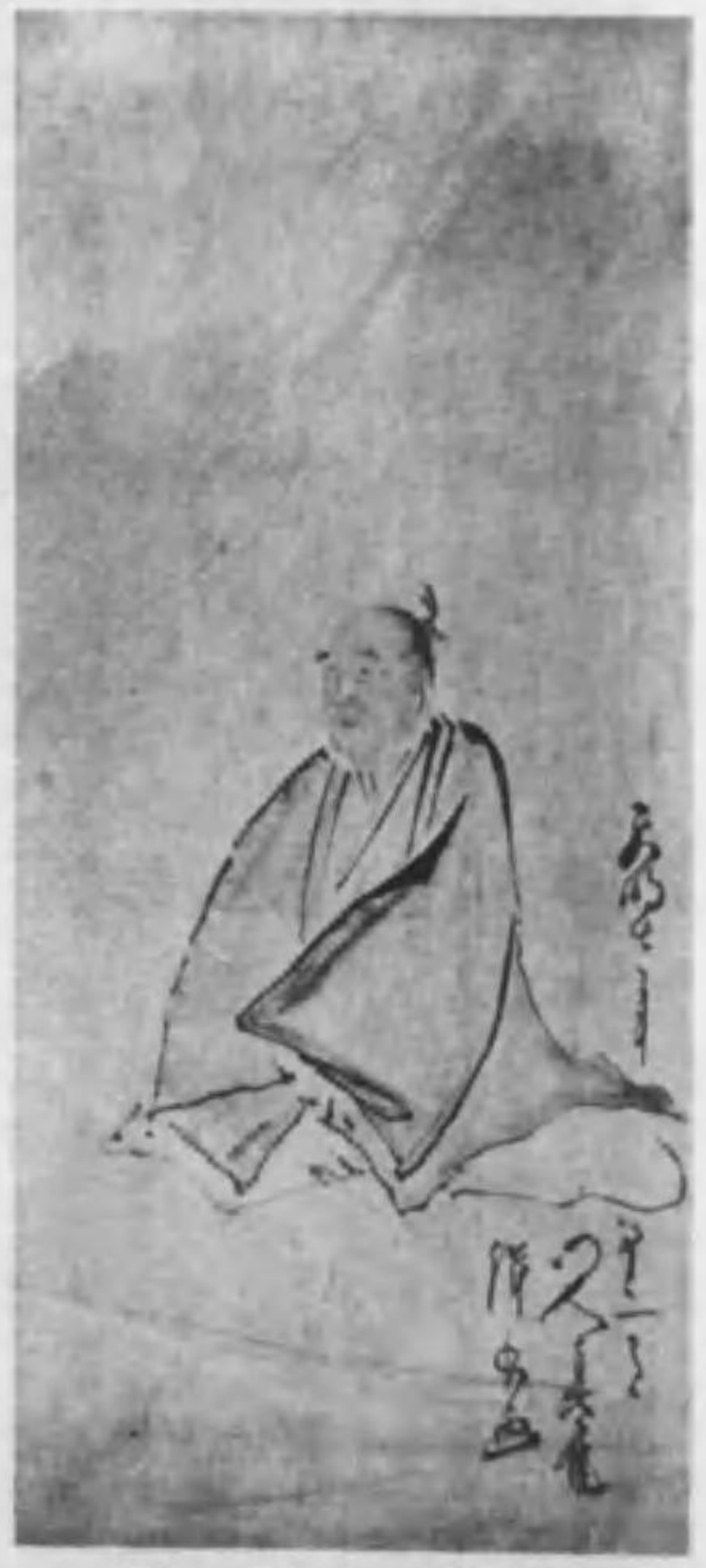
【業績】 歌人として成し得た創作的方面と、學者として成し遂げた學問的方面とに區分して考へることが出來る。が、何れかといへば彼の天分は前者にあつて、彼の學問的業績も著しくその詩人的性質に裏づけられたものであつた。この事は、彼の門下から村田春海・加藤千蔭を初め、田安宗武・加藤宇萬伎・伊能魚彥・小野古道・荒木田久老等の歌人の輩出してゐる事實が何よりも雄辯に物語つてゐる。春海の如き、眞淵の眞意は古道にはなくて歌道にあつたとさへ言つてゐる。歌人としての眞淵は萬葉復古を理想とし、晩年には更に記・紀歌謠にまで溯らうとした。萬葉復古を唱へたものは彼以前にもあつたけれども、彼の如く明確な意識を以てこれを主張したものは未だ存しなかつた。かくて彼は作歌上に萬葉語を復活させ、たけ高き歌を成し、復古的歌風を以て一代の歌壇を風靡し、後世に對しても深い影響を及ぼしてゐる。勿論今日からいへば、彼の歌は後に出た良寛の歌の如く、又平賀元義の歌の如く萬葉の生命を傳へ得たものとは言ひ難いにしても、歷史的には彼の萬葉復古が重大な意義を齎したものであつたことは否定出來ない。學問的方面に於ける彼の功績の主なるものは、「萬葉集」の研究であつて、「萬葉集考」（別項）はその代表的著作である。各卷各歌について制作年代を考へ、本文を校定し、精密なる語釋を施し、文學的價値を論じてゐるなど、萬葉研究上契沖に一步を進めたものといふことが出來る。而して彼の萬葉研究の目的は、彼が諸所に言つてゐる如く、古の心・詞を知らんためであり、古の心・詞を知るのはそれによつて古代を明かにせんがためであつて、後に宣長によつて成された「古事記」研究の準備的階梯をなすものであつた。又記・紀二典の比較を試み、祝詞に於ける成語の價値に注意し、平安朝の和歌物語に關する研究に於ては、契沖・春滿を踏襲しつつも一層考究を進めて間々獨創的見解を示し、物語の價値に關する思想に於ては、宣長の物語論に先驅したものがある。併しこれ等は何れも副次的な研究で、「萬葉集」に關する研究の深さには及んでゐない。語學に關しては「語意考」（別項）を著はし、五十聯音橫韻延約通略說を述べてゐる。これは春滿の繼承で、彼の古典註釋の根柢をなすものであつた。又「冠辭考」（別項）の如きも、獨斷があるとはいへ創見に富み、枕詞研究に一時期を劃したものといふことが出來る。最後に彼の古道思想を見るに、「天地のまにまに」といひ、「高く直き」といひ、又「强ひず數へず、見直し聞直し」といつてゐる上にも明かなやうに、彼の古代は老莊思想に影響された理想古代であり、言語・文獻によつて學問的に認識せられたものであるよりも、詩人的憧憬の對象として直觀せられたものであつて、これがやがて宣長によつて文獻學的に理解せられ、修正せられ、更に篤胤によつて神學化せられて、國學の神髓ともいふべき古道として確立せられるに至つた。かくて彼が國學發展上、學問として眞に成就し得たところは古語の研究復活にあり、その古代主義に至つては、一つの世界觀人生觀として理解さるべきではあつても、文獻學的闡明ではあり得なかつた。併し國學が古道を對象としながら單なる哲學的考察にもならず、又言語を重んじながら單なる言語研究にも終らないで、古語研究即ち古道闡明に立脚した學的體系として成立し、古語・古意に對する知的理解の根柢に、更に創作的體驗を要求し、この體驗を基礎として古代文化を認識し、古道を闡明しようとする特色ある方法論を確立するに至つた上には、彼の全業績が如何に有力な基礎をなしてゐるか。そしてこの方法論こそ近世國學をして、歐洲の文獻學に對し、又諸他の科學的研究に對して特異性を主張せしめる重要な特質である。〔以上西尾〕

【歌論・歌風】 「大倭も唐も古こそ萬に宜しければ、古事を尊めれ」といふ風に、古道を以て文事百般の理想とし、作歌の目的もこの哲學的根據に依つて立てられた爲め、詠歌は單に古學追求の一つの方便に過ぎないといふやうな主客顚倒の結果を招くに至つた。作歌の主體に對して要求せられる第一の條件は、眞淵に依れば「高くすなほ」であること、即ち素樸雄勁であることである。この意味に於て、人


賀茂眞淵像（上田萬年氏藏）

（竹柏園藏）

眞淵自筆稿本宇津保物語考（竹柏園藏）


眞龍筆眞淵肖像（竹柏園藏）

萬葉新採百首解自筆稿本（竹柏園藏）

纔の勝つた降れる世の姿を厭ひ、純眞自然に近い上古にあこがれを持つた。次に歌は調べを以て第一とすると說いた。「古歌は調べを專らとせり、謠ふものなればなり」といふのがその主張である。この調べとは、彼に依れば五七調を天地の調といひ、「萬葉」の歌はこれであり、「古今」は反對に七五調であると說いてゐる。この外、長歌を奬勵し、序歌をすゝめ、單調な當時の歌界に大きな刺戟を齎した。その作風に就いては、「縣居歌集」の千蔭の序が大體を盡してゐる。卽ち「歌のさまは始と中頃と末と三つのきざみありき」といふのが、それである。荷田春滿に就いてゐた初期は、その歌風もそれに似通つて、主として姿は優艷であつた。中頃に至つて漸く萬葉風を帶びるに至つたが、一體にこの時代のものは、素樸剛健なる內容を盛るに、まだ言葉の雅びを蟬脫することが出來ず、どちらかと言へば、過渡的な作といふことが出來よう。千蔭はこれを「中つ頃よりみづからの一つの姿となりて、みやびにして調たかく、しかも雄々しきすぢを詠みいだされ」と說き明かしてゐる。この頃から次第に獨自の歌風に目ざめて來て、第三期に於て、眞淵は完全に蒼古な萬葉調となり、當時では全く追隨することの出來ぬ境へと入つたものらしい。千蔭が「いたく思ひあがりて、まうけずかざらず、誰も心及びがたきふしのみ」と言ふのがそれである。

秋の夜のほがら〳〵と天の原照る月影に雁なきわたる
こほろぎの鳴くやあがたの我が宿に月影きよし訪ふ人もがも
鳰鳥のかつしか早稲のにひしぼりくみつゝ居れば月傾きぬ
百くまの荒き濱路こえ來ればとよろぎの磯に波のよる見ゆ

かういふ作品があるからして、眞淵の言は新しく生きて來る。而もこの古調の方面は、田安宗武の外繼ぐ者がなくて、眞淵としては恐らく不本意であつたらうと思はれる新體の作風を千蔭なり春海なり、すぐれた門人が一樣に後を追うたことは遺憾に感じたであらう。最後に注意すべきは、眞淵の長歌の秀れてゐることである。古學が復興して、眞淵の後塵を拜する者は、競つて長歌を詠んだ。千蔭・春海・宣長等、盡く同一である。然るに眞淵を除いて誰一人として價値あるものがない。江戸派の歌人等は、長歌の組織・構成をかなり分解的に研究してゐるにも拘はらず、かういふみじめな狀態におかれたことは、根本的なものが不足してゐたのではなからうか。さういふ點から見ても、眞淵は實作家として優に一個の大家であつたことが分る。〔[illegible]〕

【參考】老木の花○縣居すさみぐさ○賀茂翁遺草○かりの行きかひ○賀茂翁家集拾遺○賀茂の川水○荷田在滿家歌合○さき草○うめあはせ○縣居集補遺（全集同上）○縣居遺稿○同家說考證（村田春海）○賀茂眞淵翁家傳（荷田御風）○縣居翁年譜（宮田惟助）○縣居門人錄（賀茂眞淵手記）（以上全集所收）○近世三十六家集略傳（河喜多眞彥）○古學小傳（清宮秀堅）○近世畸人傳（伴蒿蹊）○玉勝間（本居宣長）○玉襷（平田篤胤）○日本文學大綱第二十一（武島又次郞等）○賀茂眞淵と本居宣長（佐佐木信綱）○日本歌學史（同上）○國學者傳記集成○國學發達史（清原貞雄）○國學全史（野村八良）○日本思想の研究（[illegible]）○大日本歌書綜覽（福井久藏）○賀茂眞淵全集記念號（國學院雜誌）○賀茂眞淵號（心の花）○賀茂眞淵傳資料（佐佐木信綱）（國語と國文大正五ノ八）○宗武と眞淵（羽倉敬一郎）（國語と國文學四ノ一）○賀茂眞淵略傳（同人）（文三ノ八）○賀茂縣主眞淵傳（賀茂求道）（國學院雜誌二十三號）○賀茂眞淵の肖像及其傳記（平出鏗二郎）（帝國文學二ノ二）○賀茂眞淵と萬葉集（久松潛一）（新潮昭和四ノ一〇）○賀茂眞淵の萬葉主義に就て（大石新）（國語と國文學二ノ五）○縣居翁と古文辭學（[illegible]）（わか竹一一ノ三・四）○贈正四位賀茂眞淵翁事蹟（小田清雄）（文三ノ九）○縣居手簡（佐佐木信綱）（心の花二九ノ六）○賀茂翁家集五則（同上）（同上二ノ五・七・八・九・一二）○賀茂眞淵の古道說に就て（大石新）（歷史と地理一三ノ六）○賀茂眞淵の短歌について（田中一松）（心の花二一六ノ四）○賀茂眞淵の歌學について（[illegible]）（短歌雜誌三ノ八）

魔佛一如繪詞（まぶついちよゑことば）　繪詞　一卷

【作者】一遍及び一向宗を罵る詞があるから、淨土敎、特に眞宗の弘布し始めた後の人たること明白。且つ念佛・禪・法華・華嚴・法相・眞言の何れをも非難してゐるから、或は天台などの僧侶か。【名稱】文中「[illegible]如一如無二如、故[illegible]」の經文より出づ。【成立】[illegible]【諸本】繪土佐經隆[illegible]說もある）が[illegible]全文は、尾崎[illegible]本[illegible]【內容】朝文學「天狗[illegible]諸村に住む或[illegible]り、高僧達の集[illegible]佛法障碍の謀[illegible]勝ち誇つて酒宴遊興を事としたが、四條河原で衆の手に捕へられ、[illegible]された友を見て無常を觀じ、邪執憍慢を懺して佛道に歸し、魔佛一如の理を示すことを作る。各天狗によつて佛敎各宗を代表させ、論難してあるが、天狗の會合といふ說話の形式は「太平記」卷二十五「宮方怨靈會六本杉事」、同卷二十七「雲景未來記事」等と同型で、なほ世相を諷しつゝ諷刺した氣味がある。〔[illegible]〕

【參考】[illegible]

幻影の盾（まぼろしのたて）　短篇物語

【作者】夏目漱石【發表・刊行】明治三十八年四月「ホトトギス」に發表。後、他の六篇と共に「漾虛集」（明治三十九年）に收められた。漱石全集第二卷所收。

【梗概】一心不亂といふことを、目に見えぬ怪力を藉り、縹渺たる背景の前に寫し出さうとしたものだと作者は言つてゐる。幻影の盾の所有者なる若き騎士ヰリアムは白城の騎士であつた。彼は老友シワルドと共に夜鴉の城を攻めることになつた。その城の中には彼の愛人クララが棲んでゐた。城は火を吹いて燒け落ちた。焰の中に女の姿があつた。燒け出された馬が二匹宙を飛んで來た。ヰリアムはその一つに打ち乘つて南へ走つた。何里かを走つてゐると、身はいつしか明るい林の中に在つて、池のほとりに女が立つてゐる。忽ちにして四面空濶、玲瓏虛無の世界となる。また再轉して春とこしへの南國となる。ヰリアムとクララは林檎の花の間に刹那の幸福を樂しんで「[illegible]」と叫んだ。終生の情を分ち、融合の甘きを嘗めた。

【批評】戀に心を惱ましてゐたヰリアムと、麗はしく晴れやかな世界に飛躍したヰリアムとの間には、千里の溝壑が橫たはつてゐる。作者は

この飛躍を納得させるために詩的な浪漫的な表現を用ひて讀者の空想を天翔けらしめようと試みた。それには少くとも當時に於ては非常に新鮮なヘイカラな語法が、少からず全體の調子を助けてゐる。文體としてもそれまで類例のないものであつた。　（野上）

繼子物の謠曲（ままこもののえうきよく）【曲目】幼い時に實母に死別した子の悲慘な又は可憐な樣を描いてゐる謠曲に、「雲雀山」「弱法師」「竹雪」「松山鏡」がある。【諸本】現行諸流謠本。謠曲叢書・日本文學大系・國民文庫・謠曲三百五十番集（日本名著全集）等に所收。

【雲雀山】四番目（作者）世阿彌（能本作者註文・二百十番謠目錄）【内容】奈良の横佩右大臣豐成は、さる人の讒言を信じ、家臣（ワキツレ）に命じて、我が娘中將姬（子方）を殺させようとしたが、家臣は乳母侍從（前ジテ）と共に大和紀伊の國境雲雀山に姬君を隱して、密かに育ててゐた。その後、父豐成（ワキ）は狩に出て、圖らずも乳母（後ジテ）に出會つた。乳母侍從は姬君を思ふ餘り狂亂してゐるのである。豐成は深く先非を悔い、乳母に導かれて姬君の庵を尋ね、我が家に連れ歸つたといふ曲。「當麻」の前篇をなすものであるが、出典は見當らない。二段劇能。五流現行。

【弱法師】四番目（作者）世阿彌（能本作者註文・二百十番謠目錄・申樂談儀に曲名見ゆ）【内容】河内國高安の左衞門尉通俊（ワキ）は、さる人の讒言を信じて、我が一人子俊德丸を追放したが、さすが不便に思つて二世安樂のために天王寺で一七日の施行をした。俊德丸（シテ）は勞苦の餘り、盲目の乞丐人となり、弱法師といはれてゐた。そして今日も天王寺に出て寺の曲舞を謠ひ舞つてゐた。父通俊は我が子の姿を見て驚いたが、暫く人目を避けて、俊德丸の物狂ほしい舞を眺め、やがて夜の更けるのを待つて、故里に連れ歸つたといふ曲。出典は見當らないが、「太平記」北條高時が田樂を弄んだ條に出てゐる「天王寺のやらればし」が卽ちこれで、早く田樂（別項）に作られてゐたものらしい。一段劇能。五流現行。

【竹雪】四番目（作者）世阿彌（能本作者註文）【内容】越後國直井何某（ワキ）は妻（前ジテ）を離別して長松に置き、二子のうち姉（前ヅレ）は母につけ、弟月若（子方）は、我が家に留め、後妻（狂言）に世話させて置いた。後妻は繼子月若を虐待して、夫の留守に竹の雪を掃はせ、遂に凍死せしめてしまつた。月若の實母（後ジテ）と姉（後ヅレ）とは、月若の死を聞いて雪の中に泣き悲しんだ。そこへ夫が歸つて來て一切の事情を知り、共に歎いてゐると、竹林七賢が天降つて月若の命を助けたといふ曲。出典はない。二段劇能。寶生・喜多現行。

【松山鏡】五番目（作者）不明（能本作者註文）【内容】越後國松の山家で、或る娘（子方）が誰にも隱して物に見入つてゐるので、父（ワキ）が繼母を呪詛してゐるものと疑つて叱ると、實は鏡に向つて亡き母の姿を見てゐるのであつた。父はこのいぢらしい樣に涙を流した。やがて母の亡靈（ツレ）が現はれると、倶生神（シテ）が地獄から迎へに來たが、鏡に映る母の影が菩薩のやうであつたので、倶生神も孝子の弔ふ功力に感じて、獨り地獄に歸つてしまつたといふ曲。かうした傳說があつたのであらう。文獻には見當らない。一段劇能。觀世・金剛・喜多現行。

【構想】母性愛を極度に讚美してゐる謠曲作者は、繼子いぢめを描くことを餘り好まないらしい。早く母を失つた孤兒について描いた上揭四曲のうち繼母の殘忍な虐待をまざ〳〵と描いてゐるのは「竹雪」だけで、「雲雀山」と「弱法師」とには、たださる人と記して繼母とは明示してゐない。繼母の讒言よりも寧ろ父の輕率を非難してゐる。殊に「松山鏡」では遂に繼子が繼母を憎んでゐるものの如く疑つただけで、繼母の虐待は少しも見えない。これを一曲の與へる興味から見ても、繼子いぢめが主題となつてゐるのは「竹雪」だけで、「雲雀山」は女物狂、「弱法師」は曲舞・男物狂、「松山鏡」は鏡の驚異が中心となつてゐるのである。【參考】謠曲評釋大和田建樹　○謠曲大觀佐成謙太郎　（佐成）

眞道（まみち）漢學者【姓】菅野朝臣。本姓は津史、後に津連。【生歿】天平十三年に生れ、弘仁五年（一四七四）六月二十九日歿す。享年七十四【家系】菅野朝臣は百濟の貴首王の孫、辰孫王の後で、大和の宇陀郡菅野村に居つたので、その地名から取つた名稱である。

辰孫王……午定君—臘尚—山守—鹹淵—眞道

【閱歷】寶龜九年三十八歲で少內記に任ぜられ、東宮學士を兼ね（延曆四年）、更に伊豫介・圖書頭等を經て、延曆九年（五十歲）、伊豫守となり、又上表して菅野朝臣の姓を賜はつた。同十一年治部大輔となり、民部大輔に轉じ、翌々十三年平安遷都あり、從四位下となる。十四年左兵衞督を兼ねた。十六年伊勢守となり、左大辨に任じ、伊豫守を兼ね、勘解由使長官を加へた。翌年左衞士督に遷り、ついで相模守・但馬守を兼ねた。同二十四年（六十五歲）正月參議に進み、翌大同元年太宰大貳を兼ね、同二年山陰道觀察使となり、參議を罷めて刑部卿・民部卿を兼ね、三年左大辨・大藏卿を兼ね、四年從三位に昇り、東海道觀察使に遷り、宮內卿となる。翌弘仁元年（七十歲）近江守、參議に復し、又常陸守となる。翌年致仕した（但し常陸守はもとの如し）。【業績】彼は當代の碩學として重きをなしてをり、延曆十三年八月、藤原繼繩等が勅を奉じて國史十四卷を撰修した際にも、これに關與してゐるが、殊に同十六年二月に功を竣へた「續日本紀」（別項）の撰修には、特に力を致した。蓋し同書の上編二十卷は主として眞道の手に成つたもので、その故に、同書を眞道編とする記載も少くない程である（本朝書籍目錄・二中歷・拾芥抄等）。詩人としては殆ど傳へるところがなく、「凌雲新集」にただ一首見えるのみである。【參考】凌雲集○類聚國史一四七○新撰姓氏錄　（山岸）

豆鐵砲（まめてつぱう）俳書【刊行】明和乙亥中秋出版とある。明和二年が乙酉、四年が丁亥であるから乙亥はどちらかの間違ひであらう。本石町十軒店山崎金兵衞板。【解說】當時の宗匠たる鱗々・志夕・一志・麥浪、外二三人の選にかゝる五文字・段々・折句等の勝句を集錄した小冊子で、特に段々の附合等を評說せる好書である。　（西原）

眞山靑果（まやませいくわ）小說家・戲曲家【本名】彬【閱歷】明治十一年九月、仙臺市に生る。第二高等學校醫學部を中途退學し、上京後、小栗風葉の門に入り、短篇作家として正宗白鳥と並び稱せられた。作風は當時勃興の自然主義に屬するものであつたが、主觀的情緒的な點で、その埒を出たものが多かつた。鄕土色の豐かなる小說集「南小泉村」（別項）が最も知られてゐる。なほその當時、既に「第一人者」（一幕）及び「生れざりしならば」（一幕）の二作を出して、イプセン風の社會劇として相當世評を呼んだが、その後、或る事情によつて文壇を遠ざかり、松竹合名會社に入り、新派劇の隱れた作者として十數年を過した。亭々生の筆名の新派脚本は彼の作である。大正十三年、「中央公論」誌上に「玄朴と長英」（一幕）を發表して忽ち劇文壇に復活し、つゞいて長篇戲曲「平將門」（二部曲）（別項）「坂本龍馬」その他の戲曲を出して、次第に地步を進めて來たが、綺堂以下の既成作家皆老い、新進の見るべきもの亦少き劇文壇は、彼の今後に大なる期待をかけてゐる。最近は「乃木將軍」「東鄕大將」「大石最後の一日」「楠公櫻井驛」等、英雄偉人の心境を掘り下げて、動中に靜を見んとする努力の著るしい作のみと云つてよい。目下松竹興行會社の社員である。彼は又夙に西鶴の硏究に苦心してゐるが、未だその業績を發表するに至らない。【著作】南小泉村○平將門○反叛時代の將門○乃木將軍。【作風】壯年の戲曲「第一人者」以來、史劇と現代劇との別なく、彼の描くところの性格は、常に一貫して强烈な我意識と深刻なる自己解剖に起因する苦悶が、その常に變ることなき主題である。作劇術も亦精到を極め、殊に新派劇座附作者としての體驗から、實際舞臺上の知識に富んでゐる現代有數の劇作家の一人である。　（長田）

眞弓（まゆみ）歌學者【姓名】内山氏【號】棊芳園・眉生【生歿】天明六年信濃國北安曇郡十日市場村に生れ、嘉永五年（二五一二）信濃國筑摩郡荒井村に歿す。享年六十七。【閱歷】眞弓は、十四五歲の時、既に歌を能くするといふ譽が高かつたといふ。初め池田村の杉山氏について漢學を學んでゐた。或る時、淺邊方壹といふ人が、漫遊のついでに塾に立ち寄り、毎日のやうに豪飮放談をしてゐたのを見てゐて、急に儒生を憎む心が生じ、志を變へて京都に上り、景樹の門に入つた。やがて業を終へ、共に桂園に學んでゐた同國の人萩原貞起と連れ立つて鄕里に歸り、池田村に塾を開いたが、門人は集まらず、深く頼みとしてゐた鶴春江も世を去つてしまつたので、遂に塾を廢して江戶に出た。併しながら江戶でも思ふやうに行かなかつた。その上偶々天保八年の饑饉に際會し、殆ど餓死せんばかりの狀態であつた。この時、貞起と窪田發谷とが相謀り、眞弓を鄕里に迎へて、再び塾を東筑摩郡和田荒井村に開かせたが、今度は門人も多く集まつた。彼は塾學の傍ら、園を設けて草花を植ゑ、それを棊芳園と名づけ、靜かな日を送るやうになつたのである。天保十四年、景樹死去の年、「歌學提要」（別項）の稿が成つた。自ら筆記したものや同門の友人中澤重樹が筆記したもの、その他の中から景樹の歌論を集め、分類し、統一をつけたものである。翌天保十五年には、「東塢亭塾中聞書」の稿が成つた。矢張り景樹の講義の筆記を纏めたものである。中には、「歌學提要」に述べられてゐることも加へられてゐる。いづれにしても、景樹から親しく聽いた講義を、散佚させないで、忠實に纏めたのが眞弓である。これは普通では出來ぬ仕事で、この仕事は桂園の中で、眞弓をして異色を放たしめてゐる。嘉永三年、六十五になつた年の秋頃から中風に冒され、五年に歿した。信濃に桂園の門流の多いのは、眞弓の力に與かるところ大である。【著書】歌學提要○東塢亭塾中聞書○東塢鶴齡○香川景樹大人筆話○東塢遺書抄○梅月堂門人輿書○家相辨惑○棊芳園隨筆。　（鎌田）

迷子札裁斷桂礎（まよひごふだきりのいしずゑ）脚本　九幕二十場　お家世話物【作者】勝能進（序二・五・七幕）・勝諺藏（三・四・六・八幕）合作。【通稱】「木鼠吉五郎」「唐茄子屋」【興行】明治十三年四月初演、大阪戎座。

【役割】木鼠吉五郎・丁稚長四郎・力之丞妻お雪（嵐璃寬）、手代常吉・戶田山城守（中村福助）、安田幸八後に村安力之丞・伊勢屋の伜與兵衞（嵐璃笑）、若黨惣助・水野和泉守（中村若松）、伊勢屋由兵衞・新將監文助（中村福平）、娘お菊（嵐みんし）、吉川鄕藏・紺屋彥兵衞・大工熊五郎（尾上多見太郎）、娘お霜（實川正朝）、百姓常助・大岡越前守（中村翫七）。

【諸本】河竹繁俊氏藏寫本。その外、大阪府立圖書館の寫本。東京上野圖書館の勝諺藏作演劇腳本集等に所收。

【梗概】（序幕）（越後柴田領八幡宮境内）溝口伯耆守の指南番安田幸左衞門と町道場を開いてゐる吉川鄕藏とは、今日御前試合を舉行。安田の息子幸八は、妻お雪と共に心配してゐる。（御前試合）吉川は家老堀江勘解由の甥に當るので、幸左衞門は故意に勝を讓る。然るに幸八は願ひ出て試合をなし、見事に吉川に勝つてしまふ。伯耆守は幸左衞門の分別に感じ、吉川を所拂ひにする。幸左衞門も親の心底を悟らぬ幸八を勘當する。伯耆守は歸參の日の前祝ひに、溝口家重代の來國行の銘刀を賜はる。（五ヶ年經過、異本には七ヶ年とある）。（二幕）（東叡山花見）惡侍吉川鄕藏等本鄕の質屋伊勢屋由兵衞から金銀を强奪してゐる。村安力之丞と變名してゐる幸八は、越後より出府した若黨惣助より、殿の上意として來國行を手證とし、早速歸參せよとの手紙を受取る。浪人生活の不如意より伊勢屋へ入質して元利合計金百兩になつてゐるので當惑する。以前安田家の仲間であつた百姓常助が恩返しのため調達方を申し出る。常助は紺屋彥兵衞方に番頭をしてゐる伜常吉へ（明晚までにと金策を依賴する。伊勢屋由兵衞は伜與兵衞の身持を直さうと紺屋彥兵衞の娘お菊を嫁にする積りである。このお菊に鄕藏が狼藉するのを力之丞が助ける。お菊は惚れ〴〵と力之丞を口說く。仕方がなく明日の晝までに返事をすると言ひ逃れる力之丞、丁稚長四郎に住居を見顯はされてしまふ。（三幕）（富士前町裏借家）力之丞の依賴で家主が貸家札を貼つた力之丞の宅へ、お菊は丁稚の案内で訪問するが、生國越後へ發足したとの家主の言葉に泣きながら歸る。（湯島天神切通し）常助父娘は、常吉の見えないのは必定金策の出來ぬためと推察し、首を松ケ枝に吊らうとするのを木鼠吉五郎が救ひ、事情に感じて金子調達を約束する。（力之丞假住居奥座敷）女房お雪は外出してゐる。お菊を避けるため、今日一夜だけの假住居である。奉公人十四五人も置いた穀物問屋、昨日迄の實家が漸く買手付き、その留守番代りに寢るのである。一部始終を聞いて家主は感心する。（同假住居表通り）主人に金子信用方を拒絕された常吉は、遂に盜みを決心する。同じ心で來合せた吉五郎は互に助け合ひ、盜賊に入る約束をするが、目的の家は力之丞が留守番する空家である。其處へお菊が力之丞の後を追ふために、百五十兩を拐帶して出奔して來るのを親泉勘六が絞殺して奪ひ取る。と吉五郎が窺ひ寄つて百兩を取上げ、勘六には五十兩を與へ、この罪科は引受ける故、正業につけと言ふ。九ツの鐘。（元の假住居奧

座敷）忍び入つた常吉を捕縛した力之丞は、志は頼母しいが行爲は惡いと諭す。一子幸吉は、小判を與へるとて帶に付いた迷子札を差出す。その迷子札から父親の舊主人と分明する。力之丞は常吉を安心させるために、金子は調達出來たと、嘘を言つて歸す。（元の湯島天神切通し）吉五郎は常助に先刻の百兩を與へる。そして今日を命日に線香を上げて呉れるのが禮だと言ふので、吉五郎の素性を知るが、義心の厚いに感ずる。殊にお豐はその男前に惚れて了ふ。常吉が力之丞との會見の件を話に來るが、遲刻した不孝者と勘當する。吉五郎捕縛。お豐の悲歎。〔四幕〕（本郷春木町伊勢屋居先）お菊の檢視が北町奉行同心達に依つてなされてゐる。關係人由兵衞・彦兵衞等の取調べ。結局絞殺した死骸を吊したものと判定される。と長四郎の報告に駈付けた常吉を、金錢の借用申込などから彦兵衞は下手人と主張する。併し忠勤を勵む律義者といふので嫌疑は薄らぐが、常吉は自身の潔白を明かにしようと決心する。そして長四郎を說いて遂にお菊と力之丞との事情を白狀させてしまふ。由兵衞は力之丞から今朝受取つて來た金包を差出す。力之丞實は幸八と知らぬ常吉は主人の娘の敵としてその捕縛を歎願する。（村安力之丞召捕）力之丞召捕となる。〔五幕〕（北町奉行腰掛）訴訟人多勢。いろ〳〵と北町奉行に對する不平話。（拷問所）取調べの役人達も、最近北町奉行所の不成績を嘆息し合ふ。それ故に中山出雲守も大岡越前に對する競爭心から例格をも省みず、直接拷問所へ出席。力之丞は寃罪を極力主張するが金百兩の出處に就いては、常助の迷惑を思ひ返答しない。奉行の親戚吉川粲藏も試合の返報に共々折檻し拷問するので、力之丞は氣絶して了ふ。結局妻子を召捕り糺問すると言ふ中山の威嚇に、涙と共に伏罪する。〔六幕〕（將軍家殿中投判）北町奉行中山出雲守、南町奉行大岡越前守、共に老中の裏判（刑罪人の判決をする押判）を受けに來る。老中達は大岡提出の木鼠吉五郎の判決書へ押判しようとする時、月番故にこの方を先へと言ふ中山の言葉にそのまゝ殘る。中山が力之丞の判決書に押判を請ふ時、大岡は口書に現はれた力之丞の爪印、無實の罪に悲憤の跡ありと主張するので、大岡が再吟味を命ずる。そして力之丞有罪ならば大岡切腹、無罪ならば中山切腹。戸田山城守は兩人立合裁判にて、十日を日限として裁斷せよと言ふ。（傳馬町牢屋敷）大岡は力之丞へ寒湯を與へる。そして裏判に洩れて死刑より助かつた吉五郎を追放する。今後は坊主となり、諸國の靈場を巡禮する心の吉五郎、彼は法華經信者である。〔七幕〕（小石川傳通院前紺屋）勘當の與兵衞を引取つた伯父の紺屋五郎兵衞は、唐茄子を買ひ求めて來て、與兵衞に稼業のためとて、商賣に行かせる。（小日向片町棟割長屋）以前は髮結、今は家主の勘六、家賃の代りに借家人お常親子の蒲團や蚊帳を持去る。食事も出來ない親子は唐茄子を貰ふが、困窮を見兼ねた與兵衞が辨當や金子を惠んで立ち去る。と、又勘六がその金を取つて了ふので、薄運を歎き乳のみ兒を殺し自害する。狼狽する幸吉。與兵衞が賣上金を持ち歸らないので事實を調べに來た五郎兵衞は、憤慨して勘六を打擲する。〔八幕〕（木下川村常助住居）柴又近くの常助の茶見世。毎月十八日觀音講を勤める譯は、吉五郎の菩提を弔ふためである。娘お豐も心密かに自分の夫と定めた吉五郎の佛事供養を怠らない。其處へ千ケ寺詣りの吉五郎は偶然にも來掛り、親娘の厚い心情を感謝する。大工が天道人を見殺しにすると言ふ例證に、村安力之丞夫妻の一件を物語る。而も若黨勸助より大岡對中山の再吟味事件は、大岡の旗色惡く、切腹も明日に迫つてゐると聞き、驚愕する常助・お豐・吉五郎。殊に吉五郎は大岡樣に御恩返しをなし、勘六との約束を想ひ、自訴する事となる。悲壯な眞實な祝言の杯が、お豐・吉五郎の間に行はれる。吉五郎の晴れの門出。〔大詰〕（南町奉行所門前）生命をかけた再吟味約定の日限の今日。中山出雲守は吉川粲藏を召具して來る。力之丞と幸吉との面會などある。（同白洲吟味）中山が大岡に切腹せよと嘲笑する時、吉五郎は自訴してお菊殺しの下手人であると言ひ、金子の授受に付き委細を陳述する。常吉は迷子札を呉れた幸吉を見て、その父の力之丞と安田幸八が同一人物と悟り、當時の狀況を物語るので、結局與兵衞の勘當は許され、力之丞・吉五郎は無罪、常吉もお叱りなく、勘六有罪となる。粲藏は銘刀橫領、不當拷問の罪狀で捕縛され、中山出雲守の無念の表情。

【解說】この脚本の根本的興味は、能進・諺藏兩人が相互にその作風を鮮明に表示してゐることである。父能進の默阿彌系統の落着いた老練な重厚な作劇術、殊に木下川常助住居の場に見られる滋味ある手堅い筆法は、眞に大阪の「默阿彌」に適しい風格である。子諺藏の作風は、三・四幕目等の寫實的傾向に顯著である。殊に伊勢屋居先殺人事件吟味の場は、纖細にして明敏なる神經が、一臺詞・一動作の間に緊張して、探偵劇として深甚なる興趣と成功とを贏ち得てゐる。兩者の脚色が交錯して全篇から感受する情調に、幾分の變化のあるのは已むを得ないが、兎に角父子合作脚本中の傑作である。【附記】勝諺藏演劇脚本集（上野圖書館藏）收錄のものは、梗概の如く九幕であるが、河竹氏藏の自筆臺本は八幕で、五幕目の二場が缺如してゐる。また勝諺藏編輯の「歌舞伎新報」（明治十三年）の筋書に依れば、これも八幕で拷問の場がない。恐らくは書卸し當時より餘りに慘酷なため上演しなかつたものと見える。（尾澤）

丸岡九華（まるをかきうくわ）　小說家・詩人【本名】久之助【別號】春亭・九春亭・延春亭・山茶花・礫川慶王・桂堂・梅の舍等。九華は九花とも書く。【生歿】慶應元年東京に生れ、昭和二年七月九日、小石川區上富坂の自邸にて病歿した。享年六十三。【閲歷】硯友社同人として活躍したが、早く身を實業界に投じたので、作品としての數は頗る尠い。處女作は明治二十一年八月の「我樂多文庫」に發表した「散浮花」であつた。二十三年二月發行の「新著百種」（別項）第八號は、依田百川との合冊であるが、その中の「芳季」の作者ＸＹＺとあるのは九華で、これは彼が唯一の創作單行本である。彼は小說よりも寧ろ新體詩の創成時代に多く努めた人で、明治十九年發行の「新體詞選」（別項）の大半は、「士卒の夢」「佛國革命歌」「路易帝斷頭臺の場」「リップ・バン・ウヰンクル」の如き、彼の作詩を以て埋めてゐる。（齋藤〔昌三〕）

丸屋蓮理松（まるやれんりのまつ）　「今宮の心中」を見よ。

丸本物（まるほんもの）　歌舞伎【名稱】院本物とも書く。丸本（正本全冊）から轉じて、竹本の操淨瑠璃芝居を輸入した狂言の意。【異稱】義太夫狂言・竹本劇、また義太夫の三味線の音から、これを俗にデン〳〵物ともいふ。【性質】

脚本の素材及び演出樣式より分類したものの一類で、樂劇に屬し、普通には科白劇を主とする歌舞伎劇に對する。初め義太夫の操淨瑠璃芝居（操參照）に書き卸されたものを、歌舞伎にそのまゝ移植したもので、時代物と世話物との別はあるが、その本質上必ず床の義太夫節即ち「チョボ」の附隨する狂言である。隨つて操芝居の直譯的摸倣である以上、扮裝も演出法もすべて一種特別のものである。故に新作の歌舞伎脚本に於て、竹本劇と同樣の義太夫節を應用して演出を修飾する如きは、その部分一種の樂劇ではあり得ても、勿論丸本物とは呼ばれない。元來竹本淨瑠璃は、人形のために作られたものではあるが、それが歌舞伎の俳優に移される場合、何故人形の形式に據らねばならなかつたか。各自の發生から考へても、人形は人形、俳優は俳優と全然別種の演出法をとるべきであつたが、相互の長い間の影響から、漸次兩者が交錯の徑路を辿つて接近するに至り、即ち操淨瑠璃正本の脚本化、歌舞伎脚本の操淨瑠璃化は、遂にかくあらしめたのである。尤もこの因は種々あるが、その主因ともいふべきは、淨瑠璃作者にして且つ歌舞伎作者を兼ねた近松門左衞門に端を發し、爾來、松田和吉（文耕堂）・戸川不鱗・安田蛙文・並木宗輔・同正三・同永輔・爲永千蝶・豐竹應律・春草堂等から、中村阿契・寺田兵藏・二代並木千柳・筒井半二・芝屋芝叟（篠崎膽助）・近松柳・同千葉軒等に至るまで、相互の作者を兼ねて俳優の人形化、人形の俳優化に努めた結果は、操の勝利となつて馴致したものと見るべく、遂に「人形ぶり」や「首振り芝居」（各別項）に至つて當に俳優を殆ど木偶化したといふべきである。かの九代市川團十郎が竹本劇にも試みた新演出の活歷でさへも、在來の形式を全然離脫することが出來得なかつたのであるから、まして操全盛時代にあつては、遙かに操の演出法より劣る歌舞伎の手法を以て、懸ひに異なる演出法などは思ひもよらなかつたのであらう。而も竹本劇は長い年月の間に幾多の名優の工夫や考案を積み重ねて、洗練に洗練を加へられたものが、その型として傳存されてゐるのであるから、今日演出される竹本劇の型は、必ずしも昔のまゝではなく、一種の操演出法であつても、その形式美は寧ろ歌舞伎化されてゐるのである。とはいへ人形の形式が歌舞伎の舞臺を支配する竹本劇なるものは、我が歌舞伎劇の中に樂劇といふ一種特別の世界を領有してゐるのである。

【沿革】古く歌舞伎脚色の發生期には、古淨瑠璃に素源を求めた。その中で金平淨瑠璃（別項）から脫化して江戶歌舞伎の根元をなした市川團十郎の荒事などはその適例である。次いで元祿歌舞伎の大成期には寧ろ反對に操淨瑠璃へ材料や脚色等を提供した。例へば延寶六年二月、大阪荒木座で坂田藤十郎が演じた「夕霧名殘の正月」は、貞享三年近松門左衞門が「三世相」と題して改作したものを、竹本義太夫座や宇治加賀掾の操芝居で上場し、更に同一作者の操淨瑠璃「夕霧阿波鳴渡」（別項）に於て、「名殘の正月」の藤十郎の演出法は伊左衞門の人形の演出の粉本となつてゐる如き、又は延寶五年十一月京都北側の芝居で、初代嵐三右衞門が演じた丹波與作や、元祿六年京都村山座で大和屋甚兵衞が演じた「丹波與作手綱帶」（大和屋甚兵衞參照）等を藍本として、寶永五年同じく近松門左衞門が竹本座の操淨瑠璃に「丹波與作待夜の小室節」として作つたが、丹波與作の人形の演出の粉本となつたのは、實に嵐三右衞門であつたと傳へる如き、その他脚色では、「曾根崎心中」「ひぢりめん卯月紅葉」「冥途の飛脚」「淀鯉出世瀧德」「笠屋三勝二十五年忌」「お染久松袂の白しぼり」（以上別項）等に材料を與へ、演出には「嫗山姥」や「國姓爺合戰」（各別項）に暗示を與へた如き、その影響は極めて多大であつた。而もこれ等の操の諸作は、後に歌舞伎へ移植されたが、そのうち「待夜の小室節」の如きは、操淨瑠璃芝居上場の數ケ月後、即ち同年九月に大阪岩井座で上演せられて、既に「チョボ」さへも出來てゐる。而して操淨瑠璃が歌舞伎に移植されたもので、古いのは元祿十四年正月二日初日で、大阪片岡座に上演された「百日曾我」（別項）で、「チョボ」の嚆矢は、この時ではないかと思はれる。やがて歌舞伎の凡てに亙つて攝取した操芝居は、名作者の近松門左衞門と、名人の太夫竹本筑後掾と、人形遣の名手辰松八郎兵衞との三者を得て愈々發達するに及び、遙かに歌舞伎を凌駕し、操淨瑠璃は漸次歌舞伎に輸入せらるるや、かの音羽次郎三郎をして「操り淨瑠璃は元來歌舞伎を眞似て語り、人形も歌舞伎を眞似して行ふ事なり。然るを歌舞伎より操りを學ぶこと歌舞伎衰微の基なり」と叫ばしめたのであつた。爾來操芝居は、作者と太夫と人形遣との三者が相俟ち相繼いで、益々隆盛を極め、延享・寛延に至つては、全く歌舞伎を壓倒したのである。即ち「夏祭浪花鑑」「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」「假名手本忠臣藏」「双蝶々曲輪日記」（以上各別項）等を初め、殆ど歌舞伎に移植されない作がない程までになり、題目脚色はいふに及ばず、その演出法・舞臺裝置等の材料までも仰ぐに至り、この影響は操芝居が衰退期に向つた天明以後に於ても慣例となり、遂に今日竹本劇が歌舞伎の主眼とさへも見られる如き觀を呈するまで浸潤し、操淨瑠璃の歌舞伎化がなされたのである。操淨瑠璃芝居の發生期からその衰頽期まで、彼が歌舞伎芝居との交渉は常に絕えなかつたが、その受け入れるところは決してそのまゝの歌舞伎ではなく、消化し得た攝取に過ぎなかつた。これに反して歌舞伎芝居に取り入れた操淨瑠璃は、殆どそのまゝであつた。

【主要種目】主なる丸本物を列擧しておく。

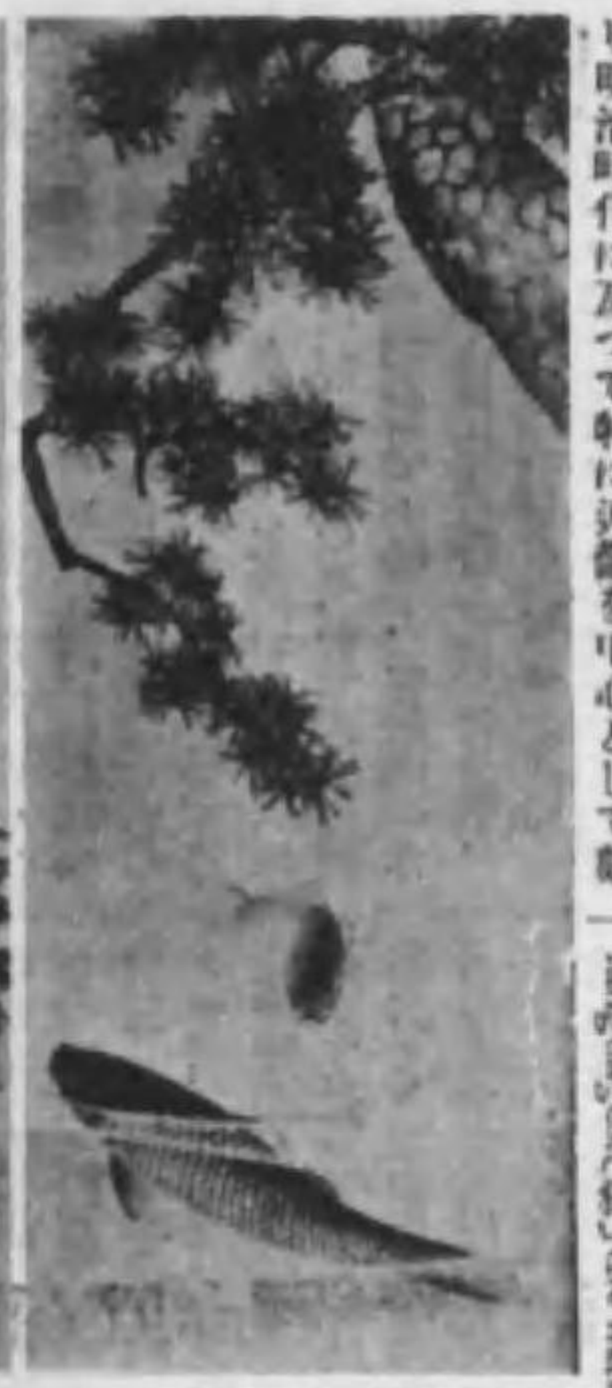
（時代物）嫗山姥○國姓爺合戰○日本振袖始○平家女護島○信州川中島合戰○大塔宮曦鎧○北條時賴記○敵討御未刻太鼓○三浦大助紅梅靮○須磨都源平躑躅○鬼一法眼三略卷○壇浦兜軍記○那須與市西海硯○蘆屋道滿大内鑑○苅萱桑門筑紫轢○和田合戰女舞鶴○敵討襤褸錦○御所櫻堀川夜討○行平磯馴松○小栗判官車街道○ひらがな盛衰記○鶊山姫捨松○新うすゆき物語○播州皿屋敷○久米仙人吉野櫻○軍法富士見西行○菅原傳授手習鑑○花[illegible]島○義經千本櫻○假名手本忠臣藏○[illegible]見硯○十帖源氏物ぐさ太郎○源平布引瀧○玉藻前曦袂○一谷嫩軍記○名筆傾城鑑（傾城反魂香參照）○假名在原系圖○義經腰越狀（[illegible]後藤目貫參照）○小野道風青柳硯○姫小松子日の遊○祇園祭禮信仰記○敵討崇禪寺馬場○日高川入相花王○太平記菊水之卷○祇園女御九重錦○由良湊千軒長者○[illegible]○奧州安達原○嬢景清八島日記○[illegible]大友眞鳥○本朝廿四孝○太平記忠臣講釋○三日太平記○近江源氏先陣館○神靈矢口渡○妹背山婦女庭訓○攝州合邦辻○三國無雙[illegible]○伊賀越乘掛合羽○[illegible]○伊達競阿國戲場○鎌倉三代記○加々見山舊錦繪○伊賀越道中雙六○伽羅先代萩○彦山權現誓助劔○花上野譽の石碑○木下蔭狹間合戰○有職鎌倉山○蝶花形名歌島臺○日本賢女鑑○敵討[illegible]○[illegible]

大功記○箱根靈驗躄仇討○八陣守護城○野州原靈譜○陶器香八紙等。（以上各別項）（世話物）曾根崎心中○ひぢりめん卯月紅葉○堀川波鼓○心中重井筒○卯久末松山○心中萬年草○五十年忌歌念佛○冥途の飛脚○八百屋お七歌祭文○おそめ久松袂の白しぼり○夕霧阿波鳴渡○傾城三度笠○大經師昔暦○生玉心中○鑓の權三重帷子○山崎與次兵衞壽の門松○博多小女郎浪枕○心中天網島○女殺油地獄○心中二ツ腹帶○心中宵庚申○京土產名所井筒○釜淵雙級巴○西鶴野中の隱井○明作五層金○銅色江戸紫○夏祭浪花鑑○容競出入湊○八重霞浪花濱荻○雙蝶々曲輪日記○戀女房染分手綱○源平色縮緬○京羽二重娘氣質○關取千兩幟○染模樣妹背門松○新木綿川堤○傾城阿波の鳴門○關取二代鑑貢附○艶色上○紙子仕立兩面鑑○道成寺死期西塢○艶容女舞衣○伊達娘戀緋鹿子○糸櫻縁粧○けいせい戀飛脚○戀娘昔八丈○桂川連理柵○絲櫻本町育○心中紙屋治兵衞○往古曾根崎村噂○鎌山比賀波○碁太平記白石噺○新版歌祭文○近頃河原の達引○箕輪星物語○生寫朝顏話○花雲佐倉嵐○壺坂靈驗記等。（以上各別項）〔秋葉〕

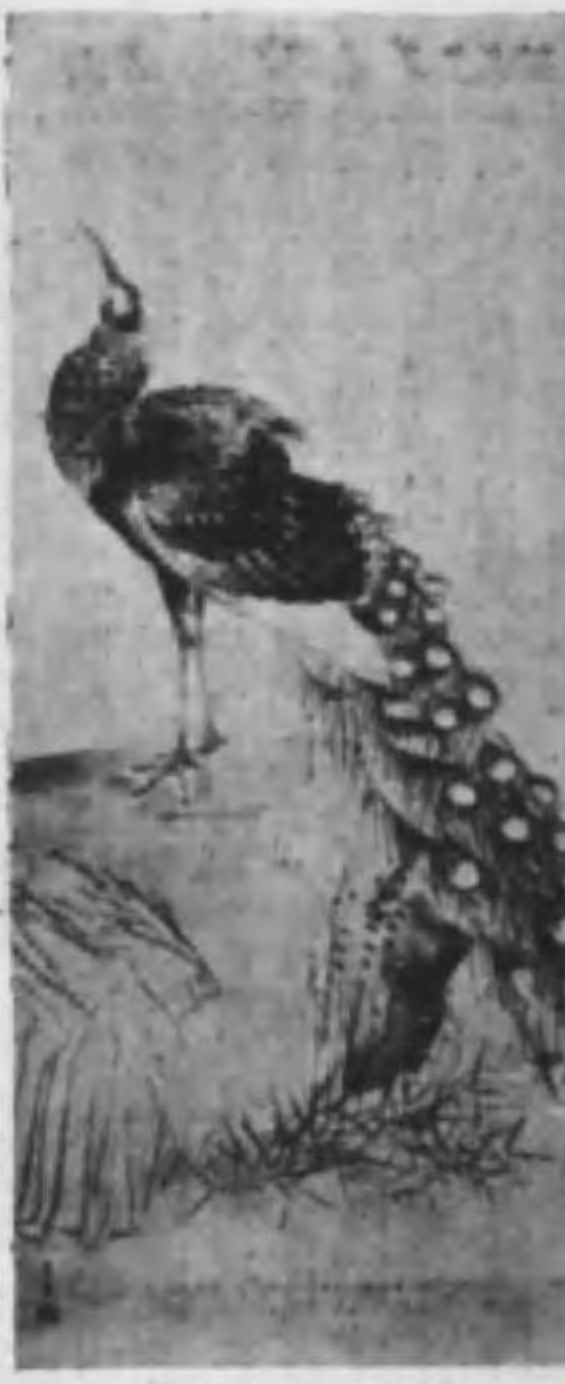
【參考】歌舞伎概論（伊原敏郎）○義太夫劇と歌舞伎劇との交渉（黒木勘藏（演藝畫報七ノ一））○丸本と演劇（岡本綺堂（同上））○近世邦樂年表

圓山四條派

まるやましでうは　畫派　【解說】圓山應擧を祖とする圓山派及び吳春を祖とする四條派の兩者を合した總稱である。圓山應擧（寬政七年歿）は、初め狩野派（別項）の石田幽汀に學んだが、後、元の寫生畫家錢舜擧の風を慕ひ更に自ら寫生に精進して專ら寫生主義に立脚する一新樣式を開拓した。吳春（また松村月溪と云ふ、文化八年歿、月溪參照）は初め蕪村に學んだが、後、應擧に就いて一格を達成した人で、その家が京都の四條に在つたのでその門流を四條派と呼んだ。而して應擧の子には應瑞（文政十二年歿）、應震（天保九年歿）等あり、門人には長澤蘆雪（寬政十一年歿）、源琦（寬政九年歿）、山口素絢（文政元年歿）、渡邊南岳（文化十年歿）等が殊に著名である。四條派としては吳春の弟に松村景文（弘化元年歿）あり、吳春の弟子に岡本豐彥（弘化二年歿）、柴田義董（文政二年歿）、長山孔寅（嘉永二年歿）等あり、この兩派は維新前後より明治時代に亘つて特に近畿を中心として頗る榮えた。中島來章・川端玉章・大西椿年・鈴木松年・今尾景年等は圓山派として、又鹽川文麟・幸野楳嶺・菊池芳文・竹内栖鳳等は、四條派として殊に著名の人々である。この兩派の描寫を比較するに、圓山派は形似正確にして理智的な繪多く、四條派は等しく形似に卽するも、その間情緖多きを特色とする。併し兩派とも純日本、特に京畿の風物の寫生を基礎として支那風の寫生とは全く趣を異にするもので、更にその淸新にして巧秀なる筆觸の味ひを見せてゐる點でも、兩派殆ど全く軌を同じうしてをり、これ等の點で正に純日本式の寫生畫の一派として兩者を總括して圓山四條派と呼ぶに至つたのである。〔田中（一）〕



應擧筆　鯉魚圖



吳春筆　孔雀圖

マレーポリネシア語族

世界語族の一〔英〕The Malayo-Polynesian Family of languages.〔獨〕die malaio-polynesische Sprachfamilie.〔佛〕les langues malayo-polynésiens.【解說】この名は南洋地方に行はれる諸國語を總括したもので、やゝ漠然たる名稱である。今日は次の諸國語を一括して「南方語族」(die austrische Sprachstamm) と名づけ、これを左記のやうに分類する。(甲)南方アジア系(Austroasiatisch)、(一)ムンダ・モンクメル(Munda-Mon-Khmer)派、(二)カシ・ニコバル(Khasi-Nikobar)派、(三)原始マラッカ(Proto-Malakkisch)派。(乙)アウストロネジア系(Austronesisch)、(一)インドネジア(Indonesisch)派、(二)メラネジア(Melanesisch)派、(三)ポリネジア(Polynesisch)派。マレーポリネシアといふ舊名は右のうち(乙)のアウストロネジア系に相當する。(甲)南方アジア系の諸國語は、インドの東岸地方、ビルマ、シャム等の地方に於て他の語族の間に散在する。(乙)アウストロネジア系のうち(一)インドネジア派の中には我が臺灣の蕃人語、フィリッピン諸島のタガラ語、マリアナ群島中のチャモロ語、スマトラ、ジャヷ、ボルネオ、セレベス等諸島の土人語、マレー半島その他に廣く行はれるマレー語等を含み、又遠く離れたアフリカ東岸のマダガスカル島土人の言語もこれに屬する。(二)メラネジア派には、我がカロリン群島、マーシャル群島より赤道以南のニューカレドニア群島、フィージー群島等に亙る諸島の土人語が含まれ、(三)ポリネジア派には、ハワイ群島を初め南方のニュージーランドのマオリ族の言語が含まれる。【特徴】この語族に屬する諸國語の特徴は、名詞は屈折することなく、文法上の性や數の別もない。また動詞の範疇（例へば、能動・受動・使役等）は、數多くの接頭辭・接中辭・接尾辭によつて表はされる。例へばメリナ語に於て語根 tundra より mitundra（運ぶ）、nitundra（運んだ）、mampitundra（運ばせる）、nampitundra（運ばせた）等が造られる。〔神保〕

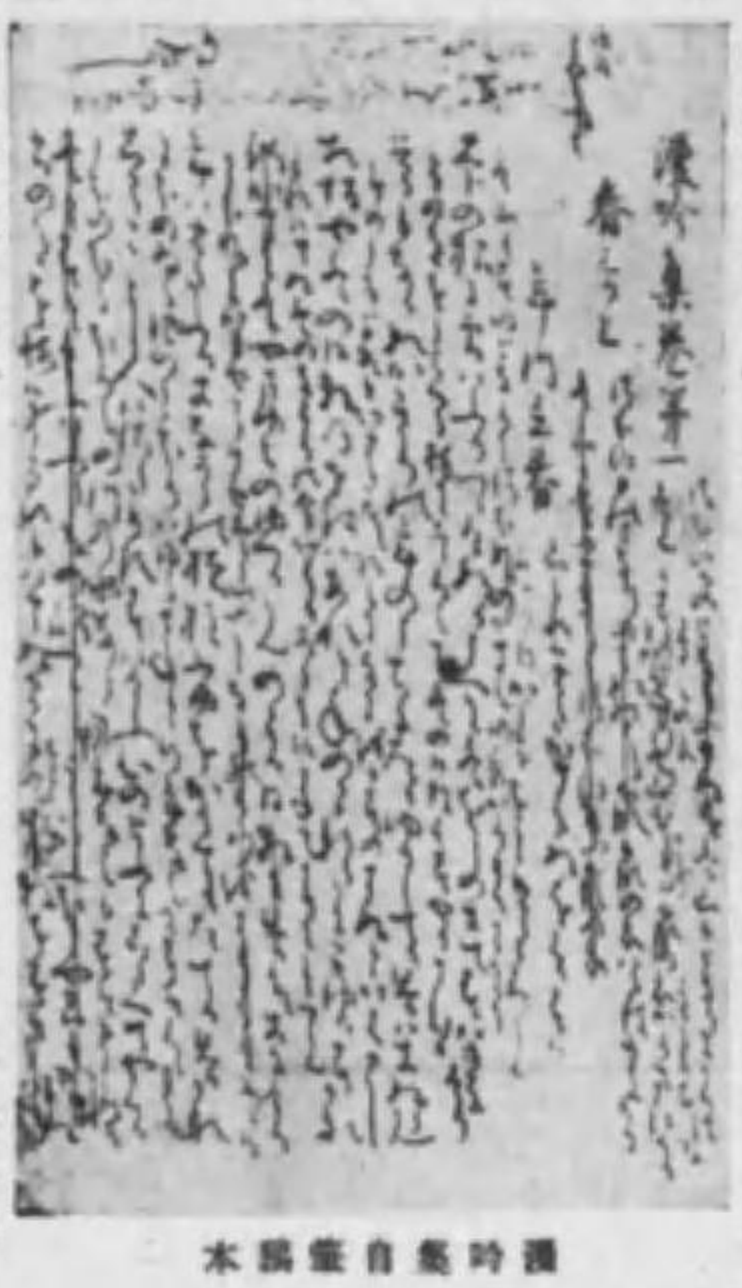
【參考】別項「語族」の【參考】を見よ。

漫畫隨筆

まんぐわずゐひつ　隨筆　二卷　【著者】鈴木煥卿　【名解】一名「鴉鵲一得」。書名は著者の自序に「濱𣾰有㆑鳥、名㆓漫畫㆒、終日奔㆓走水上㆒、搜㆓捕小魚㆒而食㆑之、竭不㆑能㆑飽、（中略）余性帶㆑癡、嗜㆓棋書畫㆒、凡百技藝、莫㆓一所㆑能、又不㆑能㆑飲、因與㆑人不㆓款曲㆒、惟在㆓書卷㆒、無㆓可㆓與語㆒者㆒、唯有㆑讀㆑書而已、而亦不㆓必爲㆓章句㆒、終日汲々、唯多之貪、所謂如㆓漫畫㆒、終歲翛々、藝掃其所㆓補得㆒、何足㆑飽乎」とあつて、自己を漫畫と云ふ鳥に比したのである。【刊行】明和八年。【解說】多年涉獵した和漢典籍中の世事人事何によらず、會心の事どもを記述考證したもので、上卷に人名の吉凶以下五十九則、下卷に永樂錢の手跡以下六十五則を收めてゐる。和漢風俗史上參考するに足る事項が少くない。明和八年著者の序がある。【著者小傳】鈴木煥卿。字は子煥、通稱要藏、號を濱洲と云ひ、江戸の儒家で篠崎東海の門人である。安永五年六月歿す。享年六十二。「續史摘語」「拾遺要解」「論語會考」「孫鹿會考」「助語辭」「濱洲文集」等の著述がある。〔和田〕

漫吟集

まんぎんしふ　歌集　【作者】契沖　【成立・刊行】契沖最初の歌集は、「契沖和歌延寶集」で、延寶九年、御海狂士の請によつて編したのであるが、契沖の歌集としては「漫吟集」がある。貞享の頃に大體成稿し、それ以後も增補を續けたと思はれる。天明元年、その一部分が刊行され、文化十二年に「漫吟集類題」として全部が刊行された。【諸本】（一）龍公美校訂本漫吟集は十卷二冊で天明七年刊。四季の部だけである。本居宣長の序文、天明元年春の龍公美の漢文序、龍世昌の序文、下河邊長流の序文があり、龍世華の題詞、安藤爲章の契沖行實及び契沖の肖像を掲げ、終に天明七年の渡邊直麿及び宮小路良直の跋文がある。龍公美の父龍世昌が契沖の門弟なので、同門の宇治惠心院主良舜僧都と共にこれを書寫し、龍世昌の歿後、公美が校訂してこれを刊したものである。然るにこの刊本は天明八年の京都の大火で燒失し、その校正刷一部が今日僅に殘存するのみで、全く世に流布しなかつたが、契沖全集第七卷に收む。（二）漫吟集類題は二十卷四冊、最も歌數が多い。元來契沖は自己の歌を下河邊長流と共に撰定し、これに長流の序文を附して漫吟集と題したが、その後も筆削を加へ、歌數を增加したので種々なる異本が生じた。而して公美の校本や、小西某が蒐集して契沖に校正を請うたと云ふ本などは、歌數の少きものに屬する。今存する契沖の自筆校本は四冊本で、縱橫に添削が加へてある。別に序並詞類と題する一冊の加はつてゐる本もある。「漫吟集類題」はその歌數の最も多きもので、石津亮澄が校訂し、文化十一年三月の跋を加へて文化十二年に刊行した。四季・釋敎・哀傷・羇旅・戀・雜體・雜歌に分れ、雜體の中には物名・俳諧歌・長歌がある。契沖全集第七卷に入つた。（三）自撰漫吟集は一卷、正しくは「契沖和歌延寶集」と題したもので、三家和歌集の一である。延寶九年御海狂士の請によつて編した。文化十年淸水濱臣が校訂して「自撰漫吟集」と題して刊行した。その本は續日本歌學全書の賀茂翁全集上卷及び校註國歌大系の近代諸家集第一卷上卷に入り、契沖全集第七卷には稿本によつて收められた。



漫吟集自筆稿本

【歌風】近世古學の祖なる彼も、その作歌に至つては甚しく舊套を脱したものではなく、中世風の歌であるが、歌品溫雅にして、その間にやゝ新味もあり、歌才に至つては遙に時流を出でてゐる。殊に叙景にすぐれて居り、抒情的のものでは釋敎の歌に秀逸がある。本歌取の歌や技巧を弄した理智的な歌も散見し、又俳諧歌も多い。しかも「萬葉」の影響を受けることは甚だ少い。長歌の作は五七調と七五調が入り交つて、「萬葉」の趣には至つて居らぬが、措辭・構想は甚だ整つてゐる。無常歌・六道歌の如きは秀逸の作で、長さも甚だ長く、「古今集」以後の長歌歌人としては第一流の域にあることを示してゐる。

初瀨のや里のうなゐに宿とへは霞める籬の立枝を
ぞさす

いかでわれ昔の人に似てしがな今の御世はたふさく
もなし

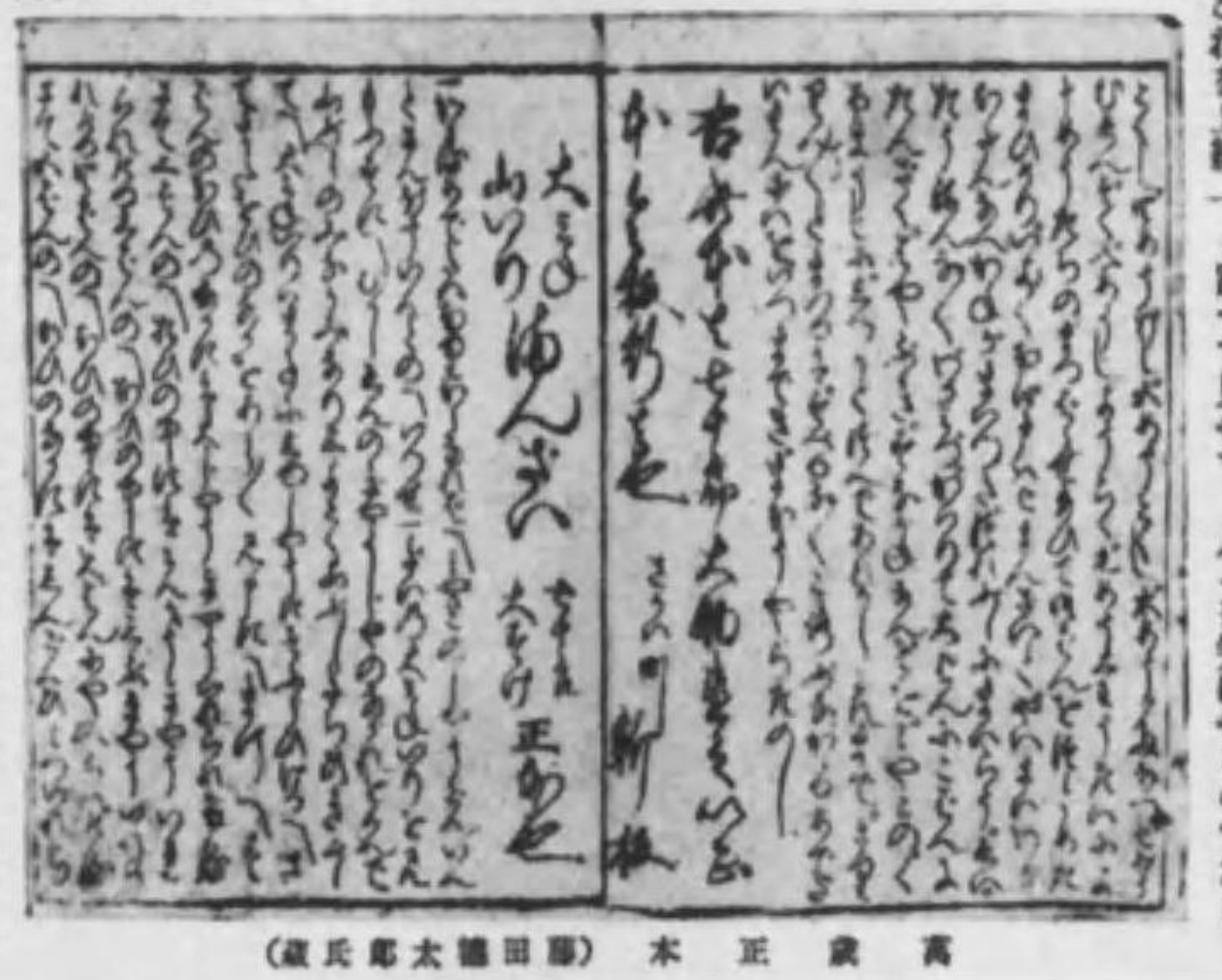
〔佐佐木〕

【參考】近世和歌史（佐佐木信綱）○契沖傳（久松潛一（契沖全集第九卷））○契沖全集第八卷解題

萬歲

まんざい　歌舞　【名義】千秋萬歲の略稱であつて、俗間の門付歌を稱する名稱である。「和訓栞」に神樂歌の千歲より出た如く記してゐるのは肯定し難い。【禁中萬歲】江戸時代の禁中に參入する萬歲の役者は、土御門家に隸屬の小泉齋後家であつた。その萬歲の式は、正月五日に長橋の御車寄の前庭で、ごまめ蓆を敷いて行はれる。太夫の裝束は三位烏帽子、大紋に半袴、色は蒲萄黃色に笹龍膽の紋（小泉齋後の家紋）を付ける。下は、白無垢の上に無紋の紅の兩面小袖を着し、小刀を帶す。歲若は、萬歲烏帽子に花色無紋の素袍をつけ、下は熨斗目に丸の内に笹龍膽の紋、鷺足、揭鼓中啓を持つ。舞ふ時は、何れも小刀をはづし、齋後が揭鼓を手に持つて打ち、歲若が舞ふ（民間の萬歲では鼓打を才藏と云ひ、名稱が反對である）。最初に翁三番叟に似たものがあり、「トウ〳〵タラリ〳〵ラー」を歌ひ、ついで、「柱立」の文句があり、次に「言立」の最初の句の終る時、北面の武士（大紋・長袴・小刀）が御階の左の床几にかゝつて演ずるが、その順序は年によつて替ることがある。舞終つて五位の殿上人が中啓を持ち、御階の六段目まで下つて北面に渡す。北面これを受取つて齋後に賜はる。後、弓場殿で休憩し、勸解由使より青銅二十貫文、米一石を賜はり、中啓を返上す。中宮御所では、女嬬が「勇みませー」を云ふ。舞が終ると簾中より祿の品を投げ出されるが、その中、金一分を五個五色の緖で結んだのが中宮よりの祿である。萬歲の曲節は、能狂言「うつぼ猿」の猿舞に似てゐると云ふが、「日次紀事」に「正月五日禁裡木造始、此日千秋萬歲并猿舞來㆓東庭㆒」と記せるのによれば、兩者關係があるのも當然である。萬歲は鎭宅の祝、鳥追は田事の祝、春駒は蠶業の祝で、これによつて年頭に衣食住を祝したもの、萬歲の歌詞に柱立の如き建築に關係ある言葉があるのも、その故であると云ふ。【智多萬歲】尾張智多郡より出る萬歲。「鹽尻」には、「尾州春日井郡木賀崎長母寺の開山無住國師其詞を作り、同國愛知郡印內村の民に敎へしとかや、其詞屋舍造作の事也」とある。この無住が、龜山帝の御宇に、小僕有助（一說に權者）と云ふ者に敎へたのが萬歲の最初である。また寺領の村々にもこれを敎へ傳へたのであると云ふ。元文三年に智多郡西大高村・藪村・

横須賀村・味鋺村より差出した萬歳の由來に關する谷中書にも同じ趣旨が記してある。一說に、寺本村・鍛尾村・藪村の者が、年貢につまつて萬歳に出で、その貰ひ米でこれを上納することにしたのが、智多萬歳の初めで、尾張・美濃・北伊勢までも廻り、特に名古屋の屋敷方へ多く廻つた。鍛尾村からは十八組（萬歳の家十八軒）、藪村からは八組、寺本村からは百組も出ると云ふ。元日から十五日頃まで名古屋にゐて、それより地方に廻るのである。萬歳は土地の百姓が出るが、萬歳名は、森鶴太夫・松鶴太夫・米鶴太夫（鍛尾村）・百太夫（味鋺村）・鶴太夫（藪村）などと呼ぶ。江戸時代には、智多萬歳は、三河萬歳と共に、土御門殿の支配に屬してゐたと云ふから、禁中萬歳から出たものであることは確實である。歌詞もそれを多く取り入れて脫化したものである。太夫（立烏帽子・素袍・白地の紋物・扇）一人に才蔵（侍烏帽子・狩衣・鼓）が六人もついて、賑かにやるのが特色である。古來、五萬歳と云つて「御城」（御殿舞）「熱田」（神力）「地割」（シキノテウとも云ふ）「六條」「法華經」の五曲を稱したが、後の二曲は衰へた。これを今日では「御殿舞」（御殿萬歳）と云ふ。天保十年頃に至り、鼓に三味線と胡弓とを加へ、明治二十七年頃、これを素人芝居のチョボ代りに用ひてより、三曲萬歳と稱して、忠臣藏・曾我・矢口渡の如き義太夫物を歌ひ、また身振で演じて見せるやうになつた。これには萬歳の裝束を付けない。かやうに才蔵の数を増したことと共に、種々俗化せられてゐる。萬歳は、最初に眞面目な祝儀の詞を歌ひ、その後に、滑稽野卑な歌を頗面白く踊つて見せて、人々を笑はせるのである。

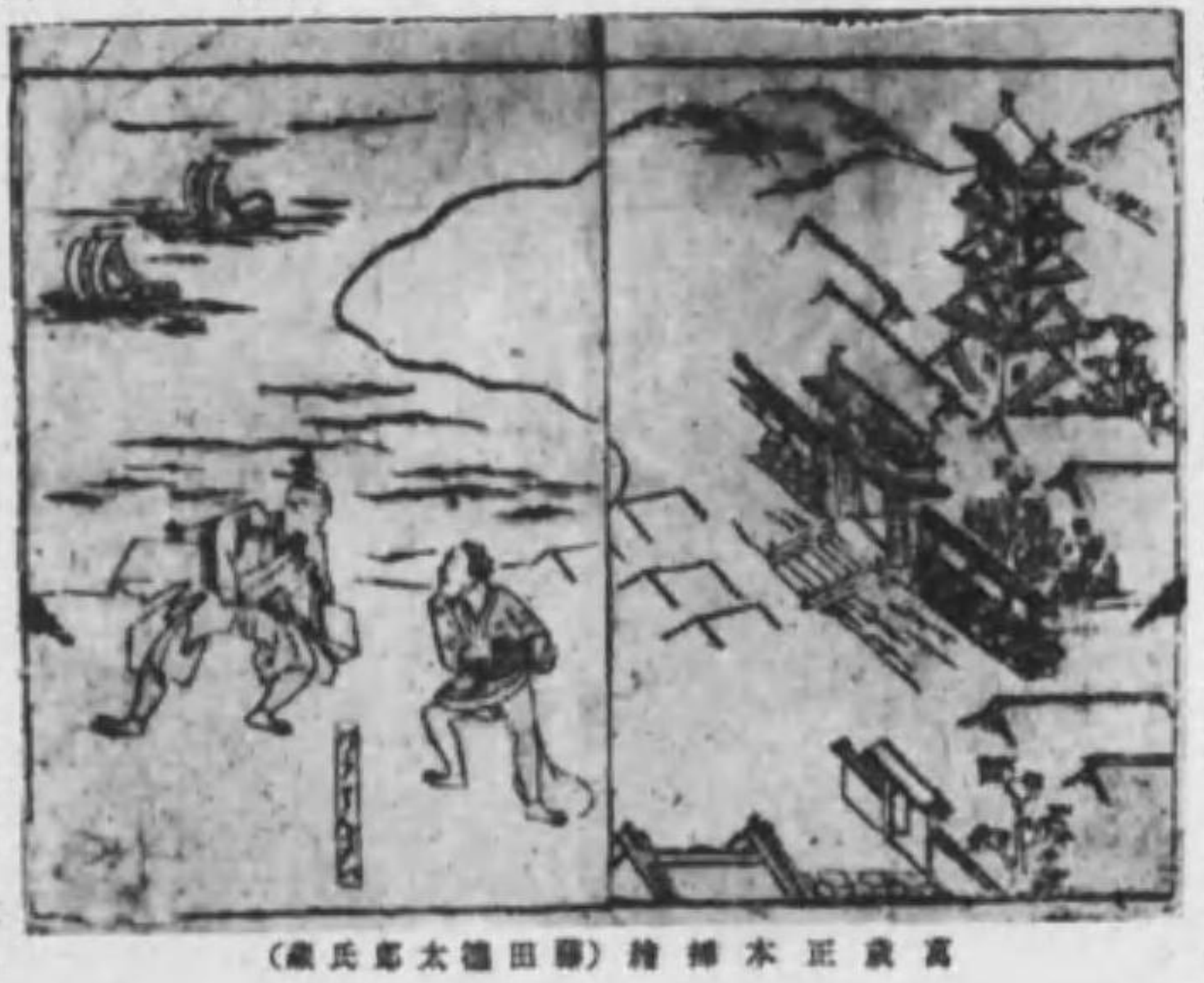


萬歳正本（藤田德太郎氏藏）

江戸時代には、「智多萬歳」（名古屋本町通十二丁目金鋼屋末藏刊）の書があり、五萬歳のうち四章を收めてゐる。「萬歳問答」には三章を收めた。また御城萬歳の歌詞を註釋したものに、「萬歳歌考」と題する書がある（著者不明、鶴本實大岡文研究家所藏）、小寺玉晁の「萬歳集」（尊經閣文庫所藏）にも收む。「萬歳記」（帝國圖書館所藏）には、上記の歌詞や資料を拾集めてゐる。

【三河萬歳】 これは、智多萬歳と全く同種同源のもので、主に三河國一色村から出た。江戸にはこの三河萬歳が多く來た。また信濃の松本からも萬歳が江戸に來たと云ふ。いづれも院內の如き非人が多く出た。「萬歳」（明治三十四年、東京版）には、「地割萬歳」「伊勢萬歳」「東京萬歳」「六條」「新法華經」の五章を揭げてゐるが、これは當時東京に出た三河萬歳の詞章を集めたものであらう。江戸時代の三河萬歳の歌詞を瓦版として刊行したものも二三種存する。太夫は萬歳作太夫と名乘り、折烏帽子に麻の素襖袴で兩刀を帶し、扇を持ち、侍烏帽子或は大黑頭巾を冠り、無紋袴の才蔵を伴ふ。才蔵は、前年の暮に、江戸日本橋四日市で才蔵市と云ふのがたつて、こゝで太夫が適當な才蔵を選んで相手役とするのである。後にこの風は絕えて國元から伴れて來た。且つ長い米袋を携へて、これに所得の米錢を入れるのも才蔵の役である。太夫の眞面目な祝詞がすんだ後で、才蔵が太夫の相手役となり、滑稽卑猥な應答や動作をなして人々を笑はせた。

【大和萬歳】 京には、大和萬歳が出た。大和國北葛城郡窪田箸尾兩村の萬歳興座の者が、所司代の庭で舞つたと云ふが、窪田は百濟であらう。今も百濟村より萬歳が出て町々を廻る。これも智多萬歳と共に、禁中の千秋萬歳の正系を引くものとして密接な關係があり、歌舞の樣式にも智多萬歳と甚だ似たところがあるが、この方が甚だ古雅で、古形を多く存してゐる。三河萬歳と異るところは、舞手・鼓打共に服裝が同一なることで、これは古くからさうである。侍烏帽子に、萌黄色の素襖、丸に橘の紋樣を白抜に附してゐる。一刀を帶す。古圖では舞手と鼓打と、その紋樣を異にするものがある。才蔵は袋を肩にかけ、これに米錢を入れる。「十二ヶ月舞」「夷子誕生」「田植舞」等歌詞の種類が多いが、就中、人口に膾炙してゐるのは「京の町」で、上方の萬歳と云へば、この歌のことを云ふのである。千秋萬歳のそれより出てゐる事は明かで、後には「京土産」「十二月萬歳」等の上方唄として傳へられ、或は同じく上方唄の御堂御供養の如き祝儀萬歳として替歌も作られてゐる。



萬歳正本挿繪（藤田德太郎氏藏）

【越前萬歳】 福井縣今立郡味眞野村野大坪より出る萬歳で、越前・加賀等北陸地方の萬歳はこれである。繼體天皇が嘗て味眞野村に御坐し給うた時、村民の情の厚きに感じ、卽位の後、君を讚へ御代を祝する言葉を綴り、土地の歌舞となして、永く後に傳へるやう敎諭を賜はつた。これが野大坪萬歳の起原であると云ふ。その他種々なる起原說話がある。この萬歳は、古く馬の初乘式の時用ひられたらしく、土地の唱門師の役として、乘馬の祈禱と深い關係を保つてゐたやうである。太夫（侍烏帽子・舞鶴の紋の直垂樣の衣・袴・刀・扇）・才蔵（紙の大黑頭巾・紋付・裁着）、兩者の服裝は三河萬歳に甚だ近い。曲目により冠物・持物が變り、また太夫一人に才蔵數名、或は才蔵のみで演ずる曲もある。他と最も異なる所は、才蔵が鼓の代りに小太鼓を持つことで、これを先の曲つた棒で叩いて拍子を取る。扇も特殊の小型の古制のものである。小太鼓を手早く叩きながら、早口で歌ふ所は、他の萬歳に見ることの出來ない趣がある。鼓を小太鼓に替へたのは、萬歳と他の行事とを混じて生じたもので、「信濃奇勝錄」に揭げた下伊那郡伊賀良村の春田打と云ふ門付の樣を見ると、越前萬歳に甚だ類似してゐる。曲目は數が多く（柱づくし・鶴づくし・町づくし・東海道五十三次・七福神・具足づくし・さい島まし・もちつき・道具づくし・北國下道中・北國上道中・江戸名所・松づくし・草づくし・百人一首・扇づくし・宇治川先陣・御祝儀萬歳・鏡萬歳・御家萬歳・木遣萬歳・舞踊萬歳・手踊萬歳等）、「三番叟」の如く歌詞なくして、普通の舞踊を取り入れたもの、更に「手踊萬歳」の如く、流行唄に合せて踊る俗化したものもあるが、これは滑稽娯樂を主とする萬歳の趣旨より、かやうに變化したものであらう。

【加賀萬歳】 越前萬歳は加賀にも來た。初め前田利家越前府中にあつて、野大坪の百姓を召して年始に萬歳を奏せしめたので、加賀金澤に移つて後も、引續き來てゐた。後、金澤の屋敷の仲間小者が、自然にこれを模え、遂に能の扇を用ひて謠の節などを入れて歌ひ、文化文政頃、大石藤五郎なる足輕がこれに踊の振を付け、一流の萬歳を完成した。これを地萬歳と云ひ、歌詞を踊歌と云ふ。その後、茶番狂言の如きものも加へられるに至つた。その曲目は、越前萬歳のものの外（實盛・二百十番・謠づくし・名所歌舞伎・魚づくし・鳥づくし・裏正月・綿繰道具づくし・加賀八景・帥鍋・花相撲・郡名所・歌留多百人一首・文づくし・時づくし・金澤町づくし等）、六十番に及ぶ。明治三十年頃に、今樣萬歳と稱して芝居がかりのものが生じ、鉢卷萬歳・新道成寺・義經千本櫻・本朝二十四孝等を演じた。また正月に寄席等に出て演ずるやうにもなり、盆踊にも用ひられた。その流派には、老松梅太夫・乙松岩太夫の二派があり、いづれも名人をもつて稱せられ、就中、老松正太夫の作つた「御代の春」「草靡し」の如きは持てはやされた。加賀には古く、隱亡萬歳と云ふのがあり、賤業者が男女四五人一團となつて、男は頭巾、女は菅の妻折笠を着て、太鼓を叩きながら、心中口說の類を歌つて合力を乞うた。今は地萬歳は滅亡に瀕し、隱亡萬歳は絕えた。越後地方に出たのも、越前萬歳・加賀萬歳の徒で、明治二十四年新潟縣古志郡新町刊本（「御萬歳」と題す）、同二十六年新潟縣南蒲原郡見付本町刊本（「豐年萬作七福神御萬歳」と題す）等があり、太夫が三味線を彈き、才蔵が鼓を打つてゐるのは、後世の俗化した歌ひ方である。

【中國萬歳】 これは、美濃より出たと云ふ。山口の萬歳については、祝言、又鶴舞とも記すものがあり、服裝（狩衣・水干・桐の紋・烏帽）は、古への千秋萬歳のそれに酷似してゐる。これも萬歳の一種であらう。中國地方は大和萬歳の系統を引くもので、それが中國・西國にも廻つたものと思はれる。

【秋田萬歳】 三河萬歳の徒が常陸國に住し、更にそれが慶長年間に秋田へ移住したものと云ふ。太夫（侍烏帽子に水干）は頭梯針生清太夫と稱し、才蔵（婦人管物に大黑頭巾）を伴つて、城に參つて祝詞を述べ、屋敷町を廻る。歌詞は十二番（志運萬歳・經文萬歳・御力萬歳・婦入萬歳・お國萬歳・双六萬歳、以上表六番。國萬歳・御江戸萬歳・門跡萬歳・吉原萬歳・榎萬歳・名寄萬歳、以上裏六番）ある。その曲目には、後述の江戸萬歳と同じものがあるので、その間に關係のあることがわかる。東國・奥州方面の萬歳は、すべて三河萬歳の流を引くものである。

【伊豫萬歳】 愛媛縣松山市を中心として行はれる。樂器は太鼓・三味線・拍子木で、囃子方が歌を歌ひ、踊手が數人派手な形裝をして踊る。すべて男子のみで、女に扮裝して踊るものもある。神事・佛事の餘興その他に行はれ、九州地方に巡業することもあると云ふ。曲目は「柱揃」「伊豫名所づくし」「忠臣藏」その他が多い。歌詞は、「德若に云々」「まことに目出たう候ひける」の如き、萬歳の歌詞を存してゐるが、內容は劇化したものが多く、萬歳の原形よりは最も遠ざかつた流俗の樣式を持つてゐる。併し四國の萬歳は、もと大和萬歳の系統を引くものであらう。

【諸國の萬歳】 諸國に來る門付の萬歳歌は、「俚謠集」に、福島縣北會津郡・福岡縣企救郡・同築上郡（「千代萬歳十二段」と題す）・大分縣下毛郡・廣島縣甲奴郡等のものが出てゐる。廣島縣の萬歳は、八屋と云ふ土地の賤業者が出たもので、少女二人を連れて同行七八人位が、三味線・四ツ竹・小太鼓等に合せ、少女を踊らせて合力を乞うたもの。曲目には「蓬萊萬歳」「立舞歌」「立踊歌」等があり、歌詞も形態も甚だ崩れてゐる。以上の外にも、諸國に萬歳が出たが、美濃・尾張を境として、畿內以西は大和萬歳、東海道以東は三河萬歳、北陸地方は越前萬歳をもつて代表せられ、土地の百姓がこれを兼ねるか、或は唱門師・院內・八屋等の非人が、これを業として出たものである。而して門付の萬歳が何れも遠く禁中の千秋萬歳より出てゐることは云ふまでもない。「德若に御萬歳云々」の如き萬歳の通詞も、千秋萬歳の「言立」の句より出てゐる。かくて三河萬歳の起原傳說に、德若と云ふ人物が存するかの如き、附會說も生ずるに至つたのである。

【江戸萬歳】 江戸では堺町の如き芝居町で、見世物として小屋掛けで萬歳を興行した。寛文延寶頃から既に存し、七十郞・大助の如き太夫が名高く、物眞似狂言も演じて見せた。その正本には、「江戸萬歳」「大幕山入萬歳」「吉原太夫名取萬歳」等の繪入赤本が刊行せられ、「淋數座之曲」には、又「吉原太夫萬歳」「野郞萬歳」を揭げてゐる。享保頃まで存續して、地方にも興行に出た。「尾陽戲場事始」に、「往古は每年正月の內は諸家へ江戸萬歳と稱し、五六人つれて廻りけるが、正德の頃より二人に限る事になれり、此十次郞（女形和泉屋十次郞）には立役玉川染右衞門といふ者組合にて、萬歳一ト流し、切狂言十番づゝ致し料百疋也、或は所

作事道行心中狂言世話事などいたし、裝束等持來り、樂屋を調取、一切〳〵に衣裝を仕かへ相勤め、代る〳〵はやし方を勤めけり」と見えて、この流は、萬歲より出て歌舞伎狂言を主とした。江戸萬歲の初めは、智多萬歲より出て江戸風に變化し、歌舞伎物眞似を演ずるやうになつたのである。

【御座敷萬歲】 萬歲を座敷の酒宴の興に用ひたものである。上記の上方の萬歲もこれに屬す。前述の「淋敷座之慰」所載の萬歲も、芝居の江戸萬歲より出て、座敷萬歲に轉じたものであらう。かくて萬歲は流行唄化し、或は御船唄にも取られ、諸種の歌舞音曲に入つて、多くの影響を與へてゐる。今日の寄席で演ずる萬歲の如きも、これより脫化して來たものである。（千秋萬歲の條參照）

【參考】 古事類苑（歲時部）○嬉遊笑覽（萬歲の項）○萬歲記著者不詳○越前萬歲考山下與平○金澤市史（風俗篇）○金澤褻語 ○名古屋市史（風俗篇）○郷土舞踊と民謠○秋田風俗問狀答○近代歌謠集 藤田德太郎 ○歷代風俗寫眞大觀 江馬務○續歷代風俗寫眞大觀 同上 （藤田）

萬歲躍 まんざいをどり 歌謠書 一冊 【編者】不詳、或は友市か。【刊行】萬治三年七月。今出川、助左衞門板。【諸本】秘書複製會複製本がある。日本歌謠集成卷六所收。【解說】「萬歲躍之序」の次に、「ゆふぼ流踊くどき」と記して十八篇の歌詞を收む。丁數八枚、中に見開き二頁續きの挿畫が一つあり、三味線・胡弓・尺八・皷に合せて、役者の踊つてゐる圖を描く。近世の踊口說の歌本の祖で、友市流の口說歌を集めたもの。「落葉集」卷五の祇園町踊の唱歌の終りに、「右此踊の初りは、京の東祇園邊に去る法師あり。其身の以㆓息災㆒在㆓樂心㆒初秋に友をかたらひて、踊をはじむ。凡元祿十六年迄及㆓四十七八年㆒云々」とあり、元祿十六年より四十七八年以前は、丁度友市流の行はれた明曆萬治頃に當る。「色道大鏡」卷八に、「先上京に、或法師此（○踊口說）妙を得て天下に名あるといへども、予が一族なればはゞかりて姓名をしるさず」とあるのも友市のことで、畠山箕山の一族であつたらしい。淡海の「百人一種」（寬文十三年刊）には、「晉頭、井家友市」と記してあると云ふが、これがその本姓であらう。歌詞には、「尤の雙紙」の「白き物」や「迷ふ物」を取り入れてゐる。又、近江踊・伊勢踊等、種々の歌謠をも取り入れた。

【備考】「萬歲躍」刊行後四年、寬文三年三月に「おどりくどき」と題する一冊の書が出でた。收載歌謠九篇（目錄には十篇の題名を記す）、二條寺町かどや喜右衞門板、八丁。見開き二頁續きの挿繪一、すべて「萬歲躍」と同じ體裁で、これは喜內屋甚五兵衞の踊口說の歌詞を集めたもの。「色道大鏡」卷八に、「次に役者喜內といひし者あり、法師につぎて此名を得たり。其後願西彌次郎兵衞自然とこの道にかなひて、これを口ばしると、其芳しき事先達をあざむくなるべし」とある人々の正本で、これ又「尤の雙紙」から材料の出てゐるものが多い。「寬文書籍目錄」にも、この書名が見えてゐる。これ等は多く七月に盆踊歌として用ひられたもので、友市や喜內等の役者が裝束で晉頭を取り、囃子にも役者が出て興を添へたのである。祇園町踊の如きも、この盆踊の一種であつた。爾後、これが京大阪の踊口說や盆踊の祖となつた。 （藤田）

【參考】○上方音頭おどりくどき 藤田德太郎（上方第一號）○井家友市（日本及日本人昭和八ノ一）

萬載狂歌集 まんざいきやうかしふ 狂歌集 二冊 【編者】四方赤良・朱樂菅江【刊行】天明三年【解說】天明年間、江戸で行はれた狂歌撰集の整うたものの一つで、四季・離別・羇旅・哀傷・賀・戀・雜・釋敎・神祇等の十二部に分ち、歌數凡そ七百首、當時勃興せる天明調狂歌の外に天明以前の貞德・正式・維長老・卜養・未得・守武・曉月房・由縁齋・英一蜂・海音・志道軒・信海・風來山人・卯雲・由己等の作歌をも集め、卷末に橘八衢（千蔭）自筆の跋を載せてゐる。この跋文に就いて、赤良は「萬載集の跋は橘ノ八衢（千蔭の匿し名）にて自筆なり。此集あまりに行はれければ橘ノ八衢の跋をのぞきて市中に行ふ。我家に其跋ある本を秘め置けり」と「奴凧」に記してゐる。後、發行した赤良の「後萬載集」、同じく「才藏集」、菅江の「故混馬鹿集」（別項）とを併せて時人はこれを天明調狂歌の四大撰集と稱した。 （野崎）

萬歲樂 まんざいらく 雅樂舞曲 【名義】皇帝の萬歲を賀するための樂曲であるからこの名がある。【異稱】「鳥歌萬歲樂」「煬帝萬歲樂」【性質】唐樂。新樂の中曲。平調曲に屬する。昔は五帖あつた由であるが、今は三帖だけ傳存してゐる（拍子二十）。舞がある。六人又は四人で舞ふ。昔は女舞としても行はれたが、今は凡て男舞である。舞者は常裝束で袍を着る。答舞には「延喜樂」（別項）を主として用ひるが、地久・綾切・長保樂等を用ひることもある。爾來御卽位大禮に「太平樂」（別項）と共に行はれてゐる。

【沿革】起原に就き諸說がある。これを我が國の製作と見るものは、用明天皇の御作なりといふ說もあり、「釋日本紀」には「私記曰、今俗曰㆓阿良禮走㆒、師說此歌曲之終、必重稱㆓萬年阿良禮㆒、今改曰㆓萬歲樂㆒、是古語之遺也」とあるが、これは玆に言ふ舞樂の「萬歲樂」ではなく、古昔踏歌として用ひられたものの中に、萬歲樂の拍響して踊るものがあつたのを稱するもので別曲である。その名稱は謠曲の翁三番叟の中にも入り、又後世の千秋萬歲の中にも見られる。この舞樂は支那から傳來したものに相違ないことは、その樂曲及び舞容から見て知られる。支那製作の說には三種ある。一は漢武帝の作、二は隋煬帝の作、三は唐則天武后の作となすのである。「樂家錄」に「一說漢武帝登㆓嵩山㆒時、空中有㆘呼㆓萬歲㆒之聲㆖、問㆑之無㆘唱㆑之者㆖云々」とあるはその一である。「敎訓抄」に「是はもろこしに隋煬帝と申御門の御作せ玉へる也。唐國には賢王の世を治めさせ玉ふ時に、鳳凰と云鳥かならず出來て、賢王萬歲々々と囀なるを、轉詞を樂に作り、振舞をも舞につくらせ給て侍也」とあり、又「大日本史」禮樂志に「隋書云、煬帝令㆘樂正白明達、造㆗萬歲樂㆖卽是也」とあるは、その二である。又「體源抄」に、「又鳥歌萬歲樂といふ。則天皇后作り給ひし所也」とあり、「通典」に武后の時宮中鳥を養ひ給ひしに、人の言を能し、又常に萬歲を唱ふ。よりて樂を作りこれに象る」とあるはその三である。「大日本史」禮樂志には、これに就いて「今考㆓通典㆒無㆓此說㆒、而文獻通考所㆑載與㆑此全同、唯鳥歌萬歲樂在㆓怪誕調㆒、與㆑此同名異曲」と述べてゐる。要するにこの樂の起原は、前記の隋煬帝說と則天武后說と何れとも決定し難い。白石の「樂考」には、「煬帝の萬歲樂といふもの、古本朝にも傳はりしかども、其後ほろびし也」とあるも信ぜられない。本朝の傳來は未詳であるが、文武天皇頃であるらしい。平安朝の中頃には童舞として

屢々行はれた記事がある。 （田邊）

萬子 まんし 俳人 【姓名】生駒重信。通稱傳吉、後に萬兵衞【別號】此君庵・水國館・鶴巢・白鷗居士【生歿】承應三年生れ、享保四年（二三七九）四月二十七日歿す。享年六十六【墓所】金澤三ツ樽高岸寺（僞京）【俳系】芭蕉門【閱歷】加賀金澤藩士で、父八郎右衞門は寬文六年に歿し、十三歲で家督相續、奧小姓を勤めた。延寶六年世祿千石となり、翌年馬廻組、元祿六年替備來行、寶永二年先筒頭となつた。俳諧は貞享二年清風の「稻莚」に句の見えるのが古く、もと談林派であつたかと思はれるが、元祿二年芭蕉北國行脚の時、金澤で面會し得ず、早馬で追駈けて對面し得たが（歷代滑稽傳）、この頃芭蕉に歸したのであらう。金澤蕉門としては寧ろ保護者の地位に立ち、清貧に窮しむ北枝・秋之坊（各別項）等を救護したりした。越中の浪化とは姻戚關係でもあつたので殊に親しく、芭蕉歿後支考が北國に勢力を張つた頃は、支考と親密の間柄となつた。されば支考は萬子の歿した時「悼㆓水國公㆒」の和詩を作り（和漢文操）、なほ「惜㆓萬子老人㆒詞」（鵜子物在）を書いてゐる。俳諧は優れた方ではなく、作も少く七部集にもその作を見ない。「蕉門頭陀物語」「誹諧世說」その他に種々の逸話が傳へられてゐるが、どこまで事實であるかは知られない。【著作】金蘭集（萬子遺稿、文化三年刊）○蕉門名家句集萬子の部（安井小洒編、昭和七年刊）。【附說】「そこの花」を支考は浪化・萬子の共撰といふけれども、實は支考・浪化の共撰と認められる。

【參考】浪化公懿蹟記 各務支考（和漢文操）○歷代滑稽傳 森川許六○風俗文選（作者列傳）森川許六○蕉門頭陀物語 建部涼岱○誹諧世說 高桑閑更○俳家奇人談 竹內玄々一○蕉門諸生全傳 遠藤日人○俳林小傳 中村光久○俳諧人物便覽 三浦若海○加賀藩史稿○生駒萬子眞蹟 野興拾穗（「はたてがひ」三ノ四）○桃化上人と萬子 志田義秀（「誹諧」二六ノ四） （志田）

滿仲 まんぢゆう 「源氏物の謠曲」を見よ。

滿仲 まんぢゆう 幸若舞曲（三十六番の一）二卷 【作者】不詳【成立】室町期【諸本】古板本は寬永十二年板（十行本）。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではないが越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五近古篇に載せてある。【題材】身替說話。忠臣が主命を辭みかねて一子を以て身替りに立てる近世戲曲の構想は、大略これに源を發してゐる。忠義のために恩愛を犧牲にする武士の苦衷貞烈を語るもの。攝州中山寺緣起にも見え、謠曲「仲光」（一名、滿仲）と同材。美女丸の法號は正しくは源賢。その下山して父を說き佛道に入らしめた話は、「今昔物語」卷十九攝津守源滿仲出家語（古事談第四、寶物集卷七にも見える）に載せ、本書後半の素材がこれに相當する。

【梗概】多田滿仲の末子美女丸は、津國中山寺に送られたが、佛の勤を好まず武に專心するのを知らぬ父の面前で、或る時經を讀み得なかつた爲め激怒を買ひ、危く父の手討ちにならうとするのを辛うじて老臣藤原中務仲光方に逃れると、主の命令辭み難き仲光は、我が子幸壽丸を身替りに殺して美女丸を叡山に登せたので、美女丸は初めて惠心院の源信を師として學問を修め、十九歲で落飾、惠心院のゑんかくと名乘つた。二十五歲の時、師に從つて多田の父の家に行くと、母が己れを失つた悲しみに盲目となつてゐる事を聞き、佛に祈誓して靈驗を蒙り、盲眼は開き、父母とめでたく再會した。

【影響】新歌舞伎十八番「仲光」がある。身替の構想の影響としては「忠臣身替物語」（公平法問諍（別項）の改作）、「大塔宮曦鎧」等を經て特に「菅原傳授手習鑑」（別項）の寺子屋の段が有名である。 （島津）

滿洲語 まんしうご 「ウラルアルタイ語族」を見よ。

まんじゆのひめ 「まんじゆのまへ」を見よ。

まんじゆのまへ 御伽草子 三卷 【名稱】一名「萬壽の姬」。女主人公の名に據る題號であるが、本文中には「まんじゆのひめ」とあつて「まんじゆのまへ」と明記した箇所は一もない。刊本の表題も「まんじゆのひめ」であるが、內題と古い「書籍目錄」とに「まんじゆのまへ」とある。兩樣に呼ばれてゐたのであらう。【成立】不明。恐らく德川初期であらうか。【諸本】古板本は寬文十三年板（江戸大傳馬町鱗形屋板）、延寶元年板。近古小說新纂（初輯）所收。【題材】中山の觀世音の申子の姬は一旦逆境に沈淪してゐたが、終に果報を受けて榮達する物語である。單なる童話的な申子立身說話ではなく、御家騷動が絡まり、幸若舞曲及び古淨瑠璃型の作、舊型の動靜小說をなしてゐる。靈驗譚の分子と武勇傳說の分子とが混合し、人買說話の分子も挿入せられ、かね村に責め殺されて捨てられた姬を靈鬼等が守護するといふ姿形に、英雄生立說話の一形態として世界大擴布說話の一種をなす動物傳育傳說の分子も包含せられてゐる。構想からも文詞からも、金平本などの如き古淨瑠璃に近きを見る。

【梗概】人皇七十代後冷泉天皇の御代、安藝・周防・長門三國の主として、四隣に威を振つてゐた周防判官もりとしは、清和天皇六代の孫三河守ちかとしの子であるが、藤原朝臣權中納言ゆきいへの姬君を北方に迎へ、老臣にははらむしや（武者）兵衞尉かね村、さかた（坂田）刑部左衞門ともはるの二柱石あつて、何不足のない中に、かね村の數多持つ子供等を見るにつけても、己が世嗣なきを嘆じ、遂に中山の觀世音に申子の祈願を籠めて得たのは玉のやうな姬であつた。子孫の多いかね村を名附親として萬壽の姬と呼び、才貌雙びなき生ひ先きを持つてゐたが、ふとした病から判官は、妻子をかね村に、國をともはるに託して鬼籍に入つた。御臺母子の悲歎を他所に、かね村ははるを逐はうと謀り、一味の徒黨を集める中に、御馬副の鬼一丸こそ究竟の剛の者と、利を以て誘つたが、却つて面罵せられ、事破れたと見るより本城に攻め寄せた。多勢に無勢、終にともはる・鬼一丸は、奮鬪の末討死した。邪魔者を除いたかね村は上洛し、判官の讓り狀を謀判して太守になりすまし、御臺母子を若狹・鶴の前と呼ばせ、敬稱を禁じて小庵に押籠めた。泣いて詰つた乳母をも御臺と呼んだ見せしめに打据ゑて逐ひ出し、己が屋形は嫡子に讓り、自らは主の屋形に移り住んだ上、若狹を越後から來たなほいへといふ鎧商人に、買つた鎧の代價として與へてしまつた。なほいへが伴ひ歸ると、女房はそれが氣高い上臈なので、一度起した嫉妬の心を打忘れて始終を問ひ聞き、夫婦は驚いて新しく家を建てて据ゑ、あたらし殿と申し、主君として仰いだ。周防國に殘された姬は邪慳なかね村に召使はれながら、身も心も益々美しく成長して十三歲となつたが、かね村の乙娘が備前國司藏人に嫁ぐ時侍女として送られ、後に藏人から附

けられて捨てた艶書が腹黒の侍女の拾ふ所となり、讒せられてかね村方へ還され、折檻された末落命した。骸はとがねがくぼへ捨てられたが、虎・狼・野干は却つて守護し、中山より毎夜金色の光が射し、靈狐も來り守つて三日の後蘇生した。乳母も尋ね會ひ、中山の上人も靈夢により探し當てて伴ひ歸り、姫は本復後、一には父の菩提を弔ひ、又一には母に邂逅せんため、乳母共々比丘尼姿に身を窶して立ち出でた。先づ都に上り清水に詣つて祈願を籠めると神詠があり、夢判じに占はせて越後なほへ（直江）の浦に赴き、親子の餘波からずなほいへの門に佇んで、遂に素性判明して再會した。後、姫は源氏の大將八幡太郎義家に所望されて北方となると、親同士が從兄弟なる事明かとなり、なほいへには寮貫を與へられ、その後上落して兵を差向け、かね村一族を擒め取つた。義家の誅にも拘はらず、今年は院の御年忌に當る大赦のため、一旦命を宥されたかね村も、天譴は免れず、俄に起つた雷電に摑み去られてしまつた。義家は三ケ國安堵の御判を戴き、御台・姫君打連れて所知入りし、中山の上人にも恩賞あり、ともはるの遺族を厚く勞ひ、死者の供養も懇に營んだ。夫妻の御仲淺からず御子數多あり、保元の頃の六條判官爲義もこの御腹である。

【參考】近古小說新纂初輯（考說）　（島津）

萬秋樂（まんじゆらく）　雅樂舞曲　【異稱】「萬壽樂」「慈尊樂」「慈尊萬秋樂」「まんずらく」ともいふ。【性質】林邑樂。新樂。中曲（或は准大曲）。盤涉調曲に屬す。序二帖（拍子各十八）、破六帖（拍子各十八）。舞があり、六人で舞ふ。舞人は常裝束を着し、甲は特殊な形をしてゐ、佛樂として最も重んぜられる。答舞には、「地久」（別項）を用ひる。【沿革】天平八年に林邑國の僧佛哲が我が國に傳へた樂曲で、即ち林邑八樂の一である。或はその時佛哲と同行した所の婆羅門僧正がこれを傳へたともいふ。これを以て慈尊即ち彌勒佛の功德を表はしたもので、或は彌勒菩薩の原作であるといふやうに說くことが從來行はれてゐたが、今この樂舞の性質を見るに、印度の古樂でないことは明かである。佛哲は我が國に渡來してその樂を大安寺に授けたが、その中にこの曲は入つてゐない。後十年を經て天平勝寶元年に至り、東大寺大佛開眼供養會の時、初めてこの曲を奏した。これに依つて見ると、佛哲が我が國へ渡來した後に、唐樂及び三韓の樂を參酌し、印度と支那とを相混じて、新しくこの曲を作曲したものと推測せられる。その後、佛樂として大に重んぜられ、大曲に准じて今日に至つてゐる。　（田邊）

滿誓沙彌（まんぜいさみ）　歌人【俗姓】氏は笠、姓は朝臣、名は麻呂。「萬葉」卷五に笠ノ沙彌と記すのは俗姓を冠らせたものである。【生沒】不明。但し、文武帝の慶雲元年（一三六四）を最初とし、聖武帝の天平二年（一三九〇）十二月を最後とする史料があるが、天平二年十二月の方は材料の性質から云つて、もつと下らねばならぬものであるから、天平三年までは少くとも生存してゐたと思はれる。故に文武帝から、元明・元正・聖武と四帝に亙り、藤原京の半ばから奈良京の初期に及ぶ二十八年間は確かに生存してゐたもので、恐らくこの期にその青壯年の時代を送つたものに違ひない。【閱歷】青壯年時代を、有數な地方官として送り、後に滿誓と名を改めて半僧半俗の生活に入つたのがその大體の經歷である。俗人としての閱歷は、文武帝の慶雲元年正月の條に「正六位下笠朝臣麻呂授㆓從五位下㆒」（續日本紀）とあるのが最初で、この時まで微位であつた爲めその名が記錄されなかつたのである。同三年秋七月（別の傳へでは和銅元年三月）、美濃守となつたのが地方官としての最初であつて、甚だ治績が擧つたらしく、和銅二年九月には美濃の田地十町、穀二百斛、衣一襲を賜はつて「美㆓其政績㆒也」と說明が加へてある。同四年正五位上に昇り、和銅七年二月には、木曾街道を開いた功により、封七十戶・田六町を賜はつて褒賞せられてゐる。これ等により手腕を認められたと見えて、靈龜二年六月には尾張守を兼任し、翌養老元年の十一月には從四位に昇り、その翌々三年七月には新設の按察使の役に就いて尾張・參河・信濃三國を管する事となり、同四年の十月には右大辨となつた。かく殆ど一年每に官位がのぼつたが、同五年五月に至り、太上天皇のため出家入道せんことを請うて許され、爾來佛門に入つた。而して養老七年二月、勅して筑紫の觀世音寺を作らしめられたのは、彼の官吏時代の手腕が記憶されてゐた爲めであらう。この時の事情を「伊呂波字類抄」觀世音寺の條に、「扶桑略記」を引いて、觀世音寺の建築が年代を累ねても成功せず、終に「元正天皇七ー二ー遣㆓僧滿誓於筑紫㆒、令㆑造㆓觀世音寺㆒。俗名從四位上笠朝臣麻呂也」と記してゐるのは、以上の推測を證據づけるものである。彼はこの後少くとも七年間は筑紫にゐた。それは「萬葉集」卷五に、太宰帥として太宰府にゐた大伴旅人が、天平二年正月十五日、梅花の宴を催して知人と作歌したうちに彼の名が見えるし、その年十二月、旅人が歸鄕した後に筑紫の滿誓からおくつた歌が、卷四相聞部に「太宰帥大伴卿、上㆑京之後、沙彌滿誓贈㆓卿歌二首㆒」とある。上京は十二月だが贈歌はその後とあるから、少くとも天平三年の頃まで筑紫にゐたことは疑ひない。恐らくは竣功した觀世音寺に長としてそれ以後の餘年を送つたのであらう。終るところを知らない。【作品】すべて「萬葉集」にある。卷三雜歌部に二首、譬喩部に二首、卷四に上記の筑紫から大伴旅人へおくつた二首、卷五に上記の梅の宴の折の歌一首、總計六首。皆短歌である。

【批評】「萬葉集」卷三雜歌部の「世の中を何にたとへむ朝開き漕ぎにし舟の跡無きごとし」の一首が、彼の歌人としての名を極度に有名にしたのである。この歌は「拾遺集」に「……何にたとへん朝ぼらけこぎゆく舟のあとのしら浪」と變つて取入れられてゐて、佛教が文藝に沁み入つた、否、寧ろ文藝を支配した平安朝から中世へかけて、一般にこの歌がもてはやされたのである。この外の彼の作には、同じく卷三雜歌部の「しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは着ねど暖けく見ゆ」と、また卷三譬喩部の「鳥總立て足柄山に船木伐り樹に伐り行きつあたら船材を」の歌とが、萬葉鑑賞家の間に特殊な歌材を摑んだ歌として記憶されてゐる外には、特別にすぐれた秀作を見出し得ない。　（森本）

萬象亭（まんぞうてい）　「森羅萬象」を見よ。

萬代和歌集（まんだいわかしふ）　私撰集　二十卷　【著者】不詳。但し奧書には、寶治二年後香山斗藪釋の編纂の由が見える。【成立】同じく奧書に、「寶治二年夏頃撰定了、吾秋被添削者也」とある。【諸本】丹鶴叢書戊申秩には、十本に分載し、國書刊行會の同叢書覆刻本には「草根集」と合綴して收む。【內容】本集二十卷。序跋などなく、次の如く部立してある。春（卷一・二）、夏（卷三）、秋（卷四・五）、冬（卷六）、神祇（卷七）、釋敎（卷八）、戀（卷九ー十三）、雜（卷十四ー十九）、賀（卷二十）。內容は平安朝から鎌倉時代に至る和歌を撰してあるが、主として鎌倉期の人々の作が多い。「玉葉」「風雅」「新千載」「續千載」「續後撰」「新拾遺」「續古今」「新續古今」などの勅撰集に載せられた歌も見える。【價値】この時代、漸く多くなつた私撰類題和歌集の先驅をなしたものとして注意すべきであらう。

【研究書】萬代集堅要二卷（天保四年十二月成）○橘守部の萬代集の句格等の研究書（著者自筆原本、鹽崎一長所藏）○萬代和歌集類題四冊（鎌倉保長）。　（松浦）

マンダラ　詩集　【編者】マンダラ詩社　【刊行】大正四年三月、東雲堂。【解說】蒲原有明の「序文の代りに」の一篇は、象徵の本義を說いて、自家の立脚地を明示したものであるが、特に現前の實相を力說し、人間の靈力と光明の涌出といふことを述べてゐる。「表現の生活が人生の曼陀羅を現證の法界に織り出すのである」ともいつてゐる。內容は七詩人の作品を收容してゐる。初めに三木露風の帆綱・夕暮・搖める枝・花と果實・雨心の諸篇、北原白秋の渡・海雀・海景・馬・鳩・雨中小景・城ケ島の雨、野口米次郎の廣重をうたつた英詩二篇、澤村胡夷の霧・暗き海・薄暮・船室・坦路、河井醉茗の丁子・溫泉三篇・女に對ひて、蒲原有明のわれは信ず・自畫像・現實の渦・不死・光明を憧れ・涌き出でよ・光明讚、上田敏の嗣響稱・別離・雪・愛の毛・窓にもたれて等で、殆ど詩人として一家を成してゐる人の作ばかりであるが、ただ澤村胡夷の詩名が本書に依りて一層著しくなつた。この人にはその後に集がないから本書に發表された作品が、その詩感を窺ふ規準にもなる。象徵的手法の確實な表現である。本書の刊行された數年前に「あやめ草」「豐旗雲」の二詞華集があつた。本書刊行の意圖も詩社成立の旨意も殆ど同じであつて、詞華集としては高踏的であり、有力な位置を占めてゐたのは無論である。マンダラ詩社は蒲原有明方に置き、一二回同人の集りもあつた。この結社が續いて詞華集の續刊が出來たら相當の影響を殘したらうが、惜しいことに一冊限りで後は出なかつた。從つて「マンダラ」の影響といふほどのものは、後の詩壇にはなかつた。而して又その後には絕えてこの種の計畫もなく、類似の詞華集も刊行されることがなかつた。　（河井）

萬亭應賀（まんていおうが）　戲作者　【本名】服部孝三郎【號】春頌齋。後に萬亭應賀、別に長恩堂【生歿】明治二十三年八月三十日、東京下谷金杉にて歿す。享年七十三（二ともいふ）【墓所】入谷良感寺【法名】白蓮院往雲上生居士【閱歷】父服部長狹勾當は上總長狹郡の人、失明して江戶に來り、富を積んで勾當の位を買つたといふ。應賀は少時故あつて常陸下妻の藩主井上侯に仕へたといふが、幾ばくもなく辭したものと見え、弘化元年の頃から合卷に指を染め、戲作者の仲間入りをした。素より富家であつたので、戲作の傍ら照葉狂言とか茶番等の遊戲を好み、三味線も好く彈いた。このために大に財を散じ、戲作も最初は旦那藝であつたものが本職になつたのであらう。幸ひ、弘化二年から出し始めた「釋迦八相倭文庫」（別項）が當つたので、やうやく戲作者としての位地を認められ、安政五年頃までに二十六七種の作を出した。併し、「御所奉公東日記」（安政元年）が十編以上に及んだ外、さう世評を博したものがなかつたらしい。ただ「倭文庫」だけは、近松の「釋迦如來誕生會」等によつたもので創案でないに拘はらず、大に歡迎され、明治以前五十餘編に及ぶ長篇となつた（別項參照）。明治に入つてからは、五年頃から諷刺戲作を出し始め、十一二年までに可なり多數に及んだ。勿論その意は童蒙婦女の敎訓といふつもりではあつたが、年齡が年齡だけに新時代の狀勢には一向通ぜず、回顧的な氣持が多かつたので、折角の敎訓的諷刺も往々反時代的な皮肉に終ることが少くない。十年以後、篠田仙果の「月とスッポンチ」に手傳つたりして幾分ジャーナリズムに近づかうとしかゝつたが、それは旨く行かなかつた。十六年頃から再び合卷の「明良二葉草」を執筆し、二十年（八編）に及んだ。かくて物的窮乏が漸く甚だしくなつて來た上、その子が又甚しい不孝者であつたので、晚年の應賀の生活は極めて暗澹たるものであつた。彼が金杉の陋巷で零落の生涯を終へた時には、彼の一女は下谷萬年町（貧民窟）の車夫の妻となつてゐたといふ。

【著作】釋迦八相倭文庫（別項）（弘化二年より明治四年まで）○孝感雨面鏡○（忠臣）國姓爺將棊合戰○福德大長大國柱○敎訓浮世眼鏡（以上弘化元年）○大國初夢話○磯石山浮世精靈（以上同二年）○都鳥花の魁○武勳立身館双六○編神妹脊扇○昔語縣伉浪○女夫矮狗縣小田卷○練租大福帳（以上同三年）○甚樂九重錦（同四年）○英雄五大力○聖德太子大和鑑○實初叶惠宮久路○兩筋縣山賞○忠臣藏之助立（以上嘉永元年）○神稿淺蒙草○怪談春雛鳥（續篇）○本朝金剛傳（以上同二年）○日蓮記旭衣○敎訓武藏鐙（以上同三年）○繁垣俸赤本（續篇、同四年）○御所奉公東日記（安政元年、第十三編文久元年）○紀文大盡入船帳（安政五年）等。

【明治以後】（寶島諷談）鬻人肝潰志○（理解新文）五穀祭○大鈍託新文鬼談（以上明治五年）○當世利口女○（新聞）兎笑だん語○ニヤアチウ論○鳥類大議論○和談三才圖笑（以上同六年）○小說三兵論（補兵衛隣詩論・太郎兵衛木掛論・孫兵衛沽計論ー同八年）○正札智惠の秤○小說三箱（職人必携袋・商賣懷嚢附箱・於嬢論ー同八年）○金庫三代記○青樓半化通○東京花毛拔○日本女敎師○近世あきれ蓋○味噌すり男○談義畑木綿○市の虎狩○馬鹿大妙藥（以上同七年）○童女早學文○賞罰天ラカフル○（滑稽各寶）各覽會○修身千代見草（以上同八年）○活論學問雀○方今身代ばなし（同九年）○明良二葉草（同十六年）○（修身勸論）仁義禮智信（同十七年）○萬福天カラフル（同十九年）等。

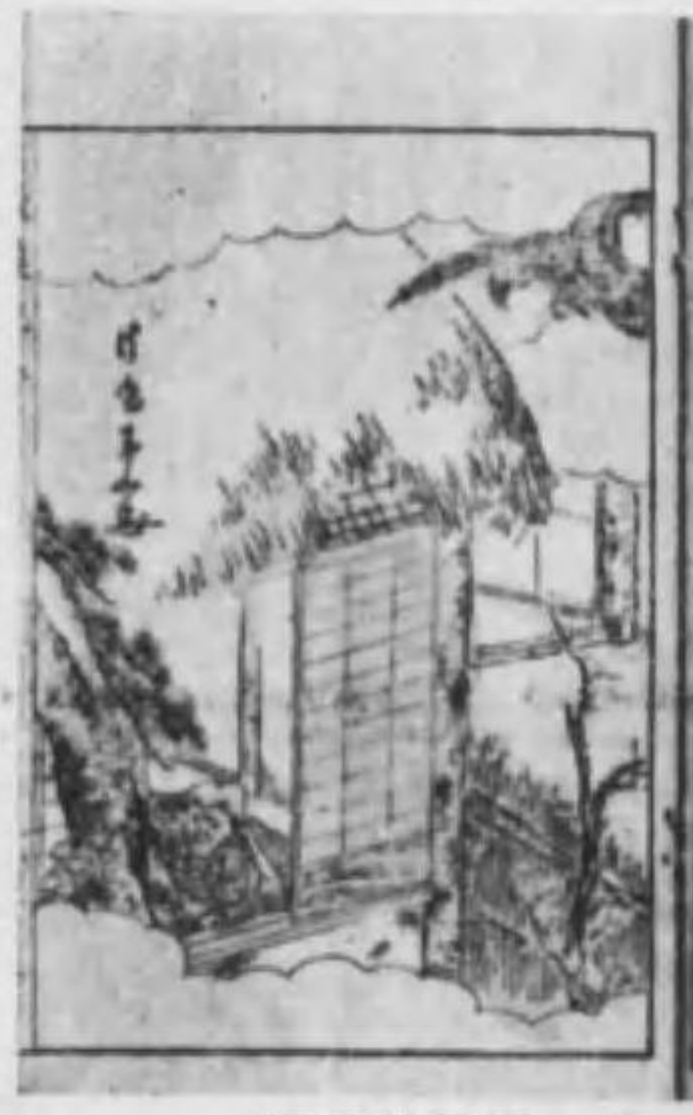
【業績】應賀は二世春水・魯文・有人と並んで幕末生殘りの戲作者中での長老である。だが明治に入つてからの生活は全然惰勢的なもので、その作物も多い割に世人の顧みるところとならず、又顧みるに値ひするものもなかつた。丁度魯文が幕末戲作者の開化主義を代表するに對し、應賀は衷心は開化社會に好意をもたず、往々時代に逆行するやうな矯激な語を吐き、その敎訓諷刺も新時代に適應する如く見せかけつつも、案外反動保守的な分子が多かつた。應賀の小說のことを朝野新聞の一投書家が、「其著スル所動モスレバ世理ニ反シ或ハ涅齒剃眉ノ老婆ニ左袒シ或ハ散髮ヲ賤シミ或ハ佩刀ヲ主張シ或ハ洋裝ヲ輕侮シ、古ヲ慕ヒ今ヲ嘲リ無法無的云々」といつてゐるが

大に富つてゐる。だが、それだけにこれ等の戯作が、文學史家にとつて一應の精査に値ひすることはいふまでもない。（藤田（泉））

まんな　「漢字」を見よ。

萬年艸（まんねんさう）　雜誌【刊行】明治三十五年十月創刊。翌年よりは隔月發行となり、滿一ケ年目第八卷を以て終刊となつた。【解說】「めざまし草」（別項）「藝苑」「藝文」（別項）の延長である。森鷗外・上田敏・井上通泰・佐佐木信綱・田山花袋、その他二三の文士も加はつた森派の研究誌であつた。强ち新文學の紹介に止まらず、古典文學の輪講もやれば、劇の合評も發表してゐたが、創作方面の際立つた收穫はなかつた。（齋藤（昌三））

漫遊記（まんいうき）　讀本　五卷五册【作者】建部綾足【名稱】原名「をり〳〵草」、後、拔萃して刊行の時「漫遊記」と改む。【刊行】多く明和頃にをり〳〵書き覚めたもの。寫本で傳はつたものを、後人が先づ十七話を選んで前編五册とし、寛政十年抱古老人の序を附して出版し、次いで後編五册を出版する積りで奧附に廣告してゐるが、遂に出版されなかつた。京都松屋兵輔・扇屋利助版。【諸本】流布の刊本は、寛政十年印行の繪入五册本で、日本名著全集（怪談名作集）所收本の底本。なほ寫本「をり〳〵草」は、春・夏・秋・冬の四卷に別ち、三十六話を載せてゐる。このうち、多く小說的奇構をもつたものが「漫遊記」に選ばれてゐる。幸田露伴校訂の名著文庫本・日本隨筆大成所收の「折々草」は、この寫本に據つてゐる。【解說】內容は一之卷、若狹の國の孝女、屁ひりの翁、龍石、野もりといふ蟲、連歌詠むを聞きて狐の笑ひし。二之卷、歌惡人、抱守主の見に代りて死す、梅が代といふ香の名、螢の集に時鳥。三之卷、文月末の夜の光物、蜜の蜂になる、江戸の根岸にて女の住居を求む、蜂に命とられし人。四之卷、浪華の宮人狐の子を得る、人を頼みて飛び入りし鷹。五之卷、男をこひて死にける女、寢言を云ふ癖など、作者の放浪生活中の見聞から題材を得て諸國の奇談を集め、そこに怪異の情調を織り出すといふのが作意である。諸國物語の形式を追つたもので、ただ奇事異聞を述べてゐるに過ぎない憾みがある。これは隨筆の態度を離れなかつた爲めであらう。「越路を旅行せし條」「武藏上毛の二國に水溢れしをいふ條」などは、篇中の名什として推すべきものである。【參考】折々くさ幸田露伴校訂（名著文庫）○怪談名作集解說山口剛（日本名著全集）○日本隨筆大成解說（笹野）


「漫遊記」挿繪（笹野堅氏藏）

萬葉緯（まんえふゐ）　研究書　二十卷【編者】今井似閑【名義】支那の戰國秦漢の時に、聖人の經書を經として種々の說を說いた書を緯書と名づけ、經書を解說するの助けとした。兩漢の諸儒は皆これを信用して古註の中に引いた。それに倣ひ、「萬葉集」を經として、その緯となるべき諸書を集め、或は抄出して「萬葉」を說く助けとした意味である。【成立】元祿十三年か。【諸本】全部二十卷完備せる本は少い。京都府立圖書館所藏本は完備してゐる。一本には「新撰萬葉集」二卷、「眞名伊勢物語」二卷、「和漢朗詠集」二卷等は、世に刊本があるから略すと奧書に記して居り、これによれば、この三書の部分が簡略で、「新撰萬葉」と「眞名伊勢物語」が、全部を揭げずに語句の註解に止まり、「和漢朗詠集」が和歌を揭げたのみであるのも、かくの如き理由によつたものである。故にこの寫本には全部で合計二十三卷となる旨を記してゐる。右の三書が二卷に分れる筈であるのを一卷としたから、二十卷となつたのである。又元祿十三年の年號が見える（群書一覽）。今日の傳本の多くは、終りの五卷を缺く十五卷本である。國文註釋全書にも十五卷本によつて收めた。完備せる全本は未だ飜刻せられてゐない。【內容】題名によつても明かなる如く「萬葉集」を註解する助けとなる古歌・古文を諸典籍より抽出して、或るものには註解を附した書である。その古典籍の解題もあり、註解は多く假字交り文で簡明に記されて要を得てゐる。假字交り文で考說を加へた所もある。揭載した歌文の中には、萬葉假字に書き改めて記し、傍訓をも附けないものがあるので、甚だ紛はしい。古歌謠を蒐集することが最も多く、また註解・考證をも附してゐるので、一方から見れば、古語集考證の書ともなつてゐる。

（卷一）日本書紀の歌謠（本書の解題あり、厚顏抄によつて頭註を加ふ。傍訓を略す）。（卷二）古事記の歌謠（本書の解題あり、初めに歌謠の目錄あり、傍訓を略す）。（卷三）續日本紀の歌謠十二首、續日本後紀の歌謠七首、日本後紀の歌謠四首、三代實錄の歌謠一首（いづれも本書の解題あり、頭註に註解を加へ、同歌の他書に見えるものをあげて異同を示した）。（卷四）台記別記中臣壽詞、貞觀儀式祭文、年中行事祕抄高橋氏文、拾芥抄宮咩祭文、釋日本紀龜兆傳、朝野群載中臣祓、春日若宮社神樂舞歌、釋奠祝文、八神殿の事（延喜式神名帳・古語拾遺・日本書紀・延喜式祈年祭祝詞・貞觀儀式大嘗祭式・舊事本紀・姓氏錄より拔萃す）、壺碑銘、太秦牛祭々文（以上の如く本卷は、雜然と古書より神祇祝祭の古文詞を集收したものであるが、各本書の解說あり、今按として、個同の解說考證あり、甚だ詳しく、頭註もあつて、研究上參考となる事がある）。（卷五）古今集所載神遊の歌（東遊の歌、大和舞の歌、近江ぶり、水莖ぶり、四極山ぶり）、大嘗會悠紀主基歌（廿一代集・催馬樂・夫木抄・歌仙家集等より拔く。出典・地名・作者等に關し、分註・頭註あり。また大嘗會の行事等に就いても考證す）。（卷六）諸歌章曲（日本後紀・朝野群載より拔く。諸歌の考證あり）、東遊歌章（宮廟の歌の註解あり。また、八雲御抄・勸撰集・明月記等より求子歌の類歌を拔き、年中行事祕抄・枝葉略記・續世繼・貫之家集・夫木抄等によつて考證を加ふ）、今宮夜須禮賣曲、內宮年中行事歌（何れも出典の解題、歌曲の考證あり。頭註に歌詞の註解あり）、年中行事祕抄鎭魂歌（節に、俊賴家集所載富士鹽竈祭の歌、日吉神道祕密記所載樂歌を揭ぐ）。（卷七）神樂歌（初めに目錄あり。拾芥抄の神樂目錄も揭ぐ。神樂の由來に就きて考證し、歌詞の註解あり。この卷のみ一册として獨立せしめ、神樂歌註釋などと題せる寫本もあり）。（卷八）催馬樂（催馬樂の意義等につきて考證あり。體源抄によつて目錄を出す。體中抄の異名をも揭ぐ。註解もそなはる。本卷のみ一册として獨立せしめ、催馬樂註釋などと題せる寫本もあり）。（卷九）風俗・雜藝（風俗歌を出し、體源抄所載の雜藝の歌、異人所載の風俗の上野歌、河海抄所載の今樣、袖中抄所載の風俗の小車、政事要略所載の衞門府風俗、夫木抄所載の梁塵祕抄の歌、拾玉集所載の今樣、續教訓抄所載の今樣、梁塵祕抄口傳集所載の郢曲等あり。何れも考證註解そなはる）。（卷十）神代卷二神唱和、佛足跡石碑歌、古語拾遺の歌一首、日本靈異記の歌四首、聖德太子傳曆の歌四首、江次第の歌二首、江談抄の歌十首、扶桑略記の歌一首、和歌三式全部、明月記の歌七首、俊祕抄の歌一首、是害房縁起の歌一首、伊呂波字類抄の歌一首、延慶兩卿訴陳狀の歌二首、作者部類の歌五首、南方紀傳の歌一首（和歌三式の如きは諸書に見える殘缺の文をも收め、頭註あり、原本の解說等もそなはる）。（卷十一）新撰萬葉集（全歌または一二句を揭げて、註解考證するもの）。（卷十二）日本紀竟宴歌（本妙寺本によつて、歌詞を揭げ、註釋を加ふ。初めに日本紀竟宴の次第に就き證文を揭げ說明す）。（卷十三）假名伊勢物語（語句の註釋）。（卷十四）和漢朗詠集（和歌のみを萬葉假字に改め記す。頭註傍註に校讀考證あり）。（卷十五）出雲風土記（全部、校讀あり。頭註に註釋あり）。（卷十六）風土記殘篇（近江國・和泉國・常陸國・豐後國・尾張國）。（卷十七）風土記殘篇（山城國・伊賀國・伊勢國・尾張國・河内國・遠江國・駿河國・肆相記）。（卷十八）諸書風土記（諸書所引風土記の全文を集む）。（卷十九）樂詠并郢曲（樂詠類は、續教訓抄によつて、神樂人長詞・振鉾詞・輪臺詠より庭人三章に至る二十一章を輯せ、その他、隋臺詠陳樂唱歌・想夫戀詠あり。郢曲は五節間郢曲の全部を揭ぐ）。史籍不レ記往古ノ年號（住吉譜年號、繼體より文武に至る二十八を輯す）。（卷二十）近世（近世の和歌で古風を詠む人の作になる長歌・短歌を收む。挧士佛の歌十二首、下河邊長流の和歌三首、木瀨三之の和歌三首、契沖の和歌三首、宮川松堅の和歌二首、木下長嘯の和歌三首、松永貞德の和歌三首、契沖の歌及び序二章及び莫囂國隔の歌の契沖の解說（代匠記の說と異なる）及び琉球聘使記の文を載せてゐる）。

【價値】單に「萬葉集」讀解の助けとなるのみならず、廣く古歌謠集、又はその註解書として殆ど最初の書であり、古代文學研究者に多大の資料と暗示とを與へる點で、不朽の價値ある書である。後の古語集、例へば「樂章類語鈔」の如き、「中古雜唱集」（各別項）の如き、何れも本書によらざるものはない。又風土記逸文の蒐集も本書に始まつて、後の學者に材料を與へ、樂詠の蒐集等は本書の達見とするところである。（佐佐木）

萬葉假名（まんえふがな）　國語學【名稱】萬葉集に多く用ひられてゐる故、かくいふ。眞假名・男假名とも。【解說】我が國に於ける漢字の音字的用法の一種であつて、國語の音聲を、これと同音なるよみ（音、又は訓）を有する漢字を以て寫したもの。萬葉假名で寫された日本語は、その音聲は漢字のよみと同じであるが、その意義はこれと全く關係がないのが普通である。萬葉假名は、その用法から觀れば假名と同じであるから、假名の一種とせられてゐるが、文字としては漢字であつて、平假名や片假名とは違つたものである（假名參照）。萬葉假名は、漢字專用時代には多く用ひられたが、平安朝に入つて、これから新に片假名・平假名が發生して普通に用ひらるゝに及んで、次第に用ひられなくなつた。しかし特別の場合には後世にも用ひられた。

【種類】萬葉假名の種類は、「萬葉集」の用字法の研究の一部として研究せられたので、その分類法は人によつて多少の相違があるが、大體次のやうにすれば、あらゆる場合を攝すことが出來よう。即ち國語の音を寫すに、

（甲）漢字の音を用ひたもの（音假名）。

（一）一字で一音節を表はすもの。

（a）漢字音の全部を用ひたもの。阿・美・久・呂・手の類。

（b）漢字音の一部分を用ひたもの。良・萬・吉・年・欲の類。

（二）一字で二音節を表はすもの。鬱・瞻・颯・金・南・越・乞の類。

（乙）漢字の訓を用ひたもの（訓假名）。

（一）一字で一音節を表はすもの。千・茅・日・八・間・三の類。

（二）一字で二音節又は三音節を表すもの。酒・鈴・大・欲・夏・慍の類。

（三）二字で一音節を表すもの。嗚呼・五十・蜂音・石花の類。

（四）二字又は三字で二音節を表すもの。水葱・少熱・二五・常聲・小篠・八十一・神樂聲の類。

【沿革】漢字の音字的用法は、既に支那にもあつて、六書（漢字參照）の中の「假借」が即ちこれである。殊に、外國語を漢文に譯する時、その語の意味を考へて、これと同義の漢字に譯する外には、その語と同音の漢字を以てこれを寫し、その漢字を讀めば、その語の音を得るやうにするのが常であつて（これを音譯といふ）、この外國の地名人名その他重要なる語には、この方法を用ひる事が多い。漢字が我が國に入つて、邦人が漢文を書く事を學んでからは、日本の地名人名等を誌すのにかやうな音假名を用ひたであらう事はいふまでもない。しかし又一方に於て、地名人名等の意義を考へて、これと同義の漢字を宛て、これを訓讀すればその語の音を得るやうにしたものもあり、更に進んでは、漢字を訓讀して、その語の音を得るだけで、意義に於ては關係なき漢字を以て寫す方法（即ち訓假名）も亦用ひたであらう。推古時代の遺文に存する地名人名等は、この兩樣の書法を用ひてゐる。その中、音假名は、漢字一字を一音節に宛て、數字を連ねて日本語を寫すのが常であつた。音假名に用ひた漢字の音は、勿論日本化したものであつて、中には一部分を略したものもある（宜・等・兄・明など）。宇音（別項）としては、大體吳音の系統に屬するが、中には吳音とも一致しないものがあつて（奇・宜・明・移・侈・支・至・居・學・富・已・止・巳・里など）、これ等は、漢魏時代の古音の遺存したものであらうとの說があり（大矢透博士「假名源流考」參照）、古代の朝鮮の地名や、朝鮮人の記した文に見える漢字の音と一致するものがある所から、朝鮮人から學んだものであらうと考へられてゐる。この時代の音假名は、清音と濁音とは多くは別の字を用ひて區別したが、同音に對して種々の違つた文字を用ひる事少く、殊に一つ一つの文に於ては、同音は大概同じ字で書かれてゐる。推古朝より

萬葉假名表

ア	阿婀鞅安愛英。吾余我足嗚＝呼
イ	伊以異易怡壹移已意夷肆。射膽五＝十
ウ	宇汙紆于禹羽烏有雲。得葉菟卯
エ	愛哀埃衣依。榎可＝愛荏得（以上ア行のエ）延曳睿叡盈要緣裔。兄柄枝吉江（以上ヤ行のエ）頴娃翳英鹽
オ	於淤唹意億憶隱飫乙矣應愛
カ	〔清音〕甲加迦伽哿架嘉賀可訶軻柯舸河哥歌何呵珂奇個介家関汗甘。香鹿數日鹿 〔濁音〕賀蠲我餓俄峨鵝騀蛾何河荷宜
キ	〔清音〕支岐伎妓吉棄弃枳企耆祇祁。寸杵服來（以上甲類）歸己紀記忌幾機基奇綺騎寄氣既貴癸。木城樹（以上乙類）磯起喜 〔濁音〕藝岐伎儀蟻祇嵜（以上甲類）疑擬義宜（以上乙類）義
ク	〔清音〕久玖句絢口區矩屨寠苦君衢九鳩孔丘求救球恭勾拘具倶群。來 〔濁音〕具愚遇娛虞隅求
ケ	〔清音〕祁計稽家奚鷄雞谿溪啓價賈結。異（以上甲類）氣開既槪慨該階戒凱愷居擧希。毛食飼消筒（以上乙類）介鷄遺藝 〔濁音〕牙雅下夏霓（以上甲類）宜義皚导碍礙偈。削（以上乙類）
コ	〔清音〕古故胡姑祜枯固高庫顧孤。子兒小粉籠（以上甲類）許己巨渠去居虛擧據莒興。木（以上乙類）沽箇 〔濁音〕胡吳誤虞五吾悟後（以上甲類）碁其期語馭御（以上乙類）
サ	〔清音〕左佐沙娑紗砂差瑳嵯磋作舍散草柴積匝薩讃贊。迮狹猿猨 〔濁音〕邪奢社裝奘藏躲射謝坐座
シ	〔清音〕斯志師色之芝士始辭時詩侍旨指思偲此紫信璽伺嗣司詞式試次資絁施玆滋子尸矢笑新四死趾事水進悉自糸祀肆私枳。石磯羊＝蹄二＝二重＝二一並＝二 〔濁音〕士自珥茸餌兒儞貳盡慈緇仕寺時事字
ス	〔清音〕須湏州洲周素殊珠輸秀主酒蒭數諏寸儒壽。酢巢樔栖酸簀爲渚 〔濁音〕受授儒孺聚
セ	〔清音〕勢世西栖齊劑制細施是。湍瀨背迮迫石＝花 〔濁音〕是筮噬
ソ	〔清音〕蘇蘓宗素泝祖巷嗽。十麻磯追＝馬（以上甲類）曾層贈增僧憎則賊所諸。其衣襲醬彼苑（以上乙類）噌贈疏楚 〔濁音〕俗（以上甲類）叙存鑄鋤序茹（以上乙類）增
タ	〔清音〕多哆侈他施拖陁拕陀太馳當黨託丹淡談澹。田手 〔濁音〕陀柁太馱娜嚢儴彈曇墮
チ	〔清音〕知智致撥池馳笞至治遲鎭恥峙値珍陳。道千乳茅父血市 〔濁音〕遲治尼泥旎地膩
ツ	〔清音〕都兎菟莵居徒通追途突鬪豆川。津 〔濁音〕豆頭逗圖砮
テ	〔清音〕弖氐底庭帝諦題堤提傳天亭。手代氐 〔濁音〕傳殿提泥埿耐涅弟低侶題。出
ト	〔清音〕刀斗土杜度渡妬覩徒塗都圖居。外砥礪戶聽利速門（以上甲類）止等登鄧騰滕臺苫澄得。迹跡鳥十與常飛（以上乙類）菟東 〔濁音〕度奴怒渡（以上甲類）杼縢藤騰迺耐特（以上乙類）
ナ	那娜儺難奈柰乃南男寧。名浪中菜魚七莫
ニ	爾尓邇迩儞耳珥尼二仁貳而人兒柔。

奈良朝に近づくに從つて、同音に對して種々の文字を用ひる事が漸く增加する傾向が見えるが、奈良朝に出來た「日本書紀」や「萬葉集」などになると、同音異字が極めて多くなると共に、また平生多く用ひないやうなむづかしい文字をも用ひるに至つた。これは漢文が盛んに講ぜられて、漢字の使用が自由になり、技巧をこらすやうになつた爲めである。同じ理由からして、訓假名に於ても、「水葱少熱」「五十蜂音石花蜘蟵」のやうに文字を弄したやうなものさへも出來た。この時代に於ては「古事記」「日本紀」「風土記」などは、地名・神名・人名以外には音假名をのみ用ひたが、文書や「萬葉集」等には、訓假名を用ひ、又は音假名に混用したものもある。又音假名には、從來の吳音系統のものと共に漢音系統の音を用ひたものもあつて、同じ字が場合によつて違つた音を表はす事がある。然るに、奈良朝の後半に至れば、萬葉假名は次第に單純化して、一字一音節のものを用ひ、同じ音又は同じ文には、同音に對して種々の異字を用ひる事が少くなり、濁音も、專用の假名はあるが、清音の假名を以て代用する事が多くなつた。この傾向は平安朝に入ると益々進んで、實用的の文に用ひる最も普通の字體は大體一定しようとする傾向を示し、濁音にも多くは清音の假名を用ひるやうになつた。但し、「新撰萬葉集」（別項）や「日本紀竟宴和歌」には、同音異字も多く、普通用ひられぬやうな文字も見えるが、これは、前者は「萬葉集」の書法を摸し、後者は「日本書紀」の歌謠の書法の影響を受けた爲めであつて、特例と見るべきである。以上のやうに、實用的の文に於ける萬葉假名が、單純化統一化に向つて進んでゐた平安朝初期に於て、和歌や消息文に用ひられた萬葉假名から平假名（別項）が發生し、漢文の訓點に用ひられた萬葉假名から片假名（別項）が發生して、それ等が國語を寫すに便利であるために、以後盛んに用ひられるに及んで、萬葉假名は漸くその地位をこれに讓つて、平安朝中期以後は特殊の場合にしか用ひられないやうになつた。尤も、地名や姓氏などに用ひられた萬葉假名は、後世までもそのまゝ用ひられ、今日に及んでゐるものもあるが（「土佐」「紀伊」「讃岐」「土肥」「諏訪」など）、ただ傳統的の書法として襲用せられてゐるのであつて、假名として自由に用ひられてゐるのではない。

【萬葉假名と假名遣】萬葉假名が、日本語の音を寫す文字として普通に用ひられたのは平安朝の中以前までであつた。その時代の萬葉假名を調査すると、後世同音に發音する「い」と「ゐ」、「え」と「ゑ」、「お」と「を」、「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」と「わ」「ゐ」「う」「ゑ」「を」、「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」にあたる假名の間に區別がある。又、平安朝初期までのものにはア行のエとヤ行のエに當る假名の間に區別があり、又、大體奈良朝までのものには、「き」「ひ」「み」「け」「へ」「め」「こ」「そ」「と」「の」「よ」「ろ」の十二の假名にあたる萬葉假名はそれ〴〵兩類にわかれて、互に混ずる事は殆ど無かつた。かやうに、後世の假名に見られぬ區別が萬葉假名に存するのは、當時の國語に於ては、後世になかつた音聲があつたのであつて、それが後の時代に起つた音聲變化の結果、他の音と同音となつて、これと混同したものと認められる（別項「國語」の中「國語の沿革」の條參照）。かやうな後世に於て滅びた音の存在が當時の萬葉假名によつて知られるのは、萬葉假名が當時の音を忠實に寫してゐるためとおもはれる。又、平安朝初期以來起つた音便（別項）といはるる音變化も、萬葉假名で書かれたものの上に明かに見られるのである。それ故、平安朝中以前の萬葉假名は、大體に於てその時代その時代の發音を寫したものであつて、時代と共に音の變化するに應じて、その假名をかへて行つたものと考へられる。卽ち、當時の萬葉假名の用法は、大體に於て表音主義であつたのである。しかしながら、異る音は大抵異る文字で寫してゐるといふだけで、同じ音は必ずしも同じ文字でなく、いろ〳〵違つた文字を用ひてゐるのであるから、この點に於て嚴格な表音主義でなく、寧ろ同じ音ならばどんな文字で寫してもよいといふ主義であつたと見るべきである。（この項、「假名」「假名遣」「片假名」「平假名」「文語」參照）

【參考】假名發達史序說 春日政治（岩波講座日本文學）○假名源流考 大矢透○古事記傳總論 本居宣長○日本書紀訓考 [illegible]○萬葉用字格 春登○萬葉集古義總論 鹿持雅澄○萬葉集の研究（文字の用法を中心として）森本治吉 ○萬葉集の用字法 松山鎭一（短歌講座、修辭文法篇）○假名遣奧山路 石塚龍麿 ○古言衣延辨 奧村榮實○韻鏡考 大矢透○假名遣及假名字體沿革史料 同上　（橋本）

萬葉考槻落葉（まんえふかうつきのおちば）　註釋書　三册　【著者】荒木田久老　【成立】天明八年　【刊行】寬政十年　【諸本】天明八年自序のある木版本と萬葉叢書所收の活版本とがある。

【內容】初めに藤原持豐の序文、天明八年六月二十二日の自序及び附言がある。卷三のみの註解である。卷一・二の解は賀茂眞淵の「萬葉考」にあるからそれに讓つて、卷三を註釋したのである。歌詞を大きく一二句づつ記し、その下に割註として註釋を加へ、又頭註があつて補說した。上卷は大伴旅人の讚酒歌まで、下卷は沙彌滿誓の歌より始まる。別記が一册ある。卷四以下も稿本があるといふが、未見。

【價値】牽强附會の說も見え、證例を擧げず臆斷を以て文字を改めたところもあるが、創說多く、その新たに附した訓が後に定訓となつたものもあり、多くの暗示を研究者に與へる點で、「萬葉集」卷三の研究に缺くべからざる著である。頭註には本居宣長の說を擧げて反駁した所がある。　（佐佐木）

萬葉集（まんえふしふ）　歌集　二十卷　【名義】古來、萬の言葉を集めた集と云ふ意味と、萬世の集と云ふ意味と二つに解されてゐる。第一の說は、仙覺が「萬葉集抄」に唱へて以來、東麿・眞淵これに從ひ、雅澄等は第二說を唱へ、契沖は兩說を擧げて未定のまゝにとどめてゐるが、山田孝雄氏は第二說に確實な論證を與へた（萬葉集名義考・國語と國文學第二卷第二號）。

【別名】平安朝の初め、「新撰萬葉集」（菅家萬葉集參照）が出來てから、それに對して平安朝から中世へかけて「古萬葉」と云つたことがある（新撰集・袖記・枕草子・袋草紙・新撰樂記・古今和歌集目錄・三十六人歌仙傳・綺語和歌童蒙抄等）。別に嵯峨天皇の作と傳へる「古萬葉集」序と云ふものがあるのは、眞僞不明である（「古萬葉集」に關しては、木村正辭博士の「萬葉集書目提要」上卷附錄十九頁―二十三頁參照）。なほ横田美水の著はした「古萬葉集」（享和三年）は、流布の「萬葉集」を往昔の「古萬葉集」の姿に歸すと云ふ抱負で、美水が私かに名づけたものである。また「古萬葉集」とは卷一・二だけを言つたとする說があるが、從ひがたい（萬葉集卷九學考・國語と國文學、昭

丹袁煎荷似于

ヌ
怒努弩（以上甲類）奴農濃蕤（蕤）。沼渟渚
寐犬去（以上乙類）

ネ
泥尼埿禰祢年然樹。根

ノ
能乃廼努。笑箟野

ハ
〔淸音〕波皮破婆簸播幡皤潘半絆伴判
胖巴把盤方芳房薄博泊發撥番。葉羽
齒盤石八者早速
〔濁音〕婆麼磨麽魔摩伐馬

ヒ
〔淸音〕比毘卑辟避譬臂必賓嬪。日氷
檜負飯（以上甲類）非斐悲肥彼被飛秘。
火乾簸樋（以上乙類）皮稗碑
〔濁音〕毘毗妣弭寐鼻彌弥婢（以上甲類）
備眉媚糜。傍（以上乙類）味

フ
〔淸音〕布賦浮赴甫輔府符不否敷富副
普父夫扶。經生歷乾
〔濁音〕夫扶服步矛霧鶩部文父扁。蜂
音

ヘ
〔淸音〕弊幣獘蔽敝平鞞覇陛反返遍。
部隔方重邊畔家（以上甲類）閇閉倍陪杯
珮俳沛。綜瓮缶甕甗鐵經戶（以上乙類）
俾音
〔濁音〕辨辯謎便別（以上甲類）倍每（以上乙類）

ホ
〔淸音〕富本菩番蕃品保褒寶朋袍報倍
陪布凡煩乏寶抱。穗粒火煩太大帆
〔濁音〕煩

マ
麻摩磨魔麼莽馬萬万滿明末。目眞信
間喚犬

ミ
美彌弥瀰弭寐湄民。三參御見視眷水
（以上甲類）微未味尾。箕實身（以上乙類）

ム
牟无無武鵡務霧夢謀茂模倖。身六將
牛鳴

メ
賣咩謎綿面馬。女（以上甲類）米每梅瑇
妹昧晚。目眼海藻（以上乙類）迷免

モ
毛（以上甲類）母（以上乙類）茂謀慕暮謨摸
漠莫望莽梅文門問聞悶蒙勿物忘木
儛。裳喪藻面

ヤ
夜也椰耶野楊移陽養掖益冶。屋八
矢箭文綾射

ユ
由喩踰瑜愈臾庾遊悠融。湯結忌柚弓

ヨ
用庸遙容欲。夜（以上甲類）余與豫餘譽
預已。四世代吉（以上乙類）與

ラ
羅邏囉攞良浪郞朗樂。等

リ
里理釐裡利唎梨犁離隣臨。入

ル
琉流㐬留瑠屢婁樓盧廬縷漏類

レ
禮例列烈黎戾連麗。村

ロ
漏路露婁樓魯盧（以上甲類）呂侶閭慮廬
稜勒里（以上乙類）

ワ
和倭涴過丸王。輪我

ヰ
韋謂渭胃威委萎偉位爲尉。井猪居藍
座

ヱ
惠衞穢會隈回廻畫越。殖咲

ヲ
袁遠烏鳴塢隖乎呼弘泓廻惋越惡怨温
曰。尾小男士峽雄麻緒少叫

注意

一　この表は、國語の一音節を表はす萬葉假名のみを擧げたもので、數音節を表はすものは之を省いた。

二　淸音の假名は時として、濁音にも用ひられる。同じ字が〔淸音〕と〔濁音〕との兩部にあるのは、一の書には濁音專用であるが、他の書には淸音にも用ひられるものである。

三　同音の假名で古く二類に分れてゐたものは、甲乙の二類に分つた。何れの類に屬するか決定し難いものは集めて最後に置いた。

四　同じ假名又は同類の假名では、音假名を前に訓假名を後に置いた。。印以下が訓假名である。

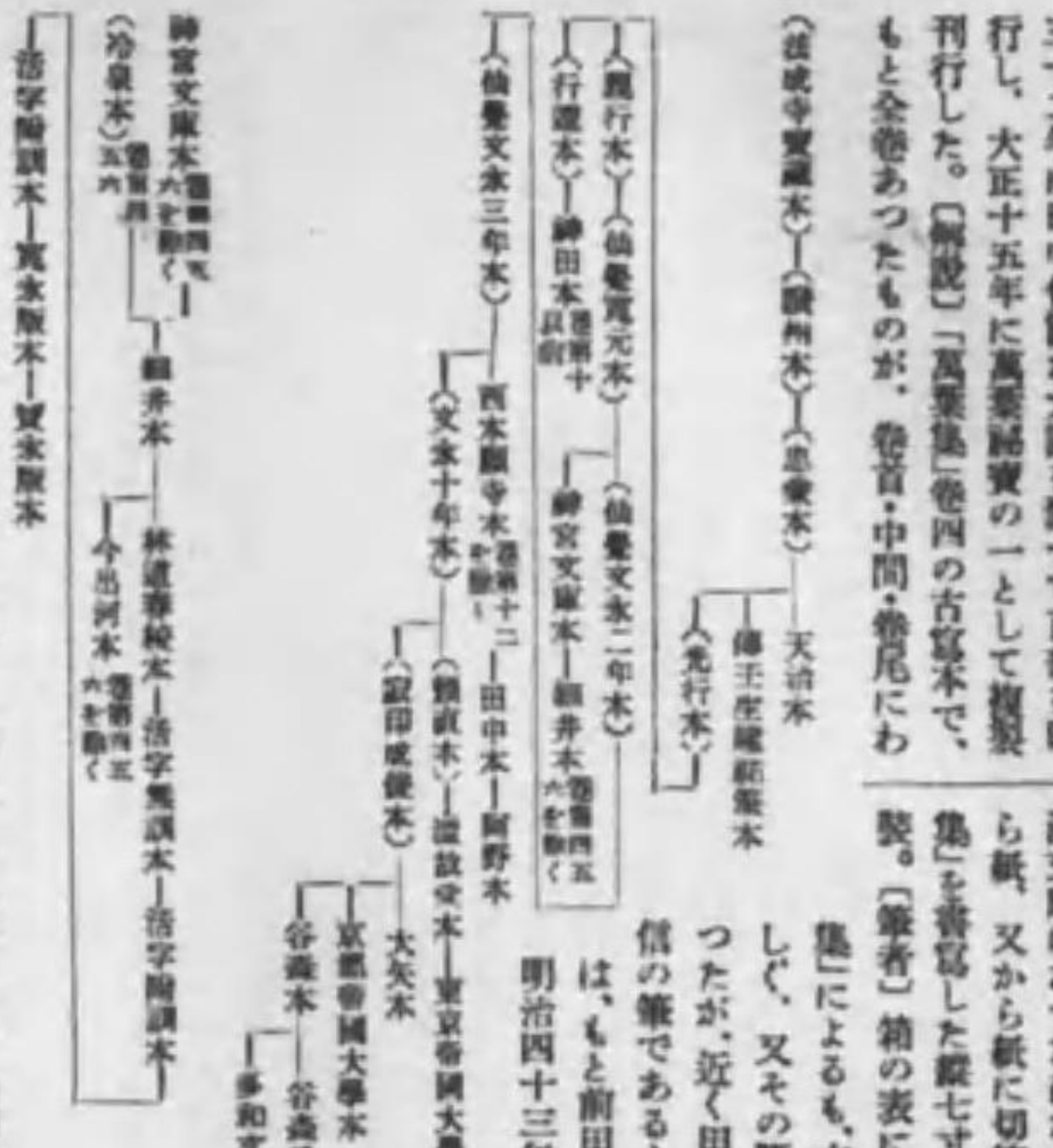
五　ヌの假名を二類に分つたが、實は、ヌは乙類だけで、ヌの甲類をノの甲類とし、ノの假名をノの乙類とする方が正しいやうである（その場合に、ノの中の「努」と「野」は所屬未定となる）。併し、さうすれば、現今一般に行はれてゐる上古文の讀み方（「野」「怒」「篠」「角」などをヌ・シヌ・ブ・シヌ・ツヌとよむ類）と相違することとなる故、姑く假名遣奧山路の說によつた。

和四年十二月）。【卷數】二十卷。但し現行のものは鎌倉時代に仙覺の校定した本であるから（それ以前の寫本もあるが、二十卷揃つた寫本は現在は無い）、平安朝・奈良時代に遡つて何卷であつたかは正確に知り難い。ただ「古今和歌集」は「萬葉集」に倣つて作られたもので、最初は「續萬葉集」と名づけられてゐた。その「古今和歌集」が二十卷であるから、醍醐天皇當時の「萬葉集」は既に二十卷であつたらしい。【成立】「古今集」卷十八雜下の文屋のありすゑの歌や新撰萬葉集序や古今集序には、ただ奈良時代の古歌を編纂したものと漠然と語つてゐるに過ぎぬが、「古今集」の眞名序に至つて、「昔平城天皇、詔㆓侍臣㆒令㆑撰㆓萬葉集㆒。自㆑爾以來、時歷㆓十代㆒數過㆓百年㆒」と、やゝ年代を明かにし、「榮華物語」月の宴の中に、「むかし高野の女帝の御代天平勝寶五年には、左大臣橘卿大夫等集りて萬葉をえらび給ふ」と、年號や撰者名を擧げ、仙覺は「萬葉集註釋」（仙覺抄）中に彼の見た「萬葉集」の奥書に諸兄が撰んだと記してあつたと云ふ意味を述べてゐる。又「元曆校本萬葉集」の第一卷の目錄の所に、「裏書云、高野姬天皇天平勝寶五年、左大臣橘諸兄撰㆓萬葉集㆒」と云ふ書き入れがある。以上が萬葉撰定に關する全資料である。【編者】「萬葉集」は、相異なる性質の卷々を雜然と寄せ集めた未整頓の集成であるから、各卷の編者と全部の編者とは必ずしも一致しない。第一種（撰者分明のもの）は、卷三・四・六・八・十七・十八・十九・二十の八卷で、全部大伴家持（別項）の編纂にかゝる。第二種（撰者の推測され得るもの）は卷五・九・十六の三卷で、卷五は山上憶良（別項）か家持かである。卷九は高橋蟲麻呂（別項）でないかと思はれ、卷十六は家持でないかと思はれる。

第三種（撰者不明）のものは、卷一・二・七・十・十一・十二・十三・十四・十五の九卷である。この內卷一と二が同一編者の手で編まれた事だけは疑ひがない（但し後に言ふ橘諸兄の編した卷が、若し「萬葉集」二十卷中にあるとすれば、この九卷の中の何れかである事だけは確かである）。而してこの個々の卷々を今の順序と分量とに整頓して今見る形に編成し上げた人、所謂「萬葉集」の撰者に關する古來の說は、約十四・五に上る。(1)の(イ)平城天皇が侍臣をして撰ばしめられたとする說（古今集眞名序。顯昭著「古今集序註」及び同人著「萬葉集時代難事」）。(1)の(ロ)家持が死んだ直後、大伴家が罰せられた時、官に沒收した大伴家所藏の家集類に、官所藏の歌集等を加へて平城天皇が「萬葉集」を勅撰せしめられたが、卷二を終つた時、或る故障が起つて中止し、未整理の儘傳はつたのが現「萬葉集」であると云ふ說（「泉園」大正十一年二月號所載、折口信夫氏說）。(2)の(イ)橘諸兄が撰んだとする說（「仙覺抄」「元曆校本萬葉集」及び「萬葉集目錄要」中の木村正辭博士說）。(2)の(ロ)諸兄が諸卿と撰んだとする說（榮華物語）。(2)の(ハ)聖武帝の時諸兄が撰んだものに、孝謙帝の勅により藤原眞楯が加へたとする說（遠困・勝命・顯仲）。(2)の(ニ)諸兄の撰に家持が附加したとの說（藤原實隆著「袖中抄」に在る定家卿の說。「萬葉集註釋」中の仙覺の說。「詞林采葉抄」中の由阿の說。眞淵著「萬葉解通釋并釋例」に見ゆる荷田春滿の說。「萬葉集美夫君志」中の木村博士說）。(3)家持私撰說（藤原清輔の「袋草紙」。藤原定家の「萬時」。契沖の「萬葉代匠記惣釋」。本居宣長の萬葉集重載歌及び全篇卷之次第之事」。久松潛一氏の「萬葉集の新研究」。但し雅澄の三氏は、家持が一時にでなく二度程に撰んだとする說である）。撰者を未定とする說には(4)家持・憶良等の編んだ種々の集の混合したものとする說（眞淵の「萬葉考別記」二の中の「卷のついで」の條）。(5)撰者を誰と指定しないが、兎に角家持以後に現在の「萬葉集」は撰ばれたとする說（武田祐吉氏の「上代國文學の研究」）。この外に品田太吉氏の「萬葉集」卷一・二勅撰說がある。なほ外に撰成等が撰んだとする說（萬葉口傳）、山上憶良說（今綱）、諸兄・家持・撰成說（鈴明綱）等があるが、これ等は顧みるに足りない。以上(1)—(5)の說を要約して見ると、(1)は平城天皇を中心とした說、(2)は橘諸兄を中心にした說、(3)は大伴家持を編者と見る說、(4)は以上の(2)(3)に憶良その他を加へた說、(5)は今日最も勢力ある說(3)を破らうとするものである。【傳來】詳かでない。ただ醍醐天皇の當時既に二十卷の形であつたらうと推察される事、又その當時「萬葉集」の編纂事情が忘れられかけてゐたことは、「古今集」の文屋のありすゑの記事で明かである。「源氏物語」の梅が枝の卷に、「嵯峨のみかど」（現實は嵯峨天皇のことか否か不明）が「古萬葉集」四卷をえらばれたと云ふ記事がある。又、嵯峨天皇の御製だと云ふ「古萬葉集」の序と云ふがあり、紀貫之の「萬葉四卷抄」と云ふがあると「和歌現在書目錄」に記してある。以上の三つは果して信ずべき事柄か否か決し難い。故に「萬葉集」の傳來に關する最初の正確なる資料は、醍醐天皇の皇后藤原穩子の日記なる「大后御記」の記事である。即ちそのうちに、「せんだいの御てのまんえうしふ」とあるのが即ち醍醐天皇の筆寫の「萬葉集」の意で、かゝる「萬葉集」の寫本が當時存在したものである（「國語國文の研究」和田英松）。これに次いで、小野道風が「萬葉」を筆寫した事が「榮華物語」に、藤原行成の書寫の事が行成の日記なる「權記」に、道長が上東門院に獻ずるため、藤原家經に筆寫せしめた事が仙覺の「萬葉集」の奥書に見える。又藤原清輔の「袋草紙」に、「萬葉集」はもと所在稀であつたが、橘俊綱が法成寺寶藏本を書寫し、後、藤原顯綱も亦書寫してから世間に流布したと記す（武田祐吉氏著「萬葉集書誌考」）。この外にも平安朝から鎌倉初頭にかけて多くの筆寫が行はれた事と思はれるが、何れも知ることを得ない。今日見得る平安朝期の「萬葉集」は、「桂本萬葉集」「金澤本萬葉集」「藍紙本萬葉集」や、下つて「天治本萬葉集」「元曆校本萬葉集」の五つである。その他、鎌倉以降の古寫本・古版本は極めて多い。　（以上森本）

【古寫本】〔桂本萬葉集〕一軸〔名義〕桂宮舊御藏本萬葉集の義。〔形狀〕紫・白・藍・黃・朽葉・茶・草・薄赤の八色の緞色紙に、金銀泥で花鳥草木を描いて、これに「萬葉集」を書寫した縱八寸八分の卷子本である。〔筆者〕四說ある。紀貫之說は桂本の題簽、內箱及び外箱の表に記すところ、源順說はこの本の斷簡を古筆家に於て栂尾切と名づけ、源順の筆と稱へるによる。又「權記」長保三年五月二十八日の條に、緞色紙一卷に「古萬葉」を書寫した記事があるので、藤原行成筆といふ說もあり、宇治鳳凰堂の色紙形の文字と似てゐるので源俊房筆と云ふ說もあるが、何れも確證はない。平安朝中期の能書の筆と云ふに止まる。〔傳來〕原本は、もと前田利家の室芳春院の藏したのを、八條宮、即ち後の桂宮に奉り、明治に至つて帝室の御物となつた。又本書より切り離された斷簡は、「桂萬葉」或は栂尾切と稱して手鑑類に押されて諸家に珍藏せられ、目錄の斷片も亦殘存してゐる。帝室御物の桂本は明治

三十二年に田中伯爵が允許を蒙つて百部を印行し、大正十五年に萬葉緒實の一として複製刊行した。〔解說〕「萬葉集」卷四の古寫本で、もと全卷あつたものが、卷首・中間・卷尾にわたつて取去られた部分があつて、今十六張四百九十三行を殘すのみで、卷四の相聞の歌三百九首の中、百九首だけの零卷となつた。本文は題詞を高く書き、歌を低く書いた。訓は平假字で漢字の次に別提に記したが、短歌には訓なく、餘白を殘してゐるものもあり、長歌には全く訓を附けない。〔價値〕現存の古寫本中最古のもので、料紙・書體の麗はしいことも、「萬葉集」の古寫本中第一に位する。校勘の資料としても價値が多い。

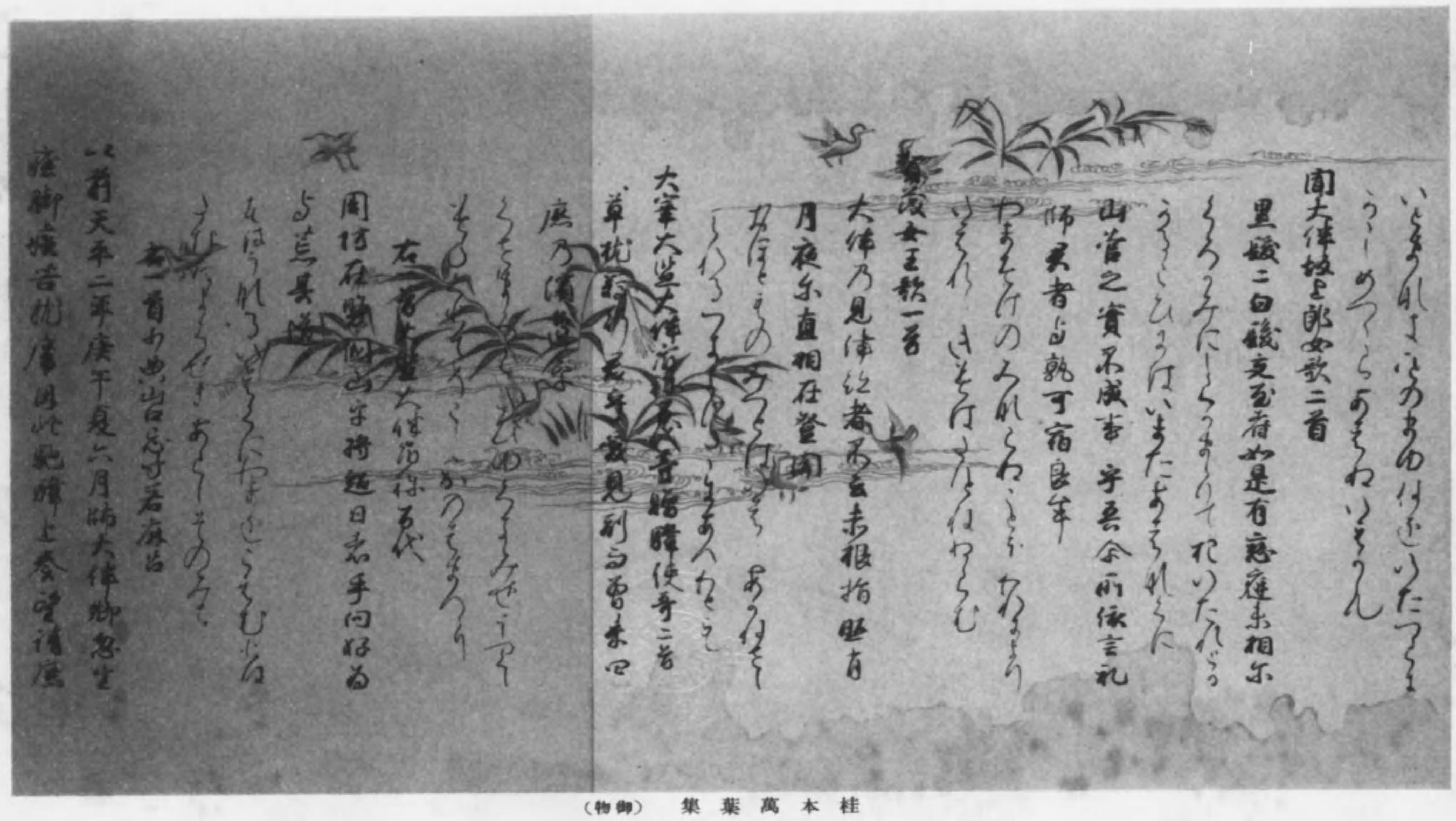

（法成寺寶藏本）—（駿州本）—（忠兼本）—天治本
傳壬生隆祐筆本
（光行本）
（親行本）—（仙覺寛元本）—（仙覺文永二年本）
（行譽本）—神田本（巻第十缺）
神宮文庫本—細井本（巻第四五六を缺く）
（仙覺文永三年本）—西本願寺本（巻第十二を缺く）—田中本—阿野本
（文永十年本）—（類聚本）—温故堂本—東京帝國大學本
（寂印成俊本）—大矢本
京都帝國大學本
谷森本—谷森氏一本（巻第十以後）
多和文庫本
神宮文庫本（巻第四五六を缺く）—細井本—林道春校本—活字無訓本—活字附訓本
（冷泉本）（巻第一五六）
今出河本（巻第四五六を缺く）
活字附訓本—寛永版本—寛永版本
（ ）は現存せざるもの。右の諸本のうち主要のものは別項に解說す。

【金澤本萬葉集】〔名義〕本書の斷簡を古筆家は金澤切と云つたので、かく名づける。それは金澤前田家にあつた故か、或はその以前金澤文庫にあつた故か、明かでない。〔形狀〕から紙、又から紙に切箔を散らし、これに「萬葉集」を書寫した縱七寸一分、横四寸四分の粘葉裝。〔筆者〕箱の表に記した所、又「古筆名葉集」によるも、古く源俊頼筆と傳へたらしく、又その斷片を藤原公任筆とも云つたが、近く田中親美氏の說に、藤原定信の筆であると云ふ。〔諸本〕御物本は、もと前田家に所藏されてゐたが、明治四十三年明治天皇が同邸に行幸された際獻上したものである。他に前田家には卷三と卷六との斷簡八枚が殘り、合せて一帖としてある。大正十三年に萬葉緒實の一として複製刊行せられた。〔解說〕御物本「金澤萬葉集」は、卷二の大部分（五十八枚）と卷四の小部分（二十枚）との零卷を合綴して一帖とした。一頁七行又は八行、題詞を低く歌を高く書き、訓は漢字の次に平假名で別提に記し、訓を附けない歌もある。目錄は卷二の外、卷三・六にも存してゐる。〔價値〕平安時代の古寫本の現存する五本の一であり、藍紙本について第三位の古さを占める。料紙も文字もうるはしいが、又「萬葉集」校勘上に有力の資料である。

【藍紙本萬葉集】〔名稱〕料紙に基づく。〔形狀〕銀砂子をまばらに散らした薄藍漉紙を用ひ、天地に罫界あり、これに「萬葉集」を書寫せしもの。縱八寸五分の卷子本。〔筆者〕「古筆名葉集」その他古筆家の說によると、古く藤原公任筆と云ひ傳へたが信じられぬ。近く田中親美氏の說に、藤原伊房の筆であらうといふ。〔諸本〕第九卷の大部分は、古く會津松平家に傳へられたのを、後、田中光顯伯の手より原富太郎氏の藏となつた。但しその斷簡は諸家の藏する所となつてゐる。又卷十八の斷簡も諸家に藏せられてゐる。卷十の斷簡は竹柏園にある。明治四十三年に田中親美氏が卷九・十八を集め、二卷として印行した。又大日本歌道獎勵會からこの本の一部を「二體萬葉集」と題して印行した。〔解說〕卷九の殆ど全部と、卷十・十八の斷片が殘存してゐる。題詞を低く歌を高く書き、訓は平假字で漢字の次に別提し、訓のない歌もある。卷九には目錄も存する。「元曆校本萬葉集」（後出）の本文と同系統の本と思はれる。〔價値〕桂本について最も古い「萬葉集」の古寫本であり、その書風は遒勁で、平安朝の五種の「萬葉集」の中の、他の四本は優雅で、寧ろ「古今集」以後の温雅なる歌を書くのにふさはしいが、本書は「萬葉集」の雄健なる歌を記すに適した書風である。校勘上にも益する所がある。

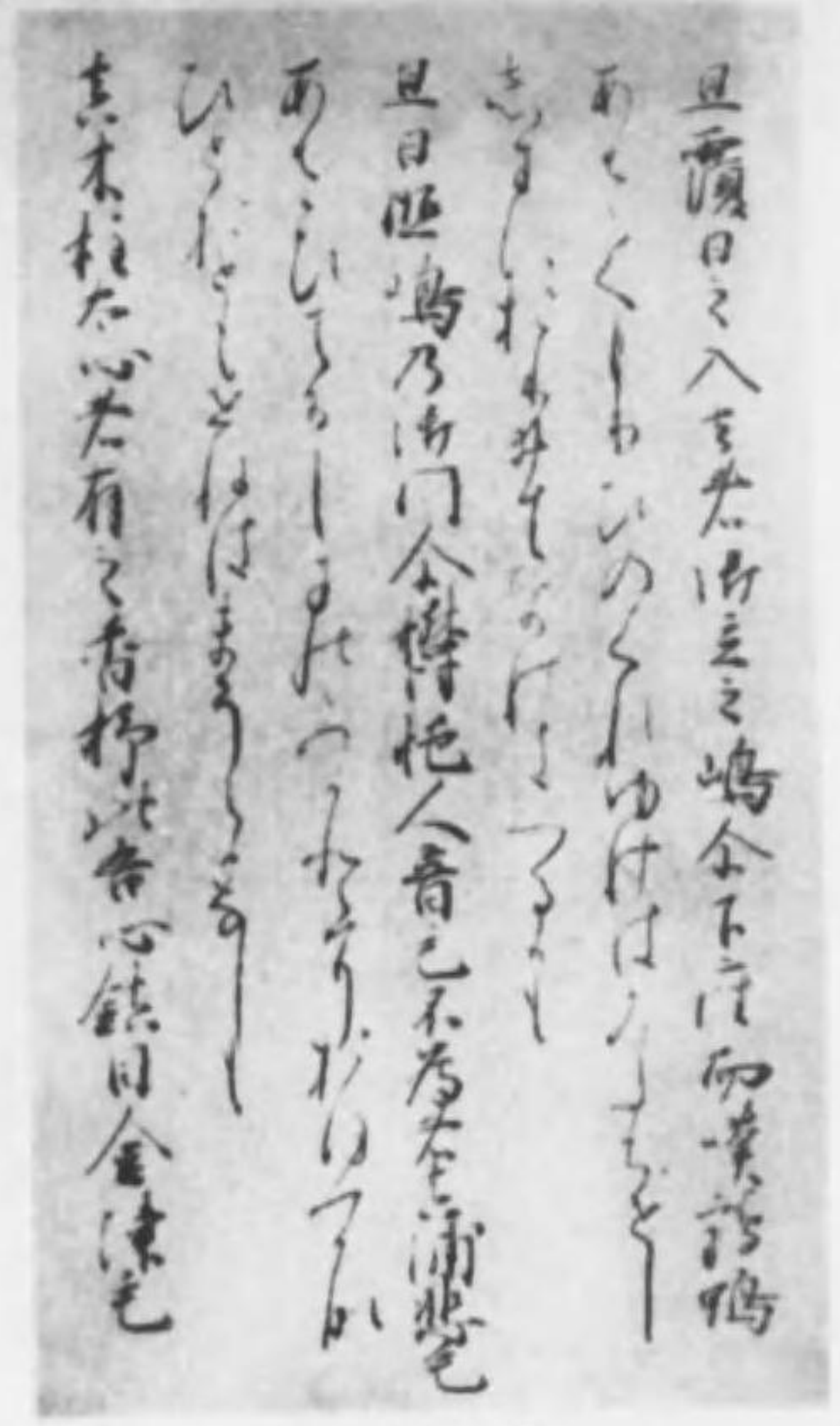
【天治本萬葉集】〔名義〕天治元年の書寫なるに由る。〔形狀〕卷十三は縱九寸二分、横一尺八寸四分の仙花紙に罫界を引いて書寫した卷子本。罫は一紙二十八行で、天地の界線の外中央より上にも一つ横線がある。〔筆者〕本書の斷簡を仁和寺切と稱し、古筆家は御子左忠家筆としてゐるが、年代合はず誤りである。又卷十三には筆者を藤原基俊といふ古筆家の極めがついてゐるが確かでない。卷により筆者を異にするが、卷十四と十五とは一筆のやうである。〔諸本〕卷十三は京都福井貞明氏所藏、明治初年京都下村氏の寶立より求めたものと云ふ。本書の斷簡を仁和寺切と稱するのは、もと御室にあつた故であらう。卷十三の全卷は大正十五年に萬葉緒實の一として複製刊行せられた。〔解說〕卷十三は全部完全に傳存してゐる。題詞を低く歌を高く書き、訓は漢字の次に平假字で別提し、罫一行に訓一行づつ記してある。但し訓を附けない歌が多く、長歌にはすべて訓を附けないが、稀に片假字で右傍に訓を附した歌がある。卷十三の完本の外、卷二・十・十四・十五の斷簡も殘存してゐる。就中卷十の斷簡が最も多い。これ等は、罫一行に訓を小さく二行に記したものが多い。又片假字で別提した所もある。目錄はない。卷二は大治四年（天治元年）二月二十六日、卷十三は天治元年六月二十五日、卷十四は同年八月一日、卷十五は同年八月八日に白川房（善勝寺）で書寫し終つた。肥後前司忠兼の本によつて書寫し、江家本・李部本・榮圓御本・中務大輔本等で校合したものである。また讃州本（藤原顯輔本）と校合した所もある。〔價値〕書寫年代の明かなる「萬葉集」の古寫本中最古のものであり、平安朝の古鈔本五種の一である。殊に仙覺本の祖なる忠兼本に最も近き本として、仙覺本の祖本の面目を見ることの出來る唯一の本である。校勘上にも有益の資料で、取るべき所が少くない。

【元曆校本萬葉集】十五卷〔名稱〕元曆元年に校合した本の謂ひで、「元曆萬葉集」とも云ふ。〔形狀〕紫藍の飛雲形のある鳥の子紙を用ひて、四邊に罫界を施した縱八寸二分五厘、横五寸七分の粘葉裝の本（但し今は裝幀で離して

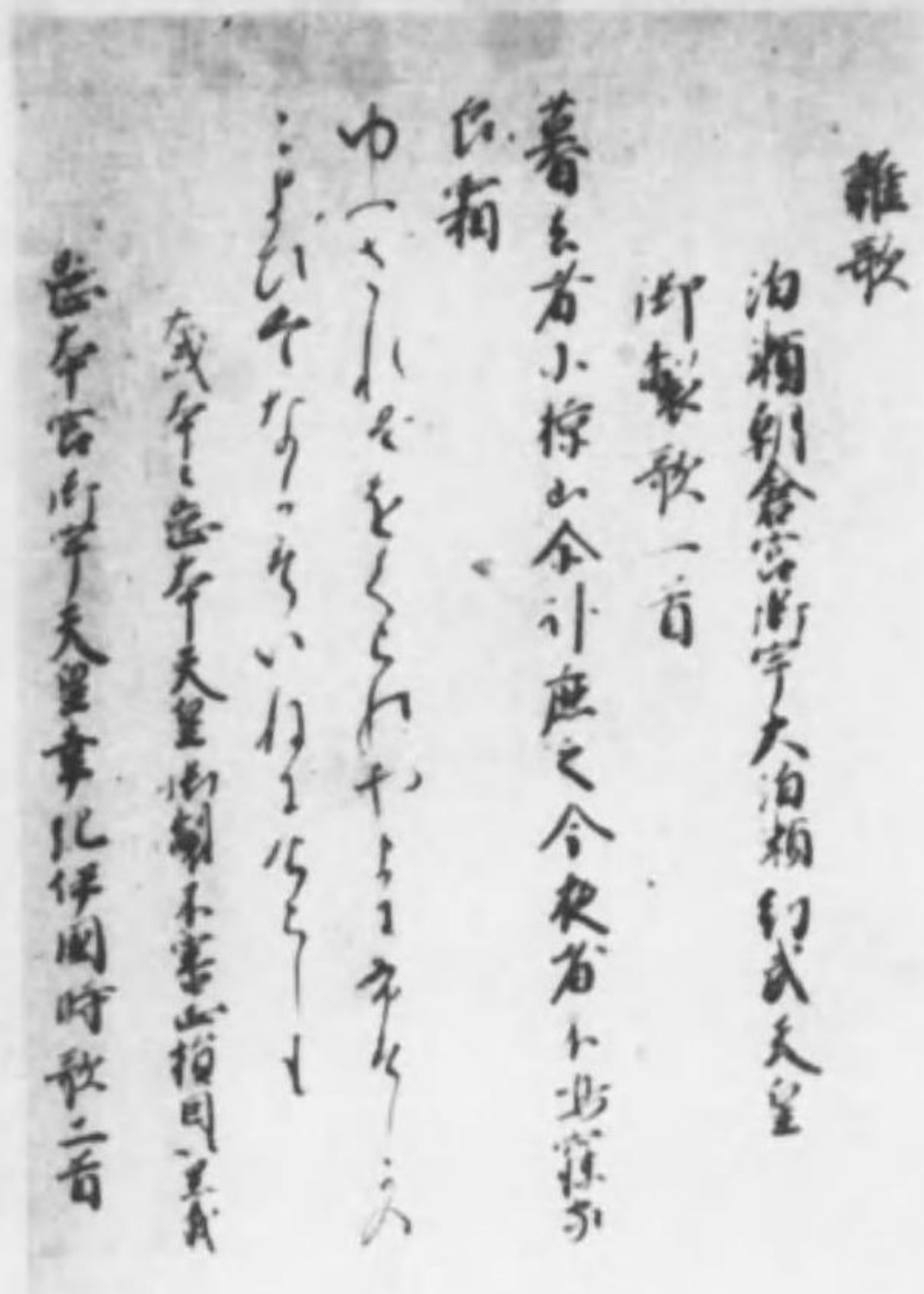


桂本萬葉集（御物）

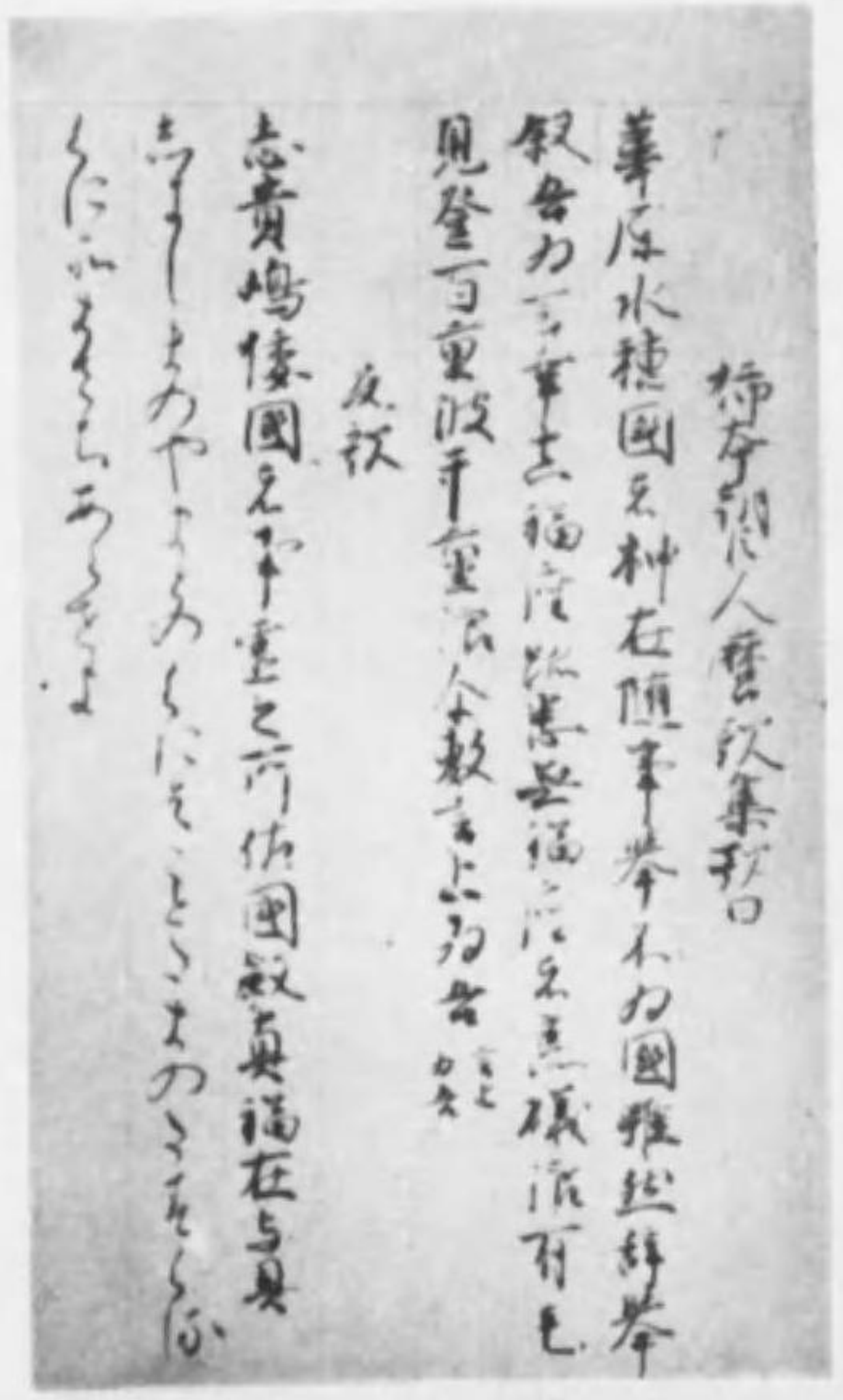
萬葉集 一



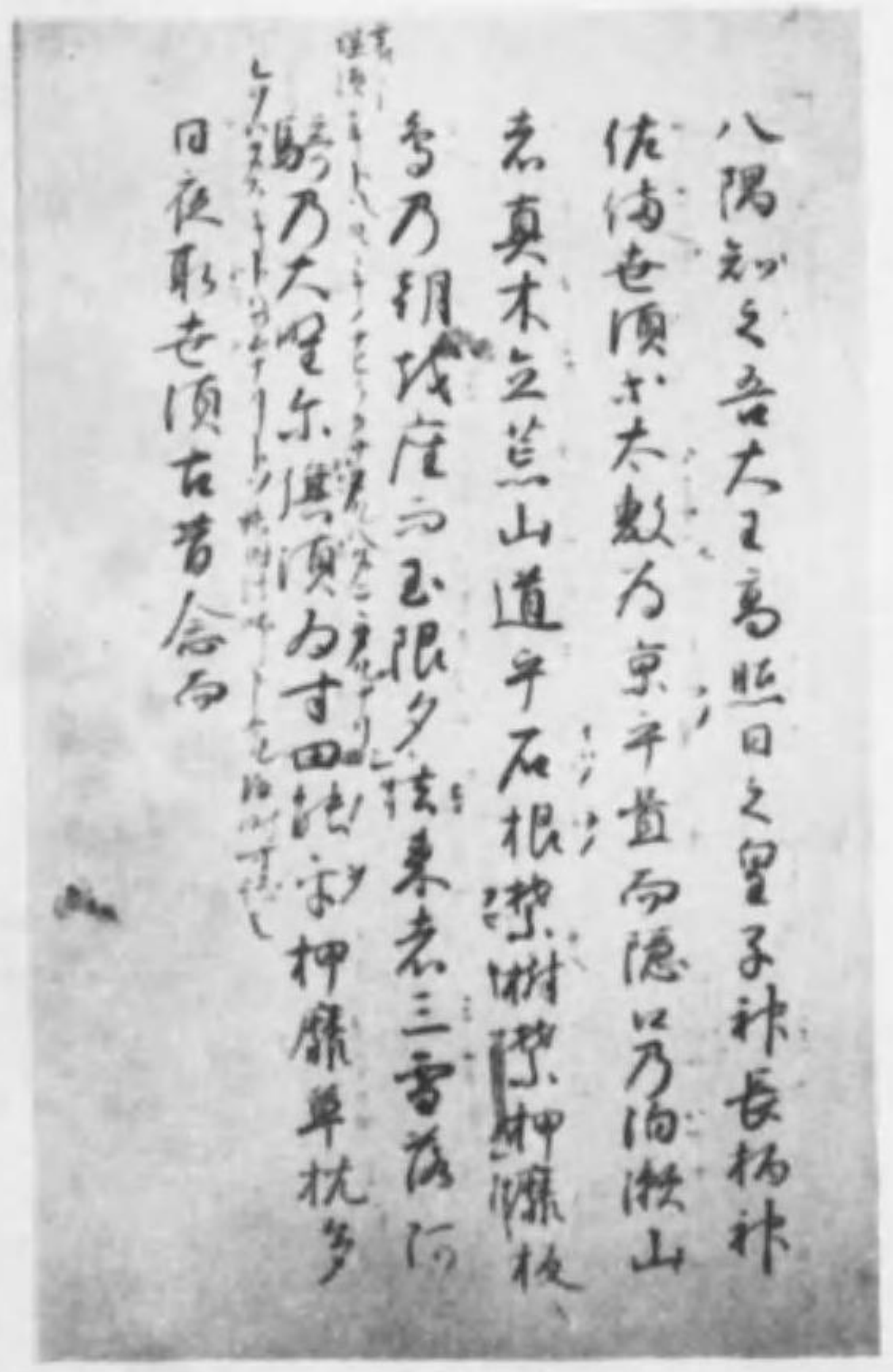
金澤本



藍紙本

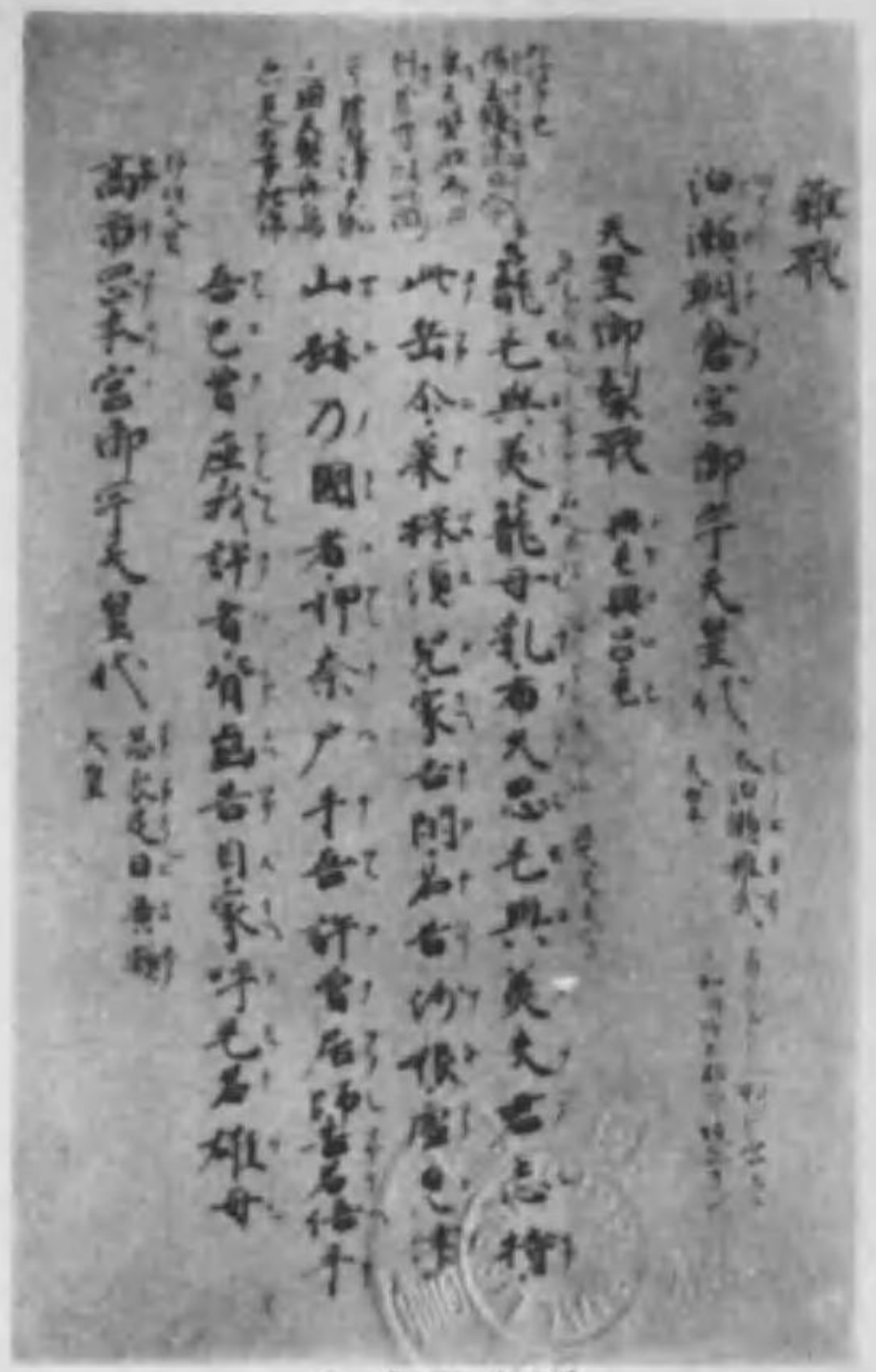


天治本

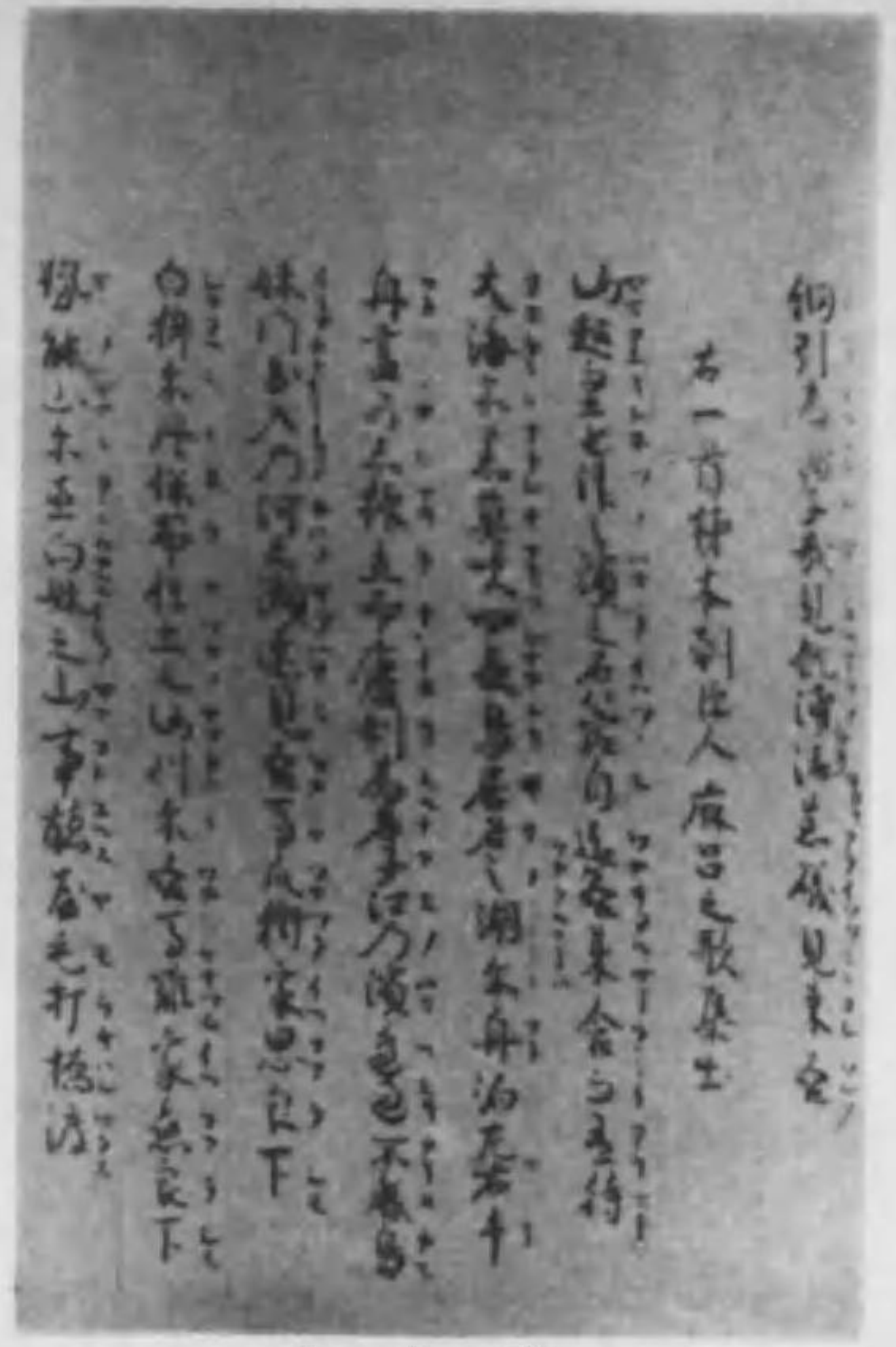


天暦校本

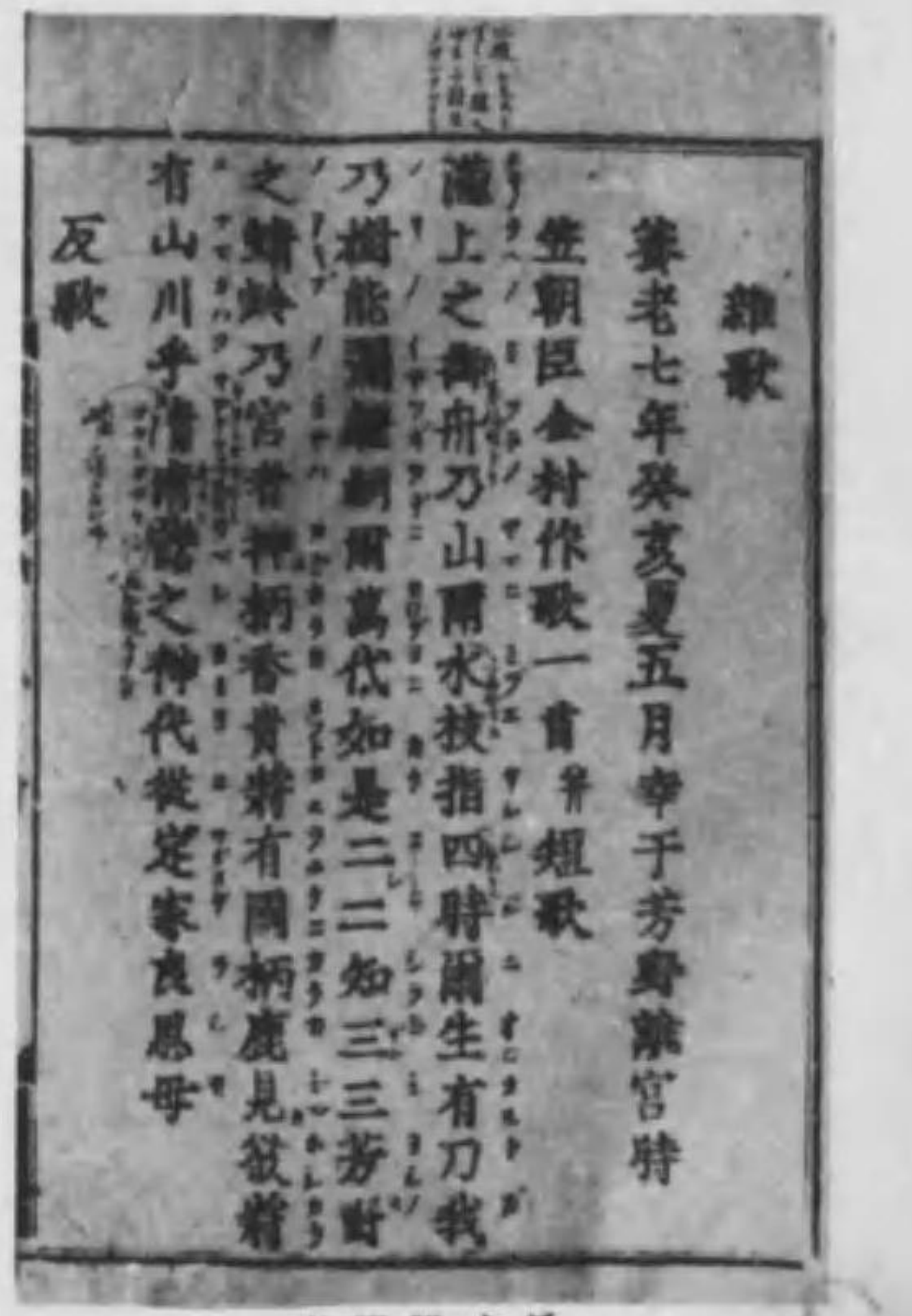
萬葉集 二



西本願寺本

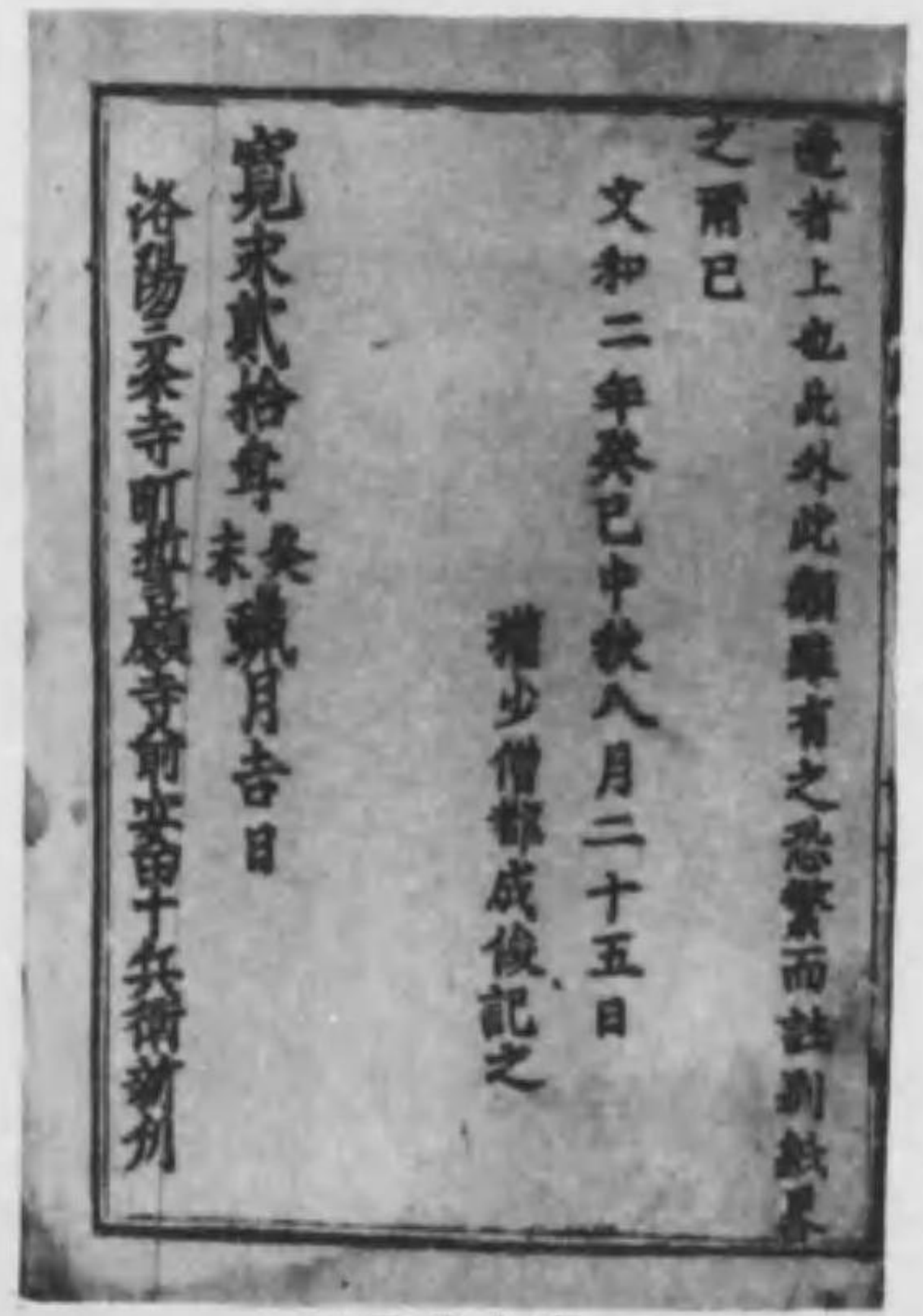


大矢本



雜歌
養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時
笠朝臣金村作歌一首并短歌
瀧上之御舟乃山爾水枝指四時爾生有刀我
乃樹能彌繼嗣爾萬代如是二二知三三芳野
之蜻蛉乃宮者神柄香貴將有國柄鹿見欲將
有山川乎清清之神代從定家良思母
反歌

活字附訓本



竟者上也此外此類雖有之恐繁而註別紙畢
之爾已
文和二年癸巳中秋八月二十五日
權少僧都成俊記之
寛永貳拾年（癸未）蠟月吉日
洛陽三條寺町誓願寺前安田十兵衛新刊

寛永整版本

ある。又卷六だけは後の補足本で形狀異なる）。〔筆者〕卷二十の奥に、「元曆元年六月九日以或人校合了　右近權少將（花押）」とあるから、書寫年代は元曆以前に溯られるが、筆者は未詳で、ただ元曆以前の同時代の能書の寄合書と云ふに止まる。右奥書の右近權少將は藤原親能のことであらうか（刊本賴政家集の奥書に「元曆元年七月十二日（中略）右近權少將親能」と見える人も同人であらう）。古河家所藏本に添ふた神田道伴の極書によれば、卷一・二は行成、四・十・十八は俊頼、六は寂蓮、七・九・十七・十九は公任、十二・十三・二十は宗尊親王、十四は光俊とし、高松宮家御藏本に添ふた極書には卷一は行成、四は定頼、六は寂蓮、十は公任、十二・十九は筆不知とし、別に貼紙して十二を俊頼としたが、何れも信ずる事が出來ない。ただ十七・十八は同筆と思はれ、その卷十八の終に二位とあるのによれば、當時二位の人の筆であらうか。卷六だけは鎌倉時代の書寫本と思はれる。〔傳來〕高松宮家に卷一・四・六・十・十二・十九の六卷の中二百二十頁あり、古河男爵家には、卷一・二・四・六・七・九・十・十二・十三・十四・十七・十八・十九・二十の十四卷のうち千五百七十六頁存し、以上の卷及び卷十一の斷簡は、その他の諸家の手鑑に押され、又掛物となつて存してゐる。但しこれ等のものを全部集めても、やはり各卷共に完備しない。右の中、古河家所藏本の十四册は、もと十五册あつたのが、後卷十一だけ散逸して享保三年九月下旬神田道伴が筆者を鑑定した際には十四册となつた。もと伊勢松坂中川常宇の所藏で、元祿十一年より寶永六年の間に、常宇の師清水谷實業を經て靈元上皇の叡覽に供した。後同國射和の富山與惣兵衞の家に藏せられ、明和二年の頃荒木田久老が校合して學界に知られるに至つた。翌三年賀茂眞淵は本居宣長に、久老に手傳つて早く江戶へ校本が下るやうにと云ふ書狀を送つてゐる。かくてこの校合した本が江戶へ下つたので、寛政三年に橘千蔭がその所藏本に校合して「萬葉集略解」に引用した。明和三年にはこの本を京都に送り、遂に富山氏の親戚なる神戶の俵屋久左衞門の藏となつた。寛政十一年の春に再び荒木田久老は橋本經亮と共に俵屋で校合した。元曆校本の斷簡を世に難波切と云ふのは、神戶にあつたが故の名稱であらう。文化元年に和學講談所で、人を遣はして全十四册を摸寫せしめた。かくて弘化年中に、卷一・二の兩册を同所で開板して世に頒ち、卷七をも刻したが、これは見本刷を作つたのみである。今日この三册は舊版木を用ひた再刷本が世に出てゐる。なほそれ以前、早く「伺古法帖」に所々抄摹したものが入り、文政三年の「集古浪華帖」には假名の一部を載せ、同六年には「慶賀石室の摹せる卷二の一部が刊行されたが、全卷の刊行は未だ見ない。文化六年には松平定信が和學講談所の摸本を手寫し、文政の末年に屋代弘賢がこの原本を贖はうとしたが力及ばず、卷一・二の筆者の異なる事を記した「元曆萬葉集考」を草して止んだ。その薦めで定信の後嗣なる桑名松平家に入り、天保十四年六月、松平家より老中水野忠邦に贈られ、安政二年には、水野家よりその親戚なる小濱酒井家に預けられたが、明治三年に水野家に還つた。明治四十四年に至り、水野家より古河男爵家の有に歸して、翌四十五年七月には明治天皇の天覽に供し、大正七年七月に玻璃版に附し、五十部を印行して諸家に頒つた。高松宮家（舊有栖川宮家）御藏の六册については、その傳來が明かでない。もと卷一・四・十の三册だけであつたのを、後、卷六・十二・十九の三册が追加せられたものらしい。大正十四年に、この本を影印して頒布した。更に昭和三年より四年にかけて、「王府本」「古河本」を初め、諸家に藏せる斷簡をも集めて、全十五卷が複製刊行せられた。〔解説〕もと全部二十卷あつたのであらうが、今は卷一・二・四・六・七・九・十・十二・十三・十四・十七・十八・十九・二十の十四册及び十一の斷簡が存するのみで、而も何れも脱丁があつて全き卷は存しない。題詞を低く歌を高く書き、訓は本文の次に平假字で別提してある。長歌には訓なく、短歌にも訓なきものがある（訓の假字遣の誤るものがあり、短歌の訓なきものには、餘白を殘してゐる）。各卷に目錄を存するが、ただ卷十七・十八・十九・二十の四卷には目錄のないのが、この本の特色である（但し卷二十だけは、目錄が補足してある）。この本文は「藍紙本萬葉集」と同系統の本と思はれる。墨・朱・代赭・綠などの書入があつて誤字を訂し、脱漏を補ひ他本との異を註し、又裏書などを書き加へた。卷二十の奥に、「巳年十一月廿日校合記」とあるが、その巳年は何年か明かでない。これ等の書入は、書寫當時、筆者自身の施したものもあるが、書寫後も數回、時を異にして行はれたと見え、同じ墨でも新古の差異がある。鮮かな朱の書入が最も古く、主として卷一に存し、或本・御本（宇治殿御本即ち藤原賴通本の事か）・禮部本（藤原通俊本の事か）などを以て校し、長歌に訓を附し、地名・人名等に頭註を加へた。これに次いでは漆黑な墨の書入が古く、主に卷一に裏書の文を書き入れた。これ等は書寫と同時代の書入と認められる。次に卷四以下に存する濃い墨の書入も古い。代赭の書入は卷六の卷初の部分は綠色であるが、後、代赭にかへてゐる。この書入は最も詳細で、全卷に亙り、他本と校合して本文を訂し、補ひ、訓を加へ、殊に長歌の訓は原寫本にないのを、代赭で加へたものが大部分である。この代赭の部分の原本は片假字本と思はれ、「神田本萬葉集」（後出）と同一系統の本である。而して卷六の補足本は、この代赭の書入と同時に同人が書寫したものと思はれる。次に別の墨の書入があり、全部に委しい校合を施してゐる。これは南北朝以後のものであらう。その他朱書にも數種があり、中には仙覺の新點を朱書せるが如き、新しいものもある。稀に附箋があり、皆墨書で記し、中には代赭で傍訓を附せるが如き甚だ古いものもある。〔價値〕平安時代の「萬葉集」の古鈔本五種の一であり、且つその古鈔本五種のうち、本書はその古さに於ては第五に列するが、他の寫本が零本より殘らざるに對し、この寫本は十五卷に亙つて殘存し、完備に近いことは校勘上最も價値を有してゐる。のみならず數多の校合書入があるから、それによつて他の平安時代の古寫本の面影も察することが出來、古訓をも知る事が出來るから、「萬葉集」の研究上寄與するところ甚大である。この寫本によつて、「萬葉集」の本文を是正し得るところが少くない。

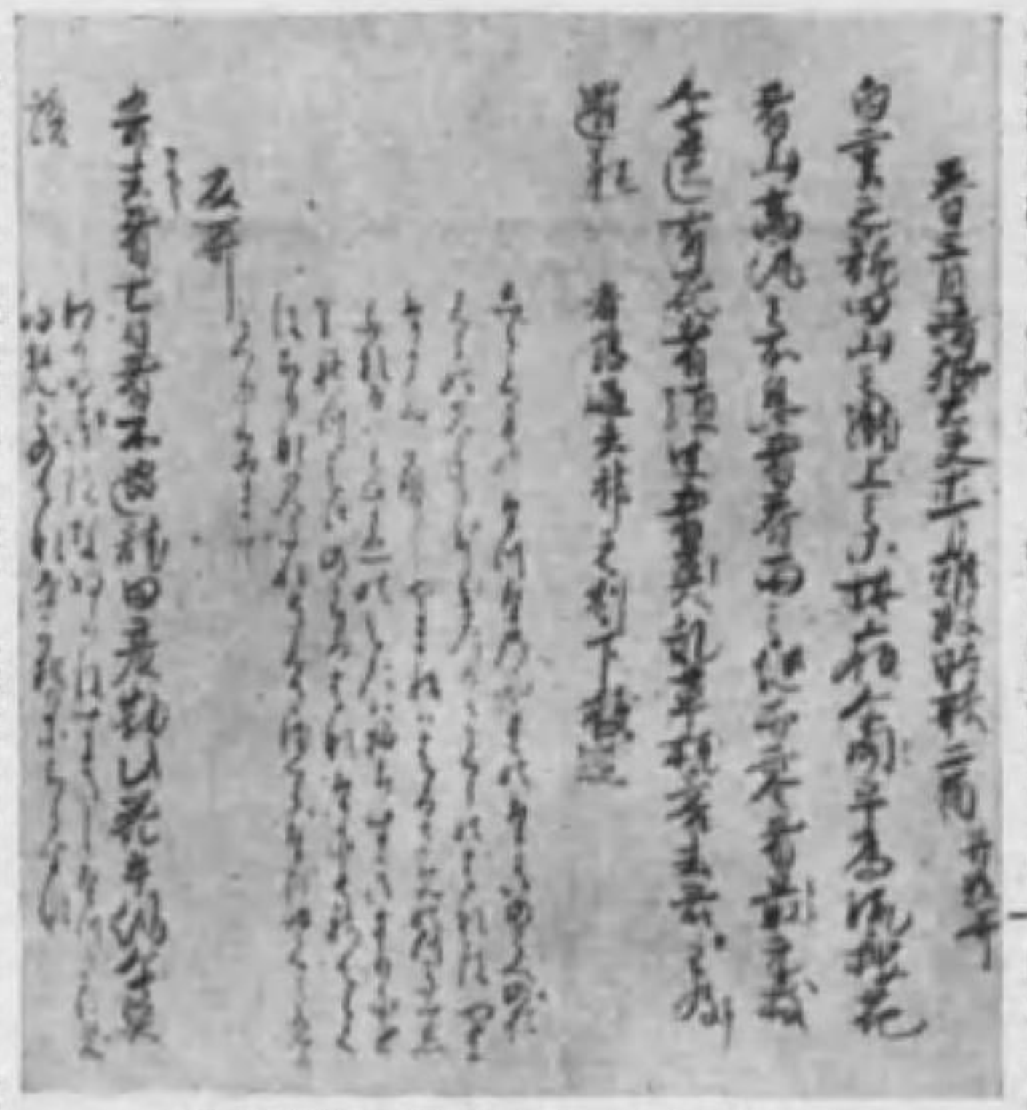
【西本願寺藏本萬葉集】二十册〔形狀〕縱一尺六分、橫八寸二分の大形鳥の子本で、一紙兩面に記してゐる。藍色表紙を用ひ胡蝶裝大和綴。〔筆者〕卷一より卷十まで一筆、十一より十六まで一筆、十七より二十まで一筆、十二の一卷一筆で、四人の筆に成る。卷十二の

みやゝ古く、他の三筆これに少し遅れ、鎌倉時代後期の筆である。〔傳來〕もと西本願寺の所藏で、後、出でて高田相川氏の有に歸し、今は竹柏園所藏となる。又本書の轉寫本に田中勘兵衞氏所藏本、水戸彰考館所藏の「阿野本萬葉集」等がある。阿野本は延寶五年の書寫で、四點「萬葉集」の材料となり、また契沖の「萬葉代匠記」に、阿野本はもと細川幽齋の藏本であるからとて、幽齋本として校訂に用ひてゐる本である。〔解說〕卷十二を除く十九卷は、題詞を高く歌を低く書き、訓は墨・朱・紺青の三色に分つて本文の右に片假字で傍書した。卷一の奧には本文と別筆で、又卷二十の奧には本文と同筆の、仙覺の文永三年八月の奧書がある。これによつて仙覺の文永三年本の系統を引くものと思はれる。卷一の仙覺の奧書の筆者は全部にわたつて校合書き入れを加へてゐる。これは本文當時のものではないらしいが、かなり古いものであらう。その他、全部にわたつて貼紙があり、墨又は朱で校合を加へた。その中には「仙覺抄」や「目安」を引いてゐる。これは室町時代のものと思はれる。又本文の歌には朱で合點を附したものがあり、長歌の上に朱の星符を附け、旋頭歌の上に紺青の星符を附けてゐる。これ等は何れも素より存してゐたものである。なほ題詞・左註には、往々ヲコト點を附してある。卷十二のみは仙覺本でなく、形式も異つてゐる。題詞を低く歌を高く書いた。卷末に奧書があり、仙覺本の奧書に見える文章と似てゐる。朱・墨・青等數種の筆で多くの書入があるが、これは大概仙覺本によつて錄されたものである。〔價値〕仙覺の文永本の原本の趣が最も明かに見られる點に、この本の價値がある。文永本では、(一)題詞を高く歌を低く書いた。(二)卷二十の目錄に、諸國防人の名を擧げない。(三)訓は漢字の傍に附し、從來の訓に從つたものは墨書し、從來の訓を訂正したものは紺青で記し、從來無かつた訓を補つたものは朱書した。(四)古點の歌には符なく、源順以後の次點の歌には朱で合點を附し、長歌の上には朱の星符を附し、旋頭歌の上には青の星符を附した。これ等の特徵があり、本書によつてその原本の樣式が窺はれると共に、古點・次點・新點の別を明かにすることが出來るのは、「萬葉集」研究史上多大の價値を有する點である。

【神田本萬葉集】二十册〔名稱〕神田男爵家の所藏本であるからかくいふ。〔形狀〕縱七寸一分餘、横四寸八分餘の小本で、鳥の子紙を用ひ、一紙兩面に書いてある。〔筆者〕各册の包紙に記す所によれば、表紙は何れも智仁親王筆で、本文は卷一後鳥羽院、卷二關白兼實、卷三・五・六・七・九・十は藤原清輔、卷四內大臣通親、卷八鴨長明、卷十一・十八・十九大納言永緣、卷十二大納言伺顯、卷十三大納言資仲、卷十四・十五良經大僧正、卷十六良賀、卷十七左大臣敎季、卷二十參議時顯筆となつてゐるが信じられぬ。但し清輔筆と云ふ六卷は同筆と認められるが、この筆者の如く鎌倉初期の寫本ではなく、卷一より卷十までは鎌倉時代末の寫本、卷十一以下は足利時代末期の寫本と認められる。〔傳本〕もと紀州德川家に傳へられた本で、後、松田資生を經て神田氏に入つた。故にこの本の事を一に紀本とも云つたと思はれる。而してこの紀州本は、既に四點萬葉集・代匠記・校異本に引いてゐるところで、殆ど全部神田本と一致するが、ただ「釋萬葉集」に引ける紀州本のみは、神田本と大半一致しない。〔解說〕前後各十册づつの二部に分たれるが、各卷とも目錄があり、題詞を低く歌を高く書き、訓は漢字の傍に片假字で書き、まゝ朱訓のあることが共通の特色である。卷一の奧には、嵯峨天皇の御製と傳へる「古萬葉集」の序文を附してゐる。卷十の奧には、この本は肥後大進忠兼本を以て書寫し云々の記事があり（大矢本萬葉集參照）、次に建保七年閏二月二十五日に鎌倉で光行の本を借りて書寫したと云ふ行遍の奧書がある。これによれば、この本の前十卷は忠兼本を寫し傳へた光行本の末流であらうか。但し多少の疑ひが存する。而して「元暦校本萬葉集」の代赭の書入とこの本とは、同一系統の本と思はれる。仙覺以前の本の傳本で、それに仙覺本を以て校合を加へたものである。仙覺本の訓は左傍に附してある。また所々に朱の書入がある。後十卷は仙覺本を以て補足したのであるが、形式に紊れたところがある。又卷二十の仙覺の奧書は、他本が文永三年八月二十三日となつてゐるのに、この本のみ九月二十三日となつてゐる。〔價値〕前十卷が、仙覺以前本の一傳本として、かく多數の卷を存してゐることは、「元暦校本萬葉集」を除いて稀有であり、随つて本文校訂の上に多大の價値を有してゐる。

【大矢本萬葉集】二十册〔形狀〕縱九寸五分、横七寸二分、淡靑色表紙袋綴の册子。〔筆者〕卷一・二・三・十七の四卷、四・五の二卷、十一・十二・十五の三卷、十六・二十の二卷は各一筆で、その他の諸卷は何れも別筆と思はれる。室町時代末期頃の寫本であらう。〔傳本〕大矢透博士の舊藏本であつたが、大正七年竹柏園の所藏となつた。また寂印成俊本には、近衞公爵家の所藏にして、現に京都帝國大學附屬圖書館で保管する本があり、その他の寫本もあるが、他本の校合の入つてゐる本、新寫本、不完全な本が多い。〔解說〕各卷に目錄があり、題詞を高く歌を低く書き、訓は漢字の右傍に片假字で附け、訓の中には朱書及びまゝ青書したところがある。朱を以て次點を示す合點、かへり點、長歌の句讀等を施し、まゝヲコト點を附した。また長歌の上には朱の星符を附し、旋頭歌の上には青の星符を附した。これ等は何れも仙覺の文永本の趣を傳へてゐる（西本願寺藏本萬葉集參照）。卷一の奧には、文永十年八月八日鎌倉で書寫し畢つたと云ふ奧書があり、その次に文永三年八月十八日の仙覺の長文の奧書があり、卷二十の奧には、文永三年八月二十三日の仙覺の奧書があり、その次に應長元年十月二十五日の桑門寂印の奧書、文和二年八月二十五日の成俊の奧書がある。卽ちこの本は仙覺の文永三年本の系統を引くもので、文永十年の轉寫本であり、寂印及び成俊が更に書き傳へた本であるから、この系統の本を寂印成俊本と名づける。〔價値〕世に流布せる版本は、寂印成俊本を校合に用ひた本で、訓もこれによつて附したものである。而して本書はその寂印成俊本の古寫本として原形を窺ふに最もよく、萬葉研究史上に貴重なる材料を提供せるものといふべきである。例へば「通行本萬葉集」卷七羈旅歌中の「木綿之狹日鹿之浦爾」以下の十四首と、「妹爾戀余越去者」以下十五首との順序の錯亂は、この本も亦通行本に等しいが、初めの十四首と次の十五首とは、各々その一丁に相當してをるので、かの錯簡はこの二丁の順序を誤つたことより起つたものである事が知られる。その他この本の訓が通行本の訓と一致するもの多く、その誤までも一致してゐる類は、かの活字無訓本を改めて通行本の原本なる活字附訓本を作る時、この大矢本と同系の本とを以て改訂を加へたことを證する。從つてこの大矢本は通行本の源流を究める上に缺くべからざるものである。〔附記〕（中院本）寂印成俊本中の一系で、寂印成俊本に禁裏御本等を以て校合を加へた本をいふ。その中の一本なる京都帝國大學藏本には、慶長十二年の中院通勝の奧書、卷十三には慶長十一年の船橋秀賢の奧書があり、又卷一には冷泉爲滿筆と云ふ良恕法親王の奧書、卷二十には中院通村筆と云ふ良恕法親王の奧書のある本で、これに代赭を以て禁裏御本で校合を加へてある。禁裏御本は、永和元年十一月の由阿の奧書、應永二十三年及び同二十五年の前上總介源範政の奧書があり、同じく仙覺の文永本の系統に屬する本である。次にこの寂印成俊本の初めの方には藍色の記事があり、卷一の奧には「古萬葉集」の序もある。これ等は、「神田本萬葉集」によつて書き加へたものと思はれる。以上の如く、寂印成俊本に、禁裏御本及び「神田本萬葉集」の系統の本で校合を加へた本は、京都帝國大學、谷森健男氏、多和文庫、前田侯爵家所藏の傳智性法親王筆本、岩崎文庫所藏木村正辭博士舊藏本、竹柏園所藏野宮定基筆本、宮內省圖書寮藏本等がある。また水戸彰考館文庫には、寛永版本にこの「中院本萬葉集」で校合を加へた校本がある。中院本は、もと八條宮智仁親王の御藏本で、中院通茂の相傳した本と云ふ。契沖の「萬葉代匠記」には、この水戸家の校本によつて、官本と稱して引用してゐる。「萬葉集書目提要」にも、官本又は中院本、又は由阿本として掲げてある。

【春日本萬葉集】（一名、春日懷紙裏切萬葉集）〔解說〕春日神社若宮の神主中臣祐定（後、改めて祐茂）が、歌會の懷紙の裏をかへして袋綴の册子とし、「萬葉集」を書寫したものである。但し後にその册子を解いて、歌の書いてあるもとの面を表とし、裏面の「萬葉集」の文字を極力削り去つて裏打を施した爲め（中には掛物とし、又手鑑に貼つてあるものもある）、「萬葉集」の文字は極めて僅に存し、微かに見ゆるもののみで、初めは「萬葉集」の筆者も、書寫の年月も分らず、ただ懷紙に中臣祐某の名のあるによつて、大凡の年代の知らるゝのみであつたが、昭和四年五月、金澤市松岡三次氏所藏の分に、「萬葉集」の面を削らざる數葉と、卷六と卷二十の卷尾を白紙に書いた二葉が發見された。卽ち卷六の卷尾には、「寛元元年八月八日書寫之 祐定」、卷二十卷尾には、「寛元二年三月九日書寫之 祐定」とある。而して松岡氏・關戸守彥氏及び竹柏園所藏等の他の殘簡を調査して、この本が卷五・六・七・八・九・十・十三・十四・十七・二十の諸卷に亙つて書寫せられ、恐らくは、もとは全本であつた事、祐定が寛元二年三月迄に寫し終へたものである事等を明かにされた。この本は、本文を一行に、半面九行に書き、訓は片假字で右傍に附し、まゝ訓のない歌もある。題詞を低く、歌を高く書き、卷五・六の如きは、目錄の部分も存してゐる。昭和五年四月、「春日本萬葉集」殘簡と題し、摺本として印行した。それには卷六の目錄、その裏面の懷紙、卷六の卷尾、卷七の錯簡の部分の正しき證となるもの、その裏面の懷紙、卷二十の卷首、その裏面の懷紙、卷二十の卷尾の八葉を收め、佐佐木信綱の解說を附した。

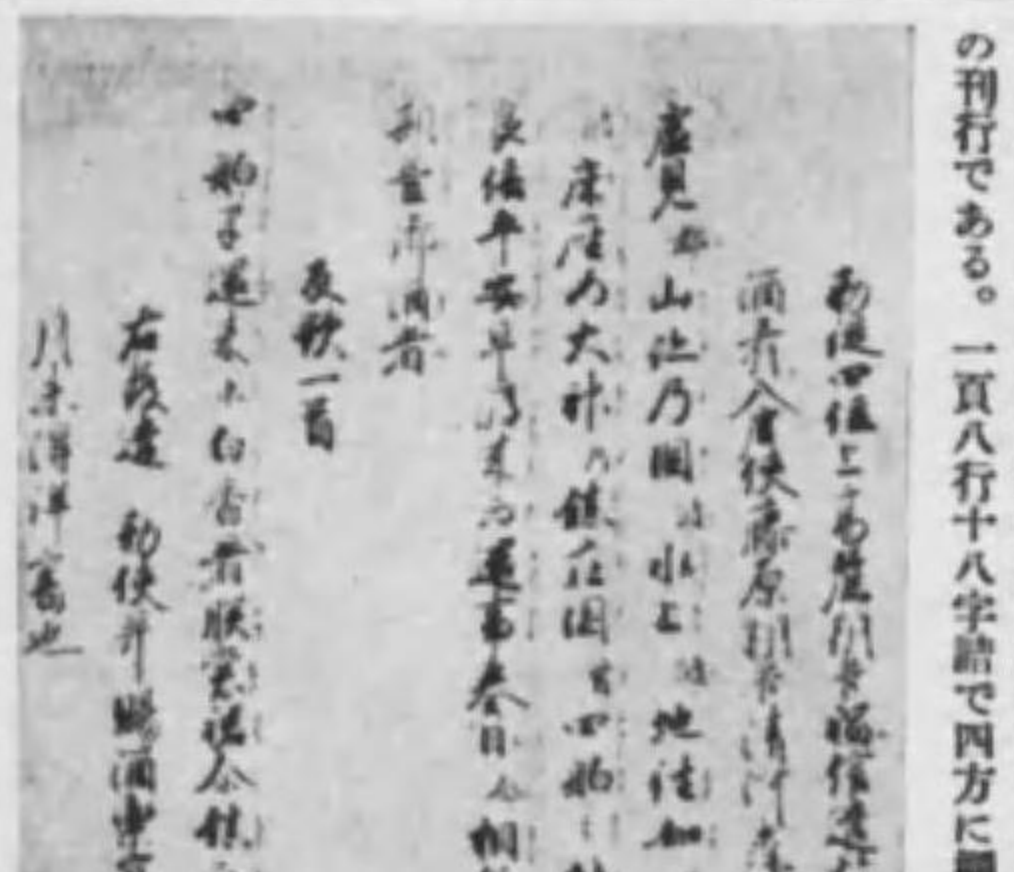

傳壬生隆祐筆本萬葉集（竹柏園藏）

【萬葉集古筆】橋本經亮がその寓目した「萬葉集」の古筆類を影寫したもので、稻葉市郎右衞門氏の所藏、現に京都帝國大學附屬圖書館の保管する所となつてゐる。その古筆中には、桂本・藍紙本・元暦校本等十數葉あり、中には摸寫より轉寫したものもある。この中に、春日社司祐春筆としたものがあり、卷十九・二十にわたつて數葉が存し、その樣式寸法等、全く「春日本萬葉集」の一部と思はれる。而も祐春筆とあるは傳への誤りで、上述の如く、祐春の祖父祐定の筆蹟である。

【活字附訓本萬葉集】二十册〔解說〕一頁八行十八字詰、欄界がある。各卷目錄があり、題詞を低く歌を高くしてある。卷一に文永十年及び文永三年の仙覺の奧書があり、卷二十には文永三年の仙覺の奧書、應長元年の寂印の奧書、文和二年の成俊の奧書がある。漢字も片假字の傍訓も、共に木版活字で印行したものである。この本は今日殘存せる本が稀少である。〔系統〕「活字無訓本萬葉集」（後出）を底本として、寂印成俊本の一傳本によつて校合を加へ、更に傍訓を附して刊行したものである。故にその訓は仙覺の訓によつたものである。

【活字無訓本萬葉集】二十卷十册〔刊行〕未詳。江戸時代初期か。〔解說〕木版活字本。一頁八行十八字詰で、欄界があり、訓を附せず、各卷目錄があり、題詞を低く歌を高くしてゐる。奧書はない。この本は今日多く殘存しない。〔系統〕細井貞雄の手澤本であつて木村正辭博士所藏となり、今岩崎文庫に入つてゐる二十卷の古寫本がある。「萬葉集書目提要」に家藏古本と云へるもので、また「細井本萬葉集」とも稱する。その中、卷四・五・六の三册は足利時代末の寫本と思はれて、他の十七册と性質を異にしてゐる。卷四・五・六は主として漢字の次行に片假字で訓を別提し、又訓を片假字で左右に傍書せるものもあり、訓を附けない歌もある。又卷四の後半はなく、代りに再び卷三の後半を附して一册とした。卷四・五・六は藤原定家・爲家流の本であらうと思はれ、爲家の著と云ふ「萬葉集佳詞」の訓と頗る一致するものがある。かくて定家が相傳の本を源實朝に贈り、仙覺が「萬葉集」の校合に用ひた鎌倉右大臣家本は、これと關係がある本と思はれる。次に殘餘の十七册は、訓は片假字で漢字の傍に附し、江戸時代に入つての書寫なるべく、各卷別筆である。この部分は

神宮文庫所藏の仙覺の寛元本から出たものと認められる。寛元本の特徴は、(一)歌を高く訓書を低く書いた。(二)訓は漢字の右傍にあり、他本の訓の異ある歌に和する時には墨で漢字の左に點じ、仙覺の新點は漢字の左に朱で點じた。(三)次點の歌には合點を附し、長歌の上には朱で星符を附し、旋頭歌の上には墨で星符を附した（仙覺文永本の特徴に關しては、西本願寺本萬葉集參照）。神宮文庫本は大方これ等の特徴を備へたものであり、細井本の十七册も亦これを襲うた本である。多分、神宮文庫本の系統の本で、それに三册を補足したものであらう。この細井本をそのまゝ書寫したものが「林道春校本萬葉集」で、「萬葉集書目提要」に昌平本といへる本である。二卷づつ合綴して十册とした。「校異本萬葉集」（別項）に林として校異を出せるは、この本のことであらう。而して「活字無訓本萬葉集」は、この林道春校本によつて印行したものであるが、ただ訓を削り去つて全く存しない。又卷四の後半がなく、卷三の重出であることも、細井本と全く同一である。なほ細井本の卷四・五・六を除く十七册に就いては、圖書寮所藏の今出河本も同系統の仙覺寛元本に屬し、神宮文庫本とも一致してゐる。但し今出河本の卷四・五・六は、仙覺文永本によつて補足したものである。〔價値〕「萬葉集」を印行せる最初の本として價値があると共に、その本文が仙覺の寛元本系統、又は定家・爲家流の本によつてゐる所に價値が存する。ただ訓を削り去つたのは甚だ遺憾である。この後の版本は凡てこの本より出てゐると思はれ、而もこの本と比するに、異なれる點があり、まゝ是正し得る所もあるので、多くの價値を持つてゐる。〔書入本〕水戸彰考館に、この本に細川幽齋本・飛鳥井雅章本・飛鳥井雅章校合本の三本で校合を加へた書入本があり（但し五・六・七・八の四卷を缺く）、延寶六年の奥書が存する。この幽齋本や飛鳥井本は、何れも寂印成俊本に屬する（大矢氏萬葉本「萬葉集」の項參照）。


金澤文庫本萬葉集（竹柏園藏）

【寛永本萬葉集】 二十册〔刊行〕寛永二十年〔解說〕紙表紙袋綴、表題は「萬葉和歌集」とあり、整版で、京都三條寺町誓願寺前安田十兵衞の刊行である。一頁八行十八字詰で四方に欄界があり、漢字の右傍に片假字で訓を附した。舊訓を低く歌を高くし、各卷に目錄がある。これ等の樣式及び奥書など、全く「活字附訓本萬葉集」（前出）と同一で、これをそのまゝ整版に附したものである。故に丁數に至るまで同一であるが、卷十五の目錄に一葉減じた所がある。また諸所に誤が生じてゐるから、必ず「活字附訓本萬葉集」と照し合せて訂正を加ふべきである。この本は江戸時代に最も世に行はれ、流布本と云ひ通行本と云ふのもこの本のことであり、江戸時代の諸學者より現今に至るまで、「萬葉集」研究の底本としては、常にこの本が用ひられる。かく盛行したので、增刷を重ねて版木の磨滅を生じ、ために一小部分の改刻埋木を行つて誤字の生じてゐる所もある。又卷一の奥書を卷首に綴ぢた本もある。故に後刷の本でなく、なるべく元刷に近いものを取らなければならぬ。明治以後の版本もこの寛永本を飜刻したものが多く、「校本萬葉集」や「萬葉集總索引」の如きも、この寛永本を底本として影印してゐる。「寶永本萬葉集」は、寛永本の版木を購入し、奥附を變へて印行した本である。故に寛永本に比して不鮮明な所が多い。奥附には寶永六年の刊年があり、出雲寺和泉掾とある。この本は重刷の際に改刻を施したので、本によつて小部分の差異を生じ、また一丁全部を補刻したところもある。〔書入本〕寛永本、又は寶永本に名家の書入を施した書入本はその數が多い。その主なものを擧ぐれば、正保四年の三宅正堅書入本（竹柏園所藏）、「中院本萬葉集」で校合を加へた水戸彰考館藏本（大矢本萬葉集參照）、元祿九年乃至十三年に契沖の說を多く書き入れた今井似閑書入本（賀茂別雷神社所藏）、享保七年の新井白石書入本（保科孝一氏所藏）、寶曆十二年の村田春道書入本（竹柏園所藏）、山岡明阿書入本（宮内省圖書寮所藏）、天明五年乃至寛政八年の荒木田久老書入本及び河津宇萬伎書入本によつて書き入れた寛政十二年の關谷潛書入本（黒川眞道氏所藏）等は寛永本の書入であり、寛保二年の谷川士淸書入本（松井簡治博士所藏）木村正辭博士書入本（岩崎文庫所藏）等は寶永本の書入である。なほ谷川士淸書入本は、契沖說を今井似閑が「代匠記」に書き入れた書入本を、樋口宗武が本集に移した本によつたものである。而して本居宣長校正本として、諸家の「萬葉集」に寶曆七年の本居宣長の奥書を載せてゐる本は、同じくこの樋口宗武の本より出たものである。

【古萬葉集】 二十册〔刊行者〕今村樂・横田美水〔刊行〕享和三年〔解說〕土佐國人谷眞潮の弟子なる今村樂の享和三年八月の序文があり、今の版本の訓には誤が多いので、その誤を正して新たに訓を施さんとしてものした由を記してゐる。また美水の跋文がある。「寶永本萬葉集」によつて印行したものであるから、行數・字數・丁數等全く寶永本と同一である。但し仙覺・寂印・成俊の奥書等は全く削り去つてゐる。この本は木活字で、「萬葉集」の本文だけを印行した本であるが、文字の增減・改易等も臆斷で施し、文字を埋め殘して刷り上げたところもあり、「古萬葉集」と題したが、必ずしも「萬葉集」の古體を存するものでなく、ただ土佐學派の學說研究を窺ふに便りよき本である。〔以上佐佐木〕

【內容・組織】〔歌體〕普通、短歌・長歌・旋頭歌（各別項）の三體であるが、外に佛足石歌（別項）體の歌でないかと疑はれてゐるものと、連歌（別項）の形をとつたのとがあるから、正確に言へば五體である。短歌とは、五・七・五・七・七の形の歌で、即ち後世の和歌に當る。萬葉作品總數大約四千五百餘首の九割二分は、實にこの短歌の形である。但し實際には、長歌はその量から見て、長歌の一首は短歌の十首・二十首に相當する場合が多いから、上記の短歌の數は遙に割引して考ふべきである。因に長歌は全歌數の六分五厘、旋頭歌が一分五厘程である。長歌（別項）は不定形の長詩を呼ぶ名であるが、飛鳥京頃の歌から、次第に一定の型に統一された。「萬葉集」中でも卷一・二・十三の古い長歌は不定型が多く、それ以外の卷、即ち「萬葉集」中期以後の卷の長歌は殆ど定型である。而してこの定型になると同時に、長歌の後へ「反歌」（別項）をつける事が始まつた（舒明帝時代のものより）。「旋頭歌」と云ふ名は、「萬葉集」卷七に見えるのが最も古い。「萬葉集」の中には六十餘首もある。量質共に微弱であるが、この體は「萬葉集」以外には「古事記」の雄略・仁德二帝の條に各一首（但し旋頭歌と云ふ名を附けてない）、「書紀」の雄略・繼體二帝の卷に各一首、總計四首。下つて「古今集」卷十九雜體の部中に旋頭歌の目を立て四首收めてあるのみで、これ等に比べると「萬葉集」の旋頭歌は甚だ多數で、今日我等の見得る旋頭歌の殆ど全部は「萬葉集」に含まれてゐると言へる。これから見て、藤原・奈良京時代前後に榮えた一詩形で、又その內容から見て主に民間に好まれて上流の間では作られなかつた詩形かと思はれる。〔歌數〕大約四千五百餘首と云ふ概數は動かないが、正確な數は計へ出せない。それは、「萬葉集」が不整頓な（或は未整頓な）歌集であるため、(一)計算に使つた本によつて歌の數が違ふ。(二)その歌の異傳を出すために「一本歌」「或本歌」「一本云」「或本云」等を出してあるのを計算に入れるか入れぬかで結果が違ふ。(三)計算する人の考へによつて、類歌のある歌を別な二首として數へるか、一首と見てしまふかによつて結果が違ふ。(四)一首と見るべきか、二首と見るべきか、決定しにくいものによつて結果が違ふ。今その代表的なものを擧げて見ると、

書名	總歌	長歌	短歌	旋頭歌
萬葉集目錄	四五六〇	二六三	四二四七	五〇
八雲御抄	四三一五	二五〇	—	—
袋草紙	四三一三	二五九	—	—
代匠記惣釋	四五一五	二六六	四一八六	六三
萬葉集古義	四四九六	二六二	四一七三	六一
國歌大觀	四五一六	—	—	—
萬葉集書志	四四六二（他に、或本歌六十。一書ノ歌五。一本ノ歌四。或ル書二。或ル歌一。古事記ノ歌二）			

「萬葉集目錄」が最も多く、「八雲御抄」「袋草紙」が最も少い。後者の少いのは、上記の計算に用ひた原本が今本と違つたと云ふ根本的理由による。以上のうち最も一般に知られてゐるのは、雅澄の「古義」のもので、明治中期以後の人は殆ど無反省にこの計數に據つてゐる。が、何某歌・何某歌を除く又は加へたと明記して計算の根據を示してゐる點では、武田氏の「萬葉集書志」の計算を唯一のものとして推賞すべきである。

〔作品の時代〕最も古い作は、卷二卷頭の第十六代仁德帝の皇后磐姬皇后の「君が行きけ長くなりぬ」の歌であつて、最も新らしきは、卷二十の最後にある第四十七代淳仁帝の天平寶字三年正月一日大伴家持の作れる「新らしき年の初の」の歌で、この間、約四百四十年である。このうち、年代判明の歌は、孝德帝以前の作はごく少數で、齊明—淳仁に亙る十一代ほぼ百年間（このうちでも、特に舒明以後の七十年間）の作が大部分である。これを卷に就いて言ふと、卷一・二・十三の三卷が最も古く、卷十七以下卷二十までの四卷が最も新しく、他の十三卷はこの最古最新の中間時代の作品を含むものである。眞淵の六卷說（卷一・二・十一・十二・十三・十四の六卷の作品が特に古いからこの六卷が元來の「萬葉集」であつて、現在の卷の順序は後に誤つたもので、これはこの六卷を最初におく順序に改めねばならぬとする）は甚だ著名な說だが、今日から見ると訂正せねばならぬ。

〔作者〕特色は、作者が廣範圍に亙つてゐる事である。作者の數からすれば、名の判明してゐる者と無名の作者と計數百人に及ぶ。作者の身分・階級からすれば、上は天皇より下は東國地方の農夫・軍人、少數ながら乞食や遊女に亙る迄の間の殆どすべての階級を含む。作者の土地も、大和の諸地方を中心として陸奥・東國・北陸・九州に亙つてその土地々々の人の歌がその地へ旅した人の作と共に收められてゐる。この作者の階級・鄕土の廣範圍な事が、「萬葉」の作品をして後の勅撰集（別項）のやうに作品を狹く固定せしめないで、多種多樣の美を現はさしめ、萬葉の價値をして藝術的に極めて高いものとした。而してこの種々の階級の作者は、二つの對立した種類に分割することが出來る。第一種の作家は、當時の庶民階級や地方の土民などで、その作品の特色は、民謠風の內容（主に相聞歌）、民謠風の表現を持ち、作者の個性は隱れて一色の共通な色彩で覆はれてゐる。その作品は、口から口へ言ひ傳へられてゆく「民衆的作家」とでも言ふべきものである。第二種の作家は、當時の上流階級及び人麿・赤人等の專門歌人から成る一團である。その作品の特色は、純藝術的な作風で、作者の個性や特色が明かに現はれてゐる。その作品は、前者は卷十一・十二・十三・十四・十六の終の部（筑紫の白水郎の歌以後）、卷二十の防人歌であり、後者は右以外の部分である。後世の勅撰集の類では、前者が無いために作品の全部が貴族的な作風のみとなつて野性や純情やを缺くこととなつた。第一種の作家の主なるものは、皇族では、雄略・天智・天武・持統・聖武の諸天皇、志貴・大津・弓削・有馬の諸皇子、大伯・但馬の諸皇女、長田・湯原・市原の諸王及び額田王、臣下では柿本人麿・山部赤人・大伴旅人・同家持・山上憶良・高橋蟲麿・高市黒人・笠金村・中臣宅守等の男子、坂上郎女・茅上女郎・石川郎女等の女子である。

〔用字法〕上代の他の古典と同じく、漢字で書かれてあるために、漢字を以て如何に表現するかに就いて用字法の問題が起る。この漢字の使用法は、音あり訓あり、實に多種多樣を極めてゐる。多種多樣であるから古來の萬葉學者の中、この多樣の中に何等かの法則を發見して萬葉の用字法を根本的な幾つかの規則に纏めようと努力した人が少くない。既に鎌倉の仙覺（仙覺奏覽狀）は、眞名假名・正字・假字・義讀の四つに分類し、南北朝の頃の由阿（詞林采葉抄）は七つに分ち、江戸時代の春登（萬葉用字格）は八つの分類を立て、武田祐吉氏（「上代國文學の研究」及び「アララギ」大正十五年一月號）及び澤瀉久孝氏（國語國文の研究第四號）は四分類を主張された。この中最も普通に知られてゐるのは春登の說で、これを基礎にして平明に且つ合理的に說いたのは最後の二氏の說である。春登の說は八に分類し、初めの二が音、次の五が訓を用ひるもので、最後が音訓何れもを用ひる別個の用法と見るのである。即ち(1)正音、(2)略音、(3)正訓、(4)略訓、

（5）約訓 （6）義訓 （7）借訓 （8）戯訓に分れてゐる。武田・澤瀉の兩氏の分類は、分類の方法も四つに分類すると云ふ點も、甚だ相似てゐて、ただ說明の言葉が相違してゐるに過ぎないと思はれる故、今、一緒にしてその分類を述べると、次の如くである。（ ）の中は春登の分類である。

漢字ノ意味ヲトツテ用ヒタ場合
（1）音讀＝漢字ノ音ヲ用フル場合
○餓鬼・法師・布施・檀越（春登ニコノ分類無シ）
（2）訓讀＝漢字ノ訓ヲ用フル場合
○潮・春・星・山川・天地（以上正訓）○吹・寒・金・丸等・未通女（以上義訓）
（以上（1）（2）ノホカニ、春登ハ略訓と約訓トヲ立テテヰルガ、コレハ、上記ノ如ク、音韻ノ都合上或ル音ガ省カレタモノデ、用字法ノ一分類ト云フヲ得ナイ）
漢字ノ意味ト無關係ニ（卽チ、漢字ノ意味ヲ無視シテ）用ヒタ場合
（3）音讀＝漢字ノ音ヲ用ヒタ場合
○阿・伊・宇・加・紀・久・南・念（以上正音）○安・香・吉・君（以上略音）
（4）訓讀＝漢字ノ訓ヲ用ヒタ場合
○射・蚊・荷・頂（心の意味ノウラ）・鶴・鴨（助動詞）（以上借訓）○市・跡・常（以上略訓）
（以上ノ外ニ「戯書」ト春登ガ言フノハ、以上ノ（1）（2）（3）（4）ノ何レカニ屬スルモノヲ更ニ拾ツテ戯レタモノ）

さて、用字法の實際を見ると、（1）の類は卷十六に僅か有るだけでごく少い。これのみを用ひた歌は全く無い。最も多いのは（2）を主にして（3）（4）をこれにまじへ用ひたもので、萬葉の大部分はこれである。その中間に在るのが（3）のみに據つたもの（卽ち、一音一字の表式で卷五・十四・十五・十七・十八・十九・二十の大部分）と、（2）のみによつたもの（卷十一所載の人麿歌集の歌群の大部分）との二つである。

〔作品の部類分〕「萬葉集」は、種々の標準によりその作品を分類してゐるが、その根本的の分類は、雜歌・相聞・挽歌（各別項）の三分類に歸する。この三分類から後に言ふ如き諸分類が派出してゐる。これ等のうち挽歌の數は二百三十首ほどで全歌數の二十分の一である。雜歌・相聞の二部類に比べると遙かに少い。この三の基本分類を土臺にして、先づ雜歌・相聞の二部類を四季と組合せて、春雜・春相聞・夏雜・夏相聞・秋雜・秋相聞・冬雜・冬相聞と八分することが行はれた。卷八・十がこれである。この分類は支那から得た季節意識に基いてゐる。當時に在つては最新の分類法で「古今集」以下の歌集の摸倣する所となつた。次に、雜・相聞の部類內に、もつと小さな細分類が立てられた。卽ち卷七の如きは、雜歌の部內に、羈旅作や問答の如きが設けられ、卷三の如きは、雜歌・挽歌と相對して、譬喩歌（別項）部が設けられた。これは相聞歌のうち、心を直敍せず、何か他の物を借りて言ひ現はした歌のみを集めた部である。また卷十一・十二の如きは、全體が相聞歌であるのに、正述心緖・寄物陳思歌（以上別項）・問答歌等の細部に分割されてゐる。第一のものは、心を直接に述べたもので、普通の相聞歌と同一のものである。第二のものは、第一のものと譬喩歌との中間に在るもので、他物を借りて（他物に寄託して）言ひ現はしてはゐるが、譬喩歌の如く全然他物が主體となつてしまつてゐる所謂たとへ歌と云ふまでには至つてゐない中間物である。第三の問答歌は、上記の如く卷七では雜歌部に見ゆるものであるが、問の意の歌と答の意の歌とを並記したもので、多くは男女の問答になつてゐる。かくさまざまの分類法があるが、その最も根本的な且つ大きな分類法は、雜・相聞・挽歌の三部で、このうち前の二つが集の大部分を占めてゐる。以上の分類法によつて、「萬葉集」がよく整理統一されてゐるかと云ふに、事實はさうでない。この「歌の性質による分類」のほかに、歌の製作年月順によつて整理する傾向が强く働きかけてゐて、實際に於ては、性質による統一と作年月による排列とが殆ど同勢力を以て作用し、この二法則が相俟つて集中の歌を分類整理してゐる。故に分類法としては、上記の性質による分類を擧ぐれば足りるが、集の分類の實際は、別に年代順の排列のことを頭に置いて見れば理解出來ない（なほ各卷に於ける分類の實際は次に說く）。

【各卷の性質】「萬葉集」は前述の如く、集中に統一がなくて、十數個の獨立した小さな集がただ雜然と寄せ集められてゐるに過ぎない。從つて「萬葉集」の實際の姿を知るには各卷々の姿を知らねば不可能である。部類分も編者も、殆ど各卷によつて異なつてゐるものを、二十卷一律に考へる見方では、實際を離れた妄言に陷るおそれがある。今各卷を、（1）組織・（2）歌數・（3）作者・（4）時代・（5）編纂及び編者・（6）作品の特色價値の六項に分けて略述して見よう。

〔第一卷〕（1）全部雜歌である。これは卷二の相聞・挽歌の部類と並立するもので、卷一・二が一部の書であつた有力な證據である。而して卷のうちを、天皇の代によつて年代順に區分してゐる。すなはち泊瀨朝倉宮御宇天皇代（雄略天皇時代の意）、高市岡本宮御宇天皇代（舒明天皇時代）のやうな標目をかゝげ、その標目の下にその御代の歌を集めてゐる。この點も卷二と同樣である。（2）長歌十五首、短歌六十八首。他に異傳の長歌が一首。（3）皇族及び貴族等社會の上流にゐた人々で、主なる作家は、皇族に、雄略・天智・天武・持統・元明の諸天皇及び志貴皇子・長皇子・麻續王・額田王等。臣下に柿本人麿・高市黑人・春日老・長奧麿・山上憶良・藤原宇合。（4）卷頭の雄略帝の御製（年代未詳）を最古とし、和銅五年（元明帝の御代）の歌まで約二百四十年間である（この中、最後の六十年間の作が最も多い）。奈良朝始まつて僅か四年目の歌が最も新らしい歌で、大部分は飛鳥京・藤原京時代の作である。（5）不明である。但し卷二と連絡及び相似點が著しいから、卷二と同一の人によつて編まれた事だけは確かである。（6）時代の古い歌が多く、從つて作品の內容も表現も古樸で力强い。

〔第二卷〕（1）全體を相聞部・挽歌部の二部に分ち、各部內を天皇の御代によつて順に區分し、各歌の前に作者と歌數を記すこと卷一と同樣で、大體に於て甚だ整頓してゐる。（2）相聞部が長歌二首と短歌五十首。挽歌部が長歌十五首と短歌七十五首（他に異傳の長歌一首・短歌三首）。（3）主なる作者は、皇族に天智・天武・持統の三天皇。磐姬・倭姬の二皇后。有間・弓削・穗積の諸皇子。大伯皇女・額田王等の女流がある。臣下には藤原鎌足・柿本人麿・大伴安麿・久米禪師・三方沙彌・石川郎女等がある。皆、飛鳥・藤原京時代の人々で、この卷の古い卷である事が分る。（4）最古の歌は、卷頭の磐姬皇后（仁德天皇后）の作で、これは「萬葉集」全部中で最も古い歌である。最も新らしい作は靈龜元年（元明天皇の最末年、奈良遷都第五年）である。だから磐姬皇后の歌が餘りに古くて信じ難いとしても、卷中の歌の殆ど全部は飛鳥・奈良京の作で、甚だ古い卷であることが分る。（5）不明。前述の如く卷一と同一人によつて編まれて他の卷と別に獨立してゐた事は確かである。品田太吉氏は、組織の整頓してゐる點等と比考して、卷一・二だけは他の卷と違つて勅撰歌集だと主張してゐる。（6）卷一と同樣である。

〔第三卷〕（1）全體を雜・譬喩・挽歌の三部にわかち、各部內に於ては大體作年月の順に歌を並べてゐる。各歌の前には作者と歌數とを記す。（2）長歌一首、短歌三百一首、旋頭歌一首。卷一・二に比して殆ど全部が短歌であるのは、作者の大多數が奈良朝代の新しい作家だからである。（3）主なる作者は、皇族に聖武帝・志貴皇子・春日王・湯原王及び鏡女王・額田王等。臣下に柿本人麿・笠金村・大伴旅人・大伴家持等の男子及び紀女郎・笠女郎・坂上郎女・坂上大孃・田村大孃等の女子である。藤原京の末から奈良京の中期にかけての作家で新しい時代の人の多い事が目立つ。同時に大伴家の人々の多い事も目立つ。（4）雜部は持統朝から聖武朝の天平の初期まで（年代の知れてゐるのは天平五年が最後）。譬喩部は持統朝頃から天平中迄。挽歌部は推古朝から天平十六年七月迄。このうち推古朝は聖德太子の一首だけだからこれを暫く除くと、持統朝から聖武朝迄に亙る作品である。（5）大體大伴家持が編したものと信ぜられてゐる。（6）古樸な卷一・二に比して歌の調子・色彩が柔らかくなり初めてゐる事、短歌が著しく增加した事等注意すべき特色である。卷中の人麿・赤人・黑人・旅人（各別項）など臣下の著名歌人の作品の價値は、「萬葉集」を代表するものである。

〔第四卷〕（1）全部相聞で、卷中には小さな部類分は全然ない。ただ歌をほぼ年代順に並べ、作者・歌數を記すのみである。（2）長歌一首、短歌三百一首、旋頭歌一首。（3）皇族に聖武帝・志貴皇子・安貴王・市原王・湯原王及び鏡女王・額田王等。臣下に柿本人麿・笠金村・大伴旅人・大伴家持等の男子及び紀女郎・笠女郎・坂上郎女・坂上大孃・田村大孃等で、大伴一族の多い事が目立つ。（4）卷頭の「難波天皇ノ妹云云」を仁德天皇の妹と云ふ事にとると、甚だ古くからの歌を集めた事になるが、それでは餘りに古きに過ぐるから、この歌は古來作者を疑はれてゐる。これを除くと、次の舒明帝の作から奈良の中期迄の作を集めた卷だと言へる。大體は奈良の初期から中期にかけての歌を集めてある。（5）大伴家持が古人及び自己の入手した作のうち、相聞歌と見るべきもののみを採集してこの一卷を編したと見るべきである。さうしてこの卷は、同じく家持編なる第三卷の雜・譬喩・挽歌にこの相聞の卷を併せて二卷で一部の歌集として味ふべきものであらう。（6）調がやさしく、內容が優美となり、その點ですぐれた歌が少くない。その反面に、表現に力がなく纖弱に流れてゐる。

〔第五卷〕（1）全部雜歌。實際には相聞歌も含んでゐるが、部類分としては雜歌部だけしか立ててゐない。その雜歌部中を大體年代順によつて歌を並べてゐる。併し歌・漢詩・散文など入れまじつて、不統一未整理の卷である。（2）長歌十首、短歌百四首。この外に漢詩二首、散文若干がある。散文は長文が多くて量から云つても內容から見ても集中に類のない大きな位置を占めてゐる。（3）大伴旅人と山上憶良二人の作が卷中の大半を占めてゐる。外にこの二人の周圍の人の作が若干ある。年代判明の歌は神龜五年から天平六年までの七年間で、他の作も多くこの間を離れない作である。卽ち、大凡奈良京の初期・中期の作の集成である。（5）旅人の周圍の何人かが集めたとする說、憶良が編者だとする說、家持を編者とする說等種々あるが、併し旅人の歌及び憶良から旅人に奉つた憶良の歌（「憶良上」と記してあるもの）、並に憶良が自作を集めておいたもの、この三種の作を家持が一卷にまとめ、大體年代の順に排列した卷だと思はれる。（6）卷五の歌の特色とは、卽ち憶良の歌の特色とも云へるほど憶良の色彩が强い。自然よりも人事の作が多く、自然の歌も純粹に自然を詠むよりも人事に關係さして詠む風が著しい。純敍景歌の如きは、一首も見る事を得ない。

〔第六卷〕（1）全部雜歌。その部の內に、養老七年、天平何年と云ふ風に、年號を標目に擧げ、その下にその年に屬する歌を集めてある。著しく年代の考へを採り入れた編纂法で、集中に類を見ない。（2）長歌二十七首、短歌百三十二首、旋頭歌一首。（3）皇族に湯原王・市原王等。臣下に山部赤人・笠金村・田邊福麿・大伴旅人・大伴家持・坂上郎女等。殆ど全部奈良京の作者であり、且つこの卷の編者家持と近しい位置の人である事が注意される。（4）養老七年から天平十六年迄の二十一年間の作で、卷頭の數首を除いて皆聖武帝時代の作である。（5）大伴家の作者及び家持周圍の人が多い事、旅人を尊んだ記し方で註してある事、卷三・四と共通の作家が多いことなどから、大伴家持が編んだ卷だと考へられる。（6）旅の歌と遷都の歌とが目立つて多いが、形だけ整つて人に迫る力の足りない歌が多い。

〔第七卷〕（1）雜歌・譬喩・挽歌の三部類に分れてゐる。その各部內を更に「詠レ天」「詠レ月」等（以上雜歌部）及び「寄レ衣」「寄レ絲」等（以上譬喩部）のやうな小目によつて分つてゐる。卽ち歌の意味・內容による分類である。而して雜歌部中の「羈旅作」の中頃に、「右七首者、藤原卿作。未レ審二年月一」と註のある外、作者の名を全く記さない。卷一—卷六が、作者を明記して作年月を考慮に入れた編纂であるのに對して、全然別個の組織をとつてゐる。（2）雜歌部は短歌二百四首、旋頭歌二十五首。譬喩部は短歌百七首、旋頭歌一首。挽歌部は短歌十三首。この卷の最末尾に羈旅歌が一首あるのは、雜歌部に入るべきものを誤つたものである。（3）作者名を記してないので、全部不明である（ただ前述の「藤原卿作」と記したのが、唯一の作者名のあるもの）。但し雜歌部中の「山背作」「攝津作」とあるのは、大和の官人たちが、それ等の地に旅した作と思はれる故、雜歌部中の他の歌も、これと同じく官人・官吏たちの旅の作と思はれる。（4）不明だが、歌調や歌中の地名から考へて、藤原京から奈良京の中期へかけての作と思はれる。（5）不明。（6）雜歌部の旅の歌中には、歌風莊重端正、眞に集中の代表作とすべき佳作に乏しくない。譬喩歌は譬にひく物が殆ど全部一定の型にはまつた物に限られてゐるために、價値に乏しい駄作が多い。

〔第八卷〕（1）全體を春雜歌・春相聞・夏雜歌・夏相聞・秋雜歌・秋相聞・冬雜歌・冬相聞の八部

にわかつ。即ち、雑・相聞と云ふ二つの基本的分類法に四季の考へを加へた分類法である。さうして各部の内を、作者・歌数を記した題詞や左註で細分してゐる。(2)長歌六首、短歌二百三十六首、旋頭歌四首。(3)皇族に聖武帝・志貴・大津・穂積・弓削の諸皇子。市原・湯原等の諸王。臣下に、山上憶良・山部赤人・笠金村・大伴家持等の男子、笠女郎・坂上郎女・坂上大嬢等の女子。作者の時代の新しい事、家持に關係のある作家の多い事等を注意すべきである。(4)最も古い歌は舒明天皇朝の作、最も新しきは聖武帝の天平十二年である。併し天武帝以前のものは數首で、大部分は聖武朝の奈良盛期の作である。(5)大伴一族の作家の多い事、卷三・四・六の三卷（何れも家持編纂）と共通の作家の多い事等から家持が編纂したものと考へられる。(6)四季に分類してあるので明かなやうに、季節感が著しく出てゐるのが大きな特色である。但しその季節は、美しい好ましい季節及び季節物に限られてゐる。

〔第九卷〕(1)雑・相聞・挽歌の三部に分れ、各部内では大凡年代順に歌を排列してゐる。或る部分は作者名を記し、或る部分は全然記さず、不統一を極めてゐる。これは(5)にて述ぶる如く、この卷は大部分、他歌集の原本をそのまゝ切取つたものを寄せ集めたもの故、かゝる組織の上の不統一が生じたのである。(2)長歌二十二首、短歌百二十五首、旋頭歌一首。(3)姓と名との明記してあるものは、雄略天皇・坂上人長・間人宿禰・柿本人麿・阿部大夫等數人であるが、外に姓や名だけの記されてゐる檍本・山上・春日等（以上姓のみ）、及び絹・島足・麻呂等（以上名のみ）がある。又その歌を採つた原本の記してあるものから作者の推察されるものがある。(4)最も古い作は、卷頭の雄略帝（左註に記す異傳によれば舒明帝）の作。最も新しいものは「田邊福麿歌集」中の作である。即ち雄略帝（或は舒明帝）の御代から飛鳥・藤原京時代を經て、奈良の中期までの作品を含んでゐる。(5)「人麿歌集」等の私歌集からそのまゝ採つて來た部分の多い事（卷の大部分はこれである）、及びその私歌集には、「柿本朝臣人麿歌集」「高橋連蟲麿歌集」「笠朝臣金村歌集」「田邊福麿歌集」（各別項）等の四私歌集の外に、「古歌集」（別項）及び山上憶良の「類聚歌林」（別項）の名も見えてゐて、「萬葉集」に名の見える當時の私歌集のすべてをこの一卷中に集めてゐる事。この二事は、他の卷に見えない編纂上の特色である。編者は不明である。ただこの卷には傳説及び旅に關した作が大部分を占めてゐる故、或は傳説と旅とを好んだ高橋蟲麿の編纂ではあるまいかと思はれる。(6)浦島・葦屋處女・眞間手兒名・菟原處女の傳説を詠じた叙事的傳説歌の多い事が、大きな特色である。傳説を伴つた歌は卷十六の前半にも集められてゐるが、卷十六のは口から口へ傳はつた口誦歌（廣い意味での民謠）であつたに對し、卷九のは著名な歌人が作つた藝術作品である。その形も前者は短歌で抒情詩と云ふべきであり、後者は長歌に反歌を伴つた複雑な形で叙事詩と見るべき内容を盛つてゐる。こゝに兩卷の傳説歌の相違及び卷九の傳説歌の特色・價値がある。

〔第十卷〕(1)全體の分ち方は卷八と同じく、春雑歌・春相聞・夏雑歌・夏相聞・秋雑歌・秋相聞・冬雑歌・冬相聞の八部に分つ。或は卷八を眞似たものか。(2)長歌三首、短歌五百三十二首、旋頭歌四首。(3)全部不明。但し所々に出てゐる「人麿歌集」から採つた歌の中には人麿の作も混じてゐるかも知れない。(4)詳かでないが、その歌柄の新しい點から見て大部分は奈良京時代の歌と思はれる。(5)不明。(6)卷一・二や卷十三・十四の素朴さと反對に優美・纖細な作が多い。又四季の特色の著しい作の多い事は、卷八の場合と同様である。

〔第十一卷〕(1)卷頭に「古今相聞往來歌類之上」と記す（「上」は、卷十二の卷頭に「……歌類之下」とあるのに對する）。次に卷の中を細分して、旋頭歌・正述心緒・寄物陳思・問答（以上人麿歌集所出）・正述心緒・寄物陳思・問答・譬喩の八部（東歌を併せて）に分けてゐる。(2)短歌四百七十四首、旋頭歌十七首。(3)不明。當時人々の間に傳誦されてゐた歌を集めたものである。(4)不明。但し歌の内容や表現から見て、飛鳥・藤原京から奈良京の初期へかけての作と思はれる。卷十ほど纖細でなく、卷十三ほどの古樸さもない。その中間ほどの歌柄と見える。(5)誰の作とも知れず言ひ傳へられて來た歌を、集めてみたものと思はれる。卷十四の東歌（別項）なども同性質の卷であるが、東歌が東國地方の民謠であるに對し、この卷及び卷十二は大和を中心とした近畿地方の口誦歌を集めたものであることが、卷中に出てゐる地名によつて推察される。(6)八つに細分されてはゐるが、全部が人々の間に取交された相聞歌であること、卷頭に「古今相聞往來歌類」と記してゐるので明かである。その内容をよく見ると、純情に充ち滿ちた戀歌と類型にはまつた戀歌・譬喩歌との二種類のものが對立してゐる。

〔第十二卷〕(1)卷十一に對して「古今相聞往來歌類之下」と卷頭に記す。卷のうちは、更に細分して、正述心緒・寄物陳思（以上二部人麿歌集所出、以下六部は人麿歌集以外より所出）・正述心緒・寄物陳思・問答・羇旅發思（内、初め四首人麿歌集所出）・悲別歌・問答の八部に分つ。最初の二部は次の二部と重複してをり、問答部は二度も重出してゐる。組織上から見れば甚だ不統一を極めてゐる。(2)短歌三百八十首。(3)寄物陳思部の終りから三首目の「己れゆゑ」の歌の左註に、この歌は紀皇女の作だと云つてゐる外には作者に就いて記さないので、誰の作か不明である。(4)未詳。澤瀉久孝氏は、卷十一よりは少し新しい奈良朝の作品を集めたものだらうと云つてゐる。(5)詳かでない。澤瀉氏は卷十一とは別な人が編纂したと説いてゐる。從來は兩卷の卷頭に同じ標目（古今相聞云云の標目）が出てゐるため、同一の人が編んだと見られて來たものである。(6)卷十一と同様。ただ同じく戀愛相聞の作を集めた卷ではあるが、卷十一よりも價値ある戀歌に乏しい。

〔第十三卷〕(1)全體を雑歌・相聞・問答・譬喩・挽歌の五部に分つ。(2)長歌五十九首、旋頭歌一首、短歌五十九首。長歌の多いことがこの卷の特色である。(3)雑歌部の第二十一首の左に、「但此短歌者、或書云、穂積朝臣老、配於佐渡之時作歌者也」とある。相聞部の第十六首の左に、「檢古事記曰、件歌者、木梨輕太子、自死之時所作者也」とある。挽歌部第十六首の題詞にて、「備後國神島濱調使首、見屍作歌」とある。三ケ所に作者を明記してある外は、作者を全然記さない（ただ「人麿歌集」から採つた由を記してある歌の中には、人麿自身の作もあるかも知れない）。併し歌風が概古く、且つ素朴であるし、また長歌（短い長歌）が多く

短歌が少いことは、短歌が奈良朝に入つてから盛行し始めたことを思ひ比べると、この卷の作者は古い時代の人々であつたと推察される。(4)詳かでないが、時代も甚だ古いと云ふことだけは疑へない。(5)不明。作者の知れない古歌謠を集めて、これを雑・相聞等に分類して一卷としての體裁を與へたものと思はれる。(6)短い長歌の多いことと、作品が素朴で古めかしいこととが、大きな特色と言ふべきである。

〔第十四卷〕(1)東國地方の民謠を集めた卷で、土地を基準にした分類法によつてゐる。即ち全體の歌を國名の知られてゐるものと不明なものとに二分し、前者を雑歌（この標目脱落）・相聞・譬喩の三部に分ち、各部内を上總・下總等の國々によつて區分してゐる。後者は雑歌・相聞・防人歌・譬喩歌・挽歌の五部に分つてゐる。全部作者を記さない。(2)全部短歌で二百三十首。(3)作者名を記さないから不明だが、東國（三河・遠江あたり以東）土着の民が大部分、その他に東國へ官吏等になつて赴いた都人が若干加はつてゐるかも知れない。なほ「人麿歌集」の歌が所々に見えるが、これは人麿の作が東國で愛誦されてゐたので、こゝに取入れられたと見るか、又は東國の民謠を人麿が「人麿歌集」に收録しておいたものとでも見るべきであらう。(4)作品の時代は詳かでない。(5)卷頭に「東歌」（アヅマウタ）と標題があるから、アヅマ即ち東國地方に行はれてゐた歌を集めた卷であることが分る。但し何の目的で誰が集めたのかは詳かでない。思ふに、卷十六に能登・越前の民謠と認むべきもののあるのと比考すると、言語習俗共に事變つた異色に滿ちてゐた東國の歌にいたく興味を惹かれて、何人かが集録したものででもあらう。(6)素朴と野趣に滿ちた生き〳〵した作品の多いこと、「萬葉」二十卷中第一である。本卷の歌に用ひられてゐる東國方言は、國語學者に貴重な研究資料を提供してゐるものである。

〔第十五卷〕前半は、天平八年六月新羅國に遣はされた使人たちの旅中の歌及び旅中に誦した古歌を集め、後半は中臣宅守が狹野茅上娘子に通じた爲め越前に流された時、二人の取り交した贈答歌である。別に部類分けは施してないが、前半を雑歌部、後半を相聞部のつもりでこの二種の歌群を排列したものかも知れない。(2)遣新羅使歌は長歌五首、短歌百三十七首、旋頭歌三首。贈答歌の方は、宅守作四十首、茅上娘子作二十三首。(3)遣新羅使歌は使人及びその周圍の人で、秦間滿・大石蓑麿・土師稲足等實名を記したのが十人、大使・副使・大判官等の如く、位官によつて作者を記したのが十ケ所ほど。女は「對馬娘子名玉槻」と實名を記すのが一人、單に「娘子」とのみ記すのが一人。以上の外は不明である。贈答歌の方は、宅守・娘子の二人。(4)遣新羅使は聖武帝の天平八年出發、翌年歸朝してゐる。宅守の流罪の年月は不明であるが、天平十二年六月の大赦に洩れて罪を赦されなかつた人名が「續日本紀」に見える。その中に彼の名もある故、天平十二年には流罪地にあつたこと明かであるから、彼の流罪は天平十年か十一年の頃でないかと思はれる。(5)何故この異性質の二歌群を結び附けて一卷を編んだのか不明。或は二大事件が相次いで起つたので、一卷にまとめたものではなからうか。編者も未詳。(6)遣新羅使歌には、當時の旅の艱苦な有様や、旅人の寂寥たる心裡やが、まことによく現はれてゐる。こゝにこの歌群の價値がある。贈答歌の中の數首は、集中の戀愛歌の代表作とまで稱讃されてゐる。

〔第十六卷〕(1)卷頭に「有由縁幷雑歌」とある如く、二部に部類分けされてゐる。第一の有由縁歌とは、何かユエヨシのある歌の意で、實際には傳説を伴つた歌を蒐集してゐる。第二の「雑歌」の部は、實際には二分されてゐて、前半には或る題によつて作つた歌（内容から言ふと滑稽歌が多い）、後半には民間及び諸地方に於ける俚謠民謠を集めてゐる。(2)長歌八首、短歌九十二首、旋頭歌三首、佛足石歌體の歌と見ゆる作（越中國歌の第三首目）一首。(3)傳説歌の小部分、題詠歌の大部分は、作者の姓名が明記してある。作者名の明かなものと不明なものとが相半ばしてゐる。明かな中では家持の歌もある。前者には皇族に境部王、臣下に長奥麿・消奈行文・安倍子祖父・大神奥守・大伴家持等がある。作者名を記さぬものは、大方賤職の位置に在つた人だつたらうと思はれる。(4)作者から判斷すると、藤原京の末から奈良京の中期頃迄（聖武帝の天平年間頃迄）の作品を集めたと思はれる。(5)傳説歌と俚謠民謠の類は共に口誦歌であるから、これを一部にまとめたい欲求から、この卷が作られたのではなからうか。編者は大伴家持でないかと思はれる。(6)題材から言へば民間の俚謠・專門歌人の滑稽歌等他卷に見えぬ素材の歌が多い。表現から言へば自由でよそほひ飾つた所のない無邪氣で朗らかな口調の歌が多い。香・檳榔・法師・檀越・婆羅門等、漢語や梵語をその儘取入れた用字法の有る事も、この卷の忘れられぬ特色である。

〔第十七卷〕(1)歌作の年代順に歌を並べてゆく部類分けはない。題詞か左註かで歌作の事情・作者・歌數を記してゐるだけである。以下卷二十まで同様の組織である。これは卷十七以後は、大伴家持の歌日記のやうなものだからである。(2)長歌十四首、短歌百二十七首、旋頭歌一首。(3)編纂者大伴家持の作最も多く、これに家持周圍の人々を加へたもの。(4)天平二年から同二十年（契沖は二十一年の誤とする）までの作が收められてゐるが、十七年から後の作が特に多くなつてゐるから、天平二年—十六年の作は、卷三・四・五・六・八（天平十六年迄の作を含む）に洩れたものを、こゝに收めたものでもあらうか。(5)家持が、右の年代中の自作及び己の周圍の人々の作を日記風に集録したもの。(6)萬葉末期の歌が著しく優美纖麗となつて、題材も表現も優しい方向のみに限られてしまつて、生氣と野趣に滿ちた前代の風を失つたその時代の姿を、善惡ともによく現はしてゐる。

〔第十八卷〕(1)卷十七と同様。(2)長歌十首、短歌九十七首。(3)卷十七と同様。(4)天平二十年三月から天平勝寶二年二月迄の二ケ年間の作。(5)(6)卷十七と同様。

〔第十九卷〕(1)卷十七及び十八と同様。但し所々昔の作を混入してゐる。例へば、天平五年入唐の歌八首（國歌大觀四二四〇以下八首）、壬申亂平定卽時の歌二首（國歌大觀四〇六〇・四二六二）の如きである。これは家持が、それ等の歌を人から聞いた月日の所へそのまゝ挿入したもので、日記風の卷らしい編纂法として注意に値する。(2)長歌二十三首、短歌百三十一首。(3)卷十七・十八同様。(4)天平勝寶二年三月一日から同五年二月二十五日迄の

三ヶ年間の作。(5)家持が右の三年間に於ける自作及び周圍の人又は古人の作を一卷にまとめたもの。(6)大部分は萬葉末期の歌風に影響されてゐる作である。

【第二十卷】(1)卷十七同樣。(2)長歌六首、短歌二百十六首。(3)卷十七同樣。(4)天平勝寶五年五月から天平寶字三年正月一日迄の約六年間の作。この作が「萬葉集」の最後（年月の判明せる）の作である。家持はその後も桓武天皇の延暦四年迄滿二十六年間生存してゐたのに、何故「萬葉集」がこゝで斷絶してゐるのか不明である。(5)家持が自作及び自己の見聞に入つた他人の作を集めたもの。(6)卷十七の項に述べたやうな萬葉末期の特色、殊にその惡い方面を著しくあらはしてゐて、花鳥風月趣味の限られた材料の歌のみとなつてゐる。殊に酒宴の席での作が多くなつた爲め、歌は己の眞情を現はすよりも一個の交際の具となつてしまつた。なほこの卷には、防人の歌（別項）が九十三首あるのは大きた特質であり、國語研究上にも大切な資料である。

【價値】「萬葉集」の價値は、學術的價値と文學的（即ち藝術的）價値とに分けられる。學術的には、資料に乏しい古代の歷史・風俗・習慣・思想等を知るためには、「古事記」「日本書紀」と共に最も大切な資料の一である。殊に國語學及び國文學史の研究の中古代を探る場合の、最大の資料は「萬葉集」である。即ち古代語の音韻・語法・語彙をしらべる場合や、我が國の長歌の衰亡、短歌の誕生、邦人の文學意識の發生、古代文學の特質等を探る場合、必ず顧みるべきは「萬葉集」である。次に、文學的（藝術的）價値に就いては、第一は本書が多種多樣の性質を持つてゐる點である。即ち作者が社會の凡ゆる階級の作者に亙つてゐる事、內容が美的趣味的なものに限らず、素朴・滑稽・肉慾等樣々の性質を持つてゐる事、歌體が短歌の外に長歌・旋頭歌・佛足石歌等種々に亙つてゐる事等が集つて、「八代集」（別項）以下の歌集に見出せぬ多樣な姿を現はしてゐる。殊に「萬葉」の壯大な美（人麿の作品の如き）、素朴な美（東歌や防人歌等）の如きは、後の和歌史上に跡を絶つた獨特のものである。多種多樣の性質を持つと云ふ事は、多種多樣の美を現はして居り、樣々の人の心理、樣々の人生を現はしてゐると云ふことを意味するもので、本書の大きな藝術價値だと言へる。正岡子規が本集を讚美した大部の根據は此處に在る。第二の藝術價値として「眞實」といふことを擧げ得られる。奈良中期以後の宴飲・相聞・季節の歌を除いた「萬葉」の大部分は、作者の作歌態度が心にもない美飾や誇張を施さぬ質實の點から見ても、作品を味はつて受ける感じの點から見ても、「眞實」と云ふ點で後世の凡ての撰集にまさつてゐる。眞淵や赤彥が本集を讚美したのはこの點である。第三の藝術價値（これは特色と言ひ換ふべきかも知れぬ）として、「現實的寫實的」だつたと言へる。第一に素材のとり方が空想的のものより現實的實際的なもの、寧ろ現實的なもののみをとつた。次にその素材の扱ひ方―素材を表現する方法が、「新古今」（別項）の如く空想的夢幻的でなく、現實的に寫實的にはつきりと言ひ現はす。これ等の當然の結果として、本集は現實味の勝つた作品によつて占められ、そこに特色と價値のある歌集となつた。俳句の寫生を歌に應用せんとした子規が本集に共鳴を感じたのはこの故である。

【影響】後世の文學に與へた影響のうち、今日知らるゝ最初のものは、「新撰萬葉集」（別項）及び「古今和歌集」（眞名序によれば、最初は續萬葉集と言つた）の誕生である。「新撰萬葉集」の方は「寬平后宮歌合」の影響もあるが、その書名や編纂法や部類の分ち方などを「萬葉」に倣つてゐる。然るに「古今集」の影響が次第に歌壇を風靡し、一方不規則に漢字を借りて記した「萬葉」は甚だしく難解となり、一般には親しまれぬやうになつて鎌倉初期に至つた。もとよりその間には、曾根好忠（別項）の如き、源俊頼（別項）の如き、顯昭（別項）及び六條家（別項）の一派の如き、或は「萬葉」の語を用ひて詠歌し、或は歌の批判に「萬葉」を引用したりして、「古今集」を宗とする一派と對立し、「萬葉」に對する若干の傾倒が平安朝の中期から源平時代を通じて行はれてゐた事を知り得る。が、なほ作歌の標識として「萬葉」を自學する點には遠い。「萬葉」の眞の生命たる素材が廣汎で如何なる材料も取入れてゐる事、作者の歌に對する態度と考へ方が眞實で遊戲的でない事、表現が率直素朴で必要以上の虛飾をほどこさぬ事等を求めて「萬葉」に親しんだのではなかつた。「萬葉」のかゝる方面に觸れてそこから自己の歌に對する刺戟を得たものは源實朝（別項）であつた。實朝の「萬葉」傾倒は、用語などの小さな摸倣でなく、萬葉人のものの觀方、歌作の態度を直ちに取つて我がものとして生かしたのである。仙覺・由阿・契沖等の萬葉註釋家を經て、江戶の賀茂眞淵に至つて「萬葉集」は大きな理解者を見出した。眞淵の「萬葉集」を以て古代人の直き大きな心の現はれと觀ずる態度は、藝術的よりも寧ろ宗教的感激の態度と云へる。門下から多くの萬葉學の駿足を出したのは當然である。但し彼の作歌そのものは、少數をのぞいては「萬葉」よりも寧ろ「古今」「新古今」の歌風に近く、說と作品とに矛盾がある。實際の萬葉作家としては、眞淵の主君田安宗武・僧良寬・橘曙覽（各別項）・平賀元義等を以て、德川期の萬葉歌人（萬葉の影響下に在つた作家）とすべきであらう。德川期に於ける「萬葉」の影響としては、この外に、歌論（別項）の主題となつた事、「由良物語」の如く直接的に、「蛇性の淫」の如く、ごく間接的（中の地名や歌が萬葉集に關係あり）に小說の材料となつてゐる事などが注意される。明治以後、學者註釋家以外で「萬葉集」に親しみ、その影響を蒙つた第一の人は正岡子規（別項）である。子規は「古今集」を、採るべき歌一首も無しと痛罵する一方、「萬葉」殊に滑稽歌等を含んだ卷十六の如きを極力推賞し、自身及び門下なる根岸短歌會（別項）一同、萬葉風の歌を作つた。伊藤左千夫・長塚節（各別項）等の門下は、子規の死後その歌風を持續し、その一派は雜誌「アララギ」（別項）により、明治四十年代の初期「明星派」（別項）の衰ふると共に「アララギ」の萬葉歌風は歌壇（所謂異派の歌人を除く）を覆ひ、「萬葉集」への理解や傾倒の著しいこと、空前とも言ふべき狀態を現はして現在に至つてゐる。

【訓點】平安朝の初め、既に「萬葉集」が解し難くなつてゐた事は、「新撰萬葉集」の序文によつて明かである。又「後拾遺集」の序に、「かの集の心は、易き事を隱して難き事をあらはせり。そのかみの事今の世に叶はずして、惑へる者多し」と言つてゐる事などによつて、平安朝中期もさうであつた事が分る。かくて漢字のみの「萬葉集」を先づ讀むために訓點を附する事、次に意味を知るために註釋のことが起つたのは當然である。訓點は、仙覺の所謂古點・次點・新點の三度に附せられた。古點とは村上天皇の天曆五年十月昭陽舍（梨壺）に於て、大中臣能宣・清原元輔・坂上望城・源順・紀時文の五人に訓を附せしめられた事をいふ（源順集の題詞、拾遺和歌集・袋草紙・詞林采葉抄等に見ゆ）。次點とは、古點以後（正確に知り得る限では、藤原道長以後）仙覺が新點を附する迄の平安・鎌倉の初期に亙る可なり長い間に、各人により不規則に附けられた訓點の總稱である。次點を附した人は詳かでないが、顯昭の「顯昭陳狀」によつて大江匡房・藤原敦隆・道因の三名が分り、由阿の「詞林采葉抄」によつて藤原道長・大江佐國・惟宗孝言（藤原孝言とあるを武田祐吉氏說により改む）・大江匡房・源信・源師頼・藤原基俊の七名がわかる。武田氏はこの外に、藤原定家・藤原清輔二人の名をも擧げてゐる（萬葉集書志）。これ以外にもゐたらう事は「采葉抄」に「藤原基俊等」と記せるによつても明かであるが、以上の外に記錄なく不明である。次點歌の數が幾首だつたかも、素より不明であるが、武田祐吉氏は最少限九十二首だけは次點歌となし得と斷じてゐる。新點は仙覺が彼の時迄に訓の附けられてゐなかつた歌百五十二首に對して寬元四年に附けた訓である。この事は彼の著「萬葉集註釋」中に詳かであるが、どの歌々が新點の歌であるかは、彼の文永三年本（「傳東」の條參照）の流である「大矢本萬葉集」によつて分る。即ち大矢本の訓には三種あつて彼以前の訓のまゝのは墨、彼以前のを彼が訂正したのは青色、彼の發明した訓は朱色で附し、その朱色が即ち新點で百五十二首ある。兎に角仙覺迄の幾多の人の努力によつて、その訓の良否は別として「萬葉集」の全部の歌に訓を附け得たのである。仙覺以後その古・次・新三度の訓を補訂する努力が數百年に亙つて行はれ、今後も永く行はれて編纂當時の「萬葉集」の訓法へ近づかんと努められてゐる。

【註釋書】平安朝に於て、既に註釋書が若干現はれてゐたかと疑はれるが、今日知り得る最古のものでは、平安末期源平時代の頃に成つたと思はれる佚名氏の「萬葉集抄」上・下だけである。外に藤原仲實の「綺語抄」、藤原範兼の「和歌童蒙抄」、顯昭の「袖中抄」等當時の書には萬葉語の解釋が見え、「俊頼口傳」「奧義抄」中には歌全體の解釋も見える。註釋書以外の當時の「萬葉」研究書には、「萬葉」全體の性質や編纂に關するものに、顯昭の「撰萬葉集時代之勘文」（亡佚）、道因・勝命の「難撰萬葉集時代の勘文事」（亡佚）、顯昭の「陳道因勝命等難撰萬葉集時代條々事」、藤原俊成の「萬葉集時代考」、藤原定家の「萬葉集長歌短歌之說」があり、歌の性質によつて「萬葉」の歌を類聚したものに、「類聚古集」「古葉略類聚鈔」があり、歌數の統計をとつたものに、藤原敦隆の「萬葉集目錄」（亡佚）、著者不明の「萬葉集目錄」（近衞公爵藏）の一書があり、作者の傳記を考證した書に、藤原清輔の「人丸勘文」（亡佚）、顯昭の「柿本朝臣人麻呂勘文」がある。以上を通觀すれば、平安朝末迄の萬葉研究は、註釋の書に乏しい事、近世の萬葉研究書の大部分が註釋書であるのと著しい對比をなしてゐる。これは當時の人の「萬葉」に對する態度が、ただ歌・論爭の參考になりさへすれば事は足り、「萬葉」の學問的に正確な理解（近世以後はこれを求めた）の如きは、必ずしも必要としなかつた故であらう。降つて鎌倉時代で最も注目すべきは、本文校訂及び訓點の部分に不滅の足跡を殘した仙覺の「萬葉集註釋」（一名仙覺抄）（別項）で、撰釋ではあるが、權威ある註釋書の最初のものである。次に仙覺の學說を繼いだ由阿が、南北朝の頃同じく關東に出で、「詞林采葉抄」（別項）「拾遺采葉抄」「青葉丹花抄」の良書を著はした。第一の著は就中有用である。これ等についで猪苗代兼載の講義を桑下叟が筆錄した「萬葉集之歌百首聞書」、種玉庵宗祇の「萬葉集抄」（別項）（亡佚。今はその抄本萬葉評抄書のみを存す）、中御門宣胤の「萬葉集抜書」（同人に萬葉類葉抄なる類聚の書もある）、著者未詳で、堯以の作かと言はれる「萬葉集目安」がある。以上が鎌倉から室町戰國に至る著書及び著者で、これを概觀すると、この期の初めに出でた仙覺及び中期の由阿、この二家のみが秀で、餘は唯その足跡を追ひ、その範圍を徘徊摸索してゐるに過ぎない。德川期以後の註釋書は極めて多く、この期最初の大著は北村季吟の「萬葉拾穗抄」（別項）で、從來の註釋書の說をほぼ大成したもので、且つ二十卷全部に譯をつけたものの最初である。季吟に「萬葉」の難語を解說した「萬葉集秘訣」もある。ついで大阪の下河邊長流に「萬葉集管見」（別項）「萬葉集鈔」「萬葉集名寄」等があつて創見に富んでをり、「管見」は就中良著である。長流に私淑した僧契沖には水戶光圀の囑によつて執筆した「萬葉代匠記」（別項）がある。貞享年間（貞享四年の頃か）に成つて光圀に奉つた（これを初稿本と云ふ）が、その意に滿たなかつた爲め、元祿三年頃再度奉つた（精撰本代匠記）。これは二十卷全部を譯した第二の註釋書と云ふ歷史的意義の外に、廣く古寫本を對照して本文の誤を訂正し、科學的で該博な考證を施し、後に「古義」の出づる迄は、これに比肩する註釋書を見出せない。彼の弟子の海北若沖に「萬葉集類林」（別項）「萬葉集作者履歷」「萬葉集師說」等があり、今井似閑に「萬葉緯」（別項）、野田忠粛に「萬葉類葉」があつて萬葉研究の小部門を探求した。次に京都の荷田春滿は、著名な「萬葉集僻案抄」（別項）の外「萬葉集訓釋」「萬葉集問答」「萬葉和假名訓」「萬葉童子問」「萬葉改訓抄」等を著はした。彼の著は往々偏りに私見を出し過ぎて創見と僻說とを共具してゐる。又著名な「萬葉童蒙抄」（別項）は、彼の講義を弟の信名が筆記したものである。春滿の流を汲んだ賀茂眞淵には、「萬葉考」「同別記」「冠辭考」（各別項）「萬葉集遠江歌考」「萬葉集新採百首解」（別項）「萬葉集竹取歌解」がある。前二著は就中有名である。眞淵の學風は、卓拔な創見を立てて前人未踏の境地を開いた所に在る。又藝術的な鑑賞を所々に加へてゐる特色もある。併し語釋等に如何にしても看過し得ない偏りすぎた說を多く含んでゐると云ふ缺點がある。が、彼の功績は著書より以上に古學を天下に鼓吹し、その門下を養成した點にある。彼の直接の門下によつて加藤千蔭の「萬葉集略解」（別項）、荒木田久老の「萬葉考槻落葉」（別項）、本居宣長の「萬葉集玉の小琴」（別項）の注目すべき三著が生れた。なほ宣長門下の宮地春樹に「萬葉集私考」、田中道麿に「萬葉問聞抄」の著がある。やゝ降つて、眞淵門なる村田春海門の岸本由豆流に「萬葉集攷證」（別項）の良書がある。更に降つて橘守部が創見に富んだ「萬葉集墨繩」「萬葉集檜嬬手」（各別項）を著はし、その門下橋本直香は、卷十四東歌中の上野の歌を解釋した「萬葉集中上野歌解」を著はした。これ等の江戶を中心とした研究に對して、京都に（岸本由豆流等に少しく先んじて）香川景樹の「萬葉集捃解」（別項）、富士谷御杖の「萬葉集燈」（別項）が出た。

これ等からずつと降つて、江戸末期に土佐の鹿持雅澄が出でて、從來の諸說をほぼ集大成して「萬葉集古義」（別項）の大著を完成し、且つその附屬的研究として集中の動植物を研究した「萬葉集品物解」（別項）、作者の研究たる「萬葉集人物傳」、地理の研究書「萬葉集名處考」「同名處國分」「同坐知佳境附錄」を、言語の研究書として、「萬葉集枕詞解」「同古言類通及日次」「玉蜻考」「言靈德用」「用言變格例」（別項）「舒言三轉例」（別項）「雅言成法」「結詞例」「鍼嚢」（一名歌詞三格例）（別項）、歌格の研究書として「永言格」（別項）を著はし、萬葉研究の諸部門を大方網羅した。上記の註釋書の外に、類聚や語釋の專門書が多數集出したが、中に僧春登の「萬葉用字格」（別項）、石塚龍麿の「假字遣奧山路」（別項）は、用字法を專門に研究した書として、共に逸すべからざるものである。また古代歌謠の歌格を研究するに當つて、記・紀の歌謠と共に「萬葉」（主として長歌）が、常に必ずその材料・對象となつてゐたことに留意すべきである。即ち小國重年（長歌詞珠衣）・橘守部（長歌撰格・短歌撰格）・鹿持雅澄（永言格）・近藤芳樹（古風三體考）・六人部是香（長歌玉琴）等の歌格研究は、取りもなほさず萬葉歌格の研究なのである。以上が德川期に於ける萬葉研究の大體である。これを通觀すると、「拾穗抄」「代匠記」「略解」「古義」の四全釋書の外、獨創に富む「考」「玉の小琴」「燈」など、精密なる攷證を出して、註釋の方面で大きな成果を收めてゐる。また部分的研究に於ても「品物」「地理」「用字」等の諸著を生んで、前代の研究に比して飛躍的な進歩を遂げた。ただ攷證の如き二三の例外を除いては、註解に當つてみだりに文字を變改して憚からないのは、德川期全體を通じての學者の大缺點である。この弊を改めんと欲したのが、幕末から明治にかけての學者木村正辭で、「萬葉集美夫君志」「萬葉集略解補正」は、この點に留意してゐる。正辭は、又岡本保孝（「萬葉集略解札記」の著あり）に音韻の學を受け、漢字に關する造詣が深く、「字音辨證」「訓義辨證」「文字辨證」「萬葉集訓字書索」「萬葉集譜例」等の文字の研究があり、萬葉の古寫本及びその系統を研究したものに「萬葉集書目提要」がある。次に明治以後の萬葉家として第一に佐佐木信綱博士を數へねばならぬ。佐佐木博士の事業は甚だ多方面である。現存の最古の目錄書たる「萬葉集目錄」（假名）、最古の註釋書「萬葉集抄」等の最も貴重な古書發見をもたらした古書探索の方面、桂本・元曆校本・天治本・金澤本・西本願寺本・類聚古集・古葉略類聚鈔等の複刻事業の方面、「校本萬葉集」による古寫本校訂の方面、「萬葉集選釋」（その附錄、萬葉集書目解題は貴重な文獻である）「萬葉漫筆」等に見ゆる語釋、その他の研究の如く廣汎に亙つてゐる。次に井上通泰氏によつて第五番の全釋書、「萬葉集新考」（別項）が成り、山田孝雄博士の「萬葉集講義」（別項）、鴻巢盛廣氏の「萬葉集全釋」（四卷）等が相次いで刊行された。註釋以外の書では、前記の「校本萬葉集」が佐佐木博士・橋本進吉・武田祐吉・千田憲・久松潛一の五氏によつて完成され、その首卷附卷には、古寫本及び註釋書に關する權威ある諸論文が收められてゐる。更に岡山の正宗敦夫氏によつて、「萬葉」の單語全部の索引たる「萬葉集總索引」の著が完成した。なほ「萬葉集」の性質及びその書史的研究に關する書に、武田祐吉氏の「萬葉集書志」「上代國文學の研究」、久松潛一氏の「萬葉集の新研究」及び「上代日本文學の研究」その他に發表されてある諸論文、島木赤彥氏の「萬葉集の鑑賞及其批評」、生田耕一氏の「萬葉集釋文索引」（萬葉の解釋の古來の文書中に存在するものすべてを集成する有益な計畫で、目下古事記傳の部のみが發行された）等がある。また明治以後特有の現象として雜誌の刊行が盛んになつた爲め、雜誌に收められた貴重な論文が少くない。山田孝雄・橋本進吉・澤瀉久孝・品田太吉・鴻巢盛廣諸氏のものは就中注目に値する。又雜誌中には、特に萬葉號として「萬葉集」に關する論文を載せて特輯號を發行したもの亦少くない。明治以後の研究を概觀して最も感ずることは、印刷術の影響によつて研究が急速に傳播してゆくことである。一つの研究の發表は、僅少の時間で他の遠地の學者へまで傳はり、それが相互に影響し合ひ、相謀つて急速な研究の進歩を遂げてゐる事實である。次に木村博士の本文を重んじ、みだりに誤字說を立てて文字を變更するのを斥ける態度は、博士以後の學者によつて受けつがれ、「校本萬葉集」發行と相俟つて、文字の改變を極度に嫌ふ態度が一般にとられてゐる。これは德川期の學者と著しい對比をなすものである。最後に今一つの特色は、「校本萬葉集」「萬葉集總索引」及び「萬葉釋文索引」の事業等、德川期の註釋を主とした研究の外に出でて、その註釋（及び研究）の根柢となるべき基礎事業が、近年特に興隆しつつあることである。（以上森本）

萬葉集燈　まんえふしふあかし　註釋書　五册　【著者】富士谷御杖　【成立】文政五年　【刊行】同年頃　【諸本】萬葉集叢書第一輯所收。【內容】卷一の全註である。文政五年正月の自序があり、初めに「萬葉集燈おほむね」と題せる總論があり、これにも文政五年正月の年月が見えてゐる。その形式は、先づ全歌をあげ次に「言」の字を標して歌句を一句づつ摘出し、その下に註釋を施した。その次に「靈」の字を標して一篇の意を釋してゐる。凡例には、「かねて此事註しおけること百卷あまり」とあるから、卷一以下にも稿本が出來てゐたやうであるが、これは推定であつて稿本が出來てゐたわけではあるまい。ただ「萬葉集略解」に書入を加へた腹稿と思しきものが傳はつてゐた（その書入本は震災で燒失した）。【價値】本書の特色は、言語の註釋のみに止まらず、「靈」と標して歌の精神に說き及んでゐる點にある。即ち著者は一家の見識よりして言靈說を抱き、その立場から歌を言と靈とにわけて解釋したのであるが、言語解釋のみでは慊らずとなし、その言は神の力によつて成るとして、言の裏に宿る精神までを說かうとした。併し、その言靈說なるものは、歌を藝術的に主情的に解しようとするのではなく、寧ろ道德的に或は神道的古道的に觀て說かうとするのであるから、一篇の總意を說くに當つても、歌を深く寓義づけて解釋しようとし、寧ろ入りほかに、牽強附會に陷つてゐて、その「靈」の解釋には議すべきものが少くない。殊に歌は倒語であると云ふ立場から、これを諷喩的に觀ようとした爲め、曲解に陷つてゐる點がある。併し、歌に深く沈潛しようとする態度は、他の學者の單なる言葉の末に走つた態度と較べて、著しい特色があるが、ただ歌の眞義に徹底せざるものあるを遺憾とする。かくの如き著者の態度は、異本との校合や歌の調や語義の解釋には多くの注意を拂はなかつたやうである。併し、その間に觀るべき創見も挿まれてゐて、語句の註釋としてもすぐれたものがある。また文法學者として傑出せる著者は、手爾乎波に深い注意を拂ひ、文法的に語句を解釋してこの方面にすぐれた說がある。いづれにしても本書は、他に比類なき種々の特色ある註釋書として、卷一の研究には缺くべからざる書である。

【附記】富士谷御杖の「萬葉集」註釋書としては、御杖の父成章の門人日下部景綱の著に、「萬葉考」三册があり、卷一の初めから「潮左爲二」の歌までの註釋、天明二年成。

【參考】萬葉集書目提要（木村正辭）○校本萬葉集首卷（諸本解說）　（佐佐木）

萬葉集東語栞　まんえふしふあづまことばのしをり　研究書　一卷【著者】田中道麻呂【別名】萬葉集十四二十類詞略【成立】寛政二年【諸本】寛政二年稿成つて石塚龍麻呂に送りたるを栗田麻須賀の寫せる本あり、神宮文庫に伴信友の文化三年の寫本、岩崎文庫に木村正辭博士の寫本等あり。稿本叢書第一卷に收めて刊行した。【內容】卷十四及び卷二十の東歌の語の中より通音のものを集め、阿以宇要於以下の五十音の各行別にわかち、その中を「加ヲ古ト云」「加ト久ト通」の如く標して語を出し、丁數を記し、所々註を加へた。終りに「世奈ト云詞」「略語之例」を附す。「略語之例」は「宇ヲ略」「阿ヲ略」「於ヲ略」「伊ヲ略」「雑略」に分ち、語を出し丁數を記す。和爲宇賀の部の「宇ト手」の項の例を示すと次の如くである。

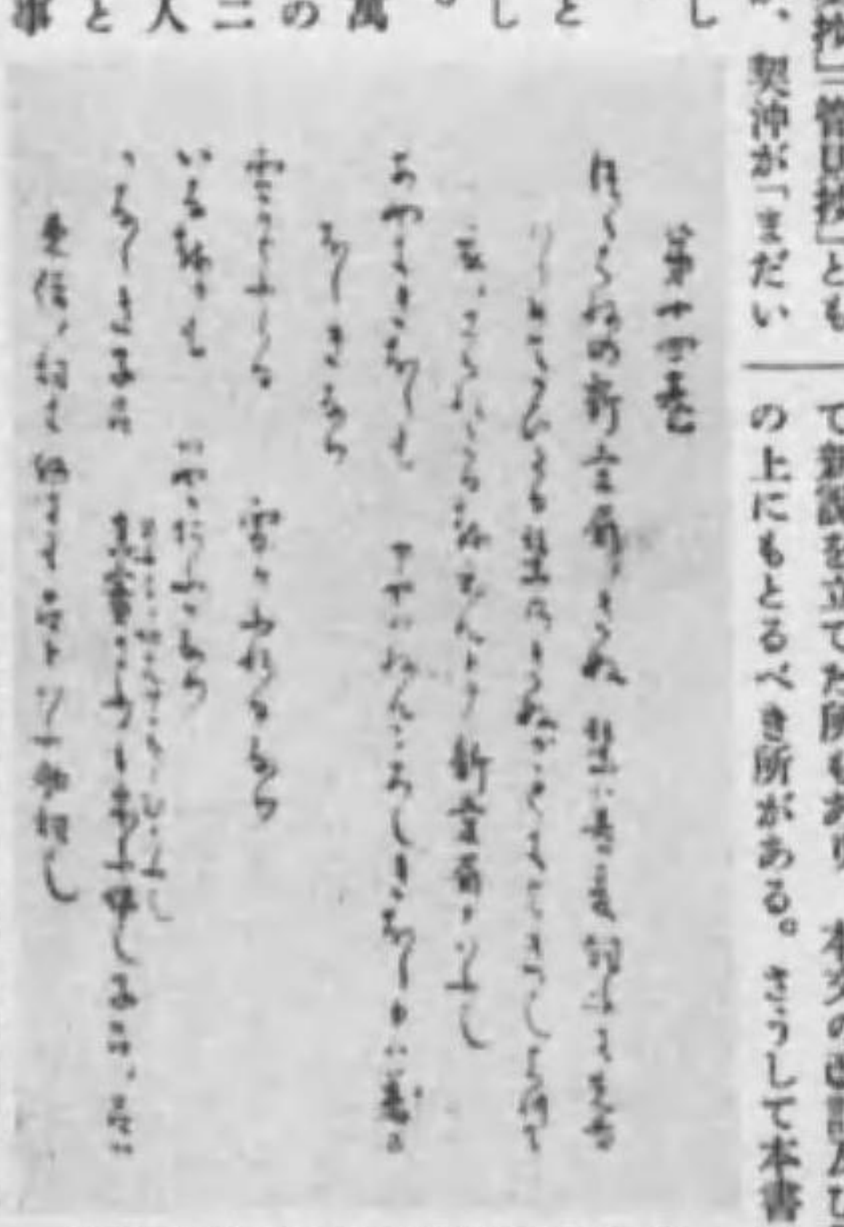
宇家良我波奈乃　八オ　廿六オ　和名抄手介良
手佐幾爾良波里　廿九ウ　和名抄字佐木

【價値】東語の如き特殊研究の先鞭をつけたものである點に價値を有する。東語の通音を分類表的に指示した書は、本書が唯一のもので、井上通泰氏の「萬葉集新考」附錄の「萬葉集」卷第十四輯訛例一斑は、これに類したものである。また物集高世氏の「萬葉集東語例」は集中の東歌の語を、天象時候・神祇幷神事・釋教・居所・器材・草木等に分つて索引をあげ、餘りに通ふ言、省く言、發語等の例をあげたもので、これまた道麻呂の著と似たものがある。その他東歌に關しては、「萬葉集遠江歌考」一册（賀茂眞淵）、「上野歌解」二册（橋本直香）、「東歌地名考」一册（原久胤）、「萬葉集東歌集」一册（高須嘉規）等の如く、地理的に東歌に注意した書は可なり多いが、東語に關する編著は甚だ少い。木村正辭博士の「萬葉集[illegible]」は、東語の研究であるが、原字のまゝで今の調の如く讀まず、普通語と同樣に讀み得る事を考證した書であるから、本書とは全く目的及び立場が異つてゐる。併しこの木村博士の說は首肯し難いところで、矢張り本書の如きが東語の研究としては穩健で且つ要を得てゐる。道麻呂の著は他人の着手せざる先驅的研究である點に何れも價値があり、同時に奇矯に流れず、あくまでも着實な研究を進め、正確なる說を出し、綿密なる調査を經てゐる點に於て、その著書は後人に裨益を與へる。

【附記】道麻呂の著述は殆ど類聚抄出の書で、次に掲げる最後の一部だけが註釋である。〔萬葉集に關する著書〕萬葉問聞抄三卷（卷三より卷二十に至つて、道麻呂がその師本居宣長に自說を述べ、疑問の條々を問うたのに對し、宣長が應答したもの。卷一・二がないのは「萬葉考」が出てゐるから、これに讓つたのであらう。道麻呂の說を窺ひ得るのみならず、宣長の說を知り得る點に於て、「玉の小琴」の缺けたる所を補ひ、且つ「玉の小琴」と幷せ見るに裨益する所が多い。その說概ね着實穩健、今日採り用ひられたる說が多い。萬葉集叢書所收）○撰集萬葉徵　三卷（勅撰集中に出でたる「萬葉集」の歌を網羅し、「萬葉集」の歌と併せ出して比較研究に便し、頭註に「古今六帖」、「歌仙歌集」等に出でたる同歌をあぐ。附錄一卷には、作者別に、勅撰集に入りたる歌數の表を揭ぐ。勅撰集に出でたる「萬葉集」の歌は必ずしも遺漏がないわけではないが、甚だ便利な書で、著者の勞苦のほどが察せられる。天明元年成稿。萬葉集叢書所收。伴直方の撰集「萬の栞」（文政十三年成）も同樣の書）○萬葉集地名草一卷（集中の地名を五十音順に排列して卷數丁數を示したもの。鈴屋文集に、田中道麻呂萬葉名所歌抄序（天明五年）のあるのは、別本であらう）○萬葉集類句歌抄一卷（集中の歌の相似たる句を抄出して並べ書きたるもの。天明四年成）○萬葉集抄十卷（十五卷までに略解を附した小冊本で細字に記してある。自筆稿本を靜嘉堂圖書館に藏する）。

【參考】萬葉集書目提要（木村正辭）　（佐佐木）

萬葉集管見　まんえふしふくわんけん　十册【著者】下河邊長流【名稱】「萬葉集抄」「管見抄」ともいふ。【成立】未詳であるが、契沖が「まだいとわかゝりし時かたばかりしるしおけるに」とあるのや、「長流がわかき時かける抄」とあるによつて若年の時著はしたものである事は知られる。更に橋本進吉氏は、長流の「萬葉集」に關する說を窺ふ事の出來る「萬葉集名寄」「神佛二聖和歌註」「枕詞燭明抄」「百人一首三奧抄」「歌仙抄」などと本書との說の異同を檢する事によつて、寛文初年頃もしくはそれより數年前に成稿したのではなからうかと推論を下してゐる。【諸本】東京帝國大學國語研究室藏本は長流の自筆本であつたが、大震災の時燒失した。この書は各册の表紙には「萬葉集抄」とあるが、第一册の卷頭には「萬葉集管見」とある。二卷を一册とし、十册から成つてゐる。半紙型袋綴の本であつて淡青色の表紙が附してある。本文の中には所々朱で書入を加へたり、補訂を加へたりしてある。中には墨で補訂を加へた所もある。が、矢張り長流の筆に成るものである。而してこの書は序も跋もなく長流の著であるといふ事も何處にも見えてゐない。「萬葉集管見」の寫本は水戶彰考館にあるが、五卷づつ一册にあつめて四册から成つてゐる。同じく序跋も署名もない。刊本としては武田祐吉氏校訂の萬葉叢書本と長流全集本とがある。【解說】本書は「萬葉集」二十卷にわたつて難語句を擧げて簡明に解釋したものであつて、「萬葉集」二卷づつを一册にしてゐる。總論はない。註釋は從來の說より出でて新說を立てた所もあり、本文の改訂及び訓の上にもとるべき所がある。さうして本書の歷史的地位及び價値は、近世の「萬葉集」研究に於ける新學派の先驅をなした所にあるが、同時にその學說が契沖の「萬葉代匠記」（別項）


萬葉集管見自筆稿本（東大藏）

に影響する所が多く、「代匠記」を生み出す一の契機ともなつた所にある。「代匠記」の初稿本を見ると本書の影響の跡を著しく見られるのである。契沖のみならず、荷田春滿の「萬葉僻案抄」（別項）にも影響してゐる。

【參考】 萬葉集管見 武田祐吉（長流全集）○下河邊長流の萬葉集管見 橋本進吉（國學院雜誌一八ノ五・六）○萬葉集管見と萬葉僻案抄との關係 大石新（國語と國文學四ノ二） （久松）

萬葉集捃解

まんえふしふくんかい　和歌　一冊　寫

【著者】香川景樹【成立】文政二年以前、恐らく文化の末に作られたであらう。本書と景樹の「柿本朝臣人麻呂歌師說」（文政二年夏成）とを比較すると、「人麻呂歌師說」より前になつたことが分る。【諸本】松波家藏本と、その傳寫本である井上通泰氏藏本及び竹柏園所藏の景樹の門人の寫した本とがあるが、松波家本は表紙には「萬葉集捃解自一四之上迄」とあり、松波遊山がその藏本の袋に、「萬葉集捃解未全故憚他見」と書いてゐる。【內容】本書は、「萬葉集」の卷一から卷四の「世間之女爾思有者」の歌に至る難歌難句を抄出して解釋したものであるが、景樹は歌人として調を重んじただけあつて、歌の格調の上から卓說を出した點が所々見える。「捃解」に「如此許戀乍不有者」の「あらずは」を「アランヨリハ」と解した宣長の說を否定し、「コハ戀ツヽアラズ、高山ノト云ヘカリノ詞ニテ、者ハ例ノ輕ク見ルノ也」とした如き、その理由を擧げてはないが、歌全體をよく味はつた上で立てた卓說とする事が出來る。しかしこの說は、直好云とあつて景樹自身も「コノ不有者ノ詞ヲアランヨリハト云言也ト云ルハアラス、サテハ不ノ字ノ靈開エス」と言つてゐるが、恐らく直好の說によつてであらうと思はれる。しかしこの外に、景樹自身の說で調の上から解した說は多く、たとへば、「由久遊久登觸稀吾弟云々」に對して「コレヲ觸タキトヨムハ、ユクユクトトアルニ調ヨカラス。ナホ觸タムトヨムベシ」とある如き、調の上から來たのである。景樹の說の悉くがすべて是であるとは言はれないけれども、格調を基礎として一首の歌全體から見た態度は、十分注意すべき價値がある。なほ本書には直好の說を多く引き、また眞淵・宣長・久老、及び闘谷滯・木下幸文等の說をも引用してゐる。景樹は眞淵とは種々の點に於て反對の意見をもつてゐたが、調の上では眞淵の說に從つてゐる所もある。【價値】要するに、本書は零細なものであつて、萬葉註釋史上に特に優れたものといふ事は出來ず、景樹の著書の中でも「古今集正義」の如きに比べれば、重んずることは出來ないが、調を重んじた歌人及び歌論家として「萬葉集」の歌に向つても獨特の方法を以て註釋を試みたことを認めるべきである。

【參考】 萬葉集註釋書の研究（校本萬葉集首卷下） （久松）

萬葉集訓義辨證

まんえふしふくんぎべんしよう　研究書　二卷二冊

【著者】木村正辭【成立】安政二年【刊行】明治三十七年【解說】萬葉三辨證の一。安政二年二月の自序及び凡例がある。集中の用字の疑はしきものに就き、和漢の典籍によつてその文字の訓義を論じ、從來の諸說の誤れる事、說き洩らした事を證したるもの、又正字・俗字・略字等の別に論及した所がある。用字の校異を諸寫本によつて示した。上卷は丈夫より[illegible]に至る四十四項、下卷は決より榜・棹・梶の字の訓に至る五十四項及び榜字訓義附說を收めた。

萬葉集考

まんえふしふかう　和歌　九冊　（佐佐木）

【著者】賀茂眞淵【別名】萬葉考【成立】總論の終りに「寶曆十年七月しるす」とあり、卷一解の終りに「寶曆十年三月しるしぬ」とあるから、この頃成つたのである。【刊行】卷一・二及びその別記合せて三冊は明和五年に刊行、次いで同年になつて求板梓行せられたが、更に文政七年になつて卷一・二・三・四・五・六及びそれ等の別記合して九冊が刊行された。【諸本】東京帝國大學圖書館藏「萬葉集考」三冊は眞淵自筆で總論一冊、卷一の註釋一冊、別記一冊から成つてゐたが今は燒失した。外にも、「萬葉集考」の一部分の眞淵自筆本が藏せられてゐる。刊本には明和刊本（一・二及び別記）と文政刊本（一より六まで）とがある。六卷以外の十四卷は眞淵の草稿に門人の狛諸成が手を入れたものであらうが、寫本として傳へられてゐる。眞淵全集本は諸成本の十四卷を併せて二十卷として收めてある。【內容】總論に於て「萬葉集」の文學批評的研究をなし、「萬葉集」の時代を歌の發達の上から五期に分ち、それぞれの特質を述べてゐる。人麿・赤人・憶良・旅人・家持等の批評も簡にして要を盡してゐる。本文は現在の「萬葉集」二十卷のうち卷一・二・十一・十二・十三・十四を古い部分とし、この六卷を擇んで註釋を施したのである。この大膽な本文批評の見地は必ずしも從ひ難いにしても、その直觀的な學風はよく現はれてゐる。「萬葉集」の本文を改め、新しい訓を附した所も多く、簡明な註解、また創見に富んでゐる。しかし本文批評に於ては歌の內容から見て徒らに本文を改めた點も尠くない。【價値】本書は眞淵の著書の中で最も重んずべきものであるのみならず、萬葉註釋書の中に於ても最も特質を有する著書である。殊に近世に於て「萬葉集」研究が盛んになつたのは眞淵のこの書に負ふ所が多いのであつて、歷史的意味に於て忘れることが出來ない。さうして總論は近世に於ける最も優れた「萬葉集」の批評であらう。 （久松）

自筆萬葉考稿本（東大圖書館藏）

【參考】 校本萬葉集首卷下○萬葉考の書史學的考察 佐伯梅友（國語國文の研究、昭和四ノ四）

萬葉集講義

まんえふしふかうぎ　註釋書

【著者】山田孝雄【刊行】昭和三年第一卷、昭和七年第二卷刊、以下續刊の豫定。【成立】大正十年四月、故萩之家門下の山本まち子氏の懇請により、萩之家同人のために「萬葉集」卷一より講じ始め、卷二の半ばに至つて講義一時絕え、大正十二年の大震災によつて全く絕えてしまつた。然るに大正十二年に著者は東北帝大で「萬葉」を講ずる事となり、この兩者の講義をとりまとめて出版したもの。【內容】「萬葉集」卷一・二の詳細な註釋書である。卷三以下續刊の筈である。全體の組織は、最初に「卷第一卷第二の通說」として、「萬葉集」の卷一及び卷二の性質を解說してゐる。次に註釋の部がある。註釋の部は、最初に原文をあげ、その歌の題詞作者を解說し、次にその歌の語釋、最後に、「一首の大意」としてその歌の鑑賞評言の類を記してある。以上が本文である。最後に附錄として「萬葉問題集卷一」及び「索引」を附してある。前者は未だ何人も試みなかつた所で、「萬葉集」卷一中、未だ定解の立つてゐない五十二語を拔き出し、私解のあるものはその私解を記してある。【價値】「萬葉集」二十卷中、卷一・二は註釋研究の書が最も多い。その類書中本書は最も正確な書である。これは一つは著者の博識が自然に本書の註解を正確な信頼すべきものたらしめたによるが、一つには著者の態度が確實な證據のあるものでなければ說を立てない。然らざるものは幷附錄の問題集の中に擧げて未解語として扱ひ、確定未定の界をはつきり區切つて解說してあるのによる。第二に、語句の解釋が的確で詳しい。これは、文法國語の學者たる著者の特色がここに發揮された結果である。第三に、引用する證例が該博である。和漢の書から廣く求め、殊に本邦の書では、「新撰字鏡」「類聚名義抄」の如き辭書の活用が目に立つ。第四に、卷一附錄の問題集である。こゝに未定解の五十二語を擧げた著者の意向は、この未解決の語をすべて集め擧げておく事によつて、遂にこれ以外の語は、本書中にすべて解明せられ居る事を示す。その結果、既決語・未決語の境界線をはつきりと引くことが出來る。この界線を引くことが、今後の研究の出發點となるものであると云ふ意見で、これは、從來の學者の何人も未だ考へ及ばなかつた重要な試みである。 （森本）

萬葉集攷證

まんえふしふかうしよう　註釋書　十五冊

【著者】岸本由豆流【成立】文政十一年。卷一の註解二冊を初め、文政六年十月十九日より筆を取り始めて以來、卷六の註解二冊を文政十一年十月十二日に完成。その間火災に二度類燒し、また家の新築、「萬葉集類字」（後出）の編纂、その他人事關係で筆を休めた期間があつて、五年を費して六卷十五冊が出來上つたが、それ以後の續稿はない。【諸本】稿本は帝國圖書館に藏せられる。傳本尠く岩崎文庫に木村正辭博士舊藏本がある。萬葉集叢書第五輯に七冊に收めて刊行。【內容】初めに部類分・題詞を記し、割註式に註解を附し、訓の必要なるものには、右傍に片假字で訓を附し、本文は歌詞を一句毎に出して、割註の形式で註釋を施した。その形式は「萬葉考」に似てゐる。從來の諸說を多くあげてこれを批判檢討し、その據るべきものは何の註釋書に從ふべきかを言ひ、また自家の新說をも出してゐる。その新說には注意すべきものや從ふべき說が多い。諸說の引用は精確で、その批評にも見るべきものがある。引用書には、「萬葉考」「代匠記」「略解」の說多く、春滿の「僻案抄」や宣長の說も所々にあげてゐる。【價値】本書は江戶時代に作られた註釋書のうち、最も優れたものの一つである。從來の說を引用してこれを批評したる如き、ただ舊說の列擧に止まらず、一家の見識を以てこれを取捨選擇し、その依據を明かにしてゐる。他の說を何の書によるとも記さずして、自說の如く述べてゐる書が多い中にあつて、本書のこの態度は、前人に對して忠實であると共に、讀者や研究者に對して親切である。またその新說は概ね妥當且つ明快で、取るべき說多く、而も人の氣のつかない卓拔な說も見える。すべて自說を建てるにも、多く例證を引いて述べるところ、よくその考證的態度が現はれてゐる。かうして全卷の註釋を終へたならば、その價値は「古義」以上で、比類の少い良書が出來上つたであらうが、中途で終つてゐるのは遺憾である。木村正辭博士の「萬葉集美夫君志」（別項）は、本書に學んだ所が多い。以てその價値を觀るべきである。

【附記】「萬葉集類語」二十九冊、松井簡治博士所藏。考證卷四上の奥書に、「三の卷を考證しをはりつる文政八年九月九日をきのふといふ日より、本集一部を類字することにかゝりてしばらく筆を閣つるが、ことし文政九年八月朔日に類字終りつれば云々」と見える類字はこの書であらう。歌句を五十音順に分つて卷數丁數を示したもの。由豆流の著書には考證と名づける註釋書と共に、類字索引の書が他にもあつて、その學風の一斑がこの點にも窺はれる。

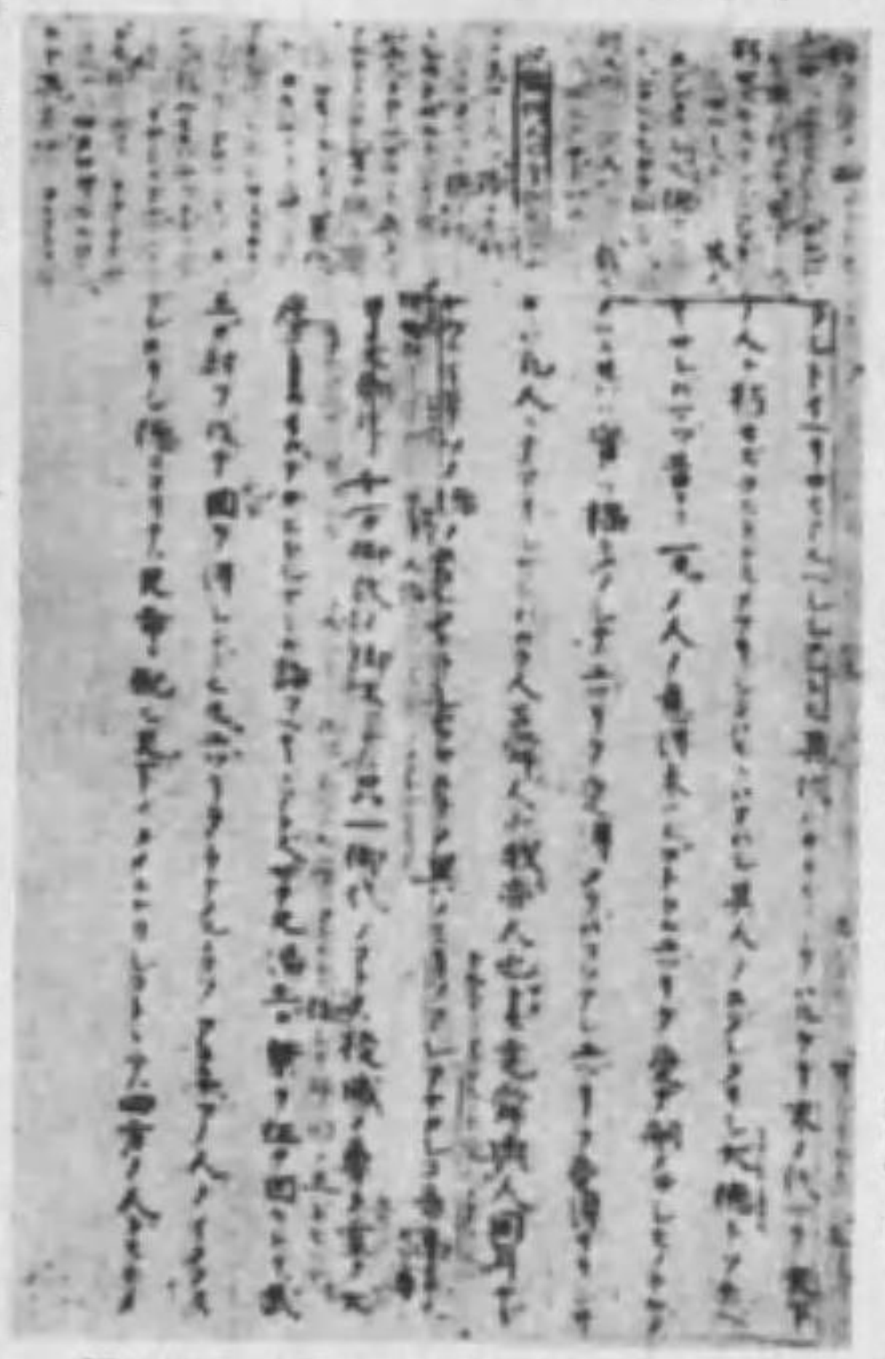
【參考】校本萬葉集首卷（諸本解說） （佐佐木）

萬葉集古義

まんえふしふこぎ　註釋書　百四十一冊

【著者】鹿持雅澄【成立】稿本の奥書によると、本文の解釋は文政十年より數年前に終つてその後改訂を加へ、文政十年から改寫を始め、文政十一年（戊子）の六月十七日には全部を改寫し、更に文政十三年二月より以前恐らくは文政十二年より再考にかゝり、天保二年四月二十二日迄に二十卷の再考を終り、それからまた七八年を隔てて天保十年に重案を加へた事が分る。而して卷二・十三上・十四下の如きは、その翌天保十一年に更に改寫し校合を加へたものであらう。又總考は本文を改寫し再考を終つた後、天保六年五月に起筆して同月中に終へ、天保九年に再考を加へて居り、又天保十一年に再案を終つてゐる。雅澄は安政五年六十八歲で歿してゐるから文政十一年は三十八歲で、天保十一年は五十歲である。故に雅澄が「萬葉集」の本文の解釋を一通り終つたのは三十七歲（文政十年）前であり、三十八歲（文政十一年）の時までに改寫し、四十一歲（天保二年）の時再考を終り、總考を四十五歲（天保六年）の頃稿し、五十歲（天保十一年）の頃本文の全部もしくは一部分を更に改寫し、又總考の再案を終つたと思はれる。而してその後もなほ改訂を加へていつたのである。更に本文の註釋及び總論の外の卷で成立年月の明かなものを見ると、「品物解」は文政六年から七年にかけて初稿を終り、文政十年に再稿してゐる。「枕詞解」は文政五年三十二歲の時に成り、「萬葉集名處考」（一名坐知佳境）は天保十二年辛丑六月八日、「坐知佳境附錄」は天保十二年辛丑九月二十六日、「萬葉集名所國分」は天保十三年壬寅七月二十三日に成つてゐる。また萬葉辭書ともいふべき「古言譯通」は天保四年癸巳六月六日の序と天保八年丁酉八月十四日の跋があるから、この間に出來たものであらう。かくて「萬葉集古義」の註釋を初めとしてその他「古義」に附屬する「萬葉集」研究書の成稿年月の分つてゐるものを見ると、天保十三年（五十二歲）の頃までには成つてゐたやうである。卽ち五十歲までに成つて五十歲以

澄歿年の六十歲までは、それまでに成つたものの增補を主とし、その他斷片的な小研究をなしたものと思はれる。【諸本】稿本としては飛鳥井雅古氏藏のは「總考」二册、「註釋」三十二册、「品物解」四册があつたが、これ等は關東大震災の時燒失した。次に飛鳥井雅四氏藏の「萬葉集古義總考」二册、「萬葉集記聞」一册、「萬葉集考證」一册、及び大島雅太郎氏藏の「萬葉集品物解」三册がある。この中「古義總考」二册は「總考」の三と四とに當る部分で雅古氏藏の「總考」二册と合せて「總考」四册の稿本が揃つてゐる。大島氏藏の「品物解」は飛鳥井氏藏の「品物解」（一卷を缺く）が初稿本であるに對して、これは再稿本である事は年附によつて明かである。又「萬葉集品物圖解」の寫本が帝國圖書館に藏せられてゐる。古義稿本の中、註釋の部分は各卷を上中下又は上下に分けてゐるが、更にこれを天地に分ける考であつたか、所々に附紙をして「天トナルヘズ」といふやうに斷つてある。これ等は恐らく雅澄にこの書を版行する志があつて、その時にここで分册にする意志があつたのであらう。かくの如き稿本の外に、版本としては明治十一年に宮内省で上梓されることになり、爾後十三年を經て明治二十三年に完成された版本がある。この版本の底本となつた本に就いては古義の初めにある明治十二年八月の福羽美靜の序に、「この書もと雅澄が生涯の力をつくし世を去るまで校正してやまず。また卷帙甚だ多きがゆゑに正本に乏し。雅澄が門派高知縣士族岡孝陳が藏本ひとり全本たるのみ、その他雅澄の嗣子飛鳥井雅陵の家に藏する所といへどもなほ完全ならず」とあり、更に「本篇百卷は岡孝陳が寫れる所、附錄二十餘卷は飛鳥井雅陵の寫れる所なり」とある。古義を上梓するに當つてはその費用は明治天皇の御手許金から出たといふ事であり、上梓するに際しては雅澄の門下である井野邊堅水氏・羽生氏、外に某氏との三人が或は版下をかき、或は校正したとの事である。この宮内省本は本文二十卷、註釋九十五册、總論四册、枕詞解五册、萬葉集人物傳三册、萬葉集品物解目錄一册、萬葉集品物解四册、萬葉集名所國分一册、萬葉集名所考六册、坐知住境附錄一册、玉蜻考一册、古言譯通目次一册、古言譯通四册、雅言成法二册、鍼嚢（一名歌詞三格例）二册、永言格三册、結詞例一册、舒言三轉例一册、用言變格例一册、言靈德用一册。外に門人の松本弘藤の編んだ萬葉註釋目錄四册、全部で百四十一册である。更に活版本は以上のうち、玉蜻考までを刊行したのであつて外に、半紙判活版本では松本弘藤の註釋目錄一册を加へて三十一册とし、洋裝活版本は註釋目錄の代りに國書刊行會で編した萬葉集古義索引を附して十卷としてある。


萬葉集古義自筆稿本（飛鳥井雅四氏藏）

【内容】本書は「萬葉集」本文の解釋を中心として枕詞・人物傳・品物・地名、その他「萬葉」に關する各方面の研究を完成したものである。而して中心をなす註釋を初め、その他の部分に於ても、極めて精緻に從來の研究を綜合してある。また一面に於て雅澄の創說も見られるのであるが、創說に於ては多少牽強のそしりを免れないものが多い。たとへば「古義」に於て歌の順序を變へてゐる點の如きも、餘り確實な根據もないやうであり、また語の解釋、殊に枕詞の解に於て餘りに自然のまゝの解釋を忘れて無理に解釋した觀がある。「ひさかたの」を「提勝間之」の意であるとし、「神風の」の一說を「神下瀨之」とした如きによつて一般を察し得る。その他歌の解釋にしても歌そのものの情趣、表現を無視した解釋のある事を否む事は出來ない。これは雅澄が歌に對する鋭敏なる鑑賞を缺いてゐた爲めであるともいはれるが、一面に於て雅澄は歌を純粹なる藝術であると見るよりは、歌によつて古道もしくは國家的意識を知る事を目的としてゐた點もあらうと思はれる。總論の中の「古學」といふ項に、「余が萬葉集をよく〳〵よみあぢはひて一には皇神の道義をあきらめ、一には言靈の風雅をしたへと常にいふはことに所見ありていふことなれば今くはしくわきまへむ」といふ所を以て見れば、第一には古道研究の手段としてであり、第二には言辭の風雅をしたふといふこの考をもつてゐたやうに思はれる。而も雅澄の終局の目的は矢張り古道研究であつて、その古道を研究するには先づ古代言語を明かにする必要があり、その古代言語を知るには、「萬葉」が最もいゝとしてゐるのである。而も眞淵のやうに「萬葉」から「古事記」に遡らうとせずに、どこまでも「萬葉」に據り、「萬葉」に據つて古道までも理解しようとしたのである。【史的地位】本書は萬葉研究史の上で、偉大なる綜合である所に優れた地位がある。仙覺によつて開かれ、契沖によつて新しい意義のもとに研究されて以來、近世に於て隆盛になつた萬葉研究は、本書に於て完全に綜合された。「古義」以後の萬葉研究は、「古義」に於て綜合された萬葉研究の上に立つて新しい分析を初めたとも言へる。要するに萬葉研究史に占める本書の地位は極めて大なるものがある。【價値】本書は啻にすぐれた歷史的地位を占めるのみならず、價値から言つても偉大なるものがある。文字をみだりに改定した如きは多少の缺點であるが、一生を「萬葉集」に沒頭しただけに、微細な點にまで研究的意識を見られるのは閑却することが出來ない。さうしてその價値の上から言つても、それ以前の萬葉研究の一大綜合であつたことが最も著しい點である。

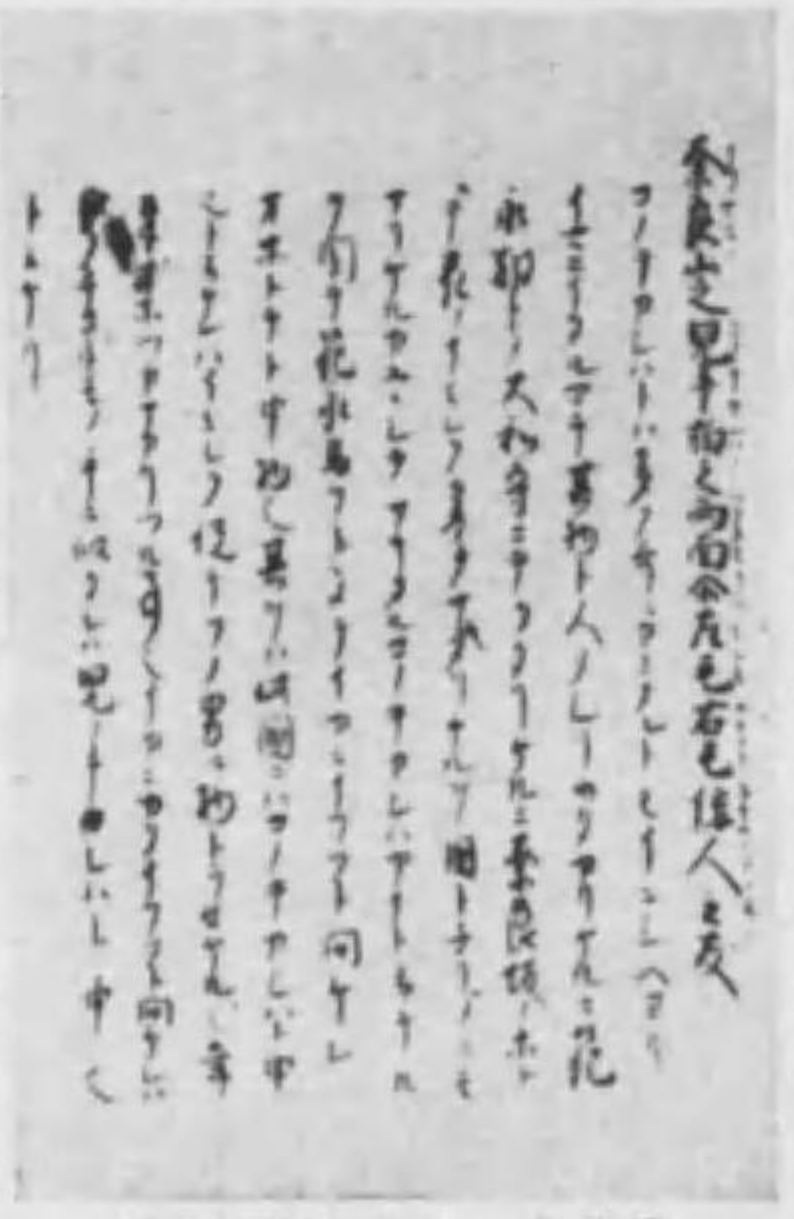
【末書】雅澄の「萬葉集」研究は、その弟子によつて踵述され、從つて「古義」の末書をも出した。即ち太田滿穗は師の「古義」を摘錄した「萬葉集講錄」四十八册を著はし、京都北野神社の文庫に藏せられてゐる。又葛目弘守と別府信榮とが師なる雅澄の「古義」の說によつて流布印本の歌の順序をかへ、訓をも改めた「訂正萬葉集」二十册もある。それ等は、雅澄より以前ではあるが、同じく土佐の今村樂・横田美水の無點の活字本「古萬葉集」、雅澄の師宮地仲枝の「萬葉集私考」十册と共に、「萬葉集古義」をめぐる土佐の萬葉研究の成果である。

【參考】土佐に於ける萬葉學の源流 佐佐木信綱（史學雜誌二八ノ六）○萬葉集古義上梓の次第 林勇之助（心の花一九ノ三）○萬葉集註釋書の研究 久松潛一（校本萬葉集） 〔久松〕

萬葉集字音辨證 まんえふしふじおんべんしよう 研究書 二卷一册【著者】木村正辭【成立】安政二年【刊行】明治三十七年【解說】萬葉三辨證の一。安政二年八月の著者の序及び凡例がある。集中の字の發音の疑はしきもの、普通の字音と異なるものに就き、古書の用例、悉曇・韻鏡等によつて、その發音の正しき所以を考證したるものである。初めに總論があり、「玉勝間」「古事記傳」「萬葉考」等を引く。上卷は「彌音メ」より「乎音ヲ」に至る二十六項、下卷は「倍音ヘ又ヒ又ホ」より「附音シ」に至る二十四項を收め、附錄に吉閑・高山・牛留島の三項がある。 〔佐佐木〕

萬葉集抄 まんえふしふせう 註釋書 一卷【著者】卷尾に撰者範永朝臣とあるが、更に別に「永仁六年五月十五日書寫了本不審多定猿翁事歟 抑此抄範永朝臣撰之由傳聞又與載假名宇於者雖不可有疑今抄見手柏之尺範永朝臣任大和國司之時過奈良故云々件朝臣爲自抄者何可載朝臣之字哉今案者範永以後之人撰之歟以證本可尋校也 藤原資經」とあつて、範永たる事を疑つてゐる。而してこの書は從來諸書に見えて實物を見る事を得なかつた藤原盛方の抄ではなからうかといふ說があるが、確證はない。【成立】未詳であるが、仙覺以前の著であることは明かである。【諸本】宮内省圖書寮藏の寫本が知られてゐる唯一のものであつて、大形の楮紙四十七葉から成つてゐる。書寫年代は近世の初めである。この書は大正年代「秘府本萬葉集抄」と名づけ、玻璃版として複製された。【解說】短歌百六十九首、長歌三首、旋頭歌一首を註してある。歌の本文を出して訓を附し、片假字で簡單な註が施してある。註にはさしてとるべき所もないが、本文及び訓は仙覺以前の本文及び訓の狀態を見る上に資料を與へる。

【參考】最も古き萬葉註釋書の發見 佐佐木信綱（和歌史の研究）○校本萬葉集○秘府本萬葉集抄 〔久松〕


萬葉集抄卷十六（圖書寮藏）

萬葉集抄 まんえふしふせう 「萬葉集註釋」を見よ。

萬葉集抄 まんえふしふせう 註釋書 二卷二册【著者】宗祇【名稱】「宗祇抄」ともいふ。【成立】流布本の跋に、「文龜二年二月五日於能後國府中旅窓寫畢」とあるが、この跋は「宗祇抄」を拔出した人の筆である。而して水戸彰考館藏の「宗祇抄」一本には、下卷尾に「本云文明十四年二月二十四日夜於灯下寫畢 宗謎」と、文龜より前の文明の奧書がある。更に彰考館藏の「萬葉集爲廣私注」には流布本と同じ奧書があつて、而も文龜二年云々のところが「文明十八年三月日 右衞門督藤原爲廣判」となつてゐる。又岩崎文庫藏の「宗祇抄」にも、「一校畢明應元年十月二十八日」とあつて、文龜以前の奧書がある。故に恐らく文龜二年以前に、すでに抄出されてゐたであらうことが知られる。從つて宗祇が「萬葉集抄」の原本を書いたのは、尠くとも文明十四年以前である。【諸本】流布本系統に屬するものには、前述の水戸彰考館藏の「宗祇抄一本」（第二册）「萬葉集爲廣私注」（第二册）、岩崎文庫藏の「宗祇抄」などがあり、書名・奧書は異なつてゐるが本文は同一である。この外に「異本宗祇抄」とすべきものに竹柏園所藏の「宗祇抄」があり、これに類似したものに早川幾忠氏藏の「宗祇抄」がある。竹柏園本は袋子本二卷で流布本に比して分量が多い。たとへば卷一だけでも、流布本になくてこの古寫本にあるのが「わたつみの」「冬こもり」「うまさかの」「そまかたの」「あかねさす」を初め、他に註はないが、歌だけあるのが四首ある。かくの如く歌數が多いのみでなく、一首の歌の註も詳しいのであつて、奧には流布本にある「私云借用註本……くはへ給へき者なり」の奧書があるが、その次に「文龜二年二月云々」とあるのがなくて、「以或人本草卒染筆宗祇法師抄之云々 雀鸛子」とある點が違つてゐる。元來「宗祇抄」の流布本は、拔抄本であることは明かであるが、この「異本宗祇抄」にも流布本にある「私云借用註本云々」の跋があるのであつて、これによると、流布本の原形であるらしきこの「異本宗祇抄」も亦拔抄本であらねばならぬ。刊本としては國文註釋全書並に萬葉學叢刊に收められてゐる。【解說】本書は「萬葉集」の中から、各卷數首づつを解釋したものであつて、極めて簡單な註釋である。仙覺や由阿の說の影響を承けて居り、創見は多くない。從つて仙覺の「萬葉集抄」（別項）のやうな劃期的なものではないが、一體に「萬葉集」の研究が衰へて、すぐれた研究も現はれなかつた室町時代に於て作られた點から見て、由阿の註釋とならんで、「萬葉集」註釋史の上では注意すべきものである。

【參考】校本萬葉集○萬葉學叢刊 佐佐木信綱編 〔久松〕

萬葉集書志 まんえふしふしよし 一册【著者】武田祐吉【刊行】昭和三年三月、古今書院。【内容】本書は、「萬葉集」が後世如何樣にして傳はり、また如何なる研究がこれに施されたかと云ふ二點を研究した學書である。從つて「萬葉集」その物の研究や、「萬葉」の文學書としての後世への影響等は最初から問題の外に置いてある。而して右の如き内容を解說するのに、本書は三部に分けて說いてゐる。第一部「萬葉集傳來史」では、「萬葉集」に古來如何なる訓や解釋等が行はれたかと云ふ歷史を詳記するもので、「萬葉集」の名の見える最古の文書から謂はゆる古點次點時代を經て仙覺契沖から現代の研究者に亙る系列が手際よく說明されてゐる。第二部「萬葉集通行本の研究」は通行本・流布本等と稱せられる寬永年間の版本の研究で、この版本が「萬葉」の古傳本中どんな系統に屬する本か、この版本の錯簡・目

錄・歌數は、どう考ふべきものであるか等を述べてあつて、著者の創見が少くない。第三部「萬葉集仙覺本の研究」は、本書の半ばを占め、著者の創見も多く、量質共に本書の中心をなす部で、序・前編・後編の三つに分れる。序では仙覺本を研究する事が如何に必要な事であるか、前編では、仙覺の「萬葉集」校勘の由來や、如何なる證本を仙覺が使用して何年と何年とに校合し、それが後世にはどのやうにして傳はつていつたかを解說する。後編では、かくして出來た仙覺本が如何なる價値を持つか、兩度に校合したその二本の性質は如何？等を說くので、前編の細部を詳說したとも云へる。附錄として「萬葉集仙覺本研究資料」を載せる。【價値】「萬葉集」と云ふ貴重な書が、如何にして今日まで傳はつたか、殊にその傳來に、仙覺及び仙覺の事業が如何ほど重要な立場に在るものかを、一讀して知らしめる點で重要な書である。各所に見える著者の創見には尊敬すべき意見が少くない。（森本）

萬葉集書目（まんえふしふしよもく）　一冊　【著者】木村正辭【成立】著者の門人篠崎節之の勸めによつて、初學者のために編纂されたもの。【刊行】慶應三年卯年三月刻。本書の源をなした「萬葉集書目提要」（別項）がまだ公けにならぬうち、草稿本から本書は作られ、原本よりも二十數年も前に出版された。【內容】「萬葉集」關係の書籍を解說した書であつて序二枚、本文十五枚の小冊子である。その組織は、全體を正文部・註釋部・附錄・外錄」の四部に分つて居り、「正文部」は、「萬葉集」の古寫本及び版本の名、五十七本二十一種をあげ、所々に小字二行に割註の形式でその本の解題を述べてゐる。「註釋部」は、八部に分れてゐる全註—十五部を解說してゐる。摘要—抜萃して註釋した書をあげる部で六部を舉げる。釋言—言葉のみを解釋した書で五部。類聚—歌を部類によつて集めた書名をあげる部で七部をあげてゐる。纂言—五部。撰歌—十部。雜攷—八部。雜說—十部。以上である。なほ註釋部の最初に、「●印ヲ附タルハ、既刊行セルモノナリ」「△印ヲ附タルハ、未ダ刊行セサルナリ」とあつて、各本の上に「●」又は「△」の印がある。「附錄」は、木村博士のまだ見てゐない書をあげてゐるが、最初に「其書ヲ未ダ見、タダ書目ノミモノニ見エテ、提要ノ知カタキ類ヲココニ集ム」とあつて、三十六の書名をあげてゐる。次に外錄は、木村博士の著書十八部の名をあげてゐる。これは、序文及び跋にことわつてある所によると、篠崎節之が、博士の著書名の本書に洩れるのを惜しんで、博士に無斷で附け加へたものの由が知られる。【價値】萬葉關係の書籍が、今日のやうに容易に手に入らなかつた當時に於ては、一通り關係書の知識を得るにも、甚だ困難を感じた。だから、本書のやうな、書名を分類しただけの本でも甚だ貴重だつたに違ひない。完備した萬葉書目の解題書の數種をたやすく見得る今日から見れば、內に收められてゐる書數も少いし、中には誤謬なども發見出來るが、今から七十年の昔には、貴重且つ便利な本であつたらうと思はれる。（森本）

萬葉集書目提要（まんえふしふしよもくていえう）　書目解題　二卷二冊【著者】木村正辭【成立】慶應二年【刊行】明治二十一年【內容】慶應二年二月十日の自序があり、後明治二十年九月に補正したもの。上卷は「萬葉集」の諸本を解說し、仙覺の校合に用ひたる諸本をあげて、仙覺校正本の系統表を揭げ、諸寫本の書法に三種の別あることを說明した。上卷附錄に、古點・次點・新點の事、古訓一樣ならざりし事、撰者の事、歌數の事、略本萬葉集・古萬葉集の稱、妄說の諸項に亘つて古書に見えるところを引用列舉した。下卷は「萬葉集」の學書の解說で、全註・摘要・釋言・類聚・纂言・撰歌・雜攷・雜說に分つ。下卷附錄に、諸書に書名のみ見えてその書の見當らないものを舉げた。下卷追加は明治二十年八月に、その後に見得た書に就き解題して追加したものである。【價値】「萬葉集」の諸本及び學書の書目解題書として、最初に出でたものであり、解題・考證は詳しく、加ふるに諸典籍より「萬葉集」とその學書に關する事項を引用列舉すること豐富で、萬葉學研究史の考究に不朽の價値を有する。その蒐集の書は未だ少く、解題にも誤があるけれども、それ等はこの書の價値を多く損じない。【附記】本書は、同じ著者の「萬葉集書目」に載せた書の解題をなしたるものである。佐佐木信綱氏の「萬葉集選釋」の附錄に出した「萬葉集研究書目解題」は、その後發見された多くの本及び學書に就いてほぼ解題を加へたから、本書を補足するものとして併せ見れば得る所がある。又「國書解題」の「萬葉集」の學書の解題も參考するに足る。（佐佐木）

萬葉集新考（まんえふしふしんかう）　註釋書　二十六冊【著者】安藤野雁【成立】安政四年【解說】卷一から卷十三までの註釋。首卷は總論となつてゐる。總論は「代匠記」を多く抜書してゐる。註釋には歌人としての野雁の、直覺的な卓見が閃いてゐる。安政四年清書した由が序に見える。註釋としては極めて粗なものであるが、歌人の註釋書として香川景樹の「萬葉集捃解」（別項）や、熊谷直好の「萬葉集抄釋」と共に注意すべく、殊に本書は秀歌の抜萃でなく、全部の歌の註釋を志した所に價値がある。著者は窮乏の間に處して、本書の完成に志したが、遂に未完に終つたとおぼしいのは遺憾である。自筆稿本のうち、卷一だけの草稿は無窮會に藏せられ、多くの改訂が施してある。竹柏園には第一冊より第十二冊までと第二十四冊より第二十六冊までの十五冊が藏せられ、これは清書本で、所々改訂もあるが、美はしく清書せられてゐる。著者が本書の完成に刻苦辛勞したあとが見える。【參考】安藤野雁とその萬葉集新考佐佐木信綱（萬葉讀本）（佐佐木）

萬葉集新考（まんえふしふしんかう）　註釋書　和本三十八冊、洋本八冊【著者】井上通泰【刊行】著者の所謂私刊本（和本）は、大正四年五月から昭和二年六月に至る。公刊本（洋本）は昭和三年三月から昭和四年一月に至る。【內容】「萬葉」二十卷全部の註釋書である。「私刊本」では初めに假名まじりに書き改めた原歌を揭げ、次に語釋を施す。「公刊本」では最初に假名まじりの原歌、次に原字のまゝの原歌、次に語釋を記す。又別記とも稱すべき附錄が或る卷の終りに載せてある（私刊本・公刊本共通）。その卷數と目次は、卷二下、橋本進吉氏のガテヌ・ガテマシの考。卷五、萬葉集卷第五の筆錄者・山上臣憶良年齡考。卷七上、連體格の代に終止格をつかひたる。卷十下、倒置の枕辭。卷十二下、佛足石歌新考。卷十四下、轉訛例一斑。卷二十下、防人歌轉訛例一斑（以上のうち「上」「下」は私刊本のみにありて公刊本に上・下の別なし）。なほ公刊本第七冊の最後には、「萬葉雜攷」として、第六冊までの說を增補してある。

【價値】本書は、我が國に於ける第五番目の萬葉全釋書で、獨創に富む前人未踏の解を立てた個所が多い。卷一藤原役民の長歌の解等殊に傑出してゐる。また集中の漢文（題詞・左註等の漢文）の解に於て、從來のどの註釋書よりも精到である個所が少くない。但し私刊本は「略解」と「古義」との外、一切の前人の註書を見ないで解釋したと記してある如く、先人の研究に對して無關心な嫌ひがある。公刊本でもこの弊は著しいが私刊本では一層多い。次に獨創は本書の長所をなしてゐるが、その弊として獨斷に流れた個所もまゝある。殊に著者一個の意見から、本文の文字を誤字と見て變更してある個所の多い點は、本書の重大な缺陷である。（森本）

萬葉集人物傳（まんえふしふじんぶつでん）　三冊【著者】鹿持雅澄【刊行】本書は、著者の死後久しくその子孫及び門人の家に傳はつて刊行の期を得なかつたが、明治二十四年宮內省から「萬葉集古義」の一部として刊行。後、國書刊行會の手で廣く一般に廣められた。【內容】「萬葉集」の作者を身分によつて分ち、その傳記を記した書である。その身分の排列順は、（1）高きより卑きに及ぶ。（臣下では姓の高卑の順による）（2）同じ身分では、その作者名の始めて見えた卷數・丁數の順に並べる。（3）男女に於て男を先に女を後にするとの三つの法則に從つてゐるやうである。最初に帝王、次に太子（日並皇子・高市皇子・上宮聖德皇子・宇治若皇子・皇太子の御五方）・皇后・皇子・皇女・諸王・女王。次に臣下に移つて朝臣・眞人・宿禰・連・君・首・忌寸・臣・造・村主・使主・史・直・倉人・諸臣と（第六卷尚花宴の作者中の姓不明のもの、及び第二十卷の防人の作者は此處に入る）・女（臣下の女性はすべてこゝに入る）・僧・尼・伎人（第九卷に名の見える水江浦島子と第十五卷に名の見える筑紫の白水郎荒雄の二人をこゝに入る）。以上二十六部に分つ。引用書は、「古事記」「書紀」「續日本紀」「延喜式」が最も多く、また「書紀」と「續日本紀」は就中目立つて多い。ついで「神皇正統記」「皇代紀」「如是院年代記」等の名も見える。【價値】本書が採用してゐる身分による分類法は甚だ不便で、一々その作者の「骨」を知らなければ探り得ない。殊に「萬葉」には作者の「骨」を略して記してある場合や氏や名だけしか記してない場合も少くないのである。よし「骨」は分つてゐても同じ「骨」の作者が數十人ゐるので檢出に甚だ困難である。この分類法は早く海北若沖が「萬葉集作主履歷」で採用してゐる所で、雅澄は或は若沖のを眞似たのかも知れない。第二に傳記は分るが、その作者の歌は分らないといふ不便もある。又本書には「萬葉」中に名だけ見えて作品のない人の傳記も記してゐるが、作品のある作家との間に區別も立てず、傳記だけを記してある。この點、上記の若沖の著が作品の所在と傳記とを併記してゐるのに比べて、本書の價値の遙かに落ちる所以である。第三に作家の考證に著者の創見がない。本書は「書紀」「續日本紀」等（就中後者）の抜き書きであつて、全體を通じてそれ以上に擢んで著者の卓見の見られるものは殆ど皆無である。故に「續日本紀」等に傳記の見えぬ山部赤人・笠金村・高橋蟲麿等は、著名な作家でありながら殆ど記すところがない。この點からすれば、本書は謂はゆる歌人傳の資料書に近いといへるが、資料としては近世の後に出ただけに、集成の功は認めらるべきである。【影響】土岐哀果氏著「作者別萬葉集」は、本書の組織及び調法によつて編まれた書である。（森本）

萬葉拾穗抄（まんえふしふすゐせう）　註釋書　二十卷三十册【著者】北村季吟【成立】季吟の師貞德は、幽齋の勸を受けた頃より萬葉註釋の志があつて、諸本を集め諸抄を見合せたが、その暇なく、季吟に託して共々に考へ記し、二年の間に卷一・二の兩卷は出來上つたが、完成せずして貞德は歿し、それ以後、季吟が獨力にて筆を取つて完成したものである。自筆稿本によれば、卷一は天和二年十月一日起筆して十八日に註釋を終り、二卷は同じく十八日に始めて十一月六日に終つてゐる。また卷九の如きは、天和二年二月十六日に染筆、二十七日に註解を終り、着手の順序は前後してゐるが、かくの如く迅速に進捗して、天和二三年頃は既に出來上つたものと思はれる。その後、貞享元年五月より、同三年八月にかけて清書し、更に同年十二月に、再考の功を了へた。【刊行】元祿三年【內容】二十卷のうち、一・二・三・四・七・八・十・十一・十二・二十の十卷が上下二冊、合計三十冊。本文の歌は假字書に書き下し、その右傍行間に小さく原本の眞字が記してある。この形式は本書の一特色であるが、これは貞德が敦隆の「類聚萬葉」（類聚古集の抄出本）を得て、その體裁にならつたものであると云ふ。藤原惺窩の校正本を得てこれを底本とし、「類聚萬葉」の訓を用ひて本書の本文とした。また「八雲御抄」「袖中抄」「萬葉集目安」等を常に引き、これ等を取捨して頭註に附し、今案を加へたところもある。その體裁は、他の季吟の古典の註釋書と同一である。初めに總論があり、歌の員數の事、撰者は諸兄公と家持卿とに決する事、撰者の傳、題號の事、點和の事、仙覺所校の本、書樣の事、古註どもの事、古人の說用捨の事等に就いて說いてゐる。刊本の卷首には貞享四年六月の長春院法印武將信處の序、貞享五年四月の冷泉爲人の序、元祿三年十二月の林穗直民甫の序がある。刊本は自筆稿本と較べてみると若干の相違があり、自筆稿本を更に訂正して淨書した本を刊行（季吟の監下）したものである。【價値】本書は「萬葉集」全部の註釋書としては最初のもの。而して舊註の集成と云ふところに、季吟の他の註釋書と同樣の目的を持つてゐるが、他の物語草紙の如く、舊註時代に既に多大の發達を遂げたものは兎に角、「萬葉」の如きは、從來多く研究せられなかつたので、本書の完成も、他の古典の註釋完成後、最も遲れて出來上つた。しかも迅速に成つたのであるから、この點から見ても多くの評價は與

季吟自筆萬葉集秘訣（竹柏園藏）

へられない。併し若干の特色はある。「類聚萬葉」を、本書の引書の一として參考に供し、またその體裁を襲つた事、その本文が從來の本とは全く異なる系統の本、即ち妙壽院本を用ひてゐる事、註釋は舊註の集成であると共に、長流の管見抄の如き新しい註釋書をも取り用ひた事、歌の解釋に歌の味をよくあらはした事等である。

【附記】「萬葉集秘訣」一卷。貞享四年正月成る。「萬葉集」中より要所二十一箇條を拔いて註解意見を加へたもので、「右二十一箇條萬葉拾穗抄之秘訣也」とある如く、「拾穗抄」の附錄とすべきである。二十一箇條中、更に三箇條の大事を撰んで、古今三箇大事に擬してゐる。自筆稿本は竹柏園に藏せられる。かくの如く、季吟は飽くまでも舊來の傳授思想を墨守してゐたのである。

【參考】萬葉集書目提要 木村正辭○校本萬葉集首卷（諸本輯影） （佐佐木）

萬葉集墨繩（まんえふしふすみなは）

註釋書 八卷【著者】橘守部【成立】天保十二三年【諸本】從來刊本がなかつたが、自筆稿本によつて橘守部全集に收む。【內容】總論一冊と卷一の卷首から「山川母因而奉流」の歌までの註釋七冊より成る。卷一の總論には「墨繩」と題したが、卷二以下の註釋の部分には「檜杣」と題してゐる。總論は萬葉是古學要の項に始まり、題號・撰者・本文・部類・目錄・端詞・左註・卷次第・古訓新訓・異本・古鈔、以下諸註釋書・研究書の解說に及び、終りに墨繩の凡例を記した。卷一の目錄を載せ、「代匠記」の說をも掲げてゐる。註釋は「代匠記」「考」の說を掲げて次にその說を評し、自說を述べてゐる。その他「略解」や「玉の小琴」（各別項）等よりの引用文が多い。一句づつかくの如く詳說した外に、一首の大意を說き、長歌の段格を圖示した所がある。地理の考證が詳しい。【價値】諸說を多く引いたがために尨大なる書となつたが、自說の部分は割合に少い。併し卓見に富む著者の筆であるから、諸說を評する事が明快で、新說を出した所もあり、「萬葉集」研究上缺くべからざる書である。就中歌格の圖を示せる如きは、さすがに歌格論者たる著者の面目を見る事が出來る。ただ紙數の割に、註釋せる部分が卷一の中途までで僅少なることを遺憾とする。 （佐佐木）

萬葉集墨繩自筆稿本（橘純一氏藏）

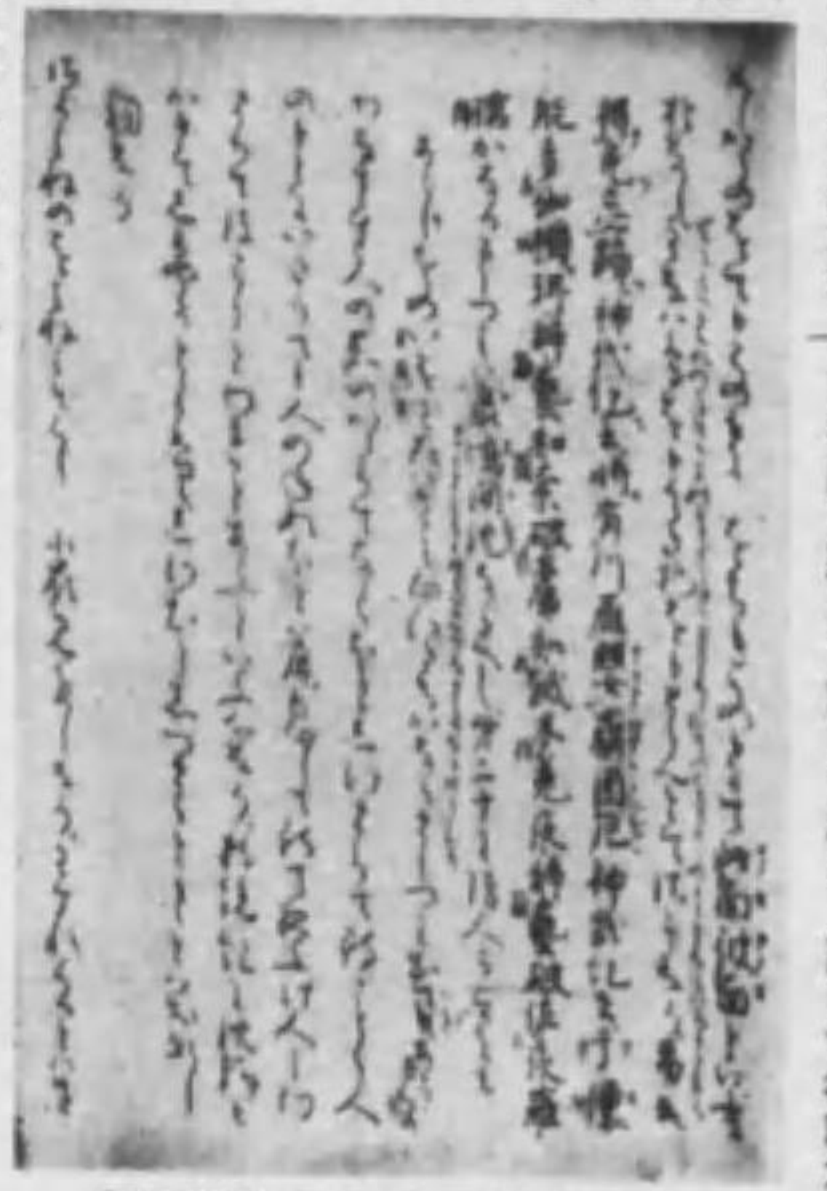
萬葉集叢書（まんえふしふそうしよ）

十六冊【編纂者】島木赤彥・折口信夫・武田祐吉・佐佐木信綱等。【刊行】大正十一年―昭和三年、古今書院。【解說】「萬葉集」の註釋書のうち重要な地位を占めるもの又は寫本のみで傳へられたもの等を撰んだ叢書で次の如くである。

（第一輯）富士谷御杖「萬葉集燈」島木赤彥校（第二輯）荷田春滿「萬葉集僻案抄」島木赤彥校（第三輯）橘守部「萬葉集檜嬬手」折口信夫校（第四輯）荒木田久老「萬葉考槻落葉」島木赤彥校（第五輯）岸本由豆流「萬葉集攷證」七冊、武田祐吉校（第六輯）下河邊長流「萬葉集管見」武田祐吉校（第七輯）[illegible]著・上田秋成補「萬葉集目安補正」武田祐吉校（第八輯）仙覺律師「仙覺全集」佐佐木信綱校（第九輯）佐佐木信綱解說「紀州本萬葉集抄」（第十輯）佐佐木信綱編「萬葉學叢刊中世篇」（萬葉集目錄・萬葉集佳詞・詞林采葉抄・萬葉[illegible]花抄・萬葉抄一名宗祇抄・萬葉集之歌百首聞書・萬葉目安を收載）。 （土井）

萬葉集代匠記（まんえふしふだいしやうき）

【著者】契沖【名稱】「萬葉代匠記」とも。【由來】水戶德川光圀の命によつて着手したもの。光圀は「萬葉」の註釋を志して清水宗川・山本春正等に命じたが、餘り事業が捗らなかつたので、若き時「萬葉集管見」（別項）などを作つて、造詣深き浪華の下河邊長流に依囑した。長流は必ずしも恪勤の性でなかつた上に病身だつたので、長流の友で萬葉研究に深き契沖に註釋を乞うたのである。恐らく長流が辭して契沖を推擧したのであらう。契沖は極めて篤實な學者であつて二十卷全部の註を完成して獻上したところ、これを流布本にのみよつたので、本文の校勘上に不十分であつたから水戶で延寶年間萬葉集謄寫した中院本等を貸して再度の稿を乞うた。契沖は更にそれ等の異本によつて先づ本文の相違を校讎し、それによつて更に編んで獻つたのである。前者を初稿本といひ、後者を精撰本と稱する。【成立】着手したのは「釋萬紀原」寶永三年の文に二十四年以前とあり、又契沖が元祿十年に著はした「和字正濫通妨抄」に「予十四五年來、右の古書とも見るに云々」とある句から推定して、天和三年頃とするのが妥當である。而して初稿本の成稿した年は、「代匠記」の和文の序と漢文序、安藤爲章の「年山紀聞」、元祿二年の契沖の「萬葉集校本」等によつて初稿本を上つたのは、元祿元年の頃と思はれるので、初稿本の完成したのは貞享の末か、遲くも元祿元年である。次に精撰本に着手した年は漢文の序等によつて見ると、元祿二年であるらしく、成稿した年は「精撰本代匠記」に見える六ケ所の奧書によると、最後の奧書のある卷十三下は元祿三年仲夏二十六日に完成してゐる。二十卷全部を終つたのは元祿三年の終り頃であらう。以上の如く、「代匠記」は天和三年頃に、始めて元祿三年「精撰本」を完成するまで八九年の星霜を費してゐる。而して「精撰本」の稿を了つた後も說を得る毎にこれを水戶に書き送つたのであつて、それ等は契沖書簡として三帖及び十三軸が彰考館に所藏せられて居り（契沖全集に契沖雜著として所收）、また現在の「精撰本代匠記」寫本に朱や墨の書入、また「精撰本」の註釋の本文を削つた所などの多くあるのは元祿三年後のものと思はれる。かく考へる時には「代匠記」は契沖の死によつて完成したとも言はれる。【諸本】初稿本と精撰本とのあることは前にも記したが、初稿本にも更に書入の有るものと無いもの、脫落のあるものと無いものなど種々の異同が有るのであつて複雜を極めてゐる。先づ初稿本に就いて見ると、主なる系統として四種に分れる。第一は彰考館にある契沖自筆本であり、第二は似閑本系統の初稿本であつて、これに屬する寫本としては京都賀茂別雷神社所藏の「似閑本代匠記」と橘純一氏藏で守部の「墨繩」にも引かれてゐる一本と東京帝國大學國語研究室藏の一本の如きがある（このうち後の二本は關東大震災の時燒失した）。第三は流布本系統の初稿本であつて、これは最も多く流布され多くの文庫や圖書館には大抵見出される。これにも流布本と流布寫本とに分れる。この中筆者の注意して見たのは東京帝國大學國語研究室藏の一本と帝國圖書館藏の橘枝直自筆本とである。第四は若沖の跋のある初稿本であつて、竹柏園の架藏にかゝる一本がある。この中彰考館にある自筆本は最も信ずべきであるが、現存するのは卷一・四・五・六・七・八・九・十上下・十一上下・十二・十三・十四・十五・十七・十八・十九の十八冊であるが、卷十六は竹柏園の所藏であり、その外卷二の斷片が散在してゐる。兎に角闕本となつてゐるのは殘念である。傳本の中では似閑本が最も善本であり、流布本は全體として脫落の多い惡本である。若沖本は異本とすべく、或は初稿本の原形であらう。次に「精撰本代匠記」には、水戶德川侯爵家藏に契沖自筆本があり、その他、東大圖書館藏の精撰本（和學講談所舊藏本であるが大震災の時燒失した）、及び水戶彰考館藏本（但しこれには闕本がある）、木村正辭舊藏本等がある。而して刊本としては、「精撰本代匠記」は木村正辭博士が校訂した刊本及び契沖全集本があり、初稿本も契沖全集本がある。


初稿本萬葉代匠記（彰考館藏）

【內容】「萬葉集」の全部の歌にわたつて詳密な註を加へたものであるが、初めに總論があつて、「萬葉集」の題號撰者、用字等一般的性質及び枕詞の註釋がある。この中撰者に就いては從來の說を排して大伴家持私撰說を精細な考證を擧げて論じてある。而して初稿本と精撰本とを比較すると種々の相違點がある。第一、態度に於て初稿本が長流の說を引用することの非常に多いのに比して、精撰本では長流の名を削り、契沖獨自の文獻的考證的態度が鋭くなつてゐる。第二に本文批評に於て初稿本は異本との對校がなかつた爲めに、內證に基づいたものが多かつたに比して、精撰本には校本（飛鳥井本）・別校本（拾合本）・官本（中院本）・阿野本（[illegible]野本）・紀州本等との對校をなしてゐる點に本文批評が確實になり、且つ新說が多くなつた。第三に訓や解釋の上にも說を出すことが多くなり、卷一の「籠」や「莫囂圓隣之」の訓を初め、精撰本に至つて初めて出された說が渺からずある。第四に「萬葉集」の成立の年月や撰者說等に關して初稿本の說を更に多くの例證を以て確實にし、また說を進めていつた。以上の如く精撰本に至つて發達の跡が見られるが、初稿本に於ける特質としては、精撰本に比して契沖の自由な直觀から得た批評の多いことであり、稀れに初稿本の方に、却つてよき說がある點である。【史的地位】本書は近世の萬葉研究の最初のすぐれた成果であつて、本書によつて萬葉研究が確實な基礎を築かれたと言へる。それ以後の萬葉研究は、春滿・眞淵を初め、すべて本書の恩惠を蒙つてゐるのである。その意味で仙覺の「萬葉集抄」（別項）と同樣な史的地位を有するものである。【價値】絕對的價値に於ても、最も卓越してゐる。第一に契沖は科學的文獻的な方法を以て說を立ててゐる。第二に契沖は漢學・佛學に明るく、悉曇にも通じてゐた爲めに、最も博引精細である。卷五の解釋の如き、契沖に於て初めてなし得たと言へる。第三に確實な基礎による新見が多い。第四に「和字正濫鈔」（別項）に說かれた歷史的假字遣說も既に本書に於て見られるのである。その他長所は多いのであるが、比較的早き年代に成つた爲めに語釋が主であつた點、文章法的解釋や、批評の方に十分開拓しなかつた點などは、その缺點とすべきであらう。

【末書】本書を基として多少增補したと見るべきものに、水戶家で編まれた「釋萬葉集」があり、また海北若沖の「萬葉集說」も契沖の講義によつたものであるが、大體本書と內容は等しい。また若沖の「萬葉集類林」も、大體「代匠記」によつて、辭書的に語彙を分類したものである。 （久松）

【參考】萬葉集書目提要 木村正辭○萬葉集註釋書の研究 校本萬葉集（久松潛一）○契沖全集

精撰本萬葉代匠記（德川圀順侯藏）

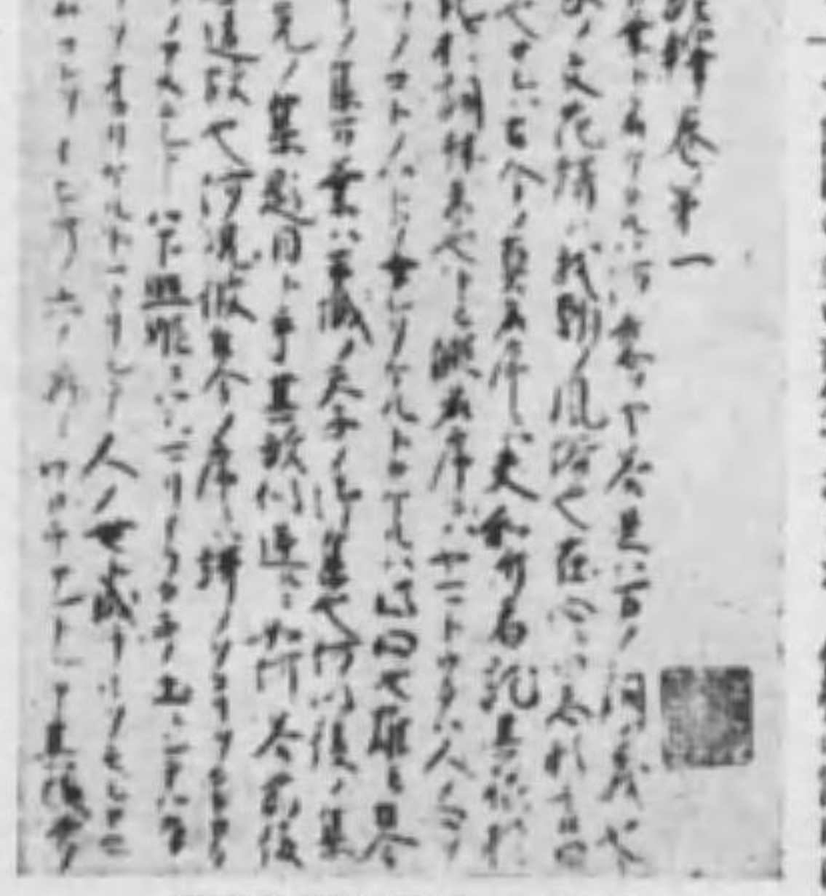
萬葉集玉の小琴（まんえふしふたまのをごと）

二冊【著者】本居宣長【成立】木版本に安永八年己亥十一月五日の宣長の自序がある。【刊行】藤原彥麿の序によれば、天保九年三月頃か。【諸本】安永八年十一月五日の宣長の序のある刊本二冊の外に、刊行以前の形を有する寫本も世間に流布してゐる。竹柏園所藏の「玉の小琴」一冊は田中大秀の手澤本であつて、卷一から卷四まで版本と同じであるが、卷一・二・三は本文と別記とが別々になつてゐる。且つこの書には流布の版本にない二條が附加されてゐる。これに對して、終りに「文化元甲子年臘月十九日 敎子 田中大秀」として、「右二條流布の本になし。鈴屋元本をうつし入」とある。東大文學部國語研究室にも「玉の小琴」の寫本が二部と追考の寫本が二部ある。寫本二部とも追考と本文とが別々になつてゐるのである。追考は卷一・二・三・四までであるが、卷四の追考は「玉の小琴」の本文と同一である。

追考の一本は久米幹文の蒐藏である。一本は刊行されたより以前の系統の寫本であるが、本文の文字及び說の異同は版本と寫本との間に見えない。【內容】本書は眞淵の「萬葉考」の補說として見るべきものである。版本は乾坤の二册になつて居り、上卷は「萬葉集」の卷一と卷二とのうちで、師の眞淵の「萬葉考」（別項）に對する異見を擧げたものであつて、上卷の終りに、「右一二卷ノ中ニ考ノ說ノ宜シカラヌ事ハ猶是彼アレトモ、オノレモ未タ思得ヌ事ハ省漏シツ、今ヨリ後又考得タラムママニニ書ツキテム」とある。下卷は卷三と卷四との摘註であるが、初めに「一二ノ卷ハ師ノ考有テ世ニ廣マレヽハイト明カ也。此三ノ卷ヨリ下ツカタハ其書未タ出ネバ、世ノ人師ノ說ヲシラス。オノレハタ千里ヲ隔テヽ在シカハ、毎々ニハ得キヽ明ラメズテヤミニキ。去ト文モテ二十卷見ナガラ二カヘリマテ疑ハシキ事ドモ問聞ツレバ、今其趣ヲ揭テワロキハワロシトコトワリ、又閑漏シツル事トモハオノカ考ヲ出シヌ。其カ中ニモ早ク師ノ云レツル事モ必有ナメド、知ラヌヲハイカヾハセム」とある。二かへりまで問ひきいたといふのは疑條案問の事であらう。かういふ組織を有してゐる本書は宣長が全力をそゝいだものではなく、ただ極めて簡單な摘註に過ぎないが卓說に富んでゐる。卷一の雄略天皇の御歌の「菜摘須兒」を宣長以前は「ナツムスコ」と訓じ、「スコ」はいやしき子であると曲解してゐたのを、宣長が「ナツマスコ」と訓じた如きもその一である。【價値】本書は宣長の「萬葉集」研究としては、決して精細ではなく、その「萬葉集」に關する所說は「古事記傳」（別項）の中に散見するそれによつて、より多く知り得るのであるが、なほ本書は宣長がその穩健にして創見の多い學風によつて「萬葉集」を專一の對象として扱つてゐる意味で、萬葉研究史上、重要なる位置と價値とを有するものである。

【參考】萬葉集書目提要（木村正辭）○萬葉集註釋書の研究（校本萬葉集）久松潛一 ○萬葉釋文索引（記傳之部）[illegible]　（久松）

萬葉集註釋（まんえふしふちゆうしやく）　註釋書　二十卷十册　【著者】釋仙覺　【名稱】「萬葉集抄」「仙覺抄」ともいふ。【成立】卷一の終りに「文永六年二月二十四日記之訖　仙覺在判」とあり、卷二に、「文永六年沽洗二日於武藏國比企北方麻師宇郷書寫畢」とあり、更に卷六には文永六年三月十三日、卷八には文永六年三月十六日、卷十に文永六年三月十八日、卷十三に文永六年三月廿一日、卷十五に文永六年三月廿九日、卷十八に文永六年孟夏朔日とあり、最後に卷二十終りに、「文永六年孟夏二日於武藏國比企郡北方麻師宇郷政所注之了、權律師仙覺在判」といふ順序で成立の年月が記してある。これによつて仙覺の「萬葉集抄」の成つたのは、文永六年である事が分るが、卷一より卷二十に至るまでの間を見ると二月より四月に至る僅かに三月ばかりの間に成つた事になり、卷七・八の如き二卷を三四日で註した事になつてゐる。この十卷から成る註釋を僅かの日數で完成した事は、一見不思議に思はれるのであつて、この年附は草稿があつてそれを淨書した時を示したとも思はれる。遲くとも文永六年までに大體の草稿は作られて、この短日月の間にそれを整理し增訂して完成したと見ても差支ないと思ふ。故に完成した日を文永六年孟夏二日と見る事は可能であつても、その着手の日は遙かなる前にさかのぼるべきであらう。【諸本】現存の諸本は、すべて仙覺の弟子玄覺の書寫書入本の系統本である。奧書によると玄覺が建治元年の十一月より十二月にかけて仙覺の自筆本を人をして寫さしめたもので、且つ玄覺は弘安三年から弘安十年にかけて數度書入を加へ押紙を付けてゐる。而して我々の目にふれた中で最も注意すべき古寫本は、東京帝國大學附屬圖書館所藏の寫本と、竹柏園所藏の寫本とである。東大圖書館本は書體は片假名で、大和綴十册から成つてゐる。書寫の年代は德川の初期と思はれ、題簽には「萬葉集註釋」とあり、前述した玄覺の建治及び弘安の奧書もあり、更に卷二十の奧に十佛の奧書があるのである。「萬葉集書目提要」に、溫故堂藏本として引用せられたのも恐らくこの系統の本であらう。竹柏園所藏の「仙覺抄」寫本は東大本よりやゝ古いと思はれるが、同じく片假名本であり、十册から成つてゐる。この本には十佛の奧書はない。東大本と比すると多少書寫の上に異同があり、兩者相俟つて正すべき點がある。この外仙覺の「萬葉集抄」の寫本は多く存してゐるが、餘り善本はなく、未だ前二本を補ふべき古寫本を見ることを得ない。岩崎文庫藏の「萬葉集註釋」は現存する中で最も古いものであるが、僅かに總論しかない。而して「仙覺抄」の木版本は二十册で、題簽に「仙覺萬葉集抄」とある平假字本であるが、誤字も極めて多い惡本である。明治以後に於て國文註釋全書及び仙覺全集の中に收められた。


萬葉集註釋（岩崎文庫藏）

【解說】「萬葉集抄」は初めに總論として「萬葉集」の概觀、且つ研究の態度に就いて述べてある。第一に「萬葉集」の書名の意義に就いて、萬の言葉と萬世の二說があるのであるが、仙覺は「よろづのことの葉」の意味に解してゐる。また「萬葉集」の撰定に關して「古今集」にいはゆる「ならのみかど」とあるのを聖武天皇として「萬葉集」は聖武の御世に撰ばれたとし、撰者も、橘諸兄・大伴家持兩人をそれに擬してゐる。「萬葉集」撰定に關しては、今日に至るまで論議の多い部分であるが、仙覺の說には傾聽すべきものが少くないのである。彼はこれ等の說をただ想像的に提出したのでなく、道理と文證、卽ち論理的と文獻的との二つの立場から出發して立てゝゐる所に學問的に尊ぶべき點がある。次に本文に入つて「萬葉集」の各卷に就いて、難歌を擇んで解釋を下してゐる。全註ではないが難歌に就いて可なり精細な解釋を施してゐる。【史的地位】本書の史的地位は萬葉註釋史の上に於てその最初に出たすぐれた註釋書である所に、獨自の地位を有するものである。「萬葉集」の註釋書は數多

くあるが、本書はその先驅的な著である點から言つて、それ以後の萬葉集註釋書はすべて本書の影響をうけてゐる。【價値】註釋書としての價値を擧げると、第一に卷一・二の如きに精細である事は多くの註釋書と同一であるが、更に卷十四の東歌や卷二十の防人の歌を詳しく註してゐるのは注意せられる。これは仙覺が東國常陸に生れて東歌を解釋する上に便宜の多かつた爲めでもあらうが、從來の多くの註釋書が東歌などを閑却しがちであるのに比して、大なる特質である。第二に「萬葉集抄」は自己の訓點を多く載せてゐるとともに、所謂古點を多く擧げてゐることが注意せられる。これは多くの異本を校合した仙覺にして初めて可能とするところであらう。第三に仙覺は僧侶であつた爲めに、定家の如く單なる歌學上の知識の外に、種々の方面の素養があつた事は、彼の研究方法を極めて淸新な且つ獨創的なものたらしめてゐる。これは近世の初めに於ける契沖の萬葉研究の方法論と同樣である。仙覺が總論に於て道理と文證とを提示した如きもそれであるが、註釋の上に於て語學的の知識を應用した例、又悉曇學に就いても多少の素養のあつた事が見えるのは、殊に注意すべき點である。第四に今日既に湮滅せる資料を引用してゐる事、卽ち風土記の今日滅びて了つたものを引用してゐるのは、風土記の資料としても貴重なるを思はせる。

【參考】校本萬葉集（仙覺全集）佐佐木信綱 ○萬葉集書志 武田祐吉　（久松）

萬葉集名寄（まんえふしふなよせ）　歌枕研究書　上下四卷　【著者】下河邊長流　【成立】年代不明。【刊行】萬治二年頃か。【諸本】數種の刊本がある。その最も古きものは無刊記で、奧に「寺町通二條下ル丁　西田庄兵衞板行」とあるものである。初めには序文を附し、最後には「下河邊氏某撰」と記して、圓冲の跋文がある。跋の終りには、「萬治己亥秋八月下旬　雲水圓冲跋」とあるが、萬治己亥は卽ち萬治二年であつて、この書の原稿の出來たのもその頃であらう（圓冲は、長流の弟子で、「林葉累塵集」の中にその名が見える）。この本は、長流の自筆を版下として刊行したものと思はれる。この次に寶永七年の刊本がある。これも四册より成り、各卷の題簽及び目錄の初めの內題には、「萬葉集名所部類抄」と記されてゐる。また下之二の卷末には、前の西田庄兵衞板行の代りに、「寶永七年孟春吉辟日　兒玉氏藏板」とあるが、その他は前板と全く等しい。內題及び奧附は原板を削つて入木したものらしい。なほこの書は天和元年刊の「新撰書籍目錄大全」には四册となつてゐるのであが、元祿五年刊の「本朝彫廣益書籍目錄大全」には五册と出て居り、「群書一覽」にも、五卷と記されてゐるところを見ると、本書は四册本の外に五册本も亦出てゐるやうである。長流全集は右の第一の原刊本によつてゐる。【由來】歌をよむ時、名所を探る便あらしむるため作つたもので、「萬葉歌枕分類書」と云ふ風な書物が欲しいと考へて、作つたものである（序）。【內容】「萬葉集」の國々の名所の歌を假名まじりで記し、土地々々によつて分類し、畿內・東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・筑紫の順序で五十二ケ國を排列したものである。一國のうちの名所の順序は殆ど無秩序で何を標準にして並べたのか分らない。中にごく稀にではあるが、說明を記入してゐる個所がある。それは語の解釋と、地名・人名の說明の註が最も多い。併し地名研究書とまでは行かず、單に地理分類書の域に止まつてゐる。【價値】單に分類書といふにとどまり、而もその分類は、かなり不完全なものである。洩れてゐる地名も甚だ多く、所屬を誤つてゐる地名も多い。又地名でないものを地名と誤つて例にあげてゐる。大和の部の青垣山・東野、相模の部の百津島、上總國の阿取波神等の如きである。地名のよみ方も「耳高山」「小崎宮」「刀比河內」「守山（上野國）」等、目につく誤が少くない。要するに歌作の單なる參考書として當時便宜を與へたものに過ぎない。　（森本）

萬葉集の鑑賞及び其批評（まんえふしふのかんしやうおよびそのひひやう）　歌論書　【著者】島木赤彥　【刊行】大正十四年十一月、岩波書店。【解說】晚年の著作で、「萬葉集」の歌を大體三期に分け、その各期の特色のある歌二百六十五首を選んで、純粹に鑑賞的態度をもつて講じたものである。長年月にわたる「萬葉集」の鑑賞によつて得た悟道を本書によつて窺ふことが出來、同時に同じ著者の「歌道小見」（別項）の姉妹篇とも看做すことが出來るものである。附錄として「寫生雜記」及び「萬葉集雜記」を收めてゐる。これは前篇として發行になつたのであるが、著者は大正十五年三月病歿した爲め、後篇發行の運びに至らずに終つた。　（齋藤（茂））

萬葉集の新研究（まんえふしふのしんけんきう）　【著者】久松潛一　【刊行】大正十四年九月、至文堂。昭和四年十一月增訂版。【內容】本書は東京帝大での講義に補正を加へ、別に執筆した論文を加へたもの。「萬葉集」とは如何なる書物か、如何にしてかくの如き書が生れたか、それは後世如何に取扱はれたかの三點を、ほぼ遺憾なく說き盡してある。一、「上代の抒情文學」と、「記紀の歌謠より萬葉集への展開」の二項は、「萬葉」以前に如何なる歌謠が行はれてゐたか、それから如何にして「萬葉集」の歌が生れて來たかと云ふ事情の解說。二、「萬葉集を取扱ふ態度と成立の歷史」の項は、「萬葉集」の書籍としての各性質を說明したもので、萬葉各卷の內容・用字法・編纂・撰者等を解說してゐる。四―十二の九項は、作家の研究で、人麿・赤人等の著名歌人や無名歌人を評論し、十三、「萬葉集と漢文學」の項は、「懷風藻」その他の解說で、「萬葉集」の時代的背景を觀察したもの。十四―十六（增訂版では、十七項が增加されてゐる）は、「萬葉集」と後世との關係を詳說したもので、「萬葉集」の影響をうけた歌人・小說を說き、「萬葉集」を後世の歌人・學者がどう考へたかどんな研究が試みられていつたかを說明してある。附錄として、「萬葉集」卷一の難語句に關する主なる註釋家の訓點を集めた表が附けてある。【價値】本書の內容は、凡そ一つの[illegible]と考へられる諸部門が、殆ど洩れなく說き及んである。この點、「萬葉集」のみならず、書物の解說書としての方法を示した著と言ひ得るであらう。これが諸所に見える著者の創見と共に、本書を研究者の座右から手離せないものたらしめてゐる。　（森本）

萬葉集檜嬬手（まんえふしふひのつまで）　註釋書　七册　【著者】橘守部　【成立】嘉永元年　【諸本】本書は從來刊本がなかつたのを、[illegible]の特別號として刊行され、橘守部全集に入り、更に萬葉集叢書に收められた。【內容】「萬葉集」卷三の中頃までを註釋したもので、總論なく、卷一は「萬葉集檜嬬手」と題し、卷二以下は「萬葉集檜嬬手」と題す。目錄を附く。

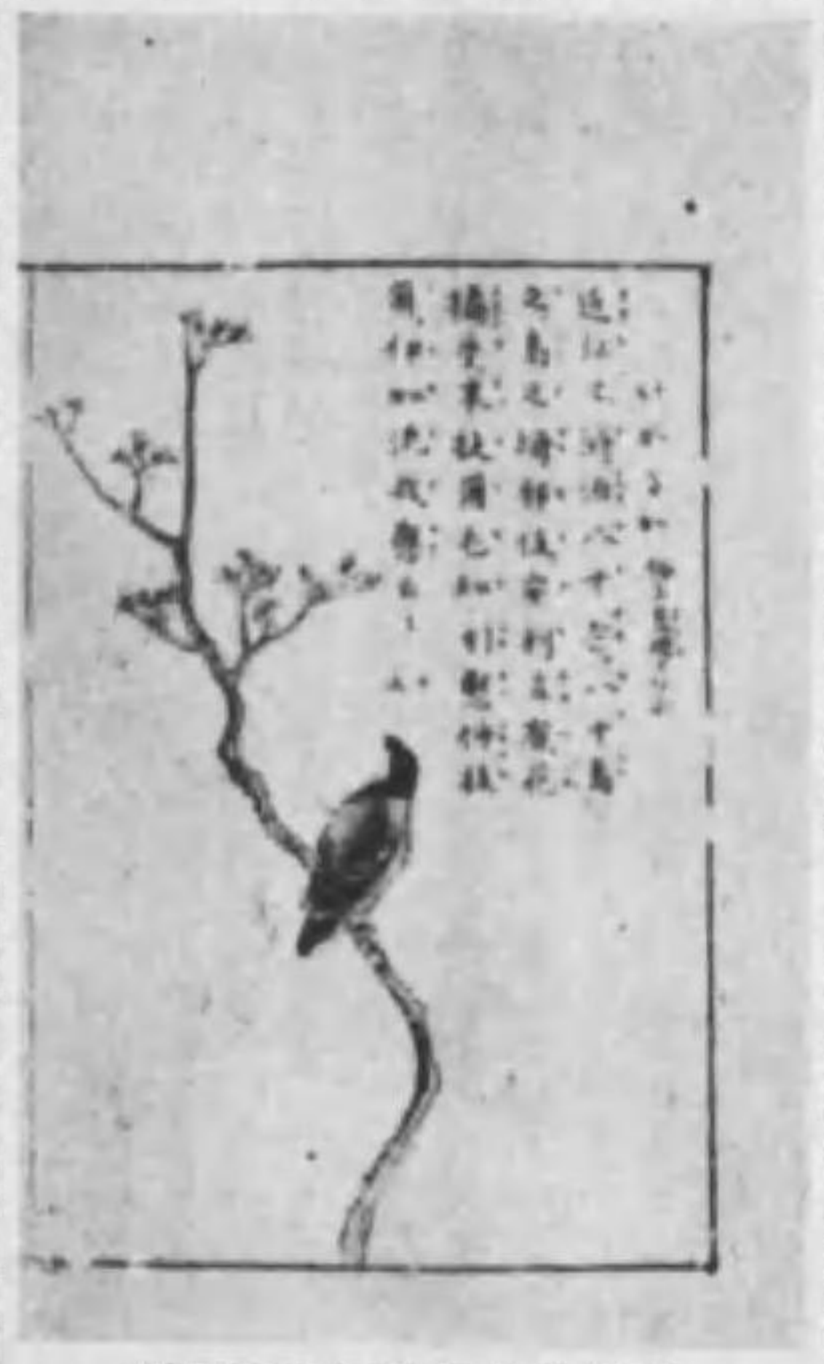
註釋は六卷より成り、別記一卷があり、これも卷二以下を草する豫定であつたらしいが、遂に成らなかつた。嘉永元年三月二十日の自序、同二十一日の凡例がある。本文の文字を校合して新たに著者の改めたものは、その文字の左傍に符を附し、註釋は一々の語句に就いて簡單明瞭に記し、終りに一首の大意を述べた。別記は特に詳しく自説を述べて考證した條項が十七個條ある。【價値】卓見に富む新説が少くない。註釋は極めて明快で解り易く、考證に走り、枝葉の説に拘泥する等の弊はしい所のないのは、本書の一特徴であり、地理を明かにしたる點も本書の價値ある所以である。「代匠記」「考」等の説を襲用した所が少くない。（佐佐木）

萬葉集品物解　研究書

目録一册・本文四册【著者】鹿持雅澄【成立・由來】「古義」の附屬的研究として著はされたもの。宮內省圖書寮藏の「萬葉集品物解目録」內題の下に「天保七年丙申八月六日再校」と記してあるを見れば、それ以前の著作。【刊行】著者の死後、土佐に於けるその子孫及び門弟の家に藏せられて久しく刊行の機を得なかつたが、明治二十四年宮內省から「萬葉集」古義の附録として出版せられた。【內容】「萬葉」中の動植物の研究である。緖言・目録・本文の順に作られてゐる。緖言の部一項—七項は編纂方針、八項—十六項は用字法、十七項—十九項は動植物の名稱に關する都合十九の事項を取扱つてゐる。本文は、草類上（第一卷）、草類下、竹類（第二卷）、木類（第三卷）、鳥類・獸類・魚類・蟲類（第四卷）の七類に分けて、その各類の內を五十音順に排列してある。各動植物の解説の記し方（體裁）は、最初にその動植物名を平假名で出し、次にその動植物名の「萬葉」に出てゐる字面の全部を洩れなく原字のまゝで出し、それから集中の例歌を擧げ、その後で解説に移つてゐる。例へば、「あさ（麻）（安佐）（朝）」と最初に見出しとして出し、それから行をかへて麻の例歌と解説とを記してゐる。なほその動植物の異名が、「萬葉」に出てゐるものは、最も普通な名稱の次へ取りまとめてその異名を出して解説してある。麻の部のところへ、麻の異名である「を」「そ」を出して説明してある如きである。また熟語のやうになつてゐる物も、同樣に取扱つてある。例へば、「菅」の次に、「山菅」「小菅」「在間菅」「三島菅」等を出して説明してある如きである。見出し及び例歌を出した後に解説を記す。解説は最初に、「和名抄」「字鏡」「和名本草」等の説を載せ、次に篤信・玄達・小野博等近世の本草家の説を載せてゐる。その前か後かに自説を記す。時には故意にか無意識にか、先賢の説を自説のやうに取り用ひて記してゐるらしい所もある。次に「萬葉」以外の古書にその動植物の出てゐる例を記す。最後に、名義—その動植物の名稱の意義（即ち語源）を記す。【價値】雅澄は「古義」（別項）の副産物として、種々の書を作つてゐるが、この書の如きは最も傑出してゐる。これ以前に同類の書が有りはするが、これほど周到な用意を以て詳細に集中の例歌を網羅し盡し、用字法にまで注意を拂ひ、解説に於ても、古來の字書及び本草學者の説を一書に集大成し得た書は、外に見出し得ない。ただその解説の主要をなす動植物の實物の説明は、「本草綱目啓蒙」（小野蘭山）等の説に負ふところが多い。（森本）

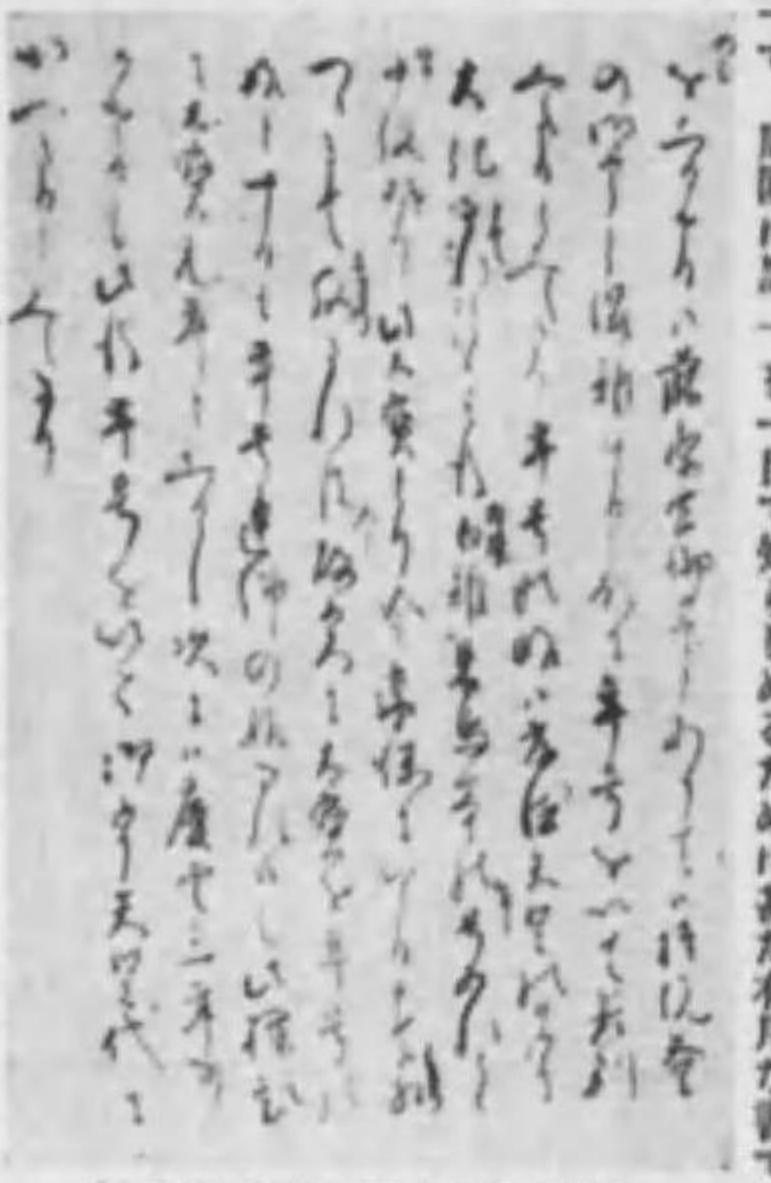
萬葉集品物圖繪　研究書

三册【著者】鹿持雅澄【成立・由來】「萬葉集品物解」（別項）に現はれた動植物を圖によつて示さうとして本書を編んだものである。本書の草・竹・木等の分ち方や排列順は「品物解」と全く一致するし、また本書の今傳はる三本に何れも目録がないのは「品物解」に譲るつもりだつたのかと思はれる。而して本書の成立には、山本世孺の「萬葉集名物考」の功が加はつてゐる事と思はれる。【諸本】三本ある。第一は、宮內省圖書寮に藏する自筆稿本「萬葉集品物圖繪稿」と題する美濃判の一册。第二は、同寮所藏の「萬葉集古義附録　品物圖」と題するものである。この本は、名著刊行會の手によつて、「萬葉集古義」普及版の附録として昭和三年寫眞版で縮寫發行された。以上二本は、嗣羽美命の「萬葉集古義」刊本の序文に、雅澄の嗣子飛鳥井雅慶から宮內省へ「古義」の附録二十餘卷を奉つたとある、その內の一部だと思はれる。第三は、帝國圖書館にある上・中・下三册に分れた美濃判袋綴の本である。同本の奥書の中に、「鹿持雅澄先生之自筆」とあるが疑はしい。この三本を比較して見ると、（1）稿本は繪が、構圖も描線も如何にも素朴で寧ろ稚拙と云ふに近く、色どりは緑一色が大部分で、赤、黃等がその補ひのやうに使つてある。全然色を用ひぬ描線だけの圖も少くなく、素人の描いたものだと一見して分るもので、恐らく雅澄自筆と思はれる。これに比べて帝國圖書館本は、色の數が非常に多くなり、塗り方も甚だ綿密である。墨の描線もなだらかな筆つきで細密に描いてある。この點が稿本と違ふ。併し各圖の構成はほぼ一致してゐる。「かたかご」「すみれ」等大きさも形も葉の曲り方等まで、寸分違はぬものが澤山ある。構圖に小異のあるものが大部分で、全く違つたものは全く同じものより少數である。これ等の類似から見ると、この二本を全然無關係だとしてしまふ事は不可能だと思はれる。なほ稿本で實物不明のため繪の書けなくて「未圖」とある部分は、帝國圖書館本でも大方「圖未だ詳かならず」となつて一致してゐる。要するに二本の間には殆ど相違がない。次に圖書寮一本は、「藤原雅澄撰」「河田小龍　畫」とある故、雅澄の指圖の下に小龍（土佐の畫師）が描いたものであらう。前記二本とは種々の點で相違してゐる。以上三本のうち、稿本は全部自筆で最も信用される本であるが、草稿とでも云ふべきものである。圖書寮一本は最もよく整理され、恐らく素人畫の拙さを憚かつて雅澄が畫だけを小龍に依頼したものであらう。ただ帝國圖書館本は雅澄自身の淨書本か、他人の摸寫したものか、この點は明かでない。



萬葉集品物圖繪（自筆稿本）

【內容】全體の組織を三卷に分け、上卷（圖書寮一本では、卷之一以下これに準ず）に草・竹類。中卷に木類。下卷に鳥・獸・魚・蟲類を圖す。この順序は「品物解」と同じである。「あさ」の次に、「さくらあさ」を出すやうに類似のものを一まとめにして出してゐる點も三本同一である。草類・鳥類等の各部の內は、「品物解」と同じく五十音順に次第してゐる。次に各圖面の體裁は、上記三本とも殆ど同一で、周圍に黑い劃線を引き、內に黑線で動植物の圖を描く。その上を緑・赤・黃等の色で彩つてゐる（稿本にはまゝ色のないものがある）。その畫のない空地に、平假名でその動植物の名を記して見出しとし、横にその動植物を詠んである「萬葉」の歌一首、稀に二首を萬葉假名（右側に片假名附）で記してある。品物が不明で圖の描かれないものは「圖未だ詳ならず」と記して歌だけを記してある。圖の無いものの數は、本によつて違ふ。稿本の各卷の最初の頁に、朱で「未圖」として名を書き出してあるものは、第一卷草竹類十五種、第二卷木類八種、第三卷が鳥類六種、通計二十九種であるが、これは最初稿本作製の折の數らしく、「あべたちばな」「もむにれ」の如きは、右の二十九種中に名が出てゐるに拘はらず圖が出てゐる。後に補充したものであらう。【價値】或る本の動植物を圖を以て示す事は、支那で「詩經」に對して清以來試みられて居り、我が國でも發行されてゐるが、我が國の文學書では、あまり例のない試みである。但し雅澄が自ら思ひついたのか、右の「詩經」の圖解に暗示されたのか、或は上記の山本亡羊の「萬葉名物考」に何等かの暗示を得たものか明かでない。故に創意と云ふ點で、早急に著者をほめたゝへることは出來ないが、書物そのものは、「萬葉」の理解を援けるために有效な書である。「むろの木」の如き、「たかべ（鳥名）」の如き、同じ日本でも土地によつては目に見ることの出來ぬ物、或はごく稀なものを一目で知らしめるために甚だ有用な書である。內に「あづさ」「かづのき」等、今日から見てまるで違つたものを描いてゐるものや、「れつこぐさ」の如く、實物の分らないものを分つたと誤つて圖を描いてゐる如き誤謬のあるのは、當時の本草學の程度では已むを得ぬ誤りとして許容すべきであらう。（森本）



萬葉集僻案抄自筆稿本（羽倉氏藏）

萬葉集僻案抄　註釋書

寫三册【著者】荷田春滿【成立】羽倉信眞氏藏の春滿自筆本に、卷一下卷の「巨勢山乃列列椿云々」の歌の解の、大寶年號の事の條に、「此大寶より今享保にいたる迄」とあり、享保の二字は抹殺してあるところから見て享保年間の作であることが分る。【諸本】羽倉氏藏本は卷一下一册だけで、春滿の訂正もあり、最も信ずべき本である。寫本は多く傳はり、三册本が多い。內容は皆同一である。刊本には萬葉學叢書本と荷田全集本とがある。【內容】「萬葉集」卷一の註釋書であつて、卷二以下は成らなかつた。註釋は本文を擧げ、次に註釋を加へてゐるが、多く問答的になつてゐる。創見が極めて多いが多少獨斷的の所もある。【價値】春滿の萬葉註釋書は、「僻案抄」の外に「萬葉集改訓抄」「萬葉集訓釋」「萬葉和假名訓」等があり、また春滿の説の聞書とも言ふべき荷田信名の「萬葉童蒙抄」（別項）もあるが、本書は卷一だけではあるが、最も完備して居り、且つ最も多く流布した爲めに、春滿の見解の本書によつて傳はることが多く、春滿の萬葉學説を見る上に、最も注意すべきである。【史的地位】春滿の「萬葉集」學説が契沖の影響を享けてゐることは、本書の中に或説とあるのが契沖の「代匠記」の説であることでも知られるが、春滿の「僻案抄」の説は後の眞淵以下の萬葉研究家に影響してゐる所が多く、その歷史的意義に於て大きいものがある。

【參考】萬葉僻案抄刊本（萬葉學叢書）○荷田全集第一卷○校本萬葉集首卷下（久松）

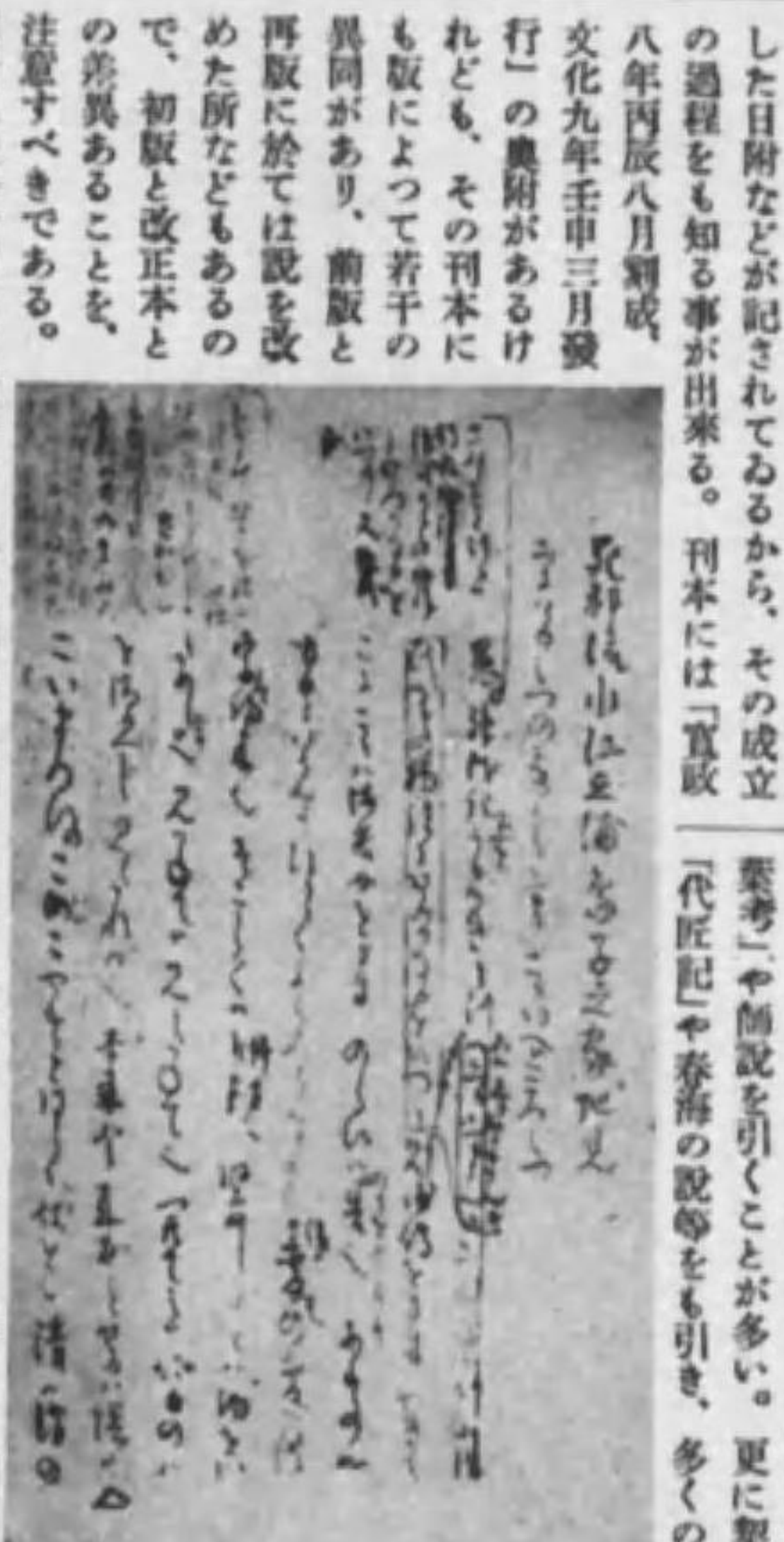
萬葉集美夫君志　註釋書

二帙八册【著者】木村正辭【名義】卷頭の嵯峨帝御製の歌詞による。【成立・刊行】嘉永六年著者二十七歲の時、「萬葉」の註釋を思ひ立ち、音韻の研究、本文批評の研究、諸抄本の渉獵より始めて註釋に從事し、「萬葉集證註」と云ふものを起稿したが、果さずして王政維新の世の中となつた。その後、その「證註」の中より要所を摘出して「萬葉集美夫君志」と名づけ、明治二十二年大八洲學會より、その一部が刊行せられたが、その後も訂正校合を怠らず、書入を加へたものを淨書して、卷一が明治三十四年に上梓せられるに至つた。卷二は明治四十四年刊行。更に卷一は大正二年著者逝去後、肖像及び略傳を附して三版が公にせられた。その稿本は現に岩崎文庫に藏せられるが、幾度も改寫補訂し、初稿本・再稿本等、數種の草稿本や校正本淨書本があり、縱橫に朱墨の書入が施してある等、苦心の跡が歷々と存してゐる。【內容】第一帙は卷一の註釋二册、首卷別記各一册。第二帙は卷二の註釋三册、別記一册より成る。首卷總説の目録は題號の事、撰者の事、訓點の事、古訓の一樣ならざりし事、歌數、略本萬葉集、古本萬葉集、附新撰萬葉集、目録の事、本集の諸々の傳本の事、先哲の註釋に引きたる本どもの事、本書の用字中隋唐以前の音調及び六朝の時の俗字を用ひたるものの事、文字を妄りに改むまじき事、舊訓によりて本文を改正すべきものある事、史學をせむとする人は必ず本集を研究すべき事、本集につきての縣居・鈴屋の兩大人の數へ言、書中に引用したる本どもの稱呼。以上の諸項に分れ、古説先人の説をあげること豐富に、引證も確實で、甚だ便利である。別記二册は、各卷の本文に說き盡し難き說、難解の語、その他の事項に就いて詳しく述べたもの。別に第一帙の別記には、附錄として加納諸平の「玉蜻考」、その補正、鹿持雅澄の「山多豆考」、その補正、「左註日本紀年紀攷」があり、第二帙の別記の附錄には、「新本萬葉集復舊」がある。右のうち「左註日本紀年紀攷」は、萬延元年に成つた。第一帙別記の

奧にある萬延元年の奧書は、「左註日本紀年紀攷」に附するもので、「美夫君志」の成立に關するものでない。【批評】特色は、なるべく原本の文字を改易しないで訓を附して解釋しようとし、文字の改むべき個所は、これを古寫本、その他の證本に準據を求めた所にある。この原本に忠實なる點は著者の一貫せる態度で、賀茂眞淵や鹿持雅澄等の態度とは異なる所である。即ち自由奔放なる獨創的態度よりも、寧ろ着實穩健なる考證的態度をとつた。それが本書の價値を高からしめてゐる。その註釋も集中の語句、或は記・紀以下「和名抄」、或は支那の音韻の書や史籍等を引いて、專ら證例をあげ、依據を正してその解の誤なからん事を期した。それゆゑ解釋は詳密にして概ね安當、安んじて依賴し得る書である。古說をあげる事も詳しく、疑問の辭句は多く他の註釋書の說を引いてこれを檢討してゐる。この態度を以て全卷の註釋を終つたならば、最も優秀なる註釋書が出來上つたであらうが、僅か二卷のみの解であるは遺憾である。その引用せる從來の註釋書には、「萬葉集代匠記」「萬葉集考」「萬葉集略解」「釋萬葉集」「萬葉集燈」「萬葉集玉の小琴」「萬葉集拾穗抄」「萬葉集檜嬬手」（各別項）などが見え、又「萬葉集攷證」（別項）の影響が多く、中には文章まで一致せるものがある。「萬葉集古義」（別項）の註解とも合致する說があるが、本書成稿の當時には、未だ「古義」は世に出でなかつたのであるから、これは暗合である。併し別記の中には「古義」の說を引き補訂を加へてゐる。これは後に增補したものである。【參考】校本萬葉集首卷（諸本解題）（佐佐木）

萬葉集文字辨證（まんえふしふもじべんしよう）　研究書　二卷一册【著者】木村正辭【成立】安政二年【刊行】明治三十七年【內容】萬葉三辨證の一。安政二年二月六日の自序及び凡例がある。集中の用字の疑はしきもの、普通の字體と異なるものに就き、和漢の古書の用例を記し、諸說を擧げて論じ、また諸寫本によつてその字の異同を校し、正字・略字・俗字・譌字等の別を論證したもの。上卷は孫より匠に至る三十四項、下卷は宮より紳に至る二十三項及び「偏旁を省けるなりといへる字」以下「二合字」に至る九項を收めた。【價值】三辨證はいづれも同一の態度より出てゐる。即ちみだりに文字を改めず、異體の文字や發音・訓義の普通と異なるものがあつても、それ等の文字を改めず、誤字をも肯定し、訓をも普通の言葉で附して、容易に讀解しようと云ふ主張の上から生れた書である。隨つて時に牽强附會の說あるを免れないが、考證精緻で內外の書にわたつて博引旁證してゐるから、萬葉研究上一生面を開くと共に、從來の學者に見られない考證的立場を取つて新資料を出し、新しい方法を示してゐるのが、研究者に多大の暗示を與へる所以である。（佐佐木）

萬葉集略解（まんえふしふりやくげ）　註釋書　二十卷三十册【著者】橘千蔭【成立】寛政八年。松平定信の寛政改革の時に當つて、父枝直以來町奉行與力を勤めてゐた千蔭は、辭職後であつたが、減祿の上百日の押込を命ぜられたのが動機となり、その間、即ち二月より五月にわたつて閉門してゐた間に本書を起稿するに至つたのである。併し千蔭は、本居宣長に疑問の箇所を尋ね、また略解の稿成るごとに宣長のもとに送つて閲を請うた。その間の往復の手紙も存し、本書にも宣長の說が多くあげられてゐる。【刊行】文化九年【諸本】自筆稿本は一・三・四・五・十一上・十三上下・十七・十八・十九上下・二十上下の十三册が帝國圖書館に、六・七・八・九・十上下・十四・十五上下・十六の十册が東京帝室博物館に藏せられる。序及び卷一の草稿の一部が竹柏園に藏せられる。校正及び清書の年月が記されてゐるので、その成稿の年代を知ることが出來、また表紙に春海・道別が校したといふ覺書や、伊勢の宣長の所へ遣はした日附などが記されてゐるから、その成立の過程をも知る事が出來る。刊本には「寛政八年丙辰八月刻成、文化九年壬申三月發行」の奧附があるけれども、その刊本にも版によつて若干の異同があり、前版と再版に於ては說を改めた所などもあるので、初版と改正本との差異あることを、注意すべきである。



萬葉集略解自筆稿本（帝室博物館藏）

明治以後の活版本は甚だ多く、積善館本、和歌叢書本（これには、岡本保孝の萬葉集略解書入本や、萬葉集略解札記や、鹿持雅澄の萬葉集古義等の說が鼇頭に記してあつて、略解の說が補正してある）、日本古典全集本・（頭註參考）萬葉集略解（この兩本は他の註釋書の說が參考として掲げられてゐる）、國文叢書本・校註萬葉集略解（何れも頭書があつて他の註釋書の說を參考に掲げてある）等がある。【內容】寛政三年三月の自序があり、卷二十下の奧書によれば、寛政三年二月十日起筆、同八年八月十七日稿本成り、同十二年正月十日に自ら書き終つたといふ。而して寛政八年より文化九年三月にわたつて、全部の刊行を終つたのである。二十卷の中、三・四・十・十一・十二・十三・十四・十七・十九・二十の十卷が上下に分れてゐるから全部で三十册となる。宣長の說が多くあげられ、その他には凡例によれば村田春海及び信夫道別・安田躬弦の助力をも受けたと云ふ。師の賀茂眞淵の影響は最も多く、枕詞の解釋の如きは、眞淵の「冠辭考」（別項）にゆづつてこれを省き、その他にも「萬葉考」や師說を引くことが多い。更に契沖の「代匠記」や春海の說等をも引き、多くの先賢の說を集成してゐる。又異本との校合や他書の引用の如きも、「代匠記」や「考」に引いてゐるのを多く用ひてゐる。「萬葉集」の本文は全部流布本によつて載せてゐるが、その訓の附け方は、從來の書き方とは全く違つてゐる。即ち「萬葉集」の歌と並行に、同じ大きさを以て、平假名で歌の次の行に訓を書き記してゐる。この形式は本書の一特色である。【價值】註解が簡略で而も要を得てゐる。從つて眞淵の如き獨創的見解には乏しいが、それは寧ろ本書をして穩健中正なる態度に向かしめ、その「萬葉集」の入門書としての價値を高からし

めてゐる。他の說を引く事が多いが、就中宣長の說に見るべきものが少くない。また何某の說と記さなくても、先人の註釋書等の說によつたものが數多く見える。他書の引用も孫引したものも多いが、中には節略して引いたところや、他書に引用したのを意を誤つて引き違へたものもある。同一語同一文字の註解が、時としては、場所の異る時に解をも異にしてゐる事があり、必ずしも一貫して統一ある態度で註解したものではない。本書はしかく幾多の缺點短所を有しながらも、入門書としては最も適したものといふべく、「萬葉集」の最も簡便なる全註として、今日まで世に行はれてゐる。なほ異本との校異の如きも、多くは「代匠記」によつたものであるが、ただ元曆校本を初めて引用して、本文校勘の上に使つたのは、本書の一功績である。【研究書】右の如く本書は最も廣く行はれた結果、その說の不備を補正する書も多く編まれてゐる。○萬葉集略解直日　二册（橘守部。略解の卷一・二を寫して、自說を頭書してゐる）○荏野のつみ草　六册（田中大秀。大秀が師宣長の說及び自說を略解全部に書き入れたものを、元田鑑三氏が摘記したもの）○萬葉集略解補闕二册（八木美穗。卷一より卷五に及ぶ。卷一は弘化三年、卷二は嘉永六年成）○萬葉集略解札記十一册（岡本保孝。略解の句を拔抄し、その註を補正したもの。もと略解に書き入れたのを寫したものである。慶應四年成）○萬葉集略解補正一册（岡宮永鮮。卷一の補正）○萬葉集略解補一册（安部眞貞。卷一より卷七までの補正）○萬葉集略解補正十六册（木村正辭。卷一より卷十四まで及び卷二十の補正、初卷の題言には略の誤葉とある。萬延元年起稿、明治元年成）○萬葉集略解正誤二册（木村正辭。前書の再稿で、それよりも詳しい）○萬葉集略解補遺（中島廣足。富士谷御杖・横山由清・黑川眞賴等の略解書入本）。【索引】萬葉集略解目錄二册（南碩。卷々の目錄を摘錄して五十音に分類したもの。天保十四年成）○萬葉集略解道標　一册（同人同年撰。全部より主要なる語を拔いて丁數を示す。天保十一年成）。【參考】略解關係書簡集（東京帝室博物館所藏）○萬葉集略解覺書歌（同上）○萬葉集略解編成の事情　關根正直（帝國文學八ノ六）○萬葉集書目提要　木村正辭　○校本萬葉集首卷（諸本解題）（佐佐木）

萬葉集類句（まんえふしふるゐく）　索引　五册【著者】長野美波留【成立】寛政十一年春【諸本】寛政十一年の刊本は著者自ら發刊したもので、著者の最も意に叶つたものであらうが、今、宮內省圖書寮に藏されてゐる「萬葉類句四句一卷」と表題のある寫本がある。序文も奧書もないから、誰が如何にして作つた本か不明だが、その內容が刊本と酷似してゐるから刊本の異本と認むべきものであらう。刊本との相違をあげると、（一）刊本の四册なるに對し、本書は全部を一册に纏めてある。（二）刊本が短歌と旋頭歌との分類なるに對し、本書には旋頭歌がない。（三）刊本は例歌を出すのに、例歌の上に卷數と頁數とを並記してゐる。本書は卷數のみで頁數を記さない。（四）刊本よりも、本書の方が例歌がかなり豐富である。最初から十五首ほどで二首の違ひがあるから、全體としては餘程の數に上るであらう。（五）刊本では、寛永年間刊行の萬葉流布本を底本としてゐるから、流布本の誤のまゝ分類してゐる。本書は、寛永版を用ひてゐることは確かであるが、甚しい誤はその右わきに訂正を書きこんでゐる。通觀すると、（一）（三）に於ては刊本の方が優れ、（四）（五）の點では本書の方が優れてゐる。大體から云へば旋頭歌のない點は別として、刊本よりも本書の方が整頓してゐると云へる。二書何れが前に成つたものかは決し難い。【內容】「萬葉集」の短歌と旋頭歌とを集めて分類した書物である。奧書の最後に「長歌部嗣出」とある故、長歌もつづけ出して「萬葉」の全歌を分類するつもりであつたらしいが、長歌の方は完成されたか否か不明である。本書は短歌を三句まで（即ち後世の上の句）と四句以下（即ち下の句）までとに分ち、第四句の初めの語によつて分類排列してゐる。排列は、いろは順である。故に全體が、いろは四十七部に分類され、そのいの部・ろの部の內で、更にいろは順（下の句の初語のいろは順）に排列されてゐる。例へばいの部の最初を例示すれば、

十　五十四　こひまろひこひはしぬともいちしるく　いろにはいでしあさがほの花（以上を一行に記した）

四　四十四　いふことのかしこきくにぞくれなゐの　いろにないでそおもひしぬとも　大伴坂上郎女（同右）

七　二十四　月草にころもはそむるきみがため　いろどるころもすらんおもひて（同右）

何れも第四句の「いろにはいでし」「いろにないでそ」「いろどるころも」で、順番つけて並べたものであることが明かである。かくの如くして、第一册から第四册の大部分で短歌を終り、次に第四册の最後の三枚半に旋頭歌を載せてゐる。旋頭歌は短歌の上の句の代りに、第四句迄を上の句と見、第五句・六句を下の句と見なして、第五句の初語で排列してゐる。以上の編集法は「古今類句」などの編集體裁にならつたものである。【著者小傳】美波留は、大村光枝に學び、後、塙保己一の弟子となつた學者で、文政五年四十八歲で歿した。「めざましぐさ」その他數種の著述がある。（森本）

萬葉集類句（まんえふしふるゐく）　索引　三卷【著者】賀茂季鷹【成立】江戶在住（十九歲、江戶へ赴く）の折から、三十八歲（寛政元年）で京都へかへつた後も、仕事をつづけて文化二年九月（五十二歲）に脫稿したもので、少くとも十四五年以上を費して延び〳〵になりながら出來上つたものである。なほ訓の附方は羽倉信風の助力を得てゐる。【刊行】文化三年春【內容】「萬葉集」の短歌と旋頭歌とを下の句（何れも第四句以下）で探し出すために作られた書で、下の句索引とも云ふべき書である。最初に序文があつて本書の編纂の方針と由來とをのべ、次に本文、最後に跋がある。本文は全體をいろは順に區分排列し、そのい部・ろ部等の各部の內を更にいろは順に排列して、「萬葉」の歌の第四句の頭字のいろは順によつて並べてゐる。上卷に「い」から「か」まで、中卷に「よ」から「て」まで、下卷に「あ」から「す」までを收めてゐる。各歌の上には、卷數と丁數とを記してある。短歌と旋頭歌とは區別を立てず、混合して一樣に排列してゐる。【價值】本書は、四年後の文化七年に刊行された同人の「萬葉集長歌類句」と併せて、「萬葉集」の歌の索引書であるが、永年の苦心に拘らず、畢竟、第四句索引書、又は第四句類句集に終つてゐる。この點、長野美波留の「萬葉集類句」（別項）と同樣な根本的な缺陷を持つてゐて、本書が今日顧みられぬ理由はこゝに在る。これは赤萬葉時代には、後世の上句・下句の考へはなく、且つ

句の切れやうも第三句で切れてゐた事を知らなかつた點でも許容出來ぬ缺陷である。旋頭歌を短歌と區別せず一緒に混合して排列してゐるのは、兩者の特質を知らず、前者は短歌の下にも一句加はつたものぐらゐの考へで扱つたものらしく、これも他の同類の索引書に劣つてゐる點である。但し本書の用意に對しては推稱する價値がある。殊に「野」を「ぬ」、「しのぶ」を「しぬぶ」として入れてそれを序文にことわつたり、古點の誤つてゐるのを訂正して用ひたりしてゐる點は、他の類似書に缺けた用意で、本書の特色である。全體として今日からは用のない書であるが、當時としては、作歌や研究のため（殊に前者のため）に有用な書であつたであらう。（森本）

萬葉集類林（まんえふしふるゐりん）　辭書　十五卷

【著者】海北若沖【諸本】從來寫本として傳へられてゐたが、契沖全集附卷長流全集に附載せられて、本文十五卷が飜刻せられ、別に萬葉集類林索引が揃うてゐる。【內容】集中の語をいろは別に分ち、更にその中を、釋言・釋人・釋宮・釋器・釋天・釋地・釋草・釋蟲・釋雜の名目に分つて揭げ、その註の出でた卷數・丁數及び歌詞を若干句記し、次にかなり詳しい註解・考證を記した書である。集中の用例のみならず、他の古典・辭書等の所見をも附してゐる。註解は多く契沖の說によつた。師說として契沖說を引いた外、木瀨三之・下河邊長流等の說をも載せてゐる。若沖の著「古類葉抄」七冊は、萬葉及び記・紀の語をいろは分にして解を添へたもので、「萬葉集類林」の初稿本となつたものである。【價値】いろは別の中を更に分類したのは煩雜にすぎるが、用例も豐富で、註釋も詳しく、辭書と索引とを兼ねた書として卓越した書である。殊に古學開けて間もなき頃の著として、かく雄大且つ精緻な編著をものしたのは、たとひ不備な點や誤れる解があつても、多く稱するに足るものがある。實に古語の辭典としては最初に出た完備せる書と云ふ事が出來る。【附記】揖取魚彥の「楢乃嬬手」（五卷。嘉永四年刊）は「萬葉集類林」と「萬葉考」とによつて「萬葉」及び記・紀の語を五十音順に排列したもので、橘守部の「萬葉集墨繩」には「萬葉集類林」として本書の解題が記されてゐる。（佐佐木）

萬葉新採百首解（まんえふしんさいひやくしゆかい）　抄釋書　三卷三冊【著者】賀茂眞淵【成立】寶曆二年【刊行】嘉永四年【諸本】自著稿本は竹柏園に存す。刊本には誤脫がある。賀茂眞淵全集にも入る。【內容】刊本には賀茂眞淵の序文、藤原眞彥の跋文がある。集中より優れたる短歌百首を選出し、春・夏・秋・冬・相聞（以上上卷）・羇旅（中卷）・游覽・古京・皇居・雜事・宴會・賀（以上下卷）に分類して、詳しい註釋・批評を加へたもの。部類分中の歌の揭出順は卷の順によらず、同種の歌を同一の箇所に揭げてゐる。歌詞は先づ萬葉假字で記し、次に訓を別提して草假字で記した。附記に「萬葉集」の歌のすぐれたる所以を論じて古道に說き及んでゐる。【價値】百首の短歌は、いづれも傑出した歌で、さすがに眞淵の歌を見る眼の秀でたことが分る。註釋も親切且つ明快で、臆說・獨斷も少く、批評も亦肯綮に愜するものがあつて、好著である。附記の古今の歌の差違を論じた說も、眞淵の意見を窺ふ上に好資料たるを失はぬ。【附記】「萬葉新採百首」は、百首の短歌だけを橘千蔭が書いて享和三年に刊行したものである。（佐佐木）

【參考】萬葉新採百首解補註（寫）藤井高尙

萬葉童蒙抄（まんえふどうもうせう）　和歌　四十六冊

【著者】荷田信名。從來、荷田春滿の著書と傳へられたのであるが、本書を見ると春滿の說を宗師案として揭げ、別に「愚案」と說があげてあるので、本書は春滿の說を主としてその門弟が記したものといふことになるが、羽倉家藏の羽倉可亭良信撰の「荷田東丸遺稿目錄」といふ寫本の中に「萬葉集童蒙抄信名筆記」とあるから、この書は信名の著書である事が知られる。信名は春滿の弟である。【成立】「萬葉僻案抄」の成立後とすれば、享保以後であらう。【諸本】京都の羽倉信眞氏藏本と松井簡治氏藏本の二部の寫本がある。羽倉本は卷二から卷十七の「多麻波夜須武庫能和多里爾云々」の歌まで四十六冊から成つて居り、松井本は卷三から卷十六まで四十四冊ある。且つ松井本には、四十四冊のうちに十八卷異本といふのが一冊あつて卷八の註を施してある。同じく卷八の註を施してある松井本の第二十冊、羽倉本の第二十冊とを比較するに、松井本・羽倉本の二十はほぼ同じであるが、この十八卷異本は餘程趣を異にしてゐる。內の表紙に、「萬葉集移徒草」とあり、「此卷は重出なれとも註に異同有之」と記してある。が、この異本は「萬葉集代匠記」初稿本が一冊紛れて入つたのであるから、松井本は四十三冊になつてゐるといふことが出來る。松井本は大震災の時一部燒失した。荷田全集所收。【內容】「萬葉集」卷二から卷十七に至る註釋書である。卷一のないのは恐らく「萬葉集僻案抄」につぐためであつたらう。詳細な註釋書であるが春滿の講義に基づいて信名が記したのであらう。未整頓なところが多い。全體として訓の上にも註釋の上にも創見が多いが臆說もある。【價値】本書は春滿の著書と言ふことは出來ないにしても、春滿の說を基礎にして成つたものであるから、春滿の萬葉學說を知る重要資料とし、又信名の萬葉學者としての特質を見る上からも重要なものである。殊に春滿の他の萬葉註釋書が多く零卷であるに對して、「萬葉集」の十數卷を註釋した大部なものであるから、萬葉註釋書としては、たとひ未完成であり臆斷が多いにしても重要なるものである。

【參考】校本萬葉集首卷下○荷田全集　（久松）

萬葉童蒙抄（羽倉信眞氏藏）

萬葉山常百首（まんえふやまとひやくしゆ）　拔萃書　一卷【編者】本居大平【成立】文化十二年【刊行】文政三年【諸本】本居大平全集所收。【解說】「萬葉集」中より、古道の助けとなる歌を卷の順に百首を抄出したもの。傍訓を附し、卷數・丁數を記す。文政三年の安田長穗の序文、編者の跋文がある。

【參考】萬葉山常百首解　久保季茲（明治十六年刊）

○萬葉山常百首譯義　木村正辭　（佐佐木）

萬葉用字格（まんえふようじかく）　研究書　一卷

【著者】釋春登【成立】文化十四年【刊行】文化十五年【內容】文化十五年二月の狩谷棭齋の序、文化十四年正月の自序例言がある。集中の用字を五十音順に分ち、各部の中を更に、正音・略音・正訓・義訓・略訓・約訓・借訓・戲書の八種に分つて文字を揭げ、傍訓を附し、割註にその文字の出でた卷數・用例を記したものである。稀に記・紀の用例をも記した所がある。又註解もある。それは多く「略解」に從つてゐる。【價値】集中の文字の用例を一目して知るのに便利な書で、この種の書としては唯一の刊本である。又索引の用をなす所もあり、研究者に便宜を與へる。但し文字に洩れたものや誤り等もあつて、更に多くの補正を必要とする。

【參考】萬葉用字格補遺　木村正辭　（佐佐木）

み

三井寺　みゐでら　「狂女物の謠曲」を見よ。

三浦大助紅梅靮（みうらのおほすけこうばいたづな）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】長谷川千四・文耕堂【名稱】四の切、衣笠籠城を前に、大助が紅梅靮を獲錄つて、馬を進める件による。【興行】享保十五年二月十五日初日、竹本座。【諸本】文耕堂淨瑠璃集（續帝國文庫）所收（歌舞伎臺帳は、時代狂言傑作集卷一・日本戲曲全集卷二十六に收む）。【題材】源賴朝の伊豆擧兵に際し、俗に「三浦大助百六つ」と謠はれた老將義明と、その一黨及び畠山重忠・梶原景時などの、源氏に對するそれ〴〵異つた忠節義心を取扱つたもので、史實としては「東鑑」「源平盛衰記」に記された所に據つてゐる。【梗概】〔一段〕（眞鶴崎）石橋山に敗れた賴朝主從七騎は協議の末、土肥遠平を使者として援を關八州の侍に求める事になる。義朝の勘氣をうけた儘死んだ八丁礫の喜平治の寡婦と遺兒大三郎が烏帽子實となつて來り漏し、手柄を立てた上、主從となる事を約して別れる。（衣笠城）百六歲の誕辰を迎へた三浦大助は、一門九十三騎を集めて祝ひを受けるが、惣領娘お土のみは、その子岡崎父子が賴朝擧兵に馳せ參じた留守を預つた爲めに不參と聞き、出陣の機を逸した事を悔む。佐殿の使者土肥遠平と名乘つてお土が御召の旨を傳へるので大助は喜び、直に出陣の令を發するが、孫聟畠山重忠一人は平家方であるためそれを拒む。〔二段〕（道行）お土は孫眞田與市の安否を氣遣ひ石橋山へ。（岡崎館）それはお土の夢で、やがて與市の附人眞田文藏が馳せ歸つて戰の物語。與市が俣野に討たれたと聞いてお土は激怒、文藏を勘當する。（又九郎兵衞住家）八丁礫の後家は、遺兒大三郎をつれて强慾な紺屋の又九郎兵衞に再緣してゐる。土肥遠平の情で大三郎を一味に加へる連判狀が屆けられるのを、無筆の夫は密夫からの起請と邪推する。丁稚の長吉實は源氏方の安達盛長は密通の相手を寺子屋の定右衞門だと告げるので又九は男を連れて來て起請を突附けると、男は又九を刺し眞田文藏と名を明かす。又九も八丁礫の父で日頃の强慾は軍用金を調へん手だてだつたと告げ、貯へた七百兩を嫁と孫に託して死ぬ。〔三段〕（青貝師六郎太夫住家）文藏は又九の遺した七百兩になほ三百兩を補はうと、後家を伴ひ許嫁の青貝師の娘梢を尋ね、遊女請出金に入用と稱し傾城勤めをして呉れと賴む。梢は後家に嫉妬する。舅六郎太夫は本心を見破り、撿て大場景親が懸望の劍を手放さうと梢を連れて急ぐ。（星合寺）大場に劍の目利きを乞はれた梶原平三は稀代の名劍と賞し、中字の「八幡」の文字に何事かを察する。なほも俣野の橫槍で二つ胴の試し斬りをする事になるが、死罪人が一人しかないので金欲しさに六郎太夫は自ら試される事を懇願して許される。梶原は重ね合された二人のうち、わざと老人のみを助けるので、大場・俣野はその目利違ひを嘲つて歸つて行く。梶原は源氏に心を寄せる本心を明かした上刀を買取らうと約し、傍の手水鉢を切つて名劍のしるしを見せる。〔四段〕（重忠館）衣笠城攻擊を前に、重忠は妻の祖父大助に陣中見舞を贈らうと妻玉房の乳人お犬を贈物の鎧櫃に附添うて赴かせようとする所へ、大場景親が入來、重忠の二心を疑ふので櫃を開くと玉房が物狂ひの體で現はれる。大場は疑ひを晴しお犬は離別された玉房を伴ひ衣笠城へ。（衣笠城中）一門盡くを賴朝救援に赴かせた大助は、ただ一騎嫁どもと共に籠城してゐる。お犬は玉房のために一方の守備を仰せつけられたいと相嫁達に賴むが、却つて重忠の間者と疑はれる。重忠が討ち入るが大助は彼が己を救はうとしてゐる心底を見破り、自ら首を重忠に討たせ、三浦・畠山の血緣を元通り繫がうと言ふ。折しも大助の首討つたりと呼ばはつて、景時が雜兵に扮した青貝師の娘梢を伴ひ、身代りに死んだ六郎太夫の首を提げて馳けつける。お犬は六郎太夫の姉娘で、梶原への恩義とお犬の主重忠への奉公に自ら死んだのである。梶原の所持せる名劍の威德によつて玉房についてゐた妖狐、曾て大助が那須野で射とめた玉藻前の靈が退散し、その劍は昔大助が忘れ形見の嬰兒に與へたものと知れ、六郎太夫は三浦の長男であつた事が明かになる。大助はその菩提のため、すぐに有髮の僧となり、名も長命の瑞を顯はし、瑞翁と名乘る。〔五段〕（石橋山）再擧の賴朝勢に畠山・梶原が來り屬し、眞田文藏は俣野を討つて主君與市の仇を報じ、丁稚長吉の安達盛長・八丁礫の後家・大三郎は大場を生捕つて來り會する。【脚色】筋立傾作の名人文耕堂と、淡々として締のない千四との合作であるから、例によつてすなほで不自然がなく、而も相當曲のある作になつてゐる。三段目の切、二つ胴の段は「石切梶原」として歌舞伎の重要な中幕物となるが、三の切が屋體ではなくて屋外を扱つてゐる點が、「娘景淸」「[illegible]」と共に古來特異な例とされてゐる（傳奇作書）。又殆ど總ての場合敵役として描かれる梶原平三を立役とし、意識的に「名をげぢ〳〵と言はるれど誠は武士の鑑」と辯解してゐる點や、淨瑠璃特有の惡型らしい人物が現はれない點が珍らしい。なほ四段目の切で大助が瑞翁と名を改める件は「恩愛一門撰捨つる此身は志賀の一ツ松云々」と仄めかしてゐるやうに、本曲の出た享保十五年の六月十六日（玄同放言卷三參照）に高齡を以て歿した當時長壽で名の高い志賀隨翁（隨應・隨翁とも）の單なる當て込みである。【傳統】本曲は初演以來、殆ど行はれなかつたが、天保十一年九月大阪稻荷境內東芝居で春野家有齋・山田案山子に依り改作上演されて居り、初代豐澤團平入朱の細字五行本が今日豐竹顯太夫氏の藏となつてゐる由である（歌舞

作（昭和二ノ一二）。併し今は「二つ胴」以外は行はれない。歌舞伎に移されたのは本曲の出た享保十五年の八月十四日初日、大阪角芝居嵐三十郎座（京鹿歌舞伎年代記）が最初であらう。爾後種々の替名題で上演されてゐるが、寶暦明和の頃に三保木儀左衞門が梶原を演じた話、降つて文化の頃瑞寶嵐吉三郎が梶原の役を拒絕した話、濱松歌國が本曲をそのまゝ「會稽三浦譽」なる輪入讀本に仕立てた事、文政四年三代歌右衞門がこれを演じた事等が「傳奇作書」に詳しい。今日では鴈治郎・羽左衞門・吉右衞門がそれ〴〵獨自の演出を示してゐる。【參考】 傳奇作書拾遺下卷○舞臺觀客手引草（杉贋阿彌）○吉右衞門の石切梶原の型（歌舞伎六八）○鴈治郎の石切梶原の型（演藝畫報大正五ノ三）○演劇評話「四人の石切梶原」三宅周太郎○棧敷から書齋へ（伊原青々園）　（守隨）

三浦別れの段 みうらわかれのだん 「鎌倉三代記」を見よ。

三笠附 みかさづけ 雜俳 【解說】 冠附（別項）の一種で、後には賭博類似のものとなつた雜俳の一種である。中絕して今日に傳はつてゐないので詳細なことは不明であるが、本來は名稱の通り笠附の五文字を三題出し、その各題に各々七文字・五文字を附け、つまり一組三句づつの笠附を出して高點を爭うたものらしい。が、後には笠附の題一つに二十一句を書き附けて示し、その二十一句中から己の好きなもの三句を選んで一組として出し、點者の選句と一致した句の多きを勝とするもので、例へば三句悉く當つた時は三剛、二句の時は二剛、一句の時は一剛を與へ、當らぬ時は何も與へぬといふ風な定め方で、入花料は一組につき通例十文づつ位であつたもののやうである。後にはなほ一層簡單な形式となり、催主は和歌三神などを書いた卷紙に、一・十・十五、或は三・十六・二十一などとただ數字のみを書いて封じ置き、附ける者は規定の入花を添へて一から二十一迄の數字を一組三つづつ書いて出し、催主の書いて置いた數字と照合し、三つ共悉く當つたものを一番、二つ當つたものを二番とするなど、全く句作を離れて純然たる賭引となつてしまつた。更に後には棒引と稱へて自分の思ふ句の下にただ何本かの棒を引き、若し五本棒の句が當れば五剛、十本のが當れば十剛を遣るといふやうなこととなつた。「嬉遊笑覽」中に引いた大田南畝の說には、「三笠附はその始め卷を二通かきて、一通は點をして封じ、一通は封ぜずしてあるを、人々それぞれに心にかなふ句を己が句と定めたる後、かの點をして封じたる方を開き勝負を定むるなり。句は二十一句なり。鳥の子紙に書きたり。點者此句は筆にまかせて書點して諸國に鬻ぎ大に利を得たり、其の後句をやめて一より二十一までの數を三つ重ねて書き勝負を定む。是より博奕にひとしければ御禁止ありといへり」とある。（川柳全書）　（潁原）

三日月 みかづき 小說 【作者】 ちぬの浦浪六（村上浪六）【發表】 明治二十四年四月五日より六月二十八日まで「報知叢話」に連載。【刊行】 同年七月七日、春陽堂。【梗概】 一と年飛鳥山の花見に、旗本と爭ひ、十七人を斬つた三日月は、寒行白須甲斐の情けで五年の所拂ひとなり、下總佐倉の城下に人目を忍ぶ。斬られた十七人の遺族は三日月を仇と狙ひ、佐倉の家老田原大角を頼んで、奸計によつて三日月を討たうとする。その奸計が破れるや更に藩の力によつて召捕らうとする。三日月は怒つて召捕の武士を斬つて江戶に歸る。この事が原因となつて、三日月の子分の町奴達及びそれにつながる町火消と、佐倉藩士の間に葛藤が出來、遂には血氣の激するところ、佐倉侯の屋敷に火をかけてこれを包圍し、一場の大騷動にならうとする。大老酒井若狹守はこれを耳にし、佐倉家の落度を責め、田原を切腹させる一方、三日月にも切腹させる。三日月は折柄撥き鳴らす琵琶の音を聞きつつ、武士らしく大老の面前で華々しい最期をとげる。【解說】 缺點の甚だ多い小說である。描寫に誇張と無理が多く、性格が描かれてゐず、結構に弛緩としたところや、不手際な補綴細工をし過ぎた點がある。だが、著者の所謂「人に骨なく腸は魚河岸にのみある」今の世に對する諷刺乃至氣焰錄と見れば、稚氣と衒氣と義俠が多少鼻につくが、三日月の俠勇が全篇に言ひやうのない緊張味を添へ、文章に凛とした氣合がこもつてゐて、今日なほ大衆の心をうつものがある。この作は浪六の處女作であるが、發表するや好評嘖々、作者の浪六とは何人ぞといふ問題を生じ、紅葉・露伴の何れかならんとまで推想された。それは文品が、紅・露二家に似たといふよりは、寧ろこの二家でなければ、これだけのものは書けまいといふにあつた。卽ち浪六はこの一作を以て一躍文名を得たのである。（稻田（泉））

三方 みかた 漢學者 【姓名】 山田ノ史。三方は御形・御方とも書く。【生歿】 未詳 【家系】 山田宿禰と同祖。山田宿禰は周の靈王の太子晋の後とも、魏の司空王昶の後ともいふ（新撰姓氏錄）。「大日本史」（列傳一四〇）には、「山田史御方は魏の司空王昶の後なり」とある。【閱歷】 持統天皇の六年十月、務廣肆を授けられた。越えて慶雲四年、學術を嘉して布・絲・鹽・穀等を賜はつた。和銅三年正月從五位下、四月周防守に任ぜられた。養老四年從五位上、翌年、紀淸人・山上憶良・刀利宣令等十餘人と共に退朝後に東宮に侍せしめられた。當時三方は文章博士であつた。同六年四月、盜に座し法によつて贓を償はしめられたが、家に尺布もなかつたので、特に赦されたといふ。後、大學頭となつた。なほ養老六年四月の詔の中に、「朕念ふに御方は笈を遠方に負うて蕃國に遊學す。歸朝の後、傳へて生徒に授け、而して文館の學士頗る文を屬するを解す云々」と見えてゐる。これによつてその學識の一斑を知ることが出來よう。その詩は「懷風藻」に、歌は「萬葉集」に載つてゐる。（山岸）

三上參次 みかみさんじ 國史學者 【閱歷】 兵庫縣人幸田貞介の二男として慶應元年九月二十八日姬路に生れ、先代三上勝明の養嗣子となる。明治十九年、東京帝國文科大學和文學科に入學したが、當時の教授には島田重禮・小中村淸矩（日本古代法律・日本歷史）・內藤恥叟・物集高見・チェンブレン（和文學・博言學）等が居り、同窓には高津鍬三郞、一級上に上田萬年がゐた。和文學科の學制は三年間を通じて、和文學は十二時間であつたが、日本歷史及び日本支那古代法律は二十一時間に及ぶ有樣であつた。二十二年卒業の後直ちに大學院に學んだが、二十四年文科大學講師となつて、日本歷史・日本法制沿革を講じ、翌二十五年には東京女子高等師範學校教授を兼ね、二十六年帝大助教授として專任となり、三十二年文學博士の學位を受けて教授に任じ（大正十五年まで）、國史科第一講座を擔任、三十八年史料編纂官（大正八年まで）として日本史料編纂の事務に從ひ、三十九年には帝國學士院會員に擧げられ、又臨時帝室編修局に編修官長として「明治天皇紀」編纂に功あり、その他維新史料編纂會委員・國寶保存會委員等に任じた。大正十五年四月停年制に依り、東大教授を退き、同名譽教授に推された。昭和九年正月の政治初めには「明治天皇紀」編纂の功により勳一等旭日大綬章を親授された。【著書】 日本文學史○日本文學小史○白河樂翁公と德川時代（明治二十四年、吉川弘文館）○社寺領性質の研究（大正三年、東京帝國大學文科大學紀要第一）○日本歷史圖會十二冊。【業績】 帝國大學國文學科卒業直後に刊行された「日本文學史」（別項）は、最初の國文學史として重要な地位を占めるものであり、國文學者としての論文も亦相當に多く、雜誌「帝國文學」「文」等に發表されてゐるが、やはり「史學雜誌」等に現はれた論文の數の方が多く「歷史より見たる自殺特に情死」（史學雜誌）「江戶時代の殉死に就て」（同上）「德川政治家としての松平定信」（同上）等に察せらるる如く、社會學的な立場を取つたものが目に立つが、これは博士の一つの特徴であらう。以上の諸雜誌の外、「皇典講究所講演」「歷史地理」「法律新聞」「日本社會學院年報」等に論文が見られる。國史研究家としては勿論、國文學の開拓者としてもその功績は大きい。（土井）

三上參次

三河小町 みかはこまち 俳諧集 二冊 【撰者】 太田白雪 【本稱】 誹諧三河小町 【名義】 下卷末に、小野の小町が伊勢の土田の浦から船に乘つて、三河の小坂井の鄕に渡つたと言ひ傳へるとあつて、これから三河小町と名づけたのであるとある。本書の下卷を女流俳人の句の集にしたのもこれに因んでのことらしい。【刊行】 元祿十五年十一月 【諸本】 蕉門珍書百種第三編所收。【內容】 上卷を天象・時節・地儀・山類・水邊・居所・國世界・草部・木部・鳥類・獸類・蟲類・魚類・氣形・人倫幷異名・人事・人事雜物幷調度・衣類・食物・言詞・雪月花郭公の分類によつて發句四百二十句を採錄し、下卷は四季の序次によつて當時の女流俳人の發句百二句を採錄し、末に專車・桃鯉・言風等二十六人の附句四十三句を拔萃してゐる。作者は、上卷は三河地方の人が多いが、芭蕉を初め當時の著名な蕉門俳人も少からず、下卷の女流俳人は日本全土に廣く亙つてゐる。下卷の初めに舍羅の序、末尾に小町に關する記事五項を添へてゐる。【價値】 本書はその分類の特色ある點に於て先づ注意される。また白雪にはこの集より前に、元祿十二年に「誹諧曾我」、同十四年に「切々打込」があり、元祿十二年、白雪の長子の桃先と雪丸との共撰に「茶のさうし」があつて、本集はこれ等の集と共に芭蕉歿後の三河地方の蕉風を知るべきものとして注意すべきであるが、三河地方以外の俳人中でも、當時大阪邊に隱れ住んでゐた凡兆の句の見える事なども注意すべきものである。又下卷を女流俳句集とした事は、正に女流俳句集の先鞭を附けたものである。（志田・荻原）

身代り音頭 みがはりおんど 「大塔宮曦鎧」を見よ。

未刊隨筆百種 みかんずゐひつひやくしゆ 隨筆 二十三冊 【編者】 三田村鳶魚校訂・山田淸作編 【刊行】 昭和二―三年 【內容】 寫本のみで傳はつて版本にならなかつた江戶時代の隨筆一百種を集めたもので、隨筆と言つても普通版行された皇漢學者等の考證又は好古的のものではなく、主として、江戶の市政・行事・風習・時事等に關する好事家の書留などを特輯したのである。隨つて江戶及び江戶期の全國の制度・民情・世態等の史的攻究資料として役立つ書を多く收めてゐる。從來未刊の書を集めた點に於て普通の隨筆集と選を殊にせるは言ふまでもない。原本に圖畫の有るものは悉く皆これを收めてあるのも貴い。每卷の首に所收書籍の解題、又卷尾に簡單な索引が添へられてゐる。

【第一卷】 戲場壁緊考・操曲入門口傳之卷・新校編の包丁。【第二卷】 江戶於菓・文政年間漫錄・撰要社方風聞記・吉原春秋二度の景物・寬政雜談。【第三卷】 享和雜記・俗事百工起源・淺草志・勝扇子。【第四卷】 寶暦年間考・天明紀聞寬政紀聞・仙臺堂五節雜錄。【第五卷】 尾陽戲場事始・吉原失墜・江府・村摘記。【第六卷】 事々錄・天保改革雜談。【第七卷】 葉笑集・知足百人一首・古今實名所。【第八卷】 かくやいかにの記・文化秘筆・戲作者實氣集・七種寶納記。淺江戶鑑綱元集・純寶利古刀・實丙密秘登律・徽界【第九卷】 及瓜漫筆・天保雜說見聞祕錄。【第十卷】 寬都一きくま・の記・寬政秘錄・世のすがた。【第十一卷】 き・のまに〳〵・白石先生實貨事略追加・豐島郡淺草地名考・俗語館鈔坊始末。【第十二卷】 寶暦錄・江戶噂書目錄・洒水一滴抄・閑窓瑣談・宗守試。【第十三卷】 臨踐氣・家屋世々の跡・高田雲雀・江戶風俗壞然帳・崎陽賊船考。【第十四卷】 篤芸雙紙・茶話・一攫物語・擁林閑草・文府外記・江戶自慢。【第十五卷】 擁營遊略・水戶前中納言殿御家記・遊女尚人眞智・公儀・三十三个條勸文・剛之著書朝澄。【第十六卷】 眞木のかつら・身力め額殿人足一件・唱日全書・義交苦口記・異聞拾遺物語・優美心得。【第十七卷】 公儀綸語・狩野五家譜・享保通鑑・寬政書。【第十八卷】 列見聞話・梅亭淨瑠璃目錄・六國列香之辨・小うた打聞・新發組日錄・六國四季之火合。【第十九卷】 在京在坂中日記・文政雜說集・鶯山砂子・實錄上下考・天狗騷動實錄・十寸見編年集。【第二十卷】 雪のふる道・大江戶春秋・寬政紀聞・花街古鑑・寬保見聞錄。【第二十一卷】 江戶芝居年代記。【第二十二卷】 天保新政錄・續編來書・從世珍談集・川越松山之記・身延攻。【第二十三卷】 鶴屋南北聞書・桐竹紋十郞手記・一本草・門前地改覺之實錄・玉川三豆暢。（和田）

幹雄 みきを 俳人 【姓名】 三森幹治 【別號】 春秋庵・香楠居・桐子園・天壽老人 【生歿】 文政十二年十二月十六日、磐城國石川郡形見村に生れ、明治四十三年十月十七日、東京深川の自庵に歿す。享年八十二 【閱歷】 幼少から俳諧を好み、仙臺の老臣寺島梅成及び鈴木左竹等と交り、靜波と號して俳諧を修業した。安政元年二十六歲の時江戶に上り、惺庵西馬の門に入つて幹雄の號を受けた。明治七年七月俳諧明倫社を創設し、十三年「明倫雜誌」（別項）を發行して風教陶冶の道を鼓吹し、また大成敎に屬して大敎正の位を受けた。二十六年春秋庵十一世となり、四十一年庵號を嗣子準一に讓り、天壽老人と號した。【著作】 俳諧自在法○俳諧名譽談○歲時記季寄○文學心の種等。（伊藤）

三木竹二 みきたけじ 劇評家 【姓名】 森篤次郞 【生歿】 慶應三年島根縣石見國津和野町に生れ、明治四十一年一月十日、神田賀古病院で咽喉病で歿す。享年四十二 【家系】 家は島根藩龜井家の典醫で森鷗外を兄とした。【閱歷】 明治初年父につれられて上京、向島の同藩主邸內に住み、小學校から獨逸語學校を經て醫科大學を卒業した。當時「公衆醫事」を編輯し

たことがあつた。卒業後、帝大醫科大學で内科の助手を勤め、間もなく日本橋區蠣殼町に内科醫を開業し、醫術開業試驗官並に駒場農學校の校醫をした。ペンネーム三木竹二による劇評は、學生時代の明治二十四・五年頃、讀賣新聞に始まり、「しがらみ草紙」（別項）、更に同二十八・九年頃、「歌舞伎新報」（別項）に進出し、同時に「めざまし草」（別項）にも若年で立派な批評を書いた。但し眞の劇評は彼の主宰による雜誌「歌舞伎」（別項）發刊以後であらう。

三木竹二

【業績】從來の劇評家は要するに通に止まり、見功者、評判記の域を脱しなかつた。然るに新しい美學的見地と、あらゆる文獻や歴史から調べた學究的視野とで、歌舞伎劇のよきものを藝術の分野にまで摘選紹介した眞の劇評家は、彼を以て嚆矢とする。又彼は當時の低劣な活歴物、卑俗な寫實劇、新派劇等を輕く受け流しつつ、時流を拔いて、よき歌舞伎劇の闡明と、シェークスピア、イプセンその他海外の名劇をすら紹介輸入するに吝かでなかつた。なほ實際的運動としては、「歌舞伎」に彼が發表し、或は校閲した「型」の記錄が素晴らしい權威を持つた。明治三十六年秋、團十郎死後の人なき歌舞伎座へ招かれて上京した片岡我當（仁左衞門）に助言を與へ、逸早く彼の妙技を紹介した。又眞砂座の伊井蓉峰（別項）の如きも、彼によつて後年の成功を得たのである。三十六年一月市村座に於ける鷗外作「玉篋兩浦嶼」（別項）の劇朗的演出、或は眞砂座に於ける近松物の研究的演出の如き、悉く彼の後援による所が多かつた。更に彼の炯眼は、團・菊歿後、今日の市村羽左衞門をよく見出し、羽左衞門はこれに勢ひを得て、着々進歩發達した。その他、小山内薫を推しその名に於て世に出した如き、後輩を誘導した功も少くない。なほ彼の「觀劇偶評」は、鷗外の「月草」（別項）所收。外に「日本演劇史」を書くために、相當な原稿を殘してゐる。〔三宅〕

右田寅彦 みぎたともひこ　戯作者・劇作家【號】柳塢亭。又矮亭主人と稱した事もあるらしい。【生歿】慶應二年二月豐後國臼杵町に生れ、大正九年一月十五日東京芝區岩島病院に於て歿す（腦炎）。享年五十五。【墓所】東京高輪東禪寺【閲歴】明治八年東京へ移住したといふ。長じて三田英學校に學び、更に同郷の大儒帆足萬里の高足である高谷龍洲が、芝愛宕町三丁目林邸内に濟美黌といふ漢學塾を開いてゐたのに、兄櫻彥（大蘇芳年の門人、梧齋年英と稱す）と共に入門した。この時塾生の一人に二葉亭四迷もゐたといふ。明治十二年、小說稗史の作者たらんとして三世柳亭種彥（高畠藍泉參照）の弟子となり、柳塢亭寅彥と號した。が、後日「三つ彥」の印を讓渡される出藍の譽れある逸材となつた。それよりめざまし新聞を振出しとして都新聞（明治十八年設立）へ移り、小說・雜報に麗筆を揮ひ、又小說「平家姬小松」（同二十二年）を出版して好評を博した。めざまし新聞が、東京朝日新聞と改稱されて後（同二十一年）歸參し、社會部長として所謂三面の主任となり、彼の物する艶種は戯作者一流の名文章で、讀者を魅了した。又俗曲（小唄）の作詞に巧妙で洒興に乘じて出來たものが、現在なほ哥澤や端唄に殘存してゐる（當賣り・玉子酒等）。同三十八年、當時劇評を擔任する新聞記者の集團「若葉會」が所謂文士劇を公演するや、彼も素人俳優として登場した。が、この事が新聞社の忌避に觸れ、遂に感情の衝突より朝日を退社するに至つた。併し一面には漸く當時の急激なジャーナリズムの進展に遅れて來たのも退社原因の一であつたらう。同四十三年に帝國劇場附屬技藝學校が設立されるや、伊坂梅雪等の斡旋に依り、女優を養成するための脚本（女性を主人公の戯曲）や試演會用の淨瑠璃を執筆した。同四十四年三月より帝國劇場が開場した後は、客員といふは表面で、座附の狂言作者として毎月新脚本を提供してゐた。即ち大正九年逝去するまでの帝劇十年間に現はれる脚本の過半數は、彼の創作改訂と稱しても過言ではない。【著作】代表作數種を擧げる。○堀部妙海尼（大正元年十一月、梅幸―梅幸、宗江―宗十郎）○名和長年（大正二年十月、幸田露伴原作、長年―幸四郎、舞心入道―松助）○紀國文左大盡舞（同三年三月、二代目紀文―宗十郎）○江島生島（同五年九月、梅幸・宗十郎の結合）○御江戸日本ばし（同七年一月、女髪結お勝―梅幸、堀部安兵衞―幸四郎）○苅萱堂（同七年二月、宗十郎・松助の結合）○文ひろげ（舞踊劇）○鎌倉武士（同上）等。【人物】輕妙洒脫、眞に江戸末期の戯作に表示された風流人であつた。而して彼は逝去する前年に、旗亭に於て葬式を盛大に舉行したほどの洒落者であつた。饗庭篁村とは常に酒と旅行を倶にし、溫泉「鹽原」を紹介したことは、兩氏のかくれた功績と言はれてゐる。【批評】默阿彌の死後、三世新七・竹柴其水等漸く衰退を示した明治末期より大正初頭に掛け、座附狂言作者の最後的人物であつた。即ち帝劇入座以後、關心はあつたものの餘り創作しなかつた脚本に進出し、圓滑華麗の筆は、早くも劇界の異彩となり、帝劇不可缺の存在となつた。殊に尾上梅幸・市川高麗藏・澤村宗十郎・同宗之助・尾上松助等の座附俳優の「にん」を觀察してその長短を檢討し、縱横に驅使せしめて座附作者の責任を完全に果した巧妙にして機智ある手腕は驚嘆の外はない。殊に、「紀國文左大盡舞」に於ける作者は、江戸の感情・風物を綿々たる詩趣を以て感受し、その寂寥と清楚と艶美とを併せ示現した。零落しつつも意地強く外聞を飾る紀文の立場には、最後の戯作者・狂言作者としての彼の心胸も反射して、まさしく會心の作品であつた。又作品全體の傾向が、默阿彌を髣髴させる筋立の複雜と巧妙さを所有し、しかも前者の如き因緣因果の小乘的佛教觀と勸善懲惡思想から逸脱し、常識的なものであつた事は、江戸を遠く離れた明治末期の影響と言へる。ただ作中の人物に自ら創作した個性を附與する事なく、全然出演俳優の性格に依存せしめて反省しなかつた。即ち當時の新劇運動流行の文藝界の風潮を少しも顧慮しなかつた事は、大なる缺點であつた。が、又その一面に、最後の戯作者であり、最後の狂言作者としての片意地な面目が浮動してゐると思ふ。

【參考】帝國劇場十年史 ○明治劇壇五十年史 關根默庵○私の見た明治文壇野崎左文〔尾澤〕

御教書 みけうしよ　古文書【解說】公卿或は將軍幕府などより下す文書。公卿の御教書は平安時代からあり、公卿の家司が上意を奉じて出すので、一に奉書ともいふ。上より云へば御教書で、下より云へば奉書である。蓋し藤原氏の公私混淆政治の結果出來たものであらうが、その樣式も公文書たる宣旨（別項）の式と私文書たる狀（別項）の式との混成されたものである。

被關白殿　仰云、來廿六日伊勢公卿勅使經分料合
期三疊、期日以前、無懈可調進由、宜仰遣者、仰
旨如此、仍執達狀、
十月十二日　右衞門權佐藤原知國　奉
謹奉　淡路守殿

書き出しの「被關白殿仰云」は書かぬ場合が多い。綸旨・院宣（各別項）及び後世の令旨（別項）等は何れもこの公卿の御教書に準據したものであるが、武家の御教書も亦さうである。尤もこれは鎌倉時代のものと室町時代のものとに區別して見る必要がある。鎌倉時代のものは全然公卿御教書式で、執權連署の奉じたるを關東御教書、兩六波羅探題の奉じたるを六波羅御教書、鎭西探題の奉じたるを鎭西御教書と稱へる。關東御教書の例は、

平子如願與弟重六郎重有相論周防國仁保多々良庄
等內田畠事、下知狀[illegible]知如此、早可下給裁覽
也、者依仰執達如件、
德治二年五月九日　陸奧守（花押）
相模守（花押）
武藏右近大夫將監殿

次に足利時代となると、從前の式に據り管領の奉じたる御教書の外に、御判御教書と云つて將軍の署判あるものを生じた。これに三通りある。例へば、

大覺寺宮當寺御登山云々、於參拜被宮者、先奉勤
嚴之寺領事、不可有相違之狀如件、
建武三年八月廿五日　花押○足利尊氏
醍醐寺衆徒御中

これを特に御書御教書とか目下御判御教書と稱へて、最も鄭重な式である。

（花押）○足利義教
毛利治部少輔熙房安藝國所領等事、任當知行旨、
領掌不可有相違之狀如件、
永享十年六月十七日

近江國永源寺含空院領伊勢國久米守忠名事、早爲
守護使不入之地、可全領知之狀如件、
應永廿三年四月三日
內大臣源朝臣（花押）足利義教

織田氏・豐臣氏及び德川氏には、御教書といふものはない。〔伊木〕

三木露風 みきろふう　詩人【本名】操【別號】一時羅風と改號し、間もなく露風に復した。【閲歴】明治二十二年六月二十三日、兵庫縣揖保郡龍野町に生る。姫路中學校・岡山閑谷黌等に學び、早稻田大學英文科・慶應義塾大學文科等に聽講生たりしことがある。處女詩集は同三十八年岡山市血汐會より「夏姫」と題して刊行。この中には短歌も加はつてゐた。後、上田敏主宰「藝苑」に、「五月野」外數篇を發表し、その詩才を認められ、後、人見東明・加藤介春・相馬御風・野口雨情・福田夕咲（各別項）等と共に早稻田詩社を結んだ。當時御風と口語體の詩を唱へ「暗い扉」を發表した。詩壇への最初の詩集は「廢園」（別項）（明治四十二年）で、當時の詩壇に於て新人の作として注目を惹き、永く北原白秋（別項）とその詩名を並稱された。後「寂しき曙」（別項）（明治四十三年）を出し、更に「白き手の獵人」（大正二年）、「幻の田園」（大正四年）を刊行し、大正五年には北海道トラピスト修道院を訪れてその印象を基本にした詩作を集め、「良心」と題して出版した。その後「生と戀」（大正十年）、「菩間の幻影」（大正十年）等の詩集を出したが、當時から信仰生活に入り、北海道トラピスト修道院に起居し、同院修道士のために美學を講じたりして生活し、當時の詩作を纏めて大正十二年には「信仰の曙」を發表した。同十四年トラピストを辭して東京に歸り、再び文筆生活に入り、主として童謠の製作に沒頭した。童謠集「小鳥の友」（大正十五年）その他童謠に關した著書もある。全集として「露風詩集」が大正十五年に發行され、外に「露風詩話」「修道院雜事」「修道院生活」の如き隨筆集をも著はした。

【作風】彼は最初「廢園」に於て、官能的な印象的抒情詩を以て始まり、それが廢頽的心意と靈性への思慕となつて「寂しき曙」に表はれ、東洋風な自然的瞑想をフランスの象徴主義的手法によつて示し、「白き手の獵人」と「幻の田園」に表現した。トラピスト修道院生活に入つてよりの彼の作は、感情と感覺に於て、遙かに往年の作に劣るものがあるが、そこに敬虔な內省的傾向を見ることが出來る。彼は日本に於ける象徴主義の理想的側面を示した詩人である。〔川路〕

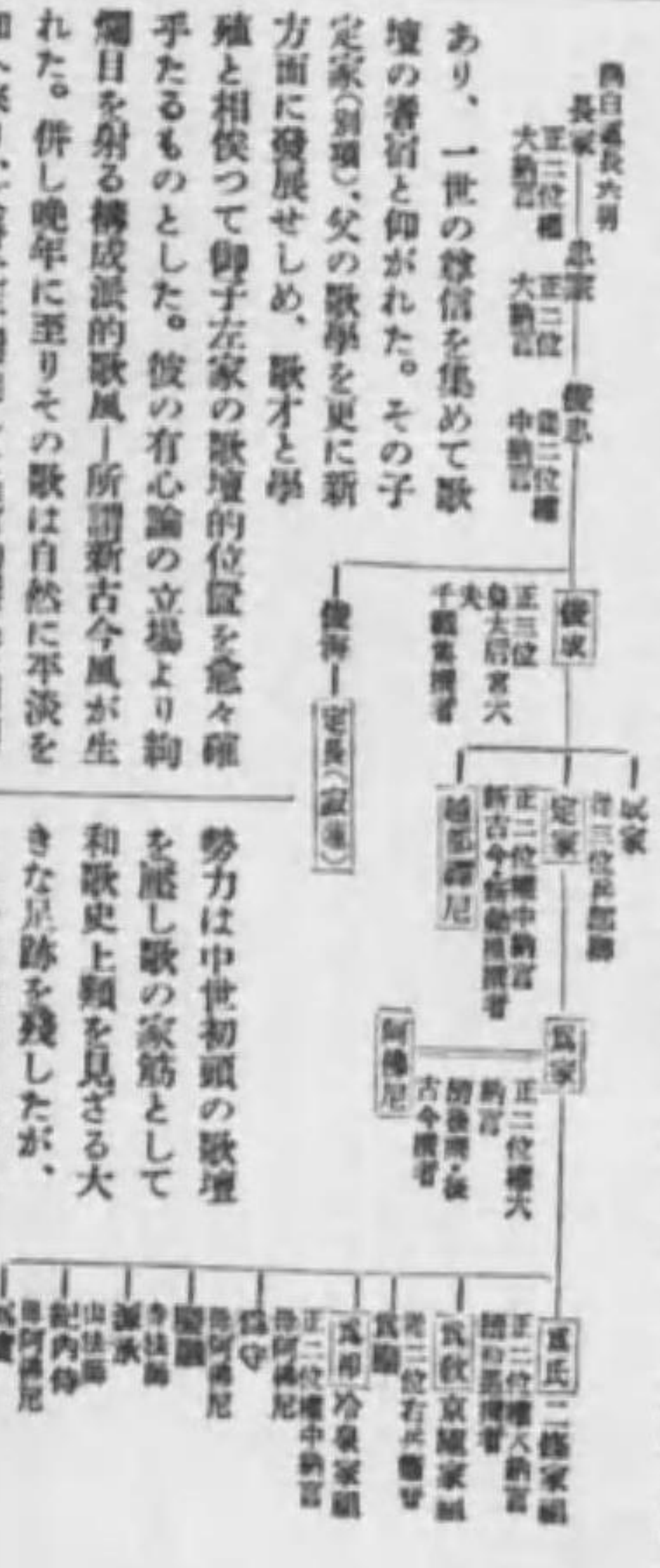
御國詞活用抄 みくにことばくわつようせう　語學書　一卷一冊【著者】本居宣長【名稱】鈴木朖自筆書入本並に神宮文庫本「活語斷續譜」（別項）には、「言語活用抄」「活語活用格」「活語活用抄」「活用抄」とも云ひ、帝國圖書館藏の寫本には、「御國辭活用鑑」と題せられてゐるが、併し普通には「御國詞活用抄」と呼ばれてゐる。【諸本】現存の本としては、（一）鈴木朖自筆書入本一册（寛政十二年寫）、尾張栗田貫一氏藏、（二）本居大平自筆書入本一册（文化元年寫か）、本居清造氏藏、（三）安政二年木村正辭自筆書寫校合本一册、岩崎文庫藏、（四）御國辭活用鑑（寫本二册）、帝國圖書館藏、（五）小田清雄校本・（明治十九年刊一册）等があり、增補本居宣長全集第十にも收められた。以上のうち原本に最も近いものは、鈴木朖自筆書入本である。又（四）御國辭活用鑑は體裁內容共に他の五本とやゝ異り、その系統また明かでない。なほ鈴木朖自筆書入本には、「天明二年以田中大人本寫終　川村正雄」、「寛政十二年庚申冬以正雄本謄人官畢　鈴木朖」の奧書があり、また表紙見返しには、朖の自筆にて「活語活用格　鈴屋本居先生起草　田中道麻呂編集　鈴木朖訂補」とあり、本書の凡例の次には、朖の自筆にて「朖云、右四條ハ舊稿本ノマヽナリ　今數條ヲ左ニ補フ」として七條の增補を揭げ、本文に於て到る處「朖云」「朖補」又は單に「補」として訂補のあとが見える。しかもこれはすべて同筆にて朖の自筆である。【成立】鈴木朖自筆書入本の見返しにも記す如く、田中道麻呂の援助によつて、天明二年本居宣長これを撰したものといふべきであらう。〔以上寛〕

【內容】活用言の活用を二十七種に分け、各種類について、その種の活用言を羅列したもので、活用に就いての說明はない。二十七種とは、一、か、き、く、け。二、さ、し、す。せ。三、た、ち、つ、て。な、に、ぬ、ね。四、は、ひ、ふ、へ。五、ま、み、む、め。六、ら、り、る、れ。七、け、く、くる、く。八、せ、す、する。九、て、つ、つる。十、ね、ぬ、ぬる。十一、へ、ふ、ふる。十二、め、む、むる。十三、え、ゆ、ゆる。十四、れ、る、るる。十五、ゑ、う、うる。十六、き、く、くる。し、す、する。十七、ち、つ、つる。十八、に、ぬ、ぬる。十九、ひ、ふ、ふる。二十、み、む、むる。二十一、い、ゆ、ゆる。二十二、り、る、るる。二十三、え、う、うる。ね、ぬ、ぬる。へ、ふ、ふる。ゐ、

う、うる。二十四、し、す、する。き、く、くる。二十五、い、いる。き、きる。に、にる。ひ、ひる。み、みる。ゐ、ゐる。ぬ、ぬる。け、ける。二十六、し、か、き、く、け。二十七、し、じき、しか、しく、しけ、し（帝國圖書館本には、二十八、無し）これである。而して各條に初めに雅言を擧げ、次に俗言を擧げてゐる。【價値・影響】活用の研究としては不十分なもので、活用形は漏れてゐるもが、混合してゐるものが澤山にあり、活用の種類に於ても、漏れたものがあり、混同してゐるものが頗る多い。が、これを眞淵の「語意考」（別項）に比すれば、數等の進歩を見ることが出來る。而して鈴木朖の「活語斷續譜」（別項）は、この書の補訂に依つて成つたものである。また信友や篤胤が既に云つてゐる如く、本書は「詞八衢」（別項）の源流となつたものであつて、この點に於て活用の研究史上重要な意義を有するものである。なほ俗言、即ち口語の活用を揭げてゐることは、「詞八衢」以後、一時この方面は顧みられなくなつてゐたが、口語の研究史上注目すべきことである。〔以上龜田〕

御國歌 みくにうた　「里神樂」を見よ。

御子左家 みこひだりけ　和歌　【名義】醍醐天皇の皇子源兼明左大臣となり、世に御子左と稱し、その邸（三條坊門南、大宮東）を御子左第と呼んだ。御子左とは皇子にして左大臣の職に在つたからである。後關白藤原道長第六子權大納言長家この邸を傳領し、邸の名をとつて御子左大納言と呼ばれた。これより御子左家の名が出來たのである。その三世の孫に俊成出でてより、御子左家は歌の家筋となつた。【沿革】俊成（別項）は、藤原基俊（別項）の門に入り、歌才については源俊頼（別項）に推服してゐた（長明無名抄）。當時歌壇には「金葉」「詞花」（各別項）の新を追ひ、むしろ奇嬌に馳せた歌風が行はれたが、彼は「三代集」（別項）の温雅を愛してこれを宗とし（古來風體抄）、遂に幽玄體なる新風を生み出し、人物も温厚にして雅量あり、一世の聲望を集めて歌壇の耆宿と仰がれた。その子定家（別項）、父の歌學を更に新方面に發展せしめ、歌才と學殖と相俟つて御子左家の歌壇的位置を愈々確乎たるものとした。彼の有心論の立場より絢爛目を射る構成派的歌風—所謂新古今風が生れた。併し晩年に至りその歌は自然に平淡を加へ來り、文曆元年撰進した「新勅撰集」（別項）は、この晩年の傾向を示してゐる。次いで、爲家（別項）、定家の嫡子としてその後を繼ぎ、定家晩年の傾向を襲つて穩健正雅の歌風を立てた。その歌學説は「詠歌一體」（別項）に於て見ることが出來る。爲家の後、御子左家は二條・京極・冷泉（各別項）の三家に分れ、互に軋轢して勢力消長にあつたが、何れも歌の宗家として歌壇に仰がれ、就中、爲家の嫡子爲氏を祖とする二條家及びその門下は、爲家の穩健正雅の歌風を受けついで、近世初頭まで師承傳來した。以上は御子左家の正系の人々であるが、その他俊成の姪寂蓮、俊成の女越部禪尼、爲家の室阿佛尼（各別項）等、何れも和歌を善くし、越部禪尼には「越部禪尼消息」一篇があり、阿佛尼は、夫爲家の説を祖述して「夜の鶴」一卷を著はした。次に俊成門下の壬生二品藤原家隆（別項）は、定家と並び稱された歌人で「新古今集」撰者の一人である。又鎌倉右大臣源實朝（別項）、衣笠内府藤原家良等何れも、定家の教へを受け、定家の著書中「近代秀歌」（別項）は家良のために、「毎月抄」（別項）は實朝のために書かれたものである。かくて御子左家の勢力は中世初頭の歌壇を壓し歌の家筋として和歌史上類を見ざる大きな足跡を殘したが、これ一に俊成・定家二代の力によるものと云はなければならぬ。



【參考】日本歌學史　佐佐木信綱　○國文學全史（平安朝篇）鎌倉室町時代文學史　藤岡作太郎　○俊成の歌論　山崎敏夫（國語國文の研究一ノ八）　○藤原定家の歌學思想　谷鼎（同上）〔中島〕

巫女舞 みこまひ　舞踊　【名稱】巫女の演ずる舞の義。【解說】巫女には各種の種類があり、近世は歌舞を事とせぬ巫女も出た。神社附屬の巫女には、八乙女・惣巫女その他の名がある。神樂男に對して神樂女とも、また命婦とも云ふ。巫女の容姿は時と處に依り異なるが、髮はおすべらかし、お下げで多く紫の布を以て髮の末を卷く。また千早と稱する特殊の衣服を着る。扇・鈴・榊等を手にして拜殿或は神樂殿で舞ふ。神事の日に限り舞ふのと、毎日神社に詰めて參詣人の所望によつて舞ふのとある。幼年の女子を選ぶ土地もあり、妙齢の女子の勤める土地もある。（猶立の舞參照）〔小寺〕

操形黄楊小櫛 みさをがたつげのをぐし　人情本　三編九冊　【作者】初編には紀山人（二世十返舍一九の別號）と署名。第二・三編は二世十返舍一九。【畫工】花岡光宜　【名稱】初編序に黄楊の櫛に黄金色を忍び、金のほしき心を現はすのであると斷わつてある。蓋し當時より天保年代にかけて流行した櫛を名稱としたのである。【刊行】初編天保初年（二代目襲名は天保元年からの推定）、第二編天保五年。第三編天保六年か（天保七年、文壇より退き、而も序には第二編より遲れて刊行した由見えるからである）。【題材】初編序に武藏金澤にあつた一奇譚に基づくと斷わつてある。【梗概】武藏久良岐郡野島村に、宮岡孔之介と云ふ郷士があつた。妻を奥野と云ひ、心やさしき婦人であつたから召使の男女皆悦服してゐた。然るに孔之介、いつの程か鎌倉花水橋の歌妓沖水と馴染み、身請して中里村の別莊に圍ふうち男子が生れ、名を喜代吉と名づけ、はや七歲になつた。本妻奥野には實子がないので、孔之介は喜代吉を後繼にしたいと考へたが、自分は養子、奥野は家附きの娘であるから遠慮してゐた。奥野は沖水母子の事を知つたけれど別に嫉妬もせず、良人の心遣ひを察し、知らぬ風を裝うてゐた。茲に畠山家の浪人に洲崎浪太郎と云ふ者がゐた。孔之介の碁敵で繁々出入するうち、奥野の美しさに戀慕し、度々言ひ寄つたけれど、一向相手にされない。或る日主人の不在をねらつて入り込み、奥野に沖水母子の寵愛一方ならぬ事を告げて煽動したが效が見えぬ。そこで沖水に密夫があり、孔之介を殺す計略があると言ひ出したので、奥野も驚いて、それなら主人へ告げて下さいと言ふだけで、相手にならなかつた。浪太郎は所詮孔之介が生きてゐたのでは成功せぬと考へ、或る夜孔之介が沖水の別莊へ通ふ途中に暗殺した。奥野は悲歎に沈んだが、浪太郎の言葉を思ひ起し、沖水母子を縛らせて責めたが、素より知らぬ事とて白狀しない。浪太郎も來り、奥野を深切らしく慰め、沖水を拷問した。或る夜二人を助け出す者がある。浪太郎の命で母子を水に投じ、罪を二人に嫁せんとする計略であつたが、二人は巧みにその場を免れた。奥野は家名の斷絶せん事を歎き、浪太郎の深切を信じ、そのまゝ彼を入婿にしてしまつた。宮岡家に出入する山猫婆といふ後家があり、その娘に香瀨と云ふ美人があつた。宮岡の召使東太郎といつか夫婦約束をしてゐるのを知らずに浪太郎は口說くが、間もなく二人の仲を知つて東太郎を責める。香瀨は山猫婆のため化粧坂に遊女に賣られ、浪太郎は宮岡家の金を湯水のやうに遣つて通ふ。沖水殺しを頼まれた惡漢は時々金をゆすりに來るが、度重なるので斷わると、大聲揚げて孔之介殺しの事を口走る。奥野は自分が欺かれたのを悟り、東太郎に遺言狀を殘して自害する。東太郎は香瀨とも逢ひ、沖水母子をさがし出し、自分の實の親なる俠客秋月稻八と再會し、その助力で喜代吉に親の敵浪太郎を討たせた。【構想】さまでの特徴はないが、奥野が遂に洲崎浪太郎の奸計に欺かれて結婚する一節は、後世の人情本には餘り存在せぬ悲劇である。金澤八景に因む八人の俠客が出て來るのは、明かに演劇の影響で、終結が復讐になつてゐるのは合卷本に似通つた筋である。〔山崎〕

操競三人女 みさをくらべさんにんをんな　草雙紙　合卷　六冊合二冊・前後二編　【作者】柳亭種彦　【畫工】歌川豐國　【名稱】「筑紫權六、白浪譚」の角書があり、別名を「京太郎物語」といふ。【刊行】文政六年、山本屋刊。【諸本】續帝國文庫第二十三編中に本文のみを收める。【題材】「十二段の草子」（異本）の「美人揃」の段に據ると記すが、それは僅かであつて、多くは演劇の「千代始音頭瀨戸」の玄海灘右衛門に佐々木騷流を取合せたものであらう。【梗概】（前編）濱名判官重豐は嫡子多賀之丞の御傅役油原桐太夫が、亡父濱名判官の命日に惡漢共を容赦なく斬り捨てた事を聞き、怒つて閉門を申附ける。細脇佐文次は濱名判官が素性の知れぬ浪人雲津丹仰を濫りに寵愛する事を諫めて勘當される。日岡峠で濱名の家中の落久保京太郎は、追放された母方の叔父桐太夫に面會し、その娘の藤の井を妹としてかくまふ。京太郎の義理の叔父矢栗軍太兵衛は、桐太夫を祿盜人と罵つたので、藤の井は軍太兵衛を討つて父の恥を雪がんとする。既に藤の井と契つた並松綠之助は、藤の井・京太郎の關係を疑つたが、事實は無根であつた。一方、京太郎と許嫁の浦竹簡繢の妹の尾花は、藤の井・京太郎の關係を疑ひ、病死と僞つて京太郎に許嫁を解消させ、藤の井を殺害せんとして綠之助に捕へられ、今迄の誤解がとける。（後編）細脇佐文次は妻の袖浦、娘小千代を舅千種嵯峨右衛門方にあづけ、暫く留守した後に歸家して、濱名家を見限り、秩父殿に抱へられたと語り、女房袖浦の厚化粧と服裝とを見て、他に聟をとつたものと疑ふ。嵯峨右衛門は、雲津丹仰が玄海灘で討ち漏らされた海賊の張本筑紫權六であつて、彼が室町殿の重寶の二幅の旗を奪つてゐるのを取戻し、夫佐文次を喜ばせるために、袖浦がいやがるのを口說いて丹仰方に妾奉公に出し、旗は見事手に入れたと語る。大和橋の茶屋で、京太郎・綠之助・藤の井・嫡子の八重梅（實は、京太郎の許嫁の尾花）等が酒宴してゐる處へ軍太兵衛が現はれ、曾て桐太夫を讒言した點で藤の井等に討たれる。桐太夫・佐文次・袖浦等は、計略を用ひ、丹仰に先年濱名判官に亡ぼされた玄海灘右衛門の實弟筑紫權六と名乘らせて、すつかり裏をかき、濱名多賀之丞は丹仰を討取る。【解說】時代物と世話物とを取合せ、種彦特有のお芝居がかりの趣向であつて、作爲の跡があまりに露出してゐる。三女性中の藤の井を孝、尾花を貞、袖浦を忠に案じてゐるが、袖浦の如きは、對手もあらうに陰謀の張本人の妾となつて重寶を奪ひ出すなど、忠義のためとは言ひながら無理がある。疑惑誤解によつて筋をはこぶは煩はしいが、死者に對して離緣狀を與へる事は一趣向である。藤の井が雷鳴を恐れる事から京太郎との關係を疑はれる趣向は、後年に山東京山が「教草女房形氣」（別項）中で眞似てゐる。〔小池〕

操草紙 みさをざうし　浮世草子　五卷　【作者】淡海子の署名がある。【畫工】縣江とある。【刊行】明和八年　【諸本】德川文藝類聚第一所收　【解說】明和六年五月二十三日、江戶兩國五十嵐屋といふ髮油店の妻、夫の妾を嫉みて殺害し、己れも自害した（街談錄）。この事件を材としたものである。筋は江戶兩國橋西詰に名高き冠髮香の本舖五十嵐屋惣七の妻おきよは、一生不犯の願を持つてゐたので、惣七に勸めて古道具屋安兵衛の娘おつやを妾とさせる。おつやは惣七の寵愛を受けてゐたが、惣七が新しく上つた腰元おりうに目をかけるやうになつたので、嫉妬のあまり、おりうを蚊帳の上から刺殺し、自分も死んでしまふ。ついで淺草寺開帳のため遊歷して來た遊行上人の念佛によつて二人とも解脫する。なほこの事件を材としたものには「髮油こひの夜嵐」といふ淨瑠璃がある。〔小泉〕

短夜仇散書 みじかようきなのちらしがき　脚本　四幕八場　世話物　【作者】福森久助　【名義】短夜は夏狂言の意。仇は「うきな」と讀ませてあるが、世界に取つた義太夫「八重霞浪花濱荻」中の「例ぬなとゝの散らし書き」の文句を借りた名題である。【通稱】お園六三　【興行】文化十年七月十五日初日、江戶中村座初演。

〔役割〕とゝおばアお松・大工六三郎（尾上松助）、福島屋娘お園（二代澤村田之助）、醫者若林七郎助（中村東藏）、福島屋後家お梶（芳澤いろは）、梶川長兵衛（市川市藏）、田舍娘おわた（瀨川多門）、中村少長（中村七三郎）、市川鰕藏（市川傳藏）、福島屋清兵衛（助高屋高助）、船頭十右衛門（三代坂東三津五郎）。

【諸本】文化文政江戶世話狂言集（日本戲曲全集）所收。

【梗概】（序幕）（兩國廣小路）印子の鯉魚を失つて浪人した小柴六三郎は、大工六三となつてお園と人目を忍ぶ仲。その鯉魚を奪つた梶川長兵衛もお園に心をかけ、母お梶に所望するが諾かない。とゝおばアお松は牢舍から赦され、子分達が出迎へる。長兵衛はお松にお園・六三の手を切るやう頼み、鯉魚の袱紗を渡す。六三はお松の義理ある爲である。（柳橋大のし）お園・六三の色模樣。若林七郎助は、お松に貸した金を六三に催促する。長兵衛は二人の不義を云ひ立てて却つ

て船越十右衞門から長兵衞の金が締印金なる事を指摘されて失敗する。【二幕】（深川網打場お松內）お園は家を逃げ出して愛に匿まはれる。網島屋から手代が迎ひに來たが、お松に追ひ返される。十右衞門が掛合に來る。お松は藝者時代から十右衞門に惚れてゐたので一旦は承知したが、とても我が意を納れないと見るや、お園に墮胎藥を服ませて六三の胤を闇に沈めようとする。その藥のため却つてお松は顏を火傷し、逃げるお園を追ふ。（中木場）大雷雨の中に、お松はお園を殺さうとする。藪の中から六三が出てお松を斬り、お園と立ち退く。【三幕】（向島網清家）少長・露鶴の兩優、清兵衞をたづねて、お松殺しの話をする。お園は伯父の清兵衞へよそながらの暇乞ひ、清兵衞は六三へ勸調。【大切】（向島土手）お園・六三の道行に、田舍娘おわた摘む。常磐津淨瑠璃「道行仇散書」。（眞崎稻荷）長兵衞・七郎助が惡事の相談、六三駈けつけて鯉魚を奪はんと爭ひ、川へ打込むと、鯉魚は大鯉となつて現はれる。六三は長兵衞の子分等と鯉摑み本水の大立廻り。血汐の穢れで鯉魚は元の印子の置き物となり、六三の手に入る。

【脚色】お園六三の書き替へに過ぎぬが、六三をいさみの大工にしたのは、この狂言が始まりで、以來その型に定まり、尾上家の家藝となつた。六三とお松の早替りは、南北の「阿國御前化粧鏡」の累・與右衞門を借りたもの。鯉摑みは江戶夏狂言の常式で、その他は常套な筋、ただ簡潔な點を採るべきであらう。お松があまり見かけぬ型の役柄で、面白く書けてゐる。これは當時實在の遠州屋お蜂といふ惡婆の當て込みだと云はれる。その外、お松が自宅で行水を使ふ場面の前後が、一種の氣分劇とも見るべく、江戶時代の深川、その裏町の長屋情調を面白く出してゐる。　（渥美）

三品藺溪　みしなりんけい　「柳條亭華彥」を見よ。

三島霜川　みしまさうせん　小說家【本名】才二【生歿】明治九年四月生れ、昭和九年三月歿す。享年五十九【閱歷】富山縣西礪波郡麻生村に生れた。文壇的には硯友社系統に屬し、德田秋聲等と親しい交友關係にあり、既に明治三十一年の「埋れ井戶」以來、「新小說」「文藝俱樂部」等に作品を發表し、田園趣味豐かな作風を以て次第にその特色を認められるに至つた。長短百餘篇の作品があり、「中央公論」「新潮」等に「解剖室」「しつかり者」「果の花」を出すに及んで、堅實なる中堅作家として推されたが、その活動は主として自然主義文學勃興時代迄であつた。後、創作に遠ざかり、「演藝畫報」の發刊されるや、早くより關係して、尾見・椋右衞門等の名の下に逐號劇評隨感の類を寄せた。中にも大正初頭、數年に亙つて連載した「大正役者藝風記」の如き、この種の批評中出色の文字である。後、同誌の首腦となつて劇文壇のために力を致した功績は少くない。その他歌舞伎脚本の編著にも從つた。　（水木）

水鏡　みづかゞみ　歷史物語　三卷【著者】中山忠親（「本朝書籍目錄」假名部。中山大納言定親の「薩戒記」應永三十三年十一月十六日の條（比古婆衣所引）に據る）。古來殆ど定說とされてゐるが、忠親よりも遙かに後の鎌倉末期の作で、作者不明といふ說もある（和田英松氏「國史の研究」）。【名義】「大鏡」に比べると、ことばも賤しく、誤りも多く、讀者の譏りを受けること疑ひないが、しかし昔の佛が水鏡にうつる程度には見えようと、著者自身が第三卷末に記してゐる。【卷冊】「水鏡一帖」の語があるから（薩戒記）、一卷本もあつたと思はれる。【成立】忠親は、建久六年三月十二日に薨じてゐるから、それ以前なることは確かであるが、「今鏡」の著者と推定される源通親と同時代であり、嘉應元―二年に成つた「今鏡」（別項）との先後は明かでない。芳賀矢一博士は「續世繼といひ今鏡などいうた所から見ると、今鏡の方が先であらう」といつてゐる（歷史物語）。果して然らば、嘉應二年以後建久六年に至る二十五年間（著者四十一歲―六十五歲）に出來たものである。【諸本】詳略二系統があり、流布本は簡略で異本は詳密、而も文章も大に異なつた所がある。何れが先であるか明かでないが、多分「大鏡」に後人の加筆があると同樣に、「水鏡」も後人の加筆によつて詳密本が出來たのであらう。逆に詳密本を抄略し、文章を書き改めて流布の簡略本が出來たといふ說もある（國史の研究）。（一）流布本には、古活字本・永正古寫本（永正九年四月古幾敎木與の奧書がある。「比古婆衣」所載伴信友の考證によれば一條兼良。謄寫本大澤清臣藏）・烏丸光廣書寫本（寬永八年三月奧書。井上賴圀藏）・柳原芳野舊藏本（中卷一冊のみ。帝國圖書館藏）・近衞本（近衞公爵家藏）・同一本（同家藏）・藤貞幹舊藏本（靜嘉堂文庫藏）・神宮文庫本（神宮文庫藏）・塙保己一校本（內閣文庫藏）・石橋眞國校本・屋代弘賢校本（古活字本を底本とし、永正本その他を以て校合す。阿波文庫舊藏、小杉榲邨藏。史籍集覽に收む）・松本愛重氏藏本（屋代本に似てゐる）・校定水鏡（明治三十一年刊、荻野・松井・關根三氏校。烏丸本を底本とし、近衞本・同一本・石橋本・史籍集覽本・流布刊本を以て校合等がある）等がある。（二）異本には、前田家本（片假名である。永和元年十月信範の奧書がある。明治十三―十五年の謄寫本が內閣文庫にある。國史大系に收む）・古印本がある。史籍集覽・日本文學全書・國史大系・國文大觀・有朋堂文庫・校註國文叢書・新釋日本文學叢書・校註日本文學大系・日本古典全集等所收。

【組織・內容】「大鏡」以前、即ち神武天皇より仁明天皇まで五十四代（原本は第十五代に神功皇后を、第二十四代に飯豐天皇を數へ、弘文天皇をば數へないので五十五代としてある）、一千五百十年間の編年體歷史。結構は「大鏡」（別項）に擬し、對話體で、場所は大和國泊瀨寺。時は鎌倉時代、或る年二月初午の日、大和國高市郡龍蓋寺（岡寺）より歸るさ、通夜の折。人物は聽者（老尼七十三歲）、話者（修行者三十四五歲）。修行者の話から始まる。私が一昨年秋九月十日頃葛城山で法華經讀誦中、藤の皮の衣、竹の杖、瘦せて神さびた翁姿の仙人が現はれて、世に修行者は多いが誠に佛道に入る人は少いのに感心だといつて話しかけ、出家の原因は何だときくから「この十餘年、世のなりまかるさまの心とゞむべくも見え侍らねば」と答へると、世相は時に隨つて變遷するのが常である、古をほめ、今をそしるべきではないと言ひ（こゝに著者の史觀がうかゞはれる）、なほ仙人は言葉をついで、我は神代以來葛城・吉野をすみかとして、遠近都鄙の樣を具に見聞してゐるから話してやらう。併し文德天皇以後は萬壽の頃世繼の翁が話してあるので、それ以前の事を語り聞かさうと、卷上（神武天皇―欽明天皇）・卷中（敏達天皇―孝謙天皇）・卷下（廢帝（異本）、大炊天皇（異本）―仁明天皇）の順序で次々に話し、語り終ると仙人はもとの道へ歸つてしまつた。私が今話したのは仙人の話の十分の一位であらうと話を結んだ修行者は、夜明け頃に何方ともなく立ち去つた。決して他にもらすなとその修行者は言つたが、聞き捨てにするのは惜しいし、私（尼）は若い時から歷史が好きなので書きつけた。大體かういふ結構であるが、材料は主として「扶桑略記」（別項）により、漢文を假名文に書きかへ、更に「聖德太子傳曆」や「日本靈異記」「今昔物語」（各別項）等から佛敎說話を多く取入れてゐる。年代は「古事記」によらず、持統天皇までは「書紀」により、それ以後は「續日本紀」によつてゐる。武烈天皇に關する暴虐の記事（書紀は朝鮮の事實を誤記したもので、寧樂藝圃・內山眞龍の考證がある）を載せたり、「高き屋にのぼりて見れば」の歌（藤原時平作日本紀竟宴歌）を仁德天皇御製としたり、道鏡卽位に關する神託の遺言（習宜阿曾麻呂であることは「續日本紀」に明記してある）を和氣清麻呂の姉廣蟲（法均尼）であるとしたなどは、大きな誤謬の例であるが、「書紀」に見えない大友皇子の卽位を天武天皇の條に明記してあるので（一代として擧げ[illegible]）、「大日本史」もこれによつて一代と數へ、明治になつて確定した。神功皇后（「古事記」は、ただ事蹟を記し、「書紀」は攝政とす）を一代に數へたのは、「扶桑略記」によつたものであるが、皇太子早良親王の廢せられた事情、光仁・桓武二帝卽位の委しき事情など、正史に見えない重要記事のあるのは注意すべき事である。なほ最も著しく眼につく事は佛敎的色彩の強い事である。神武天皇以前神代の事を略敍し、更に溯つて劫說を述べてあるが、それは全く佛敎の解釋で、小劫・中劫・大劫について委しく述べてある。欽明天皇の朝、佛敎渡來以後、その記事の多いのは勿論であるが、それ以前にも、神武・綏靖・開化・崇神・垂仁・神功皇后・宣化天皇等の條に、佛敎に關する記事がある。「神皇正統記」（別項）の開闢說も佛敎的見解であるが、「水鏡」以後に現はれる鎌倉時代の各種文學が、すべて佛敎的色彩の濃厚であるに對し、それ等の先行者ともいふべきで、時代思潮の反映である。

【價値】「大鏡」を摸してゐるが、史書としても文學としても到底それに及ばない。「大鏡」（百七十六年間）、「今鏡」（百四十六年間）、「增鏡」（百五十二年間）、「月の行方」（十二年間）、「池の藻屑」（二百七十年間）（各別項）は、年數が比較的短いから、長壽者をかり來つて話させる結構にしたが、「水鏡」は一千五百十年間の長きにわたるから、神代以來生きてゐるといふ仙人を連れて來て話させる事にしたのは、思ひつきの妙味であり、卷末に話者・聽者の結末をつけて、「增鏡」が龍頭蛇尾に終つた如き失態に陷らないのは、著者の細心の注意がうかゞはれるが、話者・聽者の風丰の活躍せぬのは、著者の創作的才能の乏しきを示すものであり、「大鏡」をまねながら、乾燥無味に陷り易い本紀のみで、興趣豐かなるべき列傳を記さない事も、本書の一大缺點である。文章は擬古體であるが、漢語・佛語を多く用ひ、平安朝の文とは自ら相違がある。平易簡明ではあるが、情熱が乏しく魅力がない。「大鏡」「增鏡」と共に三鏡と數へられるが、實は「今鏡」に及ばない。要するに史料としても文學としても、決して高い位置を占めるものではないが、著者自ら「よしなし事に侍れども」と言つてゐる幾多荒唐無稽の傳說中に、時代精神の片影を認め得る點に本書の價値がある。

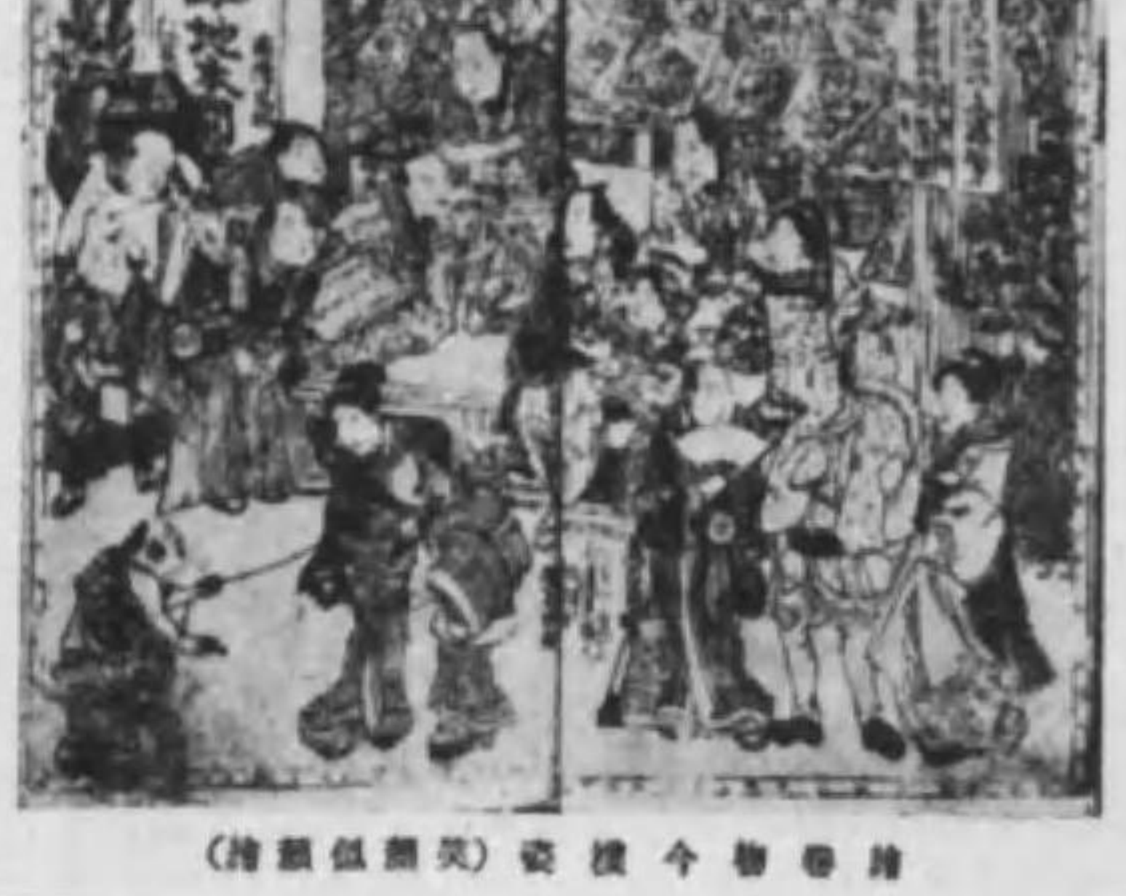
【註釋書】水鏡短觀抄六卷大石千引○水鏡索引著者未詳○水鏡詳解（別項）江見清風。

【參考】比古婆衣卷六（伴信友）○水鏡解題（史學界一ノ二）○水鏡の書名・卷數・著者について 西岡虎之助（歷史地理四五ノ三）○水鏡と扶桑略記・水鏡の價値を論ず 喜田貞吉（史學雜誌二四ノ二）○歷史物語の本質 沼澤龍雄（國語と國文學三六）○歷史物語 芳賀矢一　（沼澤）

水鏡詳解　みづかゞみしやうかい　註釋書【著者】江見清風（松本愛重閱）【刊行】明治三十六年。明治書院。【解說】流布本「水鏡」により、上卷を神武―欽明、中卷を敏達―孝謙、下卷を廢帝―仁明としてあるが合本一冊である。本文校訂にも力を注いで一々何本によると註記し、假名遣の誤りも原形を保存してゐるのは學術的態度である。歷朝陵墓を明治三十四年宮內省諸陵寮調查の「陵墓一覽」によつて現今の所在地を示したり、卷頭に著者及び異本の解說を、卷尾に五十音順索引を附してあるなどは便利である。　（沼澤）

美圖垣笑顏　みづがきゑがほ　草雙紙作者【姓名】通稱を美濃屋甚三郎といふ。【別號】愛亭（「めでてい」と讀んでゐる）。狂名を涌泉亭賞濟。【生歿】寬政元年生れ、弘化三年（二五〇六）九月五日歿す。享年五十八。【閱歷】初め新橋加賀町で質屋を營んで居り、この頃、狂歌堂眞顏の門に入つて狂歌を習つたらしい。後、書肆となつて涌泉堂と號し、芝區田町に住んだ。作品中の署名には「竹芝の浦に濱のいとま」などと肩書を附けてゐる。【作品】（合卷）梅愛雪吹夜嵐（天保十年刊、貞秀畫）○兒雷也豪傑譚（別項）○忠臣交庫（天保十一年刊、國貞畫）○花櫓詠義經（天保十一年刊、國芳畫）○名所覗錦繪話（天保十一年刊、國貞畫）○婦勝狀武勇封（天保十一年刊、國貞畫）○英雄男女競（天保十二年刊、芳虎畫）○智勇奇備志（天保十二年刊、國芳畫）○婦八幡寶障幕（天保十二年刊、國芳畫）○東花南鉢木（天保十二年刊、國貞畫）○旅硯振袖日記（天保十三年刊、國貞畫）○綺卷物今樣姿（天保十三年刊、芳豐畫）○結綠妹脊組錄（天保十三年刊、芳虎畫）○奇說名勝記（天保十三年刊、芳虎畫）○舞扇出世景淸（天保十四年刊、國芳畫）。

【作風】「寶船振分道中數語錄」（天保十三年刊、美圖垣笑顏作）によると、天保十年刊の二作が處女作らしい。「兒雷也豪傑譚」は幕末長編合卷の一で、注意すべき作品である。師匠は立川焉馬（別項）であり、既に馬琴・京山老い、種彥も漸く衰へて來た際、僅かに五年間ではあるが、專ら讀切合卷を創作して當時の文壇を賑はせ、その名のお目出度さが又人氣を呼んだ。



綺卷物今樣姿（美圖垣笑顏插繪）

書肆であつた爲めに、彼の戲作道樂には、問屋が贔屓して書かせてくれ、彼もこの點を承知して努力した。天保十年には僅かに二部の

作品であつたが、翌十一年には七部となり、同年の合巻作者中第一位の創作率である。翌十二年に十二部、十三年には十一部を刊行したが、天保の改革により斷然筆を斷つた。彼の趣向は時代物、就中戰爭物から始まり、武家の系圖を作中に揭げ、屢々戰鬪の樣を描き、武者繪めいた色彩を持つてゐる。世話物風の作品も相當にあるが、その內に軍記物の分子を含んでゐるものを屢々見かける。趣向や人物等に奇を求めず、大衆就中婦人子供向きである。文章は普通であつてたくまず、支那小說の影響として見るべきものはない。修養も少く、狂歌も劣つてゐる。印章は卍の眞中に三つ巴を畫いた物を用ひてゐる。「輪條物今樣妾」には、扇地紙形の中央に「の」の字を三ツ巴風に三つ畫いて、大田蜀山人の印章を眞似てゐる。　【小池】

水掛聟（みづかけむこ）

能狂言　【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へられてゐる。【別稱】水論聟　【格式】小習（和泉流）

【梗概】百姓が、當年は殊の外田がよく出來て嬉しいが、この中天氣續きで田に水がない。一雨降らせたいものだと言ひつつ、自分の田に來て見ると、水を仕掛けて置いたのに、水口を止めて隣の田に水を引いてある。それは誰あらう聟の田だのに、聞えぬ事だと怨んで、又水を元のやうに我が田に引いて番をしてゐる。處へ聟が出て來て、己が田を見て隣の舅の田に水を取つてゐるのを怨む。舅は聟と對面し、雨乞の話などいろ〳〵ある。そのうちに、聟は我が田に水を引く。舅はこれを見て立腹し、遂に互に水の取りあひとなり、水を掛けたの泥を掛けたのと大喧嘩になる。其處へ女が出て來て、なう〳〵悲しや父樣とこちの人と喧嘩が出來た。誰かとりさへて下されと言ふ。聟は女を加勢にして舅を打ち倒し、女も父樣祭には來ませうぞと、倶に逃げるのを、父やるまいぞ〳〵。

【解說】狂言には聟の出るものが種々存する。そして、無法な聟を主要人物としてゐる。「鍋聟」「口まね聟」の如きは、無體無作法な聟をあらはしてゐる。「船渡聟」は却つて舅の方を酒好きで面目を失ふこととして仕組んでゐる。この作には、親子の間にも油斷がならず、また妻は舅と夫との爭の時、夫の方に附くといふ趣や、殊に戰國亂離の世態の反映さへ觀られる。　【野村】

水甕（みづかめ）

短歌雜誌　【創刊】大正三年四月、水甕社。【解說】當時、なほ東京帝國大學の學生であつた和氣朝隆・石川橫村・石井直三郎・岩谷莫哀・赤木桁平・出隆・佐竹哲雄・逸見義亮等により尾上柴舟を中心とした會員組織として發行した。爾來石井直三郎・岩谷莫哀が主として編輯經營に當り、昭和三年から發行所を名古屋に移し、今日に及んでゐる。現在の主なる同人は、主宰尾上柴舟を初め、石井直三郎・細井魚袋・上田英夫・金澤種美・松田常憲等である。歌風は或る特殊の主義によらず、各々個性に根ざした作風を重んずると云ふ主義であるが、やはり尾上柴舟の「日記の端より」以後の歌風の影響を受けることが比較的目に立ち、內容の平明にして表現の穩健なものが多く、而して抒情的な分子に富み、且つ一體に新古典派とよぶのが最もふさはしいかとも思はれる。　【石井】

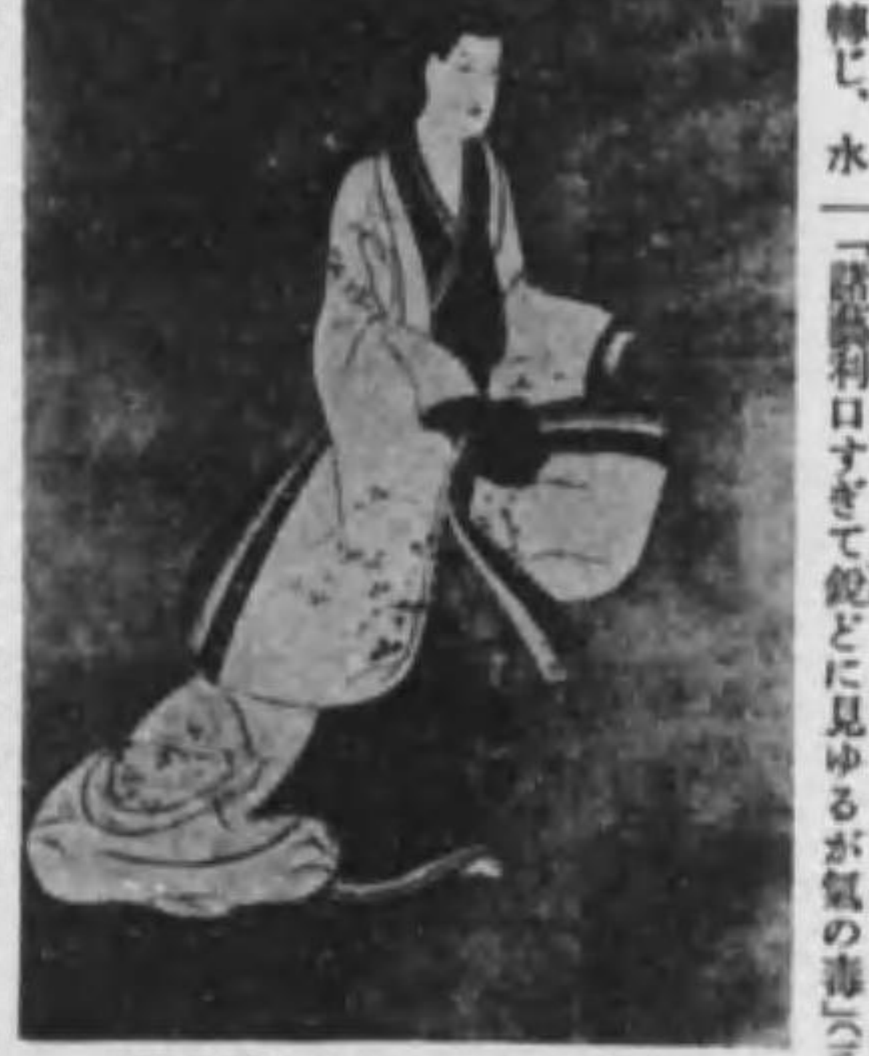
大空の色も深さもかはらねばまたわが涙おつるなりけり　尾上　柴舟

アルパカの上着身がろに此家より會社へ通ふ日はあらざらむ（遺歌）　岩谷　莫哀

山いくへ夕山ゆくへ鳴かぬ鳥寂しき鳥のおちている山　石井直三郎

水木辰之助（みづきたつのすけ）

俳優　【通稱】清十郎。後年大和屋宇右衛門【初名】大和屋半松・鶴川辰之助【俳名】歌蝶【生歿】延寶元年大阪に生れ、延享二年（二四〇五）九月二十三日同地に歿す。享年七十三。【閲歷】大阪半道方の俳優齊藤新八の子で、立役の名優初代大和屋甚兵衛（高徳院宗玄日體）の甥。延寶末から子役として大阪大和屋座へ出で、貞享二年若衆方となり、元祿初年若女方に轉じ、水木と改姓。同二年冬甚兵衛と共に京都萬太夫座に上り、翌春「補の海」の傾城事で名を揚げて太夫號を得、同四年「娘親の敵討」に、湯女有馬の藤を演じたのが、一代の當り役とされた。爾來京阪を去來して評判を得たが、同八年早雲座の名殘りに、「水木辰之助餞振舞」（別項）を演じて、同年冬江戶市村座へ下つたが、その時の給金は五百兩だつたといふ。而して御目見得狂言は有名な「四季御所櫻」で、當り藝たる槍踊とから猫の所作を演じて大喝采を博し、江戶の人氣を一身にあつめたが、かの其角が、「花の夢胡蝶に似たり辰之助」や、「煤掃や諸人がまねる槍踊」と詠んで稱へたと傳へる。江戶に留まること二年にして同十年冬歸京、萬太夫座で江戶土產の「七化け」を演じて大當りを取り、江戶上りの中村七三郎所演の「關東小六」を壓倒した。それより益々聲價を高めたが、寶永元年春大阪岩井座の「緣色直衣」の女房お石に扮したのち、幾何もなく廢業したらしく、梨園にその名を絶つたが、その原因は詳かでない。かくてその後大和屋宇右衛門と改め、大阪に隱棲して餘生を送つた。【藝風】面體はすぐれなかつたが、「諸藝三國無雙、殊に傾城事御姬樣、又は賤の女にしていやしき體、若衆方にてふらせても殘る所なく」（役者三蓋笠）、「扇の手舞ひ振り、至つて惣實死實、やつし傾城事名人、殊更昔から女方にも立役にも究に致さぬ七化け」（役者口三味線）といふ變化舞踊の創始者だつた。しかし「諸藝利口すぎて鋭どに見ゆるが氣の毒」（三國舞臺鏡）ともいはれた。彼は初代芳澤あやめと共に對稱された元祿期を代表する名女方で、殊に所作事に於ては當代隨一の名手だつた。また彼は近松門左衛門作の名脚本の女方に多く扮した事に於ても、水木帽子を創めた事に於ても有名である。



傳水木辰之助（清水直治氏藏）

【二代】【初名】水木竹之助【別名】大和屋甚兵衛（三代）【俳名】此蝶【閲歷】初代の門下水木染之助の門葉。享保十八年若衆方から若女方となり、元文元年冬京都で初座本を勤め、

翌二年十一月二代を襲名。それより「磯馴松」の松風、「傾城大井川」の龜山等に好評を得、延享三年冬大阪嵐三右衛門座へ下り、翌四年十一月中の芝居で三代大和屋甚兵衛を襲いで立役に轉ず。寛延元年冬歸京して早雲座に現はれ、「碁盤忠臣藏」の今川仲秋、「歌仙櫻」の家二郎等に好評を得たが、同三年染松座出勤後、寶暦元年に至つてその名が梨園から見失はれた。

【三代】【初名】水木市松・菊川常次郎【別名】菊川喜代太郎（二代）【閲歷】初代菊川喜代太郎の門葉。初め京都子供芝居に出て修業し、寛延二年十一月同地四條水木吉三郎座が大芝居の初舞臺。寶暦二年色子から若女方の部に入り、同八年十一月三代を名乘つて江戶中村座に下り、辰之助改名披露引合を四代市川團十郎がなし、「木每花相生鉢樹」に、槍踊と猫の所作事を勤む。然るに同九年十一月森田座で、二代菊川喜代太郎を襲名し、同十一年冬三年振りで歸京、爾來同地の芝居を轉勤してゐたが、明和二年頃から劇壇にその名を絶つに至つた。

【參考】野郎立役舞臺大鏡○京阪歌舞伎年表　秋葉芳美（上方一三・一五）○近松脚本年代考　秋葉芳美（演劇學第一號）○老の樂抄　市川柏筵（燕石十種第三）○歌舞伎叢書　佐々醒雪編○日本演劇史　伊原敏郎　【秋葉】

水木辰之助餞振舞（みづきたつのすけたちぶるまひ）

脚本　三幕【作者】近松門左衛門【名稱】名女方水木辰之助の江戶下りにつき、その名殘狂言の由をきかす。并書に「亭主方、坂田藤十郎やつし事仕候、亭主方、大和屋甚兵衛所作事仕候」と記す。【興行】元祿八年九月（か）、京都萬太夫座上演。

（【役割】安達數馬（大和屋甚兵衛）、妻名月（玉川きんや）、大內房之丞（小野川宇源次）、待宵殿（袖崎いろは）、家老大友大膳（荒川十之右衛門）、小姓一角（村上竹之丞）、同左近（早川はつせ）、門番半助（若林四郎右衛門）、てつさん法印（金子吉左衛門）、有馬の藤（水木辰之助）、同おてう（藤井ときん）、和歌浦光右衛門（坂田藤十郎）等。）

【讀本】繪入狂言本の傳はる外に、近松門左衛門全集第一卷・近松歌舞伎狂言集上卷に所收。

【題材】古く歌謠等に謳はれた有馬の湯女お藤を中心に、お家騷動を描いた。

【梗概】（序幕）（安達家花園）當主安達數馬は有馬へ湯治の留守を幸に、繼母の隱居常智院は、實の娘待宵が許嫁の和歌浦光右衛門の行方不明に乘じて、家督を繼がさうと謀を構へる。中間友助を使唆して、有馬の湯女お藤を嫉妬させるに事よせ、御臺名月を放逐しようとしたが失敗する。下人にやつして入り込んでゐた光右衛門は、偶々名月に會つて兄妹の名乘りを交した爲め、隱居は下人の妹とあつて逐はうとする。これを救ひに出たのが名月の弟と名乘る房之丞で、隱居の素性も洗はれ、惡人を拂ひ、光右衛門は隱居を刺して立ち退く。（二幕）（有馬湯治場）友助は九太夫と名乘り、數馬の留守中、お藤を使つて二百兩を盜み出し、これを訝つたお藤を數馬の命だと言ひ含めて慘殺する。お藤は怨みながら息を引取る。（數馬屋敷）數馬が氣色の惡いため、てつ山法印が祈禱を上げる。數馬が歸つて小姓一角を相手に有馬の噂をしてゐる所にお藤の幽靈が現はれる。一角の眼に見えぬ中、數馬の太刀は宙を行き、ひとりで刃が拔けた。數馬は始めて怪しと認めたが、やがて死靈と共に歌ひつ舞ひつ狂ふ。法印の一心かけた祈禱によつて、死靈は數馬の言葉を信じ、やがて一同を[illegible]なる九太夫の屋敷に案内する。（九太夫屋敷）死靈は、九太夫を木の空に吊し上げて[illegible]、數馬の刃に討たせる。數馬の[illegible]に死靈は成佛し、一同も本國に引上げる。（三幕）（千日寺）[illegible]の死のため、[illegible]姉の靈を回向せんと[illegible]、丁度居合はせた名月・待宵とも[illegible]、荷物に隱れた惡家老大膳が[illegible]房之丞等のために討たれる。一同は館に引上げ、待宵は光右衛門と[illegible]。

【解說】お藤役の辰之助が所作事役者である所から、十分[illegible]目的であり、名殘を惜しむ意味をきかさうとした爲め、筋としては多少の無理がないでもない。[illegible]家騷動の筋[illegible]の方が遙かに興味があつたと思はれる。[illegible]數も少くて、[illegible]然らしさの描寫に成功してゐる。[illegible]怨靈の動作について[illegible]して失敗の作とは見えぬ。[illegible]觴所にきかな[illegible]たらしく、「松の葉」[illegible]。序幕は簡單な筋でありながら、[illegible]すために、[illegible]しい。これ[illegible]であらうか。和歌浦光右衛門と房之丞とは、儲け役である。近松の作の成功は、多くやつし事の方面にあるが、怨靈事の如き場面にも活路は開いてゐるので、「一心二河白道」（別項）は、この種の[illegible]に屬する。本作の成立年代については、「江戶芝居年代記」元祿[illegible]左衛門島原狐」との交渉が疑問とされてゐる。本作は再演された事はないが、相當の評判をあげ、辰之助の[illegible]當りであつた。

【參考】水木辰之助餞振舞解說　高野辰之（近松歌舞伎狂言集）○近松脚本著作年代考　秋葉芳美（演劇學十ノ二）　【守隨】

水木舞扇猫骨

合卷　前後二編　六册合二册【作者】柳亭種彥【畫工】歌川國貞【名稱】一部の趣向の骨子に猫の所作がある。それを名女方水木辰之助の猫の舞に託して、水木の舞といつたのである。猫の骨とは勿論舞の緣でなづけた。その猫骨即ち猫間、正しくいへば猫間すかしに就いては、種彥は序文の中で、[illegible]と斷わつてゐる。口繪の人物にそれ〴〵の俳句を配して趣向とする。[illegible]【刊行】文政六年、泉市・西村合板【讀本】[illegible]【題材】近松の淨瑠璃[illegible]による。

【梗概】（前編）（京都宗林寺門前）女房お花に鼓を打たせて[illegible]浪人梅永半七が、[illegible]小太郎の[illegible]に逢ふ。この二人の結婚はすでに室町殿の許しを得てゐるにも拘はらず、

姬の繼母以葉手に妨げられて果さない。そればかりか、以葉手の弟岩洞鬼東吾は、姉と相談の上、毒茶を以て姬を殺さうと寺內に待ち構へてゐる。お花は一途に夫の支度の費用を調達したさに、鬼東吾持參の茶箱を盜んで來て姬に貰つて貰ふ。姬はすぐにお茶を立てさせて飲まうとする時、奴の堅平が毒見をして死ぬ。姬の附添海見田畑之進は早くも鬼東吾の奸策を看破し、鬼東吾が盜賊として牛七夫婦を苛むのを、庇うて釋放させる。（宗林寺の奥庭）鬼東吾の家來轉寢具良助は、小太郞が姬と合印にしてゐる印籠を盜んで來る。鬼東吾は又具良助に室町の粗子と僞り、忍び逢つてゐる姬と小太郞を擒め取れと命ずる。具良助は大勢を率ゐて二人をとり圍む。牛七は舞々の衣裳をつけ、舞々の仕ぐさで狩々を追ひ拂うて二人を逃がす。〔後編〕（小太郞の京館）小太郞は室町殿より牡丹の花に蝶を追ふ猫を畫けとの御意を承はりながら、自分が子の歲生れ故に、母親の厚意で猫を飼はないことにしてゐるだけに、手本がなくて困つてゐる。かねて小太郞に想ひを焦す腰元の胡蝶が水木辰之助の猫の所作を見たことがあるからとて、それを舞うて見せる。辰之助の所作は夫戀しさの一念からそのまゝ猫の體となつて狂ふあはれさを見せるのであるが、胡蝶はそれにかこつけて己れの思ひをほの見せる。鬼東吾と心を合せて信太家を覗つてゐる小太郞附の姦臣四剩闢吾は、小太郞を唆かして胡蝶との仲をとり持つ。而も自分はその機を逸せず、小太郞が室町殿から預つた唐の鏡を盜み出し、忍び込んでゐる具良助に手渡しする。その樣子を胡蝶に見咎められた闢吾は、小夜照姬に賴まれてそなたを殺すと僞つて刺す。胡蝶は苦しみ悶えながら死ぬ。（小夜照姬の居間）胡蝶の靈、盲人となり、又美しい女となつて姬をさいなむ。腰元夏野が投げつけた神符の威德で猫の姿を現じて去る。そこへ小太郞の近臣と稱し、合じるしの印籠を持參した者が姬を迎へに來る。いつになく以葉手が勸めて姬を送り出す。姬は病氣だからとて居間からすぐに乘物に乘り移る。（三條河原）僞使者の具良助が姬の乘物に向つて、以葉手と鬼東吾から姬を殺せと命ぜられたと告げる。中から幽靈姿の堅平が現はれる。堅平は夙くに蘇生してゐたが、今は姬の身替りとなつて來たのである。具良助はまことの幽靈と思つて唐の鏡をさしかざす。堅平は具良助を殺してその鏡をとり戾す。そこへ田畑之進と謀り、お花に姬を盜み出させた牛七が來かゝつて、その鏡を請取つて去る。（國の明神の附近）千年飴賣りに身を扮した牛七夫婦が、密かに姬を守護して唐崎の隱家に行く途中、闢吾、手の者を率ゐてとり圍む。牛七これを追ひ拂ひ、まづお花を姬に附添へて一足さきに隱家に赴かせる。（唐崎の庵室）小太郞は鏡紛失の罪を得て、叔母淸歸尼の庵に隱れて手習師匠をしてゐる。粗子に追はれた小夜照姬が逃げて來て鏡を渡す。その時姬はゆくりなくも物妬みを起していひ爭ふはずみに鏡を池の中に落す。俄に遊女出現して姬を虛空に引立てようとする。淸歸尼が念珠を繰りかけたので、遊女は胡蝶の靈なる事を告げ、實の鏡が戾つたので小太郞との婚禮の調ふのが妬しく、姬に悋氣を起させて鏡を取り落させたといふ。折から牛七、四剩闢吾を擒め來りて、そなたを殺す時、姬に賴まれたといつたのは此奴の虛言だと言ひきかせる。胡蝶の靈が夏菊の花をふり上げれば闢吾の首は飛び、胡蝶の姿は消えて白骨ばかりが殘る。血汐の穢れを厭ふか、池水さつと捲き上がり鏡が浮ぶ。そこへ、夏野・堅平が駈けて來り、鬼東吾の惡事露顯して幕命を奉じた田畑之進に討たれ、以葉手は自害したことを語る。小太郞は本領を安堵し、姬との婚禮も調ひ、忠臣皆それ〴〵加增される。

【構想】本作は前編に於ては、牛七の女房お花が夫のために盜みをしたことが、偶然夫の舊主信太小太郞の戀人を救ふやうになつた不思議、また牛七が舞々の科で舊主たちの難を救ふ面白さが中心になつてゐる。後編に於ては腰元胡蝶の戀ゆゑの猫の所作、又嫉妬ゆゑに一念猫となつて小夜照姬に祟ることが中心になつてゐる。この二つの中心はただ姬と小太郞との婚禮を妨げる御家騷動によつてのみ繫がれてゐる。その關係はさまで緊密でない。殊に作者みづからの興趣は後編の猫の所作と怪事とによつて多く動いてゐるやうである。題名の附け方がすでにその意を暗示する。作者が自序の中で、「此草紙は平安堂が添削せし猫魔達といふ古淨瑠璃によりて作り設けしなれば彼の辰之助がなしたる御所樣の狂言とは異なり」と斷わるのも、一つにはその所據を明かにすると共に、一つにはその興の動きを語るものである。近松の「猫魔達」は下關の押領使市部大夫義治の遺子小夜照姬の繼母が弟の曾行山と謀つて押領使の一家を奪はうとしたのを、姬の戀人藤波右衛門淺平が姬を助けて、敵方をおし斥けるといふ御家騷動である。種彥は小夜照姬の名はそのまゝに用ひながら、その戀人の名淺平をば毒茶に中つて假死した奴の名に殘して堅平といつてゐる。しかも戀人その人を信太小太郞とかへたのは、近松の作「信田小太郞」の主人公に據りたのである。尤もそれとこれとの關係は淺い。主人公の名の外には、毒茶の趣向がそれの毒酒の趣向から暗示を得たと思はれるだけである。その毒茶にしても、前後の運びは殆ど「猫魔達」そのまゝである。殊に後編になると、なほその筋を辿るといつてよい。併し種彥は或る一點に於て原作とけぢめをつけようとした。原作が有つ淒慘の趣を優美にかへようとした。その點に於ては相應に成功した。原作では、姬は寅の歲の生れゆゑに、みづから畫いた虎の額を藥師堂に奉納しようとするものの、モデルがなくて困つてゐる。行山の弟子の大貳は、虎は猫のたぐひだからとて猫の所作をして見せる。かねての戀の思ひをほのめかすためである。その大貳は蒸風呂の中で行山のために落し殺され、しかもそれが姬のなす業と思ひ誤つて、一念猫と現じて姬に仇をするといふ筋であるが、種彥はその若僧を腰元にかへ、蒸風呂のくだりを省いたのである。殊に原作ではただ暗示にとどめてゐる水木辰之助の猫の所作を、はじめから表にかざしてかゝるところに、いかにも種彥好みがある。この作の筋に原作と異なるところがあるとすれば、すべてこの中心點から割り出された筆の運びである。また原作は五段の長いものであり、事件も多少複雜であるのを、これは截斷して二三の興深いところのみを選んだ。前編と後編との間に、緊密を缺く結果を得たのは當然である。（山口）

水汲（みづくみ） 能狂言 【別名】「水汲新發意」「お茶の水」【作者】金春四郞次郞・宇治彌太郞二代のうちの作と傳へられる。【格式】內神文濟相傳の部（大藏流）。【解說】淸水にお茶の水を汲みに住持から命ぜられた新發意は、心安い女を行かせる。女が淸水のほとりで小歌を歌ひながら水を汲んでゐると、新發意もやつて來て女に戲れかゝる。其處へ餘り遲いといふので住持が來て、その有樣を見て叱るので、新發意と女とは住持を打ち倒して逃げ入るといふ筋。別本に據れば、住持は登場せず、新發意が女に水を浴せかけられて終ると云ふのもある。出家物の中古の曲の一つで、能樂「地主」の姉妹篇と見るべきものである。曲中の小歌に「閑吟集」所載のものと一致するものがあつて、歌謠研究の上からも逸することの出來ない狂言である。（篠田）

水車（みづぐるま） 小說集 【作者】江見水蔭 【刊行】明治二十八年八月【內容】長篇「兜の星影」の外に、短篇「夏の館」「雪折竹」「燒山越」「瀧韻」「温泉」「狂詩人」等を收めてゐる。「兜の星影」の荒筋は、輕波田太郞といふ智勇兼備はつた若武者が、北條方の動靜を探るため敵地に入り込んだが、病に冒され難澁する。ふと醜い海女千鶴に助けられ、義理にからまれて夫婦の契りをした。その後、太郞が本國へ歸ると、松ケ枝といふ美女から烈しく戀されて煩悶したが、彼は義理を重んじて醜い海女千鶴を正妻に迎へた。が、松ケ枝はその後、手を引かうとせぬので、二人の女の間に葛藤を生じ、千鶴は淺い考へから夫を欺いた罪を悔いて自殺し、松ケ枝は戀の病が重つて世を去り、太郞は佛門に入つた。「夏の館」は或る硬骨の盲人が、貧のため、娘の愛のために膝を屈したが、忍讓のために娘を奪ひ取られるといふ哀話。「雪折竹」は或る詩人が詩想が涸れたのか、他に思ふ所あつたのか、裏長屋に住み、砲兵工廠の職工となり、新妻と睦じくすることを、「燒山越」は忠三といふ正直な男が戀に迷つて悲慘な境涯に陷つた徑路を、「狂詩人」は山北水南といふ狂詩人が、幻想裡に意中の人と逢つたことを描いたのである。【批評】「兜の星影」は、劇的で直ぐ芝居になるやうに書かれてあるが、健筆に任せて書き放したといふところがあつて鍛錬の足らぬのが目につく。が、醜い海女の戀はよく描いてある。短篇の中では「燒山越」「狂詩人」の二篇がすぐれてゐる。

【附記】「兜の星影」は、市川左團次が襲名時代に明治座で上演するに當り、明治三十八年四月、別に刊行した。「水車」刊行後、同じく短篇を集めた「水の聲」が明治二十八年十一月に出たことがある。（高須）

三筋緯客氣植田（みすぢだちきやくのきうゑだ） 黃表紙 三冊 十五丁十七圖 【作者】山東京傳 【畫工】北尾政演（京傳）【名義】當時流行の上田紬の三筋立を三人の嫖客に通はせる洒落。【刊行】天明七年蔦屋板【題材】自作の「遊人三幅對」（咄本、安永九年刊）の三人物を「通和者交」（後出）などを參考として遊里に活躍させ、實在の人物やその方面では相當に知れ渡つてゐる事件によつて裏附けてゐるらしい。

【梗槪】梅枝・八重次郞・松太郞の三人が、各自に遊女買の趣向を立てた。梅枝は子供のやうに遊興すれば遊女が靡くと考へ、六歲の我が子の取卷となつて遊んで勘當され、八重次郞は短命の遊女に馴染み、短くして美しい戀を求めて遂に坊主となり、松太郞は氣の合つた遊女と長く馴染み、遂にめでたく結婚する。

【解說】京傳作の「江戶生艷氣樺燒」（別項）、「會通己惚照子」（後出）、「碑文谷利生四竹節」（寬政元年板）、「九替十年色地獄」（後出）等と同樣に、最も洒落本的色彩の濃厚な作品である。京傳は實在の人物からヒントを得て、三人物を形成したらしい事は、「江戶生艷氣樺燒」の艷次郞の場合と同樣であるが、本書の三人物は、己惚と云ふ一般的の型に粘液質の人間を當てた艷次郞とは異つて、更に個性的に展開して來た。「江戶生艷氣樺燒」の思想的背景は洒落本「令子洞房」（別項）であるが、本書の根柢をなす遊興論は、洒落本「吉原楊枝」（別項）である。「吉原楊枝」は天明八年の出版であるから、その前年出版の本書は思想的に先驅をなしてゐる。「吉原楊枝」の分類に從へば、梅枝は惚れられに行く客、八重次郞は名聞を求めて遊女を買ふ客、松太郞は眞實の戀愛を求めんとする客である。【價値】性格描寫の片鱗を黃表紙中より發見せんとするならば、本書の如きはそれであらう。艷次郞に比較すると性格的觀照が深まつたと共に、己惚の甘さから通の澁味に入つてゐる。諷刺の辛辣さは遊里生活を題材とする黃表紙中稀に見る所である。繪は文と相俟つて個性的色彩を表現せんとしてゐる。梅枝は團十郞、その子梅三郞はゑび藏の似顏らしい。幇間の我物・五丁をはじめ、似顏らしく思はれる人物が多い。京傳の作品中の傑作で、同時に黃表紙中の傑作である。

【備考】「通和者交」（市場通笑作、天明五年刊）武部源藏に新吉・次郞八・武介の三人の寺子があり、新吉は遊里へ行つても正直過ぎ、次郞八は孝行過ぎ、武介は如才なく、遊びに行つても持てるが世をはかなむ。「會通己惚照子」（山東京傳作、天明八年刊）京屋傳二郞は、客人大明神から授かつた己惚鏡で人情に通ずる。「九替十年色地獄」（山東京傳作、寬政三年刊）狂傳和尙は鼻の下建立のため、女衒の手に渡るから身請までの遊女の樣々の苦勞を、地獄繪にたとへて說法する。（小池）

水谷不倒（みづたにふたう） 小說家 【本名】弓彥 【閱歷】安政五年十一月、名古屋市長者町に生る。東京專門學校文科出身で、本來學者肌の人であるが、早稻田派の人々が坪內逍遙の指導のもとに小說を書くことになつた時、不倒も亦文壇に打つて出る最初の仕事として小說「錆刀」「薄屑」の二篇を「新小說」に公にした。それから明治三十年四月創刊の「新著月刊」に「めなしちご」を發表し、次いで下阪して大阪每日新聞社會部に入つた。後退社して書肆を經營したこともある。本來の特色は江戶文學研究にあつて、古淨瑠璃について知るところが相當に深い。が、小說家としても、近松式構圖を以て、相應興味ある作を出した。【著書】小說十七八篇の外、「列傳體小說史」（別項）「繪入淨瑠璃史」等がある。（高須）

水手（みづて） 「葦手」を見よ。

水鐘曲（みづのかねきよく） 「宴曲」を見よ。

水濃行方（みづのゆくへ） 讀本 五冊 【著作】平秩東作 【別名】近代隱逸傳 【成立・刊行】明和元年秋八月作、同二年春刊。【解說】この書は市中に放浪するすね者を隱君子と見立てたもので、「柔和里先生」（一卷）・取箸兵衛・馬業先生（二卷）・滕世遊法師・大森の翁（三卷）・草表錦鵜輔（四卷）・龜山丈人（五卷）、すべて七人の隱者の生活を寫したものである。即ち「柔和里先生」といふは、江戶の或る町に五六十軒の長屋があり、其處の親分十兵衛は、正直を旨として稼業を勵み、法を守り、勤儉を尊び、藥師寄根を基として常に敎訓を與へ、その德化が長屋中に及んで、一人の曲つた者もなく、廉恥を重んじ、喧嘩口論などもなく、頗る柔和な模範長屋

であるから、この一部落を柔和里と稱し、親分十兵衞を柔和里先生と尊敬した。「取替兵衞」はその頃市中を取替べえと呼んで、錠前、煙管の雁首、櫛笄の古手、何でも不用なものを物々交換する飴屋があつた。或る時この飴賣が、醉に乘じ、辯に任せて物々交換を修身齊家治國平天下の理義に附會して滔々論ずるといふ話。又「大森の鮨」といふは、石尊參りの若者共が、歸途大森を通りかゝり、麥わら細工を土產に買はうとしたが、江戶ツ兒の常として駄洒落や惡態を吐きつつ素見して行くうちに、或る家で老翁が聞き咎め、朱鞘の脇差をひねくりながら睨み附けたので、青くなつて引返し、附近の茶屋で、彼の老人は何者かと聞くと、彼は曾て一人の强盜が矢尻を切つて家に押入らうとした時、槍を突出して强盜を驚かした有名な老翁だといふ話。「龜山丈人」の篇は、勢州龜山產れの長吉といふ少年が、志を立てて江戶に下り、稼ぎ出すまでの筋は、東作の自傳の如くであるが、この靑年が幸運に惠まれ、トン／＼拍子に出世して百萬長者になるのは、彼の實際とは反對で、その空想を畫いたものとも取れる。後にこの長者が家を子に讓り、自分は龜山に退隱して龜山丈人と稱し、大福帳說を著はし、世人に世渡りの道を授ける話は、西鶴の「日本永代藏」（別項）あたりを狙つたものである。「莘野茗談」にも、「水濃行方」の五卷目は、西鶴を摸したものといつてゐる。併し作意をいへるか語法をいへるか、詳かでない。作意から云ふと、寧ろ「近代艷隱者」（別項）に似た所がある。何れにしてもこの作は、西鶴の町人ものに負ふ所が少くない。それだけ寶曆・明和の開放時代には後れた作である。殊に儒教主義が濃厚であるから、甚だくつろぎがない。併しただこの一篇を以て、東作はその文才を示し、後に作者の列に入つたのである。【影響】浮世草子に於ける町人ものの脈は、寛延・寶曆に至るも盡きず、談義ものと形を變へて、一榮え榮えたが、「水濃行方」を最後としてその脈はこゝに絕えた。で、この作の影響と見るべきものは殆どない。（水谷）

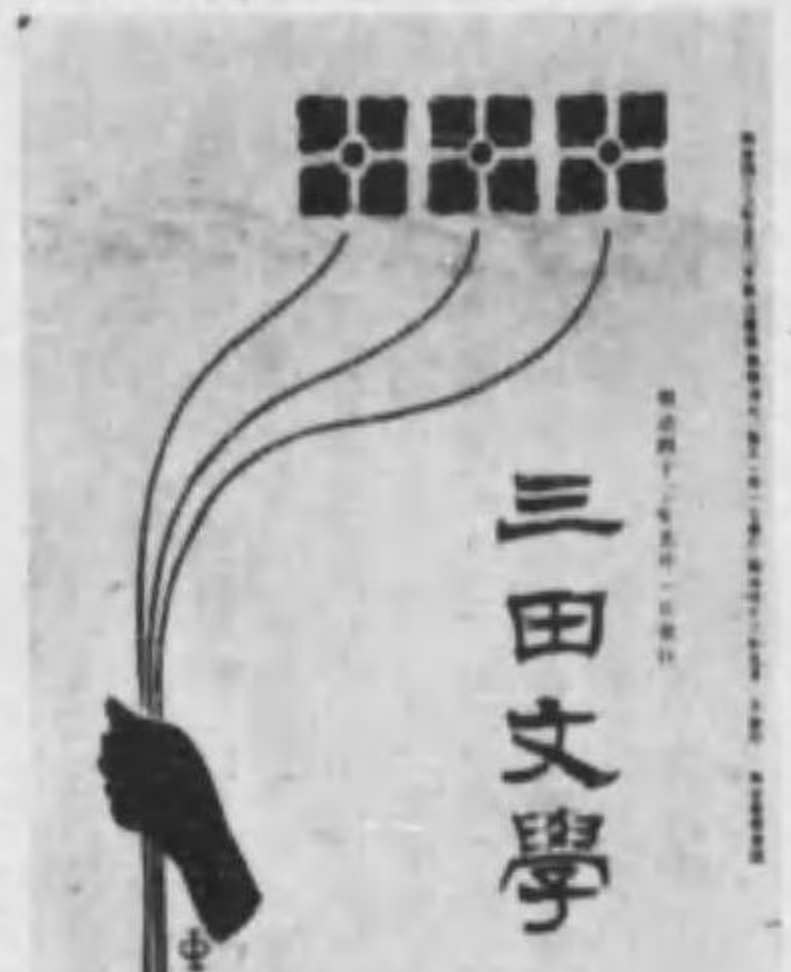
水野葉舟 みづのえふしう　小說家【本名】盈太郎【閱歷】明治十六年四月、東京下谷に生る。三十八年早稻田大學政治科を卒業。その前後より小說・詩・短歌等を作り、「文庫」「新聲」等に投書した。與謝野寛が新詩社（別項）を起した頃、これに加はり、短歌・長詩にその才能を示した。後、自然派の機運大に動きだした頃、小說に轉じて感覺描寫の精妙を以て稱された新進作家中、最も有望な者の一人とされた。それ等の作品は「微溫」「壁畫」等に收められてゐる。又一時盛んに小品文を書いた。それは閃めく感情を詩の如き高い調子で精緻せる文章に現はすといふのであつて、その集に「響」「森」（明治四十一年出版）などがあり、これ亦當時文壇の注目を惹いたものであつた。彼は結局伸びるべくして伸びず、家庭文學の開拓などに手を着けたが、これ又、左程著しい特色を示さないで終り、今は全く筆を捨て、千葉縣下に歸農してゐる。なほ以上の外、詩集「濃淡」がある。（高須）

禊教 みそぎけう　「神道各派」を見よ。

三十輻 みそのや　叢書　四冊【編者】大田蜀山人【刊行】大正六年、國書刊行會。【解說】序に、「武藏野の草の始めて開けそめしより、家々の文々ここの卷三十部をもて一集とし、眞名に書けるを群書一轂といひ、假名に寫せるを三十輻と名づく、これなん李の下の翁が、みそのやはひとつのこしきをともにす云々」とある。輯まるに從つて纂めたもので、「三十輻」三十一部（第一卷）、「續三十輻」二十九部、「廣三十輻」十八部（第二卷）、「新三十輻」三十一部（第三卷）、「補三十輻」九部、「百和香」三十六部（第四卷）を收め、頭書の叢書名を以て刊行した。隨筆あり、考證あり、國語あり、俳諧あり、史傳ありといふ風に多方面に材料を求めて、或るものは資料として貴重なものを遺してゐる。（土井）

御嶽教 みたけけう　「神道各派」を見よ。

三田派 みたは　文學團體【名義】雜誌「三田文學」に據れる人々を總稱する名目である。【沿革】慶應義塾大學では、文科の興隆を策して明治四十三年度から學制に大刷新を施し、新進有爲の士の多くを教授として招聘すると共に、機關雜誌として創作中心の「三田文學」（明治四十三年五月創刊）を出した。推されて新に教授の要職に就いた永井荷風（別項）は、又この雜誌の主幹をも兼ねて一切を主宰することになり、森鷗外・上田敏を顧問としたので、當時「早稻田文學」（別項）を本據に一世を風靡してゐた文學運動と對立して、反自然主義の旗幟の下では、同志たるべき人々が集つたのである。內部の荷風・鷗外・敏・小山內薰・馬場孤蝶・戶川秋骨等を別にすれば、主として寄稿した者は與謝野夫妻・木下杢太郎・長田秀雄・吉井勇等の「スバル」（別項）に屬する人々であり、更に後藤末雄・谷崎潤一郎等の新思潮派（別項）と、それに泉鏡花・薄田泣菫・黑田湖山等で、文壇の一角に有力な作家群を形成した。しかし眞に三田派と名づくべきものは、荷風の推奬を俟つて輩出した塾出身の文學者である。久保田万太郎・小澤愛圀・澤木梢・松本泰・水上瀧太郎・佐藤春夫・小林乳木・增田廉吉・山崎俊夫・久米秀治等が續々執筆するに及んで、「三田文學」は始めて機關雜誌の實を擧げ、又三田派なる一團がはつきり存在することになつた。大正五年に荷風が塾を去り、同時に「三田文學」主幹を辭して後も南部修太郎・井汲清治・宇野四郎・小島政二郎・三宅周太郎・水木京太・勝本清一郎・加宮貴一等、三田出身者がこれに加はつたが、雜誌は中心を失つた形で漸次振はず、大正十四年に至つて一時休刊したが、翌年水上瀧太郎を主盟にして再刊し、主として三田出の作家の作品發表の任に當つて來たので、謂ゆる三田派の人々は益々その數を加へてゐる。【批評】「三田文學」は、學校の機關雜誌として生れたものではあるが、折柄目覺しき創作的活動をなし、且つその特色の著しい荷風を主幹としただけに、最初は彼を中心に趣味傾向の相似た人々のみが據つて漠然と三田派を形造つてゐた。當時の粗野の雜を免れぬ自然主義文學に對峙して、この一群は技巧に富む多彩的な都會文學を樹立して、荒野に華々しい花園を培つたのである。荷風の好尙作風は、彼去つて後も前期三田派には傳統の如く殘つたが、改めて再刊して以後の新進三田派は單に同窓者の友愛關係から手を携へてゐるので、思想傾向を異にする者が集つて「三田文學」に據つてゐるに過ぎない。多かれ少かれ荷風の影響の下に立つてゐた前期の人々と違つて、これは各人各說的態度で潑剌たる氣息を感ぜしめる。即ち中心作家を師父として仰ぐ關係から、學校中に結ばれた關係に移つたことに同じ名の「三田文學」に據るとはいへ、前期後期の三田派のはつきりした推移が認められる。かゝる結合が文學的にどれ程の意義あるかは暫く措き、現在學校の機關たる文學雜誌として立つものは「三田文學」が唯一のものであり、而もこれに據る謂ゆる三田派から異色ある新進作家が續々生れつつあるのは事實である。なほ前期三田派の作品を集めたものに「三田文選」（玄文社）「三田文學選」（高踏社）がある。（水木）



三田文學（創刊號）

三田文學 みたぶんがく　「三田派」を見よ。

みだれ髮 みだれがみ　歌集【作者】鳳晶子（後の與謝野晶子）【刊行】明治三十四年八月十五日、東京新詩社、伊藤文友堂。【內容】東京新詩社は、後の新詩社（別項）であり、與謝野寛の主宰するところである。歌集でこの三六判型は最初のものであり、恐らく最初の三六判型であつたのであらう。一頁三首組、表紙・扉の外、七枚の挿畫がある。卷首の一頁に小書して、「この書の體裁は悉く藤島武二先生の意匠に成れり、表紙畫みだれ髮の輪廓は、戀愛の矢のハートを射たるにて矢の根より吹き出でたる花は詩を意味せるなり」とあり、戀愛詩集であると斷つてゐるのである。すべて短歌四百首を收めてゐる。

【批評】奔放なる熱情と、革新的奔放性に於ては、一の時代を作つたものと言へるが、その作には未完成な粗笨なものが多い。寛の詩歌集「紫」に於て、新詩社派の短歌といふものが、一つの完成を見た以上、こゝから拔け出すのには、進んでこの轉化を求めなければならなかつたのである。それを早くも自ら認めて、この時代容易ではなかつた一冊の集として、こゝに紹介した寛の見解に誤りはなかつた。新派和歌集としては、寛の「東西南北」（別項）につぐ問題の集であり、爾後三十年、未だに多くの問題を殘してゐるものである。が、普通には、未完成の作が多い點と、その問題に重きをおいて少數の完成されたものを見逃してゐる憾みがある。世に持て囃されたところの「やは肌のあつき血潮に」その他の作は、今日に於ては、寧ろその時代の浪漫的情熱の所產として見ても、その作の價値は疑はれてゐる。（北原）

みだれ髮 みだれがみ　小說【作者】小杉天外【發表】明治三十二年三月、「文藝俱樂部」所載。明治四十二年十一月、章光閣出版。天外小說集「草笛」中に收む。

【梗概】某銀行會社の重役三上博友が、亡官吏の遺子お房の美貌を見染めて妾にしようとする。針仕事で母子二人の不自由な暮しをしてゐるお房の母も同意する。お房は、下宿人の學生小池に戀愛を感じて居り、また妾商賣を好まない。お房は酒田某の妾をしてゐる姉とも思ふお桂に相談する。お桂も小池に思ひを掛ける一人である。お房の名で相談があると小池を呼び寄せ、酒を出して小池を挑む。小池が怒つて歸つた後へ、酒田が偶然に來合せ、お桂の不貞を怒つて手切れをする。お桂はお房の戀愛の純情に撲たれ、手切金をお房に與へて大阪に去つた小池の跡を追はせ、自分は一切を諦めて姿をかくした。

【批評】筋もよく通り、まとまつた好短篇である。中心人物はお桂であり、妾らしい心理や生活が無理がなく開展され、當時の作品としては全體に會話の自由さも目に付く。（千葉）

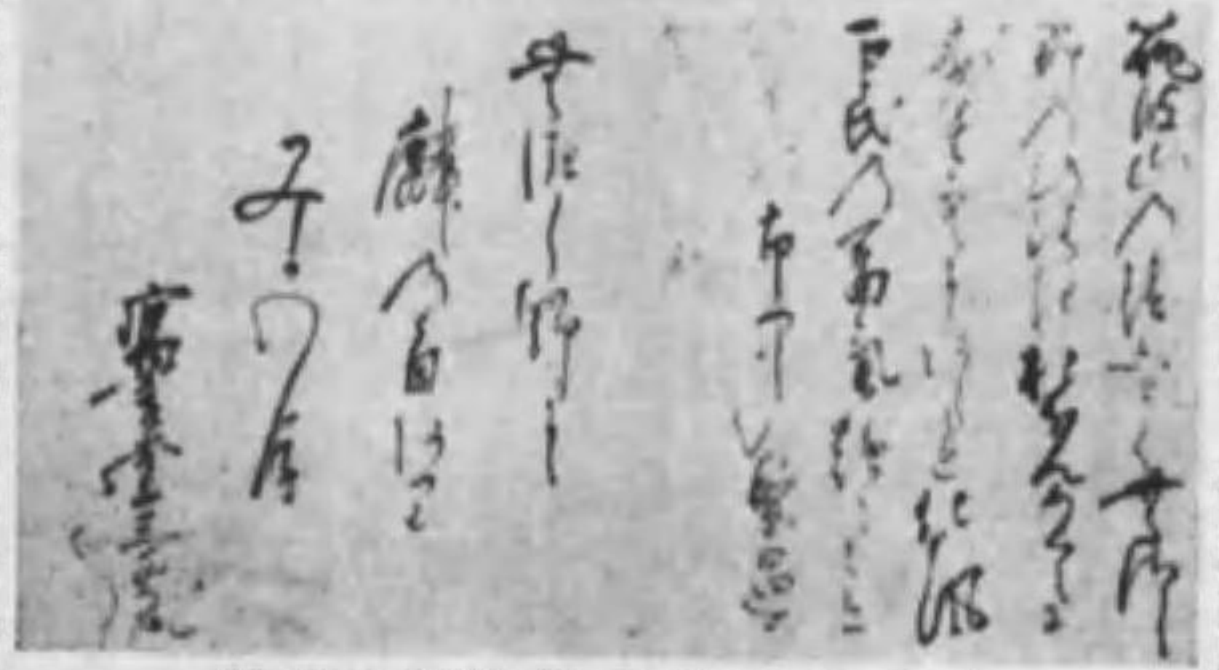
亂脛三本鑓 みだれはぎさんぼんやり　浮世草子　六冊【作者】西澤一風【名稱】亂脛に義道を表はし、三本鑓に武士の妻敵討に關する三話を集めたことを表はしてゐる。【刊行】享保三年【讀本】近世文藝叢書第四所收。

【梗概】〔卷一・二〕（國は色より出る雲）雲州松江の大守歸國の砌に、池田軍次郎（廿五）能のシテを勤め、小森弥右衞門の娘かんに見染められ、後密かに契る。然るにかんは茶道玉井宗義の妻となり、三人の子を產む。偶々宗義江戶詰となり、長男の武藝を軍次郎に託した。かくて宗義の不在中、軍次郎屢々玉井家に出入し、遂にかんと不義の關係を結んで懷姙させた。そのうち夫は歸國する事となり、且つかんは家來武介に切諫されたので二人は駈落し、武介は責を負うて自殺した。宗義歸國してこれを知り、暇を請うて妻敵討に出で、遂に兩人を大阪高麗橋の上で討つた。〔卷三・四〕（國は作州津山、所は大阪田邊屋橋）作州津山の家中に小出重左衞門といふ武士がある。同家中宮永助右衞門娘しゆんを娶つた。婚後間もなく主命を受けて江戶詰となつた。同家中倉橋藤九郎は豫てしゆんに思ひを寄せ、重左衞門歸國後、しゆんが伊勢參宮をしたのを機會とし、途中に奪ひ取りて誘拐し、船で大阪に行つた。國許ではこれを知つて重左衞門は弟重介と共に搜索に出で、乘合船の船頭に依つて兩人の所在を知り、義理のために娘の搜索に出た助右衞門と共に、藤九郎を田邊屋橋の邊りで討つた。しゆんは未だ身を汚すに至らなかつた事を明かにして自殺した。〔卷五・六〕（國は丹州篠山）丹波篠山の家中に、出石勘右衞門といふものがあつた。浪人となつて京に出で、妻かね、下女・下人と共に暮してゐた。槍術の門弟に水島小八郎といふものがあつて寄食してゐた。偶々勘右衞門は江戶に奉公の口が出來たので、下人を伴ひ、留守を妻かねと小八郎に託して行つた。然るに小八郎は屢々かねに情を通ずることを迫つた。下女はこれに就いてかねを切諫した。所へ鄕里からかねの兄彌內夫婦が勘右衞門の不在中、かねを引取りに出て來た。かねの不在中、小八郎はその家財を賣拂つて丹波猪野目村に逃げた。勘右衞門主從は江戶から歸つて小八郎の不都合を知つた。偶々彌內の家來が猪野目村に小八郎のゐることを知らせたので、勘右衞門主從は早速行つて小八郎を討つた。かねには方便のために誓紙を小八郎に送つたことはあるが、不義の事實はないことが明かになつたので、これを尼にした。

【解說】第一話の元の事件は、「月堂見聞集」享保二年の條に記されてある。享保二年七月十七日の事で、早くも同年同月二十一日附の序のある「女敵高麗茶碗」といふ浮世草子に綴られてゐるが、この序に依ると、この前に近松門左衞門に同事件を材として「好色橋辨慶」といふ作があり、狂言作者に同じ材で「浮世は夢の

浮橋」といふ作があつたと知られるが、いづれも狂言で事件直後に看板を掲げたものであらう。それから同年八月二十二日を初日に竹本座に興行した近松作の「槍權三重帷子」（別項）も本事件を材にして、槍權三に附會したものである。「雲州松江の鱸」と題する浮世草子も同材であるが、この書も本文中に「ことし享保二年」とあるから、同年の作であらう。かく同年中に多くの作の材となつたのは、事件が當時の耳目を聳動したのに基づくのであらう。本書はこれ等に比べると、最も後れて出來たものである。第三話は、「是より（享保二年）廿六年後歌舞伎狂言に丹州笹山妻敵討といふ外題角の芝居に出でたり」と「傳奇作書」（追加）に見えてゐるのが、これと同材かも知れない。本書は三つの妻敵討を集めたものといふ點と「槍權三重帷子」と同材の説話を含むといふ點で、世に多く知られてゐるが、作としては傑れてゐない。（藤村）

三千風（みちかぜ） 俳人【姓名】三井友翰。自ら大淀氏とも稱した。字は舖琚。【別號】湖山飛散人（行脚の旨を示す）・景狂人（樂節の志をいふ）・頂雲軒（高山に登る時）・尺騎堂（一窓に臨む時）・紫英軒（禪道を說く時）・一念堂（佛教を論ずる時）・浮露軒（謠曲を謠ふ時）・寓言堂（戲言を草する時）・呑空法師・呑空居士・呑空齋（抱負の大なる事をいふ）・無不非軒（何にまれ有らざること無しの義）・無倫軒（天地間の事倫りなしの義）・東往居士（東の方松島に往つた義か）。この外、なほ折に觸れ所に隨ふ大筒叟・無玉庵・無月庵・倖木庵・行脚山人・無刀軒等の號があつた。【生歿】寬永十六年生れ、寶永四年（二三六七）一月八日歿す（從來種々に誤り傳へられてゐたが、近來射和村共同墓地に於ける三井家墓域の三千風の墓碑、同增妙連寺にある墓碣、高據寺不宗寺の過去帳、その他諸種帳等の發見によつて明かとなつた）。【辭世】名聞ののりも剝ぎ目も破れ紙子音も嵐の庭の幽塚【法名】花月院不生居士【墓碑】三井家墓域の墓碑には、（正面）友翰法師、（右側）寶永四丁亥正月八日、（左側）三井氏とあり、妙通寺の墓碣には、（正面）不生居士三千風之墓、（右側）には辭世の歌（左側）があつて寶永四丁亥天正月八日（享年六十九才 射和浦中）とある。萬水堂朱角が享保七年十月九日に建てた追善碑が仙臺にあつて（今仙臺市小田原高松道佐藤兵郎內にある）、これには寶永五年芳春初九日に歿すとあつて、有力視されてゐたが、これも誤りである事が明かになつた譯である。【俳系】「日本行脚文集」（別項）によると、鄕里での師に孫親といふ人があり、又同地蓮生寺の䄂順法印を机師と云つてゐるが、共に如何なる人であつたか知られない。俳諧に關しては、同文集の序に「色那來鐘まはせし昔より虛道の俳諧を遊り。（中略）さりとて師閥にしも入らず學山にも登らず、且暮自問の反古塚を枕とせしのみ」と云つてゐるから、俳諧は無師獨學のものであつたと見える。【閱歷】伊勢國飯南郡射和村の人で、三井家は家業は何であつたかは詳かでないが、兎に角相當富裕な商家であつたらしく、また京阪に出店があつたやうで、三千風も家に在つた頃は、この出店へ每年往來した。兄に宗貞といふのがあり、三千風は二男か三男かであつたらしい。然るに彼は十五歳の春から俳諧に心を傾け、思ひを行脚に馳せてゐたが、父母眷族がこれを許さなかつた。寬文九年三十一歳の秋、どうした關係でか希望が叶ひ、自ら薙髮して「柳櫻も世を秋風の手向かな」と吟じ、呑空法師と號して、仙臺に緣を求めて松島に赴き、瑞巖寺に身を寄せた。松島の雄島の庵室に留まること十五年、その間俳諧に精進し、延寶七年三月には、二千八百句獨吟の「仙臺大矢數」を公けにし、西鶴の讃辭を得たのであるが、その卷頭吟が「空花を射る矢數や一念三千句」の句であつたので、この句によつてか世人が三千風と字したのだといふ。十五年後の天和三年四月四日、仙臺を立つて宿望の全國大行脚に出で、大旅五年、見殘し再順二年、都合七年を費して全國を遊歷し、天和三年十月三日一旦故鄕射和村に歸り、貞享二年の暮も故鄕に越年し、元祿二年五月行脚を終へて又故鄕に歸つたのであるが、この旅行の紀行が「日本行脚文集」である。仙臺出立の時、「けふぞはや見ぬ世の旅の更衣」の句を殘してゐるので、これから歿日や辭世が誤られたりもしてゐるのである。一旦故鄕へは歸つたが、間もなく行脚に出で、又行脚を續けてゐたらしいが、元祿八年東武隅田川のほとりの假庵にゐた時、相州大磯鴫立庵から入庵の交渉を受け、五月入庵した。鴫立庵は寬文の初め小田原の宗雪が創庵し、宗雪歿後二年にして三千風の入庵となつたのである。三千風は入庵して修理を加へ、西行堂・虎堂その他を設け、元祿十年には西行の五百年忌を修した。又元祿十三年頃までに自ら壽碑を建て、これに「鴫立し澤邊の庵をふきかえてこゝろなき身のおもひ出にせん」の歌及び「鴫たつてなきものを何よぶことり」の句を刻し、自號に「中興鴫立庵主」と肩書してゐる。この後歿時までの動靜は、その著作などの知られる外詳かでない。【人物】「行脚文集」の序に、誰に恐れ何者に恥ぢようか。自分は妻子もなく、爵祿の望みもない。かくて世に住まれなければ住まれずともよいと云ふ意味の事を述べてゐて、これによれば不羈獨往の性格らしく見えるが、それでゐて行脚中の態度を見ると、阿諛諂辭甚しくて、全く迎合主義である。又學識學才のある事は十分認められるが、而も漢字の奇恠な使用をしたり、無闇と多くの號を使ひ分けたりするなど、非常識なほど衒學的で、學識の惡用に陷つて居り、なほ尨大なる「行脚文集」を編んだり、寓言體小說風の「法語三人物語」の如きを書いたり、謠曲を作つたり、西鶴に眞似て大矢數俳諧をやつたり、數多くの著作をしてゐたりする所に、衒學と野心をも感ぜしめる。身は出家となり、松島の勝景を慕つて行つたに拘らず、又當時彼を今西行といふ人があつたり、自らも大西行など云つてゐるに拘らず、「遊女ノ行文」（文集）なるものを書いて、「傾直献儀吉田ノ樂好弟子密風書」と署名するなど、その他見ての點から見て


大淀三千風筆蹟（松宇文庫藏）

彼自ら「寶蔵坊」と云つてゐるに違はず、俗物たることは爭はれない。畢竟三千風は奇矯と矛盾に滿ちた性格の持主である。【著書】松島一色雨吟集（延寶八年刊）○松島眺望集（延寶年間）○仙臺大矢數（延寶七年刊）○富士詣（貞享三年刊）○日本行脚文集（別項）（元祿三年刊）○法語三人物語（元祿九年刊）○和漢田鳥集（元祿十四年刊）○三千風笈さがし（和風編）（元祿十四年刊）○鴫立澤（謠曲）○金花山（謠曲）。【俳風・業績】「行脚文集」に「所詮俳諧は狂言なり、寓言也。實否不用にして虛が中の虛也」と云ひ、「せんずる處、此道は世間の浮說、小隱不善をなさじと日暮らしのすさびなりと野子などは思ふが、但し是も赤偏見か知らず」と云ひ、また「うつくしき阿法となるは只此道なり」など云つてゐるので、三千風の俳諧觀は明かである。これは正に談林の影響を受けてゐるもので、從つて彼の作も談林風であるが、談林風にしては又似て非なるものがある。內容的に談林風の奇拔斬新が乏しく、寧ろ形式表現上の奇拔が主である。特に奇拔といふよりも、用字用語の怪奇、表現の怪奇である。繁雜な漢字に和訓を施したり、和語に怪奇な漢字を宛てたりするのがその身上で、思想的には寧ろ古くて何等の情趣も風韻もない。彼の第二の故鄕たる松島・仙臺は、十五年の地盤であつただけ、この地を中心とした東北地方には、門人も多く勢力もあつたやうであるが、優れた門人が殆ど現はれてもゐない。全國を普く行脚して各地の俳人と交遊したに拘らず、彼の俳風が渴仰されるに至らなかつたのは、彼の俳風の當然の歸結でなからねばならぬ。かくて彼は僻陬の地の名もなき俳人を相手として終り、一時の奇調に快を貪つて果てたのである。この意味に於て三千風は一種の奇傑である。

【參考】ころもがえ（追善集）（朱玉・雨山序）○俳家奇人談（竹內玄々一）○誹家大系圖（生川春明）○相模風土記（間宮士信）○俳人百家撰（水谷川鴻）○仙臺三十六歌仙○俳人小傳（中村光久）○俳諧人物便覽（三浦若海）○名人忌辰錄（關根只誠）○俳諧紀行全集提要（勝田叙人）（俳諧文庫）○聽雨窓俳話（角田竹冷）○三千風の晩年（青山勇太郎）（句と評論昭和七ノ四）○大淀三千風雜考（竹內琴渡）（俳季子昭和七ノ一〇） （志田）

通方（みちかた） 有職家【姓】土御門。本姓は源氏。【生歿】文治五年生れ、曆仁元年（一八九八）十二月二十八日歿す。享年五十。【閱歷】建久元年從五位下に叙し、翌年因幡守となり、建仁元年左少將、承元元年右中將、建曆元年藏人頭を經て、同二年從三位に叙せられた。後進んで建保三年には參議に任じ、承久元年には左中將・右衞門督・檢非違使別當となつた。同二年更に權中納言に轉じ、右衞門督・檢非違使別當を辭したが、貞應二年には正二位に進み、寬喜三年には權大納言に任じ、翌年には中宮大夫となつた。土御門上皇の承久の事に依つて阿波國御遷幸の事があつた時に、その皇子（後嵯峨天皇）を預り奉つたことは「增鏡」三神山の條に見えてゐる。曆仁元年大納言に轉じたが、十二月二十七日出家、翌日薨去した。「飾抄」（別項）の著がある。（石村）

通勝（みちかつ） 學者【姓】源【氏】中院【號】也足、又は也足軒【法號】素然【生歿】永祿元年に生れ、慶長十五年（二二七〇）三月二十五日薨す。享年五十三。【家系】その先、具平親王より出で、正二位大納言通爲の子で、その子孫に通村（別項）・通茂等の堂上歌人を出してゐる。【學統】丹後國にあつては細川幽齋に師事し、京師にあつては三條西實枝を師表と仰いだ。【閱歷】「公卿補任」によれば、天正八年正月、通勝二十五歲にして正三位に叙せられ、間もなく同年正月十七日官を辭し、同六月十八日勅勘により出奔して丹後國に行つた。當時田邊城にゐた細川幽齋のもとに赴き、就いてこれに學び、「古今和歌集」の傳及び歌道の祕奧を受けたと云ふ。天正十四年八月十三日出家して素然と號し、慶長四年十二月七日には赦されて再び京師に歸つた。翌慶長五年には後陽成帝、通勝を召して御詩を賜ひ、これに答へて自らも亦和歌一首を獻じた。その後後陽成和歌會を富山に設けたと云ふが、年代が判然しない。慶長十年九月十六日には、後陽成天皇を初めとして、桂宮智仁親王・三條西實枝等三十六人で、御當座の千首を行はせられたが、通勝も亦その中の一人で、「慶長千首」中にその時の歌が見える。當時彼の詠歌は頗る世にもてはやされたと云ふが、怜悧明敏の才幹を抱いた通勝の眞面目は、素より歌人としてにあるのでなく、幽齋の庇護激勵のもとに完成した大著「岷江入楚」（別項）の學的功績の上にある。その他幽齋の著「伊勢物語闕疑抄」の弘布に力を致し、幽齋自筆の「十六夜日記」を轉寫（原本前田侯爵家藏）する等、その學統を繼承し、宣揚するに與つて力があつた。【著書】岷江入楚○百人一首像讃鈔二卷。その他「慶長千首」中にその作歌が見える。

【參考】國學者傳記集成○古註の集成―岷江入楚（野村八良）（國語と國文學二ノ一〇） （濱田）

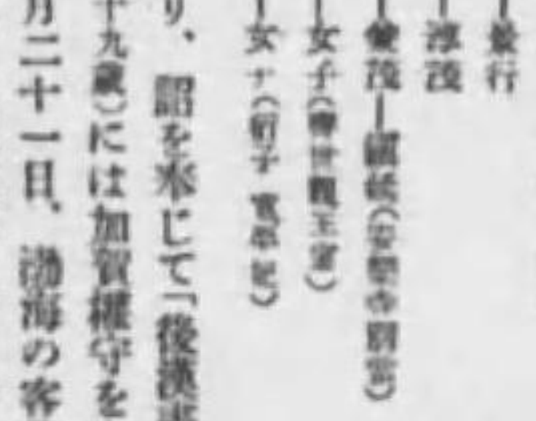
道草（みちくさ） 小說【作者】夏目漱石【發表】大正四年六月三日から同年九月十四日まで、東京・大阪兩朝日新聞に連載。【刊行】同年十月、岩波書店。漱石全集第六卷・同普及版第九卷所收。

【梗概】健三は、やゝもすればセンチメンタルな氣分に支配され易いくせに、決してデモンストラチヴになれない男であつた。だから獨斷的な氣質が一層專制的に見えた。お住は表向き夫の權利を認めながら腹の中ではいつも不平があつた。彼女は考へなかつた。けれども考へた結果を野性的によく感じた。この夫婦は彼等に特有な因果關係を持つてゐることを其々の裡に自覺してゐた。さうしてその因果關係が一切の他人には全く通じないのだといふこともよく呑み込んでゐた。健三は三つの時から七つの時まで島田といふ家に貰はれてゐた。さうしてまた實家に戾つたが、籍の脫けたのは二十二の時であつた。その時島田には父が養育料を與へて絕緣した。その島田と十五六年目に偶然にも往來で出逢ひ、それからまた昔の因果關係が復活して、彼は惱まされねばならなくなつた。彼には一人の兄と腹違ひの姉があつた。姉には比田といふ連れ合があつた。細君の父も不遇になつてゐた。すべてが頽廢の影であり、凋落の色彩であるうちに、血と肉と歷史とで結びつけられて彼は拮据に苦しめられた。みんな自我主義者であり、みんな偏窟者であり、さうしてどうすることも出來ない運命を背負つてゐた。最後に又島田に金を取られて事件が落着した時、お住はこれですつかり片づいたと言つて安心した。けれども健三は世の中に片づくなんてものはありやしないと言つて、その口調は吐き出すやうに苦々しかつた。

【批評】これは作者の長篇中で、最も傑出した物の一つであり、また唯一の自敍傳的色彩を

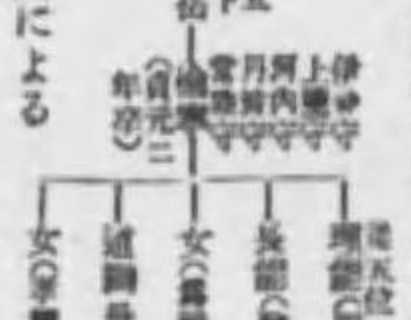
帯びた長篇である。今作者の經歷に於て、篇中の事件とパラレルを成す二三の點を擧げて見ると、作者には三人の兄があつたが、上の二人は比較的早く世を去り、末兄が今なほ生存してゐる。外に異母姉も晩年まで生きてゐた。作者は三歲の時、もと家の書生をしたことのある鹽原某の養子となり、八歲の時實家に歸り、二十二歲の時正式に復籍した。作者が英國留學から歸つたのは三十七歲の春であつた。その後間もなく元の養父が訪ねて來て窮乏を訴へ、作者の窮乏の中から金若干を與へられたことがあつた。作者が文壇に進出したのは明治三十八年（三十九歲）からで、「我輩は猫である」（別項）の完結したのは翌三十九年（四十歲）であつた。その間に、作者は多くの短篇を書いた。「道草」（別項）の主人公も島田に渡す金は原稿でかせいだ。「道草」は完成した作品中の最後のもので、作風は渾然たる寫實的の表現で、事件に波瀾は少いが、性格の描寫は甚だ圓熟したもので、そのすべてが運命の渦卷に捲き込まれてどうすることも出來ない破目に陷つて行くのが主題である。この考へ方は更に絶筆の「明暗」（別項）に於て一段の進境を示さうとしつつあつた。（野上）

道眞（みちざね） 漢學者【姓名】姓は菅原。字は三。小名は阿呼といつた。【生歿】承和十二年に生れ、延喜三年（一五六三）二月二十五日、筑前太宰府に薨じた。享年五十九（「菅家文草」卷一、月夜見梅花に「齊衡乙亥（一五一五）年十一」とあるのに據る）。【廟所】筑前の安樂寺に葬つた。今の太宰府神社がそれである。【家系】淸公の孫、是善の子である（淸公・是善參照）。【閲歷】十一歲の時、父是善が、島田忠臣をして道眞に作詩を試みさせたところ、眼前の景を「月耀如晴雪、梅花似照星、可憐金鏡轉、庭上玉房馨」と詠じたことは人口に膾炙されてゐる。貞觀十二年三月、二十六歲で文章生に擧げられ、やがて得業生となつた。次いで後、對策に及第して諸官を歷遊し、元慶初年に式部少輔兼文章博士となり、詔を奉じて「後漢書」を講じた。同七年（三十九歲）には加賀權守をも兼ねてゐた。その四月二十一日、渤海の客裴頲等を饗するために假に治部大輔の事を行はしめられ、島田忠臣と共に接伴の事を行つた（三代實錄、元慶七年四月二十一日の條）。裴頲は道眞の詩を稱揚して白樂天の詩の如しといつたといふ。仁和二年正月（四十二歲）讃岐守に任ぜられた。次いで同四年、たまたま宇多帝より太政大臣基經に下された詔書中の關白・阿衡の文字に關して紛議起り、基經はこれを空名として喜ばず、ために帝は詔書の改訂をすら遊ばされ、詔書の執筆者は罰せられようとした。道眞はこれに關して基經に上書して斷案を述べ、事なきを得た。道眞が宇多帝の御信任を得るに至つたのは實にこの事件によるのである。寛平三年（四十七歲）この年正月基經薨じ、道眞は二月藏人頭に任ぜられた。皇胤或は大臣家以外の者がこれに任ぜられることは前例のないことであつた。同五年四月敦仁親王が皇太子とならせられたが、この度の立太子は、帝と道眞とで決せられたといふ程の御信任を蒙つた。翌年八月、當時參議左大辨であつた道眞は遣唐大使に任ぜられたが、在唐の僧中瓘から唐國の衰微内亂を上申して來たので、翌月これを上奏し（菅家文草）、遣唐使の事は遂に止んだ。この年門人等が道眞の五十の賀を行つた。その時一老父が賀章と沙金とを机上に置いて去つたが、それは宇多帝の下し賜うた事と後で知られた（北野天神緣起）。寛平九年六月、時平は大納言兼左近衞大將に、道眞（五十三歲）は權大納言兼右近衞大將に任ぜられた。翌七月、帝は讓位され、醍醐帝が立たれた。時に大臣等或は薨じ、又は退いて缺員が多かつたので、時平と道眞に新帝を輔佐せしめられた。「寛平遺誡」（別項）はその時のものである。その中に道眞に關しては、その功績を列擧した後、「菅原朝臣は朕が忠臣に非ずして新君の功臣なり。人の功は忘るべからず。新君之を愼み給へ」とある。宇多帝の御信任、以て知るべきである。昌泰二年二月、時平は左大臣に、道眞（五十五歲）は右大臣に任ぜられた。上表して三度辭したが許されなかつた。翌三年正月三日帝は宇多法皇の朱雀院に行幸して密議し給ひ、「左右大臣倶に天下の政を執るは統一を缺きて不便なり」とて道眞を召し、「今より天下の政は汝一人にて奏決せよ（北野天神緣起）」と仰せられた。道眞は固辭して受けなかつたが、召されてただに退出する事は人の疑ひも如何とて「春生」（御眼中）の題を賜はりて詩を獻し、法皇及び天皇から各々御衣を賜はつて退出した。その後、大將を罷めようと上表したが許されなかつた。然るに朱雀院に於ける密議の內容が時平の耳に漏れた。これ等の機微を知つた文章博士三善淸行（別項）は、この年、書（本朝文粹卷七）を寄せて道眞の隱退を勸告したが、道眞は從はなかつた。その頃、大納言源光、中納言藤原定國等は道眞の下風に在るを不快とし、又藏人頭藤原菅根は事によつて道眞を愼んでゐた。時平はこれ等の人々と結んで道眞を讒奏し、政務に私がある事や、今上を廢して皇弟齊世親王を立てんと謀る由を密奏した。親王は廣相の女の腹に生れ、又道眞の婿でもあり、帝も十六歲の御若年なれば深い思慮もなく、延喜元年正月二十五日、道眞の官位を褫奪して太宰權帥に左遷せられた。權帥と稱しても全く名義のみで、實は流罪に處せられたのである。法皇は急ぎ淸涼殿に參り給うたが、藏人頭菅根は衞士に嚴しく守らしめ、自らもこの由を奏聞しなかつた。この時、道眞の子女二十三人中、男子四人は四ケ所に、長女は京に留め、少男少女は配所に伴ふことを許された。「慰少男女」（本朝文粹卷一）は、この時の心情を察するに餘りがある。（太宰府への途中の狀況は「大鏡」の時平傳に詳しく、又配所の生活は「菅家後集」に明かである）。【著作】菅家文草十二卷〇菅家後草一卷〇菅家萬葉集（新撰萬葉集）二卷〇菅家遺誡二卷〇類聚國史二百卷〇三代實錄四十卷（以上各別項）。なほ「須磨記」一卷は恰も「淸少納言松島日記」の類で、菅公の須磨紀行と稱せられるものであるが僞書である。また「長谷寺緣起」「大安寺緣起」等も道眞の作と稱せられる。詩は「扶桑集」や、「本朝文粹」にもある。和歌は「三代集」及び「新古今」「續後撰」「續古今」「玉葉」「新拾遺」「新續古今」等に散見される。【人物】英邁敢行の人らしいところがある。道眞が始めて讃岐に赴任した時、前の讃岐守藤原保則が窃に人に語つて、「新太守は當今の碩儒にして吾が測り知る所に非ず。但し其の心を見るに誠にこれ危殆の士なり」（三善淸行作の「藤原保則傳」による）と言つた。これは身を全うする人にあらざることを言ふに似てゐる。或は又藤原菅根が、道眞の推薦によつて官位の昇進をしながら、その恩を忘れて深く彼を恨んだのは、庚申の夜、道眞に頰を打たれたことに起因する。また三善淸行の勸告を退けたのも豪邁と言ふべく、その身の危殆を顧みない行爲である。これ等の點を綜合すれば、道眞は必ずしも圓滿寛厚の人物ではなかつたやうに思はれる。宇佐の奉幣使藤原淸貫が太宰府に寄つた時、道眞の擧動を見て、廢立の陰謀を自認した言語があつた由を、歸京後に淸貫が奏してゐる（扶桑略記卷二十三）。但し淸貫は時平の黨類であるから、この言は俄には信じ難い。要するに道眞は忠誠の外に顧みる所がなかつた積極的性格の人であつた。藤原氏の勢力は堅固にして既に拔く事は出來なかつた。道眞はこれを知悉してゐて、而も萬難を排して顧みない所以は、先帝の知遇に感じ、王權を恢復するにあつた。その身の安危は問ふ所でなかつたのである。



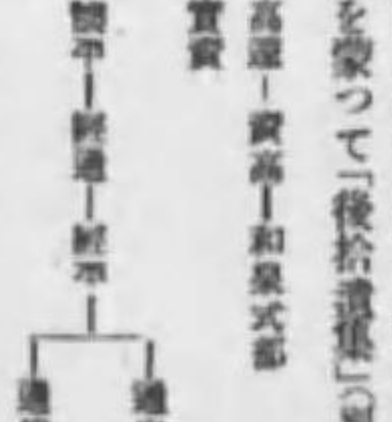
【詩人としての道眞】詩人的な情熱の人と言ふことは出來ない。ただその境遇と忠誠一貫の心情とを以て、事の成敗利鈍は豫め知るべきでないが、鞠躬盡瘁、身を君に捧げた點が、その詩を重からしめるものである。恰も「新葉集」の和歌が事實以上に評價せられる事に類してゐる。また能書を以て知られてゐる。王羲之の蘭亭を學んで遒勁これに過ぐと稱せられてゐるが、眞に道眞の書として信ずべきものは今明かでない。【參考】北野古緣起〇同假字緣起〇兩聖記〇菅神入宋授衣記（以上續群從第十九）〇天滿宮託宣記〇菅家御傳記〇長鎭記文〇梅城錄（以上續群從第二十）〇北野天神緣起（續群從第二十四）〇北野宮寺緣起〇北野本地〇天神講式〇天滿大自在天神寶殿記〇北野神君畫像贊（以上續群從五七）〇菅神初瀨影向記（續群從六五）〇北野神社由來記 田中尙舟 〇松崎天神鎭座考 弘正方〇大鏡（時平傳）〇續古事談（王道）〇撰集抄（卷三）〇扶桑略記〇三代實錄〇江談抄（卷四・五・六）〇古事談（神社・佛寺）（山岸）

道綱母（みちつなのはは） 歌人・物語作者【姓】藤原氏【閲歷】道綱母の傳記は、その著「蜻蛉日記」によるより外に確かな資料がない（蜻蛉日記參照）。父倫寧は、河內・伊勢・丹波・陸奧等の守に任ぜられた（大鏡・蜻蛉日記・長能集等）。長能のことは「作者部類」に、「伊勢守藤原倫寧男、寛弘六年、任伊賀守」と見え、有名な歌人であつた。その略歷は「中古歌仙傳」に見え、又「長能集」の卷末にも見える。


冬嗣―長良（從二位上）―高經（正四位下）―惟岳（從五位下）―倫寧（伊勢守　上總守　河內守　丹波守　常陸守）（貞元二年卒）
理能（肥前守）（從五位上）
長能（歌人）
女（爲雅室）
道綱母（歌人）
女（孝標室）

「長能集」の引く所によると、永觀二年は長能三十六歲の時であるらしいから、彼は天曆二三年の誕生であらう。それ故に道綱母の兄ではなくて弟である。この事については山岡俊明にも考證がある。長能は道綱母歿後も、なほ存命したのであるが、その事は「中古歌仙傳」に、寛弘六年伊賀守に任じた記事が見えてゐるから確かである。道綱母には姉も妹もあるが、その中の一人は、「更級日記」の作者孝標女（別項）の母にあたるらしい。道綱母は名も生年月も知る由はないが、兼家の通ひ初めた天曆八年を假りに二十歲とすれば、承平五六年の誕生であらう。天曆八年は兼家二十六歲の時であるから、道綱母に長ずること六七歲位であつたらしい。「蜻蛉日記」は、兼家との關係について記されたものであるが、兼家は正曆元年七月二日、年六十二を以て薨じた。この時道綱母は生きてゐたか、或は尼になつてゐたか知れない。歿年ははつきりと分らないが、「小右記」長德二年五月二日の條に、「新中納言道綱亡母周忌法事、送七僧、粥時又、依候大內不訪向之由、自內差數信宗送了」と見えてゐるから、その前年卽ち長德元年五月二日にみまかつたものではないかと思はれる。なほ彼女の事蹟は「類聚名物考」「百人一首一夕話」等には少し見えてゐるが、詳しいものではない。【著作】蜻蛉日記三卷（別項）。なほ勅撰集に入つてゐる歌を「作者部類」によつて抄出すれば、拾遺七、後拾遺十、詞花二、新古今二、新勅撰二、續後撰一、續古今一、玉葉七、續千載三、續後拾遺二、風雅一、新千載三。【人物】系圖には、「本朝第一美人三人內也」と見えてゐる。「大鏡」には「この君きはめたる和歌の上手におはしければ」とあり、「淸少納言枕草子」にも、「をのとのの母上こそは、普門寺といふ所に八講しけるをききて、またの日、小野殿に人々あつまりて、あそびし、文つくりけるに、たきぎこる事はきのふにつきにしをけふは斧の柄ここにくたさむとよみ給ひけんこそめでたけれ」と感心してゐる。又、彼女は、弟の長能と共に、寛和二年の內裏歌合に出席してゐることが、日記卷末の附錄にも、また「拾遺集」にも見えてゐる。その內裏歌合の歌「都人ねてまつらめや郭公いまぞ山邊に（なイ日記）なきていづ（すぐ日記）なる」の歌は、「日記」卷末にも見え、又「傅大納言母上集」にも見えてゐるが、この歌は古今の名歌として後世の範となつた。そのことは、淸輔が「郭公秀歌は五首也」として、貫之・公忠・兼盛・實方等の歌と共に推稱したところである（袋草紙）。道綱母はかく和歌の名手であつたが、作歌に際しては非常に苦心した。「奧義抄」下に、「道綱母は、くらき所にてよみならひたるとかや。いつも灯火をそむけて、目をとぢて案ぜられ侍りけるとなん」とある。道綱母は人と爲り溫良貞淑な婦人であつた。それだけに、兼家の氣まぐれな態度に對して不滿を抱いてゐる。「日記」を見れば、彼女が家庭生活の破綻に惱み、弱き者に同情し、自然の美を慕ひ、我が子の愛に生きて、常に純一を追求する正直な婦人であつたことが分る。【參考】蜻蛉日記解環 坂徵（池田）

通俊（みちとし） 歌人【姓】藤原【生歿】永承二年に生れ、康和元年（一七五九）八月薨ず。享年五十三。【閲歷】經信よりは三十一年の後輩で官位も低く、匡房よりは六年の後輩で官位はほぼ等しい。康平二年從五位下に敍せられ、永保四年參議、應德三年從三位、寛治二年正三位、同八年匡房と共に權中納言に任じ、治部卿を兼ね、從二位に敍せられた。承曆二年白河天皇の敕を蒙つて「後拾遺集」（別項）を撰し、應德三年奏上し、「後撰」「拾遺」にはなかつた序をも附した。當時經信・匡房は、聲望も力量も通俊に優つてゐたのに、後輩の通俊が敕撰集撰者の名譽を荷つたので、「後拾遺集」に對する非難が諸方に起つた。彼は頭腦明晰で、學問にも深



く、厚く白河天皇の御寵愛を蒙り、「後拾遺集」の如きも自ら私に撰した後に天皇の御思召を得たのであるともいはれる。經信の非難に對しては論爭もしてゐる如く、一般の非難に抗するため、貫之に倣つて「後拾遺集」の内三百六十首を拔いて「續新撰」を撰したといはれてゐる。承曆二年の内裏歌合には講師並に作者であり、寬治八年の高陽院七番歌合には作者である。その他歌人としての經歷の乏しいのは比較的短命であつた爲めであらう。【著作】後拾遺集序○續新撰（佚書）○勅撰集に入る歌は、後拾遺集五首、金葉三、詞花二、千載二、新古今二、以下凡そ二十七首。私撰集に入るものは後葉集三首、續詞花集五首である。【批評】その歌には現實味があり、意志の閃きが見え、著しい新傾向を示してゐる。「後拾遺集」にも同樣の傾向があつて、「三代集」とは異る色彩を呈し、和歌は「後拾遺集」から新しくなつたと、鎌倉時代の人々は考へてゐたのである。【參考】大日本史（卷二百二十）○公卿補任○尊卑分脈　（西下）

道敏 みちとし　國語學者【姓】赤井【號】一室【生歿】享保十年生れ、天明五年（二四四五）六月十日歿す。享年六十一。【墓所】京都市西大谷【閲歷】未詳。京都の人で書肆を營んでゐたやうである。武者小路家について和歌を學び、小澤蘆庵・伴蒿蹊（各別項）等と交つた。道敏について學んだ人に幻交庵主人と號する人がある。【著書】てには網引綱二卷二冊（別項）○蜘のすがき二卷二冊（文化十一年刊。自序は安永八年。「てには網引綱」の後をうけて、甲卷には手爾波の意味を說き、乙卷には「哉」「歟」「乎」「先」「我、是」「その、それ」等所謂虛字八十餘を說き、古歌から例證を上げてゐる）○同の秋草四卷三冊（文化十年刊。「てには網引綱」と「蜘のすがき」とを合刊したもの）。【業績】道敏の國語學に關する著書は「てには網引綱」と「蜘のすがき」の二部であり、而も後者は前者の補遺とも見るべきもので、主要な著述は「てには網引綱」一部であるが、道敏の國語學史上に於ける地位は特筆すべきものがある。第一に、道敏は歌道に於ける秘傳・傳授を排擊し、學術的研究を唱道してゐる。第二に道敏の手爾波研究は、（イ）手爾波と詞（一語で獨立した意味を有するもの）とを區別し、（ロ）手爾波の呼應を古歌に依つて研究してゐる。これをそれ以前の研究に比すれば、同日に談ずる事の出來ない進步である。又手爾波と云ふ語が手古止點から出た語であると說いてゐる事も注意すべき事である。【參考】平安名家墓所一覽○國語學書目解題○日本文法史　（龜田）

三千歲 みちとせ　「天衣紛上野初花」を見よ。

- 基經—忠平
  - 實賴
  - 師輔
    - 伊尹
    - 兼通
    - 兼家
      - 道隆—伊周
      - 道兼
      - 道長—賴通

道長 みちなが　歌人・詩人【姓】藤原【法號】行覺、後に行觀と言つた。【生歿】康保三年に生れ、萬壽四年（一六八七）十二月四日薨じた。享年六十二。【閲歷】天元三年、十五歲で從五位下に叙せられ、左近衞少將に任ぜられた。次いで永延二年（二十三歲）正月權中納言、正曆三年（二十七歲）四月、從二位に叙せられ、中宮大夫に任ぜられた。また賴通の生れた長德元年（三十歲）四月左近衞大將を兼ね、六月、右大臣に進み、翌年七月、左大臣になつた。この年伊周・隆家等が配流せられ、天下の權は全く道長に歸した。長保二年（三十五歲）その女彰子中宮となり、道長の權力は次第に增長し、帝もこれを快しと思はれなかつた。殊に三條帝の御卽位の頃、卽ち道長の四十六歲頃は、專橫最も甚だしく、帝に迫つて位を皇太子に讓らしめ申した。皇太子は立つて後一條帝とならせられた。帝の御母は彰子である。道長は攝政となつた。次いで寬仁元年（五十二歲）八月、皇太子（小一條院）を廢して、後一條帝の御弟を立てて皇太弟とした。この年三月道長は攝政を罷め、十二月に太政大臣に任ぜられた。又寬仁二年（五十三歲）、輦車で宮中に出入することを許されたが、二月太政大臣を罷めた。四月にその女威子が女御となり、十月に中宮となつた。「この世をば我が世とぞ思ふ」の歌は、この時の中宮冊立の饗宴に詠んだものである（小右記）。●蓋し道長はその女三人が、共に后位に昇り、四女嬉子は東宮妃（敦良親王、後に後朱雀帝）、五女寛子は小一條院の妃となつた。卽ち三后を女とし三帝を外孫としてゐる。加ふるに長子賴通は關白左大臣、三子敎通は內大臣、四子賴宗、五子能信は共に大納言で、一門の富貴榮華を極めた。「この世をば」は甚だ傲慢な歌ではあるが、當時の道長の僞らざる心中を述べたものであらう。寬仁三年（五十四歲）三月十七日から病んで二十七日に入道した。法號は行觀、後に行覺と稱した。京極邸の東に規模宏大なる法成寺を建立した。「榮華物語」によれば、當時攝政賴通は「公事は公事として先づこの御堂の事を先にすべし」と、諸司及び諸國に命を發した。因つて國司等は、地租・官物を怠納して只管御堂の役夫・材木・檜皮・瓦等を納入する事を競うたといふ。なほ當時の模樣は「榮華物語」に詳しい。萬壽四年（六十二歲）十月二十八日病み、その後次第に篤く、十一月二十五日には、主上親しく法成寺に行幸し給うた。翌月四日薨じ、七日の夜に葬送した。【著作】御堂關白集（丹鶴叢書所收。全部七十三首の中、道長の歌は八首に過ぎず、他は主として上東門院彰子の歌で、他の人々のも一部分交つてゐる）○御堂關白記（別項）。古典全集の「御堂關白記」の末には、諸書に散見する道長の歌五十六首を網羅してゐる。【人物・業績】剛膽な氣性であつたらしく、公任の顏を踏まうと豪語したり、五月闇の深更に紫宸殿の高御座の傍まで行つて南面の柱の下を削つて來たことなどは彼の性格を象徵した說話であらう。又飯室の尋禪僧正の伴僧の見た相は「虎子如渡深山峯」とて人相中第一の勝れた相を道長は持つてゐた。毘沙門の生きた手本を見るやうだと言つたのも彼の人相から來る感じである。或は悍馬を乘りこなす所、弓術の勝れた點、すべて平凡な貴公子ではなかつた。それは道長の豪放な書風にも現はれてゐる。剛毅果敢な反面には詩歌にも勝れてゐた。「大鏡」には「事に觸れて遊ばせる詩和歌など居易や赤人・人丸・躬恒・貫之といふとも、え思ひよらざりけむとこそおぼえ侍れ」と評した。やゝ過褒のやうでもあるが、道長には詩歌方面の修養も深かつた事を示すものである。卽ち歌人として、その歌は「後拾遺」以下「詞華」「千載」「新勅撰」「續後撰」より「新拾遺」「新後拾遺」等に至るまで採られてゐる。詩人としても、「本朝麗藻」にその詩が見え、又「江吏部集」には、「賀大江匡衡叙三官」の一首が載つてゐる。「大鏡」の傳へは過褒であるとしても、その作は決して凡庸なものではなかつた。

【參考】榮華物語○大鏡○御堂關白記○法成寺藥師堂供養記（類從四三二）○無量壽院供養記（類從四三二）○法成寺金堂供養記（類從四三二）○扶桑略記○百錬抄○日本紀略○愚管抄○古事談○續古事談○富家語談○古今著聞集　（山岸）

美地乃蠣殼 みちのかきがら　洒落本　一冊【作者】蓬萊山人歸橋【名稱】序に「此冊子を見て後は、ほれられもせずふられもせず、しやれて踏まるる美地の蠣殼」とある意味に依り、同時に路地に蠣殼の敷いてある深川の特徵を採つて、深川を描く寓を含めたのである。【刊行】安永八年【諸本】德川文藝類聚第五・洒落本代表作集（近代日本文學大系）所收。【題材】洒落本に始めて深川を描いた「辰巳之園」（別項）に刺戟されて綴つたのである。【梗概】兩國橋邊に、天馬と云ふ俳諧の宗匠が住んでゐた。その家に通人新命・祝鶴・琴孝の三人が偶然に落ち合つて、四人揃つて深川へ出かけることになる。船宿二見屋から舟に乘り、永代橋火の見下から堀川に入つて油堀に來り、船頭の案內で裏櫓の上田屋に上つた。女の素振が惡いと舌戰する琴孝、見事に振られる祝鶴、色氣より酒で泥醉する天馬、しんみりした藤の新命等さまざまで、やがて祝鶴に促され、皆々歸り支度して店を出る。【構想】洒落本初期の傾向を代表せる作品で、深川の情調よりむしろ客と遊女の五分の隙もない對話、通話に興味をもつた描寫である。而して通人ぶる客の冷遇される趣や、口では淡泊らしく、色男らしく見せかけて、いざとなると野暮極まる醜態を露出するをかしみなどが描いてある。この作は洒落本中、「辰巳之園」（別項）に繼いで、深川を描寫せる代表作と見られてゐる。　（山崎）

美地乃蠣殼（帝國圖書館藏）

陸奥袖給笏 みちのくをだまき　淨瑠璃段物集　一冊【編者】陸奥茂太夫【刊行】元文二年八月、山本九兵衞板【解說】茂太夫が筑後掾の二十五回忌追善の意味で刊行した寄せ本の段物集である。その序文に、「予みだりに此集を撰する事、いまだ必しも傍人の毀りなきにしもあらず然ども門人稽古のために便せんと乞ふ事頻りなれば止ことを得ずして新に曲節の祕密を加へて卷すでに成りぬ」とある。次に「淨瑠璃傳授祕事」と題して初段・二段目・三段目・四段目・五段目について語り方の心得を說いてゐるが、それは「竹本綱傳丸」（別項）に見えるそれと殆ど同樣である。次に陸奥茂太夫門弟として安治川九兵衞事佐太夫以下百九十四人の名を列ねてあるが、その國所は京攝のみならず、大和・河內・伊勢・武藏・備前・備中・備後・播磨・豐前・筑前・肥前・淡路・伊豫・加賀・長門・出雲・安藝等に及んでゐるが、多少宣傳的の意味があらうと思はれる。陸奥太夫は、「竹本綱傳丸」の筑後掾門弟の條に、「ざこばみちのく茂太夫（九兵衞）」として四人目に出てゐる。目錄を掲げる。

一、筑後掾廿五回忌追善	音曲傳西湖
一、梅園盜淨名色揚	下の卷
一、元祿曾我太平記	壁すきの段
一、源氏十二段	長生殿四季
一、同四段目	淨るり御前道行
一、せみ丸	あふさか山道行
一、百合若大臣野守鏡	宮島八景
一、百日曾我	新仙
一、金剛山合戰	歸鳳八景
一、大原問答	九品の淨土
一、義經北國落	懸想ぞみへ
一、國先師日記	鎌がまの段
一、三浦北條軍法論	七夕まつり
一、金平法門論	武藏月見
一、富士牧狩	時宗三部經
一、神武天皇	五天ぢく
一、曾我五人兄弟	かたみおくり
一、法隆寺開帳	あやひめ道行
一、自然居士	新のまへ道行
一、本海道虎石	大磯のざゝ道行
一、一心五戒魂	かほるひめ道行
一、主馬判官盛久	馬子うた
一、雁金文七五人男	中の卷
一、業平一代記	小野の小町道行
一、同	卒都婆小町
一、赤松軍功記	都の宮道行
一、富貴曾我	飛食まんざい
一、祝言	島臺
一、祝言	卷松

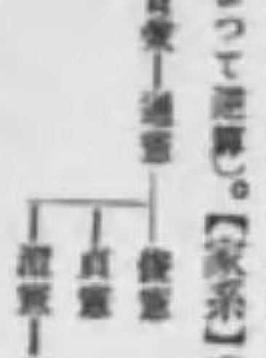
最初の音曲傳西湖四丁と最後の祝言一丁を除くの外は、すべて丸本の拔刷りの寄せ集めであつて、中には文句の中途で終つた不體裁のものもある。　（藤井）

陸奥話記 みちのくばなし　「陸奥話記（むつわき）」を見よ。

道廼佐喜草 みちのさきくさ　國學書　一卷【著者】本居春庭【成立】刊本には、文政二年治部卿藤原貞直の序がある。著者失明後の著であるから、恐らく本書も妹美濃子に口授して成つたものであらう。【諸本】國民道德叢書第一輯（有馬祐政・黑川眞道共編）所收。【內容】皇國の大道は正直を以て根本とするといふ立場から皇道と儒道とを比較し、そこに正・邪・淸・濁の相違あることを主張したものである。先づこれを文學の上に見るに、須佐之男命の「やくも立つ」の歌の如きは明かに戀歌であるが、我が國の風として、眞心を僞り飾めることなく、率直に詠み現はしてゐる。然るに支那の詩に於ては、上代以外には、婦人に擬して作つた閨怨の如きものはあつても、男の戀を歌つた詩は、「毛詩」を初め「三體詩」「唐詩選」等にも見當らぬ。實際には、たはれたことの甚だしい國でありながら、男には戀がないかのやうに見えるのは僞りであつて、人情の自然に反してゐる。我が國の歌はこれと異なり、名利のためでも諷刺のためでもなく、ただ心からの感動の表現であるから、一見はかない戲れのやうに見えても、そこに自らまことが現はれ、上下和ぎ合ふ道となり、修身・治國の根本となるものであるとしてゐる。また國體・國俗等の上から考へても、堯が舜に位を讓つたことを後の國人は美事として推稱するが、これはさういふ人々に野心があるからで、

結局帝位の輕いことを示すに過ぎず、堯・舜等は、位を禪り民を惠むといふ美名の下に、實は後世放伐の端を開き、禍根を萬代に遺したものと言はねばならぬ。のみならず、舜・禹等の受禪も、實際に於ては、簒奪の疑ひがあり得るものである。然るに我が國は、大御神の御生國であり、永遠にその御子孫が神勅によつて治め給ふ國であつて、民は大御神の御心を心とし、上下の分明かに、而もよく和合して泰平を樂しんでゐるとして、種々の方面から皇國の道の優れて正しい所以を論證しようとしてゐる。【批評】大體に於て宣長の古道說の祖述であるが、文學を中心として古道を說く所に春庭らしい特色がある。（西尾）

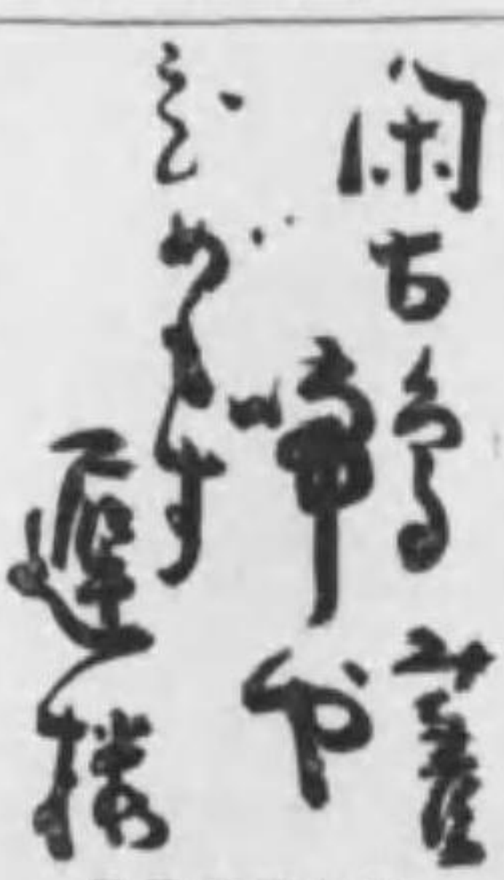
通憲（みちのり）　漢學者【姓】藤原、もと高階經敏の養子となつたので、高階氏を稱したが、後本姓に復したらしい。【法號】圓空、後に信西と改めた。【生歿】嘉承元年に生れ、平治元年（一一五九）十二月十三日歿した。享年五十四（「本朝世紀」に天養元年の通憲出家の條に三十九歲とあるによつて逆算）。【家系】季綱（別項）の孫である。



【閲歷】鳥羽・崇德・近衞の三朝に歷仕して正五位下に至り、日向守に任ぜられた。「平治物語」に據れば、自ら劍難の相を知り、又相人もその事を告げ、僧となれば免れると敎へた。通憲はこの言を信じて僧とならうと決心したが、日向入道と稱せられるのを殘念に思ひ、白河法皇に少納言たる事を頻りに願つたのであるが、前中納言藤原顯頼が、「通憲は天下の才子であるから、その要請を輕々しく許すべきではない」と法皇に奏したので、遂に許されなかつた。なほ請うて已まないので、近衞帝の天養元年に少納言に任ぜられた。その年七月二十二日、三十九歲で出家した。「台記」には「余深惜之」と記し、「本朝世紀」には、少納言を拜して後に高階を改めて本姓に復し、氏神の祟があつて非業の最後を遂げたものの如く註してゐる。後白河帝の保元元年（五十一歲）七月の亂後、新院の味方した源爲義や平忠正等十八人が出でて降を乞うたが、信西の論が强硬で、帝も遂に悉く斬罪に處せられた（保元物語卷下）。又當時大內裏が破損して朝儀の廢せられたものもあつたが、信西の計畫によつて一兩年の間に舊に復した事もある。二條帝の代には特に權を擅にし、藤原信頼が近衞大將とならうとした事を阻み、後白河上皇をして遂にそれを止めしめた。上皇は喜び給はなかつたので、信西は唐の安祿山の謀叛の事實三卷を圖に描いて獻上した。即ち信頼を安祿山に比したのである。なほ初め源義朝は、その女を是憲に嫁せしめようと請うたが、父信西はそれを辭し、間もなく平淸盛の女を成範の妻とした。その邊に信西の才餘つて德の足らない點が察知せられる。平治元年の亂の前に、天變を見て逃れ、石堂山に穴を掘つて埋まり、竹筒を以て呼吸してゐたが發見せられた。但し殆ど窒息しかけてゐたが、なほ氣息が絕えなかつたので斬首せられた。「愚管抄」には自ら胸を刺して死んだと記してゐるが、恐らく眞に近いものであらう。【著作】本朝世紀三十卷（國史大系第八卷所收）。○法曹類林三百六十卷（仁和寺書目には二百三十卷である。續從第四六四、續群從二四六に載つてゐるものだけが傳はつてゐる。これは法曹の勘文に適應の今案を加へたものである）○信西入道藏書目（別項）○大悲山寺緣起一卷（大日本佛敎全書所收）○筆海要津（仁和寺の海惠僧都が祖父信西の遺作を集めた願文集。續々類從一五所收）○信西古樂圖（古樂の圖を集めたもので、日本古典全集所收）。この外「日本紀註」二卷、「法曹勘狀」等は今日傳はらない。又「本朝無題詩」には信西の詩十八首を載せてゐる。

【人物】出家するに日向入道の名を忌んで、少納言を望んだり、その妻朝子が、後白河帝の乳母である事によつて特に信任せられたり、或は爲義・忠正を斬罪に處分せしめる點等、どこか性格に缺陷のあることを思はしめ、同時に拔け目のない人間のやうに感ぜしめられる。嘗て出家しようとした時、賴長に「高才絕代なれども世に知る者なし」と褒められ、「吾れ運命の爲に一の顯職にも就かず。故に今遁世しようとする。才ある者が却つて不幸であれば學問も亦廢頽するであらう。願くば顧みよ」と泣いて訴へた事もある。さればこそ「台記」には信西の出家に對して「余深惜之」と記したのであらうが、その賴長を安祿山に比した如きは、德ある人の行爲とは見られない。併し甚だ努力家で、宋の僧淡海のために通譯をして人々を驚かせた事は有名であつた。要するに博覽宏才、多能で典故を諳んじ、歌舞をもよくした人であつた。【參考】愚管抄○保元物語○平治物語○本朝世紀○台記○古事談○續古事談（山岸）

道彥（みちひこ）　俳人【姓名】鈴木由之【別號】金令舍・十時庵・秋香庵【生歿】寶曆七年生れ、文政二年七月六日歿す。享年六十三。【法名】智秀道彥居士【墓所】江戶淺草山之宿敎善院に葬つたが、明治の末頃墓地整理の際、巢鴨庚申塚へ移した。【俳系】加舍白雄門【閲歷】道彥は仙臺の人で、江戶に住んで醫を業としてゐたが、いつ仙臺から出たか、誰に醫術を學んだか、いつ頃から白雄に就いたかの諸點は凡て判明しない。白雄八弟子（別項）の一人として當時の俳壇に勢圈を張つた。同門の長翠がその師の春秋庵を嗣いだが、間もなくこれを葛三に讓り、江戶を去つて武州本庄に小菴を結んだ經緯に就いては、暗に道彥の策動によるとする說がある。道彥は江戶の俳人中では最も成美と巢兆とに親しみ、地方人としては名古屋の士朗、白石の乙二などと深く交つてゐた。享和元年士朗が江戶に下つた時、所謂屣を倒にして迎へるといふ歡待をした事は「鶴芝」によつて明かである。同三年乙二が來た時も亦厚遇して歸した。その「無孔笛」附錄に於ける諸俳人の短評中、師白雄を評して「白雄房は國を成すに兵革をそなへて、かへつて人を和するの玄德なし」と記したので、非難されたのであつたが、これを長翠の春秋庵嗣號問題に併せ考へる時は、師弟間に何等かの事故のあつた暗示を受けるのである。ともあれ道彥はその縱橫の才を揮つて俳壇の一勢力となり、寬政三大家（別項）の一に算へられるに至つたのである。その妻も亦俳諧を善くし、道彥歿後剃髮して應々尼と稱し、金令舍の別號

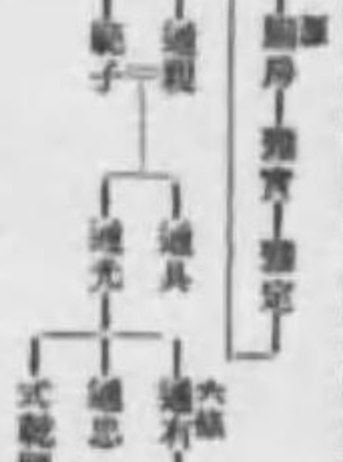


鈴木道彥筆蹟

を用ひて點者生活に入つたのであるが、その夫に後るゝこと二十四年、即ち天保十三年三月二十七日に歿した。享年は詳かでない。【編著】そゞろごと○くろねぎ○鶴芝○馬の上（道彥七部集參照）○長竹男（享和二年刊）○論よつ手（別項）○蔦本集二册（道彥自選句集、文化年中刊）○續蔦本集二册　門人冰壺編（天保九年刊、道彥句集續篇）（紫川）

道彥七部集（みちひこしちぶしふ）　俳諧書　小本二册【編者】未詳【刊行】未詳【解說】道彥（別項）の編著又は關係ある小著七種を蒐輯刊行したもので、恐らくは道彥歿後に於て、その盛名を利用せんとする書肆の仕事であらうことは、その書目を强ひて七の數に合はさんとして、他人の編著まで編入したのによつてもうなづかるゝのである。その書目は次の七種である。○蔦眼集（別項）○そゞろごと（寬政六年刊、道彥が巢兆・宗讓と共に武藏野旅行をした紀行である）○論よつ手（別項）○鶴芝（別項）○馬の上（享和二年刊、足利學校一見の紀行である）○くろねぎ（寬政九年長翠のために道彥・双烏・巢兆等が編したもので、淺句發句の集である。道彥の記した小みの庵記が收錄されてゐる。本七部集中のものは、省略や編次の錯誤がある）○畑芹附錄（乙二が作句法に就いて、「翻向のぬしの句」「古き翻向ながら五七五の內にて、言葉のぬしになりて我物になりたる句」などの類を分ち、古人の作句を引例して解案的解說を下したもので、道彥の讃美の一文がその末に附してある。本七部集中のものは、その一文を削り去つて、その代りに「右乙二道彥編」と記してある。これは甚だ人を迷はすもので、これだけを見ると、この畑芹附錄の作句法は、乙二と道彥とが談論討議の末に成つたものと解される。又これを道彥七部集に編入することも適當でない）。（紫川）

通光（みちみつ）　歌人【姓】源氏【通稱】後久我太政大臣（勅撰集も「續後撰和歌集」以下の作者名は盡くこれによつてゐる）。【生歿】文治三年に生れ、寶治二年（一二四八）正月十八日歿す。享年六十二。【學統】母方の祖父範兼（別項）は、「千載集」以下の名ある勅撰集歌人で、「和歌童蒙抄」「後六々撰」の編者としても知られ、また學者である。父系も代々の文人で、久我太政大臣の雅實、中院右大臣の雅定、久我內大臣の雅通、土御門內大臣の通親がそれ〴〵「金葉集」乃至「千載集」以下の歌人で、歌舞音曲の道にも長けてゐた。通光の兄通具は、特に「新古今集」撰者の一人として令名を遺してゐる。



【閲歷】名家の出のため、榮達は三男ながら著しいものがあつた。二歲の正月、早くも叙爵（式子內親王御給）、建久元年七月（四歲）任加賀守、同三年正月從五位上、同五年正月任侍從、同十年正月（十三歲）正五位下、同年九月任右少將、その後、官は兼丹波介（正治二年）兼春宮權亮（同年）、權中將（同年）、右中將（建仁二年）、兼尾張權守（同年）、左中將（元久元年）、權中納言（同年）、左衞門督（元久二年）、中納言（同年）、權大納言（承元元年）と云ふやうに順調に昇進し、位もこれに伴ひ、十九歲にして既に正二位であつた。但しその十四歲と十六歲の時に、二年を隔てて母と父を次々に喪つた。而も時代は歌壇高潮の盛期に際し、かの「千五百番歌合」の成つたのがその十五歲の年、「新古今集」編纂の大略成つたのが、十七歲の四月に相當してゐる。

あけぬとて野べより山に入る鹿の跡ふきおくる萩の下風（秋上）

入日さす麓の尾花打ちなびきたが秋風に鶉なくらむ

眺めわびそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮の空

これ等「新古今集」に選入された彼の歌調に溢れる一味哀切の情は、啻に新古今調の一色彩としての哀婉美が影響したものとのみは考へられない。なほ承元二年皇后宮大夫を兼ねたが、翌年それを辭退した（時に二十三歲）。三十一歲の年右大將を兼ね、更に右馬寮御監に昇り、翌年には大納言、翌々年には內大臣にまで昇進したが、承久三年七月（三十五歲）、內大臣を辭してより、六十歲、從一位太政大臣の極官を與へられるまで二十五ケ年間は何等著しい事項も生じてゐない。相國の地位にあること一年有餘、勞病で薨去した。「八幡山さかゆく嶺はこえはてて君をぞ祈る身の嬉しさに」と云ふ作が、當年の歌合の中に遺されてゐるのを見ると（「玉葉集」神祇）、この一首が絕筆となつたものかも知れない。世人は曾祖父雅實が久我太政大臣と稱されたに對し、後久我太政大臣と通稱した。【著作】（和歌）勅撰集に入つた歌は、新古今集十四首、新勅撰集四首、續後撰集四首、續古今集二首、續拾遺集四首、新後撰集四首、玉葉集一首、續千載集三首、續後拾遺集一首、風雅集一首、新千載集一首、新拾遺集四首、新後拾遺集一首、新續古今集六首。（著書）歌仙落書一卷（「通光風體抄」とも。續從第二九三卷及び輪池叢書二十九卷所收。俊成卿亭で書かれたもので（序詞）、「古今集」序文の六歌仙の歌風を諷諭によつて說明した手法を學び、時代の特色ある歌人二十人を選び、品評した上、その代表作を揭げたものである。細密ではないが特色を簡潔に把握し得てゐる）○續歌仙落書（續從第二九三所收。東山の一隱者が住吉神社に詣で、宿の主に送られた書であると云ふやうな序詞で出來てゐるが、全く前書の續篇で、通光が當代の歌人二十五人計一百餘首の例歌をあげて、同筆法で批評を下したものである）。【歌風】早熟の歌人ではあつたが、その作風は特色に乏しい。大體叙景歌に於て優れ、句格の引きしまつてゐる點に妙味がある。

淡路島しるしの煙見せわびて猶をいさむる事の舟びと（新勅撰集）

立ちこめてそことも知らぬ山本の霧の上よりあくるしの・め（續後撰集）

霰ふる音ぞ淋しき御狩する交野のみの・ならの葉がしは（新後撰集）

霞・霧・霰等の素材を、いかにも新古今調的ではあるが、ともかく上乘に生かし得てゐる作である。「歌仙落書」の主人公にも、歌道に對する執念さを語らしてゐるが、それはその儘に通光の主觀であつたのであらう。但し殊更の歌才に惠まれなかつた彼は、俊成・定家・家隆と云ふ如き天才的歌人の中に於て、輪廓が甚だ纖弱としてゐる。

【參考】公卿補任○尊卑分脈（齋藤（淸））

通村（みちむら）　歌人【姓名】姓は中院。本姓源氏。幼名通貫【生歿】天正十六年京師に生れ、承應二年（一六五三）二月二十九日歿す。享年六十六（天正十五年生說據をとれば六十七歲）。【諡號】後十輪院【家系】右大臣師房の六世源通親の五男通方を中院家の祖とする。大臣家の一。【學統】堂上歌學の家で、父通勝は智仁親王・三條西實條・烏丸光廣等と共に、細川幽齋（別項）に就いて歌道を修めた人。隨つて

通村筆蹟

通村も、後水尾院その他三條西家や烏丸家の人々と歌道を互に錬磨するところ多かつた。その孫通茂の如きは、父通純の指導を受けると共に、後水尾院の御指導をもうけてゐる。

【閲歴】慶長五年、十三歳にして從五位下侍從となり、累進して元和六年（三十三歳）には從二位權中納言の榮職につき、寛永元年には武家傳奏となつた。特に時の後水尾天皇の殊遇を蒙り、皇室の籓屛となり、勅命を受けて江戸に下つたこと、元和八年・寛永四年等幾度かに及んでゐると云ふやうに、公武の間を取持つた。次いで同六年權大納言になつたが、後水尾天皇は徳川和子の出なる皇女に對する武家の傴遇甚しきを怒り給ひ、隠約の間に御讓位があつたのもその年のことである。將軍家光は、この擧に通村の與かることを探知し、翌年奏して武家傳奏を免じたのみならず、程なく江戸に下して南光坊の中に幽居せしめてしまつた。後水尾院は御製を賜ひ以て憂悶を慰め給ふところもあつたが、南光坊の僧正天海（慈眼大師）の哀訴により、家光の許可を受けて寛永十二年初めて歸洛することを得た。幽居中、通村の詠んだ「行方に身をばさそはで夜な夜なの袖の露とふ武藏野の月」と云ふ歌が、將軍の心を動かしたと云ふ逸話が喧傳されてゐる。その後、正保四年に至り一時内大臣に任ぜられたこともあつたが、三四ヶ月で辭官した。通村は元來文事に長じ、その書法は世尊寺流を傳へ、書も素人の域を超えてゐた。幽齋の系統を傳へてゐるやうに、古文學に通じ、早く元和八年に、女院に「源氏物語」の講義をしてゐる。承應二年、念病で薨去した。「殘るとてたのむ日數も有明の影のうちなる年のくれかな」と云ふ歌が辭世の作になつた由、家集に記されてゐる。

【著作】後十輪院内大臣詠草一卷（寫。寛文六年門人の觀海居士以繁が編錄したもの。内閣文庫本には、表紙裏に、春部二百十五首、夏部百十一首、秋部百九十二首、冬部九十三首、戀部百八十二首、雜部二百三十六首、計千二十九首なることが註され、三條西實條が合點したものであることが書かれてゐる。本書には附錄として寛永詠百首和歌がある。續々群書類從卷十四所收）○後十輪院通村家集○後十輪院内府集（前者は寫本三卷、圖書寮に存するけれど、後者は寫本六卷、内閣文庫に存し、内容同一の書物である。部立も四季・戀・雜の六部である。詠出の年月などの註記といひ、體裁殆ど詠草に類してゐるが、歌數は全然別である）○後十輪院内府五十番（夏日同詠五十番和歌で寫本一卷、圖書寮藏）。

【作風】實條が合點してゐる四十歳以後の佳作を例示して見る。

行水もこほりにたえし聲こめてふるき道しる春風ぞふく（春水解氷）

もえ出でて霞ひみどりの玉津島入江にさむき靄の雲もなし（江上霞）

春の夜のみじかき軒端明けそめて梅が香匂ふ園の朝風（曉梅）

通村の捉へ方の鮮かさが、如何にも時流の間に一頭地を拔いてゐる。江戸幽居中、家光から古今傳授を強ひられながら、斷然辭退したと云ふ逸話も名高いが、後鳥羽院四百年遠忌に詠出した「思ひやる波路かなしき隠岐の海の昔も遠くかすむ月影」の作にも、彼獨自の氣概が見えてゐる。【史的地位】影響の著しいものは見當らぬ。孫の通茂の如きも二條派的歌人として名高いが、保守的であると共に、性格の嚴肅さが、一層想の自由を萎縮せしめてゐるやうである。

【參考】野史○松屋筆記○窓のすさみ追加○常山紀談　〔春藤〈濟〉〕

通盛 みちもり　「平家物語の諸曲」を見よ。

道行 みちゆき　【名義】「萬葉集」に、「わかければ道行しらじ」の歌があり、「道行」を冠した熟語も「萬葉集」以下の歌文に見えて來る。名稱としては伎樂の「道行」に出發して演出上に用ひられ、續いて國文學に於ける特殊な展開を遂げた表現形式を然か呼ぶに至つた。表現の内容を主として考へる場合は「道行」、表現の形式を主として呼ぶ場合は「道行文」と云ふ。

【沿革】（前期）「古事記」「日本書紀」の歌謠より「萬葉集」に至るもの、主人公或は自己の經過する土地を謠ひ續けて道の進行を表はし、それが一つの漸層的な效果を生じ、強調して終る表現の中心をそれだけ強く印象づける歌詞で、土地の名には枕詞の外、或る形容語句が添へられたりする。例

石の上　布留を過ぎて　薦枕　高橋過ぎ　物多に　大宅過ぎ　春日の　春日を過ぎ　妻籠る　小佐保を過ぎ　玉笥には　飯さへ盛り　玉盌に　水さへ盛り　泣き沾ち行くも　影媛あはれ（日本書紀、武烈）

【本期】道行の源流は、今樣歌謠に求むべきであるが、心理的には、平安時代中期以後、急速に交通が發展した結果として地理的な興味が求められた事に原因すると考へられる。道行は、「梁塵秘抄」等の今樣（別項）歌謠に於て、今樣歌謠に京郊する物盡し（別項）として出發し、參詣巡禮熱によつて裏附けられ、單なる或る種類の地名の列擧になる物盡しから展開して「何れか……へ參る道」「……へ參る道」と云ふ句を冠し、經過する地名を列擧する形で成立してゐる。例

何れか清水へ參る道、京極くだりに五條まで、石橋よ、東の橋詰四つ棟六波羅堂、愛宕寺大佛深井とか、それを打過ぎて八坂寺、一段上りて見下せば、主典大夫が仁王堂、塔の下天降り末社、南を打見れば、手水棚手水とか、お前に參りて恭敬禮拜して見下せば、此の瀧は、樣かる瀧の興がる瀧の水。（梁塵秘抄、四句神歌・靈驗所歌）

かく時間的な進行を多少とも認められる所に道行の成立がある譯で、鎌倉時代の宴曲（別項）がこの道行を物盡し參詣物等と共に今樣歌謠から攝取してゐる。宴曲はその形式が長大となつたので、道行の展開は「海道」上・中・下三篇（宴曲集）の獨立となり、「熊野參詣」（宴曲抄）などの成立となる。「海道」は一面に於て紀行に見られる當時の海道下り（後出）の潮流を追つてをり、道行としては地名を追ひつつ、不自然ながら辿り行く道の光景や旅情などを織り込み、また接續にも懸詞などの技巧が見られる。序に續く一部を示せば、

……顧來し都を隔て、逢坂越えて打出の、濱より湖を見渡せば、霞ならぬに海に似てる、石山詣での曙まで、其面影の心地して、山田にかゝる網の流、矢橋を急ぐ渡守、長良の山を外に見て、粟津の原を後にし、勢多の長橋野路の末も、時雨にいたく守山の、鏡の露ちる篠原の、小竹分くる袖もしをれつゝ、日も夕暮にや成りぬらむ。……（海道、上）

道行文の發達は鎌倉時代に入つてからで、主流は東海道を下る海道下りとして表はされ、

海道下りの好例は、紀行文學に於ける數例の作品ともなつてゐる。「平家物語」卷第十「海道下」は海道下りの道行である。宴曲「海道」迄は特定の個人を定立しないが、これは物語として主人公が存在し、その主人公の心情を訴へようがための叙述である。悲哀に包まれた主人公の旅によつて色附けられる情緒を、直接の抒情とする表現をとらないで過ぎる土地土地の光景、懷古に包んで韻調を整へた辭句として醞醸させることにより、却つてその感傷的な氣分を高めようとする狙ひどころを持つ。此處では七五調的な律調となつてゐるけれども、「哀也」の終止の如き自然な地の文としての姿がある。この發達はやがて語り物としての特殊な部分として獨立する契機を既にその胎内に包藏してゐる。なほこの道行の成立には「保元物語」「平治物語」（各別項）よりの影響が考へられ、「源平盛衰記」「平家物語」（各別項）諸本、宴曲間の關係が考へられる。平曲（別項）に出發する道行が定形に到達したのは、「太平記」の時期に於てで、「太平記」に於ては「俊基朝臣再關東下向事」がやはり海道下りになつてゐる。その序に續く一部を擧げれば、

……憂をば留ぬ相阪の、關の清水に袖濡て、末は山路を打出の濱、沖を遥に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行、身を浮舟の浮沈、駒も轟と踏鳴す、勢多の長橋打渡り、行交人に近江路や、世をうねの野に鳴鶴も、子を思かと哀也。時雨もいたく森山の、木下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分る道を過行ば、鏡の山は有とても、涙に曇て見え分ず。……

これは「平家物語」の「海道下」に範を仰ぎ、宴曲の「海道」の道行法を學び、この二系列を綜合し、名數の地名が叙景を伴ひ、古歌利用、懸詞等の修辭を用ひて前後に言ひ懸けられて特殊な文體をなし、且つ全體としての道行が示されて居り、その間々に道行の主人公の哀愁の心を語る言葉・叙述、或は懷古・挿話が織り込まれてゐる。かくして感傷の美化を目指す道行文の持つべき形式と要素とを併せてゐる典型的なものとなつてゐる。これ等の道行が後出の多數の合戰軍記物語などによつて摸倣され、これが「太平記」より多くの受容を示す瀧澤馬琴の讀本にまで影響してゐる。

次に劇曲に於ける登場の道行は、伎樂（別項）の道行音聲、道行拍子、舞樂の序に奏せられる道行に出發し、延年（別項）に於て見出される。これが田樂及び猿樂（各別項）の能に攝取され、完成された能樂（別項）に於ては、「道行」（「道行」を缺く時にも同樣の内容を有する歌の部分が存在する）は序段の中心を成し、ワキが目的地に行く經過を表はすことによつて、觀衆をシテ登場の雰圍氣へ導入するために用ひられる。

近江路や、勢田の長橋うち渡り、猶行く末に鏡山、老曾の森をうち過ぎて、末に伊吹の山風の、不破の關路を過ぎ行き、靑墓の宿に着きにけり（朝長）。

右に述べた先行の道行文とその表現を等しくし、道行の内容經過が客觀化して謠はれ、演出上の形式を發展確立してゐるが、人物と道行との關係から考へれば、從屬的な地位に立たせられてゐる。これに對して道行を有する狂言では、同樣に序ではあるが既に事件の筋の進行過程にあり、更に道行の白は道行の所作に隨伴した會話や獨白乃至道行所作中に心の中に考慮する道行外の事柄の發表を内容としてゐる。なほ同時代の幸若舞（別項）の詞章の上に道行が有力な地位を占め、その小舞小謠中にも指摘し得る。幸若舞の詞章のやゝ破調的な所や說明語の挿入は見られるが、物語られる人物の道行として所謂道行調の行文をなす事は明かである。曲舞（別項）には、「東國下」「西國下」の道行が重要な曲をなし、前者は主馬判官盛久の東國下り、後者は平家の西國下りで、律調内容共に宴曲風であるが、叙景や旅情に就いての抒情は、七五調的で寧ろ他の道行とその揆を一にする。文學諸形式に通じて見られた海道下りの好尙が、放下の謠ひ物に「面白の海道下りや」（「海道下り」參照）を生み、この小歌（別項）が各方面に用ひられた。

浄瑠璃（別項）の詞章は、その初めは叙事風のもので草子物語と本質的相異がなかつたと思はれ、道行も從來と異なる所がなかつた。然るに古浄瑠璃（別項）の時代に於て、既に道行の部分が音樂的效果を狙ふ部分の一となるに至るが、地點の移行を叙景と絡つて表現しようとする道行に對して、人形の動作に合せ主人公の傾倒する心情を季節的な情景に適應して物語らうとする轉向せる態度のものを見出し得る。後者に於ては背景及び推移が從的な立場に置き換へられてゐる。この二樣の傾向を或は綜合交錯し、或はその一により他の表現要素を取入れ、自由なる驅使を示し、道行の一形態を完成したものは近松門左衞門であつた。大體の傾向から云へば、時代物に於ては從來の道行の型を多く繼承し、世話物の心中道行等に於ては多く第二の型に出づるものと考へられる。物盡し（別項）を道ふ形式の取入れられたものもある。彼によつて複雜化され、聞かせ場とされてゐる道行が、全曲と調和して存在の必然性を有する場合は、世話物の或る種の道行・心中道行の如きであらう。浄瑠璃の世界に世話物を成立せしめた近松は、從來の道行を基として、世話物の精神に立つより高度の道行をも確立した。道行文の頂點は正にこの邊に求めらるべきであらう。

此世の名殘夜も名殘、死に行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ、あれ數ふれば曉の、七ツの時が六ツ鳴りて、殘る一ツが今生の、鐘の響きの聞納め、寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見上れば、雲心なき水の音、北斗は冴えて影映る、星の妹背の天の川、梅田の橋を鵲の、橋と契りて何時までも、我と和女は夫婦星、必ず添ふと縋寄り、二人が中に降る涙、河の水嵩も增るべし、……神や佛にかけ置きし、現世の願を今此處で、未來へ回向し後の世も、猶しも一ツ蓮ぞやと、爪繰る數珠の百八に、涙の玉の數添ひて、盡せぬ哀れ盡る道、心も空も影暗く、風しん／＼たる曾根崎の、森にぞ辿り着きにける。……（曾根崎心中）

これが三絃の伴奏につれて語り出され、勾欄の上の人形の道行の所作ともつれて、この詞章・音樂・舞踊によつて醸し出される夢幻世界に於ける訴へ、それが悲戀心中道行の狙ひ所であつた。歌舞伎の世界にこれを移入し、この男女の駈落心中などの哀艷の場面を特に浄瑠璃を伴つて半舞踊物とするのが「道行所作」である。近世三味線歌謠が、發展して行く道行物を取入れ、浄瑠璃うた物が遊里に歡迎され歌舞伎に參加すると、道行に重要な地位を與へた。これに一中・豐後・常磐津・清元・新内（各別項）等が活躍し、長短多數の道行の詞章が或は獨立物として或は獨立しない物として次から次へと作られて行つたが、爛熟した道行文は既に成長展開を止めたのである。

【參考】日本歌謠史高野辰之○道行文の發達に就て中島悅次（國文教育大正一五ノ八）○古歌謠

の本質（藤田徳太郎（國語と國文學昭和二ノ四））〇閑吟集歌謠序説（志田延義（國語と國文學昭和六ノ一〇））〇道行の展開（志田延義（月刊日本文學昭和七ノ八・一〇））〇道行文雜考（佐々木八郎（國漢昭和七ノ八・一二））〇系統的國文學史解説（鬼澤綱次郎）〇近古文學と時代精神（高木市之助（岩波講座日本文學））　（志田（延））

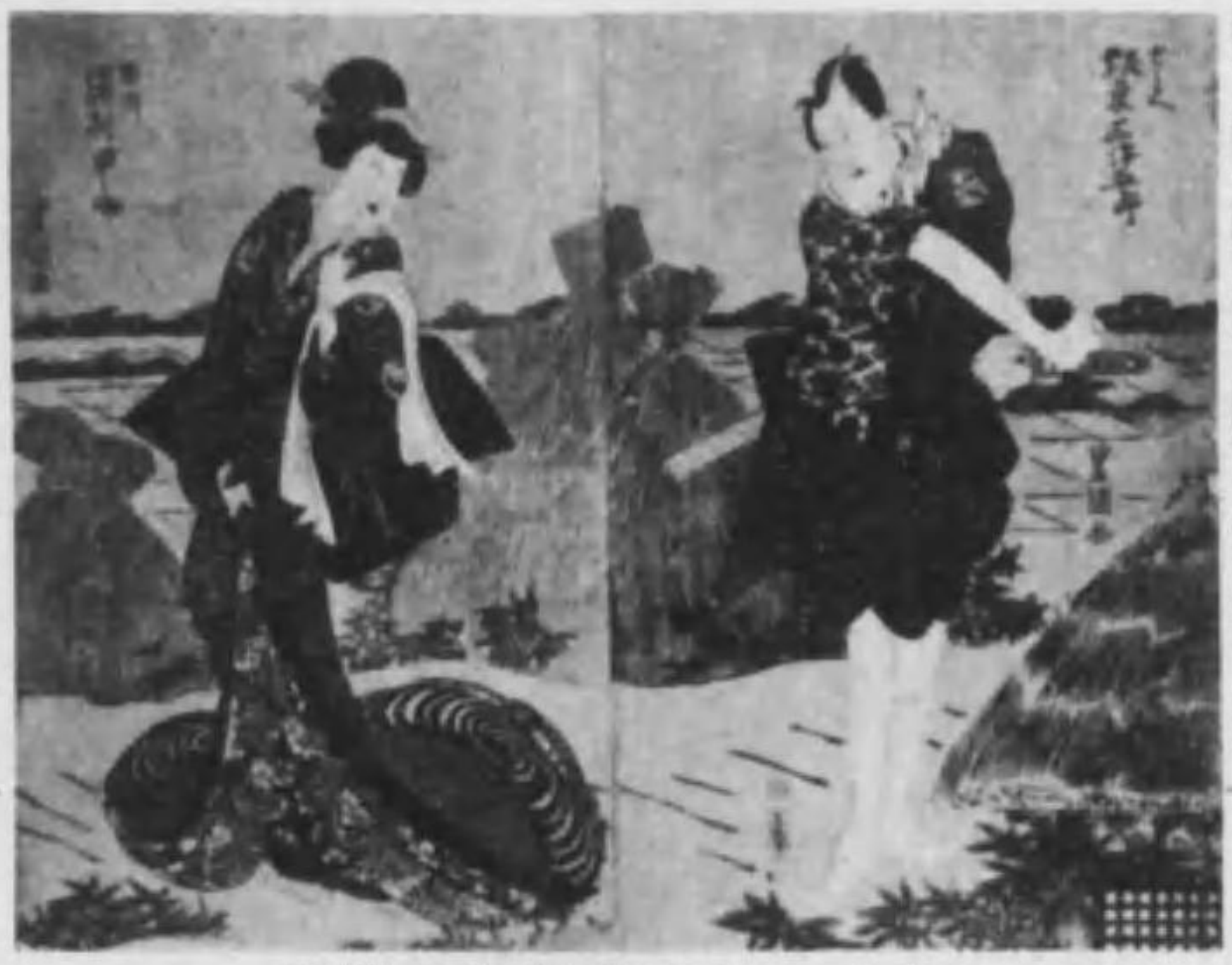
道行揃（みちゆきぞろへ）　淨瑠璃道行集　一冊　【刊行】延寶六年三月。卷末に、「延寶六歳午三月吉日　正本屋五兵衞」とある。【解説】細字綸入の宇治加賀掾淨瑠璃の道行集で、その目次は左の如くである。

【第一】ゆやきよ水詣で【第二】三社の託宣てる日のまへ道行【第三】大原御幸みちゆき【第四】殿上のうはなりうち道行【第五】西行物語道ゆき【第六】さらのまきみちゆき【第七】源氏供養音樂の卷【第八】御法樂のまひ【第九】うぶすなまふでかせんのまき。

第一は「熊野物語」、第二は「三社託宣」（別項）の一章。第三は「今佛往生記」の文と小異あり、第四は「花山院后諍」（別項）の一章。第五は東海道より平泉までの道行で、文章は暢達輕妙である。第六は牛若丸がかつらの前をつれ、湯淺・片岡・武藏坊を供にして紀州湯淺に赴く道行。第七は「源氏供養」（別項）の一節。第八は義經の御前に靜立ちて舞ひ、鶴若・龜菊の二女侍坐し、辨慶・片岡・龜井見物する體の排綺があり、第九はかげひさが清輔に六歌仙の歌について説明することを叙してある。こゝに簡單に内容を説明した分は、その原正本の未だ發見されないものである。　（藤井）

道行旅路の花聟（みちゆきたびぢのはなむこ）→「落人」を見よ。

道行物（みちゆきもの）　所作事　【性質】道行（別項）を題材とした所作事の一類であるが、その道行は一つの演伎の出に相當する一部分の道行（例へば、所作事に於ける花道の出端、能樂に於ける道行の段など）を指すものでなく、一段或は一場を通じての道行である。卽ち道行それ自身に獨立又は獨立性を有し、或る假定の地に達する間の脚色になる所作ものを指す。隨つて花道も舞臺も共に道行する道程と見做されてゐる。【沿革】能樂の影響をうけた操淨瑠璃の道行物が、まづ所作事の源泉と見てよい。尤も古淨瑠璃當時は時代物の道行で、これが歌舞伎にも輸入せられて延寶頃から行はれ、元祿期には既に所作事の一類として相應に演じられた程であつた。然るに元祿末頃から世話物が擡頭し、殊に近松門左衞門の「曾根崎心中」（別項）の道行に至つて、俄然その必然性を發揮するに及び、在來さほど重要視されなかつた道行が、延いては淨瑠璃一篇中の肝要部となつた。爾來時代世話共に道行の描寫に重きを置かれ、作者は專らこゝに最上の修辭の妙を施すやうになり、漸次時代物よりも世話物の盛行を見、且つ歌舞伎にも轉用又は改作されるに至つた。次いで所作事も時代より世話の流行が見られ、地も各流を通じて種々に用ひられたが、殊に江戸では豐後節（別項）によつて上演されるのが慣例となつた。かくて流行の結果、その形式に行詰つた爲めに、悲劇的な道行の中に短い喜劇的事物を挾んで觀客を倦怠から免れしめると同時に、悲劇をして一層深からしめようとする手法が行はれて、遂には主題の道行よりも寧ろ挿入物の方が重要視されるといふやうなものも現はれ、且つ二組或は三組の變態心中道行物さへも生れた。隨つてその種類も多岐多樣に亙り、所作事の一大群をなして今日に及んでゐるが、その大半は最初脚本中の一齣として作られた爲めに、その中には筋の通らぬものも尠くない。【種別】その題材から見て、（一）「落人」「かさね」（各別項）等の如き戀愛的のもの、（二）「名所の橡笠」「辨慶道行」（安宅參照）等の如き非戀愛的のものの二つに分けることも出來、またその當事者の員數から見て、（イ）「今川仲秋道行」や「孤東柳」（後出）の如き一人の道行もの、（ロ）「道行雨夜衛」「親子心中」などの如き二人の道行もの、（ハ）「仕立莊三棧紅粉」「梅柳戀道連」等の如き、三人以上の道行ものの三つにも分ける事も出來、更に脚色樣式から見て、「薄雪」「忠信」「道行女夫傘」等の時代物と「瀬川の仇浪」（桂川連理柵參照）、「小いな」「お染」（別項）等の世話物との二種に分ける事も出來る。但し戀愛的の世話物が大半を占め、また道行物の精髓でもあらう。左に各流の主要種目を擧げる。（狂亂の道行物は「狂亂物」參照）



道行三度笠故郷春雨（演博館）

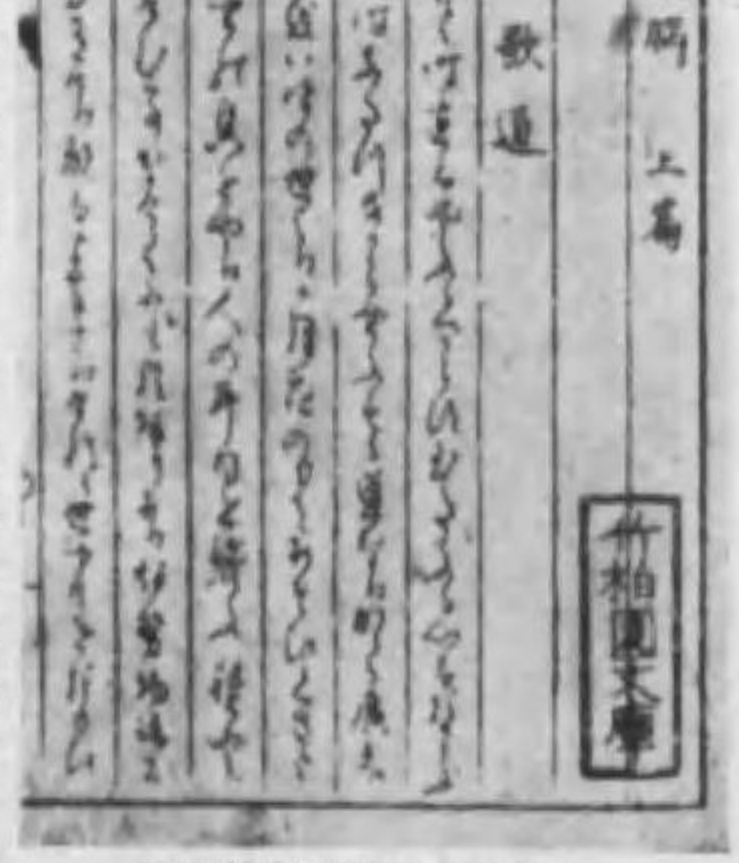
【土佐】今川仲秋道行（延享元年七月、市村座）。【半太夫】秩父順禮名所の橡笠（寛延三年五月市村座）〇道行櫻雪後黎明（敎演道行、安永二年三月同座）等。【一中】末若葉卯月染衣（お梅粂之助、明和元年三月中村座）。【義太夫】道行若菜の花（乘井おせん、寛延二年二月市村座）〇甘輝錦祥女道行比翼綸（寶曆九年四月中村座）〇道行おむめ忠兵衞野分堤別鶏（同十二年八月市村座）〇道行此面彼面菖蒲天（お花半七、おきよ半兵衞、高崎與吉。同十四年四月森田座）。【宮古路】駒鳥繪馬札（女馬士お六、刀屋半七、延享元年三月中村座）〇井筒屋お花道行夢路蝶（同二年三月市村座）〇お菊幸助權兵衞道行雨夜衛（同年四月同座）。【常磐津】お菊幸助比翼加賀紋（寶曆元年八月市村座）〇杜鵑花空解（通稱甲斐なくおちよ、明和七年七月森田座）〇好借川偸柳（通稱長作入お花、安永七年二月中村座）〇桂重袷羅衣（通稱お勝傳兵衞、天明四年四月同座）〇おきん茂兵衞浮名草月小夜衣（通稱おさん茂兵衞、同七年八月同座）〇三勝半七お花半七月友對道行（寛政元年八月、同座）〇おちよ半兵衞染懸澤數寄毛氈（通稱親子賣入、同二年四月市村座）〇帶文桂川水（よたか入お半、同八年二月都座、傳存）〇東結縫旅路花婿（忠臣藏八段目道行、寛政十一年四月中村座）〇戀中車初音の旅（通稱忠信、享保三年八月市村座、傳存）〇三人花賃の道行（小女郎新兵衞、文化元年二月中村座）〇昭綵綠字標（通稱お三輪）（別項）。【宮本】妹脊鳥名所夕暮（あひ寄助六道行、寶曆三年八月中村座）〇梅川忠兵衞道行梅飛脚（通稱梅川忠兵衞、同九年七月同座、傳存）〇きの國や小春紙屋治兵衞道行野邊の書置（通稱野邊の書置、同四年二月市村座、曲のみ傳存）〇道行路手綱親子心中（同五年五月中村座）〇小いな半兵衞俠容形近江八景（通稱小いな、寛政六年二月都座、曲のみ傳存）〇半兵衞小ぎく道行戀苧環妻八景（通稱小ぎく、同上）〇道行大事雨柳（通稱白藤お俊、文化元年正月市村座）〇道行念玉葵（通稱長作、同二年四月中村座、曲のみ傳存）〇幾菊蝶初音道行（通稱忠信、同五年五月同座、傳存）〇袖浦響中僧（通稱お駒、同八年正月市村座、清元に傳存）〇あづま與五郎おとよ源之丞梅柳戀道連（安政三年三月同座）等。【清元】道行思案橋（通稱お半、文政二年正月中村座、傳存）〇道行旅夕月（通稱おはや、同六年正月森田座、曲のみ傳存）〇色彩間刈豆（通稱かさね）（別項）〇お染久松道行浮塒鷗（通稱お染）（別項）〇道行旅路の嫁入（通稱おかけ參り、天保元年四月市村座、傳存）〇道行旅路の花聟（通稱落人）（別項）〇心中雛夕立（通稱玉屋新兵衞、天保四年五月河原崎座、傳存）〇若草屋若草浮世伊之助濡嶋浮寢錦（通稱若草、嘉永四年十一月同座、傳存）〇梅柳中宵月（通稱清心、「小袖曾我薊色縫」參照、傳存）等。【新内】（富士松）おなつ清十郎卯花二世合邊（延享四年四月市村座）〇お染新七戀名妹脊鳥（寛延三年八月森田座）。（鶴賀）〇鐘時雨空淚（通稱お花半七、寶曆元年五月同座）。（吾妻路）忍岡綠曲者（白玉權九郎、安政五年三月市村座、同名題で清元に傳存）等。【岡八】仕立莊三棧紅粉（別名題「對染衣」、お染久松・お初德兵衞・お千代半兵衞。明和八年三月中村座）〇小いな半兵衞道行近江八景（安永二年二月、森田座）等。【長唄】孤東柳（鳥若丸、元文五年五月市村座）〇乘掛情の夏木立（通稱與作、明和元年七月市村座、曲のみ傳存）〇道行賤機尾花袖（通稱尾花袖、同五年十一月同座）〇道行女夫傘（狐忠信、同六年三月中村座）〇道行法の塵分船（九年坊、同年七月市村座）〇道行昔のうつし繪（三勝半七、天明二年七月中村座）〇道行鳥邊山（お俊傳兵衞、同四年正月同座）〇道行見櫻錦酒瀬（白菊、文化五年四月同座）〇道行霜夜菊（瓣江木四郎、天保九年十一月同座）〇道行重扇色三升（お初德兵衞、嘉永二年十一月同座）等。

【參考】劇代集（二代瀨田左交）〇近世邦樂年表〇歌舞伎圖説（中岡實著・秋葉芳美共輯）〇日本歌謠集成（卷九・一〇・一一）〇道行の展開（志田延義（月刊「日本文學」三ノ四・五））　（秋葉）

三井甲之（みついかふし）　評論家・歌人　【本名】甲之助　【閲歴】明治十六年十月、山梨縣中巨摩郡敷島村に生れた。第一高等學校を經て、明治四十年、東京帝國大學國文科を卒業、同四十一年、正岡子規の遺業、根岸短歌會（別項）を繼承し、雜誌「アカネ」を編輯して、早くから日本主義の宣揚に努めた。「アカネ」は一時中絶したが、明治四十四年五月再び刊行。同四十五年に及び、「人生と表現」と改題し、主として、評論及び短歌・長詩に力を注いだ。大正五年、一時「人生と表現」を休止し（同十年、復活號が出たが、井上右近の手で編輯、京都から發行した）、更に大正十四年に至り、蓑田胸喜と協力して「原理日本」を創刊し、今日に及んでゐる。昭和三年、敷島の道の會を「原理日本」同人と共に創立し、日本精神の表現について、詩歌の上から力説する所があつた。なほ早くから雜誌「日本及日本人」（別項）の短歌選者となり、この方面の開拓に盡した。【著書】「明治天皇御集研究」「民族心理學研究」「我等は如何にこの兇逆思想を處置すべきか？」等があり、なほ詩集に「祖國禮拜」などがある。

【批評】正岡子規の傘下に在つて、作歌の傍、日本主義運動に從事し、二十年一日の如く、論戰の陣頭に立つた。その表現には少しく潤ひを缺く所があるが、自ら信ずること厚く、主張の上に底力と熱意とを有する點は獨自の長所である。歌人としては伊藤左千夫（別項）と並んで子規門に重きをなし、しかも子規歿後、左千夫と相和せず、「日本及日本人」に行つてその歌欄を擔當し、今日に及んでゐる。日本思想を強調した「人類の世界はひろしししかれどもわれらは行くべししきしまの道を」の如き直情的の作を得意とするが、一面又「秋雨のすがしく晴れし夕暮に相見しゑまひ忘れかねつも」の如き、優婉可憐の趣のものもないではない。　（高須・金子）

御杖（みつえ）　歌人・國學者　【姓名】富士谷氏。初名成議、成元。通稱源吾、專右衞門。【號】北野　【生歿】明和五年に生れ、文政六年（二四八三）十二月十六日歿す。享年五十六。【閲歴】御杖は富士谷成章（別項）の子、幼時より國學和歌を父に承けて家學を墜さず、また彈琴に巧みであつた。御杖は國語に「言靈の幸」ある事を信じ、その點から特に手爾乎波語法を詳細に研究してゐる。その説は所謂言靈説であつて、部分的には卓見も少くないが、全體としては直ちに用ひ難いものがある。歌論書に於ても同様に言靈的態度を用ひて緻密な考察を行つてゐる。



北邊隨筆　上篇

歌道

竹柏園文庫

御杖自筆北邊隨筆稿（竹柏園藏）

【著書】（國語學に關するもの）詞葉新雅一卷一冊（寛政四年九月刊。作歌の參考書で、俗語から雅言を知るやうにした辭書）〇俳諧天爾波抄六卷六冊（文化四年刊。「脚結抄」（別項）の説に從つて俳語に用ひる天爾波の運用法を記したもの）〇脚結抄翼卷數未詳（現存著者自筆稿本二冊。「脚結抄」（別項）の註解で、脚結抄本文を註し、例證を增補したりしてゐる）。【歌文の註釋及歌論書】萬葉集燈五卷五冊（文政五年刊。大正十一年刊萬葉集叢書所收、萬葉集卷一の註釋。言靈説に從つてゐるから、直に用ひ難いものもあるが卓見もある。なほ手爾波の解釋の詳細な點は參考すべきである）〇古事記燈二卷（文化五年刊）（別項）〇土佐日記燈二十四卷（明治三十一年刊。活版本三冊。土佐日記の註としては最も詳細なもので、御杖の代表的著書の一つである）〇百人一首燈二卷二冊（文化元年刊）〇百家部類抄十卷〇歌袋八卷（寛政六年刊）（「歌學文庫」卷三所收）〇いれひも一卷〇歌道非唯抄一卷〇北邊隨筆四卷（別項）〇北野文集〇御杖大人歌文〇神明憑談一卷（文政五年成）〇五緒三差辨一卷〇眞言辨二卷（別項）〇北邊詞

闕二卷○吟南辨乃異則一卷○詞道擧要一卷○和歌五體辨一卷等。　〔以上島田〕

【歌人として】歌は幼くして廣橋兼胤に學んだが、固より堂上派の糟粕を嘗めて滿足してはゐなかつた。家學から來た萬葉風に、當時の古學派の調べを加へて、なか〳〵の上手である。まゝ新しい言葉なども用ひて頗る自由清新の趣を出してゐる。當時の歌壇では第一流であり、今日から見ても相當注意すべき歌人である。

あし引の山のさかひに母を置きて心にもあらず立ちまふらしも（旅）
國人のわたす高橋たかだかにこひわたり來て今ぞくやしき（寄橋戀）

等にその萬葉に近い詠風のよく消化されてゐるのを見るべく、「かはほりの飛び交ふ空の夕づく日かげろふ見れば秋たちにけり」「鷹折る人し絶えねば春の野になま落ちしつゝ雲雀鳴くなり」などに、その詠風の自由と清新とが見られる。而してそれが寫實から來てゐることは特に注意すべきである。　〔以上澤田〕

【參考】學界の偉人（西村天囚）○日本歌學史（佐佐木信綱）○國文學の哲學的研究第一卷（土田杏村）○富士谷御杖と桂園派（久松潛一）（國の花、昭和四ノ四）

御杖大人家集（みつゑうしのいへのしふ）「富士谷御杖大人家集」を見よ。

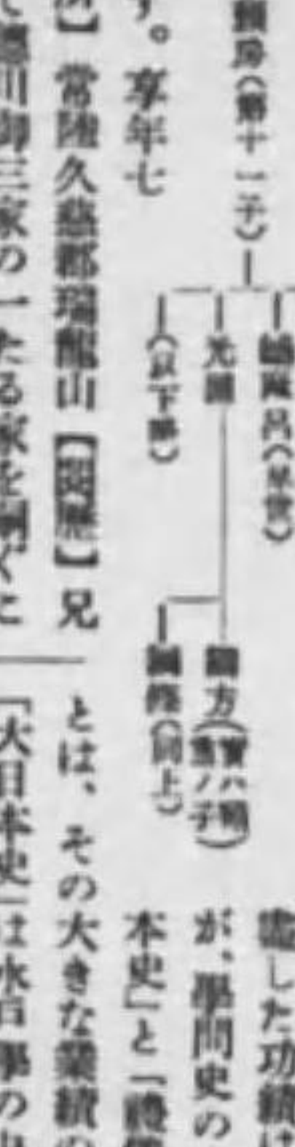
三日太平記（みつかたいへいき）　淨瑠璃　十段　時代物【作者】近松半二・三好松洛・八民平七・竹本三郎兵衞【角書】泉州小田居茶屋（攝州殿下茶屋）【名稱】光秀の所謂三日天下に據つたもので太平記物とは關係がない。角書の右は六段目、左は十段目から來てゐる。【初演】明和四年十二月十四日初日、竹本座。座本竹田文吉（正本）【諸本】七行九十五丁本。十行六十四丁本。近松半二淨瑠璃集（續帝國文庫）所收。【題材】太閤記物の正系で、多く近松作の「本朝三國志」（享保四年二月十四日初日。竹本座）の影響を受けてゐる。【梗概】〔初段〕（信永別館）四海を平定した功に依り小田信永は内大臣に任ぜられた。諸大名はお祝ひに色とりどりの生花を獻上する。時に信永の一人娘千本姫は細川の息與市郎を見染める。〔二段〕（道行花見の縫ひ）千本姫は麗かな春景色の中を、戀しい與市郎に逢ふべく、桃山へと向ふ。（桃山）執權松永彈正の粹な言葉で、姫は思ふ儘に與市郎と語り合ふ。與市郎は面白く戀話などをして姫の歡心を買ひ、形見に蘭奢待の名香を送られる。併しこの美男の與市郎は贋物で、實は堺の町人小西彌十郎であつた。逆意ある彈正が姫の放埒を種に、信永を罪に落さうとする謀である。〔三段〕（松永館）植木屋となつて入り込んだ森蘭丸を、彈正はそれとも知らず取立て腹心とする。この日信永の妾小野お通と簾中臺の前と千本姫とが入來する。姫は先日桃山で誓つた與市郎に逢はうためである。時に與市郎に化けてゐた彌十郎の父如清が、證據の蘭奢待を持つて息子の惡事を糺しに來る。かくて不義が現はされ、千本姫はその場から勘當となり、臺の前は罪を負うて自害する。彈正が御臺の死に微笑んでゐると、俄に蘭丸の相圖に依つて遠攻の陣太鼓が響く。計略に落ちた彈正は雄々しくも悠々と自刎する。この時討手に向つた武智光秀は、彈正の最後の言葉に依つて彼の遺兒である事を知り、密に父の志を繼ぐべく決心する。〔四段〕（安土城）信永の嫡孫三法師君の誕生日を祝つてゐる所へ、彈正の討手を果して蘭丸と光秀が歸つて來る。併し兩人共御臺を見殺しにした咎に依つて勘當となつてしまふ。蘭丸は千本姫を尋ねに行く嫡子信忠のお供をし、光秀は信永の短慮に愈々叛逆の心を定める。〔五段〕（本能寺）信永は中國を平定すべく本能寺に出陣する。光秀はお供を願つて目通りに出る。併し信永はなほ光秀を大猫と罵つて打擲する。光秀の兵は一度に本能寺を取卷く。寺僧等も皆光秀の家來であつた。信永は遂に無念の中に切腹する。光秀は將軍の綸旨を受くべく馬上で禁廷へ向ふ。〔六段〕（小田居茶屋）今は千本姫も身を落して泉州堺の津の廓に司と云ふ傾城となつてゐる。小野お通は仲居となつて附添ひ、信永の像を守護して味方の人々を集めてゐる。小西彌十郎は虚無僧となつて來て、前非を悔い、味方に加はらうとするが許されない。一方森蘭丸は瓦石大臣と名乘つて入り込み、司を揚詰にして樣子を覗つてゐる。折柄西國の戰から久吉が歸つて來る。久吉は蘭丸の忠義に感じ、信永に代つて勘當を許し、又お通の方の赤心を賞する。〔七段〕（德右衞門住居）光秀叛逆の折柄、信永公の嫡孫三法師君を連れて立ち退いた忠臣柴田權六は、圖らずも久吉の生家の婿となり、德右衞門と名乘つて鼓の師匠をしてゐる。舅彌助は老耄して子供のやうに他愛もない。久吉はかくと察して自分の子を若君に仕立て巧に身代りにする。舅彌助は早くも德右衞門の連子を若君と知り、今迄老耄を裝つて守護してゐたのであつた。權六は久吉の忠義に感じて若君を渡し、彌助は出世して誇らぬ我子久吉を賞しつゝ自ら出家して緣を絕つ。〔八段〕（山崎）光秀と久吉の軍は戰ひ正に酣である。一代の軍師松下嘉平治も今は世を遁れ、戰をよそに釣に來る。と、偶然川端に供養する我娘さつきに逢ふ。さつきは穉くして養女に行つたが、その後光秀に嫁したのである。良人の逆軍の破れん事を悲しんで、彼女はかく供養するのであつた。嘉平治は娘を連れて我が家へ歸る。（小栗栖）光秀の末子重次郎は父を尋ねて彷徨ふ。光秀も我が子を捜してゐるうちに、遂に百姓の竹槍に刺される。光秀は傷つきながら、百姓に化けて一時を逃れ、なほも重次郎を尋ねる。〔九段〕（嘉平治住居）偶然嘉平治の許に宿つた光秀は、自害して妻子を助けようとしたが、重次郎は父の跡を追つて共に切腹した。彌十郎は光秀の首を討ち落して始めて久吉に仕へる事を許される。一方嘉平治・さつきは出家する。〔十段〕（殿下茶屋）大領久吉は功に依つて豐臣關白となり、勢ひ並ぶ者もない。この日久吉は住吉明神に祈願して三韓征伐を宣言する。

【解說】本曲は、合作の弊として統一がなく不自然な所が多い。前半は歌舞伎式に運ばれたに過ぎず、眼目はやはり後半の逆臣光秀に配するに仁義の久吉を以てし、以て喝采を得ようとした所にある。從つて五段目本能寺の場と九段目嘉平治住居の場とが山となる。殊に後者は最も趣向を凝した場面で、興味深く見られる。そしてこの趣向は「比良嶽雪見陣立」（別項）に取入れられてゐる。本曲中現在まで唱へられるのはこの場のみである。なほ以後の歌舞伎淨瑠璃に於ける多くの太閤記物に關係を持つてゐる事は云ふ迄もない。

【參考】近世邦樂年表（義太夫之部）○歌舞伎細見　飯塚友一郎（太閤記之部）　〔鶴見〕

光圀（みつくに）　歌人・國學者【姓名】德川氏、名は光圀、字は子龍、幼名千代松、初めの名

は德亮、字は觀之【號】日新齋・常山人・率然子・西山隱士・梅里。【私謚】義公【生歿】寬永五年六月十日水戶三木之次の家に生れ、元祿十三年（二三六〇）十二月六日薨ず。享年七十三。【墓所】常陸久慈郡瑞龍山【閲歷】兄賴重を超えて德川御三家の一たる家を嗣ぐことになつたが、伯夷・叔齊の故事に感激して、初め兄の子綱方を家嗣とし、綱方歿するに及んで、その弟綱條を嗣と定めた。元祿三年十月（六十三歲）致仕して家を綱條に讓り、自らは翌年五月久慈郡大田鄕西山に隱居して西山公又は水戶黃門と言はれ、文事に心を寄せて學問の研究並にその保護に力を盡した。寬文五年、明の遺臣朱舜水（別項）を聘して弟子の禮を執り、道を問うた。明曆三年、彰考館（別項）を設けて多くの學者を招き、古書の蒐集を各地に行はしめると共に、諸家の珍籍を謄寫せしめた。しかも單に古典籍を集めるのみでなく、一貫して國家の大統を明かにし、大義名分を知らしめるための大著述の完成に力を盡した。延寶五年「扶桑拾葉集」（別項）成り、天覽を仰いだ。晚年「萬葉集」の研究に力を盡すに及んで、下河邊長流・契沖（各別項）等を禮を篤くして迎へんとした。又元祿五年八月楠正成の忠誠を嘉して、湊川に「嗚呼忠臣楠子之墓」といふ碑を建てたことによつても、その精神を見られる。元祿十三年十二月に薨ずるまでその精神は一貫してゐた。天保三年贈從二位權大納言、明治二年從一位、同三十三年追贈して正一位に陞叙された。【編著】大日本史○禮儀類典○釋萬葉集○常山詠草○扶桑拾葉集（各別項）○常山文集○西山公隨筆（別項）○參考源平盛衰記○參考太平記○參考保元物語○參考平治物語（以上各別項）等。



【業績】義公が德川三家の一として、政治上に盡した功績はこゝでは擧げないが、學問史の上から見ると、「大日本史」と「禮儀類典」と「釋萬葉集」とは、その大きな業績の三方面である。殊に「大日本史」は水戶學の中心をなすもので、義公初め代々の主君の心血を灑いで成つたものであり、史學上の大編著であるのみならず、その勤王精神を鼓吹するには最も力あつたものである。また「禮儀類典」は有職故實を新しく見直し、整理したものと言ふべく、「釋萬葉集」は「萬葉代匠記」の存する以上、直接の價値は乏しいとするも、義公の「萬葉集」に於ける努力と、長流・契沖の如きすぐれた萬葉學者を生み出した功績は忘れられない。義公なかりせば契沖の「萬葉代匠記」も出來なかつたであらう。又賴山陽の「日本外史」（別項）の出現も、或は近世の勤王精神の勃興もこゝに淵源するものが甚だ多い。義公の偉大なる業績はそこにある。歌人としての義公も「常山詠草」によつて見られる如く、相當の歌人であることが知られる。

【參考】義公行實（安積澹泊等）（「常山文集」「義實文編」等に收む）○桃源遺事（三木之幹等）（續々群書類從史傳部第二・日本偉人言行資料等に收む）○水戶義公傳（佐藤進）　〔久松〕

三津瀨川上品仕立（みつせがはじやうほんじたて）　草雙紙　合卷　二册合一册【作者】柳亭種彥【畫工】歌川國貞【名稱】追善を聞かせた命名である。柱には、ただ「つゐぜん」とのみある。【刊行】天保三年、山本板。【題材】坂東秀佳・瀨川路考の死。

【梗概】（六道の辻の茶見世）今度、秀佳・路考の新下りのために、一九は「因例白無曾我」といふ狂言を書き、國丸はその看板を描いたと語り合ふ。閻魔が金主となつて芝居を打つたのである。二人が物さらへを見に行つたあとで、秀佳に惚れた奪衣婆が路考に、路考に惚れた閻魔が秀佳に謀を賴む。二人共に承知する。（六道屋の奥座敷）秀佳と路考吹替へで、閻魔と婆とを暗い一室に忍び合せる。閻魔達は氣づかずして契り合ふ。（六道辻樂屋新道）茶屋娘の拵への門之助、これは前にこゝに來てゐた役者であるが、婆が閻魔へ當てた密書を拾つて讀む。秀佳・路考には罪はないが、芝居をさせて金儲けをさせるために六道辻に留めておくと書いてある。こゝに路考の歸途を擁して閻魔は赤鬼と共に、さき程欺かれた仇討をしようとする。路考・五郎時致の出立で、二人を投げつける。（秀佳の住家）これも欺かれたのを遺恨に思ふ婆の旨を承けた鬼どもが秀佳を捕へようとする。秀佳、朝比奈の拵へで鬼どもを脅す。門之助、歌舞菩薩の姿となつて、秀佳・路考と共に、極樂さしてゆく。二人は紫雲の上、迎への蓮臺に乘る。

【構想】追善の作とて、死んだ二人を極樂に送り込むのが覘ひであるが、役者だけに六道の辻の芝居興行をきかせ、又奪衣婆と閻魔が、二人にからむ點にをかしさを見せたのである。

【價値】作としては、さまでの價値を認められない。ただ種彥もこの種の際物を書いたといふ點に於てのみ注意すべきであらう。或は芝居好きの作者であるから、板元の囑に應じたのであらうか。殊にこの二人は贔屓にしてゐた役者であつた。また種彥は、この作に三日を費したこと、しかも間に合せに過ぎないことを斷わつてゐる。彼の退筆の程度が知られる。三馬が一夜を待たずに「兩國藥研堀」を書いたことを參照して考ふべきであらう。但し三馬の作は、先代瀨川路考・澤村訥子の死に關してゐる。種彥のこの作に於て、二人の役者が閻魔と奪衣婆とに惚れられての困難、又巧みに欺いて閻魔と奪衣婆とを忍び逢はせた趣向は相應に面白いものであらう。二河庵白道の作、安政二年板「明烏夢物語」にその儘採用されてゐるが、これは八代目團十郎と二代坂東秀佳の死に關するものである。　〔山口〕

滿田新造（みつだしんざう）　音韻學者【生歿】明治八年六月三日、福島縣若松市東名古屋町に生れ、昭和二年二月七日、岡山市門田德吉町に歿す。享年五十三【法名】新月院誠譽通韻大居士【墓所】岡山市操山六高裏市有墓地【家系】蒲生氏郷の家臣滿田出雲守の後裔。【閲歷】明治二十九年、第一高等中學校を經て、三十二年、東京帝國大學文科大學漢文科卒業、同年十月、島根縣第一中學校教諭、翌年八月第六高等學校の創設せらるゝや、その教授となる。大正十一年八月、文學博士の學位を授けられた。同十五年三月病の故を以て退職。その後も六高講師として引續き教鞭をとつてゐた。磊落不羈で、虚飾を惡み、また寛然仙人の風があつた。併し又、その半面には最も常識に富み、事務家としての才能も多分に持つてゐた。

【著作】支那音韻斷一册（大正四年刊）○中原音韻分韻の概說一册（大正七年刊）○支那音韻の歷史的研究一册（未刊）。その他「藝文」「國學院雜誌」「東洋學報」等に多くの論文がある。

【業績】夙く明治三十二年頃（二十六歲）から支那音韻の問題に心を傾め、爾來二十有八年、公

務の餘暇、專らこの研究に沒頭して餘事を省みず、大正八・十年の兩度、支那に渡つて益々研鑽を加へた。特に研究の對象としたものは支那音韻史とその研究の歷史とであつた。由來支那音韻の研究家には、とかく歷史的變遷を無視し、音韻諸現象を個々別々のものとして、類似又は差異のみを以て說明しようとして來たことに缺陷のあるのを思ひ、諸現象相互の間には、變遷關係を以て說明せらるべきもののあることを信じ、從來殆ど試みられなかつた歷史的研究の方法をとつた。大正四年十月刊行の「支那音韻斷」はこの成果である。ついで、學位請求論文として提出した「支那音韻の歷史的研究」は、その資料の解說並に歸納の過程を記したものである。その他、「東洋學報」「國學院雜誌」「藝文」等に發表した論著は約四十に上るが、すべて支那の音韻に關するもので、中に日本の漢字音や字音研究史に關するものもある。

【參考】支那音韻の歷史的研究自序 ○滿田新造氏碑（狩野直喜撰）○滿田先生を悼む（六高校友會誌七五）○故滿田教授を追想して 內藤虎次郎（寶雲會々誌一六）○滿田さんに就きて 小西謙（同上）　〔宮〕

躬恒（みつね）歌人（三十六歌仙の一）【姓】凡河內【閱歷】寬平六年甲斐權少目、延喜七年丹波權大目、同十一年和泉權掾に任じた。淡路掾にも任じたと見え、「淡路のまつりごと人の任果てゝ上りまうできての頃兼輔朝臣の家にて」（後撰集卷十五）とある。延喜五年貫之以下と「古今集」撰修の事に携はり、同七年九月法皇大井川御幸に供奉して歌を上つた。延喜十六年九月法皇石山御幸に際し、近江介（兼輔か）に招かれ、乞ひによつて屏風・障子の歌をよみ、法皇の御舟に供奉して歌を上つた。延喜二十一年春、法皇・六條の御息所の春日御詣に際し、大和守忠房の乞ひによつて大和の名所の歌をよんだ。曾て醍醐天皇は月の明き夜彼を御階の下に召され、「月を弓張といふは何の意ぞ其の由仕うまつれ」と仰せられた。彼は畏つて、「照る月を弓張としもいふ事は山邊をさしていればなりけり」と奏し上げ、御感の餘り祿に大袿を賜はつた（大和物語・大鏡）。家集には仰せによつて奉つた賀の歌、屏風歌が多く、貫之と同じく宮中歌人であつた事が分る。兼輔とは素より友達であつたが、貫之をして「なつき」を傳へさせた（後撰集卷十六）。貫之とは二三の贈答歌があり、月の面白き夜、貫之を訪れたことがある（古今集卷十六）。延喜六年六月忠岑が勅使として貫殿にあり、彼は宣旨かひの使として忠岑が歸るのを止めて歌をよんだ。又忠岑・伊衡と三人で問答の歌をよみ、深養父・人眞と共に各三十首の歌をよみ、素性の死を悼んで貫之と贈答した。延喜の時みづし所に侍ひ、身の沈める事を歎き、或る女房を通じてうれへ文を奏したこともある。【著作】家集「躬恒集」。○勅撰集に入る歌は古今五十八、後撰二十三、拾遺三十四、新古今十、新勅撰集以下凡そ六十九首、合計凡そ百九十四首。○私撰集に入る歌は新撰和歌十、三十六人撰十、金玉集六。○古今打聞（經藏抄）二卷は躬恒撰ではない。

寬平六年	甲斐權少目
昌泰元年	朱雀院女郎花合
延喜五年	古今集撰修
六年	皇大后四十賀
七年	法皇大井川御幸
十二年	亭子院和歌合
十三年	內裏菊合 內侍督四十賀
十六年	伊勢にあり、九月石山御幸
十八年	八月忠平の家に八講あり、佛法僧々きく。九月いちじく山に遊ぶ
二十一年	法皇春日御詣
延喜御時	殿上に召さる、御厨子所に侍ふ

【批評】彼の歌には躍動した情緒があり、張り切つた心で一氣呵成によんだところと、或る寂しさを力強く訴へようとするところとがある。貫之の歌に比較して調子が高く銳く、而も粘りがあり、氣持を生かした表現が多い。俊頼は躬恒の表現に興味をもつてゐたらしい（長明無名抄）。要するに貫之の歌は型にはまつてゐて感動がないが、躬恒の歌は生々したところがある。

【參考】古今集目錄○歌仙傳○大日本史二一九○大和物語○大鏡○百人一首一夕話○國文學全史（平安朝篇）　〔西下〕

躬恒集（みつねしふ）歌集【作者】凡河內躬恒【諸本】群書類從卷二六一所載本、歌仙歌集本の外、圖書寮に甲乙丙丁四種の寫本がある。類從本一卷は、歌數四百三十二首、歌仙歌集本二卷は、歌數三百二十九首である。「西行躬恒集」と稱するものは、歌仙歌集本と殆ど一致するが、第五十五首目の「秋霧のはるゝまに〳〵みわたせば云々」の一首を缺いてゐる。(甲)一卷は、歌數は四百十八首（內長歌二）で、最後の四十九首は他本の歌である。(乙)二卷は、歌數は三百八十四首（內長歌二）で、卷末には(甲)と全く同じい他本の歌がある。奥に文永三年六月九日以光俊本書寫畢とある。(丙)一卷は、歌數は二百十九首（內長歌二）で、終りに「ちはやぶる神な月とやはつしぐれ」の長歌があつて歌仙歌集本上卷の終りと一致し、別に「水莖の跡かきつくるしるしにはながれてさぞと思ひいでなむ」とあつて、頭に「紙けがしにもとはおも（思）たまへながらいなびじとかやな、又なからむ後のと方々に思ひさぶらひてこそ」と記した一葉が語つてゐる。(丁)一卷は大體類從本と同じく、奥に「建長四年二月五日巳時書畢、以或貴所御本昨今兩日終篇、一校了、書本銘云永香殿女御筆云々」などとあつて、本願寺の「三十六人家集」（別項）を臨寫したものとされてゐる。書式は色々と工夫され、一本又は異本にて考勘した所がある。

【內容】以上の六本は、全卷の歌數がそれ〳〵異るからその內容を異にするわけであるが、歌數のより多い本は、歌數のより少い本の內容を全部含むといふわけではなく、歌數の多少に拘らず全然別個の歌をも內容としてゐるのである。隨つて六本の內容關係は極めて複雜であるが、類從本と歌仙歌集本とを中心として相互の關係を示すと第一圖表の如くである。即ち類從本を中心として考へると、(歌)(甲)(乙)(丙)はその順序で內容一致の關係が少くなり、歌仙歌集本を中心として考へても(類)(甲)(乙)(丙)の順序でその關係が薄くなつてゐる。これは類從本と歌仙歌集本とは極めて密接な內容一致の關係をもつてゐるが、(甲)(乙)(丙)はその總數に比例して類從本及び歌仙歌集本との關係の程度を保つてゐるといふ事である。次に(甲)(乙)(丙)(丁)の四本の歌で、類從本及び歌仙歌集本の何れにも存しない歌に就いて相互の關係を示すと、第二圖表の如くなる。即ち(甲)(乙)は類從本及び歌仙歌集本の何れにも存しない歌が比較的多く、(丙)(丁)はこれに次ぐのであるが、更に(甲)(乙)(丙)(丁)は他の如何なる本にも存せず、その本にのみ存する歌を若干づつ有する事になるのである。次に(甲)(乙)(丙)(丁)には存するが(類)(歌)には存しない歌に就いて見るに、(甲)(乙)の終りには共に「深養父人眞具して題三を三十首づつよみ侍りけるに人しれぬ戀を」といふ詞書のある二十九首があり、(甲)には忠岑・伊衡・躬恒の三人が互に問ひ答へた歌三十八首があり、(丁)には詩歌合の歌六首、贈歌六首がある。これ等の集團をなす歌はそれ〳〵の本の特色とすべきであらう。而して類從本・歌仙歌集及び(丁)には、年月日を掲げた詞書の多い事が特色であり、(乙)(丙)にはそれが少いのである。【組織】諸本とも部類はない。(一)純粹の家集と考へられるもので、忠岑・伊衡・躬恒の問答歌にて終る。(二)勅撰集から書き拔いたと思はれるもので、深養父・人眞と共に作つた三十首にて終る。(三)他本の歌。(乙)は重複が多く、錯簡があるらしい。(丁)は類從本と順序が全く一致してゐる。何故にかく內容を異にした各種の異本が存するかは不明である。　〔西下〕

第一圖表

	總數	重出歌	類從本と一致する歌	歌仙歌集と一致する歌	二本と一致せざる歌
類	432	2		246	
丁	473	14	430	255	20
歌	329		246		
甲	408	9	195	145	150
乙	384	30	177	130	127
丙	220		150	110	18

第二圖表

	總數	甲と一致する歌	乙と一致する歌	丙と一致する歌	丁と一致する歌	其の他
甲	150		107	13	4	43
乙	127	107		14	4	19
丙	18	13	14		3	4
丁	20	4	4	3		16

三のじ（みつのじ）「切字」を見よ。

三のしるべ（みつのしるべ）隨筆　三卷【著者】藤井高尙【名稱】「道のしるべ」「歌のしるべ」「文のしるべ」の三を合せて三のしるべと云ふ。【刊行】文政十二年【解說】「道のしるべ」（上卷）では、神道の直く正しい敎を以て修身の要を悟るべきことを說く。文政七年正月の所編である。また歌文の「二つのしるべ」（中・下卷）では、歌を詠み文を作る用意・方法を述べてゐる。卷首に、文政九年秋の自序（「さりすべていふ事」と題して）がある。　〔和田〕

光則（みつのり）國學者【姓名】保田氏。通稱貞治【號】渚の舍【生歿】寬政九年三月仙臺中島町に生れ、明治三年三月十七日歿す。享年七十四。【墓所】仙臺新寺小路光壽院【家系】父は保田光利、仙臺藩の大番士である（光昭も仙臺藩の大番士）。【學系】漢學は志村篤治（石溪と號す）・櫻田周輔（鼓岳門）に受け、和歌を河田了我に受けた。國語は本居大平・平田篤胤に書を通じて敎を受けた。【閱歷】光則は和漢の學に通じ、就中歌學に秀でてゐた。天保頃、養賢堂（藩の學校）の學問方指南役となり、次いで和學指南役になつた。又藩主伊達慶邦に和歌を敎へてゐた。文久元年伊達家の一族である石川家の成敎學館の學頭を囑せられたが、故あつて間もなく辭した。【著書】多く他人の著を增補訂正したものである。○雅言集覽增補十三卷（文久三年成）○雅言集覽續編三十二卷（文久三年成）○挿頭抄增補三卷（嘉永四年成）○脚結抄考一卷○裝脚結詞の打合圖一舖（弘化四年正月成。刊。「脚結抄」の詞圖を「八衢」「結鏡」「友鏡」等の說に依つて增補したものである）○和調菜後篇○語例考○稱謂考○調原○陸奥風土記等。　〔齋田〕

【參考】保田光則傳資料（言語學雜誌一ノ七）

光榮（みつひで）歌人【姓名】烏丸。本姓藤原氏。名は一說に「みつやす」【生歿】元祿二年に生れ、寬延元年（二四〇八）三月十四日歿す。享年六十。【法名】不昧眞院【閱歷】父宣定は彼の四歲の時左中辨で夭死した（享年二十二）。光榮は元祿十一年（十二歲）元服叙從五位上、寶永元年（十六歲）權右少辨、同五年藏人に陞進した。かくて享保三年藏人頭、更に右大辨、その翌年には正四位上で參議を拜すると云ふやうに、地位に於て順潮の生涯であつた。歌道の家で、幼時からその敎養をうけたと見えて、「榮葉和歌集」には七歲の時の詠（今朝よりはそらもすゞしく吹きそめてそれと知らるる秋の初風）、八歲の時の詠歌などが入つてゐる。百首の中に寶永二年のものがあるが、寶永二年は彼の十七歲の年で、如何に歌道に精進したかがわかる。享保時代には特に靈元院の御輔導も加はり、著しい進步を見た。官位も愈々進み、享保七年には權中納言、同九年には權大納言に任ぜられた。同五年、同六年、同八年と云ふやうに隔年の作品が傳へられてゐる。今人丸と併稱されるに至つたことでも社會的輿望の絕大さも示してゐる。靈元院も彼を激賞し、一生十首の秀歌を遺し得ようと豫言し給はれたといふ。元文五年には、靈元院の皇子職仁親王に天仁遠波を御傳授申し上げた。その才德を聞いて指導を仰がうとするものが年を趁いで增した。又延享三年には關東から信州に亙る大旅行を試みた。寬延元年內大臣となつたが、間もなく辭し、その年三月に薨去した。【著作】聽玉集一卷（寫。別名「加藤信成聞書」とも「聽覺玉談」とも。門人加藤信成が、元文元年九月から同五年までの間に聞いた師の歌話を筆錄したもの）○詠歌金玉論一卷（寫。職仁が中院通茂以下烏丸光榮等に及ぶ十數家の歌人の歌道詞談を輯めたもの）○內裏進上之卷（「不昧眞院殿進上之卷」とも。寫本、一卷。元文二年櫻町院の叡覽に供へたもの）○松平筑前守に送る書一卷○烏丸前大納言光榮卿御口授一卷（寫）○和歌敎訓十五箇條一卷（「詠歌覺悟」とも。寫。本書には幻交庵寂翁の「烏丸光榮公敎訓十五箇條抄」と云ふ註書がある）。【歌集】烏丸光榮公集二卷（寫。上卷は春・夏・秋・冬、下卷は戀・雜の部。すべて類題で、圖書寮藏本のものには、各部に數首づつの書入題詞がある）○榮葉和歌集八卷（別項）○烏丸光榮百首一卷（寫。享保六年三月の御會百首であるが、「榮葉集」にも出てゐるものであり、かゝる種の百首の一卷となつたものが、他にも現存してゐるであらう）○不昧眞院殿御集三卷（寫。御集別本の一つで、「榮葉集」に似て異點が多い。門人が別に私撰したものであらう）○新類題和歌集二十卷（寫。靈元院の勅を奉じ、光榮外四人の者が古今の名歌を輯めたもので、二十卷本の外に十五卷本、十三卷本もある）。なほ光榮は文章にも優れ、「扶桑殘玉集」中に選入されてゐるものに、「明石亭記」

日野資綱—烏光（烏丸祖）…光廣…（四代）…宣定—
光榮—光胤（嗣子）

「盆山の銘」「宗祇水の記」「桃源院を悼めることば」「阿蘇宮大宮司に與へらるゝ和歌の序」「桂の別殿にあたふ詞並に和歌」「打出の濱」（延享三年の旅行記）の七篇がある。初めの四篇は「榮葉集」に出てゐる。

【作風・地位】元祿時代より文運隆盛の餘波に乘せられて、堂上歌風の上にも一時爛漫たる花時が到來した。實陰・似雲・通茂・通躬・光榮・光胤等の流がそれである。かくてその末流から廣庵・景樹の輩出したのも事實であるが、堂上歌風と云ふ意味から言へば、この享保時代は消滅せんとするものの最後の火炎であつたやうにすら思はれる。彼等の風雅道は飽く迄正統派でありながら既に環境から取殘されんとするのを意識せざるを得なかつた。この光榮今人丸の不斷の精進の跡にもさうした哀調を否定することが出來ない。（榮葉和歌集參照）

【參考】野史〇大海のはし〇一話一言〇橫窓漫錄〇日本歌書綜覽　（豐田（濱））

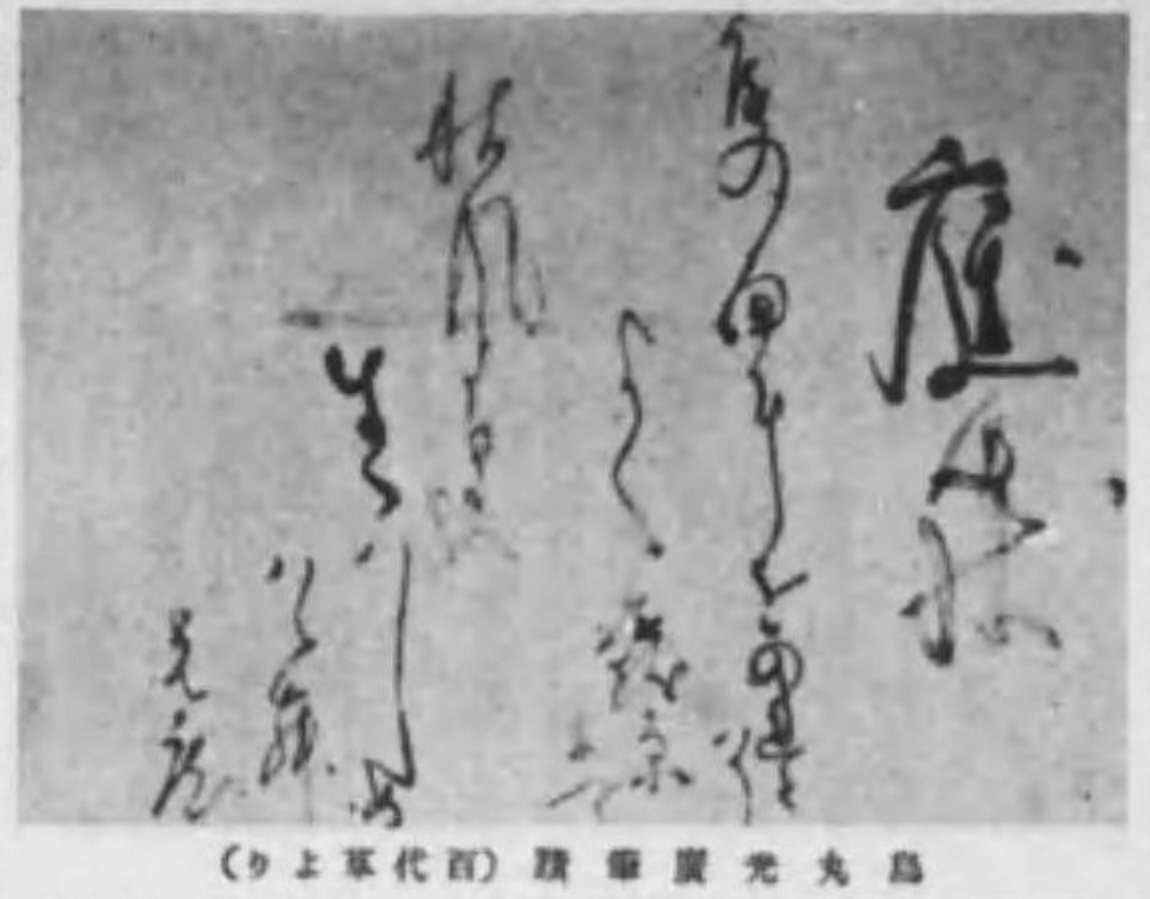
光平 みつひら　歌人・國學者【姓名】伴林氏（普通「はんばやし」と讀むが、光平自ら「ともはやし」と書するものがある）。初名周永。また洲永。通稱六郞【號】蒿齋【生歿】文化十年九月九日河內國南河內郡道明寺村尊光寺に生れ、元治元年（二五二四）二月十九日、京都六角の獄に斬らる。享年五十二。【閱歷】父は賢靜、眞宗の僧侶であつた。六歲、同郡の西願寺に養はれ、苦學多年、十八歲にして一寺の住職となつたが、後、國史を讀むに及んで、皇學を修むべき志を抱き、二十九歲、攝津伊丹に中村良臣を訪うて聞くところあり、更に因幡勝宿加知彌神社の祠官飯田秀雄の許に投じて兄弟の約を結び、秀雄の七郞年平に對して、伴林六郞光平と稱した。伴林は產土の伴林神社に因んだのであつた。ついで紀伊に加納諸平を訪ひ、從學一年、更に江戶に出でて伴信友に學んだ。その後、信友の囑に應じて山陵を調査し、幕末多事の折柄、勤王の大義を唱へ、天下の志士と交つた。文久元年還俗、三年、藤本・松本・吉村等天誅組の大和の義擧に加はつてその記錄掛となり、轉戰數旬、遂に敗れ、光平は捕へられて奈良より京都に送られた。光平獄中にあつて、同志の所因二十餘人に「直毘靈」（別項）を講じ、義擧の顚末を記して「南山踏雲錄」を著はした。明治二十四年、靖國神社に合祀、ついで從四位を追贈せられた。【著作】伴林光平全集二冊（小野利教編、大正八年刊。歌集・文集・上京紀行・垣內の七草・南山踏雲錄・三教一致說等を收む）〇吉野紀行〇月瀨紀行〇園の池水一卷（國書刊行會編、百家隨筆第一冊所收。國學歌道を論じ、尊王愛國の志を述べたもの）〇於茂疑傳草（隨筆。やまと叢誌第五）〇野山のなげき（やまと叢誌第七）〇南山踏雲錄（十津川擧兵見聞四はる・までの獄中日錄）。（以上森）

【歌風】大體に於て、新古今風である。古調も好んでゐたので、さうした風體のものもあるが、何れも自在な詠み口で、滯るところのないのが特徵である。年若い頃に苦しんで勉强し、基礎的なものを根柢に有したので、いざとなると才氣煥發といふ趣があつたのであらう。數多い歌を見ると、さうした面影が見られる。「垣內の七草」を見ても分る。これは、春・夏・秋・冬・戀・旅・賀、卽ち「古今」以後の部類に從つた七題を設け、これを七體の歌として詠んでゐる。一は太古風といひ、紀・記に擬したものである。二は上古風、萬葉調である。三、中古風、古今調。四、近古風。新古今の氣韻に擬してゐる。五、後世風、二條家の流風である。六、近世堂上風、「三玉集」（別項）を擬してゐる。七、當時地下流行風、「顯玉集」の風致を學ぶといふのである。これ等がそれ／＼にその面貌を傳へてゐるのは、單なる技巧とだけでは濟まない。彼の才氣、彼の力量が背後でものをいふやうに思ふ。長歌には特に擬古體と斷つたものさへある。何處かに氣條れがあつたやうで、思ひ切つて古調になれなかつたところに、彼にも新しきものを追ふ心があつたのではなからうか。さうして、さらりとした輕みのある感じの細かい點に、その長所がよく伸びてゐると思ふ。（以上福田）

【參考】伴林光平傳（小野利教著〈全集上卷の內〉）〇伴林光平一代記　武田福冨久

光廣 みつひろ　歌人・假名草子作者【姓】烏丸【生歿】天正七年に生れ、寛永十五年（二二九八）七月十三日歿す。享年六十。【號】泰翁・宗山・法雲院【家系】藤原北家。日野氏の傍流。父光宣は從一位准大臣。長子光賢は中納言となり、細川忠興の女を娶る。孫に權大納言資慶があり、五代の孫內大臣光榮（別項）がある。【閱歷】天正九年、三歲にして叙爵せられ、侍從・左右少辨・藏人に歷任した。慶長四年には左中辨に進み、藏人頭に補せられ、正四位上。後、直ちに右大辨參議に列り、從三位に進む。中院通勝・三條西實條等と共に、細川幽齋に學び、古今傳授を受く。その子孫は代々彼の系統を引く。稀に見る天分と環境とに惠まれ、早くもその學才の凡ならざるを認められ、若くして西洞院時慶・舟橋秀賢等と交遊し、禁裡の御歌會又は御講釋に侍するは勿論、宮中の書籍の整理・保存等の事にも參與してゐた。然るに慶長十四年（三十一歲）圖らずも大不祥事に連坐した。卽ちこの一ケ年來その友大炊御門賴國・花山院忠長・飛鳥井雅賢・難波宗勝・德大寺實久・中御門（松木）宗信・兼康備後守成政・猪熊敎利等と共に、內裏の局數名を北野或は淸水に誘ひ出して密會を續けてゐたと云ふ事である。局衆とは廣橋兼勝の女（典侍）・中院通勝の女（權典侍）・水無瀨氏成の女（掌侍）・唐橋在通の女・兼康成政の妹（命婦）等の人々で何れも名門の子女である。七月四日首領と目された猪熊敎利及び連絡の衝に當つた兼康備後守成政兄妹は死刑に決し、その他はそれぞれ流罪仰付けられた。光廣はただ位官を停められたに過ぎなかつたやうである。やがて慶長十六年四月一日赦されて再び參議左大辨に復した。翌年には權中納言を經て元和二年權大納言に至り、同六年正二位に進み、それより二十四年にして世を去つた。慶長五年秋、幽齋が丹州田邊城に立籠つて三成の包圍に會つた時、天皇いたく歌道の秘訣の絕えん事を惜しまれ、光廣に命じて行きて開城を諭さしめられた。この大任を果した時、光廣は僅かに二十二歲であつた。傳によるとこの時幽齋は戰歿を慮つて、「古今傳授」（別項）の秘錄を傍に封じ、戰死の時を待つて開くべしと、中院通勝・三條西實條・光廣の三人に預けた。併し戰ひ果つるの日、その約を固守した者はただ光廣のみであつた。幽齋大に感じて更に筆外の秘訣を授けたと云ふ。彼の和歌の譽を讚へた傳說は極めて多い。彼の多能は和歌のみに止まらず、狂歌・俳諧にも筆を染め、又幾多の假名草子を書いてゐる。書は父より尊朝法親王流を受けて聲高く、彼の筆に書かれた古典は、數多く現存してゐる。【著作】彼の作と傳へられてゐるものは極めて多いが、明確に信じ得るものは二三を出でない。〇黄葉和歌集九卷〇目覺草二卷〇春の明ほの一卷〇耳底記一卷〇職人盡哥仙三卷〇筆のまよひ一卷〇花見の記〇竹齋二卷（別項）〇仁勢物語二卷（別項）〇尤草子二卷（別項）〇恨之介二卷（別項）〇田夫物語一卷〇伊曾保物語三卷（別項）〇百人一首聞書二卷〇家集二卷〇面授口訣一卷〇蹴鞠書一卷〇東照宮御鎭座本記〇東照權現御遷座之記〇日光山紀行〇東の道の記等。

【人物】幽齋のすゝめに依つて、一糸和尚の許に禪を修めた故か、寛濶恬淡、甚だ逸話に富む。居室十疊ばかりの中に書物を引き廣げ、煤塵は積むに委せ、衾を疊まず隨時睡を取つた。愛用の硯箱は三本入りの扇子箱であり、また後水尾法皇の勅にも拘はらず、邸の修理を固辭したとか、甚だしく入浴を嫌つて、これを强ふれば嬰兒の如く泣いたとか、時には遊里に遊んで戲歌をものして興じたとも傳へてゐる。



烏丸光廣筆蹟（百代草より）

【業績】歌は二條派傳統その儘の作風で、極めて因襲的な特色のない歌を詠んでゐるが、彼の功績は一に近世文學の黎明期に際して、幾多の假名草子を書いてその興隆に貢したと云ふ點にある。彼の諸作は若しその著作の傳を信ずるならば、實に多樣なる形式を取つてゐることに氣付く。そしてその何れもが近世文學の諸形體の先驅をなすものである。例へば「竹齋」（別項）の名所記に於ける、「恨之介」（別項）の戀愛小說に於ける、「仁勢物語」（別項）の古典飜案の滑稽物に於ける等々。なほ外國文學の最初の飜譯者として「伊曾保物語」（別項）の作者に擬せられてゐる。

【參考】大日本史料〇野史〇國學者傳記集成〇近世作家大觀〇新撰列傳體小說史〇新講和歌史　（福見）

三つ面子守 みつめんこもり　「子守」を見よ。

三物 みつもの　連歌・俳諧【名義・名稱】連歌並に俳諧の發句・脇・第三の三つを併せ稱する名。百韻でも五十韻でもこの三句は大切なもので、これを作る者は榮譽となつてゐるから、この三句が自然拔抄されたり、又この三句だけを作つて見たりすることが起つたらしく、かくしてこれが獨立の取扱を受けるやうにもなり、果ては三物といふ名目も起つたものであらう。後に新年を祝つて興行するものになつてから、三物とは天地人三才の義であるとか、發句は天意、脇は地意、第三は人意であるとか、三の數は火の形で陽を貯ふる義であるとか云ふ說などが起つてゐるが、これ等は要するに後から起つた附會說であらう。

【沿革】足利義敎が、永享二年二月十一日北野社で萬句を行つた。その發句・脇・第三を古く抄したものがあるが、これ等が三物の形に於て傳存する最も古いものであらう。この後も「實隆公記」その他の日記などに、發句・脇・第三の三句のみを拔抄したものが幾らも見られるが、そのうち三句のみを作る事も生じたのであらうし、三物といふ名稱も起つたのであらう。俳諧に於ては貞德から見えてゐる。卽ち慶安四年四月德川家光が薨じ、同年五月家綱が征夷大將軍に任じ、翌年九月改元して承應元年となつた時、

元日
御成人の君に來てあふや千代の春　貞德
經り竹にもわたるから鳥　正章
鍬入る・苗代小田の土肥えて　西武

といふ三物を作つた。かくて貞德は毎年三物を組み、必ず正章・西武と共にしたと云はれる。明曆の頃から、連歌・俳諧を通じて三物大に流行し、歲旦に連歌俳諧の宗匠の家で門弟を集めて三物を作り、これを歲旦拔（開）と稱し、又これを刷物として歲旦牒（帳・帖）と稱して市中に鬻ぐやうになり、この鬻ぐ者を三物賣と稱し、高聲に「連歌俳諧の三物」と呼んでこれを賣つた。天和貞享頃の歲旦牒を見ると歲旦三物の外に歲暮や和漢・漢和があつたり、歲旦歲暮の發句があつたりしてゐて、いつからかかくなり來つてゐる。元祿以降も餘風衰へず、都下の宗匠のみならず地方の宗匠も每年三物入の歲旦牒を發行し、それも初めは粗末な製本であつたが、追々華美なものを出すやうになつた。江戶末期には衰へたが、それでも明治に入つてもなほ舊派一般に惰勢を保ち、特に美濃風（別項）はなほ比較的盛んであつた。（福井・荻原）

【參考】三物記北村季吟〇日次記事黒川道祐〇貞德永代記中島隨流〇篇突森川許六〇滑稽太平記北島孝庠〇誹諧名目抄早川宗順〇俳諧附合小鏡大島蓼太〇俳家奇人談竹內玄々一〇燕石雜志瀧澤馬琴〇俳諧歲時記瀧澤馬琴〇貞享式海印錄原田曲齋〇俳諧提要五乳人編著

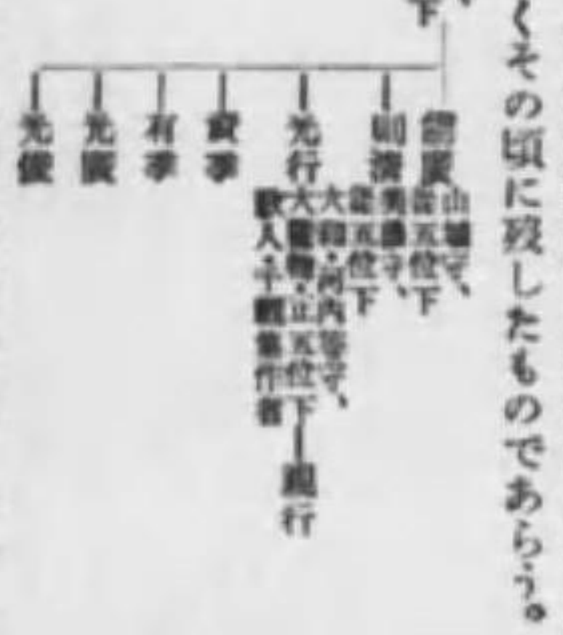
三物拾遺 みつものしふゐ　俳諧集　天地人三冊【編者】仙石廬元坊【成立・刊行】享保庚戌（十五年）三月の自序があるから、當時の刊行であらう。京橘屋治兵衞刊。【解說】或る時、支考の許で、歲旦・歲暮の三ツ物の話から端を發して、「月花の風流より禽獸草木のさま／＼にわたり、節供の遊びも年忘れの笑ひも、三ツ物に組ては目ざましからん。殊更夏冬の第三に至りては季節のわづらひもなく、元より神祇釋敎以下の名目を嫌はねば、虛實も自ら自在にして一卷の曲節も三句に無盡の働きあらん」と、玆にこの書撰集の志を起し、汎く各地俳人の四季の三ツ物を集めたものである。出羽鶴岡連中に始まつて、美濃郡上八幡の連中に至るまで、北越尾濃の俳人の作を主として收め、なほ嘗てその地に芭蕉・支考等が遊んだ折の舊會の作等をも拾つて居り、又名錄として各地俳人の發句をも擧げてゐる。とにかく三ツ物のみを集めて、かく大部の撰集としたものは他に類例がないであらう。（潁原）

三矢重松 みつやしげまつ　國語學者【生歿】明治四年十一月生れ、大正十二年五月十七日歿す。享年五十三。【墓所】東京雜司ケ谷墓地【閱歷】重松は出羽國鶴岡の人で、祖父靜は藩の典學であつた。彼は先づ山形縣尋常中學校に入り、明治二十二年七月同校を卒業した。この間、別に中臺直矢・角田俊次等に就いて漢籍を學び、また庄內英學會で英語を學んだ。當時一家は悲境に沈み、學資に乏しかつたの

で、彼は明治二十三年九月上京して國學院の入學試驗を受け、その第一期の給費生として入學した。同二十六年七月國學院を卒業し、同十一月、文部大臣（西園寺公望）官房圖書課に奉職した。が、大臣と意見を異にしたので諭旨免職になつた。次いで岡山縣高梁中學校敎諭となり、次いで大阪府立第五中學校に轉任した（三十一年四月）。明治三十二年九月嘉納治五郎に招かれて東京へ歸り、神田猿樂町に亦樂書院を設立して支那留學生を敎育した。同三十六年國學院の商議員を囑託せられ、諸種の出版物の編纂校訂に從事した。同四十一年國學院の中に國文學會を組織し、更に大正五年に源氏物語全講會を起して、「源氏物語」の講義を始め、爾後毎週講義を繼續して完了した。この頃東京高等師範學校に敎鞭を執つてゐたが、大正九年八月國學院大學敎授に任命せられた。次いで、同大學へ學位請求論文「古事記に於ける特殊なる訓法の研究」を提出して、歿する直前に文學博士の學位を授與せられた。【業績・著作】國文學にも造詣が深かつたが、專門は國語學殊に文法であつて、有益な研究が多い。著述には左の如きものがある。○高等日本文法（別項）○作歌と助辭一冊（明治四十四年刊。「高等日本文法」の増訂版の卷末にも收む）○古事記に於ける特殊なる訓法一冊（大正十四年二月刊）。【編纂校訂】八代集抄二冊（刊）○勅撰作者部類一冊（刊）○賀茂眞淵全集六冊（刊）等。【參考】双涙錄（堀江月明（國學院雜誌三〇ノ六））○芳賀博士及稻村眞里の弔辭（國學院雜誌二九ノ九）　（龜田）

三山（みつやま）「鬘物の謠曲」を見よ。

光行（みつゆき）　學者【姓】源【法號】寂因（明月記）【生歿】「壬二集」卷七雜下に「寛喜元年入道前河内守光行六十算」とあり、「明月記」寛喜元年十二月十日の條に、「光行入道請取六十賀（其年六十七云々更不得其心）」とあるから、六十と稱した年が、實は六十七であつたことが明かであり、これより逆算して、長寛元年の生れであると推定される。歿年は明かでないが、文暦二年（一八九五）七十三歲以後は、その名が見えないから、恐らくその頃に歿したものであらう。



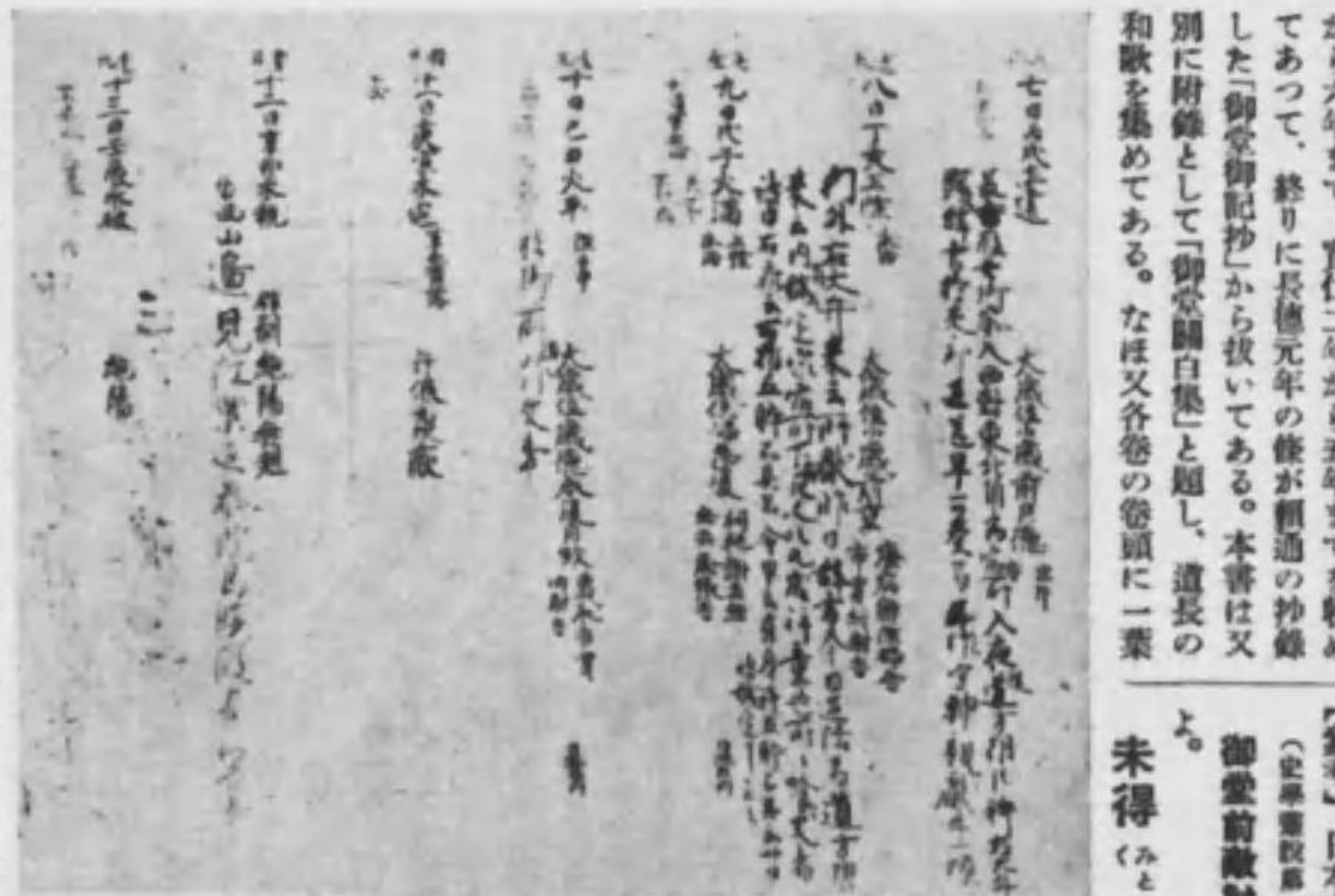
【學統】「原中最祕抄」「紫明抄」等の記述によれば、藤原俊成の影響を受けたらしい。釋正徹の「なぐさめ草」に「抑光源氏の物がたりは、五條の三品入道釋阿、河內守光行等、專是をもてあそばされけるとかや」とあり、「東野州聞書」に「河內流と申は俊成卿第一也」とあつて、源語研究の系統の異なるものでなかつた事を裏書してゐる。【閲歷】治承四年正月二十八日民部大丞に任ぜられ（玉葉）、同四月二十一日從五位下に叙せられ（山槐記）、又建久二年以前に於て大和守となり、從五位上に叙せられてゐる筈である。壽永三年四月十四日、父豐前守光季（光遠とも）の平家に與して罪を得たのを愁訴せんがために鎌倉に下向し、建久十年二月四日、源賴家、征夷大將軍に任ぜられるや政所に侍候した。元久元年四月十三日正五位下に叙せられ、その年「蒙求和歌」十四卷を著はした。この頃「源氏物語」を校訂し、又俊成を初め諸家の考說を集め、註釋の業に從つた（原中最祕抄）。元久二年十一月三十日左馬允に任ぜられ（明月記）、建暦三年四月七日大監物に任ぜられた（勅撰作者部類）。承久三年五月十九日、義時追討の宣旨に關して罪を得、將に誅せられんとするや、子、親行泣いて死罪を許されんことを訴へ、辛うじて救はれた（吾妻鏡）。後、京都に歸り、寛喜元年關東に下つた（明月記）。文暦二年二月四日相地に關し、同じく六月三十日六月祓に關し、幕府の諮詢に對して意見を答申した。時に光行七十三歲である。その後の光行の動靜は不詳。光行はその子親行と共に文學・故實の道に精しく、「源氏物語」の校本を作り、「水原抄」の草案を起し、屢々和歌・連歌の會或は歌合に出席した（原中最祕抄奥書）。光行は、「平家物語」の編纂に關係したらしく（平家物語考）、また子親行とともに、「東關紀行」の著者にも擬せられてゐる（東關紀行解題）。【著作】（和歌）「月詣和歌集」羇旅に一、戀に一、「民部卿藤原經房家歌合」に五、「東撰和歌六帖」に五、「夫木抄」に十二首あり、又「勅撰作者部類」によれば、「千載集」冬に一、戀二に一、戀三に一、「新古今集」雜上に一、「新勅撰集」雜一に二、雜二に一、「續後撰集」雜中に一、「續古今集」雜中に一、「續拾遺集」雜春に一、「新後撰集」雜上に一、「玉葉集」春下に一、「續後拾遺集」雜下に一、「風雅集」秋下に一、「新千載集」雜下に一、「新拾遺集」冬に一、戀三に一、「新後拾遺集」雜下に一、「新續古今集」雜上に一首を收められてゐる。【著書】水原抄（別項）○蒙求和歌十四卷（元久元年秋成。蒙求の中から百五十餘の故事を抄出し、國語に譯して、部類毎に、四季・雜・戀の和歌を配して詠んだもの）○百詠和歌十二卷（元久元年十月成。自詠二百四十首を撰んで註を加へたもの）。　（池田）

【參考】東關紀行評解（島野幸次）○水原抄紫明抄の撰者（山脇毅（藝文一二ノ一））○源光行親行年譜上下（同上（藝文一二ノ四・五））○源氏物語研究史の新資料（岡本堅吾（國語と國文學二ノ一〇））

光世（みつよ）　有職家【姓】裏松【法號】固禪【生歿】元文元年（二三九六）十一月十一日生れ、文化元年（二四六四）七月二十六日歿す。享年六十九。【閲歷】前權中納言益光の子。延享四年、十二歲で家督を相續し、從五位下に叙せられた。寛延二年（十四歲）元服、昇殿を許され、左兵衞佐に任ぜられた。寶暦六年（二十一歲）八月、右少辨に任ぜられ、同八年藏人に補せられ、次いで左少辨御祈奉行・氏院別當となる。同年、竹內式部の事に坐して永く蟄居の身となつた。彼の大著「大內裏圖考證」は、實にこの蟄居三十年間の收穫であつた。又この年十二月、父を喪つた。然るに天明八年內裏炎上し、老中松平定信が造營の事を掌ることとなり、光世の有職に精しいことを聞いて問ふところがあつた時、その著書を示すと、大に歎賞せられ、奏してその蟄居を解かれた。爾來內裏造營の事に關して、種々その間に處することとなつた。寛政二年新內裏竣工し、往古の制に復することを得たのは、光世獻替の功、與つて大に力あつた。寛政十年六十三歲で薙髪した。なほ前年「大內裏圖考證」を獻上し、終身金幣を賜はるの恩典に浴した。明治二十四年從四位を追贈された。【著書】大內裏圖考證（別項）○皇居年表五冊（明治十八年刊、延暦十三年以降安貞元年に至る皇居及び殿舍の年表。故實叢書所收）○皇居年表續篇五卷九冊（安貞二年以降元和三年に至り、第五卷は附錄兩朝として延元元年以降元中九年まで記してある）。　（石村）

三手文庫（みてぶんこ）　文庫【解說】京都上加茂別雷神社の社家に屬してゐた文庫。はじめ神社に屬する社家（東・西・中央の三手に分れてゐた）が書物講を作つて國書の蒐集に努め、その藏備を三手文庫と稱した。然るに今井似閑（別項）が、晩年に自著「萬葉緯」を初め、僧契沖の自筆本や手澤本等、計二百餘部を寄進することを申出で（自筆の奉納目錄が、三手文庫に藏されてゐる）、その歿後それ等が文庫に移されるに及んで、文庫の藏書も多くなり、有數のものになるに至つた（全部移し終つたのは、元文四年の頃らしい）。似閑がその藏書を獻納するに至つたのは、當時の祠官岡本淸茂と交り、その好意によつて文庫に藏する珍書を閱覽することが出來たのを德としてのことであつたらしい。似閑は、若沖・忠肅と並んで契沖門下として學殖に富み、著書にも優れて居つた。而して契沖と最も關係深く、契沖の遺書も、彼の手を經てこの文庫に納められ、契沖研究に又となない資料を傳へたのである（似閑參照）。この文庫は明治になつてから、上加茂別雷神社の有に歸した。【參考】加茂の文庫と今井似閑 龜岡宮村（國學院雜誌一六ノ四）　（植松・狩野）

御堂關白記（みだうくわんぱくき）　日記　二冊【著者】御堂關白道長【別名】「道長公記」「法成寺攝政記」「御堂御記」「御堂御暦日記」【諸本】道長自筆本は「御堂御暦日記」の名に依つても知られる如く具注暦に書いたもので、十三卷あつて今近衞公爵家に傳はつてゐる。道長の子賴通の寫した本は十六卷あつて、これ亦同家に傳はり、年次が自筆本と出入するところがあつて、自筆本の闕を補ふことが出來る。日本古典全集本は宮內省圖書寮藏の以上の二書の寫本に據つたものである。この外、傳寫本も多く、更に闕文のあるのが多いやうである。【解說】もと三十六卷あつたのが、後、散佚したもので、古典全集本によれば、上卷には長德四年、長保元・二・六年、寛弘二年から八年まで、下卷には寛弘九年、長和二年、同四年から六年まで、寛仁二年から五年までを收めてあつて、終りに長德元年の條が賴通の抄錄した「御堂御記抄」から拔いてある。本書は又別に附錄として「御堂關白集」と題し、道長の和歌を集めてある。なほ又各卷の卷頭に一葉づつ日記の一節をコロタイプ版にしたものを掲げて道長の筆蹟を示し、且つ日記の體裁の一端を知るのに便じてゐる。【參考】日本古典全集解題○歷世記錄 星野恒（史學叢說第一集）　（石村）


道長自筆御堂關白記（近衞公爵家藏）

御堂前敵討（みだうまへかたきうち）「敵討御未刻太鼓」を見よ。

未得（みとく）　俳人・狂歌師【姓名】石田氏。又左衞門【別號】乾堂【生歿】天正十五年生れ、寛文九年（二三二九）七月十八日歿。享年八十三。【法名】自性院未得居士【墓所】東京淺草田島町誓願寺【俳系】松永貞德（別項）門【閲歷】江戶五俳哲（別項）の一人である。江戶兩替町に住したが、一時故ありて相州小田原に隱れ、又江戶に出て神田鍋町に住し、狂歌を以て門戶を張つたが、後、京に上り、令德（別項）に親しみ、貞德の門に入る。狂歌はその調、圓滑流麗、落想また奇警で、當時卜養（別項）と並び稱せられた。寛文年間自詠の狂歌を集め、「吾吟我集」（別項）を著はし、高名となつた。歿後その子要之助が未得と號して亡父の業を繼いだが、三世未陌に至つてその跡を絶つた。俳諧は「滑稽太平記」の說によると、その附けやうは、前の字を取成して心を格外に遣つて居つたが、後、あらぬ事を言ひ散らすやうになり、興盡きて、人々にうとまれたといふことである。　（野崎・萩原）【參考】誹諧家譜拾遺集○滑稽太平記○俳家奇人談○誹諧名家錄○誹家大系圖○採菊叢筆○俳家系圖 大野酒竹○俳諧年表 星野麥人

未得筆蹟

水戶史館珍籍考（みとしくわんちんせきかう）「和漢雜笑或問」を見よ。

三富朽葉（みとみきうえふ）　詩人【本名】義臣【生歿】明治二十二年八月十四日、長崎縣壹岐郡武生村に生れ、大正六年八月二日、常陸國犬吠岬海岸に於て友人今井白楊と游泳中溺死した。享年二十九。【閲歷】曉星中學を經、早稻田大學英文科を出た。明治四十二年自由詩社同人となり、人見東明・加藤介春・福田夕咲・今井白楊等と「自然と印象」に詩作を發表した。後、佛蘭西象徵派の詩人の研究に沒頭し、ヹルレエヌ、マラルメ、ランボオ等の詩を飜譯、更に「ヹルハアレンの研究」を「早稻田文學」誌上に連載した。【作品・作風】生前には一冊の集もなかつたが、死後、增田篤夫・福士幸次郎等により「三富朽葉追悼錄」が編まれ、又「三富朽葉詩集」（第一書房）が出版された。その詩は佛蘭西近代詩の影響を受け、纖細な神經と敏感とをもち、明るく華やかな中に一味の哀感をも藏してゐた。ことに語感の清新であつたことが一つの特徴である。現代詩人全集第三卷（新潮社）所收。　（川路）

水上瀧太郎 みなかみたきたらう

小說家・戲曲家

【本名】阿部章藏【別號】はじめ阿部省三と署名した。【閱歷】明治二十年十二月六日、東京麻布飯倉に生る。慶應義塾幼稚舍及び普通部を經て同大學部理財科に入り、明治四十五年業を終へ、その年アメリカに赴いて更にハアヴァード大學に學ぶ。大正三年イギリスに渡り、翌四年フランスに移り、歐洲大戰中の倫敦巴里の生活に親しむ。大正五年歸朝、父の創立にかゝる明治生命保險株式會社に入社した。翌六年大阪支店詰となり、大正八年東京本店に復歸して勤務を續け、現在總務主事の要職にある。大正十年母方の親戚俣野都と結婚。作家生活は明治四十四年七月、小說の處女作「山の手の子」を「三田文學」に發表したに始まる。年少の頃より文學を愛好して泉鏡花の作を耽讀し、後年ポオ、更にトルストイに傾倒し、遊學中も創作の筆を絕たず、特に永井荷風去つて以來の三田文學振興のために不斷の力を致して來た。同誌一度廢刊せらるゝや久保田万太郎（別項）等と協力してこれを復活更生せしめ、三田派の總帥として後進の誘掖に獻身的に努めてゐる。【著作】「處女作」「その春の頃」「心づくし」「海上日記」「旅情」「大空の下」「亞米利加記念帖」「日曜」「葡萄酒」「大阪」「明窓集」「勤人」「大阪の宿」「果樹」「月光集」等の創作集及び長篇小說の外、評論及び感想集として四冊の「貝殼追放」を刊行してゐる。選集としては明治大正文學全集第三十八卷（久保田・水上篇）がある。代表的な作品としては、小說に「山の手の子」「日曜」「葵京雜記」「大阪」「勤人」「大阪の宿」等を擧ぐべく、約十篇ある戲曲の中では「律子と瑞枝」が最も傑出した作品である。

【作風】新浪漫派に屬すべき作家であつて、その描法はつねに正統的な寫實的筆致に依り、極めて健全なモラリストの精神を保持してゐる。作家のおろそかならぬ生活態度が、自ら凛然たる氣魄となつて現はれ、モラルに執する熱情が基調をなして多くの作品に生命を與へてゐる。しかしそれ等は、決して何物かを主張する文學ではなく、作家は寧ろ人生の味を正しく味はひ樂しまうとする立場にあり、主として勤人である、作家である男の周圍に展開される世相と詩情とを靜かに觀じ描いてゐる。さういふ中にも「日曜」あたりを境として、前期の時代は特に主情の色が濃く、中頃以後はずつと批判的分子が加はつて來たが、「大阪の宿」以來、この兩者をば漸く混融して作風の渾熟を示し、明かなる作家的成長を語つてゐる。特に作者の好んで書く勤人生活を描けるものの如き、新しき時代の風俗畫的作品として極めて優れた出來榮えであり、特殊の價値を有するものである。ただその人生觀照が尖銳深刻といふよりは、落着いた的確なものであるため、間々常識的だといふ譏りは免れ得ない。餘りにかつちりと作品の構造を整へ過ぎて、やゝ平板な感じを與へる作風と共に難ぜられる所以である。併し近年の作品は、枯淡味をさへ帶び、隨筆的心境とも云ふべき獨自の風格を有つて來てゐる。評論家としては識見の廣さ、理解の豐かさに加ふるに、道義に執する熱情が、その言說を非常に力強いものにして居り、顧慮なき直言がこれを一層權威づけてゐる。

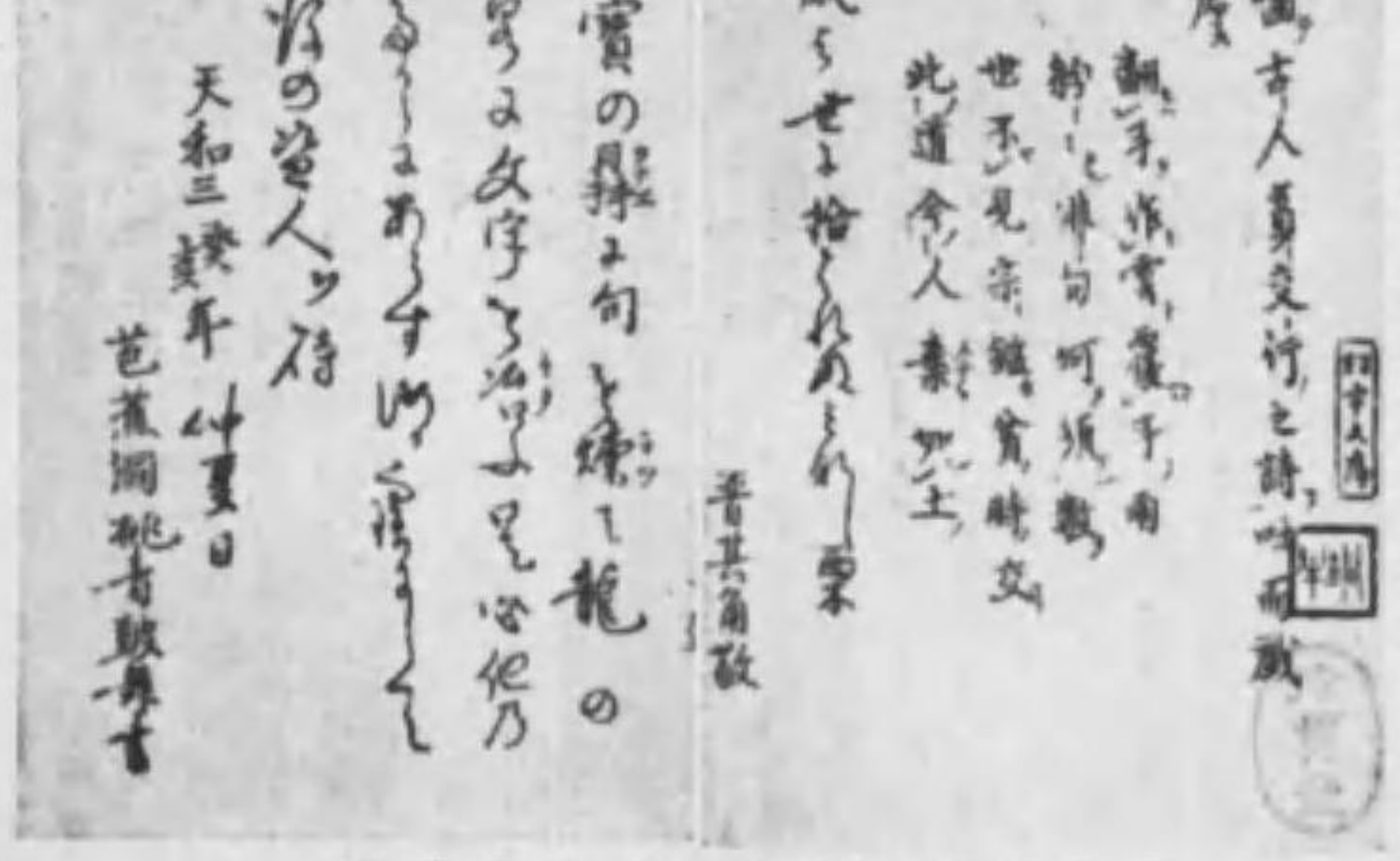
【參考】生を味ふ心　相馬御風（靜明期の文學）○三田文學（大正一五ノ一一・一二）　（水木）

虛栗 みなしぐり

俳諧集　上下二冊【撰者】寶井其角【名義】其角の自序に附してゐる句の「凩よ世に拾はれぬみなし栗」から出てゐる語で、世人の見落してゐる新風であるといふ意味を寓してゐるものと解せられる。【刊行】天和三年【諸本】其角七部集所收本がある。其角全集（俳諧文庫）・其角全集（勝峯晉風編）・蕉門俳諧前集（俳諧大系）等所收。【內容】卷頭に杜甫の「貧交行」の詩に擬した其角の餞序があり、卷尾に「芭蕉洞桃青鼓舞書」と署する芭蕉の跋がある。上卷には改正（春）・改夏（夏）の二季、下卷には改秋（秋）・上冬（冬）の二季を收め、この各季に發句と連句とがあり、その連句は、春は歌仙二卷、夏は歌仙二卷と二十五句一卷、秋は歌仙二卷、冬は歌仙三卷、都合十卷である。即ち各季全體として云へば、春は芭蕉及び蕉門の人々並に貞門・談林の人の發句百二十三句と芭蕉・一晶・嵐雪・其角・嵐蘭五吟歌仙一卷、藤匂子・其角兩吟歌仙一卷、外に其角・嵐雪・藤匂の三ツ物三章及び其角・李下・柳興の三ツ物三章があり、夏は發句百十三句と千之・其角兩吟歌仙一卷、擧白・其角・嵐雪三吟二十五句一卷、翠紅・才丸・一晶・其角・四兩五吟歌仙一卷があり、秋は發句九十八句と嵐雪・其角兩吟歌仙一卷、楓興・其角・柳興・長吁四吟歌仙一卷があり、冬は發句八十一句と才丸・子堂・其角三吟歌仙一卷、李下・其角兩吟歌仙一卷、其角・芭蕉兩吟歌仙一卷がある。集中の發句の中に、素堂の寄興十唱や、宗因・嵐雪・其角の三夕の發句や、風朝・芭蕉・嵐雪の漢和聯句（別項）の發句の重陽三句があるなど、四季それぞれに何等か趣向の施されてゐることが特に注意される。【史的地位】本書は、古來芭蕉の新風開發の劃期的撰集として尊ばれてゐる。去來は「先師變風に於けるも、みなし栗生じて次韻枯れ、冬の日出でゝみなし栗落つ」（俳諧問答）と論じ、曲齋は「抑正風の始は延寶五の兩吟より起り、同九の次韻に流行し（草中の草）、天和三の虛栗に一變し」（七部集心鏡）と云ひ、蓼太はこれを七部集中の一つに數へてゐる（蕉門一夜口授）。【價値】芭蕉の跋には、漢詩や和歌の情味を取り込んだ新風であるかの如くに高唱してゐるが、表現が佶屈聱牙で、意味を難解ならしめ、怪奇な思想、放縱な故事の翻案が情趣を削減してゐて、新風鼓吹の意氣は稱すべきであるが、まだ〳〵正風の醇正な集とは考へられない。蓼太は「みなし栗は奇書なり。人をして活達ならしむ。卷中に氣韻高致の吟多し」（蕉門一夜口授）と論じてゐるのであるが、中には當時に於て稀な佳作もあつて、醇正な幽玄の境地に近づきつつあることを示してゐるものも見えるけれども、去來の說の如く、「冬の日」が出づれば「虛栗」は地に落つと言つてよいやうな集である。

【影響】「新虛栗」の附言によると、當時貞門の明石居士なる者が「貞德翅」なるものを著はして本集を非難したと云ふが、古風の者が新風を理解し得ないのは當然であるけれども、兎に角新風として古風に目を瞠らせたことは察せられる。几董の說に、「加賀州中に天和・延寶の調に彷彿たる一派あり」（同島序）とあるは、蓼太一派を指したので、蓼太は本集に全く傾倒し、その結果「新虛栗」（別項）の撰があつたのであり、蕪村の如きも、若き時既に「專らみなし栗・冬の日の高踏をしたふ」（几董記）と云つてゐるのである。かくの如く本集は安永・天明の復興俳諧には、その感化影響が多大であつたのである。

【參考】俳諧問答　森川許六○蕉門一夜口授　蓼太○新虛栗（蓼太みなし栗の序）同上　（宮田）



虛栗の序及び跋（松宇文庫藏）

天和三癸亥年仲夏日

芭蕉洞桃青鼓舞書

水無月祓 みなづきばらひ

「狂女物の謡曲」を見よ。

水無瀨三吟百韻 みなせさんぎんひやくゐん

連歌一卷【諸本】續群書類從連歌部に所收。【解說】長享二年正月に宗祇・肖柏・宗長の師弟三人が興行した三吟百韻で、發句に「何人」を賦した賦物（別項）の連歌である。第三までを擧げると、

雪ながら山本かすむ夕べかな　宗祇
行く水遠く梅にほふ里　肖柏
河風に一むら柳春見えて　宗長

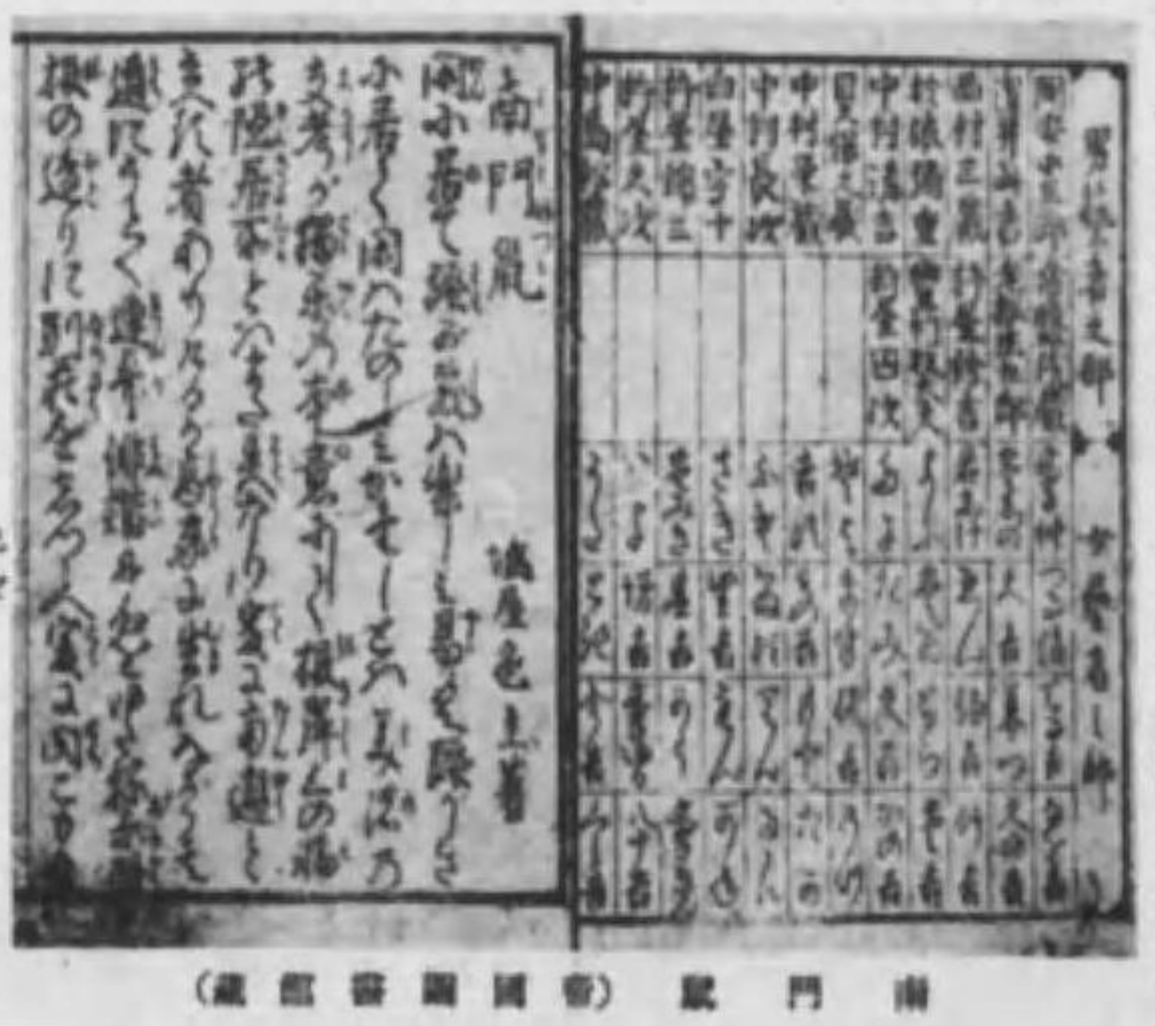
の如きで、發句の賦物は「山人」と賦したものと思はれる。宗祇の連歌集「下草」（別項）の中に、この發句に「水無瀨の御廟法樂に」の前書を附して收めてあるから、後鳥羽院を奉祀した水無瀨宮（明應三年勅に依り創建）の法樂連歌として興行したものである事が知られ、從つて發句を後鳥羽院の水無瀨殿に於ての御詠の「見渡せば山本かすむ水無瀨川夕べは秋と何思ひけむ」の歌の本歌取にしてゐる所以も了解される。然るにこの三吟百韻は、技倆の優れた宗祇師弟三人が愼重に作したものと見えて、句々にも佳句が多く式目上の運びや附肌も模範的なものであるとして、古來連歌の典型として稱揚されてゐる。宗養の「天水抄」には、これを連歌の範として表八句を評釋し、多大の讚辭を捧げてゐる。　（赤田）

南門鼠 みなとねずみ

洒落本　一冊【作者】讚屋色主（讚谷散二）【名稱】書名は當時流行の染色の名を採り、品川を意味する南門の當字を用ひた。【刊行】寬政十二年【諸本】德川文藝類聚第五・洒落本大系第九卷所收。【題材】本書扉に品川細見とあり、品川の男女藝者名を一頁に擧げてある等、全く吉原細見に擬したものである。【梗槪】芝赤羽根のほとりの別莊に住む市遊と云ふ商家の樂隱居の許に、北庵・東二郎・西助等が來り、話は品川遊廓に及んだ。十八軒の大見世の內表二階に窓のない家は何處、藝者の貰ふ祝儀一步のうち藝者が八百八十文、會所へ百五十文、口をかけに來た人に十二文、かけ集めに十六文取られる話、遊女の樂屋の話、藝のある遊女の話等、みな品川通の事とて穿ちが盡きない。語るのは多く北庵・西助、質問するのは東二郎である。更に話は遊女と客の戀のいきさつになる。大松の遊女おしうの許へ、新伊豆屋の客と錦大和の客とが通ひ詰め、落ち合つて兩人の間に爭ひが起つた。その時の伊豆屋の客のとつた態度に感じて、おしうと仲の惡いお竹が戀した話。とど一同打揃つて品川へ出かける。【解說】品川を題材とした洒落本は、本書以前にかなり多く刊行されたが、品川遊里の通をこれ程微細に穿つた書はない。全く山東京傳が吉原に對して行つた觀察を品川に對してなしたもの。作者の處女作であるから力が籠つてゐるのは勿論、かゝる通を示さんための著作であつた。最後に「モウうがちに忘れた事はねへか」と言はしめてゐる點から見ても、作者の自信が推知される。實に彼の代表作出世作でもあつた。併し絕板を命ぜられたことが「戲作者小傳」及び本作の後編「鼠婦」（別項）に見えてゐる。內容が淫猥でもないのにかゝる處刑を受けたのは、妓樓茶屋の名稱等を實際のまゝ記した爲めであらう。　（山崎）

湊の月 みなとのつき

人情本　二編六冊【作者】松亭金水【畫工】歌川國直【名稱】題簽には、「美那登の月」とあり、（花鼠拾遺）の角書がある。【刊行】明記してない。「花鼠」（別項）に依つて考へるに、弘化年間であらう。【題材】角書にある如く、作者の前作「花鼠」の拾遺で、これによつて主人公小島屋松次郎對お芳・小濱・お寅・お絹等の關係を說いて終局を附けんとしたのである。【梗槪】お絹は、日頃親び慕ふ小島屋松次郎の妻となつて良人によく仕へたが、松次郎の愛する他の女達の苦しい境遇に同情して絕えず心を惱ましてゐた。荏土の小濱は松次郎の使と稱する伍八に連れ出されて消息を絕つてゐる。松次郎も驚いて心當りを問ひ合せたけれども知れない。或る日お絹は名越の別莊に兄長五郎を睥ねようと出かけ、長谷觀音境內で圖らずもお芳が水茶屋女を勤めてゐるのに逢ひ、お寅が出產して兄の許で養はれてゐる事、荏土でお芳の從妹小濱が松次郎に愛せられて



南門鼠（帝國圖書館藏）

ゐたが、偽使ひのために誘拐された事等をお芳に告げる。お芳は小濱の事は初耳でただ驚く許りである。さてお鶴は名越の別荘に兄長五郎を尋ねたけれども、兄はお寅母子、俳諧師其蔵等を連れ、榎島方面に旅行してゐたので空しく歸つた。松次郎はお芳の在所を知り、折々通うて舊交を温めた。お龜は珠吉と通じて松次郎に放逐され、神奈川に同棲してゐたが、珠吉が病死したので、更に近所の無頼漢伍八と同棲し、金に窮した餘り、密かに伍八を松次郎の使と偽り小濱をおびき出し、神奈川の藝者に賣つてしまつた。長五郎はお寅等を連れて旅行の歸途、神奈川驛の旅館加爾澤に泊り藝者を招くと、その中に小濱がゐた。仔細を聞いて同情し、年期三十兩を拂つて同行して名越の別荘に歸つて來る。お鶴は再び兄を訪れて小濱に逢ひ、自宅に連れ歸つて小間使にする。松次郎は小濱を見て、痛し痒しの心地でゐる。伍八・お龜は、小濱の身代金で上方へ旅する途中、お龜は日頃の荒淫が一時に出でて顔が醜くなつたので、伍八に捨てられてしまひ、遂には盲目となり、乞食になつて行倒れとなつたが、伍八も同樣乞食となつてしまつた。長五郎は大病に罹つた。一番心配してゐるのはお絹である。曾ては松次郎を慕つたが、今は及ばぬものと諦めてはゐるが、長五郎の俠氣が身に沁みて嬉しく、一心に看護し、はては水垢離とつて快復を祈願するのであつた。長五郎は漸く全快した。お絹の眞實を嬉しく思ひ、人にも勸められ正式に結婚した。お芳は全く義理を思つて松次郎と緣を切り、兄妹分となつて仲々睦ましく暮した。

【構想】「花匠」の複雜な筋に解決を下さうと苦心したらしく、單に筋のみを説明してゐるが、長谷觀音（實は淺草寺）境内の描寫や、長五郎等一行の榎島（江の島）廻りの對話に、江戸時代の諧謔氣分を滲み出さしてゐる。結末に於て小濱が改めて松次郎の妾となつたとも、子までなした仲のお寅を妾にして引取つたとも説明してゐないのは、流石に作者が當局を憚り、讀者の道德觀に遠慮したのであらう。（山崎）

南小泉村（みなみこいづみむら）　小説　【作者】眞山青果【發表】明治四十年五月「新潮」。同四十一年十月、「中央公論」。【刊行】明治四十二年十月、短篇集「南小泉村」に所收（今古堂書店）。後、代表的名作選集に收む。

【梗概】百姓ほどみじめなものはない。取分け奧州の小百姓は、それが酷い。地を這ふ爬蟲の一生だ。不快だ。僕は彼等の間に田舍醫者となつて一年以上を送つたことがある。仙臺の南はづれにある南小泉村――二百戸ばかりで、士族が二軒、水車場・駄菓子屋、それに提灯屋、外は皆百姓で、石油・醬油・蠟燭位の日用品は區長の家で取次ぐ。百姓は耕作だけでは活計が立たぬので、半分は桑園ものでやつと生きてゐる。だから金の有難味は骨の髓まで滲みこんで欲得の爭ひが絶えない。若者同士の肆な情交でも、ただ體と體とが觸れ合ふといふだけの考だつた。――僕はそこへ、或る醫院の出張所の代診として移つて行つた。そこで最初に見出した患者、それは化膿性肋膜炎を患つてゐる六十近い老婆だ。眞暗な、饐臭ひ、ムッとする家の中で、汚い卷蒲團にもたれて、肩で呼吸をしながら、按摩膏だらけの汗臭い胸を突き出して、家傳藥だの、お禁厭だのと十兩からの金を誤魔化されたとこぼす。そして嫁と老爺が怪しいと毒づく。これが百姓の縮圖だ。その次には、僕は村の有力者を知ることが出來た。村へ來た披露の挨拶を勸められたからである。だが、それは傲慢と貪婪と好色と沒義道漢とに外ならなかつた。

【解説】この作は、最初もつと大部のものになる筈であつたらしい。その故であらうか、短篇としては整つたものとはいへない。後に發表された「あの家この家」「馬盗人」「手斧」「お灸屋の兄弟」など、この一聯の短篇は、同樣に南小泉村を扱つた作品であつて、各篇の間には一脈の關聯がある。以上の諸作はすべて短篇集「南小泉村」に收められてゐる。東北の農村を舞臺として、蒙昧なる農民生活を通じて深刻な人間苦を描けるもの。無遠慮に方言を驅使して、鮮明にロオカル・カラアを出してゐる。藤村の「破戒」（同項）を初めとしてロオカル・カラアの描出も、自然主義文學の重要なる一分野を示してゐるが、本篇も亦その點で世評を動かした。勁烈な荒けづりの文章も一特色であつたが、やゝ誇張に墮したといふ批評もあつた。いづれにしろ小説家としての青果を記念する代表的作品である。（加藤）

南新二（みなみしんじ）　戯作者【本名】谷村要助【別號】東宮三二・北古三・馬の武左衞。茶道の名は又照庵宗夕。俳號布川【生歿】天保六年正月七日下谷仲御徒町に生れ、明治二十八年十二月二十九日歿す（臨濟宗）。享年六十一。【閲歷】世々徳川幕府の御數寄屋坊主で、幼名を陽之助といひ、父兄の職を繼いで御坊主となり、春育、後に三育と名乘つたが、慶應二年茶道召上げで散兵組に編入され、谷村要太といつた。指圖役並に進み、伏見の役に出戰したが、敗走東歸し、散兵頭福田八郎左衞門に從つて房總地方に脫走した。明治元年四月江戸に歸り、歸商して更野屋太郎兵衞と改め、上野山下に書畫骨董店を開いた。間もなく商賣に失敗し、大阪に流寓したが、明治三・四年頃歸京し、和泉屋（吉村甚兵衞）の回漕會社に入り、引續いて通運會社に勸め、聊か生活の安定を得ると共に戯作の筆を弄し、新聞投書家の仲間入りをした。この頃南新堀二丁目にゐたので南新二と號したのだといふ。が、道樂が一歩進んで本業の新聞記者となり、東京繪入・東京日日・やまと新聞と三轉した。小説を書いたのは二十二年「新小説」の「蓮池の水禽」が最初である。二十五年三月腦溢血に罹り、一度恢復したが、終に同じ病氣で湯島天神下の寓居で歿した。【作品】初期の戯文類で新聞に出たものを別として、「釣慈」「鎌倉武士」「文車」（小説集）「甲子待」「馬笑ひ」等の單行本の外、「蓮池の水禽」「夢の夢」「長し短し」「まはり燈籠」等、雜誌に載つたまゝのものが可なりある。初期の戯文の代表的なものは、遺稿集「南新二輕妙集」に收められてゐる。

【批評】新二の小説は二種に分れる。「蓮池の水禽」「釣慈」「田植笠」の如き、やゝ眞面目な作物（主として時代物）と、「鎌倉武士」「筑波裾野獵牧狩」「道中すごろく」「ありあまる」の如き、滑稽と洒落と輕妙な諷刺とを主とした作物とである。前者は文辭の老練といふ外、格別優れた作はない。新二本來の面目を語るものは後者である。江戸戯作文學の氣分が濃いので、明治文學としては傍系のものであるが、淡い人情味と枯れた俳味を交へた洗練された彼のユーモアには捨て難い味がある。（柳田（泉））

源順集（みなもとのしたがふしふ）　歌集　一卷（又は二卷）一冊【作者】源順【別名】「權小草内和歌」。源英明の「源氏小草」五卷に次ぐの意か。【諸本】（一）群書類從二四九所載本、（二）歌仙歌集本の外、内容の多少相違する寫本、（イ）（ロ）が圖書寮にある。歌の數、（一）は二百二首、うち長歌二首（一首缺）であるが、（二）は短歌が六首少く雙六の盤の歌がない。歌の順序は多少相違する。（イ）二卷は（一）類從本と同系統であるが、數首少く、奧にこの集は定家の姉八條院坊門局の眞筆云々と記した元和五年藤中將の奧書がある。（ロ）二卷は（イ）と比較して、上下の卷を逆にしてゐる。【内容】本集は單なる歌集ではなく、多くの序、全然獨立した前栽合、特殊の歌等を含んでゐる。序には西宮左大臣高明の家の紅梅が初めて咲くのを悦び、文字一つをさぐりてよむ歌の序、貞元元年十月二十七日庚申の夜、いつきの宮にて「松の聲よるの琴に入る」といふ題にて奉る歌の序があり、何れも題・序・歌の三段に書き分けられてゐる。前栽合は天祿三年九月二十二日行はれたもので、十番二十首、序、判詞、判の歌十四首から成つてゐる。特殊の歌は天地の歌四十八首、雙六の盤の歌、世の中十首がある。天地の歌は四十八首の沓冠の一字を横に連ねると、上下共に天・地・星・空・山・川・峯・谷・雲・霧の如くなるものにて、「曾丹集」「相模集」（各別項）にも例がある。雙六の盤の歌は二種あつて、一は雙六の目の如く文字をならべて十五首の歌が成立するもの、一は六六三十六畫に分つ線に文字をおいて十四首の歌が成立し、三十六畫内にも一首づつの歌を書き込み、合計五十首となるものである。而して天地の歌、雙六の歌は、共に有忠が詠んだものへの返しである。世の中十首は、滿誓の「世の中を何にたとへん」に擬したもので、十首とも初め二句は「世の中を何にたとへん」にて第三句以下が異なる。應和元年二兒を失つて詠んだものである。同書中注目すべきものには、「後撰集」撰修の當時の模樣を記したものがある。集團をなす歌には康保五年（イ二年）女五男八宮の屏風歌二十三首、天元二年宣旨によつて上る屏風歌二十二首、高明大饗の屏風歌十八首等がある。（關參照）（西下）

水沫集（みなわしふ）　詩文集【著者】森鷗外【名稱】「美奈和集」とも書く。【刊行】明治二十七年七月初版、同三十九年五月改訂版發行。

【内容】創作「うたかたの記」「舞姫」「文づかひ」（以上別項）三篇の外に、主として「しがらみ草紙」や、「國民之友」に發表して來た飜譯の業績を收載してある。即ち小説には、佛蘭西のドオデエの「戰僧」「みくづ」「緑葉歎」。獨逸のハックレンデルの「黄綬章」「ふた夜」、クライストの「惡因緣」「地震」、ステルンの「うき世の波」、ホフマンの「玉を懷いて罪あり」、シュピンの「埋木」（別項）。露西亞はトルストイの「瑞西館」とツルゲニエフの「該撒」、亞米利加のアルギングが「新浦島」とブレット・ハアトの「洪水」。以上の十四篇である。また戯曲は西班牙のカルデロン作「ザラメヤ村長」と獨逸のシルレル作「エミリヤ・ガロッテイ」の二曲で、前者を「調高矣洋絃一曲」、後者を「折薔薇」と題し、いづれも三木竹二との共譯に成るものである。更に附錄として、譯詩集「於母影」（別項）を添へてゐる。「平家物語」や明の高青邱等の詩十九篇が邦譯、又は漢譯され、新聲社譯と署されてゐる。【批評】右の創作三篇が當時の文壇に如何なる感銘を與へたかは、その各項に就いて述べたが、從來の江戸文學の脈を引いた作品とは全然ちがつて、一種清新なロマンティックな雰圍氣を發散してゐる點が、どんなにか魅力的な驚異であつたらう。これ等「舞姫」にせよ、「うたかたの記」にせよ、「文づかひ」にせよ、いはば一個可憐な「物語」にしか過ぎないが、しかもこれを當時流布の作品と較べたなら、可憐ながらも、立派にリアルな人間生活に觸れ、生きた人生の姿を捉へてゐる。かくていつまでも生命のある作品となり得てゐるが、その形式から云へば、歐米先進國の小説作法に則つて作られた短篇小説の一模範となり、日本に於ける西洋流の短篇小説の鼻祖となつた。文體から云へば、漢文の調子と國文の美しさを調和させて最高の標準を示したものである。更にその飜譯に至つては、「英文學の紹介者は餘所にも少からねば、柵草紙はおもに獨・佛・普の文學紹介者たるにつとめた」成果であるが、出來るだけ多種類の傾向のものを紹介し、その刺戟やら示唆やら接受やらに依つて、日本人のうちに眠つてゐる材能を目覺めさせ、伸びさせ、我が國の文壇に出來るだけ變化に富んだ花を自由に大膽に咲かせようとした先覺的な意圖の現はれである。而もその英文學が、やつとスコットやリットンあたりを紹介してゐる時に、歐羅巴現時の新聲を傳へたのだから、その清新なる魅力がいかに強く大きかつたかが知られよう。中でも、「埋木」（別項）の如き、特に讀む者の心を捉へずには措かなかつた。要するに「水沫集」一卷は、あらゆる意味に於て日本に於ける新文學のパイロットとなつた。かくて文藝史上の非常に貴重な記念碑として記憶されなければならない。（水木）

壬二集（みにしふ）　歌集　三卷【作者】藤原家隆【名稱】書名は著者が壬生二位と呼ばれたのに基くといふ。別に「玉吟集」の名がある。【諸本】神宮文庫に、次の如き奧書を有する寫本を藏する。「此玉吟集三冊命壬生新宮專抑々在夢庵老之作六家抄然而彼本集連ニ所望故也殊於此集者靈元來所持之以作一具而已　慶長三年九月十五日　丹山隱士玄旨判」。刊本には六家集本があり、明治以後、續國歌大觀・國歌大系等に所收。【解説】家隆の生涯の詠歌は六萬首に上ると傳へられたが、今傳はるものはその五分の一に過ぎぬ。即ち「壬二集」上卷には、六百番歌合の百首、千五百番歌合の百首、堀河百首、大僧正四季百首、文治三年の詠百首和歌、同年十一月の詠百首和歌を載せ、上之下には詠二百首和歌（二百首とあるけれど春二十七首、夏二十三首、秋二十六首、冬二十一首、戀十六首、雜二十六首で計百三十九首を存する。建久八年の歌合の歌と同じきを以て略すと記してあるもの十六ケ所、「初百首歌一首闕書本無」とあるもの一ケ所ある）、爲家卿家會の百首、攝作百首（春・秋・戀各二十首、夏・冬各十五首、雜十首の内戀歌一首を缺く。九十九首存す）、洞院攝政家百首、九條前内大臣内々百首（題ありて歌を缺くもの一首。九十九首存す）の如く百首歌十一、その通算一千百三十七首を載せ、中卷に、守覺法親王會五十首、老若歌合五十首、道助法親王會五十首、日吉奉納五十首、最勝四天王院御障子和歌（四十六首）、前内大臣家三十首、寬喜元年女御入内御屏風和歌（三十六首）、泥繪御屏風歌二首、住吉三十首和歌、西園寺三十首和歌（但し無披講）の計三百七十四首を載せ、それに引續いて四季之部を立て、春部百九十六首、夏部九十九首、秋部三百三十四首、冬部百三十一首、小計七百六十首を收めてゐる。下卷は、戀・祝・旅・雜（哀傷・述懷）・神祇・釋敎の部立にて、それぞれ戀二百四十九首、祝二十七首（そのうち他人の作二首）、旅部三十五首、雜百八十三首

（そのうち俳人の歌を錄せるもの十五首）、神祇十二首、釋敎十八首、小計五百二十四首（内俳人の作十七首）を收めてゐる。三卷を通算するに二千八百二十五首の歌を載せてゐる。

【參考】壬二集攷　岡本保孝　（松浦）

岑守（みねもり）　漢學者【姓】小野朝臣【生歿】寶龜九年に生れ、天長七年（一四九〇）四月十九日歿す。享年五十三【家系】小野妹子の玄孫篁（別項）の父である。小野の姓は、妹子が近江國滋賀郡小野村にゐたのによる。【閲歷】延曆二十二年四月權少外記となり、次いで東宮少進に進み（二十六歲）、大同二年畿內觀察使判官、同四年四月、從五位下東宮亮となつた。同十一月式部少輔、翌弘仁元年近江介を兼ね、同內藏頭となる。同三年正月美濃守、翌年從五位上となり、同五年左馬頭となつた。またこの頃、菅原淸公・勇山文繼等と「凌雲集」を撰した。翌五年正月陸奧守、同十二年阿波守となり、皇后宮大夫を兼ね、更に近江守を兼ねた。又良岑安世等と「內裏式」を撰した。同十三年參議に進み、太宰大貳を兼ねた（四十五歲）。越えて天長五年（五十一歲）二月從四位上勘解由長官となり、三月刑部卿を兼ねた。同七年四月卒す（公卿補任・日本紀略）。【編著】內裏式三卷（弘仁十二年正月成る。藤原冬嗣・良岑安世・藤原三守・朝野鹿取・滋野貞主等と共に撰した內裏の諸式及び叙任の式等の次第を記したもの。但し現存の本は、天長十年二月、淸原夏野・藤原吉野・紀長江・春澄善繩等が勅を奉じて取捨したものである。群書類從卷七九所收）○凌雲集（別項）。その外、その詩作は「凌雲集」「文華秀麗集」「經國集」（各別項）等に見えてゐる。（山岸）

美濃の家つと（みののいへづと）　和歌註釋書　五卷五冊【著者】本居宣長【別名】內題には「新古今美濃の家つと」とある。【刊行】寬政七年十二月、名古屋永樂屋東四郎板。【由來】藤原磯足・大矢重門の序文及び本書の首に、宣長の記せる所によれば、宣長の門人大矢重門が、鈴門にありて學べるとき「新古今」の歌の趣を特に尋ね問うてゐたが、故鄕に歸るに際して、宣長に、その所說を書き記して賜はれと乞うたので、宣長が書き與へたものと云ふ。贈るに際して、宣長は「これをだに家づとにせよいせの海かひはなぎさのもくずなりとも」の歌を添へた。宣長はその門弟のために、明和三年三月から明和六年十二月までと、天明七年正月から寬政三年十月までの二回にわたり、「新古今集」の講筵を開いた。重門は宣長の「授業門人姓名錄」天明六年の條に、「美濃大垣、大矢仁左衞門重角」とあり、後に重門と改めた人で、寬政二年正月松坂を訪うた人であるから、この第二回目の講義を聞いた人であり、また本書の內容が、宣長の「新古今」の歌に關する意見の圓熟した折の說であることも知られる。翌三年四月十三日に訂正を加へたものといふ。【諸本】本居宣長全集第五所收。【內容】卷一は春・夏の歌、卷二は秋・冬の歌、卷三は賀・哀傷・離別・羈旅。卷四は戀、卷五は雜・神祇・釋敎の歌をそれぞれ註釋してゐる。また宣長は、その著「うひ山ぶみ」（別項）に、歌の眞盛りは「新古今」といふもたがふべからずとの意見を述べ、この集のよき歌を賞せざるは、風雅の情を知らざるものと云ひ、更に「新古今」の歌を評して「うちよみあぐるに面白くて、捨てがたくおぼゆるは、此ほどの歌どもなり。えもいはず面白く、心深くめでたき」と書いてゐる。この立場から先づ註すべき歌も選ばれ、註釋の態度も定められたものと思はれる。從つて本書以前の「新古今集」の註釋、例へば、東常緣・加藤磐齋・北村季吟等のそれよりも一步進んで、「歌のこゝろ」を說きあかし、簡單にして含蓄ある評を下してゐる。註釋の初めには多く、一首の全體を評しては、「めでたし」と云ひ、別に結構措辭の美に注意して、「詞めでたし」など云ひ、最も句格に注意し、倒置句には必ずその次第を註記し、懸詞・助詞等は、極めて精細に說明を加へてゐる。また「かけあひ」の說を以て、一首の歌を修辭的に、整然と註し得る趣がある。所々に本書以前の註釋書を引用し、そのこちたさを「無用の註」などと評した點も見えるが、殊に個々の歌人の作風にも注意し、西行の初句字餘りを「この法師の病」といひ、良經の「故鄕のもとあらの小萩」の歌の條には、「此殿此たぐひ多し」など評してゐる。【價値】常緣の「新抄」、磐齋の「增抄」、季吟の「抄」（八代集抄の中）など、古人の所說を主とした註釋に對し、全く獨自の立場から、「新古今集」の註解を試みたものは本書に始まる。修辭的技巧の特に複雜巧妙な「新古今」の歌に對して、文法的な立場から精細な解說を與へたことは、大なる功績である。【影響】本書は、やがて石原正明の「尾張の家苞」（別項）を生む源となつた。また荒木田久老は「信濃漫錄」に、村田春海は「織錦舍隨筆」に、それぞれ本書所說がやゝ語句の末に拘泥した趣あるを難じてゐるが、後來「新古今」の歌を解くもの、多くこの二つの「家苞」を併せ引いてゐるのに見ても、後世への影響の多大なるを知り得る。【末書】「美濃尾張家つとくらべ」二冊林耆兵衞（明治三十五年成。尾家苞の所說に簡單なる批判を加へたるもの）。

【參考】國文學研究史　野村八良○本居宣長　村岡典嗣○本居宣長全集註記○本居宣長稿本全集註記　（松浦）

美濃の家つと折添（みののいへづとをりそへ）　和歌註釋書　三冊【著者】本居宣長【刊行】寬政九年、名古屋永樂屋東四郎板。【成立】寬政三年四月十三日成る。【內容】「新勅撰集」以下十三代集及び「千載集」に入れる「新古今」歌人の作を「美濃の家つと」の例によつて、註を加へたるものであるが、「家つと」に比して簡略で、往々歌のみかゝげ、註のないものもある。「新勅撰」の部分には、契沖の「新勅撰評」の說に對する異見も見える。（「美濃の家つと」參照）　（松浦）

身延（みのぶ）「龍女物の謠曲」を見よ。

美濃風（みのふう）　俳諧流派【名義】支考（別項）の一派を云ふ。支考の生國が美濃であるから、この稱が起つたのである。又支考の別號獅子庵によつて獅子門ともいふ。【性質】俳諧は俗談平話であるといふのが支考の持論で、この派の主張もそれであつた。從つて作も平俗卑近で、深みがない。支考の作からがさうであつたのである。支考は伊勢風（別項）の乙由と常に共同運動をやつて、その作風も頗る似たものであつた。かゝる關係から、後にはこの兩派を引つくるめて支麥の徒と云つて卑しまれ（麥は乙由が麥林舍と云つたからである）、また田舍蕉門とも呼ばれたのである。この派の人には俳諧行脚が多かつたが、これも支考が東に遊ぶ時は東華坊、西に遊ぶ時は西華坊と云つた風に、自派宣傳と勢力擴張のため常に諸國を行脚した例に倣つたものである。又この派の宗匠は號の下に坊と云ふ字を多く附けたが、これも支考の東華坊等の別號に倣つたものである。

【沿革】支考の門人は、各地に非常に多かつたが、殊に美濃・尾張は彼の根據地で最も深く勢力を植ゑ附けた所であるから門人も從つて多かつた。その中でも太田巴靜・井上扉平・岸名昨嚢・仙石盧元坊等が著名であつた。このうち盧元坊を經て、田中五竹坊に至り、その門人安田以哉坊（雙林庵）との間に爭論が起り、以哉坊は分離して以哉派（又雙狀派ともいふ）を立てた。五竹坊の系統は再和坊（北方町住）がこれを繼いで再和派（又北方派ともいふ）を立て、こゝに美濃風の道統は二派に分れたのである。卽ち再和派は初世芭蕉桃靑・二世東華坊支考・三世盧元坊里紅・四世五竹坊琴左・五世臘庵朴齋（再和坊）・六世森々庵松後・七世雨岡庵左柳・八世一樂庵陶里・九世徐風庵文柳・十世五竹庵子琴・十一世冥樂庵梅二・十二世椒庵青志・十三世養松庵諷因・十四世耕月庵花賓・十五世麥庵一時・十六世曙庵虚白・十七世千秋庵鶴汀・十八世古今庵雨行・十九世一味庵監堂（大正九年歿す、現）と續き、以哉派は初世芭蕉桃靑・二世東華坊支考・三世盧元坊里紅・四世五竹坊琴左・五世以哉坊二狂・六世是什坊傘狂・七世白壽坊信我・八世風盧坊白哉・九世友左坊梅洲・十世逸歩仙雅兆・十一世榮花坊風二・十二世優々舍士游・十三世春秋庵梅化・十四世集虚齋右樂・十五世化月坊梅敬・十六世文壽坊其兆・十七世俳仙堂錄翁・十八世白果仙寥雅・十九世麥外仙眠牛・二十世柳庵一瓢・二十一世積翠居吟風・二十二世好々園狂言・二十三世旭孫園文化・二十四世一圓窓雲居・二十五世回麥園夜城・二十六世知常庵帶也・二十七世紅探園其擊・二十八世雨後庵桂岡・二十九世反古庵三秋（昭和五年歿す、現）と續いたのである。五竹坊と以哉坊との不和は、以哉坊が松島に遊んで、「松島や膝でもみきる舟の基座」と詠んだ句を五竹坊が「松島や眺にもめる舟の基座」と直したことに基因したといふのであるが、これは誤で、安永の末頃他の原因があつたのであらうといふ事である。然るに美濃風は漸次排他的傾向を帶びて來て、兩統の分れた頃から特にそれが甚しくなり、几董の「新雜談集」には「美濃の國の俳諧者流獅子門の一派と號し、他門と交る事を堅く制す」と云つてゐる。又これ等の道統の中からは餘り優れた人は出ず、反つて巴靜門から橫井也有の如き高名な俳文家が出て居り、支考の孫弟子の蓮阿坊白尼門から天明の復興調の俳傑の一人久村曉臺の如きが出て居り、盧元坊門の神谷玄武坊門から同じく天明の復興調の俳傑の一人松岡青蘿の如きが出てゐる。そして青蘿門からは栗本玉屑が出で、玉屑門からは栗庵字橋が出で、字橋門から出た栗庵字山は明治に至つて鳴立庵十三世を繼いでゐる如き道統が見られる。又美濃風は排他的ではあるが、頭數が多いので、俳諧集や俳論等の著作が多く、歲旦帳なども尨大なものが出てゐる。併しその作その論は依然として支考を遵奉するものである。

【參考】誹諧白露○芭蕉葉ぶね　田川鳳朗○各務支考及び美濃派に就いて　黒田鵜一（國語と國文學大正一五ノ一一）○獅子門道統十四世集虚齋講諷一件記　各務虎雄（國語教育昭和七ノ一二―昭和八ノ一・二）　（志田・荻原）

身延山利生記（みのぶさんりしやうき）「甲州鰍澤報讐」を見よ。

美波留（みはる）　歌學者【姓名】長野氏。美波留は三晴とも書く。【生歿】明和二年信濃に生れ、文政五年（二四八二）江戸に歿す。享年五十八。【閲歷】初め大村光枝に學び、後、塙保己一の門に入つた。神學の人である。「萬葉集類句」（寬政十一年）は、美波留三十五歲の時の板行で、「目譽草」に於ては、契沖・春滿・眞淵を除く當代の歌人を拉し來つて、嚴しい批評を加へ、なほ、てにをはを細かく言ふ作歌法をも非難してゐる。橘守部はこの「目譽草」を批評して「頭書ふでのすさみ」を著はした。【著書】萬葉集類句（別項）○目譽草（一名筆のすさみ）○百人一首抄○稽古圖錄○對照假字格○縣居雅錄標註○縣居雅錄補鈔標註。（窪田）

壬生狂言（みぶきやうげん）　舞踊【別名】融通大念佛【名稱】京千本の壬生寺に行はれる樂舞なるによる。【解說】古くは三月十四日より十日間、現今は四月二十一日より二十日間行はれるもので、現今は寺に屬するものと寺と獨立したものとの二派に分れ、後者は神泉苑に於て公演してゐるが、一定時日はない。京都にはこれに似たものが、他に嵯峨釋迦堂の大念佛や、千本閻魔堂の大念佛などがあり、京都の三大念佛として名高い。但し壬生と嵯峨は無言で、千本は聲を發する。【種類】竹內勝太郎氏の分類法に從へば、第一、面棒（棒振り）・湯立・猿綱渡り。第二、桶取り・愛宕詣・山端とろろ・大原女・餓鬼角力。第三、大江山・羅生門・玉藻前・鵺・土蜘蛛。第四、猿蟹合戰・楠取り。第五、道成寺・船辨慶・景清、その他。因みにこの分類は、一面に壬生狂言の發達史を語るものがある。【起原】種々に說かれてゐるが、種類の條の曲目に依つて發達の過程を思ひ、そしてその起原を想像すれば、京都の三大念佛は決して京都に於てのみ獨自に發生したものでなく、ただ京都に於ての故に、獨自の發達を遂げたものといはるべきである。一說には圓覺十萬上人がこれを起したと傳へるが、彼は恐らく中興の祖、或は大成者としての意味であつて、曲目を見ても、これがすべて一時に作られたのでなく、永い年月の間に生み出されたことが知られるのである。寧ろ諸國の寺院の演劇的行事と比較して考へなければならぬ。【價値】假面を使用して無言に演技をなすことは、一部の里神樂（別項）と同じであつて、國劇史上、重要な意味を持つてゐる。また能狂言との交渉も多大である。更に一方に於て、布敎の方便ともした點に於ては、佛敎關係の舞踊史、演劇史上の一異彩でもある。

【參考】壬生狂言源流考　吉岡美明（國語國文の研究）○壬生寺の大念佛の復興　北川智海（民俗藝術一ノ五・九）○壬生狂言の起源　竹內勝太郎（民俗藝術一ノ五・六）○日本の默劇　西川梅亭○繪本壬生扮戲畫　（小寺）

三船（みふね）　漢學者【姓名】淡海眞人。三船は御船とも記す。字は淡海居士。【生歿】養老六年に生れ、延曆四年七月歿す。六十四【家系】大友皇子（弘文天皇）の後、勝寶三年淡海眞人の姓を賜ふ。貞觀十五年五月、三船の後、濃成・高主等に淡海朝臣の姓を賜はつたことが見える。

大友皇子―葛野王―池邊王―御船王（三船）

【閲歷】幼時出家して元開と稱したが、勝寶三年（三十歲）、勅によつて還俗され、姓を賜はつた。同八年五月、朝廷を誹謗した罪によつて衞士府に囚へられたが、やがて放免された。後、尾張介となり、正六位上を授けられた。寶字四年正月山陰道巡察使、翌年從五位下、三河守に轉じた（四十歲）。同六年文部少輔、同八年八月美作守に遷り、又造

池使となつて近江にあり、藤原仲麻の亂に際して功あり、正五位上勳三等近江介となる。次いで中務大輔兼侍從に遷る。神護二年東山道巡察使となり、翌神護景雲元年兵部大輔となつた。同年六月巡察使の事終つて復奏するに當り、國司等に對して公平を缺き、朝旨に反する事あり、勅して現任を解き譴責された。同八月太宰少貳となる。寶龜二年七月刑部大輔、翌年四月大學頭に任じ、文章博士を兼ねた（五十一歳）。同八年正月大判事、同九年再び大學頭となる。翌十年二月「唐大和上東征傳」一卷（別項）を作つた。天應元年三度大學頭となり、翌延曆元年因幡守を兼ね、更に同三年刑部大輔を兼ねた。この年桓武帝御卽位。次いで翌四年七月卒す。【人物】天性聰明で、博く群書を涉覽し、文史に明かで、當時、文名一世に高かつた。併しその性格は「續日本紀」の神護景雲元年、譴責せられた條などから推すると、聰敏を恃んで却つて義理を失ひ、意に任せて決斷するが如きことも少くなかつたやうである。要するに彼は熱情の人であつたらしい。【著作】大安寺碑文一首並序（續々群書類從第一六・大日本佛敎全書一一八所收）○唐大和上東征傳一卷（別項）。なほ「經國集」に詩作がある。【業績】桓武帝の平安奠都の後、三船に勅して神武天皇以降光仁天皇に及ぶ漢風の諡號を奉撰せしめられた。今日傳へられるのがそれである。但し一說に、孝謙帝の朝に勅を奉じて撰すとも、或は文武帝以前の御諡號は、淡海公藤原不比等の撰ともいふ。【參考】續日本紀（卷三十八）　〔山岸〕

身振り　【藝術論】〔獨〕Mimik.〔英〕mimic.【解說】身振は、ギリシヤ語ミメシス（模倣）に語源を有する。故に廣義に云へば、舞臺藝術の演出上の諸要素を凡て總稱する。身體的動作、表情のみで言葉（表白）を伴はない演戲をパントマイムといふ。普通に身振りといへば、演劇上の役者の肉體的表出の技術をいふ。　〔村田〕

身振言語　【名稱】〔英〕the gesture-language.〔佛〕le langage des gestes.〔獨〕Gebärdensprache.【解說】最も廣く言へば表出運動（別項）の一種であるが、自然の表出たる無意反射的の身體運動とは異なり、思想・感情を發表して他人に傳達せんとする目的を有する意志行動で、身體（主として顏部・手・足等）を用ふるものを特に身振言語といふ。ヴントの說く所に從へば、情緒（Affekte）の屬性のうち、强度が血行と呼吸との作用に表はれ、性質が顏面筋肉の運動に表はれ、情緒に伴ふ表象が全身運動に表はれる。この最後の類（表象表出）は、指示運動と摸擬運動との二種に分れる。身振言語はこれ等の表象表出から生じ、發表傳達の意志が加はつたものである。身振言語の種類は、やはり指示運動と摸擬運動とに基づくものであるが、後者は更に種々に分化するが故に、これを總稱するため摸擬と言はずして敍述的身振と名づける。これを表にすれば、

- 身振言語
  - （一）指示的身振（Hinweisende Gebärde）
  - （二）敍述的身振（Darstellende Gebärde）
    - （イ）摸寫的身振（Nachbildende Gebärde）
    - （ロ）示唆的身振（Mitbezeichnende Gebärde）
    - （ハ）象徵的身振（Symbolische Gebärde）

指示的は手指で指す如きもの、摸寫的は「眠り」を示すため眼を閉ぢ、首を一方に傾ける如きもの、示唆的は山羊を示すに顎の下に手を以て髭の形を作る如きもの、象徵的は身體の後方を指して時間上の過去を示す如きものをいふ。聾啞者の間、アメリカ土人の間、イタリアのナポリ人の間、システルシアン派僧侶の間に行はれる身振は世に知られた有名なものであるが、前記各種の外多少の變化をなし、それ〴〵の團體に、特殊の慣習となつた形もある。又この外、指を用ひてabcの字母に象り、これを順次に組合せて語を造り、會話する方法も一種の身振言語であるが、これは自然の發達により生じたのでなく、文字が先づあつてこれを手指で代表するやう工夫したのである。【參考】Wundt, *Völkerpsychologie—die Sprache.* Ⅰ. 1921. S. 162 f. ‖ Bloomfield, *Introduction to the Study of Language.* 1914, pp. 1—7.　〔峰岸〕

三保浦松月横櫛　脚本　三幕　世話物【作者】二代河竹新七（默阿彌）【通稱】「切られお富」【別名題】「處女翫浮名横櫛」「夕立雲拔甲横櫛」「月影差横櫛」「友千鳥浮名香箱」等。【初演】元治元年七月、江戶守田座。〔役割〕赤間源左衞門實は觀音久次（中村芝翫）、切られお富（澤村田之助）、井筒與三郞（澤村訥升）、赤間の手代安藏後に蝙蝠安（市川九藏）、素問屋女房お梅（中村歌女之丞）、お富の父丈賀（市川小文次）等。【諸本】默阿彌全集第七卷所收。【題材】三代瀨川如皐の傑作「與話情浮名横櫛」（別項）を女の主人公に置きかへて飜案せられた書替狂言である。【梗概】〔序幕〕井筒與三郞は父與左衞門が夜詰の時千葉家の重寶北斗丸が盜まれた廉で切腹したので、その寶刀を見附け出して家名を再興しようと浪々してゐたが、藤ヶ谷で圖らずも以前木更津通ひの船の中で契つたお富に廻り遭ふ。お富は父親の長患ひで已むなく赤間源左衞門の妾となつてゐるので、與三郞に對する心中立てに小指を切つて誓ひ、折柄の雷雨に滑川地藏堂で契りを重ねるが、赤間の手代安藏は豫て想ひをかけたお富を手籠めにしようとして與三郞に邪魔されたので、その間に小指と血の附いた小柄とを奪ひ、海松杭の松を使つて、それを證據に源左衞門に告げ口する。源左衞門は絹問屋とは表向きで、實は盜賊觀音久次だと本性を明かして海松杭の松を斬る。又お富は安藏に嬲り斬りにされるが、安藏は急所をよけ疵だらけにしただけで、氣を失つてゐるお富を海へ捨てると見せかけて助ける。〔二幕〕介抱を受けた爲め安藏に身を任せてゐるお富と、北斗丸の行方を尋ね當て、その金子を調達に赴く與三郞とは、三年の後に薩埵峠の一つ家で邂逅し、お富の父丈賀が井筒與左衞門の若黨忠助であつたことも分かるので、お富はその金子二百兩を、今では赤間屋といふ女郎屋を開いてゐる源左衞門から強請り取る積りで引受ける。それを立ち聞きした安藏は知らぬ顏でお富の手先きに遣はれたやうに見せて一緒に赤間屋を強請り、その金を捲き上げて高飛びしようとするが、お富は歸路吉生塚へ先廻りして安藏を殺し、偶然道具屋吉市と通り合せた與三郞に二百兩を渡す。與三郞はその金で一度は北斗丸を手に入れるが、吉市に掏り替へられ、丈賀の懺悔で與三郞とお富とは實の兄妹であり、安藏が與左衞門の實子であつたことが分る。〔三幕〕舊惡が露顯して落ち延びて來た源左衞門と、死を覺悟したお富・與三郞とは、駿州袖師ヶ浦で行き合ひ、源左衞門は千葉家から北斗丸を盜んだのは自分だと白狀し、折柄[illegible]と爭ひながら來合せた吉市を殺して北斗丸を與三郞の手へ戾した上、敵を討たれた心でその北斗丸で腹を切る。與三郞は丁度そこへ尋ねて來た千葉家中の者に北斗丸を渡し、弟與五郞には自分は家來の伜でお富と兄妹であることを告げてお富と共に自殺する。【解說】「切られ與三」に對して作られた「切られお富」ではあるが、その後日譚でもなければ趣向の踏襲でもない。主要なる人名を借用して全然別な狂言にしたもので、所謂書替狂言といふべきものに屬する。【參考】河竹默阿彌（河竹繁俊）○澤村田之助（矢田挿雲）○續々歌舞伎年代記　〔河竹〕

三升增鱗祖　黃表紙　三冊　十五丁二十二圖【作者】戀川春町【畫工】自畫【名義】江戶名物三升艾の繁昌を祝福する義と、繪草紙板元鱗形屋の由來を示す義とを兼ねてゐる。【刊行】安永六年、鱗形屋板【諸本】稀書複製會本がある。【題材】時政が賴朝に政子を添はせた史實を藉りてゐる。【梗概】（上冊）（1）近江伊吹山麓に艾を商つてゐる永持道意の夢に、伊豆の池洲稻荷が示現する。石橋山の敗後身を寄せる所なき源賴朝を守り立てよ、然らば將來富貴ならんとのこと。（2）道意、賴朝のために助命を願ふ。（3）道意、賴朝に供して伊豆の配所にゆく。その旅姿。（4）道意が伊豆池洲稻荷の傍に出した艾店、賴朝も手傳つてゐる。賴朝の若衆姿で店は一段と繁昌する。その隣の草雙紙店の主人山內屋孫兵衞も艾屋の繁昌に負けまいと骨を折つてゐる。（5）池洲稻荷、孫兵衞の家に現じ、道意と協力して賴朝を世に出させよと告げる。（6）孫兵衞、草雙紙の御用で北條時政の奧向に出入する。（7）鶴岡八幡宮社頭、時政の息女政子、艾おろしの賴朝に出逢ひ、相惚れとなる。（8）政子の戀煩ひ、醫者が灸治を勸めてゐる。〔中冊〕（9）腰元せきや、政子のために戀の媒を孫兵衞に賴む。（10）孫兵衞、艾の御用を道意に仰せつけるやう政子の附家老新五左衞門に賴む。（11）道意と孫兵衞の密議、共に賴朝のために盡さうと約束する。（12）政子の灸治、孫兵衞はお慰みに草雙紙をさし上げる。道意・賴朝は、切艾をさし上げる。艾を三升ほどすゑる。（13）せきやの計らひで政子・賴朝の密會、時政樣子を窺ひ知る。（14）新五左、密會を見つけて騷ぎ立てる。せきや色仕掛で騷ぎを留める。（15）せきや・賴朝、新五左を灸で懲してその口を封ずる。（16）政子と賴朝の祝言。時政、道意に北條家の姓平の字を名前につけさせる。又三升を家の紋にさせる。政子の全快も灸三升をすゑた爲めだといふ理由である。時政、孫兵衞にも北條家にゆかりある鱗の紋所を與へる。草雙紙も灸治の役に立つたとの理由である。〔下冊〕（17）道意、江戶大傳馬町に艾店を開いてゐる。三升屋平右衞門といふ。（18）三升屋の隣に孫兵衞、草雙紙店を開いてゐる。屋號鱗形屋、傍に池洲稻荷を勸請してゐる。（19）平右の夢、艾どもの評議、孫兵衞の夢、草雙紙一味のものの評議。夢は互に賴朝を世に出した功を獨占しようとする二人の本心の現はれである。（20）夢。艾と草雙紙の戰爭、草雙紙軍を燻らされて敗北。（21）夢。草雙紙に湯を浴びせられて艾の敗北。（22）夢覺めた平右と孫兵衞の和睦、一人は三升艾の袋を手にし、一人は「三升增鱗祖」を手にしてゐる。【構想】江戶の名物三升艾、一名團十郞艾の店本三升屋、同じく江戶の名物草雙紙の問屋鱗形屋の屋號及び本三升屋の主人の平右衞門の平、また鱗形屋が伊豆生洲稻荷を勸請してゐることを、賴朝・時政・政子の事件に附會して、兩家繁昌由來記の想をなしたのである。また艾が湯を浴びせられること（二十二圖）、又それがために、却つて艾の效能が現はれるやうになつたといふのは、その艾が湯ざらし艾と銘をうつてゐることからの着想である。【史的地位】艾と草雙紙の戰爭などの擬人物は、草雙紙に於ては可なり古い想であり、三升艾の由來記めくものも、寶曆十三年鳥居淸滿畫の「江州伊吹山團十郞著艾傳」等の先蹤があるが、兩家を併せ說き、又宣傳用の趣向を立てたのは珍しい。黃表紙名作二十三部の一。　〔山口〕

三升屋二三治　脚本作者【通稱】伊勢屋宗三郞【俳號】和島・粲思・思峯【生歿】天明三年江戶に生れ、安政三年（一八五六）八月五日江戶にて歿す。享年七十二。【墓所】深川餘住町正壽院【閱歷】家は淺草藏前の札差業、伊勢屋といふ富豪であつたが、七代市川團十郞を贔屓にした關係から愛好者となり、作者を希望し、文化九年には團十郞の紹介で、三升屋二三治の名を番附へ出させたが、芝居へは出勤しなかつた。文化十年に芝居道の人々七十餘人を山谷の八百善へ招いて大振舞をしたのが問題となり、家を廢嫡されたので、正式に劇道へ入り、文化十三年桐座の顏見世に二枚目に進み、文政十三年市村座の顏見世に立作者に上つた。嘉永元年の市村座春興行を名殘りとして引退するまでの二十年間、多く筆は執つたが、特筆するほどの當り作はなかつた。【著作】源平劇場年代記（文政十三年十一月市村座。源平盛衰記の顏見世狂言）○賴有御攝綱（天保三年十一月河原崎座。前太平記の顏見世狂言）○假名手本忠臣藏（天保四年三月河原崎座。忠臣藏の裏をさして、[illegible]の平右衞門・お輕勘平道行・寄兵衞上使・判官湯治場の夢等を附加す）○新兵衞[illegible]帽子（天保四年五月河原崎座。二人新兵衞の書替へ）○梅初春五十三驛（天保六年二月市村座。南北の五十三驛を增補す）○金龍山誓鐘（天保十三年十月中村座。淺草觀世音靈驗記）○花籠大江山（弘化二年十一月中村座。賴光と[illegible]）等の脚本の外、「歌舞伎品定」「作者店卸」（別項）「三升屋二三治戲場書留」（別項）「紙屑籠」（別項）「妓用袋」「歌舞伎之式」等の著がある。何れも歌舞伎の故實考證を記したものである。　〔渥美〕

三升屋二三治戲場書留　演劇書　二卷【著者】三升屋二三治【成立】天保末年か。【諸本】「燕石十種」に收められたのは、關根東榮所藏の寫本なる由活東子の奧書あり。國書刊行會本燕石十種卷一所收。【解說】上卷は劇場の故實、狂言の由來、俳優の逸話等五十項を雜纂的に述べ、下卷は歌舞伎の初として永祿三年お國山三の女芝居より、天保元年八月迄の江戶歌舞伎の歷史を年表的に略記し、「花江都歌舞妓年代記」（別項）の相違と附錄の形式で天保十二・十三年の芝居猿若町移轉に關する書拔書等と一ケ年給金名題とを記す。注目すべき記事多く、附載當時の俳優給金附の如きは、特に價値多き研究資料である。　〔增田〕

三升屋兵庫　脚本作者【解說】初代市川團十郞の作者名（市川團十郞參照）。早くは作者名をも市川團十郞と記してゐたが、

現存狂言本によると、元祿十三年に始めて兵庫と見えてゐる。但しこれを以て直にその以前に兵庫と言はなかつたとは斷言できない。【作品】現在では、「金の揮」等の記事により、「門松四天王」（貞享元年、中村座上演）を彼の初作と傳へてゐるが、その後は元祿十年頃まで執筆の傳が見當らぬ。尤も當時の傾向から見て先行作によつて書き替へられた筋立が多いから、嚴格に彼の自作といふ意味も、單なる署名によつて判ぜられぬ場合もあると思ふ。元祿年中に於ける彼の作と認められてゐる名題を次に列擧する。○參會名護屋（元祿十年）（別項）○百合若大臣（元祿十年三月、中村座。中村明石清三郎と合作。幸若の翻案）○兵根元曾我（同年）（別項）○鬮女三十二相（元祿十一年六月、同座。同作）○源平雷傳記（同年）（別項）○吉野静碁盤忠信（同年同座）○女飛騨内匠（元祿十二年正月同座）○信田和合玉（同年三月、同座）○葛城小夜嵐（同年五月、同座。不破名古屋）○一心五界玉（同年七月同座。甲賀三郎）○當世小國歌舞伎（同年十一月、森田座。細川山名爭）○景政雷問答（元祿十三年正月、森田座。源平雷傳記に據る）○和國御祭殿（同年三月、同座。源氏物語女三宮の條）○大日本鐵界仙人（同年五月、同座。曾我）○金平六條通（同年十一月、中村座）○傾城王昭君（元祿十四年、「面向不背玉」參照）○出世隅田川（同年三月、同座）○日本祇園精舍寶寺開帳（同年五月、同座。文覺上人）○當世酒呑童子（同年七月、同座。毘沙門）○葛城哭艶聚（同年十一月、同座。不破に丹波助太郎）○星合十二段（元祿十五年二月、同座。安宅）○新板高館辨慶狀（同年七月、同座。二人辨慶）○天地人倚守（同年十一月、森田座。和泉小二郎）○式三番柱暦（元祿十六年正月、同座）○成田山分身不動（同年四月、同座）○小栗十二段（同年七月、同座）○源氏六十帖（同年十一月、市村座。源氏物語）○移徙（わたまし）十二段（寶永元年二月、同座。藤本平左衛門合作、佐藤忠信）等。右は多く當り作で、存生中に再演されたものも擧げられる。【作風】狂言乃至脚色の世界は、所謂「時代」を中心とし、要するに武家物を以て終始してゐるが、これは彼の荒事齣の演出の要求に對しては最も妥當な態度である。彼と中村座との關係が、何に起因して發生したか不明であるが、江戸草分格の中村座に於て、座本にも比せらるべき地位を得て、自己の作を演じ得られた事は、彼のために幸福であつたと共に、江戸式演技としての荒事齣の構成に最も貢獻した所である。世界の背景を強ひて分類すれば、王代・時代・お家の三種に分たれるのであるが、それ〳〵の内容は武骨さ壯大さにあつて、時に稚拙味を持つ超自然的な雰圍氣を漂はす。但し單なる武骨さを以て終始した時代物ではなくて、常に濃艶な世話場を添へる用意を失つてをらぬ。そこに後世に見る如き純時代物へ分類せられぬ明るみをもつ事を特徴とする。その點に於て素朴や枯淡でなしに、優雅な稚拙味があると思ふ。元祿十年代には合作者として中村清三郎（別項）を加へてゐる。想ふに、その頃はまだ兵庫の作者的練習時代とも見られて、優雅な方面を清三郎によつて補塡せられたのではなかつたらうか。而もそれによつて江戸演劇としてすら、不備な結果を生むべきことを免れしめたのではなかつたらうか。【參考】金之揮（二代市川團十郎）○古今役者大全○役者全書○狂言作者の傳統（伊原敏郎（早稲田文學二九ノ二））○日本演劇史（同上）○江戸歌舞伎（中壁賢吉（日本文學講座））○戯曲小説近世作家大觀（鈴木竹三）（守隨）

みみずのたはこと 感想集【作者】德富健次郎（蘆花）【刊行】大正二年三月、新橋堂（後、警醒社書店）。【內容】「故人に」「都落ちの手帳から」「草葉のさゝやき」「麥の穗稻穗」「ひとりごと」「過去帳から」「落穗の掻き寄せ」「旅日記から」「讀者に」の九篇から成る感想集で、著者が東京の郊外粕谷の里に移つて後六ケ年間の記錄である。全體八十七章の短文から成つてゐる。【解說】明治三十五年より死を欲するほどの憂悶に陷つてゐた著者は、明治三十九年の夏エルサレムにキリストの蹟を探り、ロシヤにトルストイを訪ね、やゝ精神の安靜を得て歸り、明治四十年二月二十七日をトして東京府北多摩郡千歲村粕谷に居を移し、百姓生活をする事になつた。そして小說「黑潮」（別項）刊行以來疎隔になつてゐた兄猪一郎とも和し、綱島梁川・木下尚江・內村鑑三・石川三四郎・伊藤證信・小田頼三・山路愛山等と親交往來するやうになり、學生たちの依賴に應じて、青山學院・第一高等學校などに講演にも出かけた。兄猪一郎の末女鶴子を迎へて養女とし、平和なる日を送り迎へつつ日每に鍬を執り畑を耕し、樹を植ゑ花を作つた。この時代は著者の生涯中最も平和に充ち感謝に溢れた時で、小說家としてよりも、土に親しむ自然詩人、人道主義の思想家として當時の青年から渇仰された。著者はこの感謝時代の六ケ年間に經驗せる感想を集めてこの一書を編み、これを公けにする時、自らその廣告を書いた。その文中に、「神は田舍を造り、人は都會を作る。著者は田舍を愛すれども都會を捨つる能はず、心竊に都會と田舍の間に架する橋梁の其の板の一枚たらん事を期す、されば本書は信仰と趣味、理想と煩悶の間に徘徊彷徨せる著者が懺悔の一片とも見るべく、又多感多情の著者なるレンズを透かして印象せられたる田園生活の印畫とも見るべし云々」とあるのは本書の內容を十分に語り得たものである。著者の著書中、この書ほど、あらゆる階級の人々から批評稱讚されたものはない。本書は第二の「自然と人生」（別項）であつて、更に內容の幾十倍充實した書で、如何に讀書界の歡迎を受けたかは、發行後一ケ年にして三萬部を賣り盡したことでも證明されよう。（神野）

耳引（みみひき）能狂言「口眞似」を見よ。

耳囊（みみぶくろ）隨筆　二卷【著者】根岸守信【諸本】本書は元來卷數不定で五卷五冊本、十卷十冊本等があり、更に後編として十二冊を數ふる本もあつて詳略も區々である。今は帝國圖書館藏の二卷本を底本として置く。但し傳寫の誤りが少くない。續隨筆文學選集卷三所收。【解說】著者の自序に、「此耳囊は、營中勤仕の暇、古老の物がたり或は閑居へ訪來る人の雜談、暫し耳に止りて面白しとおもひし事共、または子弟の心得にもならんとおもふ事を書留て一囊に入置し云々」とある如く、江戶時代中葉に在つた上下雅俗諸階級の人事、その他里談巷說、奇事異聞、醫方藥方の類を何くれとなく集めたもので、上卷には猥褻狂歌の事から怪僧靈蹟の事に至る數十條、下卷には蛇を斃ひし人の事から瘤を拔くるを編を植うると云ふ事に至る數十條を收め、聊か國實を交へてある。中に劍道家小野次郎右衛門等、猿樂家觀世新九郎・金春太夫・鼻金剛・豪仁右衛門等、豪傑大木口哲、實母散居の起立、柳生但馬守・大岡越前守の逸事、德川治貞の賢德、德川吉宗の大力、兩國橋幾世餅の事、謎被の眞實、非人の賢者の諸項、その他猥談・怪談等もあつて、宛然江戶時代の「宇治拾遺物語」の如き觀をなしてゐる。無年紀の著者自序がある。【著者小傳】根岸守信は一名鎭衞、幕臣で肥前守と稱し、小普請組の家から起つて、佐渡奉行・勘定奉行を經て町奉行に陞り、名吏と謂はれた人である。文化十二年十月六日歿す。享年七十九。（和田）

御裳濯（みもすそ）「神事物の謠曲」を見よ。

宮城野信夫（みやぎのしのぶ）「碁太平記白石噺」を見よ。

三宅花圃（みやけかほ）小說家【本名】龍子【閱歷】明治元年十月、東京に生る。父は幕末から明治にかけて外交方面で鳴らした田邊太一。花圃は跡見女學校出身で、三宅雪嶺（別項）に嫁する前から早く小說の筆を執り、田邊花圃の名で知られた。また和歌を中島歌子に學び、樋口一葉（別項）と共に門下の双璧と稱せられた。明治二十一年、小說「藪の鶯」を發表、次いで二十八年二月、「太陽」に「露のよすが」を出した。同年末、「文藝俱樂部」臨時增刊「閨秀小說」の卷頭に、「萩桔梗」を寄せ、温雅な作品として推奨せられた。その後も「文藝俱樂部」に「電報」等を出したが、家事に追はれて永く文筆に遠ざかつた。大正九年、雪嶺が雜誌「女性日本人」を創刊するに及びてこれを助け、花圃會同人を率ゐて、歌壇を擔當した。且つ女流文學者を世に出すについて相當貢獻してゐる。同誌廢刊後は、雜誌「我觀」に時々隨筆を發表してゐる。（高須）

三宅雪嶺（みやけせつれい）思想家【本名】雄二郎【閱歷】萬延元年五月、石川縣金澤に生れた。舊金澤藩士。年少、藩校に學び、夙に學才卓越を以て知られた。後、上京して帝國大學に入り、明治十六年卒業文學士になつた。同十九年、神田集成社から「基督教小史」を出版。且つ東京專門學校講師として、社會學・論理學を講じた。同二十一年四月、當時の急激なる歐化的風潮にあきたらず、祖國の文化を中外に顯揚せんとする目的の下に、同憂の人々と共に雜誌「日本人」（別項）を政教社から創刊して國粹主義を高唱し、翌二十二年二月、新聞「日本」が生れるや、これにも關係した。「日本人」は、陸然、歐化的平民主義を唱ふる「國民之友」（別項）に對抗し、常に薩長藩閥の專恣を非難して猛烈な筆を揮つた爲め、時の政府に忌諱されて一再ならず發行停止を受けた。雪嶺はその休刊中、單行本「眞善美日本人」を明治二十四年三月上梓し、次いで同年五月、「僞醜惡日本人」を公けにして日本精神を高調し、相當に大きい世の反響を喚起した。次いで同二十五年、同志志賀矧川と雜誌「亞細亞」を創刊、卷頭の「日本人」欄には、矧川と共に論說・隨筆等を執筆した。當時、雪嶺等は藩閥內閣が極度に言論を抑壓することを憤り、諷刺と罵倒に滿ちた「頌德表」と題する一冊子を出版し、伊藤博文・井上馨、その他の人々に向つて挑戰した。その後、間もなく「日本人」を再刊して政界・宗教界等の腐敗を指彈し、本願寺改革の問題に關しては、殊に侃諤の筆を揮ひ、青年間の人氣を伸した。他方、雪嶺は同志の人々を指導して東洋文學の研究に從事し、明治二十六年、「王陽明」を出版したが、一方、彼の專門である哲學開拓にも努力を入れ、二十二年、「哲學涓滴」を著はし、二十五年、「我觀小景」（別項）を公にした。後者は學界に於て相當重要視せられた。その後、三十四年四月、文學博士の學位を受けた。三十九年、陸羯南が病のために日本新聞の經營を伊藤欽亮に讓り、主幹兼社長の地位を去るや、雪嶺は推されて主幹となつた。そして新聞編輯に關しては、雪嶺は飽くまで日本新聞の傳統を守らうとするのを、伊藤がそれに反對したので、同年部下二十餘名と共に退社し、新たに雜誌「日本人」を改題して「日本及日本人」（別項）とし、その主張を固持した。その後、傍ら「中央公論」に屢々人物月旦を寄せ、次いで「實業之世界」に、久しきに亙つて卷頭論文を執筆した。大正九年八月、日本の女性に向つて國民的自覺を與へんがため、夫人花圃と共に「女性日本人」を創刊したが、永續しないで終つた。次いで大正十二年末、「日本及日本人」の經營についても、政教社同人と意見が合はず、去つて雜誌「我觀」を發行し、今日に至つてゐる。【著書】前記の外に、「宇宙」（別項）「馬鹿趙高」「冒瀆」「想痕」「世の中」「大塊一塵」「小泡十種」「明治思想小史」等がある。【影響】雜誌「日本人」及び日本新聞に於ける雪嶺の麾下に集り、論壇・學界に名を成したものが少くない。內藤湖南・畑山呂泣・田岡嶺雲・長澤別天・國府犀東・長谷川如是閑・香川悸庵・古島一雄等は、その主なるものである。（高須）

三宅雪嶺

土產の鏡（みやげのかがみ）「鏡男」を見よ。

都一中（みやこいつちゆう）「一中節」を見よ。

都路往來（みやこぢわうらい）往來物【解說】昔道に「都路往來」といふのは、江戶から京都へ上る東海道五十三次の驛名を詠み込んだもので、「都路は、五十三次餘りに三つの宿、時得て咲くや江戶の花、波靜かなる品川や、頓て越え來る川崎の、軒端並ぶる神奈川は、はや程ケ谷の程もなく、暮れて戶塚に宿るらむ」の如く文字鎖になつてゐる。享保年間の作であらうといふ。地理科往來物中、都路型と呼ぶもので、交通路を示す目的で編纂されたものである。七五調を取り文字鎖を用ひたのは、遺流院の「源氏名寄文章」を學び、語呂によつて記憶に便ならしめようとしたのに外ならぬ。【都路型の諸往來】東海道を逆に、京都から江戶に下るものに「東下り」がある。中仙道を江戶から京都へ上るものに、「中山道往來」「木曾往來」「岐岨の花布美」「木曾のかけはし」等があり、同じ道を逆にとつたものに、「吾妻路往來」がある。會津から江戶への宿驛を詠み込んだのが「江戶道中往來」、仙臺から江戶への交通路を示したものを「あづまの都路」といひ、萩から京都への交通路を編んだのを「驛路の栞」といふ。【參考】往來物落穗集（石川謙）○封建制下に於ける民主的傾向の胎生（同上）○地理科往來物についての研究（同上）（石川（謙））

宮古路加賀太夫（みやこぢかがたいふ）「富士松薩摩掾」を見よ。

宮古路月下の梅（みやこぢつきのうめ）豐後節寄せ本　上下二冊【刊行】未詳。併し多分この淨瑠璃が江戶で禁止された元文頃に出たのであらう。板元は江戶本濱町伊賀屋勘右衛門。【諸本】日本歌謠集成卷十・德川文藝類聚第九所收。【內容】宮古路豐後掾一派の正本三十

七種を合綴した寄せ本で、版式も字體・行數も區々である。目錄の示すが如く、過半は近松の世話淨瑠璃を借用したものであるが、豐後掾の語り口は煽情纖細で、當時の淫靡頽廢的な世好に投じたので、風俗上害ありとして江戸に在ることを禁ぜられた。目次・奥付は左の如くである。

【上卷】
一、祝言　魚づくし
二、忍ぶ山唄日草　角や傳介 花やおふゆ道行
三、鉢智の中酌　お菊幸助みち行 菊のきせわた
四、比翼の初旅　新兵衛 小女郎道行
五、雙紋刀の銘月　半七 お花みち行
六、相生高砂寶藏　友ずみ物ぐるひ
七、祝儀熊神樂
八、小町大かゞみ　少將みち行
九、おちよ半兵衛 浮名のもふせん
一〇、まはろ長じや
一一、ふたご隅田川　狂女道行
一二、傾城小夜のなかやま
一三、高野萬年草　くめ之助 おむめ道行
一四、用明天皇　舟路道行
一五、千代若みどり　わん久道行
一六、若かいで口舌の帶
一七、吾妻嵯峨老鶴　八百やお七道行
一八、心中天網島　なごり橋づくし

【下卷】
一九、あし刈　謡妓女まひ
二〇、河内がよひ　なり平唄念佛
二一、夏芙蓉紅染小袖　おちよ半兵衛道行
二二、そね崎つい醉　おはつ徳兵衛道行
二三、半九郎ぶし　緑路の濡わらじ
二四、ひめゆ笠　おなつ清十郎 さいごの段
二五、傾城出口梅の道行
二六、幸崎心中　半兵衛 小いな道行
二七、しのだづま　くずのは道行
二八、曾我駒の雄　鬼王 團三郎かたみをくり
二九、契情吉原洒　静吉 高さや道行
三〇、銀稜律色羽二重　たるや おせん道行
三一、酒呑童子　頼光山いり
三二、睦月連理の椿　伊八 おさん道行
三三、かりはずくら　かよひつばさ
三四、淀ぞめ　三ツかりがね
三五、十七年忌　傳兵衛 おしゆん道行（原本に本文なし）
三六、まんざい糸はうみやげ
三七、駒鳥こひのせきふだ
三八、祝言　新たかたち
千秋萬歳叶

世にあざむく類版多ク有といへども異寫なるゆへに節章のあやまりはなはだし仍而大夫直傳之正本は圖刻此之印形おし令開版者也銘々御時枝被成御求メ御らん被遊可被下候　宮古路豐後掾　閲　直傳
江戸版元　もと濱町　いがや勘右衛門版

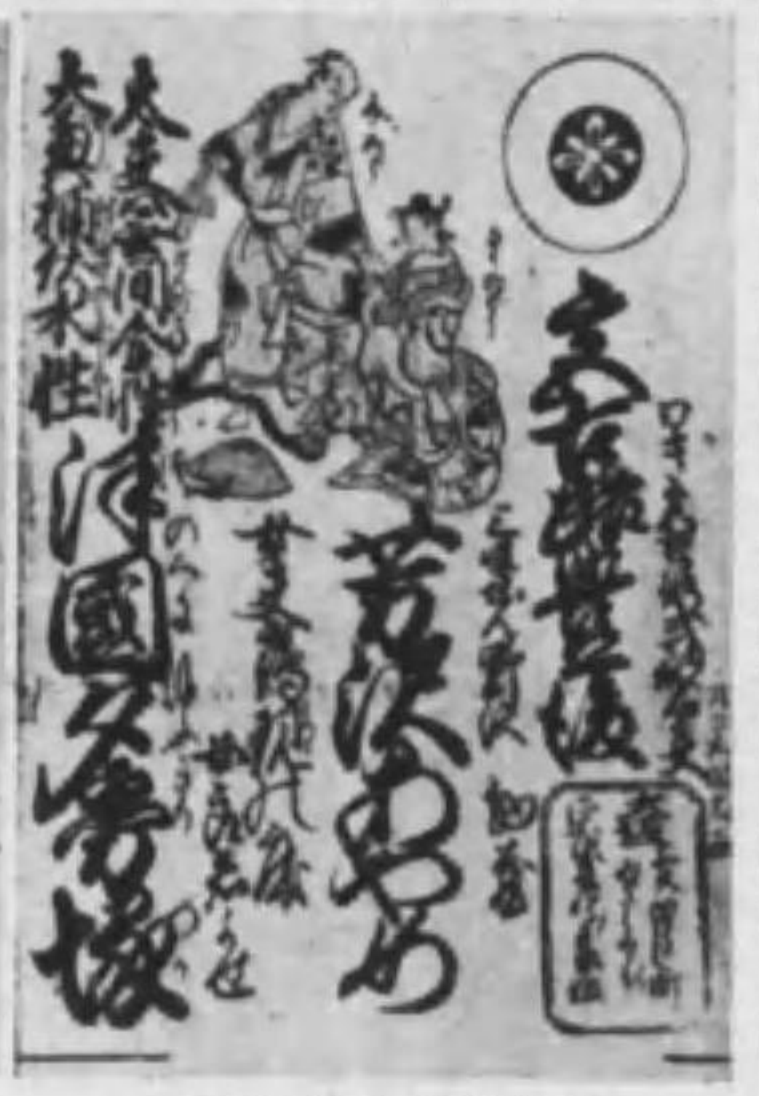
然るに、こゝに同名の一異本が筆者の家藏にある。改裝本一冊で版元等は不明であるが、最初に目錄が一枚ついてをり、內容の異同が甚だしく、兩書共通のものは、○印を附した十九種に過ぎぬ。これは多分書肆が後に勝手にさしかへて賣出したものであらう。目次は原本に二段になつてゐるが、便宜上一段に改める。

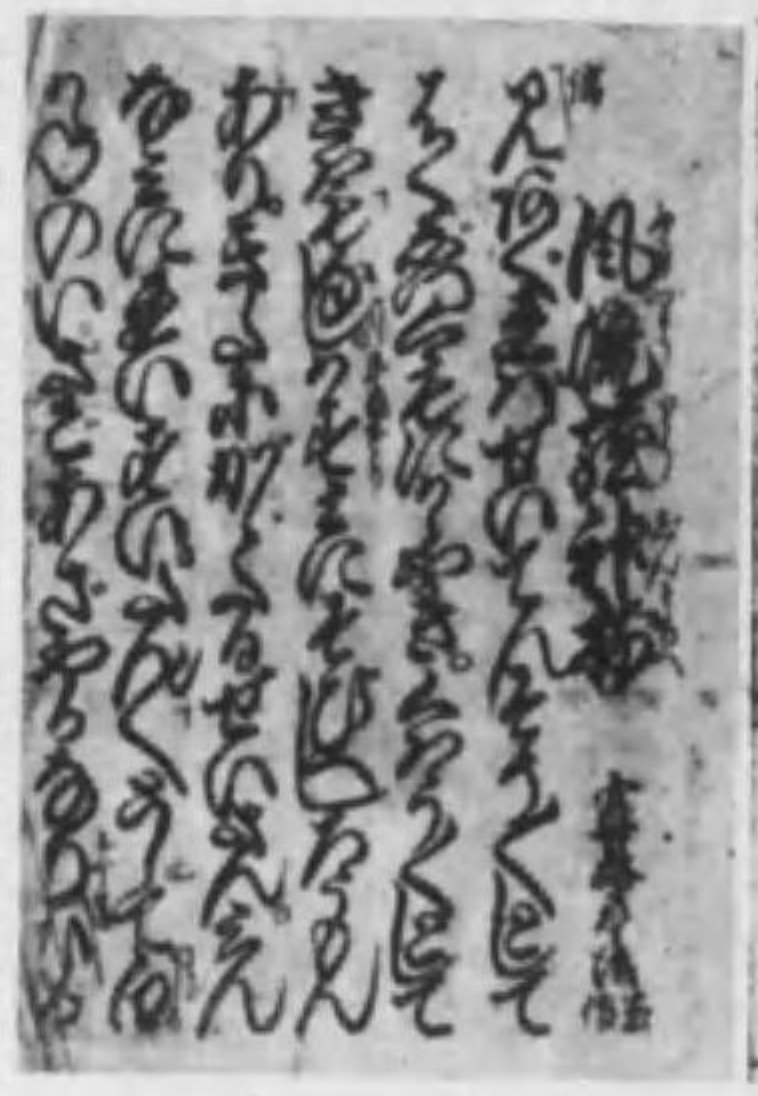
宮古路月下の梅　宮古路豐後直傳
道行欽事段物　惣目錄數四十三番
○祝言　魚づくし
○鉢管の中酌　お菊幸助みち行菊のきせわた
○比翼の初旅　新兵衛小女郎みち行
○雙紋刀銘月　半七お花みち行
○相生高砂寶藏　友ずみ物ぐるひ
○同　祝儀熊神樂
○小町大かゞみ　少將みち行
同　しのびの段
同　そとは小町
傾城二子山　いもせ川
朧月うつゝの女夫　餅たゝき
同　うつゝの道行
積月慶結葉　喜七 木末の雪
曾門松　與次兵衛 あづま道行
○吾妻嵯峨老鶴　おちよ半兵衛 八百屋お七道行
○夏芙蓉紅染小袖　源太 あげ巻みち行
鶴齡壽延見寶殿
○心中天網島　治兵衛 小はるみち行
○しのだづま　くずのは道行
○河内がよひ　なり平誓念佛
淀鯉出世瀧徳　勘五郎 あづまみち行
○雙子隅田川　狂女みち行
○高野萬年草　くめの介 おむめみち行
○幸崎心中　半兵衛 小いな道行
契情三度笠　忠兵衛 梅川相合籠
○曾我駒のなみだ　鬼王 團三郎かたみをくり
丹波與作　道行夢路のこま
石川五右衛門　御の前道行
○酒呑童子　頼光山いり
傾城反魂香　みくまのかげろふの姿
大經師昔暦　茂兵衛 おさん みち行
十七年忌　傳兵衛 おしゆんみち行
袂の白しぼり　おその 久松 地藏めぐり
百合若野守鏡　みやじま八けい
小袖曾　もやうづくし
蟬丸　あふ坂山みち行
陸陽相座錦　大ずつしよ
萬年草後日七卷　字山 おはつみち行 みち行ちかひの紙づくし
鐵輪戀物道
○曾根崎道善　徳兵衛 おはつみち行
比翼の初旅
○祝言　新高砂　丸竟段

宮古路節八（みやこぢぶしのはち）「一閑八節」を見よ。　【編者】

宮古路豐後掾（みやこぢぶんごのじよう）

淨瑠璃太夫【本名】未詳【藝名】都國太夫半中・宮古路國太夫。受領して宮古路豐後掾橘盛村【生歿】萬治三年京都に生れ、元文五年（二四〇〇）九月一日同地に歿す。享年八十一（常樂寺に葬る）【法名】千壽院榮譽文彌居士（東京淺草寺境內の七回忌追福の石碑には、源國院本譽目性居士）【閱歷】一中節（別項）の流祖都太夫一中の門から出で、享保初期には既に師流から獨立して姓を宮古路と改め、半中節又は國太夫節と呼び囃されて上方に行はれた。殊に享保七年十二月、大阪嵐座の「山崎與次兵衛半中節」に、與次兵衛物狂ひを語つて大喝采を得、同十三年春京夷屋座の「けいせい玄冥鐘」に數馬の夢の段を勤めて愈々名聲をあげ、次いで受領して豐後掾と改名した。同十六年正月大阪佐渡島座の「雙紋刀銘月」に初花半七の心中道行を出語りして大當りを取り、これより名古屋を經て江戸に下り、同十九年九月葺屋町河岸の播磨芝居で、名古屋で當てた「たゝ・みや伊八（金村屋おさん）睦月連理椿」（名古屋心中）を語つて大好評を博し、翌二十年七月には、これが中村座に上演されて絕大の人氣を高め、彼の風俗が世に靡き、文金髷・文金風とて流行し、遂にこれを宮古路風と稱へた。又その世話淨瑠璃の色事心中を生地で行かうとするものが多くなつたときへいはれ、ために翌元文元年にはその筋より豐後節の劇場出演や稽古差止めを命ぜられたとまで傳へられてゐる。尤もこれは諭旨程度のものであつたかと思ふが、とにかく興行は元文二年までで、成功裡に打上げて京都に歸つた。而して同四年春大阪芳澤座で「女夫鶴現の床」を、九月には京亀屋座で「夕霧淺間嶽」を語り、同五年九月に歿してゐるので、世に傳はる豐後の江戸での情死說とか、豐後節禁止說とかは門弟等に就いてなされたもので、彼自身には關係はない。辭世「おく露やともに消ゆく苔の下」。【門弟】豐後掾の歿後、國太夫の名跡は、その子（雙子とも）若太夫によつて相續され、また豐後掾の名義は初代國八の門弟宮古路世代太夫が襲いだ。雙子と傳へる宮古路文字太夫は江戸に留まつて常磐津節を起した。門弟は極めて多いが、その中著名なのは江戸の富士松薩摩掾（別項）・松本數馬太夫・宮古路綱太夫、京阪の宮古路國八（國八節參照）・大和路仲太夫・豐美繁太夫（繁太夫節參照）・宮古路大和太夫等である。以上のうち大和路仲太夫は、初め宮古路仲太夫といひ、後に一派を成して相應に行はれ、曲風は國八・正傳等に類してゐた。而してその門下は、天明前後まで京阪の歌舞伎に用ひられた。（豐後節參照）【詞章と曲風】今日その正本として傳存するもののみにても百曲に近い多數に上るので、恐らく生涯の曲數は二百をも越ゆるであらうが、一中と豐後との關係は恰も江戸の半太夫と河東との關係にも似てゐた事は、分離後でもその正本や語物の共通したもののあるのによつて推察出來ると思ふ。彼は主として世話を好んで語り、而もその多くは心中物の道行や濡場で、正に上方の軟派淨瑠璃の代表者ともいはるべきである。殊に師流一中に於けるが如く、その詞章は近松が義太夫節のために作つたものの轉用又は改作も尠くはないが、詞藻の見るべきもののみを擇んでゐる。近松の道行の名文の情趣を眞に語り活かしたのは大舉激越な曲風を誇りとした義太夫よりは、優婉典雅な語り口の一中、又それよりも遙かに魅惑的な豐後の語り口であつたかと思はれる。而も彼は師流を表とし、これに文彌節と阿波太夫節とを加味したらしく、更に自家獨練工夫の妙技を加へて一流を成したもので、豐後節として特色を成した當時の彼の曲風に殊にこの感が深い。その曲節の特色の一ともいふべきイロ調が洗練してゆく手法やクドキの如き、一中の貞節とはいへ、より徹して吟唱自在に驅使したものであつたらう。彼は演奏に秀でたのみでなく、また作曲にも非凡の才を有つてゐたといふ。


宮古路豐後掾正本


同　上

【史的地位】彼は豐後節諸流派の總祖たるのみでなく、江戸長唄の中興の名手富士田吉治（前名佐野川千藏、また二代杵和中）が一中節から出て豐後節をも能くし、次いで長唄に轉じて唄淨瑠璃に貢獻する所あつたのを思へば、間接にしても長唄に及ぼした影響は決して尠少ではなく、且つ今なほその支派たる江戸豐後節が義太夫節と相對して盛行さるゝ點等に於て、江戸近世三絃樂の父祖たるのみならず、日本音樂史上重要な地位を占めてゐる。【代表曲】彼の作曲に成る傳存曲は「鈴野雪築（北條力之助）傾城の雲龍」一曲に過ぎない。それも常磐津の手によつて現はれるのみである。今彼が語り物の中から代表曲を擧げておく。○山崎與次兵衛半中節（前出）○（胸作小まん）夢路の駒○傾城三度笠相合籠道行　○加賀お菊妹脊の中酌（道行鎮管縷々を含む）○玉屋新兵衛三國小女郎道行比翼の初旅○雙紋刀銘月（前出）○名殘の橋盡し（心中天網島道行）○おかん半九郎緑路の濡草鞋（半九郎ぶし）○おそめ久松名殘の廿三夜　○金村屋おさんたゝ・みや伊八睦月連理椿（前出）○女夫鶴現の床（元文四年春大阪芳澤座）等。【段物集】その門下の語物をも收めて數十段合綴した段物集の現存するものでは、「宮古路月下の梅」と「宮古路窓の梅」（各別項）との二種が著名である。その他「宮古路大寄藏」を初め、「宮古路祇園囃子」「宮古路時和の梅」「宮古路構盃」「宮古路花の園」「宮古路菊水」「宮古路紫竹調」「宮古路初音梅」「宮古路花會」「宮古路花表」「宮古路蛙車」「宮古路峯の中」（但しこの中には繁厚豐子本も含む）等がある。

【參考】聲曲類纂（齋藤月岑）○江戸時代音樂通解（町田博三）○宮古路豐後掾の功績　高木鈴藏（近世演劇考說）○歌舞伎圖說（解說篇）（守随憲治・秋葉芳美）○宮古路豐後掾と名古屋心中　松村鐵峰（歌舞伎研究一八）○豐後節雜記　三田村鳶魚（同上二四・三〇）○心中淨瑠璃　同上（演藝月刊五・六）○日本歌謡史　高野辰之○江戸時代之音樂　田邊尚雄　【秋葉】

宮古路窓の梅（みやこぢまどのうめ）

豐後節寄せ本　上下二冊【刊行】未詳【諸本】德川文藝類聚第九所收。【內容】「宮古路月下の梅」（別項）の姉妹篇で、豐後掾及びその門下の正本二十八種を載す。○印をつけたのは「月下の梅」と重複するもので、目錄と奥附は次の如くである。

新板　宮古路まどの梅　直傳正本
一、雙紋刀銘月　丸一段
○一、ひよく初たび　同
一、玉屋新兵衛 三國小女郎みち行
一、加賀お菊　中の酌　丸一段
一、同幸助おきく道行
一、睦月連理椿　丸一段

下
○一、同伊八おさん道行
一、尚世はちの木　道行
一、山崎與次兵衛道行
一、傾城三度がさ道行
一、大きやうじ　おさん道行
一、丹波與作　道行
一、笠物ぐるい　道行
○一、用明天皇　舟路道行
一、はちたゝき道行
一、わんきうみち行
一、奈良八景　さくらづくし道行
一、三勝半七　みち行

一、天智天皇美人揃
一、助六心中みち行
一、かたみおくり
○一、八百やお七道行
○一、小まち大かゞみ　濟行
一、少將しのび
一、刀の名月　濟行
一、鎌倉八景　道行
○一、曾根崎道行（おはつ徳兵衞）濟行
一、けいせいさよの中やま

世に正本といひて普く流布すれどもいづれも又寫しの故に節に誤り有章にわずかイ・の違ひ多し縱ば荻と萩の字のごとし其心上風下露の相違たるべし仍てあらたに[illegible]を新板せしむる者也

宮古路豐後掾　（御直）判
板元　新大坂町　三川屋彌七

（藤井）

都傳內（みやこでんない）　脚本作者・劇場主【本名】未詳【生歿】延寶八年七月二十一日歿との說がある。享年は六十三歲說があるが確かでない。【閲歷】江戶歌舞伎の創生時代ともいふべき寛文三年に、市村座は上方から藝者を多く呼び下したが、やがて寛文四年には、江戶の續狂言の嚆矢と見られる「今川忍び車」二番續を上演して非常な喝采を博した。この作者は都傳內であつたといふ。當時抱座本であつたとの說もあるが、如何か。「大江山」「梅が妻」「竹生島」等も彼の作と傳へる。これ等は、枡舞師を主要素とした作柄である。彼は脚色上に新工夫を出すと共に、舞臺裝置にも創案を用ひたといふ。但しこの傳內の閲歷に關しては、甚だ明瞭を缺くものがある。卽ち當時、都傳內が兩名ゐる。早く寛永六年（十年說もある）大阪から下つた久三郎と稱する放下師があつて芝居を興行してゐたが、明曆三年、神田明神社內で類燒し、後、葺屋町に移つて興行してゐたが、その頃、京都から新たに下つた放下師が、やはり都傳內と名乘つて堺町に興行したので、その間に一時、出入があり、內濟となつてから前者は「古へ都傳內」、略して「古へ傳內」又は「いにしへ」、後者は「新傳內」と稱へた。後者は後になつてから「都右近」と改めたともいふが、同じ座名で興行を續け、延寶年中に及んで廢座となつたらしい。古へ傳內の方は代を繼いで、享保五年、二代（か）傳內は大芝居取立を願ひ出たが許されず、同十九年、森田座の休座中、その櫓に代り、その子（三代？）が寛政五年から五ケ年間、中村座に代る控櫓を許されて興行した。市村竹之丞を助けて續狂言を脚色した傳內は、右の何れであるか判然しない。（守隨）【參考】劇野老○享保五年いにしへ傳內願書○寛政五年池田筑後守伺書○江戶國說

都島藝戀笛（みやこじまげいのこひぶえ）「梅若丸一代記」を見よ。

都の手ぶり（みやこのてぶり）　隨筆　一册【名稱】都（江戶）の風俗を擬古文に書いたもので、古風に名づく。【著者】六樹園飯盛（石川雅望）【刊行】文化六年五月、東都麴町平川町貳丁目角丸屋甚助梓【諸本】百家說林・錦葵文庫・有朋堂文庫所收。【解說】大本一册、紙數二十一枚、一頁ほぼ十一行である。橘千蔭の序があり、著者の門人山本長畔の跋がある。內容は擬古文を以てした一種の紀行文風の隨筆であつて、大江戶の手ぶりの幾分を紹介した五つの短文より成り、「とみ澤の市」「やくし堂」「よたか」「とみ澤の市」「兩國の橋」「ばくろの町」の項目に分れる。「とみ澤の市」では富澤町に質流れの古着のみを賣る朝市が立つといふので、そこの古着とりどりに一流の品定めをして見せ、「兩國の橋」では橋の叙景にはじまつて樣々な見世物の情景を寫し、「ばくろの町」では旅籠町としての沿革から、其處に集ふ各國旅人の狀態を述べ、「やくし堂」では當時はやつた鍋橋の藥師に詣でて、秋草の花の名づくしをやり、「よたか」では夜鷹の出る場面の描寫をつくしてゐる。これは地誌や風俗史の參考にもならうが、主たる興味は、その隨筆としての妙味である。千蔭もその序に、かやうに今の事を古ぶりに書くのは、著者の如く古典に通じ、才氣ある者にして能くなし得ることだといつてゐる。「兩國の橋」や「ばくろの町」の文章などは小說的でさへある。跋に都手振前編一卷とあり、卷末に後編の廣告もあるが、後編は遂に出なかつたらしい。「狂文吾嬬那萬俚」といふのは、書名からすると本書の姉妹編の如く見えるが、別個のもので故事を主とせる戲文である。（笹野）

都の錦（みやこのにしき）　浮世草子作者【本名】宍戶鈍舟（「播磨椙原」には鈍舟居士とある）。初名は八田光風（光豐といふ說もある）。【別號】黃金桐山人・澤風軒（東北帝國大學所藏「播磨椙原」所載松岡十太夫が書翰の中に、薩摩山ケ野金山役人市東展右衞門が傳へた彼の詩歌の奧に、これ等の號が見えてゐる）。【生歿】延寶三年生れ（右同書所載の薩摩金山の鶴市之衞所傳の彼が獄中よりの訴狀の中に、中三拾歲とある。同訴狀は寶永元年霜月十八日の日附であるから逆算して定める）。歿年不詳。但し右市東所傳の詩歌の奧に、寶永七年孟冬上旬とあるから寶永七年冬までは生きてゐたと見える。【閲歷】右鶴市之衞所傳の訴狀は、その內容を彼の著作に參照して眞のものと思はれるから、今これに據ることとする。本國は常陸宍戶鄕、大阪に生れた。父は松平萬右衞門康當、母は廣幡豐忠の女で、彼は源賴朝の兄知家より二十一代の孫に當る。攝津佐用郡佐用姬神社の神主を勤めて八田光風と稱してゐたが、二十一歲の時儒學修行のために京都に出て、伊藤仁齋の門に入り、傍ら國學を北村季吟に就き、和漢の學をなすこと六年であつた。偶々二十六歲の春、惡友に誘はれて遊蕩に耽り、學資を費ひ果てて遂に祖父の所有に係る三條御手の屋敷を賣買し、藏書衣類迄も殘らず賣却して遊蕩費に供した。親類緣者から緣を切られたので、翌年の春新黑谷門前に小庵を結んで佛法を修行し、山科大宅寺の月波和尚に參禪して名を鈍舟と改めた。生活のために假名文の書を述作すること二年六月であつた。それから身を立てるために、同學の添書を携へて元祿十六年の春江戶に出で、或る人を賴らうとしたが、その人は火災に罹つて行方を失してゐたので、徘徊してゐるうちに浮浪人と認められて、十月遠流に處せられ、薩摩の山ケ野金山に追はれた。少時から日置流の弓術を好んで、笠掛・犬追物等に習熟してゐたので、時々これを役人達に敎へて厚遇されてゐた。それがために仲間の憎みを受けて虐待堪へ難いので、一旦逃亡したが、捕へられて獄に投ぜられ、日々の食物もろくく與へられない苦しさに、寶永元年十一月十八日、獄中からその筋に對して、「願はくは御仁心を以て被召出、忽ち首を刎られ被下候はば、生前の大幸難有奉存候」と死刑を願つたことがある。死所を詳かにしないが、恐らく薩摩であらう。【著書】元祿曾我物語○風流日本莊子○御前御伽婢子○元祿太平記○風流神代卷○神津白浪○風流源氏物語（各別項）○播磨椙原○四書校變句解（「元祿大平記」にこの著あることがいつてある）。（暉峻）

みやこの花（みやこのはな）　雜誌【編輯者】中根淑（香亭）と山田武太郎（美妙齋）の二人が主となつて編輯に當つた。【名稱】或は「都の花」【刊行】明治二十一年十月、金港堂から創刊され（月二回）、第百〇九號を以て廢刊。【解說】純文藝雜誌として明治文壇に現はれた最初のものである。坪內逍遙の「小說神髓」（別項）によつて唱道された後の新作や新作家の紹介に努め、明治文學混沌期以後、飜譯小說・政治小說出現後の明治文學の草創時代に參與した。故に「文學界」（別項）等の起るまでの作品と作家の多くは、この誌上で紹介されたとも云へる。第一號には劈頭に美妙齋の「花車」、二葉亭の「めぐりあひ」以下四篇を紹介してゐる。二葉亭の「浮雲」（別項）第三篇、嵯峨の屋の「初戀」（別項）の名作を初め、學海・忍月・藤蔭・三昧・如電・露伴・湖處子・仰天子等の當時の花形の作を以て埋めたが、ただ硯友社一派の作家は同社を去つた美妙に快しとせずして多く寄稿しなかつた。又挿繪は毎號四五面宛挿んでゐたが、渡邊省亭・小林清親・月岡芳年・尾形月耕・武內桂舟・松本楓湖・富岡永洗・三島蕉窓・鈴木華邨等の流行作家を以てした。同誌は創作品以外の雜錄や編輯言の如きを一切用ひなかつたのも、後の雜誌と比較して異色があつた。登載の作の多くは完結毎に合本にして賣出す形式をも採つた。（齋藤（昌））

都の富士（みやこのふじ）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】一說に近松門左衞門【名稱】一名「愛子若都富士」【興行】元祿六年正月二日初日、竹本座初演（明和板外題年鑑）【諸本】八行五十二丁の大形本、半紙本の外に輪入細字本もある。拂彥の「淨瑠璃目錄」には「愛子若都富士、宇治加賀掾古淨瑠璃なり。都富士とばかり標題にかきたる本あり」とあるが、現存のものは竹本義太夫の正本で、加賀掾の正本は未見である。近松全集第四卷・淨瑠璃名作集上卷所收。【題材】古淨瑠璃「愛護若」（別項）を藍本としたもの。【梗概】（初段）（序）清水の段。二條左大臣清平の子愛護若（十六歲）が清水參詣の時、家臣田端早苗之介の妻木幡の取りなしで、茅原維大納言秀道の女鴻照姬と契る。（中）南殿の段。嵯峨天皇崩御後大宮門院が女帝として政治を執られ、不德不人望なる一の宮村雲の王子を措いて、御實子玉柏の王子に御代を讓らうとの御心遣ひが原因で御惱となり、醫藥・加持も效がない。比叡山帥の阿闍梨の奏上で、二條家に傳はる降天の鞍を三歲の駒に置き、叉の太刀を佩いて愛護若が南殿の庭に於てこの駒を乘り据ゑ、三日二夜の御祈をすると、叡山の神猿が現はれて、その奇瑞によつて御惱は忽ち平癒遊ばされる。（奧）右大將有雄のために、帥の阿闍梨が「比叡山緣起」を語る。（切）二條家の臣早苗之介が唐鞍と叉の太刀とを守護しての歸途、右大將有雄と乘打の爭ひとなり、一同を蹴散して二條の館へ歸る。（二段）（口）有雄館の段。有雄は甥に當る村雲王子を位に卽けようと企て、先づ讒臣左大臣清平を除くために、女六條姬を清平の後妻に輿入させて同家に預かる二種の寶を盜ませ、それを落度に罪に落さうとの評議をこらす。（中）二條家館の段。有雄の臣駿河の前司が二條家の臣惡五郎友定と氣脈を通じ、六條姬を輿入させる。祝言の席で姬は愛護若と親子の盃をする時、その美貌に心を奪はれて、道ならぬ戀が萌す。（奧）早苗之介は主君清平に六條姬との結婚の不可なる所以を練諫し、怒を買つて勘當される。（切）早苗之介一家退去。（三段）楓狂庵の段。愛護若は昨年世を去つた實母供養のために、邸內の楓狂庵に籠り、紅葉の葉毎に法華經の文句を一字づつ書いて、遣水に流してゐる。鴻照姬は男裝して通つて來る。庭では六條姬が戀に悶えて、愛護若が流した紅葉を撫でてすくひ狂亂の態（謠曲櫻川の翻案）。愛護若は初めて繼母の道ならぬ戀を知つたが應じようとしない。六條姬の意を受けた乳母月小夜が、亡き母の亡靈に扮して愛護を說伏しようとすると、老臣荒木左衞門が鬼の面をつけ劍叉を携へて出で、月小夜を捉へて白狀させ、庭の松の木に縛する。清平が來て尋ねると、月小夜は愛護に命ぜられて家の重寶を盜まうとしたのを、荒木に見咎められた故であると讒告する。清平はこの言を信じて愛護を勘當する。荒木の言ふがまゝに叔父なる叡山の帥の阿闍梨の許へ行く（あいごの若道行）。（四段）阿闍梨庵室の段。宍生の里早苗之介侘住居の段。野宿の場。三尊出現の場に分れて愛護若が失望と憤怒の極、辛崎の濱に身を投げる迄の經過、六條と鴻照とが愛護の後を慕つて迷ひ出で、行き暮れてそれとは知らず二人一緒に野宿中に、愛護の亡靈の告によつて事情を知り、互に名乘り合ひ、手を携へて共に身を投げて戀人の後を追ふこと。投身した三人が釋尊・彌陀・藥師の尊體を現じて、都の富士（比叡山）の利益を示して、人々を渇仰させる顚末を敍してある。（五段）神移しの神事、惡人滅亡、大團圓。【構想】說經の系統を引いた靈驗記・本地物の色彩を濃厚に持つてゐる古淨瑠璃の「愛護若」（別項）を改作して、右大將有雄の叛逆に戀愛の三角關係を取合せて複雜な仕組とし、且つ原作は筋を運ぶを主とした敍事體であるのを、場面相互の變化を保たせる描寫式にしようとしたのは、戲曲として一段進んでゐる。尤も結末に、山王權現の靈驗・奇瑞が相當に强く出てゐる點は、まだ古淨瑠璃の臭味を脫し切らないものといふべきである。なほ又發端清水の場は、「清玄櫻姬」の清水の場に似てゐる。【影響】紀海音の作「愛護若塒箱」がある。正德四年十月朔日から豐竹座上場（明和板外題年鑑）で、文章も趣向も原作よりは砕け、靈驗的色彩は稀薄になつてゐる。特色としては、愛護若に對する六條・鴻照の戀爭ひを、六條姬輿入以前よりのことに仕組み、繼母となつてもその思ひが愈々募つた爲めに、清平の叉にかゝつたに拘はらず、愛着の一念が死後も執拗に附き纏ふといふ趣向にして、鴻照と愛護とは結局添ひ遂げること、清平を果斷正義の士として鮮明に描いたこと、忠臣早苗之介夫婦の活動の描寫に力を入れたこと等が特に目につく。更にこの「塒箱」の改作に、辰松幸助作の「愛護若都の富士」がある。前述の義太夫の正本と混同され易いが別物である。右大將家の臣廣嗣が、清平の臣佐久間寄澄に佩越貫を强ひられて困ることや、奴江戶兵衞が清平に召抱へられて伊賀前司國光と名乘ることなどが第一・二段の中に作り込まれてゐるが、後半は「塒箱」と大同小異で、首尾一貫しない支離滅裂の惡作である。正本の所屬演派を明かにしないが、フシ附・版式等から見て義太夫の正本とは思はれない。【參考】淨瑠璃解題（歌舞伎研究第一輯）（黒木）

都羽二重拍子扇（みやこはぶたへひやうしあふぎ）　淨瑠

琥詞曲集　六冊【刊行】文政三年正月、江戸瀬戸物町文花堂鶴屋庄三郎板。【解說】一中節（別項）の詞曲を五代目都太夫一中が編輯して大字六行本としたもので、各卷の奧附に「近來予が一流世にひろまるに古板の正本は拙細字故此度改て帝所緣ある文花堂の主に再板をたのむ事とはなりぬ」とある。その目次は、【初編】辰巳の四季○よし原八景（吉原八景花紅葉都錦繡）○實左安法）○小春髮結○夕がすみ（夕霞淺間嶽）○くらべ牡丹○家ざくら（家櫻傾城姿）○鐘あわせ（瀬平妹背の鐘合）○小町少將（小町少將道行）○根曳の門松○黑塗の鳥籠（夢見鳥）【二編】松づくし○笠もの狂（お夏笠物狂）○用明天皇（用明天皇鳥追行）○錦はた帶（尾上の雪錦袋帶）○黑田妻○鞭さくへ（丹前都路駒）○三度笠（お伝梅川三度笠）○松がさね（夢見鳥）○松羽衣（錦繡補文）○きのへ子（錦都話）【三編】都見物左衞門○少將道行○蝶崎心中（手代番頭崎心中）○鎌の前（鎌の前道行）○河內通（東平河內通）○花照粟（花照能道行）○傾城淺間（傾城淺間嶽、初代櫻田左安法）○石和川（船橋石和川）○星月の前（星月の前道行）○若紫高尾（都若紫高尾）【四編】高砂松之段○峠高砂○曾我かたみ鏡○日野の粧○富士高安物語【五編】春中新曲○裸百屋道行○銀光山人（作者近松門左衞門）○同衣あらひ（作者近松門左衞門）○同親子勢揃（作者近松門左衞門）【六編】安宅道行○同勸進帳○同久遠行○同下の卷○鯉の口。

表紙に、上部に都の定紋藤に澤瀉鶴をつけ、下部に協力者河東節の三味線ひき菅野序遊（山彥新次郎の改名）の花桐の紋をつけたのは初代序遊の功績を傳へるための記念である。

【參考】舞曲類纂卷之二下○一中節の歷史（日本音曲全集第十一卷）○日本歌謠史　（藤井）

都風俗化粧傳 みやこふうぞくけしやうでん　風俗書　三卷【著者】佐山半七丸【畫工】速水春曉齋【名稱】女子愛敬都風俗化粧傳【刊行】文化十年初秋【解說】女子の化粧法に就いて記したもので、上卷は顏面之部、中卷は手足之部・髮之部・化粧之部、下卷は恰好之部とし、各部若干の細目に分けて諸種の方法を記し、別に上欄を設け、頭書として下文に應じたいろ〳〵の祕傳・藥方などを記し、下卷の頭書には、帶の結び樣・被帽子の着樣・襟附の圖が載せてある。又文中まゝ風俗圖を挿んであつて、頗る興趣を添へてゐる。文化十年文月の大原權少將源朝臣重成卿の序文がある。　（石村）

都又平 みやこまたへい　落語家【閱歷】本名・生歿共に未詳。その著に「輕口機世茂千」（元祿十四年刊）、「輕口腕おどり」（元祿年間刊）等があるから、元祿年間に、京都に於て活躍した落語家であつたと思はれる。　（小池）

都名所圖會 みやこめいしよづゑ　地誌・風俗　六卷【編者】秋里舜福【畫工】春朝齋竹原信繁【刊行】安永九年八月【解說】京都の神社・佛閣・山川等所謂名所に關して地理・風俗等を記し、その主要なものは全景・花見の圖・諸人參詣の圖などを掲げたもので、文章平易、圖樣輕快、人をして坐して名所に遊ぶの思ひあらしめたので、頗る時好に投じたものと見え、爾後この種の著作流行の源をなしたものである。著者の言によれば、「花洛細見圖」を增益し、文談は「宮古歲事記」「山城名所紀行」を推としたものである。平安城を一・二卷に、四方を左青龍（東）・右白虎（西）・前朱雀（南）・後玄武（北）と分けて各一卷に記してある。附近の名勝、石淸水八幡・宇治・叡山等は折に觸れて記してある。五條式部大輔菅原爲俊卿の序がある。後天明七年、拾遺五卷が同著者同畫工の手に依つて刊行された。　（石村）

宮崎湖處子 みやざきこしよし　詩人・評論家【本名】八百吉【別號】八面樓主人【生歿】元治元年九月二十日、筑前國朝倉郡三奈木村に生れ、大正十一年歿す。【閱歷】東京專門學校の出身、初めは「國民之友」に據り、次いで國民新聞、「少年園」「家庭雜誌」「少年子」「青年文學」等に作詩・譯詩・美文を發表し、青年詩人の雄として明治二十年代の詩界に活動した。後、基督教の牧師となり、聖學院の講師となつたこともある。【作品】詩の方面では、「湖處子詩集」一册（二十六年刊）と「抒情詩」（別項）に二十二篇と「歸省」に三篇ある外は、散佚したまゝ未だ全詩集として纏められたものはない。またヒーマン、ロングフェロー、ウォルズウォース等の譯詩が四篇ある。その詩は殆ど七五調本位で四句一節とした形式が大部分を占めてゐる。用語は洗練されてゐる。擬古に拘らず、さればとて生硬な現代の漢語・俗語も交つてゐない。

【業績】湖處子は明治の新體詩、就中抒情詩の開拓には、先驅的業績がある。陶淵明の「歸去來辭」や湖畔詩人ウォルズウォースの感化があると云はれてゐるが、それ等の感化を經て更に湖處子一家の新しい詩風を成してゐる。しかし湖處子が、その頃にあつては全く新異なものであつた散文「歸省」によつて、殊に青年讀書層に與へた影響も、決して鮮少だとはいはれない。それと共に、彼が初期の詩人時代よりも、明治二十八九年頃を中心とし、批評家として「國民之友」に活躍した八面樓主人時代の方が、よく文壇に記憶されてゐる。多くは作品批評であり、廣い理解に乏しいところはあつたが、一種の警拔な觀察を特色とし、時々辛辣な批評を以て作家を憤らせたこともあつた。柳浪が彼の私行を暴いた「非國民」を公にしたのも、その批評に含むところあつた結果であつた。なほ詩人としての方面は、淡々として流水のやうな格調のうちに抒情詩として掬すべき眞情が含まれてゐた。「歸省」に收められた「歸思」「[illegible]別」等の諸篇は、湖處子詩中の優れたものである。卽ち西詩の有つ情調を日本の國語の上に移す點に於て、作者獨特の溫藉な手法は、三十年以後に興つた七五を基調とする抒情詩の上にも波及し、稀薄ながらもその頃の詩人で影響を蒙らないものはなかつたと云つても宜い。　（河井）

宮崎三昧 みやざきさんまい　小說家【本名】宮崎璋藏【別號】三昧道人【生歿】安政六年八月一日江戶下谷御徒町に生れ、大正八年三月二十二日腎臟病で歿す。享年六十一【閱歷】芳野金陵塾に漢學を修め、後、東京高等師範學校に學ぶ。明治十二年東京日日新聞に入り、爾來やまと新聞・大阪每日新聞・大阪朝日新聞・東京朝日新聞等に關係をもち、主として文學記事を執筆して三十五年に及んだ。この間、十五年には筆禍に遭つて入獄したことがある。二十一年頃から小說に指を染めたが、支那小說を飜案した「嵯峨の尼物語」（二十一年十二月、「都の花」所載）が處女作であらう。初めて單行本となつたのは、「新著百種」の「松花錄」である。初期「新小說」に寄稿してゐた頃から根岸派（別項）の一人となつてゐたが後に離れた。二十三年演劇改良論が再燃し、文學者や俳優が相集つて演藝矯風會を起した時、「泉三郎」を草し、二十四年十月九代目團十郎は淺草鳥越の中村座でこれを上演した。文學者の脚本を上演したのはこれが最初であるといふ。その作「鳩の浮巢」（別項）も關西で上場された。書籍の蒐集を好み、珍書を世間に紹介したものが多い。上田秋成の「雨月物語」（別項）の如きもその一である。三十九年腸窒扶斯を患つてから健康大に衰へ、やゝ文筆に遠ざかつた。

【著作】（小說）嵯峨の尼物語○追羽子○二夫婦○松花錄○遊女塚○桂姬○戀の重荷○塙團右衞門（別項）○指環○目黑物語○鬼一口○懷梅文等。（脚本）泉三郎○[illegible]紫神風○星月夜○殺生關白○聽瀨太等。又「吾亡妻」（二十四年「國民之友」）の一篇は小說ではなく、彼の亡妻の追憶錄であるが、至情惻々として人を動かし、當時の讀書界に大に稱讚された。

【批評】三昧の作品では、「桂姬」「塙團右衞門」「鳩の浮巢」「目黑物語」等が數へられる。露伴・浪六と併稱され、一時は時代物の大家として重きをなした。文章も一味の重厚さがあり、新聞連載物として好評のあつた史的世話物「鳩の浮巢」が代表するやうに、草雙紙的な古さが邪魔になり、獨創性の缺けたことが、彼を文壇から去らせる一因でもあつた。　（岡田（泉））

宮崎傳吉 みやざきでんきち　脚本作者・俳優【本名】未詳【生歿】享保度の中頃に歿したらしい。享年未詳。【閱歷】「金之揮」によると、延寶三年五月、江戶山村座「勝鬨譽曾我」（曾我狂言の初めといはれる）で、五郎（市川團十郎）・祐經（永島彌右衞門）に對して十郎役を勤めてゐるのが、記錄に出た最初であつて、爾來享保年中に及ぶまで、江戶四座に關係してゐた。就中森田座との關係が最も深かつたやうに思はれる。上方に宮崎を名乘る役者がゐたから、或はもと上方下りであらうかとも思ふ。市川團十郎・中村傳九郎・中村七三郎等と共に、元祿時代の江戶歌舞伎を樹立した立者である。演技についても、彼等と共に、天然の風儀を具へた者といはれた。役柄は「曾我」の十郎（七三郎且前の願）、「不破名古屋」の梅津掃部、「角田川」の山田三郎等を得意とし、實事を主として和事を兼ねたと見られる。團十郎が一面に作者として活躍したやうに、彼も傍ら同樣な態度を執つたので、當年の江戶作者の中では先驅格に屬する。寶永元年、九藏が二代團十郎襲名の時は、彼がこれを紹介し、寶永後は役者としての活動も漸次衰へて來た。【作品】代表作二三をあげる。○三世道成寺（元祿十四年七月、森田座興行。江戶歌舞伎の道成寺としては最古の部に屬する。元祿歌舞伎傑作集上卷所收。

【梗概】五番續。謠曲「現在道成寺」の後日譚の形式。隅道成の息道伴は庄司の娘白菊姬のために道成寺で取り殺されたので、道伴の弟道善は[illegible]て菩提のために修行の志深かつたが、白菊の靈は妄執深たる道善の[illegible]の娘滿月姬に憑つて、姬は道善を慕ふ。然るに御饗は[illegible]のために閻魔島根家の息女待宵姬を嫁に決める事によつて、夫婦を就遂せんと企らむ。道善には白菊姬の妹で侍女となつてゐる十六夜との仲に一子道丸がゐたが、道善が大事に上るうち、御饗の知る所となつて十六夜は殺される。併しその靈は現はれて幼兒を育て、或は道善の危難を救つたりしたが、滿月姬の生靈が道善を羽馬山に追つて、遂に最上川で道善を取り殺した。十六夜の兒忍之助と諸常五郎とが、鐘供養の道成寺で嗣方を討つ。滿月の靈は鉦鐘となつて鐘を纏ひ、日高川に飛び入る。諸道善（村山平右衞門）、滿月姬（上村吉三郎）、十六夜（袖崎いろは）、忍之助（宮崎傳吉）等。

○けいせい角田川（寶永元年二月、山村座興行。江戶の角田川狂言に影響する所が多い。「[illegible]」の原作）○楪根元曾我（享保五年一月、森田座興行。二代團十郎の矢の根の初作で、出世藝であつた）。

【作風】舞臺技巧に主を置いた眼先本位で、構想上に特に新傾向ありとも思へぬが、大體に於て、手堅い作風として優れてゐる。

【參考】舞曲扇林　河原崎權之助○歌舞伎圖說　守隨・秋葉○江戶歌舞伎　守隨（日本文學講座、近世下）　（守隨）

宮崎文庫 みやざきぶんこ　文庫【別名】豐宮崎文庫【解說】慶安元年、外宮禰宜出口延佳・與村弘正等が主唱し、衆庶の資財を募つて伊勢外宮に近き地（今、宇治山田市岡本町に屬す）に創建したもの（この事に贊した人々を文庫緣中と稱した）。書籍を集め、講堂を設けて神宮祠官の子弟の修學に資した。この事朝廷に達して創立者は嘉賞された。又幕府の儒官林道春はために文庫記を作つた。その後萬治三年幕府より修繕費を受けたのを初めとして多くの貴紳家よりも書籍等の寄贈を受け、漸くその基礎を固くするに至り、一方、諸學者の來つて書を講ずる者が多かつた。然るに維新後、藩中の私有物の如くなつて、一般公衆からは殆ど全く離隔せらるるに至り、又明治十一年の春、火災に罹つて講堂その他を烏有に歸したが、書籍は幸にその災を免れた。その後宇治山田市某氏の手に移り、敷地と共に一私人の有に歸したが、藏書全部は神苑會がこれを讓り受け、明治四十四年十一月、更に神苑會は宮崎文庫の舊藏書二萬七百四十五部を擧げて神宮文庫に寄贈した。（神宮文庫參照）　（植松・對馬）

宮崎夢柳 みやざきむりう　飜譯家・小說家【本名】富要【別號】芙蓉。夢柳居士とも言つた。【生歿】安政二年土佐高知中新町に生れ、明治二十二年七月二十三日、大阪堂島の寓舍に病歿す。享年三十五。【閱歷】父は宮崎富成、土佐藩士、初め名東縣出仕、後、讃岐琴平神社の祠官となつた人。母は玄つ子、川村氏。夢柳は幼より詞賦を喜び、藩黌致道館に學ぶ。一日藩主（容堂公）が觀學に來て、「柳」の詩を以て諸生を試みた。彼は退いて種々工夫し、夜中に至つたが、夢中に不圖得るところがあつたので、それを記して藩主に獻じ、その才識を賞された。それから夢柳の號を用ひたといふ。明治三年（十六歲）東京に遊び、丸山氏の塾に入り、傍ら重野成齋・成島柳北等に益を請ひ、別に英語を英國人某の夫人に學んだ。明治八年頃、島本仲道の北洲舍に入り、又東北地方を歷遊した。その後母死去の報知を得たので、讃岐に赴きその喪に服してから又出遊した。明治十三年高知新聞の發刊されるや、坂崎紫瀾・和田稻積等と共に、これに筆を執つた。十五年七月同新聞發行禁止の前後、上京して板垣退助が新に發行した自由新聞に入つた。同新聞が別働隊として繪入自由新聞を起すや、彼は第一線に立つて活躍した。論說に小說に彼の名は隆々として揚つた。十七年には小室案外堂と共に新聞「自由燈」を起したが、この時代が彼の文學活動の絕頂であつたらしい。十九年には彼が「自由燈」に連載した「鬼啾々」（別項）の單行本が祕密出版の罪に問はれ、禁錮三ケ月の刑をうけた。この後間もなく高知に歸り、土陽新聞に入つたが、更に大阪に出て日報社員となり、意見が合はずして二十一年東雲新聞に轉じ、再びやゝ得意の境に入らうとしたが、不幸にも翌年歿した。

【著作】夢柳は今日主として小說家として記憶されてゐて、論文その他は全く知られてゐない。十五年自由新聞入社以前にも小說の作があつたかどうか分らないが、それ以後の彼の小說を年代順に擧げる。【飜譯小說】自由乃凱歌（別項）（明治十五年）○魯西國虛無黨冤枉乃鞭笞（十五年）○一滴千金憂世乃涕淚（十六年）○龍動塔話　十六年）○佛蘭西太平記鮮血の花

（十七年）〇虚無黨實傳記鬼啾々（十七―八年）〇劉理〇佛國史談義勇兵（二十二年）。【創作】勤王濟民高峰の荒鷲（十六年）〇芒の一と叢（二十一年）等。

【批評】飜譯と創作とを問はず、夢柳の小說は凡て自由民權の伸張を目的とし、民間志士の反抗意識を強める手段として書かれたものであつた。そのために彼の小說は佛蘭西革命の出來事と露西亞虛無黨の政治行動とに限られたかの觀がある。だが、これは彼が關係した新聞の方針がさうだつたので、夢柳自身は政治上にそれ程根深い信念や主張をもつてゐたとは思はれない。彼は寧ろ多情多感な風流才子で、それが時勢に激して悲歌慷慨した程度に止まるであらう。彼の小說中有名なものは飜譯に多いが、事實は飜譯といひ條、自分勝手に增補手加減をしたもので、彼の自作といつてもいゝ位である。今日からいへば、假想的專制反抗を目的とした煽動的情緒以外に、何等本質的價値のない小說ではあるが、人心に投じて大人氣を得た。時代思想の反映として、又政治小說の重要な先驅として、明治文學乃至文化の研究者は、一讀を要するものであらう。なほ夢柳は好んで漢詩を作り、殊に香奩體の詩をよくした。　（柳田〔泉〕）

宮島春松（みやじましゆんしよう）「哲烈禍福譚」を見よ。

宮薗鸚鵡石（みやぞのあうむせき）　宮薗節寄せ本　半紙本二冊【刊行】安永二年【諸本】日本歌謠集成卷十所收。【解說】宮薗節（薗八節參照）の正本集で、序文に「（前略）此頃書肆森川氏正本をうつし、閲定を請ふて新曲集成す、且名題をこふ、先生魯魚を正し優譜をなし、名づけて宮薗あふむ石と云、我いふて石答ふる手、石いふて我響くか、また唯造化自然曲節を忘るゝといふもの非乎、なほ書肆の求に應じて一言を贅すと云。安永癸巳九月、宮薗門人岡古識」とあり、序についで紅綠の色摺にした宮薗紋集并諸名があり、一派の太夫三味線ひき七十一人の名稱と紋所をあらはし、目錄も短册形の下半に詞曲の意味を描いて風情を添へてゐる。目錄を舉げる。　（藤井）

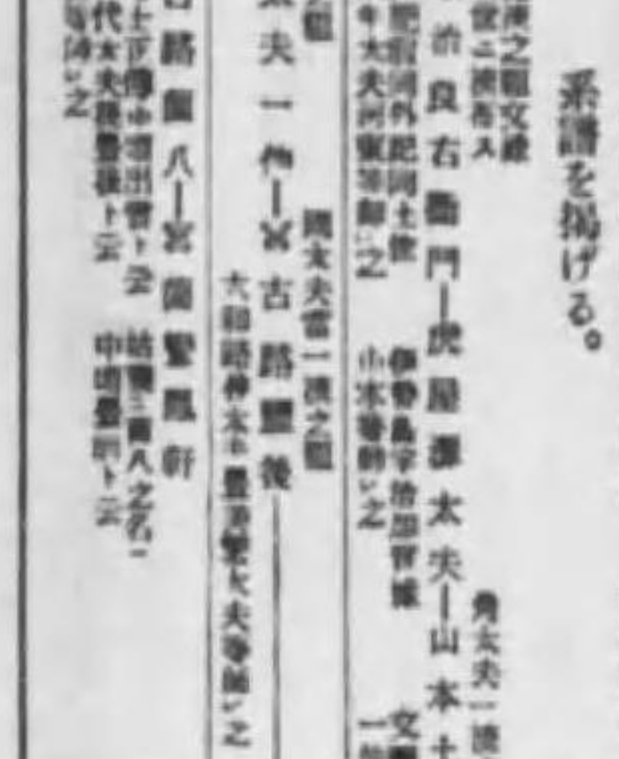
宮　薗　鸚　鵡　石　（淺野堅氏藏）

【上卷】
○くるはまんざい　○道行相合ごたつ
○袂の北しぐれ　○涙の通ひ路
○情のふたへおび　○闇のかつら川
○腕の色いと　○さゝ湯山
○傾せい約ぎつね　○なたねの亂れ咲
○お七吉三の段　○なごりのうす衣
○二世の待合　○むつの玉川
○反魂香相の山の段　○蘇宵のかけ行燈
○さつき文籠子　○浮名のにしのうみ
○くずの葉あべの・別れ　○戀のおだ卷
○料理の店見　○三つのまぼろし
○かりがねおつたうれい　○淨るりくやう

【下卷】
○御祝儀松づくし　○たゞへの深山木
○名ごりの初女夫　○こひのさよ嵐
○夕ぎり文しやう　○戀のたて紋
○しのだ妻　○露の綱手
○東井筒いけんの段　○さらがいし
○道行ゆかりの名月　○おきなはんじ
○萬年ぐさ　○卯の葉がさね
○宵がうしん　○蹴鞠てうとり
○つくば山さけつの段　○つくば山不心中の段
○江戸褄すがた　○錦にしの辻かご
○くずつ楊貴妃　○夢の思ひは
○そゞ輪小町　○こひの染木
○いもせの走書　○二世のきぬ〳〵
○かたみ曾我　○おゆへの帳つら川
○くるわ道中　○おかげ拔參り

宮薗千之（みやぞのせんし）「薗八節」を見よ。

宮薗花扇子（みやぞのはなあふぎ）　宮薗節寄せ本　半紙本一冊【刊行】明和六年【解說】明和六年己丑春三月宮薗鸞鳳軒の自序あり、次に左の系譜を掲げる。



次に八十太夫以下男女百五人の名と印とを載せてある。初版は印はすべて朱摺であり、「祝言松づくし」の一曲だけは、根曳の小松模樣の色摺紙に特に肉太な字で記されてゐるが、後摺は印譜も墨摺になり、「祝言」も普通の字體で普通の紙になつてゐる。

祝言松づくし　おさな源氏　夕ぎり文章
かたみ曾我　戀の小夜かぜ　そゞは小町
のべのいく東　花街の色いと　まんねん草
みやがうき身　錨のつな手　虎が石
こひの伊達紋　菜種のみだれ咲　さゝ湯山
二世の待合　浮名の西のうみ　しのだづま
闇のかつら川　卯の葉がさね　口舌楊貴妃
江戸褄すがた　まつの時雨　こひの染木
淨瑠璃供養（以上二十五番）

版式は六行に統一されて頗る體裁がよい。鸞鳳軒の手版で、紙質・印刷共に佳良である。系譜に見える如く、鸞鳳軒は薗八節を創めた宮古路薗八の門人で、二世を襲名したが、寶曆十二年宮薗豐前と名乘り、明和の初め頃より宮薗鸞鳳軒と改めて京阪間にその流派を擴めた。この人は多少文筆の才があつて、近松の詞章を抽出綴合して正本となし、又短簡な名淨瑠璃の作もある。（薗八節參照）　（藤井）

宮薗節（みやぞのぶし）「薗八節」を見よ。

宮薗都大全（みやぞのみやこたいぜん）　宮薗節寄せ本　半紙本一冊【刊行】寶曆十三年か。【諸本】徳川文藝類聚第九所收。【解說】詞章は大部分近松・紀海音以下、竹本・豐竹二座の淨瑠璃の一部分を殆どそのまゝ借りたものである。

染模樣妹背門松　道行夢路の地藏踊
染模樣妹背門松　質店藏ぐらの段
○ゆかりの月見　伊左衞門夕霧借扇　廓口舌の段
○逢夜の旅寝　半兵衞小いな口舌　八景の段

花菱園壬生の段　其言響のはつ雁
○おみすきの段　治兵衞小春名ごりの惣見
○香箱夢座夜　長三郎おかんうれひの段
○遊女物狂ひ　亂あふぎけいごと
○戀女房染分手綱　十段目三吉うれひの段
○傾城黃金鷄　長五郎あづま諸はがひ
○新薄雪物語　左衞門うすゆき道行
○花香爐の段　わたるけさ御前別れの段
○二世の縁言　源五兵衞おまん口舌の段
○傾城[illegible]　助六揚卷郭口舌の段
○梅咲席情鏡　新兵衞小女郎道行
○業平雙子觀　ゆめのあくた川
○長町の段　五段目三かつ縁切の段
○葛籠別の段　墨染二面かゞみ
○忠臣[illegible]　對王丸安壽姫別れの辻
○筑波山の段　うれひの段
○むかし祭文　傳兵衞おしゆんみち行
○假名の敷枕　茂兵衞おさん道行袖屛風
○曲輪雛の段　花街の誤分上之卷
○四ツ油屋の段　萬三郎遣芝くぜつの段
○姿のうつし妻　西行あけ國の段
○雪姫緣の段　花がすみ名古屋
○縫の膝組合　おなべ角内うれひの段
○男作五雁金　道行夢のかよひ路
○庄三頭巾　戀のたばね木
○新長局の段　八重霧かしくの段
○浮名の渡川　竹五郎吉妻口舌の段
○三瀬川縁著　又兵衞おきな道行
俱伽記上かん謝　三段目口
○雙生隅田川　きやう女みちゆき
○薗のかど松　山崎與治兵衞道行
○染井筒　ゐけんのだん
○西雲野中鐘井戸　鶴の由兵衞みちゆき
中將姫常實の段　ひばり山の段
○傾城吾妻鑑　與吉高まさみち行
○見よしはらいかだ　與吉高まさうれひの段
○千代の若鶴　陶久まつ山みち行
○濡花の新雪　治兵衞小はるみち行
○不心中闇編　七兵衞かさね道行
○里玉子由八文字　おこようれひの段
○御祝儀　うをづくし

この書寶曆十三未年改正とあれども、本文中に「染模樣妹背門松　道行夢の思ひ羽」（明和四年作）「京羽二重娘氣質　關帳場口舌の段」（明和元年作）「關取千兩幟　相撲の段」（明和四年作）などの義太夫物が殆ど原作通りで收められてゐるを見れば、早くも明和四年の末に增補したものとせねばならぬ。寶曆十三年は增補以前の年月であつて、目次だけを新に板に起し、本文はそれ以前に印行された一段本を合編したものである。初版のものは、目錄の終りに「寶曆十二午歲　宮古路薗八事　宮薗豐前　改正直傳」とある。思ふにこの「宮薗大全」は、改名披露を兼ねての出版であらう。これには語り物五十段を集め、宮薗豐前直傳と記するもの三十段、宮古路薗八直傳とあるもの四段、宮古路豐後とあるもの二段、その餘十四段は何とも記してない。寶曆十三年改正とある書と比較するに、○印は二書共通で、その外に左の十曲がある。

初讀歌中山　小きん命天眼道行歌の中山○宮雲染情明
小春治兵衞道行妹背の抱紋○死出の山路　心中道ゆき
○ゆかりの十種　阿久松山物ぐるひ○椀屋おせん
口舌ゝ段○涙の玉藻情　孤狸錦艶すきの段○升落
の段　雲門松中の卷○妹背の中譜　余助お菊道行
○雙紋刀銘月　伴七おはな道行○笠物狂　清十郎
お夏狂ひの段。　（藤井）

宮薗鸞鳳軒（みやぞのらんぽうけん）「薗八節」「宮薗花扇子」を見よ。

宮人振（みやひとぶり）　歌謠【名稱】歌詞の第一句による稱である。【出典】「古事記」允恭の條に一首出づ。【解說】雅樂寮で敎習した大歌の一で、「宮人の　あゆひの小鈴　落ちにきと　宮人どよむ　里人もゆめ」と云ふ短歌形式より成る。【備考】「古語拾遺」に、天照大神を倭笠縫邑に祀り奉つた夜に宴樂した時の歌が出で、それを若干變改したものが、神樂歌の大前張に「宮人の　大よそ衣　膝通し　着のよろしもよ　大よそ衣」とある。この歌は「宮人振」と關係があるのではなからうか。（伊勢神歌・後神樂參照）　（植田）

深山草（みやまぐさ）　讀本　四冊【作者】伊丹椿園【名稱】扉には「今古怪談深山草」、內題には「古今奇談深山草」とある。世に傳へざる怪異の說話を、深山の異草奇花に譬喩したものである。【刊行】天明二年正月、京錢屋庄兵衞・千種屋平兵衞・鹽屋平助板。【題材】支那の書を引き、仙術幻術、蝦蟇の怪、亡靈說話を採つてゐる。殊に「遊仙窟」「杜氏春秋傳」等の變形されたものがある。多く世界を我が戰國時代に移して怪異の物語を作つてゐる。【梗概】〔卷之一〕（一）蝦蟇化して三度災難を敎ふ說。天正の頃、西園寺公寬の妾梅千代は、侍女水江が若君の命を救ひ、又館の災害を防いで愛せらるゝを怨み、侫臣多田と通じ、若君を失ひ、わが腹の女子を世に立てんと謀り、共に水江のために池に沈められる。公寬その夜の夢に、水江が現はれて、永く池に住む蟇の姿を變じてかく恩を報いたと告げる。（二）娼妓死後に怨恨を報ずる說。梅原某といふ士、浪花の妓と深く契つたが、故あつて一時別れる。後、友の釜渾が妓に言ひよつた事を誤り聞き、詰めて妻を迎ふ。妓これを知つて縊死し、その亡靈釜渾を殺す。〔卷之二〕（三）蝦蟇怪をなし小兒を取る說。永祿年中、大內家の浪人結城某は、小兒を妖法師に奪はれ、探索の末、荒木村重の籠る伊丹城の古井戸を怪しみ、村重に仕へ、熱湯を注いで蝦蟇を殺して仇を報ずる。（四）豪傑幽魂に逢うて危きを逃る說。足利氏繁榮の頃、望月豪輔といふ色好み、怪美女の俘となるが、酒宴の興に嬲り殺しにされた男の亡靈に身の危急を救へられ、危難を逃れて前非を悔いる。〔卷之三〕（五）東條執八仙客に逢ふ說。赤貧に安んじてゐた東條某、或る日怪僧に出逢つて金錢を得てから豪奢を誇り、三年にして凡てを失ふ。これは僧の神通力を以てしたことであつた。後十年、かの僧再び彼を見、仙骨ありとて弟子とする。（六）常山道人幻術を行ふ說。蟒蛇の口から現はれた常山といふ者、武田勝賴に仕へて、その妾の不義を幻術によつて發き、又武田家滅亡の迫れるを家臣に告げる。〔卷之四〕（七）蝦蟆少人と化して人を惑はす說。明智光秀の家臣大友某、美童の事より友と爭ひこれを殺す。その弟丹後の文殊堂で大友を殺して復讐し、天井に隱れた少年を突くと、蝦蟆が腹をさかれて落ち、文殊堂の妖怪の正體が現はれる。（八）曾聞慢心して魔道へ落つる說。曾聞といふ僧、妖怪の正體を現はしてより遠近に歸依する者多く、遂に一宇を建立し、數百卷の書を編み、慢心して世の心にそはぬ書を燒かうとし、妖魔のためにさいなまれて魔界に沈む。（九）老狐神通を現はして恩を報ずる說。島原の揚屋の娘を戀した富豪の子、女の靡かぬを怨みてこれを殺し、自殺せんとするが、或る夜助けた狐の計ひによつて、三年の後遂に妻に迎へることになり、狐の恩を謝した。【解說】怪異小說として、先蹤のものに比して多く異彩あるを見ない。材の珍奇なことにの

み闘心して、他を顧みなかつた爲めに、作品として小說的構想に缺くる所があり、又文に柔味少く藝術味に乏しい。（菅野）

明暗渠 みやうあんきよ 「尺八」を見よ。

明惠 みやうゑ 學僧【俗姓】伊藤氏【諱】高辨【法號】明惠【生歿】承安三年正月八日に生れ、貞永元年（一八九二）十月十八日寂す。享年六十。【學統】明惠は夙く山城の高尾山に登つて文覺上人に師事した。十六歲の時、上覺上人に就いて手度を受け、東大寺戒壇院に登つて具足戒を受け、尊勝院林觀房聖詮に就いて俱舍論を學び、仁和寺の惠鏡房尊實に就いて眞言の章疏を學び、華嚴院景雅の下に華嚴五敎章を學んだ。上覺上人から十八道、金剛界を傳授して專ら苦修練行した。後、東大寺尊勝院で華嚴の章疏を研究した。【閱歷】明惠は紀伊在田郡石垣莊の人で、本姓は伊藤氏と云ひ、後、養父の姓を襲つて平氏と云つた。母は湯淺權守藤原宗重の第四女である。幼い時に、父母に死に別れ、姨母の手に育てられ、九歲の時、山城の高尾山に登つた。この後は專ら苦修練行をつゞけた。後、湯淺兵衞尉宗光の供養を受けて筏立山に草菴を營み、釋迦牟尼佛像の前に大願文を誦した。この後、高尾山に歸つたが、明惠の學德の令名は四方に聞えた。併し衆請を厭ふ念が强く、四方の峯頂に草菴を營み、練若臺と名づけて、こゝに日夜修法坐禪讀經等に勵んだ。後、この草菴を捨てて栂尾に新しい草菴を營み、石水院と號して幽棲した。賀茂の別所に移り、再び栂尾に歸り、重ねて賀茂に住み、遂に楞伽山に幽棲して坐禪入觀した。栂尾にて梵網菩薩戒本の講敷をなし、やがて疾に罹つたので、諸弟子に遺訓し、六十歲を以て寂した。【著作】菩提樹實塔式四卷○摧邪論三卷○華嚴修禪觀照入解脫門義○華嚴唯心義釋○金師子章光顯鈔○光明眞言加持土砂觀信記各二卷○莊嚴記○華嚴信種義各一卷。外に三十餘部三十餘卷。【參考】明惠上人行狀記○明惠上人傳記○施無畏寺文書○諸宗章疏錄（萱原）

明經道 みやうぎやうだう 「大學」を見よ。

名字狀 みやうじじやう 「二字狀」を見よ。

明星 みやうじやう 詩歌雜誌【主宰者】與謝野鐵幹（後に寬）【刊行】（第一期）明治三十年四月新詩社刊行。同四十一年十一月百號を以て廢刊。（第二期）大正十年十一月刊行、昭和二年四月廢刊。【解說】初め、四六判四倍大の新聞體であつたが、第六號から四六倍判の普通雜誌體に改められた。新味ある挿繪、良好なる紙質、淸新なる體裁に於て、當時の誌界に大なる刺戟を與へた。「明星」は明治三十年代を通じて日本短歌の未曾有の革命を遂げ、新抒情詩時代の機運に聰くも乘じて、早くも詩歌藝術の一大勢力を張り、星菫派の王國として四方に君臨した觀があつた。殊に晶子の出現は「明星」をして近代の香氣馥郁たる新歌苑風景たらしめた。詩と戀愛の時代、星と菫の浪漫精神がさながら表現された。天下の俊髦才媛は翕然として新詩社に集り、淸婉瀟洒の畫風はまた興つて短歌革命の先驅に交響し、「明星」の新容は、雜誌界裝幀界の目を驚かした。以來鷗外・敏・孤蝶等來り援け、泣菫・有明等は詩稿を寄せ、呼應し去來する同人その他には、栗島狹衣・谷活東・山本露葉・小林天民・高須梅溪（芳次郎）・山川登美子・增田（茅野）雅子・川上櫻翠・窪田空穗・水野葉舟・高村碎雨（光太郎）・相馬御風・平出露花（修）その他があり、全く時を得たのである。鐵幹を中心にする「明星」の業績は、主として短歌に繫つたが、詩に於ても新抒情詩時代の後期より象徵詩の勃興期にかけて、常に最高の權威たり、詩の統一的王國を成した新人風景は實に空前の盛觀であつた。同人連作長篇叙事詩「源九郎義經」の冒頭に、「家門は平氏、地は平安、時は平治ぞ、天に謝せ」と謳歌したのは鐵幹であつた。これは三十六年の一月より「明星」を賑はした。鐵幹についで、白星の「幻境」、林外の「初戀」等連唱されたが、鐵幹の「淸水詣」「鳴鏑」が優に他を壓した。次の「日本武尊」の連作の作者は山崎紫紅・平野弔影（萬里）・前田翠溪・大井蒼梧・晶子・相馬御風・川上櫻翠・茅野暮雨（蕭蕭）・鐵幹等であつて、この叙事詩の提唱は詩壇に影響するところが多大であつた。晶子は日露戰役當時、人間愛の立脚點から「君死にたまふことなかれ」の詩を本誌に揭げて軍國主義者たちに投げつけた。新詩社の短歌は落合直文の系統より出でて、同門の尾上柴舟・金子薰園・服部躬治等（各別項）を凌ぎ、佐佐木信綱の折衷派、子規の萬葉調を壓して新詩社の短歌時代を現出した。窪田空穗・水野葉舟・相馬御風の脫退後も、高村光太郎・吉井勇・玉野花子・平野萬里・茅野蕭蕭の新進一夜百首歌の競詠に紙面を賑はし、北原白秋また、詩作の餘に象徵詩風の新短歌を創作し、クロロホルム・苦味丁幾・電信等、近代の新感覺をもこれに移さんとした。詩に於ては、泡鳴・林外・御風等の退社後は晩近なる社外の詩家、敏・泣菫・有明・鷗外等の來援を俟つて詩壇に雄視した。三十七八年の交には、石川啄木・萬里・蕭蕭・白秋・木下杢太郎・長田秀雄等に依つて、華々しき浪漫精神を高揚し、新抒情詩より象徵詩の新運動に參加したが、三十九年白秋・杢太郎・秀雄の連袂退社以來、散文界の自然主義勃興の機運に壓されて遂に四十一年の十一月にその百號を以て廢刊するに至つた。（北原）

明星創刊號（久松潜一氏藏）

妙竹林話七偏人 めうちくりんばなししちへんじん 「七偏人」を見よ。

夫婦氣質 めをとかたぎ 浮世草子 二冊【作者】不詳【刊行】不詳【諸本】帝國圖書館藏寫本。稗史氣質全集（帝國文庫）所收。【解說】所謂氣質物の一つである。上卷九話、下卷五話より成る噺物集で、夫氣質、婦氣質に關するいろ〳〵な說話を集め綴つてある。各說話には作爲誇張があり、且つ滑稽を表はしてゐるが、その滑稽にも自然味を缺くものがある。福富屋源四郎といふ者の妻は、至つて氣の弱い遠慮深い氣質であつた。或る日その夫が隣家の花見の宴を土藏の陰から覗き見しようとして過つて二度放屁した。妻はこれがために隣家の人々に知られたことと心配し、癪まで起し、番頭を遣つて詫言をした。これに對する隣家の主人の口上は、御念の入つたお使、出物はれ物の諺もござります。その上風向きもよく、此方は何の障りもござりませんといふのであつたといふ上卷第一話は、所謂婦氣質を描いて滑稽を表はしたものである。松島屋茂平六といふ男、至つて女房自慢の氣質であつた。妻に繪を習はせ、その繪を所々の神社の繪馬に上げ、松島屋茂平六妻自畫と署し、又琴三味線をも習はせて誇りとしたが、終に騎馬弓矢の術までも習はせた。或る日妻は拳を狂はせて馬場守りの母親に射當てたが、幸に弱弓であつた爲めに布子の裏もかゝず、傷もつけずに濟んだ。すると茂平六、これをも自慢の種にし、人に射當てて裏かゝぬやうにしたのは、名人の證據だといつたといふ第二話は、愚昧な夫氣質を描いたものである。これ等は愚の誇張から來る滑稽を表はしたものであるが、又古手屋九郎兵衞の妻は、平素佛書を讀み、妄語を愼み、物を賣るにも元價を客に知らせる正直者と評判されてゐたが、或る日或る手代が日蓮自筆の曼陀羅を賣りに來たのを、その正筆たることを認めながら、僞筆なれば高價には買ひ難しといつて一分に買ひ取り、後八百兩に賣つたといふ話は、狡猾なる婦氣質を寫したものである。滑稽的なる說話には、後の滑稽本中の說話に似たものがある。恐らく後の滑稽本は、本期の氣質物と全く無關係に現はれたものではあるまい。（藤村・小泉）

女夫星 めをとぼし 小說【作者】小杉天外【刊行】明治三十三年十月、春陽堂。【梗概】芝浦の都家といふ料理屋の女中お仙と、小間物屋の次男源次郎が夫婦約束をして小間物店を出したが、源次郎が投機に失敗したので、一時別れる。或る日お仙が元の同輩お芳のやつてゐる待合に行くと、都家時代にお仙に言ひ寄つて跳ねつけられた植田淸之助に逢ふ。お芳はお仙の母と同じく、彼女の將來のため、源次郎と別れて植田の妻になるやうに頻りに勸めるが、お仙は源次郎にまだ未練がある。母親に隱れて媾曳をしたり、金を工面したり、時には彼のために植田から借金したこともあつた。それ等の事からお仙は母と合はないのみか、植田との關係を源次郎にも疑はれる。それを癪に思つた彼女の母が、源次郎のところへ鋭く苦情を持ち込んだ事から、お仙は源次郎にも見限られ、途上で打擲されて畜生の如く扱はれる。そのために嘗ては源次郎の諒解の下に、植田と結婚しようとまで思つてゐたお仙は、前途を悲觀し、醫科大學構內の池へ投身自殺を計る。最後の言葉は「源さんの家へ行つて死にたい」といふのであつた。【批評】天外の作物の中でも、題材としてすぐれたものではない。氣が弱く、情に脆いお仙のいぢらしさがしみ〴〵と感得されるが、あまり思ひ切りがわるく書いてあるために、時には彼女を愚物のやうに思はせる。また夫としての源次郎の行爲に同感し難い點があるのも描き方が十分でないためであらう。中で世話好きのお芳が一番よく現はれてゐる。概して冗漫な感じがするが、當時の作としては、注目すべき一篇であらう。（高須）

夫婦物の謠曲 めをとものゝえうきよく【曲目】相愛の男女が死後なほ戀慕の妄執に苦しむ樣を描いたものに「船橋」「女郎花」「錦木」があり、夫が遠く離れてゐた留守に悲劇の起るものに「砧」「鳥追舟」があり、夫婦再會の喜びを描いたものに「蘆刈」があり、一種の三角關係を描いたものに「藍染川」がある。なほこの外に女の戀慕を描いたものに狂女物及び戀慕物（各別項）がある。【諸本】謠曲叢書・日本文學大系・國民文庫・謠曲三百五十番集（日本古典全集）等所收。

【船橋】四番目（作者）世阿彌の改作。（古名）「佐野船橋」。「能作書」に、「佐野船橋、古風有」とある。（內容）熊野山伏（ワキ）が松島に赴く途次、上野國佐野で、橋の勸進をしてゐる二人の男女（前ジテ、前ツレ）に、「萬葉集」の歌「東路の佐野の船橋とりはなし親しさくれば妹に逢はぬかも」（原歌とは少し違ふ）の謂れを尋ねると、「昔この所の男が船橋を渡つて忍び妻の許へ通つてゐたところ、或る夜親がその橋板をとり放して置いたのを知らないで渡つた爲め、川に落ちて死んでしまつたのです。私はその幽靈です」と回向を乞うて消え去る。山伏が回向してゐると、男（後ジテ）女（後ツレ）の亡靈が現はれ、邪婬の罪により地獄で苦しんでゐる樣を述べたが、やがて山伏の功力によつて成佛したといふ曲。上揭「萬葉集」の東歌から想を得たもの。複式夢幻能。五流現行。

【女郎花】四番目（作者）世阿彌（謠本作者註文）とも、龜阿（二百十番謠目錄）とも。（內容）九州松浦潟の僧（ワキ）が都に上り、石淸水八幡に來て女郎花を折ると、一人の老翁（前ジテ）が出てこれを留め、互に古歌を引いて言ひ爭つた後、僧を八幡宮の社前に導き、なほ男塚女塚に案內し、その回向を乞うて消え去る。やがてこの男塚女塚の主、小野頼風（後ジテ）とその妻（後ツレ）の亡靈が現はれ、妻が男の心を疑つて放生川に身を投げると、頼風も亦その後を追うた昔の樣を演じて、邪婬の惡業の苦を訴へ、回向を乞ふといふ曲。「古今集」序に「男山の昔を思ひ出で、女郎花の一時をくねるにも」とある句から思ひついたのであらう。複式夢幻能。五流現行。

【錦木】四番目（作者）世阿彌（謠本作者註文、二百十番謠目錄・申樂談儀等に曲名見ゆ）。（內容）諸國一見の僧（ワキ）が陸奧國狹布の里に行くと、女（前ツレ）は鳥の羽で織つた布、男（前ジテ）は美しく色どつた木を持つた夫婦の市人が來たので、その謂れを尋ねると、夫婦の者は錦木細布の昔語を聞かせ、僧を錦塚に案內して、塚の內に入つてしまふ。僧が回向してゐると、男（後ジテ）女（後ツレ）の亡靈が出て、細布を織つてゐる女の門に、男が錦木を立て重ねる樣を演じたと思ふと、僧の夢はさめたといふ曲。「袖中抄」の記事を主材とした。複式夢幻能。五流現行。

【砧】四番目（作者）世阿彌（謠本作者註文・申樂談儀に曲名見ゆ）。（內容）九州蘆屋何某（ワキ）は自訴の事があつて上京以來、既に三年にもなつたので、侍女夕霧（ツレ）を國に歸して、この秋には必ず歸國すると妻に傳へしめた。

妻（前ジテ）は夫の歸りを待ち侘ね、砧を打つて僅かに心を慰めてゐたが、今年の暮にも歸れないと、都からの使が來たので、悲歎の餘り病死してしまつた。夫（後ワキ）は歸國して妻の死を悲しみ、梓の弓にかけて、その亡靈を呼び寄せた。妻の亡靈（後ジテ）は夫の薄情を恨んだが、法華讀誦の力によつて成佛したといふ曲。典據はない。夢幻的劇能。觀世・寶生・金剛・喜多現行。

【鳥追舟】四番目【作者】金剛（二百十番謡目錄）。【名稱】「鳥追」とも。【內容】薩摩國日暮殿の家臣左近尉は、主人が上京して十年餘も歸國しないのを幸ひに、主人の妻（シテ）及びその子花若（子方）を下人のやうに扱ひ、川に舟を泛べて、田づらの鳥を追はせる。日暮殿（ワキ）は國に歸つてこの樣を見、大に憤つて左近尉を討たうとしたが、妻が引留めたので、その罪を宥したといふ曲。出典はない。二段劇能。五流現行。

【蘆刈】四番目【作者】世阿彌（謡本作者註文）とも、金春禪竹（二百十番謡目錄）ともいふ。【內容】攝津國日下の左衞門夫婦は貧のために別居してゐたが、妻（ツレ）は都に出て、さる方の乳母となり、相當の暮らしが立つやうになつたので、その邸の從者（ワキ）を連れ、難波に下つて夫を尋ねた。ところが、左衞門は散々の態となつてこの處にもゐない。折柄色々の戲れ事をいつて蘆を賣る男（シテ）が來たので、從者が女の慰みにこの男を呼んで小歌などを謡はせ、蘆を女に手渡しさせると、その男が左衞門であつた。左衞門は零落を恥ぢて逃げようとしたが、妻は引き留めた。左衞門は從者に勸められて喜びの男舞を舞つた。そして夫婦相携へて都に歸つたといふ曲。「大和物語」の記事に據つた。一段劇能。五流現行。

【藍染川】四番目【作者】不明【內容】京都一條今出川の女梅壺侍從（前ヅレ）は一子梅千世（子方）を連れて、在京の節契りを結んだ太宰府の神主を尋ねて行く。そして宿主左近尉（ワキヅレ）に神主へ文を屆けさせたところ、折惡しく神主は留守で、後妻（狂言）がその文を見て嫉妬を起し、京女を離別する僞手紙を作つて宿主に渡し、且つ宿から直に追ひ出せと命じた。宿主はこれを京女に傳へる。女は歎き悲しんで藍染川に身を投げてしまつた。神主は宅に歸る途中、女の死骸を見て大に驚き、その遺書を讀んで深く悲しみ、神前に跪いて女の蘇生を祈つた。すると、天滿天神（後ジテ）が現はれて女を蘇生せしめ給ふといふ曲。出典はない。二段劇能。觀世・寶生現行。

【構想】謠曲作者は、常に戀愛を斥けて戀に死んだものは、墮獄の苦を受けるものとしてゐる。「錦木」「船橋」「女郎花」等いづれもその例で、殊に親の許さぬ戀に死んだ「船橋」や、たとへ夫に對してとはいへ戀死に死んだ「砧」に於て、この樣を最も深刻に描いてゐるのである。併し夫婦愛そのものをも否定してゐるのではなく、狂女物（別項）に於ても必ず夫婦を再會せしめてゐるが、この「蘆刈」の如きは原據よりも一步進んで、再び夫婦の樂しい家庭を作らせてゐるのである。「鳥追舟」は男性の不實と女性の寛容とを對立せしめたもので、この點「草子洗小町」に似てゐる。「藍染川」に死んだ京女を「砧」の如く地獄に墮さないで、再び蘇生させてゐるのは、三角關係に對する謠曲作者の見解を示したものともいへよう。

【參考】謠曲評釋 大和田建樹○謠曲大觀 佐成謙太郎　（佐成）

明法博士　「大學」を見よ。

妙々痴談　滑稽本　上下二册（但し前編のみ）【作者】三芝居士口授。玉虹老人編次とある。三芝居士は花笠文京である。【名稱】（役者必讀）と角書がある。文政十二年に成つた周滑平の「妙々奇談」に擬し、役者に關してゐるため、この名稱を附したのである。【刊行】天保十四年【諸本】滑稽名作集下（帝國文庫）に所收。【題材】當時の名優に關する皮肉であり、諷刺である。俎上に上つたものは、七代目市川海老藏を初め、尾上松助・中村芝翫・五代目岩井半四郎・坂東三津五郎・秀調等。

【梗概】七代目市川海老藏が、先祖才牛の百三十回遠忌並に實母の十七回忌を勸めるため、芝増上寺に行くと、五代目祖父白猿の靈が現はれて、その信心を讃めながら、年未だ若くして八代目に名跡を讓つて團十郎を名乗がせし不德を詰り、且つ上方風に滲みて三座の出勤をなす事などに對して長談義をする。氣がつけば築屋への駕籠の中の夢であつた。故人尾上松緑がこの世に姿をあらはして、孫尾上松助の吝嗇根性を叱り、役者は大氣でなくてはならぬと淺草の小綺麗な料理屋で教訓する。松助が感謝すると松緑の姿は消えてゐた。江戸へ下つた中村芝翫は、素晴らしい人氣で深川に居住してゐた。夏の宵、庭に出てゐると老僧が來て芝翫を誘つて舟へ載せる。老僧は物故した三代目坂東彦三郎で、芝翫に愛敬・藝能について懇々と說いた。五代目岩井半四郎は子粂三郎に名を讓つて、杜若となつて隱居してゐても、女形拂底のため時々出勤してゐた。故人瀬川仙女があらはれ、女形の藝風に就いて語り、且つ將來を大に戒めた。坂東三津五郎が臨終に際して伜秀調を枕邊に呼び、慢心の慎しむべきこと、陰德の施すべきこと、謙讓の德などを細々と說いた。

【解說】構想の點から言へば、全く「妙々奇談」を踏襲したもので、讒謗諷刺を以て隱微を發き、目には見えぬ靈魂をして縱橫に罵倒させるが如きは、「妙々奇談」に見える所である。「妙々奇談」の俎上の人物は當時の儒者であつたが、本書は人氣絶頂の役者であつた。そこに「妙々奇談」よりも一般的な興味を惹いた所以がある。滑稽本とは言へ、一種の人物評傳であり、役者評判記の裏を掻いたものとも見られる。かうした題材によるためには、その作者も相當芝居道に明るいものでなくてはならぬ。文京は鶴屋南北の門に入つて狂言作者となり、後、梅幸（三代目菊五郎）に從つて浪花に上り、或は江戸に戻つた後も代作を業とした者であれば、芝居道に對し、又俳優達の缺點短所にも相當明るかつたと思はれる。なほ目次を見ると、「三笑五瓶等今の狂言を批評す」「四代目訥子澤村訥升が自誇を止む」「近松門左衞門中村歌右衞門梅玉が作名なる金澤龍玉を罵る」「猩々一泉が一席の狂言話」があるが、單に目次のみに終つてゐる。　（小池）

妙々痴談返詿錄　滑稽本　二册【作者】二世烏亭焉馬【名稱】「妙々痴談」を表紙及び見返しには角書としてゐるが、本文の外題には、「役者必讀妙々痴談」としてゐる。いづれにしても、三芝居士の「役者必讀妙々痴談」（別項）に對する反駁なれば、この題名を用ひたのである。【刊行】天保四年【諸本】滑稽名作集（帝國文庫）所收。【題材】「役者必讀妙々痴談」の俎上に載せられた連中が、出でて、「役者必讀妙々痴談」をいぢめるといふのである。

【梗概】七代目市川團十郎が、去年海老藏に名跡を讓つたが、出演を賴まれるまゝに勸め、歸宅後一睡すると、夢に「役者必讀妙々痴談」が高手小手に縛られ、初代烏亭焉馬を初め、「妙々痴談」に皮肉られた連中、並に五代目路考まで居り、「妙々痴談」を詮議してゐる。焉馬は、白猿に代つて「妙々痴談」の文中にある八代目襲名の件、地方巡業の件、その他に就いて痴談に詰問し、松緑は松助に放蕩者になれと言つた點について怒り、彦三郎も芝翫に對する教訓の矛盾を指摘する。仙女は又半四郎の事に關して一言し、「妙々痴談」をして終に謝罪せしめるに至る。

【構想】徹頭徹尾、「妙々痴談」の反駁のために作つたものである。「妙々痴談」の出づるや、事芝居道、役者に關するがため、反對や憤慨も相當あつたであらう。殊に「妙々痴談」は本書にも述べてゐる通り、藝の巧拙よりもむしろ個人攻擊の點があつた爲め一層他から反感も買つたであらう。二世烏亭焉馬は作者といふ立場からも一言せずにはゐられなかつたであらう。從つてその反駁辯明も理論的であるよりも感情的に流れてゐる。　（小池）

名目鈔　有職　一卷【著者】藤原實熙【別名】「禁裏仙洞小名目」「禁中名目抄」【諸本】速水房常校正の刊本がある。群書類從卷四六八所收。【解說】卷頭の自序に「夫於二我朝一、稱二名目一、多不レ當二音訓一、又相二交清濁一、不二口傳一輙不レ可レ呼レ之、無二口傳一而呼レ之、必失レ法、自レ古至レ今、家々說々雖二區分一、能學レ之深思レ之、非レ無二一義一矣」とあつて、漸次名目の讀み方の失はれるのを歎き、この書を著はす由が書いてあり、漢字の讀み方で我が國特有の讀み方として故實となつた名目五百九十六を集め、これを恒例諸公事篇附神事佛事・同臨時篇・私儀篇・諸公事言說篇附私儀・禁中所々名篇・人體篇・院中篇・雜物篇・衣服篇・喪服篇附雜々（車具篇・文書篇の二篇は篇名のみあつて記載がない）の十篇に分けて、諸名目の讀み方を記し、まゝ簡單な說明を下してある。明應九年姉小路濟繼の奧書には、「右一冊不慮披見之間、卒寫レ之、東山左府（實熙公）自筆也。件本草本歟、或有二篇目一不レ載二其子細一」とある。【註釋書】禁中名目抄校註一卷（速水房常）がある。　（石村）

美代吉殺し　「八幡祭小望月賑」を見よ。

三好松洛　淨瑠璃作者【本名】未詳【生歿】元祿九年生れか。歿年未詳。但し安永初年で、享年八十歳前後か。【閲歷】伊豫の人で、幼にして寺に入つたらしく、長じて松山城外眞言宗圓成寺の住職であつたが、事故によつて、追はれて大阪に出て還俗したと傳へる。醬を業としたとか、北新堀江の茶屋の主人ともなつたとかいふが、出雲について淨瑠璃作を學び、長谷川千四（別項）等と同輩であつた。元文元年（四十歳）初めて文耕堂との合作で、「赤松圓心緑陣幕」を發表してから、明和八年十二月「櫻御殿五十三驛」に後見の名を連ねる迄、三十六年間の長い作者生活を送り、五十餘篇の作の筆を執つた。長壽の故もあるが、淨瑠璃作者中では多作家に屬する。時代物作者といふべきで、合作のみであるが、佳作も相當に見られる。淨瑠璃芝居の隆盛期から衰退期へかけて往來した作者だけに、作の方向はかなり多角的である。

【作品・作風】（一）自身立作者たる作。彼の場合殆どない位である。「花衣いろは縁起」（合作者、竹田小出雲。寛保二年二月。良辨僧正誕生に倣つた主盛上人誕生なるものを仇討の筋に書く）と、「中元噂掛鯛」（合作者、竹本嘉藏。明和六年七月。近松の心中天網島の改作）等であるが、何れも傑作といへぬ。但し「妹背山婦女庭訓」（別項）の花渡しの段の如き、彼の案と見える所や「手習鑑」の道明寺が彼の筆と傳へる所を以て見れば、落着いた色氣のある筆致を特徴としたかに思はれる。他の立作者との合作は年代記にも分類されて次の如くである。（二）立作者文耕堂の作。大體元文寛保年代に屬し、「敵討襤褸錦」「御所櫻堀川夜討」「行平磯馴松」「ひらがな盛衰記」「新うすゆき物語」（各別項）等が見られる。變な時代物といへる。初めは文耕堂と二人であつたが、やがて次席作者に竹田出雲を入れた。（三）立作者竹田出雲、又は並木千柳（宗輔）等の作。延享・寛延・寶曆年代に屬し、「夏祭浪花鑑」「楠昔噺」「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」「假名手本忠臣藏」「双蝶々曲輪日記」「源平布引瀧」「戀女房染分手綱」「愛護若名歌勝閧」「嫩小松子日遊」（立作者、吉田冠子）「敵討崇禪寺馬場」「極彩色娘扇」（立作者、二歩堂）「由良湊千軒長者」（立作者、竹田小出雲）等（以上各別項）が名篇として擧げられる。この年代に世話物を手がけて成功してゐるところを見ると、彼の手腕の非凡なるを認めねばなるまい。（四）立作者近松半二の作。明和年中、「[illegible]」「本朝廿四孝」「太平記忠臣講釋」「三日太平記」「近江源氏先陣館」「妹背山婦女庭訓」（以上各別項）「關取千兩幟」等の佳作がある。これ等の作に於て半二の成功した反面には、既に作者界の名實共に長老たる松洛の存在を忘れてはならぬ。卽ち時代に世話に鍊磨を積んだ松洛の助力があつて完成した諸作であると思はれる。かくの如く見て來ると、彼の作者としての生涯は常に表立たなかつたが、立作者としてよりも、他の場合の方が佳作を發表してゐるところから見て、複雜な構想を驅せて、そこに錯綜の妙味を顯はす底の方面は寧ろ不得手ではなかつたらうか。これに反して、限られた範圍内での美的效果を擧げる作意に得意があつたかと思はれる。一生殆ど立作者の地位を他に讓つてゐた態度は、寧ろ己れを知るものと思ふ。

【參考】道頓堀誌第十五編大寶寺町○京攝戲作者考 木村默老○江戸時代戲曲小說通志 雙木園主人○近代國文學の研究 前島春三　（守隨）

御代始抄　有職　一卷【著者】一條兼良【別名】「代始和抄」「御卽位假名抄」「三知抄」【成立・由來】奧書に「依二前宗祇所望一隨筆畢、文明十年二月日後成恩寺禪閤」とある。【刊行】寛永八年【諸本】嘉永元年板がある。群書類從四六六・故實叢書第一輯所收。【解說】御代始に於ける儀式及びその沿革を記述したもので、御讓位の事、御卽位の事、御禊の行幸の事、大嘗會の事の四條より成つてゐる。寛永八年・嘉永元年等の諸版本には卷首に御卽位庭上圖、大嘗會南庭上悠紀主基膳殿之圖、女御御入內御行粧等の諸圖を揭げてある。又群書類從本は異位重行以下十一箇條を附記し、その奧に「此抄一條禪閤御作也、重尋中條々追書加レ之畢、宗祇」とある。又別に八條を加へて、奧に「依二桃華老人嚴命一、聊顯二累葉之家風一者也、莫二敢外見一矣、文明十一年十二月日、神道長上卜部朝臣兼俱判」とある本もある。　（石村）

未來記　幸若舞曲（三十六番の一）一卷【作者】不詳【成立】室町期【諸本】古

板本は寛永十二年板。舞の本（上田萬年校訂）・舞の本（名著文庫）・新群書類從第八舞曲部所收。又節附本は全曲ではないが、越前幸若家元譲のものを日本歌謡集成卷五近古篇に載せてある。【内容】判官物（義經傳說）。鞍馬天狗傳說。兵法傳授說話。鞍馬の奥僧正ケ谷で夜々牛若丸が天狗を相手に兵法を習ふ熱心さに、その孝心に愛でた天狗が源平兩家の運命の未來記を語り、天狗の法を許し、助力を約し、且つ兄頼朝の憎みを買はぬやう、梶原の惡計に陷らぬ戒愼を示唆する事を作る。謠曲「鞍馬天狗」と同材であるが、これは特に豫言說話型の分子を中心としてゐる。それが所謂未來記で、「太平記」の天王寺未來記・雲景未來記、「天狗の内裏」（別項）の未來記等と同類のものである。【影響】本書からばかりではないが、未來記の構想は謠曲「沼捜」にもあるが、特に「雨月物語」（別項）の白峯の條を擧げたい。　〔島津〕

【參考】近古小說新纂初輯（「天狗の内裏」考說）

未來派（みらいは）　藝術論　〔英〕Futurism

【解說】近代イタリアを中心として發生した藝術運動の一つで、當初の運動主唱者達の感情の内には、單に藝術の範圍内での主張でなく、當時の國際間特にオーストリアに對するイタリアの政治的緊張によるイタリア國民一般の感情が反映してゐたと考へられる。彼等の間の合言葉「オーストリアをやつつけろ」と云ふが如きを以て推察される。藝術上の主張としては、過去一切の藝術が古きものの追從摸倣であるに反して、未來の藝術を創造建設するといふ點にある。これこの命名が起つた所以である。繪畫上の運動に初まり、後に音樂・詩歌・戲曲等の各藝術に亙つた。繪畫上の樣式的特徵は、記憶・聯想等作家の意識の一切を同時に同一畫面に描出するといふ意圖から生ずるもので、從つて立體派と別個のものであるが、他面廣義の表現派の中に考へられるところのダヽイズムの如き主張と聯絡するものである。同存主義（シマルタニズム）とも呼ばれる。

【理論】マリネッティの未來主義第一宣言書はこの派の（一）繪畫理論の基礎と見做される。それによれば、藝術一般の目的とするところは、在來の一切の因襲的形式を打破し、激烈な速度の美を求めるところにある。而してこの時間的意識の上に立つ速度の美が、空間藝術上に特に求め難いことは當然である。從つて繪畫上にこれを表現せんとするならば、他の藝術よりもなほ一層在來の形式を破壞せねばならぬだけ、それだけ表現の問題は困難である。要するに未來派繪畫の目的は、文學・舞踊・音樂等の謂はゆる時間藝術に於て表現される速度又は運動の美を空間藝術であるところの繪畫上にも同じやうに表現しようとすることである。彼等のこの考は、吾人の實際經驗に於て空間の意識は時間の意識と截然區別し得ないものであると主張する點から來てゐる。そこで時間意識の内に現はれる一切の記憶とか聯想とか、或は音響までも描き出し、そこに對象に對する全感情を表現し得るものとする。彫刻家ボッチオニ自身の語を以てすれば、印象主義（別項）は單一の瞬間を描いたが、未來主義は多くの瞬間を描くのである。かくして彼等は觀者をして繪に對せしめるのでなく、「繪畫の眞中に置く」ことを求める。更に（二）彫刻に於ても、記憶・聯想を刻むことを試みる。在來の彫刻と異なり、單一の像でもただ一つの物象を刻むのでなく、種々の物象を刻み合せるのである。又その現實感を強調するためには、ガラス・木片・セメント・牌紙・皮・布・鏡・ブリキ板等種々な材料が用ひられる。（三）音樂上では、噪音內に實生活上の鳥の聲、或は機關の轟音、群集の噪音等が混入せしめられる。（四）文學上では、速度の美が同樣に表現されねばならぬとすることから、非限定的な言語、例へば動詞の不定法を選び、或は修辭的言語、例へば、形容詞・副詞を斥けて謂はゆる「自由な言葉」を用ひる條項を宣言實行し、加ふるに未來派繪畫の效果を應用して文字を書くのに色彩を用ひたり、形象文字を使用する。併し事實上の作品について見れば、その宣言條項の通りではない。しかし彼等の文學は一般に、否定的・破壞的・虛無主義的な思想を表明してゐる。この點は、マリネッティの戲曲「電氣人形」「法皇の專制」の如きを見れば明かである。戲曲では特に登場人物が彈丸や或は犬であつたり、或はピストルの音だけで、一言の臺詞なくして幕が終るといふ如きものもある。急激に耳目を聳動せしめるといふ效果には見るべき點がある。次に彼等の宣言書の中から、一二の言葉を擧げる。「我々の詩歌の本質的要素は、勇氣・敢行・反逆でなければならない」「從來の文學は、靜思・恍惚・睡眠を頌榮した。我々は、侵掠運動、猛烈な不眠症、二倍の速度の步調、宙返り、又は拳打拳鬪を讚美せねばならない」「我々は世界に存在する美が、一つの新らしい美、即ち速度の美に依つて豐かにされたといふことを宣言するものである」「輪郭は決して我々の眼には運動として見えない。——網膜に映ずる殘像の永存によつて運動しつつある物象は、不斷にその物象を增加する。故に疾走しつつある馬は四本の脚を有するのでなく、二十本の脚を有つてゐる。そしてその脚の運動は、三角形を構成する」「彫刻家はその思想を表現するためには、一作品中に二十種の材料を用ひても宜い」

【沿革】一九〇二年二月二十日、この派の首領とされるエヂプト生れのイタリアの詩人マリネッティ（F. M. Marinetti 1878—）は宣言十一ケ條をパリのフィガロ新聞紙に發表した。一九一〇年二月ミラノに於ける最初の繪畫展覽會。同年同月十一日、ボッチオーニ、カルラ、ルッソーロ、バルラ、セヴェリーニ以上五人による「未來派畫家宣言書」發表。一九一〇年十月十一日、プラテルラによる「未來派音樂家宣言書」以後、數度の各宣言書が發せられ、又歐洲各都市で展覽會・講演が續けられ、多くの同志を得た。一九一四年大戰參加の運動を行つたが、當初からマリネッティは運動の保護者であつたと共に熱烈な主唱者であつた。遂にこの運動はロシヤにまで傳はつたのである。日本に於ても大正七八年頃から神原泰その他の共鳴者があり、數度の展覽會が催された。

【參考】*The Italian Futurist Painters.* London. 1912. ‖ Boccioni : *Pitura scultura futuriste.* Milano. 1913 ‖ Boccioni : *Manifesta technique de la sculpture futuristes.* Milano. 1912 ‖ Eddy : *Cubists and Post-Impressionism.* Chicago. 1914 ○未來派研究　神原泰　〔村田〕

見德一炊夢（みるがとく いつすゐのゆめ）　黄表紙　三冊

十五丁二十二圖【作者】朋誠堂喜三二【畫工】署名なし。北尾重政（推定）か。【角書】「榮花程五十年、蕎麥價五十錢」【刊行】天明元年、蔦屋板【名稱】人間の榮華は粟餅一炊の夢に過ぎないと悟る「金々先生榮花夢」（別項）に對して、よし一炊の夢にせよ、榮花を見るだけ得だといふ意を籠めてゐる。角書は誂へた蕎麥の來る間に、五十年の榮華を見たといふ筋を示してゐる。【題材】春町の黄表紙「金々先生榮花夢」に據る。

【梗概】〔上册〕（1）淺草茅町盧の屋の店、息子清太郎蕎麥を誂へにやる。（2）淺草並木夢商ひ榮華屋の店先、客が邯鄲の枕を借りに來てゐる。（3）二人の客夢を買つて見てゐる。三十二文の客の夢は舟饅頭、十六文の客の夢は芝居の一ト切。（4）四文錢一本の客の夢、吉原の遊び。（5）銀百匁の客の夢、祝言の夢と花嫁に死なれて女中を口說く夢。（6）清太郎千兩の客となつて、五十年の榮華を見ようとする。〔中册〕（7）清太郎二十歲、江島遊び。（8）清太郎京の祇園の遊び、大勢の白人を剱下奴にした踊の趣向。（9）同じく京の遊び、江戸三座の役者を呼び寄せてゐる。（10）清太郎三十一歲、長崎で唐人に就いて書道の稽古。（11）三十七八歲、唐土の遊興。（12）江戸の通な遊び。（13）俳諧の運座。（14）五十歲、素人狂言、清太郎道成寺を舞ふ。（15）能。清太郎は「邯鄲」のシテ盧生を演ずる。（16）茶の湯。〔下册〕（17）清太郎七十歲、我が家懷しく歸路に就く。（18）盧の屋の家督をうけたもとの手代代二、清太郎を死んだものと思つて五十年の法要を營んでゐる。（19）盧の屋の座敷、大勢の者が代二を對手に清太郎の遊興費の貸を催促してゐる。（20）盧の屋の破產、歸宅した清太郎恐縮してゐる。（21）清太郎と代二と坊主になつたと思ふ途端、清太郎の夢さめる。もとの店先、代二は帳場で帳合してゐる。清太郎呆れてゐる。（22）蕎麥の誂へが來る。

【構想】すべて「金々先生榮花夢」を下に据ゑての趣向である。「榮花夢」の榮華が割合に簡單であるのを複雜にして、その種類と範圍を擴げたこと、又うがちを細かくしたこと、その他彼の作ではあつさりとした勘當をこれには破產とし、破產のあとの出家にまで事を運ぶなど、細緻なのを書き替への主眼としてゐる。更に夢中夢の趣向は當時として珍らしかつたらう。作者はその趣向のために、清太郎を蕎麥の誂へにやる、すぐに寢るといふ運びをつけなかつた。（15）の「邯鄲」の能のところで、「盧生は夢さめて」と書き込んで、こゝで夢が覺めたかと思ひの外、まだ夢の續いてゐる點が、或は得意の趣向であつたらう。【史的地位】「金々先生榮花夢」の摸倣であることはいふまでもないが、彼の大まかな手法にかへて、細かい趣向や筆致、又さし繪も彼の作のより寫實がかつた點に、時代好尙の推移が見られる。出版當時の推稱もその點にあつたやうである。黄表紙の評判記「菊壽草」で立役極上上吉の位附になつたのもそのためである。この作は「榮花夢」の後を追ふと共に「榮花夢」の原に溯つて邯鄲の枕の故事にまで還つたのであるが、その二筋を合せて趣向とすることは、寛政三年板、京傳作の「盧生夢魂其前日」などの先蹤をなすものである。　〔山口〕

未練（みれん）　小說

【作者】近松秋江【發表】大正六年二月、雜誌「新公論」【刊行】大正六年六月、春陽堂。

【梗概】戀してゐる女に、或る誤解から捨てられた男の未練がましい氣持を、男が一人稱で述べたもの。——私は今日まで隨分多くの女を戀し惚れもしたが、あなたほど私が身も心も打ち込んだ女は一人もない。Kの家で私があなたに初めて會つた時、あなたは詩人であるKの友人Yを戀して、胸の切なさをKに話してゐた。二度目に會つたのは、私がKに連れられて時本の離れ座敷で遊んだ晩で、あなたは浮々して、妾、文學者大好きよ、妾、若し男だつたらどんな苦勞をしても文學者になりたいと思ふわといつた。私の胸は妙に波立つた。三度目に矢張り時本の二階で、酒がまはつてほんのり私の頰が赤くなつた頃、あなたは湯上りの薄化粧の頰を薔薇色の花のやうに美しく氣高くして現はれた。妾はもうYさんを諦めたわ、これからはあなた相談相手になつて頂戴よといつた。私は嬉しく承知した。併しあなたは私を愛してくれるのかどうなのか、はつきり分らなかつたので、或る夜あなたは私をどう思つてゐるかと訊ねた。あなたは妾なんかに惚れてはいけません、妾は男に惚れると、その男に服從してゐるのが嫌ひで、どこまでもその男を自由にしたいのよ、妾はあなたの奧さんにとはいひませんが、私が素人になるまで奧さんを持たずにゐて下さいねといつた。私はそれを誓つた。そしてその夜、私とあなたは離れ難い關係を結んだのだつた。併しKが私たちの仲に水をさして、私が近いうちに奧さんを貰ふといふやうな出鱈目をあなたに話したので、あなたは私を捨ててしまつた。私は誠實を示さうと思つたが、それに要する金を調達することが出來なかつた。それどころか、今は北海道の果に漂浪してゐる。あなたは私を惡しざまにいつてゐるさうだが、私はあなたを心から愛してゐる。私にはあなたに對して未練がある。

【批評】比較的生な實感味が濃厚に出てゐるのが、彼の他の作品の特色であるが、これにはそれが隱されてゐて、女を思ふ男の執着や未練が、渾然とした一個の藝術品に淨化されてゐる。この作品には又、くど／＼と持つて廻つたやうな表現もなく、すら／＼といかにもなだらかに全篇が統一づけられてゐる。彼は全體から云へば主觀的作家である。そこに長所もあれば短所もある。ところがこの作品は題材の點では素より主觀的なものであるが、非常に客觀的に優れたものになつてゐる。この意味で本篇は、彼の作品中、異色のあるものとして見るべきであらう。　〔宮島〕

三輪（みわ）「神事物の謠曲」を見よ。

三輪式神婚說話（みわしきしんこんせつわ）　神話

【解說】三輪山型說話とも呼ばれる。（一）男性の神が蛇その他の動物の形をとつて女性の人間に婚を求むること、（二）男は夜のみ來て晝は見えないこと、（三）女がその素性を探るために、絲をつけた針を男の衣に刺すことを話根として成り立つてゐる說話を云ふ。這般の内容を持つ說話が三輪の大物主神について物語られる故、これを代表としてこの種の說話群の名としたのである。この型の說話は、古くは「古事記」に現はれ、近くは「源平盛衰記」「平家物語」「土佐國風土記」「神社考」等に載つて居り、又民間の諸家の祖先譚として諸地に見出される。恐らく本來は民間說話であつたらう。もし絲と針との話根を除去したならば、數千年の昔から世界の諸民族の間に傳承せられてゐると云ふことが出來る。絲と針との話根を含むもの、即ち完全な三輪式神婚說話と雖も、決して日本內地だけの所有ではない。沖繩縣宮古島にも漲水御嶽神財天女の傳說として傳承せられ、朝鮮にも「三國遺事」に百濟の甄萱の傳として擧げられ、また咸鏡北

道の廣積寺及び豆滿江畔會寧附近に語られてゐる。「三國遺事」の記述には、「又古記云、昔有一富人、居光州北村、有一女子、姿容端正、謂父曰、每有一紫衣男、到寢交婚、父謂曰、汝以長絲貫針刺其衣、從之、至明尋絲於北墻下、針刺於大蚯蚓之腰、後因娠、生一男、年十五自稱甄萱」とあり、而して甄萱のその後の英雄的行動にも說き及んでゐる。夜每に訪れて來たものが、神格ではなくて一の蚯蚓であるといふ事實に注意しなくてはならぬ。それから支那にも完全な型の三輪式神婚說話が見出される。唐張讀編「宣室志」に曰く、白衣の青年が夜每平陽の張景の女の許に訪れ、天明に先だつて婆を辭すので、女は父の敎に從つて、その末に縷を貫いた一金錐を物に項に刺すと、男は驚いて逃げ去つた。翌日縷を便りにして尋ねると、近くの古木の下の穴に一尺餘の蠐螬が項を貫かれてゐるのを見出してこれを殺したとある。これも對手は神ではない。又全體の內容は少し異なつてゐるが、絲と針との話根を含む說話としては、死靈が或る處女に憑いた時、牧師の助言によつて處女をその男のボタンに結びつけたといふ說話が、南方スラブ民族の間に見出され、また吸血鬼が夜每處女を訪うて雞鳴を聞くと去るので、一夜絲をつけた針を脊に刺し、それを傳つて行くと、或る墓に異樣の男が坐つてゐたといふ說話が、ジプシイ族の間に傳承せられてゐる。(Krauss, F. S.: Sagen und Märchen der Südslaven, vol. I. P. 293; Groome, F. H.: Gypsy Folk-tales, P. 14—18.) これ等の說話を比較すると、(一)說話に現はれる男性には、純粹な神格とせられるものと、怪しい動物とせられるものとがある。(二)男女の夜の交會を說くことを物語の中核とするものと、生兒の出立とその後の活動とを說くことに力點を置くものとがあることを知る。發生的に云へば、怪しい動物を主人公としたもの即ち怪婚說話は、未だ神を主人公としたもの即ち神婚說話にまで發達しないより原始的な形式であらう。兩者はまさしく低級說話と高級說話との發生的關係を示してゐる。次に婚姻說話の面目を有するものと英雄說話の趣を備へるものとの關係については、前者を以て後者よりも本原的な形相に近いものとしたい。又同時に生兒の活動を說くことよりも、奇怪な男女の交會を說くことが本來の實際であつたと考へたい。

【參考】日韓に分布する三輪山的傳說に就て鳥居龍藏(東亞之光七ノ七)○日韓共通の民間說話高木敏雄(東亞之光七ノ十一)○三輪山式神婚傳說松村武雄(郷土研究二ノ一)　〔松村〕

三輪神道（みわしんたう）「兩部習合神道」を見よ。

眠雲札記（みんうんさつき）　隨筆　二卷【著者】朝川鼎【刊行】嘉永五年【解說】儒家の漢文隨筆で、皋澤好・小林道彰の所校。支那の古典に對する所懷、知名人物の評論、字義その他の雜項を載す。孝子定五、阿宮勤賊、仙太復讐の如き、日本人の節義談も交つてゐる。附錄として文章實式四則がある。卷一に古文尙書、今文尙書、孔安國序以下二十七條、卷二に太甲纂祖、殷人改元、論樂發、論王介甫以下三十五條を收めてゐる。嘉永五年小笠原長若(明山)の序、無年紀羽倉用九、嘉永五年鹽野正道の跋がある。

【著者小傳】朝川鼎、字は士僕。通稱曾四郎、號は同齋。碩儒善庵の養子。加賀の人。本姓横江氏。儒業を善庵に受け、後、その女婿となり、肥前松浦侯に仕へた。書は市河米庵門でその堂に入つた。安政四年十月二十二日歿す。享年四十四。なほ「征韓實記」「尙書古今文管窺」等の著述がある。　〔和田〕

民間說話（みんかんせつわ）「民譚」「傳說」を見よ。

岷江入楚（みんかうにつそ）　註釋書【著者】中院通勝【名稱】入楚は「につそ」とも、「じつそ」ともよまれる。命名の由來は、自序に「山谷先生が詩にいへらく、岷江初濫觴、入楚乃無底と。彼奥人はまことに岷江の初といふべきにや。今此抄の楚に入つて底なきがごとくなるは、世くだり、人の心おろかにして、はかなきふしまでをもらさず註釋せんとするがゆゑなり。(中略)時に慶長三の年みな月の中の九日、也足の東軒にしてしるしをはりつゝ、岷江入楚となづけたる事しかり」とあり、幽齋の跋に「余乃題以岷江入楚矣」とあるから幽齋の命名せしものであらう。又別に「源氏註抄」と題した二十冊の本が南葵文庫にある。【卷冊數】自序に「五十五帖になしぬ」とあり、幽齋の跋に「畢五十五帖」とあるから、五十五卷五十五冊である。現存諸本には、この外に或は二十冊、或は三十冊、或は三十五冊或は五十四冊等に分けるものもある。しかして五十五冊中、帚木を二冊に分け、雲隱を匂兵部卿宮に合綴したる系統の本と、帚木を一冊とし、雲隱を別冊としたる系統の本とがある。【成立】自序によれば、幽齋はもと「源氏物語」の諸註を集成すべき素志があつたが、その暇なく、たま〳〵通勝が勅勘を蒙つて弃り、幽齋のもとに身をよせたので、つひに幽齋の委託を受け、さきに三光院(實枝)の講筵に侍つた際の聞書をもととして、苦心十年にして本書を成し、舊註師說を集成して自說を加へ、五十五帖とした。慶長三年六月十九日、幽齋六十五歲、通勝四十一歲の時であつた。【諸本】「群書一覽」に、「料紙半面十六行に書きつめたるを善本とす。又此書に、竹田本・伏見本といふあり。首に橫に書入あるもの也」とある。京都帝國大學所藏の殘缺四帖(空蟬・夕顏・末摘花・紅葉賀)は、通勝自筆か、又はそれに近い本と稱せられる。この稿筆者識の一本は、也足軒(通勝)自筆の本をもつて書寫して中の奥書ある本をもつて校合した本で、その校合の部分は、前記京大本と同一である。神宮文庫・宮內省圖書寮等にもこの系統と思はれる本があるが、三條西伯爵家藏の古寫本は、奥に寬永二十年、參議飛鳥井雅章が、也足自筆本を以て、自ら全部を書寫せし由の自筆の奥書と花押がある。これ等の本は、今は散佚した中院家所傳の原本の面影を最も完全に傳ふるものである。流布諸本に比するに出入異同甚だ多く、一般に註釋詳細で、且つ正確である。宮內省圖書寮の一本は、寬永頃の書寫と思はれ、三條西家本につぐ善本である。現存諸本は、右の如き中院家本の系統と思はるゝ本と、流布本と、その中間にある本との三種があり、これ等三種に屬する傳本甚だ多く、一々枚擧に遑がない。國文註釋全書所收。

【內容】本書は「河海抄」「花鳥餘情」「弄花抄」、公條の「細抄」(細流抄)、實枝の「箋」、實枝よりの聞書(箋とは少しく異なる)、公條の說を引いた或る抄などの說を中心とし、著者自らの今案を加へ、稀れに「仙源抄」「孟津抄」などの說を抄出し、「源氏物語」の全部に亙つて詳細なる諸註の集成を試みたものである。先づ卷頭には假名の自序があり、次いで(一)光源氏物語事、(二)作者事、(三)時代、(四)物語之起、

(五)大意、(六)文體等之事、(七)物語時代之准據、(八)光源氏准據擬行迹事、(九)故人此物語稱美事、(一〇)諸本不同、(一一)諸抄(一二)此抄ニ引ク所ノ書付、(一三)光源氏物語題號、(一四)物語之心詞用和歌作例、(一五)卷々之名事、(一六)河海抄序、(一七)花鳥餘情序、(一八)細抄序、(一九)年立序等、「源氏物語」の總說を記し、多く舊說をあげ、自說をも加へてゐる。この條項の順序は、流布本は(一二)(一)(二)(三)(四)(五)(六)(七)(八)(一一)(一〇)(九)(一三)(一四)(一六)(一七)(一五)で、(一八)(一九)は全然脫落してゐる。恐らく原本に、これ等の項目が一葉每に記されたるが、轉寫の際に錯亂したのであらう。右總說のうち、準據說に關しては前人未言の新說を出し、物語の後世文學に與へたる影響に關して「河海抄」に增補し、又三條西家祕抄の序文を揭ぐるなど、注目すべき記述が多い。註釋は先づ卷の初めに、一條兼良の「源氏物語諸帝年立」を各卷に分つてかかげ、本文は全文をあげずして要語のみを摘出し、これに諸註師說並に自說を記してゐる。本文は大體青表紙本を用ひ、稀れに河內本を參考し、三條西家本をも引いてゐる。舊說をあぐる際には、必ず、河・花・弄・細・箋・或抄など肩に略號を附し、自說には「私」又は「私勘」等の略號を附してゐる。通勝の私說はおほむね穩健妥當であり、中には鑑賞批評に亙れる評論もある。卷尾には「奥入」「河海抄」「花鳥餘情」「弄花抄」「年立」等の奥書を收め、最後に幽齋の跋がある。【價値】本書は、「源氏物語」諸註集成の目的をもつて成された註釋書のうち最大のものであつて、源語研究史上特筆すべき著述である。諸註を一覽の下に比較する便利は云ふまでもなく、著者自身の註釋は妥當なるもの多く、詳細深切であるが、本書中三光院の箋（山下水とも云ふ）と著者が三光院より受けた講義の筆記とを所々に抄記せるを以て、これ等の原本の面目を察知する上に重要なる資料となる。「明星抄」は「細流抄」を修補したもので、これによつて實枝の自說をうかがふ事は出來ないが、「箋」と通勝の「聞書」とは、直ちに實枝の說を示すものである。本書に引用するところ、桐壺より明石までは、箋と「聞書」との兩者を用ひ、若菜下より宇治十帖までは聞書のみ、澪標より若菜上までは箋のみを用ひてゐるらしい。これ等によつて、三光院の說を知ることが出來、「箋」及び「聞書」の面目を推察することが出來る。その他、三條西家祕抄の序文を收めたのは、「細流抄」との比較研究に一資料を提供するものである。かく本書は、註釋そのものとしては勿論、研究史の資料としても價値多き著述である。

【參考】國文學研究史野村八良○古註の集成―岷江入楚(上)（國語と國文學二ノ一〇）　〔德田〕

民衆藝術（みんしゆうげいじゆつ）　藝術論【佛】L'art du Peuple.【獨】volkskunst.【解說】民族（或は民俗）藝術（別項）と名稱を區別された民衆藝術といふは、特に近世の社會主義思想の上から主唱されたところのもので、民衆即ち社會生活の下層階級無產者のために作られたところの新な感情、新興の社會的思想を表現した藝術を一般に指す。蓋し有產階級のためにそれ等の中から作られた藝術に對する一種の反動的傾向の藝術で、從つて藝術美の觀念乃至藝術觀上の基本的相異の上に規定されたところのもの。演劇の上に特に活潑に主張され、又具體的に創作されたものが多い。ロマン・ローランの民衆演劇論の如きは、その代表的なものである。（プロレタリア文學・プロレタリア演劇參照）　〔村田〕

【參考】R. Rolland: *La Théâtre du Peuple.* ‖ Mielke: *Volkskunst.* ‖ Hue: *L'art populaire.* ○民衆藝術大杉榮譯

民衆派（みんしゆうは）　詩派【名義】民衆派といふ名稱は、甚だ不明確なものであるが、雜誌「民衆」がこの派の運動を詩壇的に認識せしめた事にも原因してゐる。詳しく言へば寧ろ民主主義思想の詩派である。【解說】大正六・七年頃から思想界・文壇を通じてデモクラシーの思潮が論議され、文壇には民衆藝術といふが如き主張が現はれた。この主なる原因は世界戰爭直後、米國大統領ウイルソンによつて唱道された國際聯盟や民主主義（デモクラシー）の新たな提議により、歐洲大戰が獨墺の軍國主義・帝國主義に對して、聯合協商國側の平和主義・民主主義が前者を覆滅せしめたものとし、オートクラシーに對するデモクラシーが世界の輿論となり、民族自決や小國勃興が、各々の民意を代表する國體主義を以て政治に思潮に表はれ來る傾向が見えたが、我が國の民主的思想も、吉野作造その他の人々によつて論壇に喧しくなり、ついでロシアの革命からマルクス主義や社會主義・無政府主義・サンヂカリズム・ボルセヴィズム等、社會運動・勞働運動に關する西歐思潮の紹介、啓蒙の運動が我が國に盛んになつた。その導火線ともいふべきものにこのデモクラシー思想がある。文壇の民衆藝術（別項）の主張はそれであり、詩壇の所謂民衆派もその派生的現象と見ることが出來る。この一派の中に目さるゝ人々は、百田宗治・福田正夫・富田碎花・白鳥省吾（各別項）・加藤一夫・井上康文等であるが、この一派の人々は必ずしもデモクラシーの代辯を詩句によつてなしたのではなく、そこには舊き人道主義的傾向も、自由主義も、自然主義的大地主義・重農主義・郷土主義等をも含有してゐるのである。福田正夫は、大正七年に小田原で雜誌「民衆」を發行し、百田宗治は「民衆」發刊前、大阪で個人雜誌「表現」を發行し、そこでホイットマンの詩によつて示唆された散文的な自由詩によつて民主的思想を謳ひ、それに富田碎花や白鳥省吾も時々寄稿した。加藤一夫は「科學と文藝」によつて、所謂民主的思想の詩を發表してゐたが、後には多大に人道主義的自由主義的色彩が濃厚で、その民衆藝術の主張も一時文壇の喧噪を呼び起し、論旨にやゝ明瞭を缺いたことが非難をも買つた。富田碎花はエドワルド・カアペンタアを紹介し、その「民主主義の方へ」（ツーワアド・デモクラシー）を飜譯した。ついで福田正夫・白鳥省吾等は、ホイットマンの使徒トラウベルを紹介し、その「オプチモス」を抄譯した。かくて、ホイットマン、カアペンタア、トラウベルの民主的思想の詩が彼等の詩の背後にその示唆ともなり後援ともなつた。が、ホイットマン的民主主義は百田宗治に最も濃厚であり、福田正夫は寧ろ重農的に、又浪漫的に、白鳥省吾は自然的大地主義に、富田碎花はカアペンタアの影響が深く哲學的思辨をその詩の中に藏してゐた。正夫には「農民の言葉」、宗治には「ぬかるみの街道」、省吾には「大地の愛」、碎花には「地の子」、加藤一夫には「民衆藝術論」の如き詩集及び論集が出た。ホイットマンの「草の葉」も碎花により譯された。これ等が、所謂民衆派の詩的活動であつた。が、彼等の詩がその思潮に於て所謂デモ

クラシーを表出したと同時に、その形式に於てホイットマン的な散文的詩風を唱道したことに於て、その詩の藝術的側面に對する審美上の非難が諸方から起つた。後年、北原白秋は彼等の詩を「散文なり」と斷じ、わざ〳〵散文に行をかき換へたりして非難したこともあつた。（川路）

民俗學（みんぞくがく）【解說】民俗學は、或る一國に於て偶然發達したものでない。それが學となる以前、既に各國に於て、その素地は用意せられてゐた。その意味に於て、現今でもまだその學問としての組織の、不十分な國々もあるやうだ。又民俗と民俗を對象とする學問の區劃すら、はつきりせぬものすらある。かうして出來た民俗學は、發生に於て偶然性があると共に、それが自らにして統一せらるべき必然性を持つてゐる譯である。それだけに又、國々で別々に、民俗學に近い內容を持つた「學」と「學名」を持つて來たにしても、今の處、判然細部に至るまで、一致してゐると見られぬ所の個性を著しく持つてゐるやうである。國々によつて、學そのものに個性があると同時に、勿論、民俗學の對象たる民俗自身、研究の結果導かれて來た普遍性の上に、又深い個性を含んでゐることは考へられる。この二つが、この學問の出發點に於ける根本的の立場とならねばならない。民俗學は、從來の好事的享樂、或は好古的採集を出發點として、漸く無形抽象的なものに傾いて行つた蒐集物の上に、單に奇怪であり、驚異であるといふ事の外に、なほある徹底した理論を見出さうとする希望が、當然にして起り、或は達成した學問であり、又まだその道程にある所の方法でもある。さうして單なる物である事を最後とする好古的なものに對して、その物を通して、物に關聯した習俗を思はしめ、又習俗自身であるものは、その分類、序列的配置が、その發生の理由を思はしめるやうなものを持つてゐるのであつた。だから、その統一精神として、新しい理論を與へたものは人類學であつた。言ひかへれば、個性的な人類學方法を以てする好事學であつた。當然の歸結として、これは人種學の精神的偏向を著しくしたものと言ふ形をとつて來た。その點に於て、民俗學といふよりも民族學と稱する事の適切なることを主張する人々が多い譯だ。民族學といふ形式から言へば、民族精神發生學と云つて、その半分は盡せるかも知れぬ。が、ただその低意識狀態に止まつてゐるものであり、突發的に發揚するものでなく、週期的に而も或る責任感を伴ふものでなくてはならない。でなくては、單なる道德・宗敎なども、その中に入つて來ねばならぬ。低意識であつて、潜在意識ではあるが、突發するものではない。突發は飛躍である。のみならず、これ等によつて文學が民俗化することもある。必ずしも文學ばかりでない。飛躍して一つの社會精神生活の規範となるまでの期間を、撫育せられてゐるものと言ふことが出來る。民俗が民俗である事のためには、週期的なることを要するのは、舊時の宗敎が、成立時代の宗敎と性質を異にしてゐるからの事である。週期的に出現する神に對する誓約を履行する事によつて暦日が考へられ、祭禮を行ふやうになり、祭時を完全に經過する方法としての儀禮や傳承詞章や禁忌などが、すべての傳承の基となる。同時に、古代社會に於ける急激な變化と、社會人の頑固な保守とが、傳承を不具ならしめる。そこに民間に傳承せられる精神現象の錯多化と豐滿な忘却とを齎した。さうした殘り具はつたものが民俗であり、民間傳承である。これを對象とする學問が民俗學であり、又は民間傳承學と稱せられるものである。

【民俗學と國文學】民俗學の、文學との交渉は、極めて僅かな點である。それが如何に日本的であり、また日本に關聯してゐるかといふ點を第一として、日本文學に現はれた民俗的事項の解說を試みる所にあると思ふ。だが實際について言へば、單にそれだけでも簡單な事ではない。こゝには、この分擔の性質上、日本民俗學―と謂ふべき―のどうした項目を文學の上に注意し、關聯させながら、文學史及びその形態發生史を考へて行かねばならないかといふ事に止めねばなるまい。

【日本文學の發生】文學の發生及び維持は、それが言語傳承としての意味に於て遂げられるのだから、第一に、民俗或は民間傳承としての過程を經たことは勿論である。それと同時に、その技巧が次第に傾向を生じて來るのも、傳承の力によるのである。こゝには、全人類の原始的民俗形態を考へる必要もなし、又さうした空想に似たことが、狹い日本民俗を通じて實現せられることでもない。だから、それに觸れるにも及ばないが、なほ考へると、その研究種目の部分には、非常に關聯するものが多い。結局、私の考へ得た―多分後來變らぬだらうと思はれる部分―だけを以て、これに答へる外はないと思ふ。

日本人の持つ文學の故鄕は、同時に日本人の祖靈の集注處と信仰せられた常世（とこよ）の國であつた。それから持ち來されたものが、この土の咒詞（ことひごと）である。その發表方法によつて宣下式なのが、のりと（宣處言の略）、奏請式のが、よごと（壽詞）と岐れて來た。更にそれが敍事詩的內容を胚むやうに進んだ。それが即ち物語である。物語とは恐らく精靈（もの）の語りの義である。かたるとうたふとは、日本歌謠史或は技術上の二つの軌範で、うたふは懇訴哀願を主題とするもの、即ち抒情詩詞の演奏を示すことと云つてゐる。かたるは權威を持つて對者の靈を感染せしめる―かたる・かたらふ―誘惑力ある詞章を述べる方法を言ふので、內容的には敍事的であり、音樂的には律の變化の少い方法である。かうして咒詞から祝詞が出で、壽詞（よごと）が生れる。又轉じて敍事詩ともなる。それ等の詞章の中に、更にそのエッセンスとも謂ふべき部分が强く感じられて來る。それを以て、全詞章を代表させる習慣が、遂には全然詞章から獨立すると言つた有樣を導き、詞章そのものが亡びて、それだけが殘ると謂つた形を採ることになつた。その咒詞から出たものは、「諺」となり、敍事詩から脫落した部分は、「歌」の初めをなしてゐる。

【文學と民俗と】文學と民俗との關聯は、この點からはじまる。即ち言語傳承が、民間傳承の重要なものとして、あらゆる傳承に結びついて、基礎的事實を形づくるやうになつたのは、こゝにその謂はれがある。これは、日本文學の發生の上に見える明かな事實であるが、外國文學に於ても、大體かうした出發點は、閑却出來ないことと思ふ。さてこの事實の後をつけて言ふことは、あまり文學史の側に傾く虞れがある。それよりも寧ろ、横に傳承の各種類に結合した言語傳承が、どういふ風に現はれて居り、又どういふ姿に文學的な姿を留めて來たかといふ暗示だけを書くに止めよう。

【日本に於ける民俗學】民俗學の對象は、民俗である。今少しこれを適切に言へば民間傳承である。これ等の語が、たとひ以前は無意識に近い散漫な用語例に使はれてゐたとしても、實際に學問的に用ひ出されたのは、柳田國男氏である。さうして、日本の民俗學が、それ以前の好事―或る部分まで、好古或は考古學とも稱へた―學者の先導があつたとしても、眞の組織を持ちはじめたのは、これ以後のことである。先づ民間傳承を採訪し、組織するための便宜上、種目を立てて、凡そこれを五つの部類に分けて置くことにする。即ち週期傳承・階級傳承・造形傳承・行動傳承、並に言語傳承がそれである。そのうち、直接文學に關係あるものは言語傳承で、その或る程度まで進歩の緩い程度に止まつたものだけが、非文學だと謂つてよい位、殆どすべてが文學化すべき理由、又は道程を持つてゐると言つてよい。

【週期傳承】週期傳承といふのは、その著しく固定した點を主として名づけた迄であつて、民間傳承自身、週期を意味してゐないものはない。この週期傳承の精神とそ、すべての民間傳承を指導するものと謂つてさしつかへない。ただ强ひて謂へば、暦日的に定着したもので、過去の長い部落生活の上に、權力の催勵以外に、或る不可抗的な內發意力によつて行はれて來たものである。暦日によると言ふことは、むしろ後世のことである。却つてそれによつて暦日觀念が起つたと見た方が正しい。國語式の普通の表はし方で、この部分を「年中行事」といふ。正月・中元・歲暮を初中後とした民間生活を、時間的に整理する目標ともなるもので、その多くが勢力を失ひ、新しく替はるもの丶少い今日でも、なほ採集して詳細に區劃すれば、想像すべからざる數に上ることは豫期出來る。大體この國土の生活が群島及び大陸から集注したものである以上、各種族のそれ以前の鄕土における傳承の、或る飽和點に達した時期のあることが考へられる。ただその程度が、百中の五十乃至三十と云つた低いふり合ひの調和で、威力ある―宗敎的に―人々の持つ傳承を中心としてゐたと思つてよい。さうしたものの中には、先住漢人種の將來して、それを生活樣式としてゐた道敎風の信仰や方式なども交つてゐたに違ひない。國家成立後も、次第に服從・歸化して來た種族の民俗を含み、その上に、廣い佛敎式の傳承を容れるやうになつて來た。これは漢人種の齎したものと違ひ、若干の實生活以外は、書籍から出たもの、又は眞に形式化したまゝのものが多かつたらう。だから、民俗原始狀態なるものが、何處にも考へられなかつた事實よりも、更に思ふことの出來ない國土の上に、漠然として成立した民俗である。さうして細かい內容に至つては、未だ知られない部分が多い。今ですらさうであるから、時代を溯るほど、愈々明かでない。而してその間に考ふべきことは、敍上の如き傳播式の考へ方の外に、勿論日本獨自に偶發した傳承のあるべきことである。併し數限りない多くの民間傳承の中から、特にこれを揭げ出す自信を持つことが出來ない。それで、ある點まで、特殊な形を示して來たものだけを擧げることにするだらう。即ち國文學と年中行事との關係は、主として行事執行の條件、または手段となつて居り、また手段となつてゐたところの詞章である。これは後世になるほど、藝能に隨伴してゐる。その大要を言ふと、祝詞であり、歌であり、諺であり、物語であり、くどきであるといふ風に、さま〴〵に分化して行つた。だから、初めは、神及び精靈の咒詞であり、後年は踊り、劇の臺詞となつて行つた譯だ。すべては、言語傳承の領域から來るものである。だから、特に細目に亙ることは避けるが、この部で言ふべきは、古代ほど、文學に臨時鑑賞といふことが行はれずに、年中行事の一部分として保存せられたのである。この暦日の束縛から自由になつて、初めて文學となつて來るのである。

【階級傳承】第二は、階級傳承である。それと國文學との關係は、勿論あるべきことであるが、これとても、階級傳承に言語傳承の交錯して來る點が擧げられるに過ぎない。階級といふのは、價値に差等をつけることでなくて、社會に何かの意義ある區分を施すことである。社會を形づくる人間を整頓するために、群團式に區劃してその理由となるべきものを揭げ出すこととする。その標目に、年齡の序によるもの、經驗の臈（らふ）に從ふもの、血族の社會的地位の生得權を、主とするものなどがある。これに各種の傳承が結びついて來るのである。一は老若制度である。なほ加へねばならぬのは、性別を職業の分岐點としての區分で、嚴格に言へば、等級を次第することではない。次には職業による傳承である。だが同時に、平靜な古態の社會では、年と經驗とが一つに見られてゐた。週期的にある飛躍が同年輩の人々の上に來る。さうして、社會的の地位と職業とを持つに至るのである。だから嚴しく言へば、一つであるが、近代的には、この區分は併立してゐたのである。これに對して、生得による區劃、それが延長せられて、社會上に、權威を保つ族人を生ずることになる。元々、宗敎上の威力を中心としたもので、從つてそれによつての戰鬪力であり、智能であつたのである。これに對比する關係は、實は對比といふよりも、延長といふ形で、次第に數が加はつて行つた。さうして、かうした階級の傳承は、常に上層の傳承が、次に成り上つた階級の傳承となつて行き、次第に下層に止まつてゐる階級の生活軌範とまでなつて行つた。又男女を標目とする區劃は、とりわけ階級の名に當らないが、我々の民俗學では、階級觀念の起原を說くのだから、これにも大きな視點のある譯である。古代日本では、成年の男性であることの第一資格は、神となり得ることだつた。それに對して成女の價値の定まるところは、巫女となる資格を持つことである。この二つの邑落的な神聖な職業の區別から、文學藝能の分立が現はれるやうになるのが、後代に至るまで、日本藝能の上にあつた特質である。而して一の階級區別から來る文學的衝動は、古代社會に詞章保持の根源力を與へた。成年・成女、或はそのうち更に特に選ばれた能力者間に、太初から永劫までの負擔としてあつたのは、神授と稱する詞章の傳承であつた。この數が次第に殖えて、文學の芽生えは愈々豐かになる。この團體の組織がなかつたならば、純粹な日本的な文學は、今の形を持つては現はれてゐなかつたらう。また詞章を傳授し、方法を指導するのが宿老（とね）（刀自（とじ））の職事であつた。詞章・咒的行動を現實に實行して、次代まで持ち越すのが、成年更

爲の根本理由であつたのである。成女も亦、成年の職業と對比する爲事を持つたもので、成年との接觸・媾和・鬪爭の間に、次第に文學及び文學動機・文學鑑賞力が、國民的に發達して行つた。殊に相聞式發想は、こゝに生れて來た。實は連歌・俳諧・旋頭歌、皆この事情を外にしては、その發生を考へることが出來ないのである。

【職人の文藝】今一つ職業傳承として見られる職業による民間傳承は、日本的に謂へば、最近まで、――今日すらある如く――古態な職人の間に遺存した特殊な民俗のあることから、全體としての習俗の形が思はれるのである。屋根屋・鍛冶屋・箕作り等の職人の間に、藝能詞章の文學に近いものが傳承せられてゐるのは、必ずしも近代だけのことではない。これ等の職人は前代の藝能人なる「巫女」・「琵琶盲僧」・曲舞々・神事舞太夫等の類（部類に入れたのは現存してゐるもの）と、中世的生活樣態に於て變るところがなかつたのだ。それほど、職と職の由來を說く文學の唱道とが、竝んで行はれてゐた。古く溯ると、職その物は、神事を遂行するための分業を意味するものであつて、一々について、その本縁を說く賀壽事（よごと）があつた。大事には、氏々の壽詞（祈禱詞の元）なるものが行はれた。その傳の殘つたのが即ちこれである。これと共に考へられるのは、勞働に伴ふ歌謠である。元、やはり職業詞章の斷篇だつたものが、段々替へ唄を生じ、更に他の歌謠をも流用するやうになつた。それが次第に、勞働の身的律動に諧調すると共に、その勞作に對する感情を陳べる詞章を生ずるやうになつた。これには國文學側から見れば、國ぶり歌の影響が見られるのである。

勞働は、その奉仕する人へ靈魂獻上の手段になるものと信じられてゐた。譬へば、杵搗き・地搗きは、主公に對する魂鎭り咒術に伴ふ咒歌なのであつた。それが次第に臼唄――碓唄から挽臼唄へ――に擴がり、胴づき・棒づき・踏鞴唄となつて祠堂の祝福の詞章と言ふ風に用ひられて行つた。又譬へば、田植ゑ唄の如きもそれである。村の田祭りに臨む神――成年等が聖役の重要な一つとして神に扮して――を祭場なる田に迎へる成女の聖役、即ち五月處女役があつた。その時、その勞働を讃するのが、神の爲事の一部で、所謂田囃しとなつた。即ち田遊・田樂の元である。それに伴つて諷誦せられたのが田植ゑ唄であつた。だから、後世段々內容が變じて來てもさんばいと稱する來臨する神と田あるじと稱する地靈――後合理化して田の管理者から田の持ち主と思はれて來た――晝飯持ち・おなり人など言ふ田の巫女の記憶は、未だ失せきつてはゐない。勿論、舊日本の更に廣い部分には、別種の神の信仰のあつた事も考へられるが。

【造形傳承】造形傳承は、寧ろ造形傳承物と言つた方が適切なのである。近來、その名稱の民俗藝術に除外すべからざるものであるところから、右の一部門として加へられることになつたが、他の種目に入るもの、この記述からすれば、藝能的な部分を見るべきものとは、一致しない性質を持つてゐる。彼はすべて抽象的な存在であるにかゝはらず、これは具象的なものである點である。而もあまりに具象的で、文學・藝能的なものに對して、技術の側から藝術的と思はれる外には、交渉がないとすら考へられる程である。併しこれを呼び更へて造形傳承といふと、如何にも所謂造形の民俗藝術が含むところの、他の民俗藝術との共通要素を思ひ得ることが出來る。信仰方面が殊に形式に固定した結果、原意を辿ることの出來なくなつたものが多い。それには、主として經濟生活が、新しい目的を無限に展開して行つた爲めであつた。さうした二次的目的を持つやうになる前から、その以後の經濟的利用の上にまで、一つの繋りが見られる。即ち信仰的な扱ひ方である。而も特にこれが文學に關聯してゐる點と言へば、やはり言語によつて、その人間及び人間以外との約束が、形式的に固着してゐる方面を見ねばならぬ。たとへば建築である。建築を祝福する詞章は「前文學」である。同時に非常に多く、文學の中に織りこまれて來てゐるものだ。古代と近代との物に就いて數行の說明をする。家ぼめの詞章が、室壽詞・大殿祭詞であつた。それが悉く同じ傾向の發想法で、頻々と言ふよりも頻々とくり返された爲め、固定に固定を重ね、意義の全體的滅裂と部分的理會とを重ねて來た。その詞章の意義を補綴する合理性能が、日本人の文學能力を發育して行つた。咒詞及び長短歌の、その分類が何に屬してゐるにしても、「室壽」の痕跡を殘してゐるものが極めて多い。家ぼめには、家長の祝詞が伴うた。家長の壽を頌する詞には、邑落平安・行疫退散の目的が、自然にさうして必然に隨つてゐた。村に流行病の起つた時、或は家長の篤疾に陷つた時、行ふ咒術は室壽の形式を先行せしめなければならなかつた。その咒詞も亦必ず家ぼめの詞であつた。これは日本文學の發想法と、古代論理の論法とを開く上に、重大な役目を持つてゐるものである。意想外に大きく、單純な論理が、日本文學を支配してゐる。近代においてすら、胴搗き・木遣り・石挽き・踏鞴踏みなどが、藝能殊に踊り及び唄の發達の力となつてゐることは既に述べた。これは建築に關する行爲傳承である。このやうに造形のうち、建築に類したものには、それが大規模なだけ、言語傳承を印象するものが多いから、例としてこゝに舉げたのである。が、傳承その物の性質上、文學自身と見ることは出來ないのであるから、單なる刺戟と見ることに止める。

【行動傳承】行動傳承は、必然的に言語傳承を伴ふものが多く、又時としては言語傳承自身が、その中心となることすらあるのである。舞踊は、原始的な行動でなくても、單純な表情の固定したものとして、最もこの部類の重いものと見ねばならない。歌謠は舞踊との提携の歷史の古いことによつて――又單獨にも起つた信仰的生理現象でもあるがために――言語傳承の一つの先行者と見てさし支へない。或は演劇の如きも、その原始的意義に於て、言語傳承を刺戟するものになつてゐる筈である。單にそればかりではない。普通言語と考へられる感動詞すらが、單なる行動に過ぎないと見る事が出來る。又その習慣的發音が、如何に傳承に拘束せられてゐるかと言ふ點から見れば、この品詞及びそれから出たものの多い「語根」の一部などは、行動傳承の變形して、言語傳承の形を採つたものといふ事も出來る。歌謠を行動傳承とも見られる所以は、この意味に於ける傳承が、次第に言語傳承の形式と似て來る點を見て言つたのである。「諺」自身は、その發生原因は別にあるが、形式は此處に生じて後、これにあてはまるべきものが、言語傳承から來たのである。謂はばまづ言語

を要しない發音だけを利用した行動傳承が、諺に先行してゐた譯である。日本の言語傳承では、それは明かには見るを得ないが、古代からさうした成因を信じてゐたと見えて、「諺」の古いものは、それらしい姿に出來てゐる。「あなにやし。えをとこを」「あなにやし。えをとめを」の如き、「あゝしやを」「えゝしやを」などの如き、頻々としてこの種のものが多い。これに就いて、殊に深く考へねばならぬのは、囃し詞である。囃し詞それ自體は、寧ろ特殊事情を共通にした一群の諷誦歌の證明語句とも言ふべきものであつた。それが固定して、意義の辿れなくなつたものが、この語の最初の形と見るべきである。が、さうしたもの以外に、必ずかうした感動的な行動傳承ともいふべき囃し詞があつたに違ひない。又かう言ふ側からすれば、從來の囃し詞に對する學界の通說なる感動說をも認めることになるのかも知れない。また擬態舞踊とも言ふべきものを舞踊の原始的なものとする說が多い。しかし原始に近いものではあるが、原始態だと思はれてはならない。ともかくも、鳥や四足の動物或は、畸形者の態をうつすものである。この舞踊に挿入する舞人自身の懸け聲が、やはり擬音であるとはいふが、同時にまた行動傳承と言つてもよい筈のものである。行動傳承それ自身については、論ぜねばならぬ問題が多くあるが、文學には關係がないからこゝには省く。

【言語傳承】最後に言語傳承である。非文學・文學を通じて、ともかくも、傳承自體、言語によつて成立してゐるのが、通例なのであるから、概して程度問題として、日本文學と民俗學との關係とを直接に示すものである。要するに、各傳承はその根柢として、言語がこれを繋いでゐたものと言はれる。言語は偏へに原始思考（信仰）を傳承する機關である。だから造形傳承が物品によつて、古代精神とそれから展開せられて來たものとを傳承したことの對照として、言語傳承があるので、思考の持續があり、その發達があつたのだと言ふことが出來よう。ただ文學との關係を述べる場合には、言語傳承は、或る言語形式を對象として行かねばならない。だから、他の傳承は、皆正常な目的とはならない。言語傳承を假りに分類すると、

一、諺・言語遊戲

二、歌謠……民謠

三、傳說

言語を以てする傳承の全部が、必ずしも文學となり得ないといふことは、文學自體が、言語傳承の後身であり、同時に、その相違が絕對的なものでなく、極めて近似して、ただ表面的には、言語技巧の巧拙の素朴的な感觸の如何にあるが、事實は感激の固定せず、自在であり、妥當なることを得てゐる事にある。だから、時としては歷史的知識のない者からは、古代の詞章（文學でないところの）の表現法が謬つて過重に評價せられることもある。類型や傳襲の僅かしか殘らなくなつた遺物の上には、新鮮なもののやうにも見えて來るのである。この場合、單なる言語傳承を以て純文學と見るのであつて、古典文學を研究するものは、常にこの誤つた見方から、鑑賞を勞費することがある。併し文學製作の側から言へば、さうした類型が堆積して、そこに新しい飛躍が起ると、文學は現はれて來るのである。思想よりも感激が文學の初めであつた。この感激の次第に純化したのが文學であつて、常に明かに、文學と言語傳承とは分化してゐるものと見るのは空想である。やはり、詞章の類型に對する知恵が必要である。文學上の技巧はどうして起るか。古い表現に對する忘却・無理解の重疊についての後人の誤解が、文學的方法を生んで來るのである。文學的鑑賞は更に遲れて發達するものであるが、その單純なものは早くからあつて、それが言語連續に對する愛着となつて出て來てゐた譯である。それが飛躍して詞章に對する氣分的愉悅となる。內容と形式との關聯するところなどに及ぶのは、更に〳〵後のことである。

【諺】日本文學では、古代の咒詞も、前代の敍事詩も、文學的の意義を民族生活の上に持つてはゐなかつたけれども、諺は最も早くから、文學情操に似たものを刺戟してゐた。却つて複雜な近代人が、この部門に屬する言語から、さうした感興を享ける事を忘れてゐる譯である。單なる諷喩や、斷篇知識の貯藏庫ではなかつた。後人の文學から感受するものに似た言語の感覺美と歷史事實に持つ情懷との感じられた形式だつた。その一つは枕詞である。現に風土記の類には諺即ち枕詞と言ふ風に書いてゐる。この諺の持つ歷史的知識が、單なる社會的申し合せの敎訓とばかり感じられる時代になつて、完全に文學から去つて言語遊戲になつて行つた。言語遊戲は、豐富な記憶と瞬間的一部變造とによつて行はれる。常に周知な知識の自由な應用であり、頓才的聯想力とが必要であつた。こゝにも言語傳承の傳承に據るがための效果を見ることが出來る。古代に懸け合ひ式の表現の盛んに行はれたのが、文字の上に移つて、一方、文學の影響を受けて來るところから、短句連續の文學が行はれ、又一課題に對して多くの附句を要求するところから片句獨立の習慣を發想上に誘致するやうになつた。さうして、それが古くから實生活に必要な程度のものと、それ以上の遊戲に傾いたものとがあつて、一つは俳諧、他は雜俳となつて行つた。また出發點は同じことで、目的を分化して行つたものに「謎」がある。この外に發音を主題とする傳承から來た遊戲がある。ごろ合せ・舌もぢり・長息文句等がそれである。初めの目的とその利用の方が澄んでゐて、後世却つて濁つてゐるやうに見える。併しながら、それも非文學として、文學に添うて行はれたものの狀態で、全然ただの言語傳承として殘り、又は徐々に姿を換へて行つたものには、却つて文學のよい刺戟となつたものがある。恰も散文學が固定して生命のなくなつた時に、古典的な民謠精神が、文藝復興を促す動機となつたのと同じことである。文學を好む心の對象となり易いところから、蒐集或は研究の對象となり易いのは民謠である。さうして民謠の中に含まれた傳承の複雜さは、さう〳〵たやすく解決が出來るものではない。啓蒙的なもので、同時に最後的なものとさへ言はれる。

【民謠】民謠を分けて、童謠・季節謠・職謠の三部に分けて見たい。これは完全な分類ではないが、今は簡單な方法によるのがよいと思ふから、おほまかな區劃を採つた。童謠は信仰上神意を諷喩する象徵的な效果を持つたと言はれた「わざうた」を斥すのではない。又大正以後盛んになつた詩の一樣式として用ひられた文學としての童謠をも含まない。あれは單に童謠の論理と情調とを利用したものに過

ぎないのである。童謠は多く、幼兒に謠つて聞かせた諷喩歌から分出してゐるものと思はれる。近頃の文學が、童話・童謠の形に發想せられるのの多くなつたのは、宗教的象徴文學の影響で、マアテルリンクやトルストイの委である。日本的には、過去に於て別の途をとつてゐたやうに見える。又季節謠の中には、眞の季節謠と、以前季節の勞働に謠つたものから出發したものの變化したと言ふ點で、普通勞働謠なるものをも籠めて言ふ。勿論季節謠といへども、古く溯ると、行動傳承に伴つてゐたものといふことが考へられる。季節謠は、卽ち週期的儀禮執行の一部として發達し、その行はれる村が、農事を主としたところから、農事に關するものが多くなつた譯である。卽ち農祭の始中後の行事にかけて言ふものが多かつたのである。それがため、その時期の到らない中から、既に他の部分を謠ふやうになつて來たのだ。その外にも、漁人の村、又は聖なる職として工業に與つてゐた村では、やはり季節的に神聖な勞働に從事したのが、臨時にも行はねばならぬ事になると、それぞれ季節謠は固定し、又は佛を更めることになる。かうして流傳してゐる間に、自然季節の拘束のない唄が出來て來る譯である。さうなると、職或は勞働その物が主題となり、また勞働中の雰圍氣を內容とした發想に變化して行く。殊にそれが男女相對するものが多いところから、性意識を含んだものが榮えて來る。文學か民謠か、判斷に苦しませられる古典的作物は、殊にこの部門に多い。季節の推移を主題とした文學の日本文學殊に短篇詩に多いのは、このためだと思ふ。行動傳承の時にあげたものは、多くこの中に入つて來る。言語傳承は、通例律文學であり、また聲樂によつて律文要素を深くするものだが、なほ成立は律文的で、結果の散文的なものもないではない。唱導的な目的を持つたものは、古くは咒詞として、その儀禮・祭祀の本緣を說くところから、叙事詩らしい形を整へて行つた。さうして語り物として、聲樂上特殊な樣式を備へて來る。それが何時の時代にもまづ律文として諷誦せられ、それが散文に綴り直されて文學に近い形となり、又崩れて語り物となつて行く。これが長物語である性質上、戲曲・小說になつて行く傾向を持つてゐた。たとへば近代の說經・淨瑠璃が、同じ名稱の文學となつたやうなものである。また念佛・祭文・說經を題材としたものに、歌舞伎狂言があり、又浮世草子小說が出た。だから、後來文學の主流となるものが、多く唱導の語り物から出た事には注意せねばならない。既知の非文學の文學化といふことが、我々の國の宗教教化の上に出て來た事實である。古く見ても、王朝の物語は、その構造の見られるもの程、唱導の口頭臺本を具象したものと言はれるのである。尤も小說の起因は外にもあるが、かうした傳承維持力の有無によつて、位置を高めさせると言ふ意識から出て來るものの多いことも、認めないではゐられぬ。

【傳說―神話・民譚・說話】 さて民俗學的氣分の愛好者に、民謠と共に擇ばれやすい題目は傳說である。これ亦、先の民謠と共に文學化せられる題材となり易いものであるが、それが律文でないだけに、文學とする過程において文學的修練を要するものがあつた。これも亦、民謠の場合の如く、神話・民譚・說話の三部門にこめることが出來る。神話は、嘗て社會に關係の最も深かつた事物の起因を、神と人との交渉あつた時代に求めた物語である。が、これも久しく叙事詩であり、文學に固定した時は、既に神話としての威信を失ひ初めてゐた。さうして成文・不文の時期に亙つて、極めて時代的な自由表現を持つた說話時代があつた筈である。日本には、基督教生活を基調としたものがないから、神話といつても西洋學者の言ふやうなものはない。民譚は神話に對して、社會統合の威力がその傳說を維持してゐた時代から去つた時代の形であるが、なほ歷史的事實とする事によつて、信賴を繋ぎ得たもので、それが起因を說かず、偶發事件とするところに歷史的意義を强調して感ぜしめる。而も事實に於て、特別に多くの類型を持つものである。それが神話と說話との間にあるやうな形であるところから、區劃して假りに民譚と稱する。說話は普通の用語例とやゝ違つてゐる。傳說を色々な名によつて幾種かに稱へ分ける事の出來るのは、その發表方法に數段の差異のあるところから、自然に要求されて來るのだと信じてゐる。卽ち神話の神の誓約を元とするのに對して、人の世の任意な事件とするのが民譚で、二つながら律文形式もあり、又既に口頭說話に翻されてゐるのもある。それを全くの口頭に移し、過去と言ふ制約は持つても、實は現在に於て、あり得るものとの理會の上におくのが說話である。だから、その過去といふ時間に、比喩味を感じさせる事すらある。さうして、あり得ない事をありうちの事のやうに語る。謂はば物語の上の世話物である。だから、特殊な人物・愚昧者か、諧謔家か、智者かと言ふ風に、事件の特異性を救ふ主人公を出して來る。この說話はすべて人情の世界でなく、叙事一點ばりなのだから、人物・集團は假空的のものとなつて行き、或る一人、一團體の偶然の事件と言ふ風に說く。また一方に、神話・民譚の類型を交へるものもあり、それから新しい社會と交感する點において、訓諭的な意味を寓するやうになつて來る。又ある部分まで、人物について不凡な社會性を持たせることが出來るやうになり、事件には、テイマを寓するやうになつて來る。不信心・不孝・貪慾・邪慳など、主として凡庸な宗教的な教戒から出發して廣い意味の道話に近づく。童話については、童謠のところで言つた通りであるが、これ亦、學者の言ふやうな正しい意義のものはない。ただ傾向の似たものがあるだけである。さうして二つながら併行して發生したもので、前後を定めることは出來まい。童話では說話の當事者を綺譚に符牒化するやうになつてゐる。我々の國の文學には、如上の事實があり、又書物の上にも當てはまる。この外に考へねばならぬことは、語りての專門的職分が解けて、自由に人々の說話する時代に入るに從ひ、又次第に說話の興味は失はれて、文學の上に移つて行つた。この事實は普通人が想像するよりも、もつと繁盛に行はれてゐる事である。

【物語】 傳說の中に於て、なほ忘れることの出來ないのは、樣式ばかりから見れば、神話から直ちに說話の世界に入つたやうに見られる「おとし咄」のことについてである。この發達の徑路には、「諺」の說明物語と歌物語との交錯がある。さうして極めて近代まで、歌物語の變態なる狂歌咄の系統が、却つて落語の正系のやうな外見を持つてゐたことである。而してなほ言語傳承について言ふべき項目は、

極めて多く、その文學との交流狀態についても、もつと細やかな說明を必要とするのは無論のことであるが、今は單に項目の說明と謂つた程度に止めることにする。 〔折口〕

民俗藝術 みんぞくげいじゆつ 藝術論 [獨] Volkskunst. [英] Folk-art. 【解說】譯語としては民族藝術とする場合もある。凡そ一定の民族に共通するところの精神生活は、他の民族のそれとは當然趣を異にする。故にそれ等民族の素朴的な感情生活及びその傳承は、自然的に各々その民族固有の藝術を發生せしめ、材料・手法、樣式上特殊な傾向を有するとしてこれ等の研究は藝術の起原（別項）の研究者乃至社會學的に藝術を觀察する者によつて、特に民族藝術學が主唱されるにいたつた。而して一國の藝術の特色は、又その遠き祖先の社會的條件を多少とも傳ふべきものであるとする考から、民族藝術學的研究は現代の藝術を理解し、或は美そのものの本質研究にも必須の方面とされる。例へば民謠（歌謠參照）の如きものはその研究の好材料であるが、これ等から可なりにその民族固有の美的表現を察知し得るものであつて、ドイツ十九世紀初頭の文藝の興隆の如きは、ヘルデルの古代民族詩の研究に刺戟された所大であつたことなどから見て、重要な藝術學的研究部門であらう。民謠の如きものに於ては、所謂卑俗美乃至卑猥美 (trivial burlesque) が表現されてゐるのを常とする。シェークスピヤの戲曲に於て英民族固有の卑俗美が溢れてゐるものがある。或はフランスのラブレーの「ガルガンチュア物語」の如き、ドイツの「ティル・オイレンシュピーゲル」、或はビュルゲルの「ミュンヒ・ハウゼン」の如き民俗文學の雄である。現代に於ても都市文化の行きわたらない、そして古くからの傳承を保つてゐる地方の民謠や、人形芝居・村芝居には、この卑俗美があると共に、固有の民族的感情が溢れ、一種の滑稽美表現に達してゐる。この意味に於て「竹取物語」、御伽草子の中の「福富草紙」、或は多くの能狂言、或は「道中膝栗毛」「浮世風呂」（以上各別項）等、或は落語・黃表紙（各別項）の如きものは、やはり日本の民族藝術として考察さるべきであつて、そこには、日本固有の特殊な民族感情が見られる。造形美術方面に於ても同樣なことが云へるであらう。しかし民俗藝術の名稱は、嚴格に云つて藝術的價値の上からのみ理解さるべきではない。個人の創作に對して、むしろ民族全般の中から、自然的に發生した傳承の生活感情表現の藝術として、特殊的意義を有するものと云ふべきであり、藝術の社會性の上から見れば、反つて重要な意義が與へられるものである。民衆藝術（別項）と區別すべきである。 〔村田〕

民族心理學的美學 みんぞくしんりがくてきびがく 美學 [獨] Völkerpsychologische Aesthetik. 【解說】 民族心理學的觀察に基く美學。在來の個人心理學の內省的又は實驗的な方法では、質的には感覺とか簡單感情とかいふ如きものに止まり、藝術の如き複雜な心理を究めることができず、量的には個人心理に限られるので、藝術の心理的起原を明かにする民族一般の心理を觀察することができぬ。又人類學的方法による美學は、藝術作品を對象としても、その心理的研究ではない。こゝに原始民族の藝術作品を心理學的に觀察する觀察法による所の民族心理學的方法による美學が主張される。ヴント(Wundt) がその代表である。

【參考】 Wundt, W.: *Die Kunst*, 2 A. 1908. ; Wundt, W.: *Elemente der Völkerpsychologie*, 1912. 〔[illegible]〕

民譚 みんだん 【名稱】 [英] Folktales. [佛] Contes populaires. 【名義】 普通には「民間說話」と譯されてゐる。「民譚」は單に一部の學者のみが、これを簡約するために使用してゐるに過ぎない。現在に於ては二者は全然その範圍を同じくするものと解せられてゐる。目的は主として製作說話と對立せしめて、特に或る個人の空想又は作爲に基かない說話だけを區別するにあるが、更にその性質を明確にするには、別に現在の「世間話」、若しくは「事實談」といふものとの分界を立てなければならぬ。「世間話」と「民譚」との二つは、話者聽衆の性質、時期機會及び目的にも共通の點が多く、且つ双方互に材料の融通が行はれ、それが文籍に採錄せられる以前に、消えたり變化したりすることまでがよく似てはゐるが、少くともその表現の樣式だけには、間違へやうのない差異がある。卽ち「世間話」の方は、假に到底有り得べからざる話であらうとも、必ず誰が言つたとか何時何處で聞いて來たとか言つて、それが或る事實であることを示さうとするに反して、此方は所謂有りさうな話まで、悉く或る時或る男にしてしまつて、最初から空想の活躍のために一種の舞臺の如きものを設けてかゝるのである。話の珍奇なる實質以外に、その叙述の方法に對しても、若干の期待がある。これ我々の話術が、もと「民譚」の中から發達して、次第に他の方面に及んで來た證跡である。この意味から見ても、「傳說」は寧ろ「世間話」の方に屬すべきものであつた。「傳說」には通例定まつた話術がなく、又順序方法もない。それがもし京都の寺などの案內役の言葉のやうに一定すると、再び又民間說話の樣式に戾つて來るのである。【解說】 物語は現在すべて書卷の形を以てのみ保存せられてゐるが、これも嘗ては「民間說話」の中に、包容せられてよい時代があつた。その長い物語が一つの中心信仰によつて統括し、また育成することを得なくなつて、後には人が非常の能力を以て偶然に諳記し得る程度の、小さな部分に分解し始めたのである。卽ち民譚は常に短くならうとする傾向を採つてゐた爲めに、近世になつてはこれを特徵の一つに算へて、稀に殘つてゐる古來の宗教的語り物と差別することも出來るやうになつたのである。而も如何に短くならうとも、少くとも一個の「話の種」（別項）、卽ち興味の中心となる部分を缺くことは出來なかつた。その中心が大なる神德であり、又は英雄の生死であつた時代には、說話の輪廓は非常に大きかつたが、それが或る一日の奇怪なる出來事、或る一人の平凡なる者の遭遇、若しくはその偶然なる幸不幸などに移つて行くと、又幾らでも小さく切つて話すことが出來、後世更に興味を個々の言語舉動などに求めるやうになれば、末には現代の一口話の程度にまでも、萎縮することが出來たといふだけである。民譚の分類方法は、人によつて未だ少しも一定してゐないが、右の「話の種」は常に暗々裡に最も大切なる標準になつてゐる。將來の蒐集と比較研究とに於ては、これを拔き出して適當なる名稱を附與することが、何物よりも必要な準備と考へられてゐる。日本では近頃になつて漸くその採集が始まり、地方の昔話や笑話などの、初めて筆錄せられたものが非常に增加して來た

が、以前はただ偶然に稀々なる世間話又は事實談の中に、入り交つて保存せられてゐるだけであつた。「今昔物語」や「宇治拾遺物語」（別項）などは、民譚傳承の様式を踏襲しようとしてゐるに反して、「古事談」「古今著聞集」（別項）の系統に屬する逸話集は、寧ろ民間説話をも世間話化してゐるが、二種を混淆してゐることは双方共に同じである。それ以外に、別に咄の衆の技巧に由つて、古来の話の種に改造に近いほどの變化を加へ、後世の製作説話の先驅をなしたものも多かつた。安樂庵策傳の「醒睡笑」（別項）などは、最も早い採集の一つに算ふべきものだが、やはりその三分の一は實話であり、又他の三分の一は新に作り設けられたものであつた。これに反して「狂言記」（別項）の數百篇を初めとして、近世の文藝作品の中には落想を前代の民間説話から導いて、これを趣向と名づけてゐたものが存外に多かつたやうである。この意味に於ては彼等も亦、落語（別項）と同様に、無意識なる傳承者であつたといふべきである。　（柳田〔國〕）

明朝綴 みんてうとぢ　書誌學【解説】冊子本（別項）の綴ぢ方の一種で、和製本に普通に用ひられるもの。綴ぢ目の方の紙端から一定の距離に數個の孔を穿ち、糸を一つの孔に通して背にまはして再び同じ孔に通し、その後、次の孔に通して、こゝでも、また背にまはして再びその孔に通し、更に次の孔に進んで同様の手續を繰返すもので、本の上下兩端に近い孔では、糸を背へまはすと共に、また上又は下の木口の方へもまはして、本の背の部分を密着して離れぬやうにする。袋綴（別項）の本には、この綴ぢ方を用ひるのが普通である。

（圖書參照）　（橋本）

民約譯解 みんやくやくかい　飜譯書　一冊【譯者】中江兆民【原著】ルソオの「民約論」。【發表】明治十五年三月以降、兆民等が佛學塾から出してゐた雜誌「政理叢談」（月二回）の第二號から掲載し、第十一號を以て原著の第一卷を終り、第二卷は第十二號以下多少斷續して、第四十三號（明治十六年七月）を以て中止した。全部完成されなかつたらしいが、第二卷六章までが發表されてゐる。但し出版されたのは原書の第一卷に當る卷之一のみで、「太陽」臨時增刊號「明治名著集」（明治四十年六月）及び「兆民文集」（同四十二年十月刊）に收められたのも、この卷之一だけである。雜誌に發表の分に比し、多少の修訂が加へられてゐるが、大體に於て大差はない。【解説】文章は凡て漢文で書かれてゐる。譯者の意は原著の本旨を廣く傳へたいと言ふにあつたらしく、巧妙な意譯に一々自家の註解を附してある。これ「譯解」の名のある所以であらう。意譯としては相當の出來で、且つ隨所に附記せる譯者の註解は、彼自身の思想並に當年の政治思想を瞥見する資料としても面白い。「政理叢談」は佛國の政治思想の傳播者として有名であり、又それだけの功績もあるが、就中兆民の「民約譯解」は廣く江湖に傳唱されて多大の影響を與へたと言はれてゐる。思想的に根抵深い影響を與へたかどうかは疑ひあるも、恰も民權自由論の旺盛を極めた時代であるから、強て盛名を傳聞してゐるルソオの代表作だからと云ふので到る處に持て囃されたことは想像に餘りある。永い間ルソオの邦譯と云へば、この「民約譯解」の外にないかに考へられたのも、該書が極めて廣く頒布された一證であらう。

【備考】早い時代の民約論の邦譯としては、明治十年十二月出版の服部德譯「民約論」及び同十六年二月出版の原田潜譯「民約論覆義」で、共に完譯である。大正九年刊行の市村光惠・森口繁治共譯「民約論」は、學術的邦譯として完成したものである。なほ平林初之輔の譯本（岩波文庫所收）もある。　（吉野）

【參考】明治文化全集第七卷（民約譯解解題）

民友社派 みんいうしやは　文學團體【解説】明治二十年二月十五日、德富蘇峰が民友社を創立して、雜誌「國民之友」（別項）を發行するや、忽ち文壇の一勢力となつた。次いで同二十三年二月、國民新聞を創刊するに及び、その勢力は一段の伸張を見るに至つた。當時前後して民友社員となつた文學者には、德富蘆花・矢崎嵯峨の屋・内田魯庵・竹越三叉・山路愛山・塚越停春樓・緒方流水・宮崎湖處子・松原二十三階堂・人見一太郎・國木田獨歩等があつた。獨歩は最も後れて明治二十七年に入社した。以上の諸文士を民友社派と稱した。「國民之友」は「新日本文學之一大現象」を以て標榜し、藻鹽草の一欄を設けて每號、森田思軒・依田學海等當時に重きを為した人々の飜譯・隨筆の類を載せ、更に新年附錄及び夏季附錄には諸名流及び新人の小說・詩歌の類を掲げた。これによつて文壇に名を成した人も少くない。文藝評論は初めは專ら石橋忍月が執筆したが、後には八面樓（宮崎湖處子）と内田不知庵（魯庵）が文學評論の筆をとつた。且つ「十二文豪」（別項）その他史傳・史論の刊行によつて、民友社同人の名は廣く世に知られ、文壇の一勢力となつた。その中心人物は德富蘇峰である。後、小說の上に於て、蘆花・獨歩等が頭角を擡げた頃には、もう民友社派といふ名稱は次第に文壇的に解消していつた。　（高須）

民謠 みんえう　歌謠【解説】本来、民謠は民族の歌謠である。云ふまでもなくその時代時代に於ける民族固有の、而もなほ普遍的な生活感情を表現することに、民謠の眞率性と素朴性とがある。民謠の歌謠と形態とは常に時代に順應し、その實質に於ては古今を通じて一貫した民族の精神を精神としてゐる。日本民謠の淵源は遙かに神代にある。[illegible]に云へば、民謠はその生れるところに、俗謠・三絃樂に伴ふ各種の唄ひもの、或は小唄・琴曲等とはその相を異にしてゐる。極めて純正なる土俗の野調であるからである。この民衆と郷土との聲であつた日本の民謠も、明治維新以來、多くはその地方色と野調とを失つて俗謠化されて行つた。今なほ本來の面目を保つ民謠の正調は、極めて稀れに見る狀態にある（明治以前の民謠に就いては「歌謠」參照）。以下に述べるところは、明治以後に至り、詩人によつて創作され復興されたもので、實は新民謠として在來の民謠とは區別されなければならぬものである。

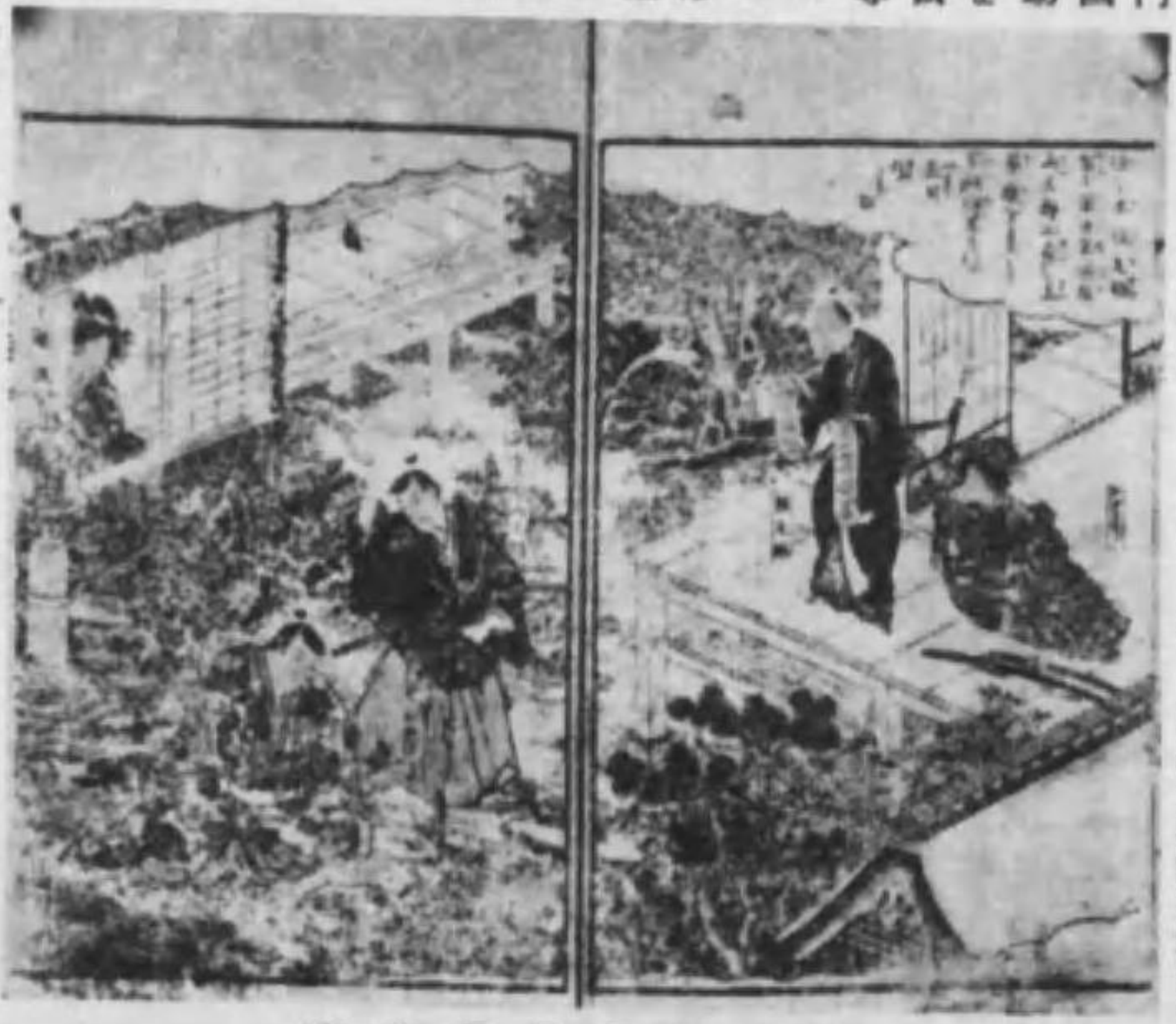
【沿革】（明治期）明治二十四年に中西梅花の「浦のとまや」等が「國民之友」に發表された。新體詩人の民謠風の創作は、これ等が最も早いものであらう。しかし「浦のとまや」は純然たる民謠ではなく、小唄（別項）に近いものであつた。その後も民謠調の詩作は可なり見られたが、眞に民謠と稱すべきものは見られなかつた。その間にあつて、明治の三十年代、文庫派（別項）の全盛期に、夜雨の「お才」が著しく郷土的な民謠調を流露せしめた。これは新民謠發達史の上に極めて注目さるべきものである。その他當時詩作の傍ら、時として民謠の創作に漸次熱意を示して來た人に、高安月郊・平木白星・前田林外・薄田泣菫・岩野泡鳴等があつた。蒐集・研究・評論等も目立つて來た。中にも泣菫の民謠體は特に注意すべきものである。個人の民謠集では、明治三十八年三月に出版された野口雨情の「枯草」を以て嚆矢とするが、彼の民謠は曾にその片鱗を示したにすぎなかつた。北原白秋には、三十七八年の頃、雜誌「文庫」に發表した幾多の詩篇の中に、田園の俳味に傳說・土俗等を交へた、その一派の俚謠を遺つたものがある。それ等の詩には今日に於ける民謠詩人としての芽生はあつても、純然たる民謠とは云へなかつた。その後葛飾の紫煙草舍時代に「秋の鄙唄」などを作つた。それと同時期、或はやゝ遲れて民謠の創作を時に公けにした人々に、雨情の外、木下杢太郎・三木露風・川路柳虹・福田夕咲・平井晩村等があつた。詩人の作に成る新民謠（むしろ新俗謠）の流行を來したのは、大正三年頃に飜譯劇トルストイの「復活」中に松井須磨子によつて歌はれた島村抱月・相馬御風合作の「カチユーシャの唄」に因を發した。次いで、同じ藝術座の「生ける屍」の劇中の唄として大正六年北原白秋の作「さすらひの唄」、その他「カルメン」劇中の、色々の俗謠小唄の類が引續いた。低調ではあつたが、詩人の歌謠が民衆の中に傳播し、流行すること著しかつた爲めに、民謠の擡頭の勃興に關與したと思はれる。尤もこれは或は又禍したかも知れぬ。後に雨情の船頭唄「枯れ薄」が震災前の世を盛んに騒がせたことは周知の事實である。

【大正期】大正に入つて新民謠の氣勢が昂つて來た。一つには七年七月童話童謠雜誌「赤い鳥」（別項）の創刊によつて以來、自覺の上に立つた新童謠の作家の簇出雲の如く、その童謠の普及日に盛んで、新時代の民謠も愈々確實性を帯びて來つつ、蒐集・研究・論議も亦愈々詩壇的となつた。この期には白秋の作が最も多かつた。雨情も民謠童謠に復活した。彼はその郷土茨城の方言を用ひて固有の野調を成した。最近に至り、各郷土地方に創作新民謠大に興り、その歌詞・歌曲を詩人に委囑して、眞によき「彼等の民謠」を得て、土地の發展、民心の高揚を期しつつある。　（内藤）

む

昔話稲妻表紙 むかしがたりいなづまべうし　讀本　五卷六册【作者】山東京傳【畫工】歌川豐國【名稱】角書に（不破伴左衛門　名護屋山三）とあり、略して「稲妻表紙」といふ。元祖團十郎以來の市川家の「不破」の扮裝に據つてゐる。【刊行】文化三年【諸本】有朋堂文庫・京傳傑作集（帝國文庫）・山東京傳集（近代日本文學大系）・讀本集（日本名著全集）所收。【題材】例言に近松門左衛門の「傾城反魂香」（別項）に據つて作るとあるが、寧ろ土佐節の「名古屋山三郎」、竹田小出雲・三好松洛合作の「丹州爺打栗」等の淨瑠璃、「伽羅先代萩」（別項）「伊達競阿國戲場」等の歌舞伎を多く參照し、又享保十五年の八文字屋本「契情阿國歌舞伎」の趣向をも假りて不破伴左衛門・名古屋山三郎のことを芝居仕立に仕組んだものである。

【梗概】大和の國主佐々木貞國の嫡子桂之助は、足利義政に召されて京に出仕したが、近侍の不破伴左衛門等に勸められて白拍子藤波を愛し、遊樂に身を任せてゐた。偶々佐々木家の重寶百蟹の圖を將軍に披露せんと上京した名古屋三郎左衛門の子山三郎は、これを諫めたが聽かれず、後、伴左衛門は藤波に懸想して追放され、山三郎も歸國させられた。そこで忠臣佐々良三八郎は藤波を斬つて立ち退き、又同夜侫臣の一人長谷部雲六は百蟹の圖を盗んで逐電する。翌日伴左衛門の父執權不破道犬は、貞國の使者として來り、桂之助を勘當し、殘餘の侫臣等を追放した。それは強て管領濱名入道に通じて主家を奪はんと企み、かく計つたのであつた。又道犬は貞國の愛妾蜘手の方が、その子花形丸に家督を得させたい野望を抱いてゐるのに乘じてこれと結び、惡修驗者賴豪院の妖術を以て、平群の下館に名古屋父子に護られてゐた桂之助の妻子銀杏の前と月若丸を失はんと計つたが果さず、遂に貞國を僞り兵を以てこれを攻めた。この時三郎左衛門は、山三郎に恨を含む伴左衛門等に暗殺され、山三郎は月若丸を老女に託し、銀杏の前を護つて奮戰したが、遂に奥方を奪はれ、忠僕鹿蔵と共にその弟猿二郎を賴つて河内に逃れた。一方老女も追手の難に遭つたが、月若丸は佐々良三八郎に救はれて丹波に隱れ、三八郎今の六字南無右衛門は藤波の死靈に祟られ、伜粟太郎は盲目、娘楓は蛇にまつはられる身となつた。しかも豫て道犬を滅さんとの志から、密かに彼等の動靜を探つてゐることが知れて討手が差向けられ、南無右衛門は粟太郎の首を斬つて月若と僞り、楓が因果の身を賣つて得た百蟹の圖を携へ、若君を奉じて妻と共に河内に落ち、月若と妻を此處に殘し、桂之助夫妻を尋ねて旅に上つた。一方道犬の手に捕へられた銀杏の前は、岩倉谷に斬られんとしたが、當時金剛山に隱棲してゐた俠客梅津嘉門によつて救はれた。その後桂之助は虛無僧となつて流浪し、近江石山寺の開帳の當日雜踏に遭ふが、辻談義となつてゐた山三郎の僕猿二郎に救はれ、藤



昔話稲妻表紙（挿畫）

波の兄大津の絵師鍋淺又平方に匿まはれた。こゝに図らずも旅に出てゐた南無右衛門も宿り、又平はその妹藤波の仇なるを知るが、彼の誠忠、且つ妻の再生の恩人なるによつて、その笠を剥して恨を晴らし、桂之助に引合せた。なほその時三八郎は長谷部雲六の来るを捉へて自害させ、又見世物となつてこの地に来てゐた娵颯に會し、携へた百蟹の圖の奇特で、親の蛇の呪が解かれ、これによつて又平は畫法の祕義を悟つた。翌日桂之助の一行は河内を指して大津を立つたが、その後桂之助は梅津嘉門の蔵する兵書を得て、管領由利之助勝基に依らんと志し、金剛山の嘉門の許に到つたが、恰も勝基は嘉門を軍師に迎へんとして来り、且つ嘉門は桂之助の縁者とわかつたので、桂之助は此處に保護されてゐた銀杏の前とも會ひ、勝基・嘉門を後楯として大和に歸参することになつた。京にあつて廓藏と共に仇を尋ねてゐた名古屋山三郎は、故あつて春雨に燕の飛びかふ模様を集めた衣裳を着けて五條坂の廓を徘徊し、同じ廓に出沒する村雲に稻妻模様の装束を着けた不破伴左衛門一味を狙ひ、遂に葎女葛城の手引と父の知己梅津嘉門に助けられて仇を討つた。やがて嘉門は勝基の名代として大和の佐々木の館に乗り込み、賴家を證人として蜘手の方・道犬の惡業を發いてこれを誅した。

【構想】御家騒動を中心とし、正邪善惡を廻つて勸懲を寓する作意に、歌舞伎淨瑠璃から取材し、多く歌舞伎の仕組に據つてゐる。筋の複雜を計つて興味を多くしようとしたのである。即ち「傾城反魂香」に據つたといふのは、不破名古屋をお家騒動に繋がうとした爲めであつて、その騒動は「傾城先代萩」とその姉妹關係を有つ「伊達競阿國戲場」に藉りて、細川谷藏・細川の奥右衛門を佐々良三八郎（六字南無右衛門）とし、高尾を藤波とした。なほ「丹州爺打栗」を參照して、栗太郎の月若丸身代りの條を、狂言「女歌舞伎子代始」を小說化した「契情阿國歌舞伎」から、湯淺又平が南無右衛門の笠を剥して妹藤波の恨を晴らす條を潤色し、殊に土佐節の「名古屋山三郎」に據つて卷末の趣向を構へてゐる。かゝる結構の跡は甚しく傳奇的で場面の變化がめまぐるしく、人物が錯綜して事件を作つてゐるやうな感がする。ただ結合補綴したものが融化してゐない。ただ不破名古屋の話よりは、佐々良三八郎の孤忠が主として描かれ、それに興味が繋つてゐる。

【影響】かやうに歌舞伎仕立の本篇は、又歌舞伎に轉用されることが多かつた。文化五年、大阪中の芝居に「けいせい品評」、角座に「けいせい輝草紙」、文政六年、江戸市村座に「浮世柄比翼稻妻」として上演された。しかも京傳の新しい工夫になつた山三の濡燕の衣裳は、後の「鞘當」（別項）に定まつた模様となつた。なほこれにて完結してゐるに拘らず、文化六年、この後編「本朝醉菩提全傳」（別項）が出版された。

【參考】近代小說史（藤岡作太郎）○山東京傳集解說○讀本集解說○京傳傑作集解說　（笹野）

昔語質屋庫（むかしがたりしちやのくら）　讀本　五冊

【作者】曲亭馬琴【畫工】勝川春亭【刊行】文化七年、大阪河内屋太助板。【翻本】曲亭馬琴叢書（野村銀次郎編）・曲亭馬琴集（近代日本文學大系）所收。

【梗概】南都に程遠からぬ六田の郷の質屋好事屋實摑は、一夜庫の中に盛んに語り合ふ者のあるに驚いて覗けば、道具類が假の姿を現はしてゐるのであつた。その座に老翁あり、即ち讀書見臺で頻りに儒道を說き、各人の主張を述べんことを勸めると一人の若者が起つた。古金襴の袋小袖に金覆輪の袴をはき、銅金造り厳めしい赤銅魚子に丸絎の帶を締めて意氣揚々たる有樣は、一見して友切丸と知れたが、彼は曾我五郎に伴はれて工藤祐經を討つた無銘の太刀なりと名乘り、友切丸と誤り稱せらるるに至つた由來を詳細に辯じ、五郎の人と爲り、仇討の顛末、北條氏の陰謀にまで說く。次に大磯の虎が曾我十郎の形見として秘藏した華に幅額の紋の外に衞の縫紋をつけた今樣小袖八丈紬の緒縫が起ち上つて、衞の縫紋は戯作者の想像に成つたことを語り、五郎の衣裳に蝶をつける謂れ、家傳の鎧、澁澤湯のこと、虎御前のこと、曾我兄弟の系圖等を語りつゞけた。次いで轉び出でたのは一個の古太鼓、名乘るを聞けば諸葛孔明の陣太鼓であつて、孔明歿後轉々して諸家の手に渡つたが、杜世忠の船に乘つて日本に渡來したものである。漢の正統論、三國志の批判、更に我が南朝の史論にまで及んだが、その論極めて高きために一座の倦怠を招き、拍子拔けして引下つた。次に現はれたのは俵藤太龍宮入の弓袋、承平の頃秀郷勢田橋上にて大蛇に逢ひ、その懇願により龍宮に到つて大蝦百足を退治した物語を述べ、更に龍宮の有無に就いて古今東西の說を引いて考證したので、皆々感嘆せぬはなかつた。次には石堂丸の脚絆が名指されたが、この脚絆は實は大和の五條の丁稚石之助のもので、讃岐の金毘羅に拔け參りせんとて果さず、高野に詣で歸り來つて主人に叱られ、懲しめのため、脚絆に石堂丸の高野詣と誌されたのが、何時しか本物に誤り傳へられたのであると自白して滿座の笑を買つた。そこへ一遍上人の遺物なる水晶の珠數が進み出て、かの苅萱物語は一遍上人悟道の始末と新親法師の高野詣とを合せて作り出した小說であることを語つた。時に片隅より傲然と立ち出でたのは、平將門の袞龍の裝束である。見臺先生、これに問ふに六項の疑問を以てすれば、裝束一々に返答し、謀叛の始末、貞盛の事蹟等多く「將門記」を引いて說き明かした。次に出たのは眉間尺の髑髏杯と記された唐木の箱である。中から跳り出たのは巴を描いた木彫の杯であつたので、皆々失望すれば杯は眉間尺の不思議なる物語をし、巴の輪と深彫の故にこの忌はしい名をつけられて迷惑すると語つた。見臺先生、徐ろに古書を引き、眉間尺の話の由來を論じて杯を慰めた。そのうしろに橘逸勢の軸があり、軸中の尼は逸勢の一女妙沖で、涕泣して語るには、逸勢の悲運、自らその亡き跡に庵を結んで菩提を弔つた事情、又「文德實錄」を引いて父の罪を雪ぐのであつた。次は仁明帝の頃、帝の戯れに御船氏主に比べられた力士氏長の犢鼻褌が現はれ、世を謝るまゝに何時しか紀名虎のものと誤り稱されて、文德帝の御子惟喬・惟仁兩親王の皇位爭奪の時、角力の勝負に依つてこれを決せんとて、孔雀業平と取組んで敗れ、遂に皇位は惟仁親王に定まつたといふ悲談を生じたのを憂へて、「三代實錄」を引いてその事實の無根なるを指摘した。次には袈裟御前の裲襠が座に出で、母の命を救はんために盛遠に身を任せ、後恥ぢて夫に代つて盛遠の手に殺された袈裟の苦衷を語り、盛遠の後半生を物語ると共に、三人の態度に就いて是非の判斷を下した。最後に現はれ出たのは、蘭奢の香いみじき五衣で、即ち金毛玉面九尾の狐の裘であつた。「下學集」を引いて玉藻前の物語をなし、「保元物語」を引いてその典據を考へ、終りに和漢の書を擧げて九尾の狐の瑞獸なるを證した。折しも遠寺の鐘の聲聞え、早や夜明けも近づいたので、忽ち一同は見えずなつた。

【構想】質屋の庫にある道具類が、一夜各々その身の上を語る體にして、著名なる歷史上の人物を捕へ來り、これに縱横に考證論評を加へたものである。以上十二話の外に、目次には第十三、崇德院天狗の爪取剪。第十四、鎌倉時代の上下。第十五、米糞上人の乞食袋とあるが、この初編五卷のうちにはない。「夢想兵衞胡蝶物語」と同樣、馬琴の側面を現はす彼の讀本中の異色あるものである。即ち論證の明快にして作者の思想精神が十分に窺はれ、しかもその間に趣向の變化が巧妙になされて頗る興味がある。「近世物之本江戸作者部類」に、年々摺出すと、その流行を證してゐる。佳作と言ふべきであらう。

【參考】曲亭馬琴集解說　（笹野）

昔語丹前風呂（むかしがたりたんぜんぶろ）

合卷　六冊合二冊・前後二編【作者】式亭三馬【畫工】歌川國直【名稱】「關東小六、津國勝山」の角書がある。別名を「丹前風呂昔繪容」といふ。

【刊行】文化九年鶴屋板【題材】「奴勝山愛玉丹前」（文化八年刊、山東京山作）。「關東小六」「神靈矢口渡」（別項）等に據る。

【梗概】〔前編〕後鳥羽院の御宇、武藏國の住人豐島左衛門は賴朝公の命により、家寶の陰陽二振の劍のうち陽の劍を舍弟東之助をして三田八幡に奉納させる。その際東之助は戀人勝山のたつての願ひで、家の重寶の印判を入れた袋を見せた處、同じ勝山を贔屓する花原判官の息子司馬太郎は、勝山を欺いてその印を白紙に捺す。奉納の陽の劍を血で穢したので、家老廣岡團右衛門の勸めで刀鍛冶赤坂庄内と稱する者に淸めさせた處、庄内實は蟠龍と呼び、廣岡と一味して刀をすりかへる。蟠龍は秘密を湯島宗才に知られ、それを殺害する。受取役秩父重忠は陽の劍が贋であると知り、もとは東之助が勝山に心を奪はれた爲めであるからとて、百日の期間で詮議させ、一方、東之助の失敗を喜ぶ司馬太郎も不品行のために追放される。重忠の駕籠に鐵砲を擊ち込んだのは蟠龍で、重忠に捕へられた處、伜の幸右衛門が父の首を斬つて立ち去る。蟠龍の懷中から豐島左衛門の家印の捺してある一味連判狀が現はれ、疑ひは豐島家にかゝり、忠臣篠輪津左門は色々と苦心する。左門の父池之進は自害し、陰の劍をも奪はんとする廣岡の心を伜左門に見定めさせる。〔後編〕豐島左衛門は供人を從へて立ち退き、矢口の渡で、船頭幸右衛門に殺害される。東之助の乳母武藏野は勝山を伴つて逃げたが、途中はぐれて左門と共に殿の御跡をたづね、左門は矢口の渡で幸右衛門の手にかゝる。勝山は眞の鍛冶赤坂庄内方に身を寄せ、戸棚の中へかくまはれる。庄内の娘お六の聟にならうとする幸右衛門と竹芝の網藏の二人は互に聟あらそひをする。庄内の實子は幼少の時に湯島宗才に貰はれ、湯島主水と名乘る。東之助は刀の詮議に出で、主水の風呂敷包を拾ひ、自ら主水と僞つて庄内に對面し、陽の劍の僞物を作らせ、一時事を有利に運ばうとする。庄内は東之助を兄として、お六に引合はせた處、既にお六は東之助と契つてゐたので、怒つて幸右衛門に二人を斬らせ、お六は死し、東之助は無事である。網藏實は湯島主水で、且つ庄内の實子である。東之助の詮議する刀の持主も、湯島主水の養父の敵も、幸右衛門であると分る。東之助はこれより關東小六と名乘り、五條坂の揚屋で大友幸右衛門實は入間野大領猛虎を亡す事は續編に述べるとある。

【解說】「奴勝山愛玉丹前」（文化八年刊、山東京山作）から多くヒントを得てゐるが、背景となる土地や活躍する人物の名には、思ひ切つて江戸市内及びその附近を指示若しくは暗示する方法を用ひてゐる。演劇より得た關東小六・勝山・矢口の渡等を加味し、丹前風呂の說明などは、例の細かく仕切つた三馬常套の挿繪の手法で丁寧に行つて居り、今日の雜誌めいた感を持つてゐる。筋は複雜であるが趣向作柄共に平凡で、且つ間に合せであつて言ふに足りない。三馬は本町二丁目に藥店を出して、店の經營に力を注ぎ、この年は創作は本書一部のみで、他はみな前年の創作であると自記してゐる。「其昔繪艶傀儡」（文化八年刊、式亭三馬作）は、法界坊を題材にするとはいへ、手法・挿繪その他に於て本書に類似する點が多い。多忙の三馬は、手近の寄せ集めによつて本書を創作したものである。續編の筋を本書の末尾に記してゐるが作品は未見である。　（小池）

昔話（むかしばなし）

【解說】ハナシといふ日本語の未だ普及しなかつた時代には、昔物語と云つてゐたのが同じものである。西洋には丁度これに該當する學語はないけれど、なほ我々がこの語を棄て得ないのは、一つにはその範圍の明確なためであつて、必ずしも久しく祖先がこれを使用してゐたといふ物なつかしさだけからではない。今日では多くの人が、昔の話だから昔話といふのだと簡單に解するやうになつたが、實は昔の話の全部が昔話ではない。昔話の要件は寧ろその形式にあつた。古くは「伊勢物語」「今昔物語」「宇治拾遺物語」（各別項）を初めとし、降つて江戸初期の「私可多咄」（別項）等に至るまで、文辭の上にもその形はよく遺つてゐる。最初に「昔々」、又は「今は昔」などと言擧げて、必ずしも現世の常識によつて眞僞を判定せんとする勿れの意味を寓したことが、恐らくはこの名稱の基づく所であつたらう。今日の俗言でも地方に由つては單にこれをムカシと云ひ、ムカシ〳〵と呼んでゐる者が多い。乃ち英語の Once upon a time と同樣に、元は昔話に限つて必ず定まつた文句を以て始まることになつてゐたのである。この頃普通のものは「昔々或所に」であるが、江戸でも或る時代には「昔々あつたとさ」と切り、又は今日の出雲地方の如く、「とんと昔」といふこともあつたと見えて、トントンカチカチといふ小兒語も遺つてゐる。仙臺では「さつと昔」、越後の蒲原平原には「有つたてんがのに」、信州松本邊では「昔あつたさうな」、奥州津輕には「昔ア有つたずオん」といふ形が行はれてゐた。話の終末にも亦一定の文句があつた。奥州にはドンドンハライ、コレデドンドハレなどと云ふのもあれば、津輕のやうにトツチパレ、ソゴトツテトツチパレといふ例もある。ハラヒは多分「是でおしまひ」といふこと、即ち何物をも語り殘さずの意であらう。京都などの古風は「それで市が榮えた」といふのであつたが、それが越後に行くと、「エツチがサツカエ」、「ボロントモゲタ」といふ面白い口拍子に變つてゐる土地もあつた。五十嵐力氏の「趣味の傳說」には、國はどこか知らぬが話の終りにドウビンと云ひ、或はそれを長めて「ドウビン三助、三助アうちに火ア附い

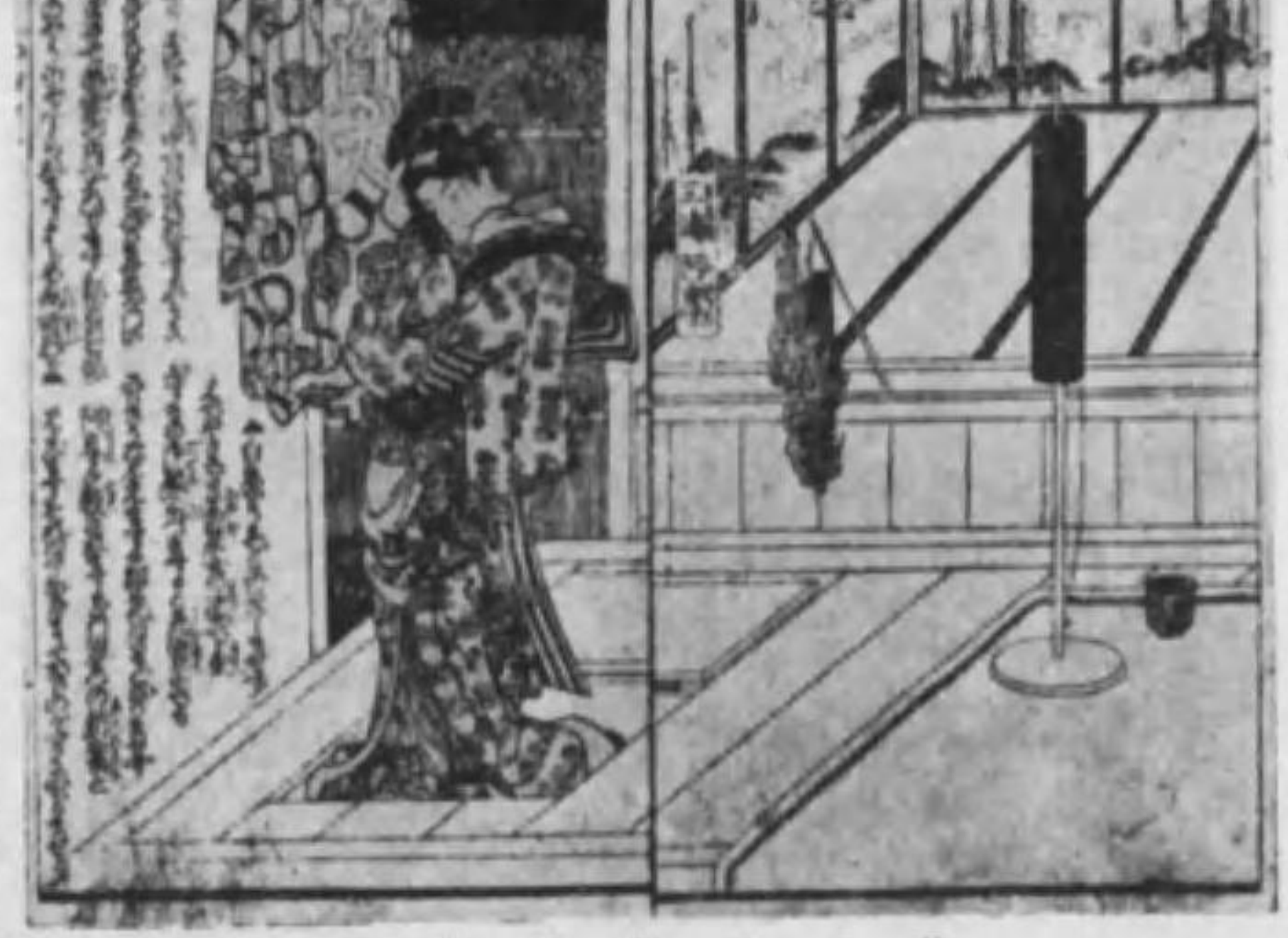
て、「權助ア屁で吹っ消した」と唱へる地方があつたといふ。越中では、「語つても語らいでも候」、これも「今昔物語」などの「語り傳へたると也」から、段々に變化したもので、同じ書物には又銀細工延正といふ者が、花山天皇の御戲れを大聲に唱へて、終りに「此事語り保てやおいし」と云つたとあるから、舊い形とても始終改まつてゐたのである。話の中程にも色々の形式が元はあつたのであらう。西洋でもよく Cric Crac 話などといふが、これは聽手が睡つたかも知れぬと思ふ時に、話者がクリックといふと、聽手がクラックと應じて決して睡らざることを證する音であつて、我々のフンフンもこれに該當する。奧州では今も話手が童話の一の形として、時々「ムカシこ長くて寢目になつたどす」などといふ文句を入れることもあるさうだ。昔話が尋常の會話と類を同じうせぬことは、この特徴が先づこれを示してゐる。併し本來は、それだから信ぜよといふ趣旨に出たのが、後には次第に滑稽を主とするに至つて、却つて眞面目には受取られざらんことを、目的とするやうになつたのは是非もない。前に引例した終りの文句などは、皆多少の顚狂さがある。或は「昔々のその昔」だの、「ずつと昔の大昔」だのと云つて、最初から遊戲に近い興味を催さうとしたのも、單なる話術の變遷ではなくして、同時に内容の徐々の推移をも暗示してゐると言へるであらう。民譚（別項）即ち民間説話といふ語が、昔話と範疇を一にするか否かは問題である。現時の民譚にはわざと昔々の形式を避けんとするものもあることは事實だが、これとても種々なる變化を試みた上で、到達した所の一境地であるから、なほ昔話の種類の一つに算へてもよい。若しそれが許されるならば、昔話は民譚の日本古名であると言ひ得べく、それが許されなくとも、なほ民間説話の主要なる大部分とは言ひ得る。童話を昔話と對立せしめた一類に立てることは、少くともこの意味に於て誤りである。何となれば、童話ほど嚴重に、この昔々の形式を守つてゐるものはないからである。（柳田（國））

昔々歌舞妓物語（むかしむかしかぶきものがたり）

合卷 二編 各編四冊合二冊 【作者】柳亭種彦 【畫工】歌川國丸（初編）・歌川國貞（二編） 【名稱】初編には「夕霧ふぢのうら葉」、二編には「怪談三島阿專」の副外題が見える。【刊行】天保元年（初編）、天保二年（二編）、西村屋刊。【題材】近松作の脚本「夕霧七年忌」や「水木辰之助餞振舞」（別項）等に據る。

【梗概】〔初編〕 夕霧の死後、それに生寫しの島原大阪屋の難波に溺れて勘當された藤屋伊左衞門は、夕霧の七年忌に、二人の間に生れた娘おせきを連れて大阪に來る。おせきは父が島原での借錢を濟ますために、身賣りしたいとて新町へ行く。沙汰無しに大阪へ住み替へた難波津（難波）の不誠實を、伊左衞門は怨み罵るが、それも實は彼の借錢を濟ますためである事がわかる。客と僞つてゐた藤屋の番頭江七は、難波津の心底を見屆け、身請けして目出度く伊左衞門の妻にする。〔二編〕鎌倉扇ヶ谷足立家の當主辰馬は箱根へ湯治に行き、その留守に繼母の承知院が家老の轉物や兵藤等と謀つて實の娘夕月を我が甥の兵藤に添はせ、家督を相續させようとし、却つて夕月にその奸計をあばかれ、夕月は遂に兵藤の手にかゝる。紛失した銅小櫻丸の詮議のために、下人伴作となつて住み込んでゐた夕月の許嫁濵波光右衞門は、兵藤から小櫻丸を取戻す。兵藤・轉物は箱根に來り、辰馬の寵愛する湯女のお專を殺して金を奪ふ。お專の怨念は駿州の兄の許に身を寄せた辰馬を夜毎に苦しめるが、辰馬に殺害の意志がなかつた事が分り、辰馬を兵藤・轉物の隱家に導き、遂に惡人を亡し、お專の幽靈は解脱する。

【解説】「正本製」（別項）に正本の體裁を眞似て、舞臺の道具立や樂屋の内部、役者の様を、さながらに描いて甚だしく當てた種彦は、更にこの趣向を延ばし、當時正本物語・芝居ばなし・三座穴探しなどと名づけて落語家が身振を加へ、道具立鳴物入りで歌舞伎狂言その儘を見るやうに語るのを、そのまゝ合卷の世界に導き入れたのが本作品である。從つてその形態に於ても初編上と言ふべきを、「初日前座」と記し、文章も當時の噺家の「ござります」調を以てし、噺を寫實する態度である。挿繪もこれに伴つて聽衆を前にした高座の様を寫してゐる。而も種彦の甘味は、噺家の似顏をも當然用ひる筈の處にも、俳優の似顏をもつてし、芝居ばなしに捕はれないと共に、芝居好の機微に觸れてゐる。挿繪は普通の合卷とは異り、必ずしも毎丁挿入せず、文字は大きく噺本（別項）めかしてゐる。種彦の好古癖は本書にも現はれ、他作品の如くに近松の狂言を語らせてゐ、その元祿歌舞伎劇への個個の深さを示して居り、時には例の考證的な記事も挿入される。説話の筋は大體に原作に依據するが、初編には淨瑠璃夕霧物の吉田屋の段を取入れ、二編では人名・場所を改め、各編何れも元祿狂言本の晦澁な筋を平明に説き、構想も多少當時の合卷としての常套的の物に改めてゐる。併しながら古風な題材が餘りに露骨に現はれ、挿繪の變化、文章の綾も乏しく、作品全體が淡く、且つさびれてゐ、讀者にさして喜ばれなかつた。最初の計畫では、七日目卽ち七編まで續ける豫定だつたが、僅かに二編で止めてゐる。（小池）



昔々歌舞妓物語

昔々物語（むかしむかしものがたり）

昔話集 寫本一册 【編者】不詳 【解説】「古今くらべ」の肩書があつて、兒童の喜ぶ古い説話、舌切雀、兎大手柄、猿猴の生膽、浦島が子、桃太郎等の事を斷片的に記載し、又えびす、てんぐ、後妻打等の目を擧げ、その後には極めて雜駁なる聞書やうのものを收めた未完成の書で、新見正朝の「昔物語」（一名八十翁昔話）とは全く別の書である。（和田）

昔模様娘評判記（むかしもやうむすめひやうばんき）

合卷 六編 各編六冊合三冊 【作者】山東京山 【畫工】歌川國貞 【名稱】第二・三編には「今昔娘評判記」と記す。【刊行】天保六年より同十三年まで、和泉屋刊。

【梗概】〔初編〕失戀の遺恨で、横島駒藏は星の井家の小姓吉三郎とお七とを謀り、二人が死刑になる所を一乘寺の住職が救ふ。お七は實家の八百屋へ連れ戻され、吉三郎は奥方の命令で紛失の印子の鶴を捜す。偶々貪慾者の釜屋武平の甥直介を殺し、八百屋半兵衞方へ身を隱す。土左衞門傳吉が武平を斬つて駒藏が盜んで預けて置いた鶴を取戻す。惡人共の舊惡が露顯し、吉三郎は歸參してお七を妻とする。〔二編〕月輪家の臣尾花秋之進は、預りの勝間の刀を盜まれ、伜采女は髪結の才三郎と身を窶す。白子屋の娘お駒は父正兵衞の借金のために、腹黒い番頭丈八の肝入で浪人横島非藏を婿に强ひられる。才三郎は刀詮議の爲めお駒と駈落して夫婦になる。盜賊だと知られ行方を晦ましてゐた非藏を才三郎は討ち勝間を取戻して歸參する。〔三編〕今出川の家中、花守かすみは五條坂雁金屋の半太夫に馴染み、駈落の途中、半太夫は流産して死んだが、その魂魄は病死した信濃屋の娘お半に宿つて蘇生させる。「かすみ」は帶屋長右衞門の娘吉やの婿となり、二代目長右衞門となる。伊勢參宮の歸途、お半を助けたのが緣となり、遂に懷妊させ、實家を逐はれてお半と桂川で情死しようとする所に、嘗て繼母を殺した下僕けむ四郎に出會つて、彼を討ち、歸參してお半を迎へる。〔四編〕櫻井家の小姓千鳥之介は、お染からの艷書で山中猿二郎に讒言され、奥方の内意で、獅子王丸の刀を搜すべく野崎村の實家に行く。油屋時二郎方へ奉公してゐる双生兒の弟久松を娘お染が戀する。時二郎は遊女浦里に馴染み、その金策のため久松は無實の罪を受け土藏に入れられる。時二郎は浦里を土藏に隱したところ、猿二郎が藏を破り、浦里と金とを奪ひ去る。久松も遁れ出てお染と情死せんとする所を捕へられる。時二郎の叔父は久松にお染を娶はせ、身請けした浦里を時二郎に與へる。獅子王丸の刀も千鳥之介の手に戻る。〔五編〕下總の與右衞門が鎌で殺した介坊主の怨念で、娘累は醜貌に變り、親子三人巡禮に出る。鎌倉の宿屋で生れた男子を何者かに奪はれたが、それより商賣を始めて富み榮える。松戸竹之進の息彦惣は遊女きぬ川に馴染んで勘當され、累の店の手代となる。彦惣を主の威光で意に從はせた累は、彼がきぬ川のために我が金を消費したのを憤る。きぬ川・彦惣は、心中せんとして竹之進の弟鳥藏（祐全上人）に救はれ、彦惣は鳥藏がさらつた累の實弟、きぬ川は竹之進の實子なる事が分る。累は懺悔して剃髮し、怨念も去り、彦惣きぬ川は夫婦になる。〔六編〕里見家の浪人鯛橋幸介は寶刀雷鳴丸詮議のため、絹糸屋壽助方へ手代奉公をする。この家の娘お菊は幸介を戀して屋敷から暇を取る。番頭蟹八は幸介の持つて出た主用の金を奪はうとして、却つて殺される。心中を決心し、蟹八の刀で幸介がお菊の喉を貫くと、雷鳴が起つたので、調べて見るとそれは尋ぬる寶刀であつた。幸介の兄幸二郎は寶刀を得て歸參し、觀音の身代りで無事でゐたお菊と幸介とは結婚する。

【解説】昔模様と冠らせる題名の如く、お七吉三・お駒才三・お半長右衞門・小金彦惣・お菊幸助等を主人公にし、累與右衞門・お花半七・お初德兵衞・尾上岩藤・お千代半兵衞等、人口に膾炙した人物の名を借り、古い淨瑠璃歌舞伎の綯交ぜや綴込みの部分的趣向の新味を誇るのが作者の意圖であつた。併しその構想手法は各編千篇一律に流れてゐて説話の興味は少い。京山の娘が屋敷奉公をしてゐるのを、本作の娘は殆ど總て屋敷勤めの者で、暇を取つた後、以前同家中にゐたが今は町人になつてゐる美男との關係を描くのに終始してゐる。かゝる女性が當時の讀者の中心であり、京山の理想であつた。固より戀愛には多分の同情を寄せてはゐるが、第三編の帶屋の娘吉やには男女間の關係もなく、冷靜に男を眺め勤めに精出す理智的な屋敷の女を描き、第六編のお菊にその正反對の女の型を描いてゐる。かくの如く多少女性の氣質に留意し、教訓的に述べる所、後の「教草女房氣質」（別項）や「教訓乳母草紙」（自弘化元年初編至嘉永六年十編、山東京山作）等への推移が豫想される。又第五編で累一家の致富の心掛けを描き、第二編に番頭に左右される白子屋の記述などに、「大晦日曙草紙」（別項）などと共通する傾向が窺はれる。京山の描くこれ等の女性は性格的に極めて曖昧で、ただ累に、純情の處女が宿命的な償罪から世の中を白眼視し、物質的な滿足に歪りつつも情慾の一面を制し切れぬ半生が偶然ながらやゝ面白く描かれてゐる。題名の關係で三編迄卷頭に頭取・惡口・贔屓・見功者等を設けて評判記の體裁を移し、七間舍自背及び八文舍似笑の名を署し、自作自評をなして珍奇な趣向の得意さを誇つてゐる。例へば初編に吉三の袖の綻びを縫うてお七が不義の疑ひを受ける所など、その儘第六編にも出してゐる。又本作以前にも試みたことであるが、第三編以後は全篇十數段に分ち、院本風な、若しくは浮世草子風の小題目がつけられてゐる。（小池）

無關心性（むくわんしんせい）

藝術論 〔獨〕Interesselosigkeit 【解説】美的快感は吾々が對象に對して現實的實際的興味を絶つところに成り立つことを指す概念である。カントが實際的快感、或は善から美的快感を區別するために美的快感を「無關心の快感」であるとした後、美の假象性（別項）を重要視する觀念論的美學では一般に重要な概念となつてゐる。近代美學では、寧ろこの概念の重要さは次第に失はれる傾きがある。例へばギュヨーによれば、藝術の目的は社會的感情を生起せしめることにあるとするから、そこに目的的興味の必然的參與を認めねばならない。又創作の意識に於て對象に對する意志的關心の參與、鑑賞意識に於て對象についての知的興味が參與することを說く學者は多い。例へば吾々の文學鑑賞に於て、その内容の「傾向」に關心することは、全く美意識の統一を破壞するものではない。（美的關心の項參照） （村田）

【參考】ギュイヨオ原著 現代美學の諸問題 石上昱介譯

無關心の關心（むくわんしんのくわんしん）

藝術論 〔獨〕Interesse ohne Interesse. 【解説】カント美學に於ける無關心性（別項）の概念を受け

ついで、シラアが註解した用語である。對象に對する吾々の實際的利害得失の觀念を離れた無關心な心構へを持することによつて、よりよく對象に關心して行くところの緊張した態度を美的態度の特徴と考へたのである。（美的態度參照）。〔村田〕

無窮會文庫（むきゆうくわいぶんこ）　文庫【所在】東京市西大久保【沿革】故井上頼圀氏の藏書を收藏したものである。大正十四年井上氏の易簀の後、その藏書約五萬五千冊の散佚を恐れ、平沼騏一郎氏發起となり、これを購入した。【藏書】主として國史・國文に關するものが大部分を占め、漢籍の如きは一小部分にすぎない。〔植松〕

無弦弓（むげんきゆう）　詩集【著者】河井酔茗【刊行】明治三十四年一月、內外出版協會【解說】處女詩集である。その扉に、「吾一張の弦無き弓、放たぬ征矢にも響きなからんや」と述懷してゐる。「希臘半島」の七七調一篇の外はすべて七五調で、中に最後の一句を七七調で止めた長歌體のものを交へてゐる。反歌の如く一首或は數首の短歌を掲ゑたり、またはこれを埋草にしたりしてゐる。詩三十三篇、小曲十五篇、他に十數首の短歌を收む。すべて抒情詩の域を出づるものではないが、溫藉にして平明といふ語は、本書の作風を最もよく表はしてゐる〔北原〕

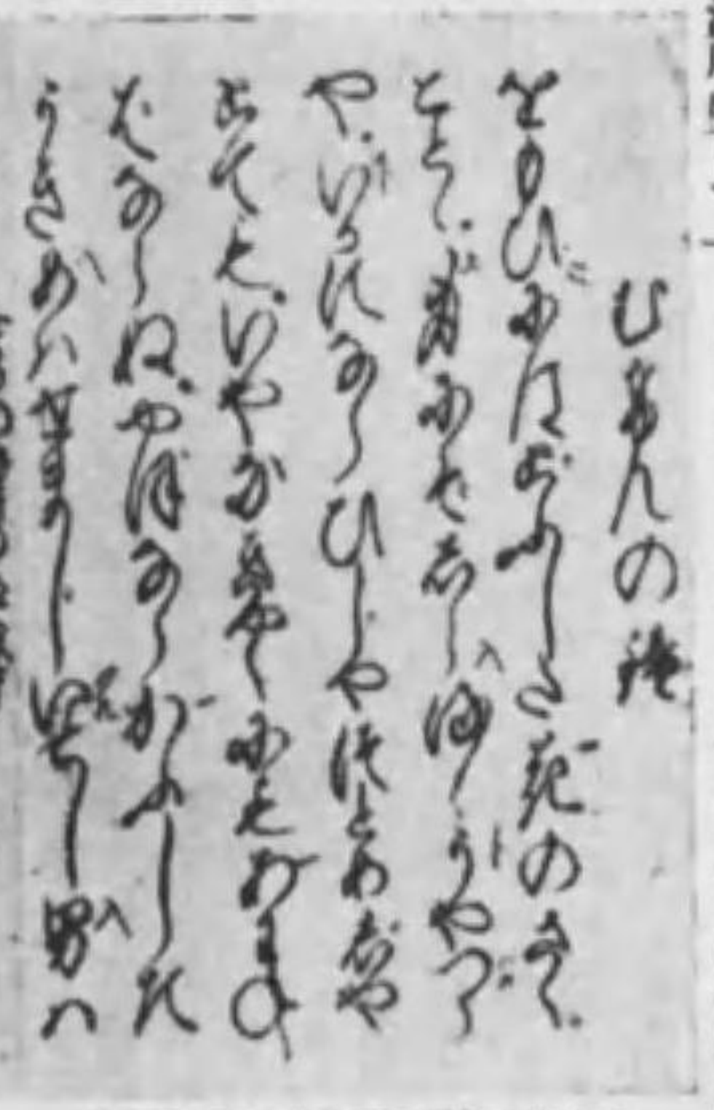
夢現境（むげんきやう）　小說【作者】矢崎嵯峨の屋【發表】明治二十四年一月、「國民之友」。【刊行】國民小說に收めて刊行。【梗概】明治二十三年晩冬或る日の深夜、詩人孤影が上野公園の觀音堂で寒月を仰いで感慨に耽り、人生を悲觀してゐるところへ、一人の美女が現はれて彼を慰める。それは蘇奕娘だつた。姫は孤影を雲に乘せて廣寒殿へ導いた。彼は王侯のやうに好遇されて歡を盡したが、或る夜、姫は觀月に案內すると云ひ、深更共に補陀落山へ行き、月界の大王に拜謁した。その際、人界の樣子を問はれて種々物語り、大王の感賞を得たが、當座の興にもと、彼は弓矢を用ひて、空を渡る雁を射落したところ、見る〳〵雁は一丈餘の大きさとなり、彼の罪を罵ると、彼は千丈の谷へ顚落し、身を打碎かれんばかりだつた。もう月宮もない、姫もゐない。怒濤の響のみ聞えると思ふ刹那、夢は覺めた。彼は叫んだ「自分を救ふものは神より外にない」と。

【批評】作者は、抒情詩を散文の形で書いたと言つてゐるだけに、小說としては大分異色あるもの。純情はあるが纖弱で柔靱性のない技巧では、こんな題材はこなし切れない。それに寓意も奇警とは言はれない。〔高須〕

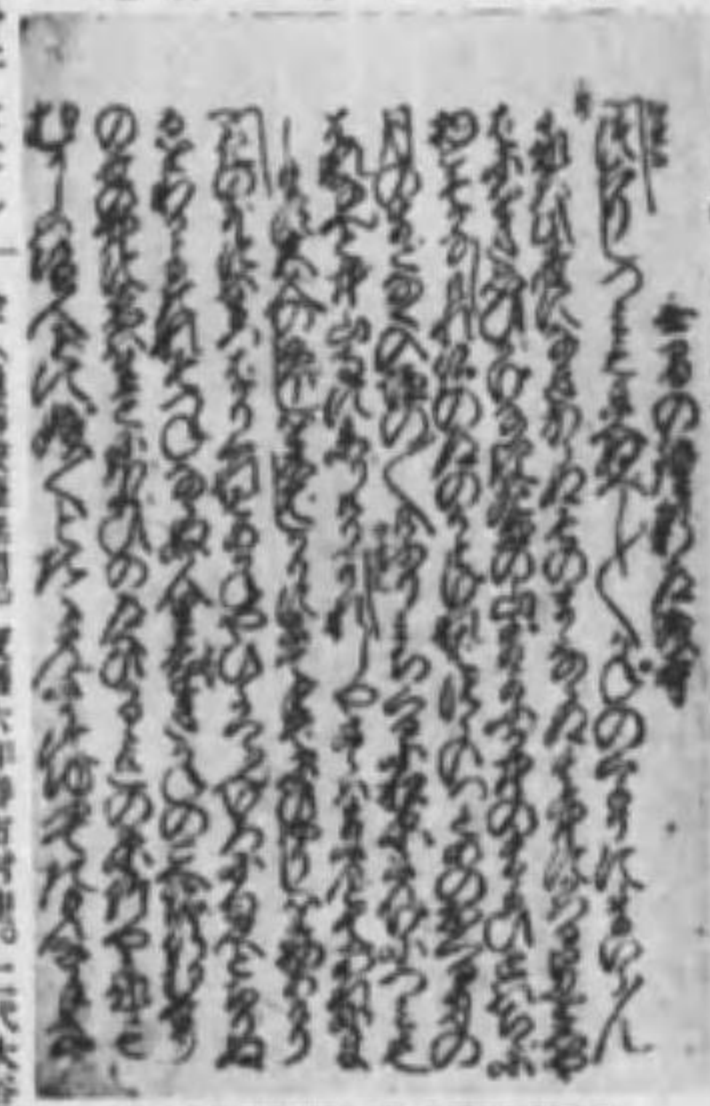
夢幻能（むげんのう）　「謠曲」を見よ。

無間の鐘（むけんのかね）　「ひらがな盛衰記」を見よ。

無間鐘（むけんのかね）　所作事【通稱】無間【題材】遠江國小夜郡西山村にある無間山觀音寺（現允明山）の釣鐘を撞けば、來世は必ず無間地獄に墮ちるといふが、この世では福德を得て富貴の身となるといふ所謂小夜の中山の無間の鐘の傳說を所作化したもの。【沿革】これを歌舞伎に脚色した始めは、元祿二年大阪荒木與次兵衞座の「傾城小夜の中山」で、名女方谷島主水が傾城裏葉の役で無間鐘の所作事を演じて好評を得、次は同十四年京都早雲座で、鐘だけを芳澤あやめが撞き、所作は水木辰之助が演じたのが著名である。その後種々他の俳優によつても行はれ、操淨瑠璃でも享保八年七月豐竹座に、紀海音作の「傾城無間鐘」（別項）が上場せられた。併し後世の「無間鐘」の基準をなした手水鉢を撞く型は、初代瀨川菊之丞に創まる。卽ち享保十三年春京都萬太夫座の「けいせい淺間嶽」で、六右衞門娘おすまを後に傾城金山といふ役で手水鉢を鐘になぞらへて、手拭掛で打つたのが初めである。これを更に翌同十六年春江戶に下つて中村座で演じた。「傾城無間鐘」（稀出）が大喝采を博して、菊之丞の名を不朽ならしめると共に無間物の代表曲ともなつた。さうしてその仕種は、その後操淨瑠璃の「ひらがな盛衰記」（別項）第四段目に取入れられて益々名高くなり、「梅が枝の手水鉢云々」とまでうたはれるに至つたのである。この菊之丞の無間鐘が非常な大當りを取つたので家藝となつたが、その後明和へかけて流行し、瀨川菊次郎・中村富十郎・中村粂太郎・嵐雛助・二代吾妻藤藏等の女方は勿論、市川海老藏・澤村長十郎（初代訥子）・藤川平九郎・大谷龍左衞門・中村助五郎等の立役もそのやつしを盛んに演じたので幾多の種類が生じた。內容は眼前の難儀を助けたさに無間地獄に墮ちると知りながら、急場の幸福を願つて鐘をつくといふのが骨子をなしてゐる。急を救はれる者は戀人であつたり、夫・親・主人など樣々である。曲節は長唄のメリヤスものが大半であるが豐後節でも演じられた。併し後世には專ら「ひらがな盛衰記」に據る無間鐘が行はれるやうになり、長唄の、殊に菊之丞の無間鐘は漸次顧られなくなつた。



（けいせい無間の鐘（めりやす正本））



（無間鐘新道成寺（長唄正本））

【主要種目】〔長唄〕傾城無間鐘（稀出）○無間の鐘石の帶（通稱帶無間。元文四年春河原崎座。坂東豐三郎所演）○思の緋櫻（通稱新無間。寬保二年春市村座。初代瀨川菊之丞所演）○鯉無間（寬延二年春中村座。市川海老藏所演）○無間の鐘（梅ヶ枝の無間。「盛衰記」に據つたもので、下卷は義太夫節。寶曆三年六月市村座。中村粂太郎所演）○花換忠義金（通稱鼓螢無間。寶曆六年春市村座。二代大谷廣次所演）○無間鐘（通稱三千兩の無間。寶曆九年正月市村座。市村龜藏所演）○あけぼの櫻（通稱男無間。寶曆十一年春森田座。中村助五郎所演）○むかし草（明和元年五月市村座。二代瀨川菊之丞所演）○萩の風（明和六年七月中村座。四代市川團十郎所演）等。〔常磐津〕忠臣無間鐘（長唄との掛合。寶曆

十三年九月市村座。五代市村羽左衞門所演）○正銘無間鐘（明和四年九月中村座。三代芳澤崎之助所演）○[illegible]操無間の鐘優（安政元年三月市村座。二代中村富十郎所演）等。〔富士松〕無間鐘思曉（延享三年春中村座。初代瀨川菊之丞所演）。

【傾城無間鐘】〔通稱〕無間〔別名題〕廓花鶯城鐘〔初演〕享保十六年三月江戶中村座「傾情福引名護屋」第二番目〔曲節〕長唄〔作詞〕杵屋太十郎、但し一說に七代杵屋喜三郎ともいふ。〔琴三絃〕杵屋文次郎〔唄〕坂田兵四郎〔傳來〕曲のみ傳存、但し故老の間に僅に命脈を保つてゐる。〔內容〕傾城葛城（初代瀨川菊之丞）が可愛い夫（名古屋山三）が金に詰まつた難儀を救はんため、手水鉢を鐘になぞらへて杓で打てば、一心通じて小判が降る。葛城は夢ではないかと狂喜して、袖を引きちぎつて金を包む。（初日に舞臺で金を包む物を忘れた爲めに早速に衣裳の袖を引切つて包んだその思入れと仕打とが喝采を得たので、これが型になつたのだといふ）。〔備考〕本曲に連關して、第三番目に「無間鐘新道成寺」（一名中山道成寺とも、傾城道成寺ともいふ）を同じく長唄で演じた（道成寺參照）。また本曲以後菊之丞が演じた別曲に、前出の「無間鐘思曉」と「思の緋櫻」（新無間）とがある。なほ本曲は江戶長唄メリヤス物の嚆矢とされてゐて有名である。

【參考】劇代集（二代瀨田治助）○役者全書（歌舞伎叢書、金港堂）○歌舞伎年代記○近世邦樂年表○無間鐘考說（鳥木松藏）（近世演劇考說）○無間鐘の沿革と年表（秋葉芳美）（しがらみ三ノ七）○日本歌謠集成卷九○歌舞伎圖說〔秋葉〕

向岡閑話（むかうがをかかんわ）　隨筆　三卷【著者】大田覃【成立】著者が文化五年春、公命を以て武藏國玉川堤防工事巡見の時、川畔の向が岡の邊に旅寓中、土人金澤氏その他から聞いた事や親しく見た物につき、又餘暇に讀んだ古書等からの感想を敍述したもので、自序の終りに「文化五年戊辰季冬小書、南畝大田覃、題二于多摩郡之是政驛一、時歲六十」とある。【諸本】新百家說林（蜀山人全集）・日本隨筆大成卷七所收。【解說】玉川沿岸の地誌の如きものともいふべく、附近一帶の名勝・社寺・舊家・古蹟等が漏れなく記されてゐる。上卷に、向岡以下四十五則、中卷に梟谷瓦礫集抄以下十九則、下卷に延喜式神名帳抄以下四十九則を收めてある。文化六年眞彥の跋、同年印南野樵の跋がある。眞彥の跋によると、著者のこの時の出張は前後百六日間で、この間に綴つた書は「調布日記」附錄共三冊、「玉川餘波」一冊、「家傳」一冊、「玉川砂利」一冊と、この「向岡閑話」三冊、外に拔圖・緣起・拓本等を輯めて「玉川披砂」と題したもの若干冊がある。〔和田〕

無言抄（むごんせう）　連歌書　三卷三冊【著者】木食興山上人應其【成立】天正八年【刊行】慶長八年。自跋及び奧書によれば、天正七年起稿、翌年脫稿し、紹巴の披閱を請ひ、函底に藏して置いたのを再び手を加へ、數次紹巴の校閱を經、慶長二年に開版を企て、同八年刻成つたもので、二品空性法親王の奧書によると、外題は勅賜に係るものである。【解說】連歌の式目書で、式目濫觴より始め、伊呂波詞、四季詞、非季詞、神祇、釋敎、述懷、哀傷、山類、水邊、體用之物、可隔三句物、可隔五句物、可隔七句物、一面可嫌物、輪廻、嫌詞、可思惟事、發句切字の事、句數之事、本歌取樣之事、執筆の事、一度法度の事、會席作法の事、和漢篇に至る二十五項を舉げて說いてある。慶長二年の自跋、同三年紹巴の跋、同年の空性親王の奧書、同四年の紹巴の奧書、同八年の應其の奧書がある。本書中の伊呂波詞の如きは、一千四百二十五字の去嫌、一座百韻何句物などの差別、及びその所屬を註し、殆ど一切の詞花言葉を網羅した連歌大字典の如くであり、四季の景物を註した季詞及びこれに紛れ易い非季詞も、三百八十餘に上つてゐる。これ等の記載を通じて、應安の「連歌新式」（別項）以來の制規が多少變更されて來つてゐる跡を見る事が出來る。卽ち本書は校閱者紹巴の說に據ることの多いものである事が推せられる。貞德が「御傘」（別項）に、屢々本書の說を引いて異議を述べてゐるが、併し本書に負ふ所も少くないので、談林派から却つて非難されてゐる。

【著者小傳】應其は、木食上人として知られる人で、初名日齋、字は順良、楚仙と號した。初め近江の佐々木氏及び高取の越智氏に仕へてゐたが、天正元年高野山に入つて僧となり、採藥汲水の功を積むこと多年、寺社の修造を勸進すること八十一回、豐公の信賴を受けて大佛建立の事を監し、興山寺を創建した。連歌は紹巴に就いて學び、紹巴の批點を加へた百韻も遺つてゐる。慶長十三年歿す。享年七十二。〔福井〕

武藏野（むさしの）　小說【作者】山田美妙【發表】明治二十年十一月、讀賣新聞附錄【刊行】同二十一年八月刊、短篇集「夏木立」（別項）に收錄。明治大正文學全集所收。

【梗概】武藏野の秋の暮れ方を、新田方の與黨たる老若二人の武士（秩父民部とその婿世良田三郎）が、大將義興の鎌倉入りに合しようと野道を急いでゐる。それと探り知つた敵は二人を迎へ擊ち、義興が矢口で殺されたことを喚き立て、驚く二人を討ち取る。秩父の家では、七日經つても二人の消息が少しもないのみかいろ〳〵不吉な風說が聞えるので、母と娘とが心配してゐる。娘の忍藻は多少武藝の嗜みがあつたので、一夜密かに武裝して夫の後を追ふ。夜明けて母が下人等と大騷ぎをしてゐる最中、民部の知人大內平太が訪れて義興の橫死と二人の討死を語り、併せて驚くべき報知、野獸に喰はれた女武者の死骸のことを語る。そこへ村人が忍藻が熊に喰はれたことを知らせて來る。

【批評】美妙の出世作で、當時の讀書界を文字通りに驚倒させたもの。これといふ山のない淡々とした時代物語だが、その自然さ素直さが却つて好い印象を與へる。全篇感情と空想との所產で、ロマンチックな幾分夢幻的な美しさをもつ、歷史小說といふより寧ろ散文詩に近いものである。出る人物も夢幻的に見える。やゝ現實的な輪廓のあるのは忍藻だけであらう。だが當時の讀書界を第一に魅了したものは新しい言文一致と「おぢやる」詞とを綯ひまぜたその文章の新味であつた。造句や措辭のマンネリズムから來る嫌味はあつても、全體に淸新な美しさが溢れた作で、今日讀んでもなほ佳作と感じられる。當時忍月は「展卷の傑作、其價値を言ひ現はすに苦む」とまで激賞し、不知庵も亦「非常に驚嘆した」と言つてゐるし、嵯峨の屋は「武藏野を見て心の底から動かされ、二葉亭と二人で、かうしてはゐられぬと語合つた」と言つてゐる。【影響】歷史小說に主情的詩美を盛つた點で、特に矢崎嵯峨の屋に著しい影響を與へた。又古俗語復活の點も文壇的に相

當大きな影響を與へてゐる。（藤田（徳））

武藏野 むさしの　詩的散文【作者】國木田獨歩【發表・刊行】最初明治三十一年一月「國民之友」へ「今の武藏野」として載せたものを、同三十四年三月「武藏野」と改め單行本として刊行したのである。その時には「武藏野」以外に「置土產」「源をぢ」「たき火」「詩想」「忘れえぬ人々」「鹿狩」など、獨歩初期の諸篇を併せて出版した。【解說】「武藏野」は日記を交へ、感想をこめ、主として武藏野の秋の美を情感に徹して描き出してゐる。獨歩のこの「武藏野」と德富蘆花の「自然と人生」とは、細やかなる情感にうつたふる自然を清新に描き出したる點で、明治文壇の双璧であるが、獨歩のこの作には神經が一層細やかに動き、物の響きに一層聽き入り、林間の空地に坐して四顧し、默想し、遠望するロマンチックな詩人の姿がなつかしきまでに感ぜられる。ワァヅワァスとツルゲーネフとが身近かに呼吸する如く、更に都會人に始めて武藏野の美を知らしめたる點に於て、不朽の記念品と言ひ得る。（吉江）

武藏曲 むさしぶり　俳諧集　一册【撰者】大原千春【名義】集中に「山はえむ富士、水は玉川の風流を汲んで」の前書のある千春の「流石におかし櫛折下女の武藏ぶり」の句から出てゐる語で、現時の武藏の俳風の義である。【刊行】天和二年【諸本】俳諧七部餘稿・蕉門俳諧前集（俳書大系）に所收。【內容】卷頭に季吟の序があり、春夏秋冬の發句五十九句と藤匂子・千春・其角の三吟歌仙一卷、麋塒・千春・卜尺・曉雲・其角・芭蕉・素堂・似春・巾雲・言水の十吟百韻一卷、千春の獨吟歌仙一卷とから成り、三卷の連句の發句はいづれも春季で、千春の獨吟は上野寬永寺の花見をしてのものである。發句の多の部には其角の「棒うた」が入つてゐる。千春は京都の貞門俳人で、談林化した人であるが、當時江戶に來つて諸家と風交し、その軌範を撰集したので、作者は芭蕉の周圍の人が主になつてゐる。【史的地位】發句では其角七句、千春自身と芭蕉とが六句で、これ等が句數の最も多い方であるが、芭蕉の六句の中二句には桃青とし、四句には芭蕉とあり、且つ卷頭句が「梅柳さぞ若衆哉女かな」の句で、これには（芭蕉翁桃青）の如く記してあつて、芭蕉を尊崇した樣子と芭蕉が桃青號から芭蕉號に移つて行く樣子が窺はれる。風調は談林調を脫しない前時代の風を踏襲したもので、純化されない字餘り句、佶屈晦澁な漢語調、故事の奇拔な翻案、神仙妖怪の趣味、物附のふざけた洒落等が目につき、正風にはなほ距離のある過渡期のものたることを思はせるのであるが、併しその中にも一脈の閑寂味がないではなく、特に芭蕉の句にそれが感ぜられるので、この點に正風の進みを暗示するものがあると云へる。なほ本集に於て問題になつてゐるもので、季吟の序中に「逍遙遊のおきな」といふのは芭蕉を指したので、季吟さへも芭蕉を翁と呼んだといふ說があつたのであるが、これは誤解で、特にこの說の根據となつてゐる「逍遙遊」といふ文は支考の作であり、季吟は逍遙軒と號した貞德を指したものであることは、その次に「細河のながれ」（細川貞德師事）と云つてゐる事からも明かなのである。（志田）

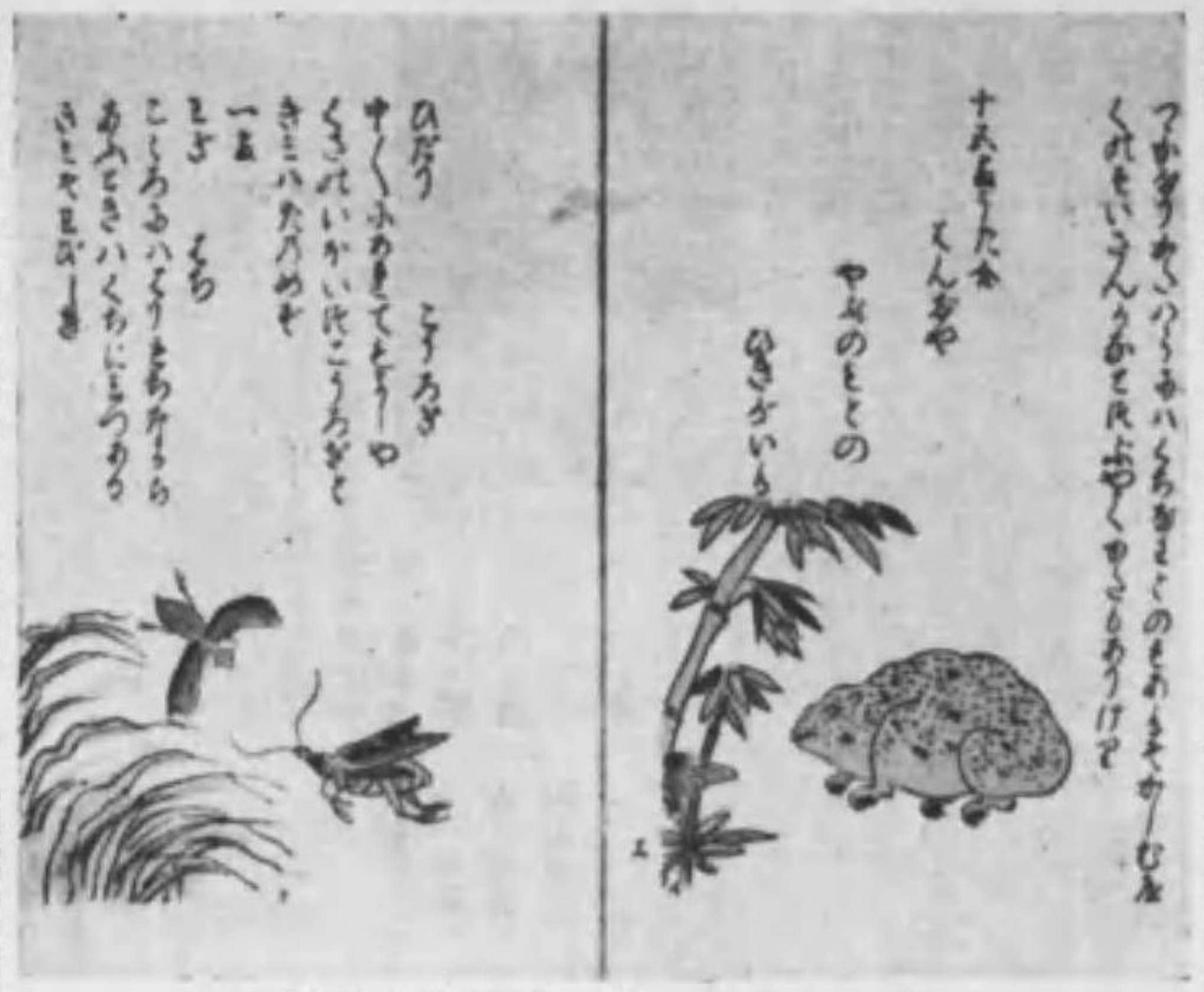
無產詩派 むさんしは　詩派【名稱】無產詩派と稱してもそれは概括的な稱呼で、かゝる命名の詩派が存するのではない。【解說】文壇のプロレタリア文藝運動の勃起と共に、それが詩壇の中にも一つのプロレタリア詩人なるものを生んだ。即ちプロレタリア文藝といふ無產者の文藝上の解放運動、プロレタリアの生活を基調とし、そのイデオロギーを詩を以て表白する詩派がそれである。但し文壇のプロレタリア文學者はその運動を殆どコンミニズム、ボルセキズムの間にのみ旗幟を鮮明ならしめてゐるが、詩壇のプロレタリア派の中には多分に無政府主義者を含んでゐる。即ち共產主義的、無政府主義的及びその一部には、藝術形式上の左翼派がその思想の上に左傾思想を示してゐるものをも包含することが出來る。が、プロレタリア詩派は、文壇のプロレタリア派が「戰旗」「文藝戰線」等に分れてその鮮かな活動を示してゐる如く、一つの團體としての鮮かな表出を示してゐない。ただ「戰旗」「文藝戰線」等の文藝雜誌の中に共產主義の詩人が主として據つてゐること、それ以外には固定した機關をもたず、時々片々たる同人雜誌その他によつて詩作を發表してゐる青年詩人の中にアナルキストの詩人があるに過ぎない。以上の傾向は大正十一二年以後に起つた新しき運動で、また一つの詩派として確乎たる地步を示さず、個人的にも代表的なる詩人を出してゐない。强ひて名を擧ぐるとその共產主義系のものに中野重治・三好十郎、無政府主義系のものに萩原恭次郎・岡本潤等がある。この外松本淳三・新島榮治・壺井繁治等もプロレタリア詩人の名稱をうけてゐる。中で萩原恭次郎の詩は、形式上に於て最も左翼的で、ダ、主義的・未來主義的・構成主義的要素を多分に含んでゐる。（川路）

無產派文學 むさんはぶんがく　「プロレタリア文學」を見よ。

蟲十五番歌合 むしのじふごばんうたあはせ　「蟲歌合」を見よ。

蟲歌合 むしのうたあはせ　御伽草子　一卷【名稱】「蟲十五番歌合」とも云ふ。【成立】室町末或は德川初世か。「近古小說解題」には、「新增書籍目錄」（卷中）に「蟲歌合集寫四分」とあるから木下長嘯子（勝俊）の作かと言つてある。「こほろぎ草子」及び「玉蟲の草紙」（各別項）より後の作たる事は明かである。【諸本】古板本は寬永頃の丹綠本古活字本。續群書類從卷九八四にも收め、近時珍書複製會（第四期）からもこの丹綠本を複製して出してゐる。輪池叢書第三十七册にも收めてあるが、これは玉蟲に失戀したことを詠歌の動機とせず、又終りの蛇を怖れて判者のひきがへるが逃げ入る事を缺いた異本である。【題材】異類歌合物即ち擬人の蟲歌合で、「鳥歌合」「魚歌合」（各別項）「獸歌合」と併せて「四生の歌合」（四生は四姓に通はせ、鳥・蟲・獸・魚を各源・平・藤・橘四氏に配したことが、蟲歌合に見える）中、最も早き作「十二類歌合」（別項）、即ち「十二類繪詞」（別項）の上卷、「調度歌合」（別項）などもこれと同系のもの。「こほろぎ草子」を本とし、「玉蟲の草紙」をも合はせ、更に歌合式（特に十五番歌合の形式）に作つたもので、この點では、「十番の物爭」「四十二の物爭」（各別項）などと同種で、異類物なる點は「魚鳥平家」「鴉鷺合戰物語」（各別項）の類とも共通してゐる。【梗概】神無月の初め寒月の夜、叢に集つた蟲共の中からこほろぎが進み出て、漸〻衰へて來た身の頼りなさを歎き、今宵の月に互の心の底を語り明かし、昔玉蟲の君に戀歌を贈つて受け納れられなかつた恨めしさを歌に詠まうと提言し、皆々贊同して蜂・げぢ〳〵・蟻・はたおり・蓑蟲・かまきり・足まとひ・芋蟲・蜂等

落葉の上に陣を占めて各々歌を詠み、三十首に及んだ時、藪の下蔭の主張で俱に歌合をし、蟇が判者に推されたが、第十五番に蛇と番へられたのを怖れて、判をせずに席を捨てて竹林の落葉の下に逃げ込んだ。【影響】「鳥歌合」以下、異類歌合物の一系統を生ぜしめた。「十二類繪詞」は、先後は措くも、形態上では、それと異類合戰物との結合である。上田秋成の「花蟲合」（秋成遺文）なども、この系統を繼ぐものと云つてもよいであらう。（島津）



蟲　歌　合　（丹綠本古活字本）

蟲麻呂 むしまろ　歌人【氏姓】氏は高橋、名は蟲麻呂、姓は連。【生歿】未詳【閲歷】「萬葉集」卷六天平四年の部の最初に、藤原宇合が西海道の節度使となつて下る時、蟲麻呂の贈つた長歌と反歌とがある。これが彼の作の明記された唯一の例で、彼の生存年時を知る唯一の資料である。天平四年は聖武帝の御代奈良の朝が、初期から中期へ移らんとする頃であつて、この頃彼が奈良の宮廷に仕へ、その壯年時をおくりつつあつた事が分る。また彼の著「高橋連蟲麻呂之歌集」（別項）によつて、彼が東國に居住した事が察せられる。多分官吏となつて赴任してゐたのであらう。その國は常陸であつたらしく筑波山に關する歌が多い。即ち、卷八夏雜歌部中の「惜不登筑波山歌一首」、卷九雜歌部の「登筑波山歌一首井短歌」。殊に、卷九雜歌部の「檢稅使大伴卿登筑波山時歌一首井短歌」（これは、大伴卿の筑波登山の時同行して作つた長歌・反歌の意である）、卷九雜歌部の「登筑波嶺爲嬥歌會日作歌一首井短歌」（これは、筑波山の土俗を歌つた長歌・反歌）の如きは、筑波を偶々過つた旅人の如きには作れない。恐らくそこに定住してゐる人の作である。なほ筑波の歌以外にも、卷九雜歌部の「那賀郡曝井歌一首」とある那賀郡の曝井は常陸國、卷九相聞部の「鹿島郡苅野橋別大伴卿歌一首井短歌」は勿論常陸國で、大伴卿の出發をおくつて自分は殘る意味の歌であるから、彼が常陸に在住してゐた何よりの證歌である。勿論常陸以外の東國地方の歌もあるが、これはその土地々々に旅をしてその折作つたと解し得る作のみである。故に彼の一生中の幾年かは、朝夕筑波を仰ぎつつ常陸の官吏としておくつたと信ぜられる。【作品】すべて「萬葉集」に出づ。彼の名を明記してゐるのは、上記の卷六雜歌部の作のみである。この外に「高橋連蟲麻呂之歌集中出」と記してある作品は、彼の作品と認められる（高橋連蟲麻呂歌集參照）。【作風】彼の作風の何よりの特色は、その歌の材料の珍らしい點に在る。珍らしいとは、彼が傳說を材料とした歌（殊に長歌）を、多數作つて萬葉作家中唯一の傳說歌人たる點にある。美女が傳說の中心になることは屢々ある。これを材料とした作品も集中に數々見える。しかし蟲麻呂の如く一人にして幾人もの美女傳說を歌つてゐる作家は皆無である。上總の末の珠名娘子を詠める長歌・反歌（卷九雜歌部）、勝鹿の眞間處女を詠める長歌・反歌（卷九挽歌部）、菟原處女を詠める長歌・反歌（卷九挽歌部）、就中最後の菟原處女を爭ふ血沼壯士と菟原壯士との狂熱の姿は、力を極めて描寫されてゐて「萬葉」中に類のない珍らしい作品である。浦島の傳說は美女傳說以外では、浦島子を詠める長歌・反歌（卷九雜歌部）が甚だ著名である。浦島の傳說は「日本書紀」雄略天皇の條にも「丹後風土記」にも出てゐて、當時有名な話であつたらしいそれを、歌材として詩の世界に生かしたのは彼一人にすぎない。また上記の筑波山の嬥歌會の歌も傳說的土俗的な匂ひの豐かな作であるが、この點で更に注意すべきは、「詠霍公鳥一首井短歌」（卷九雜歌部）で、霍公鳥が鶯の巢の內に卵を生んで鶯に育てさせると云ふ土俗傳說を詩化したもので、鳥の世界の傳說を材としてゐる。彼には、「千萬の軍勢なりとも言擧せずとりて來ぬべき男とぞ思ふ」（卷六雜歌）と云ふ雄渾豪宕の點で、集中の代表作を以て許されてゐる歌がある。この作を觀ると、若し彼にして傳說歌に力を傾注しなかつたならば、雄渾な作風の點に於て他に優れた多數の作品を殘しはしなかつたかと思はれる。なほ長歌・短歌の外に旋頭歌を作つてゐること（卷九雜歌部）も、彼の歌才の多方面だつたことを想はせるし、作品中長歌が甚だ多くて短歌と匹敵する數を有する事も、他の萬葉作家に見られぬ特色である。（森本）

【參考】和歌史の研究 佐佐木信綱○上代國文學の研究 武田祐吉

武者小路實篤 むしやのこうぢさねあつ　小說家・劇作家【號】無車【閲歷】明治十八年五月十二日東京市麴町區元園町に生れた。父は子爵武者小路實世、母は秋子、兄に公共がゐる。有名な歌人實篤（別項）は彼の祖父である。明治二十四年學習院初等科に入學。十六歲頃初戀に破れてから文學に志した。その頃から母方の伯父勘解由小路資承の影響などによつて禪學や王陽明學に親しみ、聖書やトルストイの作品等を讀んだ。後年の思想の基礎はこの頃に築かれたものである。殊にトルストイには深く傾倒し、十九歲の頃にはそのために當時の學習院長乃木希典を怒らせたといふ。明治三十九年學習院高等科を卒業、東京帝國大學社會學科に入學したが、翌年退學。その年正親

武者小路實篤近影

町公和・志賀直哉・木下利玄等と同人雜誌の發刊を企てたが成功しなかつた。翌四十一年に志賀・木下等と回覽雜誌「望野」を發行、處女作「芳子」は同誌によつて發表された。この頃から漸次トルストイズムから解放されて獨自の個性主義に轉換して行つた。明治四十三年四月には、前記の人々及び有島兄弟等と共に「白樺」（別項）を創刊した。所謂白樺派（別項）がこゝに結成され、爾來その中心となつて盛んに活躍し、「白樺」廢刊號に至る迄、殆ど每號執筆を缺かさなかつた。その出發當初には一般からかなり露骨な侮蔑を向けられてゐたが、大正三・四・五年頃「その妹」（別項）「彼が三十の時」「ある青年の夢」等の作品を發表した頃には、漸く押しも押されもしない、獨自な存在として注目されるやうになり、それから漸次圓熟期に入つて、新現實主義時代には、文壇一方の重鎭として重んぜられるに至つた。また大正七年には、新しき村の事業を志して同志と共に日向に移り住み、七月には志賀直哉等と共に、雜誌「新しき村」を發行した。「白樺」は大正十二年に廢刊されたが、その後、新現實主義が行き詰つて文藝界に指導理論がなくなつた時、また白樺派の再組織が企てられ、大正十三年四月、長與善郎が雜誌「不二」を發刊した時には、率先してこれを助け、更に昭和二年三月には、自ら主宰して雜誌「大調和」を刊行、又個人雜誌「獨立人」などを出して、その主張の實現に努めたが、餘り反響を喚ぶことが出來なかつた。一方、彼の理想實現の具體的事業である「新しき村」は多少づつ發展して、その出版部より雜誌「新しき村」の外に、「新しき村叢書」「人類の本」などを刊行した。大正十年の創立三周年には、全國に二十六の支部をも有するに至り、翌十一年には村電化の新設備の費にあてるため、文壇關係者より「現代三十三人集」の印税を贈られ、更に昭和四年秋には、十周年記念出版「十年」（改造社版）を贈られるなど、相當に同情を集めたが、昭和期に入つてからは、村の若い人々の心持は、村創立當初のそれとは大分かけ隔つて漸く時代の傾向に鬪ひつつある。彼は明治四十五年竹尾房子と結婚したが、大正十一年飯河安子との戀愛事件が起つて房子夫人と別居した。又彼は夙くから演劇・美術の興隆に志して泰西美術の紹介に努め、展覽會を開き、或は演劇社を創立したりした。

【著作】〔全集・選集〕武者小路實篤全集十册（藝術社版）○武者小路實篤集（新潮社版。現代小說全集第十五卷）○同上（改造社版。現代日本文學全集第二十六卷）○明治大正文學全集第三十四卷（長與善郎集と合册）○日本戲曲全集第四十五卷（正宗白鳥集と合册）○新選武者小路實篤集（改造社版）○武者小路實篤選集（藝術社版）○武者小路小說集（曠野社・新しき村出版部版）。その他、多くの小說集・戲曲集・感想集等がある。〔代表作〕芳子○お目出度き人（別項）○世間知らず○彼が三十の時○耶蘇○第三の隱者の運命○幸福者○或る男○彼等と彼女達（以上小說）○その妹（別項）○わしも知らない○二十八歲の耶蘇○罪なき罪○二つの心○母親の心配○ある青年の夢○野島先生の夢○楠正成○日蓮○運命と碁をする男○愛慾（別項）○或寢室の午後○桃源にて○人間萬歲○神と男と女（以上戲曲）。

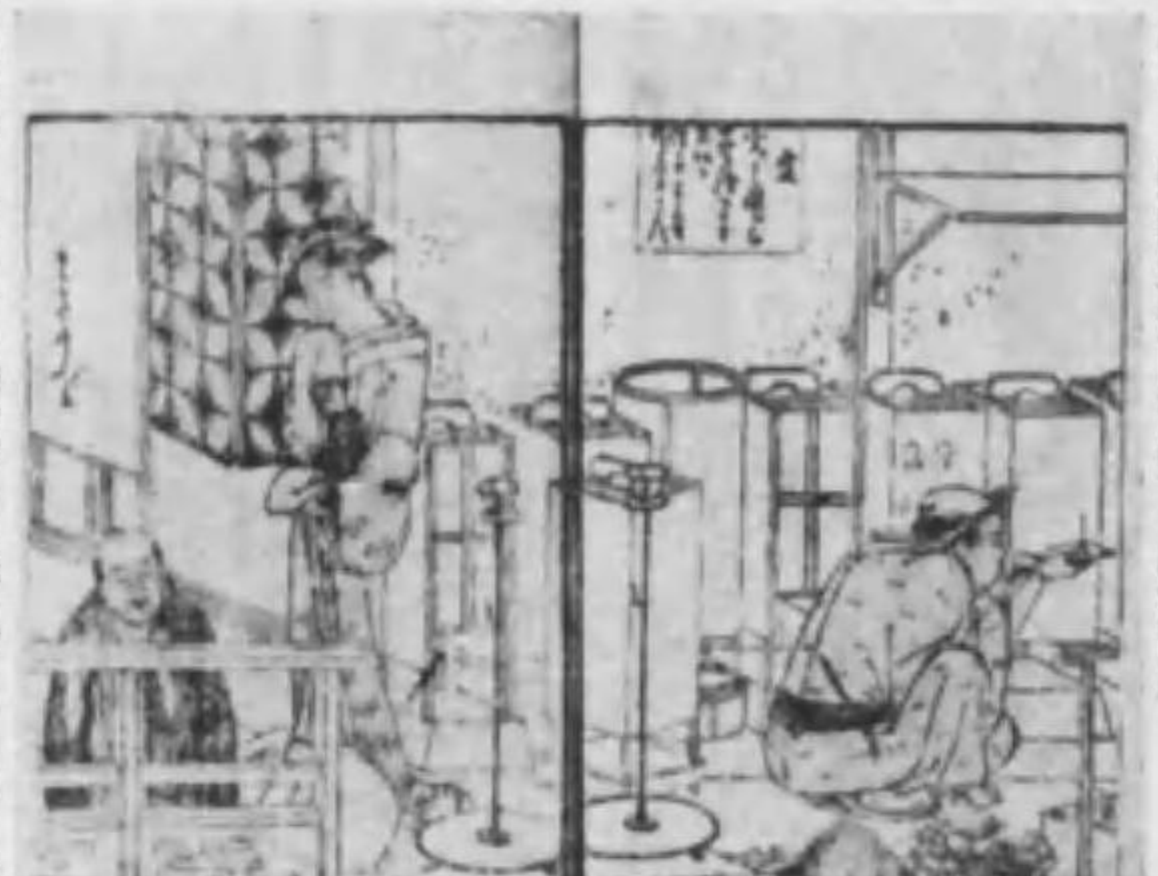
【作風】その作品には、その何れの傾向のものをも通じて、極端な自由さと率直さと素朴さとが溢れてゐる。表現の形式や文章も自由で素朴なる筋の運びや、場面の設け方も放肆な程に奔放を極めてゐる。又小說だか戲曲だか判然しないやうな形式のものを平氣で書いてゐる。戲曲など長い長い會話や獨白などをも平氣で取り入れる。小說でも一作中に同じやうなことを幾度繰り返しても一向頓着しない。のみならず、作中に出て來る人物や事件も特殊な階級とか國籍とか場所とかの匂ひや色彩をもつてゐない場合が多い。つまり國境を超越した一種の世界人が書かれてゐる場合が多い。史上の知名な人物などの場合でも、彼等が正しい史的背景の前に點出されるといふやうなことは決してない。楠正成や北畠親房がお互に正成さん親房さんと呼び合つたりする。從つて其處に描かれた事件は多く作爲的であり、人物は多く傀儡的だと云へる。而もその作品の中では、寫實的なもののよりも、矢張り主觀的・空想的なものの方にいゝものが多い。しかし、それはこの作者が人間的眞實を知らないと云ふことではない。人間心理の暗側面などをも隨分深く味讀してゐたことは、戲曲「二つの心」「愛慾」などがよく證明してゐる。たださうしたものをでも即實的寫實的に取扱つた場合よりも、空想的な自由な表現形式に從つた場合の方が、そつがなく書き上つてゐることが多い。而してこの作者の場合、空想的といふのは、情緒的とか氣分的とかいふのとは大分異つて、飽くまでも思想的であり、理想的であり、更に夢想的であるといふことを意味する。彼によれば人類はその個性を十分に伸ばすことによつて、二三千年の後には理想的に明るく朗かな世界に到達することが出來るといふのである。併しこの考へ方を一口に規定すれば、それは確かにブルジョアリベラリズムを母胎とする徹底個性尊重主義であつた。さうしてその自由主義的個性尊重主義が人類の明るい未來に必至的な繫りを有つと考へてゐたところに、この作者の人間と人生とに對する明るい信頼と肯定とがあつた。彼はさうした主張の最も根本的なものを「人類愛」といふ言葉で規定してゐたが、この餘りにも明るくノンキな空想主義者であつたことは、この作者が、時代の空氣に生きながら、矢張り時代の實質に生きない華族階級人であつたことを示してゐる。表現形式の極端な自由さや文章の素朴さなどにも、當然一種の不鍛錬さや出鱈目さが感じられながら、而も一面生れたばかりのものの有つ清新さと端的さと美しさを有つてゐる。歐文脈的句法の勝つた文章の言ひ廻しは、特に著しい特色の一つだつた。

【史的地位】自然主義が一時荒蕪に導いた精神界に、自然主義の蹂躪した精神の力をもう一度取り上げて、新しい理想主義に炬火を點じた人として、その明治大正文學史上に於ける位置は、特に重視されなければならないものになつてゐる。併しその徹底自由主義的個性尊重主義はブルジョアリベラリズムの最も必至的な組織化であつたに拘はらず、思想的乃至觀念的にはさまで十分理解されたとは思はれず、却つてこの作者によつては、二義以下の主張に過ぎなかつた人道愛の思想のみが、この作者の全部であるやうに誤解され、且つさうした方向への影響のみが特に顯著に現はれ出して、所謂人道主義末流者流の輩出といふやうな現象などが結果した。故にブルジョアリベラリズムを基調とする主張としては、最も深いところまで行つてゐたかと思はれるこの作者の主張は、直接にはさう大きな影響を後人に及ぼさなかつた。その代りに自然主義が貴き美意識と作品技巧とを打ち碎いたあとに、何等の傳統的教養にも縛られず、非常識で、無頓着で、從つて無遠慮で、徹底的に自由人であり得たこの作者が、全然新しく打ち樹てた有産者文學獨特の表現技巧と文章とに至つては、實に大きな影響を後人に及ぼしたものと云ふことが出來る。殊にその文章、所謂言文一致の表現は、この作者によつて始めて確立されたといつてもいゝ。それと同時に彼が主として導いた新理想主義が、自然主義以來既にその方向への傾きを示してゐた有產者文學唯心化への傾向に、特に強い拍車をかけた。〔片岡〕

無住 むぢゆう　禪僧【俗姓】梶原氏【諱】道曉【字】無住、一に一圓。【勅諡】大圓國師【生歿】嘉祿二年十二月二十八日生れ、正和元年（一九七二）十月十日伊勢桑名蓮華寺に寂す。享年八十七【學統】初め十九歲で出家して常陸國笠間郡に「倶舍頌疏」を學んだ。次いで法身大德に就いて「法華玄義」を聽き、更に長樂寺朗譽に師事し、その間に「圓覺經」等を學び、二年程で園城寺實道法師に就いて「摩訶止觀」を學び、奈良に遊んで戒律を傳へ、菩提山に留まつて眞言を究めた。この頃、無住は病に冒されたが、求道の心止み難く、三十五歲で壽福寺に入つて叢林の作法を行じ、傍ら聖一國師の會下に禪門の語錄等を學び、遂に正宗相續の印記を受けた。無住は禪僧でありながら一宗一派に偏せず、佛教の教理を大衆的に說き一般民衆を敎化した。又「沙石集」「雜談集」の著者として高名である。【閱歷】「雜談集」に、「先祖は、鎌倉の右大將家に召仕へて寵臣たりと雖も運盡きて失亡し了んぬ」とあるが、武家に生れながら十九歲の頃に常陸の山寺に出家したのである。北條氏全盛時代の鎌倉時代に梶原家の生活は安穩なものではなかつたのであらう。無住は十三歲で鎌倉の僧房に住せしめられ、更に十五歲の時下野の伯母の許に養はれ、一年も經ざるに常陸の知人を頼らなければならなかつた。無住の幼年時代は早くから流轉の生活をさせられてゐたのである。無住の講學は、この流轉時代を終へて山寺に籠つた頃から始められ、而も出家早々は勉學する機會が與へられなかつた。即ち出家後間もなく、師匠から片山の院主を讓られて、先づ世事を學ばなければならなかつた。この間に律を學び、止觀を學んだのである。中年の頃から病のために幾たびか頓挫したが、病身のまゝ遂に八十七歲の高齡まで勉學を續けた。【著作】沙石集十卷○雜談集五卷（各別項）○聖財集二卷○妻鏡一卷○金剛經要集一卷。【人物】無住は磊落で、小節に拘泥しない人であつた。洗ふやうな赤貧を少しも苦とせず、「へつらひて富める人よりへつらはでまづしき身こそ心やすけれ」「世にあるは思へば人の從者かな上に使はれ下につかはる」など詠じて、むしろその清貧を樂しんでゐた。殊に大刹に住むことを好まず、弟子や眷族の多いことは自分の行の妨げになるとて、閑寂な生活の内に專ら勉學にいそしんでゐた。併しよく世俗のことにも通じて、大衆的な敎化をした高僧であつた。〔鷲尾〕

無心連歌 むしんれんが　「有心無心連歌」を見よ。

令子部屋 むすこべや　洒落本　一册【作者】山東京傳【畫工】北尾政演（自畫）【名稱】好町序には「令子洞房」とあり、自序中には「無鉢語臍夜」と當ててある。二十四歲の部屋住であつた作者が、「息子隔室の無多口に女郎の魂膽をはなす」ものである意。【刊行】天明五年【諸本】改題本「廓中奇言根古粹曬起」二册がある。洒落本集（日本名著全集）所收。



令子部屋（挿畫）

【梗概】なじみの歸、後朝の客五ツの見やう、女郎五ツの見やう、初會にもてたる樣子、床と座敷との事、わる遊びの事、思ひ切の事、女郎虛實を知事、つとめの事、いろの事、客女郎愼用心すべき事、女郎身のうへの事の十二條に分つて、遊里に於ける客の心得と併せて遊女の心得、戀の諸分、戀愛合戰の虛實等が緖細に說いてある。先づ「なじみの歸」では問答體にして、座敷は遊びの花、床は遊びの實、その實をとれば花も自ら得られる所以を說いてある。「後朝の客五ツの見やう」では、朝歸る客の態度で、昨夜の樣子がわかると說明し、これをもてた客、ふられた客、あやなされた客、口舌した客、一通にされた客と五種に分類し、五種各樣の態度を述べてある。「女郎五ツの見やう」では、遊女の見世にをる態度を五種に分類し、色客有女郎、地色ある女郎、たわいもなきむだ女郎、うわき女郎、手のある女郎を描いてある。「初會にもてたる樣子」は、初會に於ける遊女の微細な心遣ひに依つて、客の心持を看取する注意が述べてある。「床と座敷の事」では、座敷と床に於ける遊女の態度に、いろ〳〵の變化があることを述べてある。「惡遊の事」は、金のない客の淺ましさを風刺してある。「思ひ切の事」では、問答體で遊女に實があるか、ないものかを論じてある。「女郎の虛實を知る事」は、遊女の自分に對する態度で、その心を鑑定する方法が說いてある。「つとめの事」は、遊女の客に盡す勸め振りを說明してある。「色の事」は、遊女の眞實の戀を描いてゐる。「愼の事」は、客と遊女の愼しむべき條々をあげてある。「女郎身のうへの事」は、遊女の哀れな境遇に就いての作者の同情である。

【構想】洒落本の一方面なる遊女買ひの秘傳、遊女との戀の魂膽を描いたもので、京傳の戀愛觀、遊蕩觀を見るに最も適切な書である。「女郎の虛實にかまはず、我ひとりのあそびに新造をいくらもあげ、藝者をよび、牽頭持をつれ、どつとさはいでずつと歸る、是樂みの花